



吉備群書集成

第六輯

吉備温故秘録

貞上巻

凡例

一、干城の底本は、最初東京帝國大學史料編纂所本を採擇し、筆寫せる原稿を岡山縣立圖書館寫本及び池田家文庫の原本と校合して、編纂所本の闕漏を補つたものである。卽ち干城一より干城五（自卷之七十二 至卷之七十六）迄の五卷は、舘本及び池田家本を底本とし、干城六より干城十五（自卷之七十七 至卷之八十六）迄の十卷は、編纂所本を底本としたのである。

一、干城は五十音の次序によつて編纂されてゐるが、必ず記錄せられねばならぬと想察されるものが漏れてゐる。例へばオ・ヲに屬するものが遺脫されてある類である。これは著者が後から挿入遺補する考であつたらうと思はれるのは、岡山縣立圖書館本及び池田文庫の木畑本も、干城二より起り、干城三・四・五を闕ぎ、干城六・七……と序を追つてゐるのに稽へても、著者の意途が推想出來ると思ふ。從つて藩臣の身分・閱歷を記述してゐる干城は、原本そのものが完成されたものでないと思はれる。

一、干城は、總て卷數がないのであるが、本書は、輯纂の便宜上、第九輯收錄の吉備温故秘錄卷之七十一（習學 武技）の卷數を追ひ、同秘錄卷之七十二より始めることゝし、干城二を干城一とし順序を追ふて、卷之八十六・干城十五を以て終ることゝした。

但し、本書は各卷數の下、弧線の內に原本數を明示したから、干城一・三・四・五の闕げてゐる事も、自ら判然する事と思ふ。

一、第九輯の本文中、宍粟又は宍粟とあるのは、總て宍粟であるから、凡例に借りて正誤する。

昭和六年十一月三日

森田敬太郎識

吉備群書集成第六輯目次

吉備温故秘錄 自卷之七十二 至卷之八十六 貞之卷

原本卷數

吉備群書集成第六輯（吉備温故秘録 貞之卷）目次終

吉備温故秘録

（干城）

吉備温故秘錄卷之七十二（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城一（原本干城二）目錄

六九、湯淺吉左衛門。
七〇、湯淺角右衛門。
七一、秋田五左衛門。
七二、子 源之介。
七三、廣瀨清右衛門。
七四、廣瀨清兵衛。
七五、淺野長兵衛。
七六、子 定之助。
七七、青山彥九郎。
七八、青山善左衛門。
七九、子 源十郎。
八〇、相原市兵衛。
八一、相原市郎右衛門。
八二、雨宮源右衛門。
八三、荒木助大夫。
八四、荒木四郎大夫。
八五、荒木茂右衛門。
八六、荒木庄左衛門。
八七、荒木清大夫。
八八、荒木清大夫。
八九、稻葉。
九〇、疋田與次郎。
九一、河野賴母。
九二、稻葉刑部。
九三、稻葉四郎右衛門。
九四、子 助五郎。
九五、泉 八右衛門。
九六、岩田十大夫。
九七、伊庭彥左衛門。
九八、伊庭和泉。
九九、伊庭半藏。
一〇〇、伊庭與一右衛門。
一〇一、子 吉之助。
一〇二、伊庭闘左衛門。
一〇三、伊庭平馬。
一〇四、伊庭源八郎。
一〇五、岩根傳五郎。
一〇六、岩根源左衛門。
一〇七、岩根周右衛門。
一〇八、子 平九郎。
一〇九、稻川主馬。
一一〇、稻川十郎右衛門。
一一一、稻川久右衛門。
一一二、稻川久之丞。
一一三、稻川藤八郎。
一一四、市川多兵衛。
一一五、田川勘太郎。
一一六、市川流清。
一一七、市川清兵衛。
一一八、石田伊豫。
一一九、石田鶴右衛門。
一二〇、石田鶴右衛門。
一二一、石田鶴右衛門。
一二二、石田安右衛門。
一二三、石田孫六。
一二四、石田與左衛門。
一二五、石田彌次右衛門。
一二六、子 孫助。
一二七、石尾善左衛門。
一二八、石尾善兵衛。
一二九、石尾喜六。
一三〇、井上藤助。
一三一、父 井上滕介。
一三二、子 源介。
一三三、茨木藤右衛門。
一三四、茨木彌一右衛門。
一三五、茨木安大夫。
一三六、子 淸吉。
一三七、今西助左衛門。
一三八、今西利兵衛。
一三九、今西半之丞。
一四〇、今西半内。
一四一、子 辰右衛門。
一四二、石川久左衛門。
一四三、石川八兵衛。
一四四、石川善右衛門。
一四五、石川又五郎。
一四五、今田三右衛門。
一四七、今田儀左衛門。
一四八、子 今田茂大夫。
一四九、生駒喜介。
一五〇、生駒長右衛門。
一五一、生駒市兵衛。
一五二、生駒市兵衛。

吉備溫故秘錄卷之七十二（干城二）目錄終

吉備溫故秘錄　卷之七十二（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城一（原本干城二）

一、安藤淡路。

伊勢國何の内と申所、代々領知居城。數度信長公被攻候。瀧川左近と淡路は從弟にて御座候に付、左近より是非城相渡候へと內證候へ共、同心不仕、終に落城切腹仕候由。其刻、飛八郎殿と申方、內儀は信長公御一家にて、當城內被居候を出し可申と左近へ申遣候。飛八郎殿內儀出し申時、次手に物種に子共落し候へと、左近より內證有之に付、祖父安藤多左衛門、此節九歲。姉と兩人落候て、同國いかい山城と申者の方へ參居申由。

二、安藤多左衛門。若名、平大夫。

淺井彌兵衛と申仁、多左衛門姉をもらはれ參候節、多左衛門も一所に參候。十四歲迄彌兵衛方に居申候處喧嘩仕、相手打果立退、林與五郎殿へ罷出候て、一兩年罷在、又立退申。多左衛門從弟安藤小左衛門と申者、羽柴小一郎殿に罷有、勝州（マヽ）高野郡に居申候を頼參、羽柴越前守樣へ奉公望み居申處、津田隼人と小左衛門知音故、筑前樣へ隼人肝煎出し可申候間、多左衛門を隼人方へ越付候へと申に付、小左衛門より多左門を遣候へば、子同前に念比に仕候故、一日〳〵と隼人方に罷有候由。多左衛門備中すくも山城攻の時（若名、平大夫と申候）。十九歲にて津田隼人供仕參候て、城乘の時、諸手一番と存、から堀を越、塀に附乘入可申の處、矢股にあたり堀底迄落申候へ共、其矢を拔、又懸上り候處、木村常陸內白木と申者、塀らに着罷在候が、津田隼人衆にて候や申合候半（まヽ）と申、則二人共に塀らに居申候處、狹間より鐵砲を出候間、筒先を引被申候へば、はざまより鑓にてさぐり申候故、鐵砲は取得不申、城中より石をなげ出し、頭打破られ、又堀底へ落申候を、安藤小左衛門見付、引上げ小屋へ遣し候由、其儀は覺不申由。

柴田合戰の時、志津が嶽にて矢島甚內と申者と申合、先手へ拔懸に參候へば、藤堂和泉守殿人數と、拜鄉五左衛門手に鐵砲打合候處、甚內鐵砲に當り候を、肩にかけ引のけ候內に七本鑓合候を見、無念に存かけ付、敵拜鄉五左衛門者と名乘、鑓突懸候

を多左衛門鑓付候へば、鑓おれ申候故、組合谷底へ二人ともにころび落、則敵をおさへ候處に武者三人參り、首奪候半と仕候を木村常陸者にて候、指物見知候間、男させ申間敷と言葉かけ候へば、そのまゝのき申候、首を取、津田隼人内安藤平大夫と申者にて候と羽柴小一郎殿御目にかけ候へば、跡へ筑前守樣御越候間、小一郎内と名乘、御目に懸候へと御申候故、筑前守樣へ御目にかけ候へば、組打に仕候を、上の山より御覽被成候。首にて持れまじく、鼻を缺持參候へ、明日首着到に御付させ可被成と被仰候。其節先手の樣子藤堂和泉守殿御覽被成候。鑓合高名仕候儀は、大場土佐能見申候。土佐物語を、荒木儀大夫なども具に承候由、多左衛門先手へ拔がけ仕候段、御法度背候との時、隼人申上候は、私者にては無之候。其悴次郎右衛門に附置申候故、小一郎殿手にて候と申出、其通に成申候由。關ケ原陣の時、津田次郎右衛門供仕參候處、次郎右衛門と申候は、治部少方より妻子人質に取候半間、其方類候人質に取候はゞ、妻子差殺し家に火をかけくれ候へと再三被申に付、罷歸候へば、東圓と申次郎右衛門留守居の者、妻子を召つれ大阪へ參候處、參合妻子を隱し、女房に内の者の子を抱かせ、次郎右衛門妻子と名付罷有候處に、權現樣御勝に成候故、別儀無御座候。多左衛門儀、右、次郎右衛門方にて知行千石餘、山城國三牧と申處にてくれ置申候由。

慶長十一年、津田長門(次郎右衛門事。御改易にて、士共浪人仕候節、多左衛門事は内縁候間、播州へ參可然と長門指圖に候へ共、弟多左衛門を明石に遣し、多左衛門は大阪に居申候。千石角右衛門と申者、伊達陸奥殿へ、多左衛門事、御物語仕候へば内々御存候間、二千石に鐵砲三十挺御預可被召抱旨、(マヽ)刻角左衛門申越に付、其段津田監物へ談合候處、其折節池田出羽・監物へ參被居、唯今の浪人はいか樣の者と被尋候て、先陸奥守殿へ不參候樣に仕候て、輝政樣へ可申上由にて、出羽大阪より被歸早速申上られ候へば、陸奥守殿約束の通にて可被召抱御意にて、明石迄參候へば、若原右京を賴父に仕、御禮申上候得ば被仰出、則右京取次を以、於姫路御禮申上候。御知行御藏米にて可被下候へ共、所主付無之候へば、不自由仕物に候間、扶持にと被仰、所付七百石被下、御約束の通は、左近に知行遣候時可被下候間、夫まで堪忍仕候へと被仰付。右の外に冬・春二度宛、百俵・二百俵宛、無御究、每年被下候由。輝政樣御卒去の後、武藏守樣・左近殿を攝津に被成、御知行一萬石被遣候。少の内にて御座候へ共、攝津殿を難見捨、其儘罷有候由、大阪兩度の御陣攝津殿手にて相勤候由。寬永十六年、七十五歳於備前病死仕候。

三、安藤本。

於因州十二歳の時元和七年十一月被召出、寛永四年江戸御供、同暮四十俵四人扶持被下。同九年暮に御加増六十俵。同十一年暮に御切米の外、五十俵を被下。同十二年御切米の外百俵被下。同十三年暮御切米の外、百俵被下。同十四年閏三月五日、新知三百石被下。同十九年七月晦日、御横目被仰付、御徒御預け被成、九箇年勤。慶安三年閏十月十四日、御加増二百石被下、足輕二十人御預け、裏判役被仰付、八箇年勤。明暦三年正月二十七日、御小生頭被仰付。寛文十二年八月、侍從様・杢を江戸へ被爲召。九月十五日、信濃守様の御家老に被仰付、御加増三百石被下、世悴は御側に可被召遣候由被仰付。延寶三年病氣に罷成、御断申上候處。同四年五月十六日、御奉公御免被成、願の通に知行差上、世悴に懸り居申様にと被仰付。天和三年七月朔日、二十人扶持被下。貞享二年二月、七十六歳病死。

四、安藤淸九郎。　前は彌平と申候。貞享二年、大横目、三十一歳。

寛文九年、御雇にて被召仕。同年四月、江戸御參府御供に罷越候。此節御雇料銀子二貫目被下候。翌年五月、御歸國後御免。寛文十二年九月、杢を信濃守様へ被爲附候節、曹源公の御側に可被召仕旨、於江戸杢に被仰渡、八十俵五人扶持被下。翌年六月、御歸國已後、右の御禮申上、御城に相詰候。其節迄彌平と申候處、淸九郎に成候へと被仰付父杢儀病氣に付、御奉公御捨免、御知行指上候。私少身にて、父養育被思召候間、私へ御加増二十俵五人扶持被下、都合百俵十人扶持被下候旨延寶四年五月十六日、於御城池田大學・日置猪右衛門申渡。同六年五月十六日、御徒頭被仰付、御徒十人御預け被成由、御直に被仰付、人不足代米六十俵、馬扶持方十五石、銀三十枚宛被下。天和三年五月十四日、御横目役被仰付、新知三百石被下候由、御直に被仰付。同年七月七日、世悴安藤彌九郎、八歳にて御目見仕候。

五、淺野惣右衛門。　尾張國上淺野に致居住、名田領知罷有、其後瀧川左近殿に仕官仕候。

六、淺野多左衛門。　右の筋目にて、瀧川出雲に附隨、於岡山病死仕候。

七、淺野定右衛門。

池田民部様へ御奉公仕罷有候處、寛永六年十月二十日、於因州御歩行に被召出、二十五俵四人扶持被下、此後五俵宛兩度御加増、都合三十五俵四人扶持、同十九年横目、承應元年十一月二十八日、侍從様へ御附、御小姓に被成、一

倍の御加增にて、七十俵八人扶持被下。萬治二年十二月十七日、新知百五十石。寬文十年三月朔日、御內所御用實仰付。延寬元年九月二十三日、足輕十人被仰付、同二年十一月十三日、五十石御加增。同五年九月十八日、六十九歲病死。同四年八月、二男勘兵衞は、高桑忠右衞門養子となる。

八、淺野瀨兵衞。幼名久之丞、近習步行頭。三十四歲。

寬文六年正月二十六日、御兒小姓に被召出、六十二俵四人扶持被下。同十年、御側小姓に被仰付候。同十二年十月より、日帳可付旨、御側小姓四人に被仰付候內なり。延寶二年正月十八日、十俵一人扶持御加增同八年十一月十八日、父家督無相違、二百石被下、私へ被下候御給扶持被召上、天和三年八月二十九日、御徒頭被仰付。

九、青江忠兵衞。林と此時いふ。本氏青江に御座候。林と名乘候事、子細不存候。

武藏守樣へ被召出、百五十石被下、慶長十三年四月二十六日、病死。

一〇、青江平兵衞。五歲にて父に離申候故、成長仕候內、御知行被召上候由、芳賀內藏允に御預け、養育仕候へと被仰付。

慶長十七年、松平備後守樣へ、九歲にて御兒小生に被召出、其後御供•御使•御取次•御勘定開相勤、正保三年十月二十日、新知百五十石被下、御弓組十人御預け、同四年十一月十四日、五十石御加增。承應元年正月朔日、百石御加增被下、都合三百石拜領、御弓組差上、御鐵砲十人御預。延寶四年十月二日、七十三歲病死。

一一、青江忠兵衞。組外、四十八歲。

明曆元年六月二十一日、備後守樣へ十六歲にて、御兒小生に被召出、十五石三人扶持被下。其後、中小生に被仰付。寬文五年九月四日、備後守樣御死去被成、延寶四年十一月五日、平兵衞跡目三百石無相違、豐前守樣被仰付候。同五年正月二十九日、豐前守樣和意谷へ御葬相濟申候、御注進に岡山へ參候。同年八月二十八日、數馬樣より、御鐵砲の者十人御預け被成候。同七年四月十二日、十五人扶持被下候旨、日置猪右衞門申渡候。五月十一日、岡山へ越申候。

一二、安東肥前。始名左馬允、美作三星城主後藤攝津守へ仕へ、知行五百貫武功に付、感狀四通今に所持。

一三、安東德兵衛。始名與十郎、肥前年老隱居無相違五百貫給る。攝津守滅亡に付、浪人、浮田和泉守直家へ被抱、知行七百貫、同名の者共與力に被申。後藤・浮田兩家にて德兵衛武功に付、褒美の狀十八通、于今所持。

一四、初代安東平左衛門。始名勝七。德兵衛隱居、家督七百貫賜る。

浮田直家・同秀家へ仕し段、左の如し。天正十八年相州小田原城攻に、浮田中納言殿、家老戸川肥後備に罷有、穴を堀城中へほり入處、城中よりも相堀に付、兩度ほり當り、穴の内にて鑓にて突合、敵鑓二本勝七切折返る、勝七鑓をも城中へ切折取。(作州吉村八郎左衛門證人)。始の高麗陣石橋村朝懸に戸川肥後相働、肥後備の後の方より、敵切懸る。其場に、國富源右衛門・小野田與九郎・勝七三人弓計にて參る。其時與九郎は何方へ行しや、見へず。源右衛門は馬より下り立居たり。菊井平五と申者、歩にて勝七側來、其處小山にて勝七は馬上、源右衛門平五は歩にて、三人懸りけれども、馬上故勝七先へ乘崩、小山より北の大道筋は、戸川肥後自身向ひ迫合乘崩、南の道筋は戸川又左衛門・中島吉右衛門・粟井三郎兵衛・田中仁助・新免五郎左衛門、何も迫合、小山の尾方敵控居ける故、勝七追崩す。此時一番頭は菊井平五取る。(證人御家の中島吉右衛門)。あんさん郡にて張番、國富源右衛門・居森四郎兵衛・小野田與九郎一つ口へ行、大澤平大夫・長尾惠(惣カ)左衛門・吉村八郎左衛門・勝七一つ口へ行、國富が口へ敵出候處、源右衛門下知して、鐵砲にて打立、勝七が口へも敵來りける處、此方足を亂す。勝七踏留、鐵砲伏置處に鄉中へ亂妨に出しける者共、引取けるを、敵付來故、此方足を亂す。大澤平大夫・長尾惣左衛門兩人は、年比の者にて踏留候事難成に付、勝七乘付、何も引廻し、後殿して退きけれども、敵頻に付來る故、鐵砲伏せて打せける處へ、源右衛門・八郎左衛門・惣左衛門加勢に來る。(此者共證人)。ちんしゅ落城の時、一番首二つを勝七取、鼻を缺ぎ實檢の時、間には女の首も有ければ、鼻は高名に立ざれども、勝七は口鬚をかけて缺ける故、子細なく首帳に付、其時敵二三十人引退せ、勝七追懸ける處、向より中納言出向ける故、勝七方へ立歸り、少し高き所に敵居けるを、鑓にて突ければ、上より轉落ける故、鑓の柄折けり。則中納言殿見られ、其場にて持槍を賜はり、今に片鎌の鑓所持仕、(吉村八郎右衛門證人)。同郡より五里東、切寄せの城、毛利右馬頭殿浮田中納言殿・加藤遠江殿・石田治部少・大名形部少、此五人夜七つ時分より攻め、晝時分二の丸迄切取候て、味方にも死人手負數多候ゆへ、晩七つ時分惣人數引取、中納言殿攻口にて殘り居し者、以上十人、中島吉右衛門・小瀨助左衛門・岡釆女・戸川玄蕃・同又左衛門・小坂與右衛門・寺尾作左衛門・景山與太郎・粟井三郎兵衛・勝七、此者共踏留めける處、手負死人多きまゝ、後日仕寄にて攻べきまゝ、先引取べき旨、奉行殿幷中納言殿より兩度迄申來故、引取しが、小坂與右衛門手負退かねし故、中

鳥吉右衛門・勝七二人城際に立歸り、與右衛門召連引退く。（小瀬助左衛門・吉村八郎左衛門證人）。鎭守漢南人、三萬計にて都へ被懸んとせし時、諸大名は都より五里東にて、合戰戸川肥後備にて、勝七一番に驅出、敵を打取。同郡より四里南にて、五月十八日の朝敵大軍にて、三段に備かゝり合戰に及、肥後一手にて悉く切崩、數人打取時も勝七手に逢、小瀬助右衛門は、母衣指數人中へ驅入高名あり。（吉村八郎左衛門・小瀬助左衛門證人）。後の高麗陣南門の城、敵大軍にて持堅ける故、八月八日より諸大名中取卷攻られしに、同十五日夜、戸川肥後自身一番乘にて城を乘取る。北の方櫓を敵數人取込居ける。此門櫓勝七一番に切入處、肥後も櫓に入りて、自身鑓にて突申故、鑓の柄折、則本陣へ肥後參、突折し鑓中納言へ見せける。（吉村八郎左衛門・長尾惣左衛門證人）。山伏國伏見落城の時、松の丸橋より勝七一番乘仕候。（此段木下淡路守殿内淺井太郎左衛門證人）。同長東大藏明屋敷の下東の門の内敵集り居けり。其門勝七上下十四五人にて詰居ける處、城中より鐵砲にて打立ける故、門柱に立寄居ける時、門のくゞり明きし故、はいりて敵百計有しを、堀詰の大櫓の脇にて鑓にて渡合、勝七高名此時少し鑓疵負、召連し下人三人討死仕。（長尾惣左衛門・吉村八郎左衛門證人）。同晩七つ時分に、治部少丸より本丸へ登る。鐵門の内へ敵集り居る由にて、明石掃部・長船越中兩人、寄ける時、小瀬助左衛門・同次郎右衛門・寺尾作左衛門・同七兵衛・羽加助六・池田與左衛門、以上六人門の内にて高名す。其後稻葉猪右衛門・武藤長左衛門・勝七高名。（小瀬助左衛門證人）。勝七本知七百貫、其後兩度加增にて、二千石に成、鐵砲五十人預り申、一人に付高四十石宛。此知行二千石自分共に都合四萬石にて御座候。後の加增の折紙は、浪人の内、於作州居宅火事の節致燒失、其外は今に所持仕候。慶長五年子、關ヶ原出陣に供仕、中納言殿身上滅亡故浪人仕、作州に罷在候處、金吾中納言殿可召抱旨にて罷出、少し内奉公仕候處、知行千石程可給旨に付、勝七申は、此方より望罷出候にて無之、是非可被召抱由にて被召出、浮田中納言殿にての知行不被下段不足に存、家老稻葉内匠に斷申、晝中に罷退申候。此段腹立にて方々構被申浪人にて罷有候處、戸川肥後守、輝政樣へ被申上、慶長六年於播州被召出、同年十一月三日、領知五百石御折紙頂戴仕候。

金吾殿御構中に、輝政樣御威光を以無異儀被召出候故、兔角の儀不申上候。同十八年正月二十五日、輝政樣御卒去被遊、新參者御暇被下候故、勝七も浪人仕、同十九年武藏守樣於播州歸參被仰付、前の通五百石御折紙同年十月五日被下候。大阪御陣に付、人馬用意仕、御跡より大阪に罷越、於御陣所御小生〔姓〕に被召仕、名替り申樣にと仰にて、平

左衛門に成申候。元和二年、武藏守樣江戸にて御煩被成候付、御暇被進、御登被成候道中にて六月十三日御卒去被遊候故、致落髪御國へ御供仕候。同年、御家督少將樣へ被進、翌三年、因州へ御國替にて參候。同四年、少將樣因州へ御入國、同年十一月二十六日、御書替の御折紙頂戴仕、前の通小生役相勤申候。寛永九年、備前へ御國替に付、從因州引越、翌十年酉正月元日、御書替御折紙頂戴仕候。其後御鑓奉行被仰付、其後御旗奉行被仰付。明曆二年五月二十九日、八十五歲病死。

一四、安東平左衛門。　幼名、四郎左衛門。

明曆二年七月二十七日、家督無相違五百石被仰付。八月朔日、繼目の御禮申上候刻、平左衛門と改申候。同年十月、土倉隼人與頭に被仰付。萬治三年十一月十八日、御旗奉行被仰付、延寶二年正月十五日、御書替の御折紙侍從樣より被下。同五年五月十五日、七十五歲病死。

一五、安東平左衛門。　伊木兵庫組鐵砲引廻、五百石、三十歲。日置十左衛門三男にて御座候。

寛文五年二月二十五日、養父安東平左衛門願の通養子に被仰付、同三月三日、十歲にて御目見仕候。延寶五年七月十四日、跡知無相違五百石被仰付、則平左衛門と改申候。同年八月十八日、御書替の御折紙被下。同八年八月十八日、於江戸若原監物組の御鐵砲引廻役被仰付、天和元年十一月朔日、若原監物御城代被仰付候に付、浮組にて罷有候。同三年閏五月十四日、伊木兵庫御鐵砲引廻役被仰付候。

一六、安東德兵衛。　初代平左衛門末子にて御座候。

寛永十四年三月二十八日、少將樣へ中小生に被召出。同十六年二月、御切米三十俵被下。同十八年春、御加增十俵四人扶持被下、同十九年暮、御加增十俵被下。正保元年十月十七日、新知百五十石被下。慶安三年十月二十八日、御加增五十石被下。明曆三年四月五日、御徒頭被仰付、寛文二年八月十五日、御持筒十人御預け被成、御加增百石被下。御すへの御用、御鷹匠・御餌指・御犬引の支配被仰付。同九年十月十二日、六十二歲病死。

同年十一月二日、德兵衛跡目御知行二百石、私兄市郎右衛門に被仰付。延寶七年二月二十五日、兄市郎右衛門病氣に付、私養

子に奉願候處に市郎右衛門名跡御つぶし被成候由被仰付。

一七、安東徳兵衛。池田左兵衛組、百五十石、十九歳。

延寶七年六月十二日、父徳兵衛數年御奉公申上候との御意にて、別に被召出、御知行百五十石被下。

一八、安部傳左衛門。悉細不存候。

一九、安部忠左衛門。始は、塚谷三藏、其後安部文藏、其後宮地平藏と申候。佐々陸奥殿へ罷出、塚谷三藏と申、知行本知加増、ともに五度、九百石給り、折紙五つ于今取持。其後加藤肥後守殿へ罷出、安部文藏と申、二百石給り、折紙于今所持。其後羽柴中納言殿へ罷出、宮地平藏と申、六百石賜り、折紙于今所持。鐵砲二十預り申候由。

武藏守様へ被召出、三百石被下、慶長九年、御折紙頂戴仕候。大阪御陣の節、御使番被仰付候由。其後御鑓奉行被仰付候由。寛永十六年九月二日、病死。

二〇、安部傳左衛門。

跡知無相違、三百石被仰付。承應元年十月九日、五十三歳病死。

二一、安部傳左衛門。草加宇右衛門組、鐵砲引廻、三百石、五十九歳。

正保三年、十歳にて御目見仕、承應元年、跡目無相違被仰付、十一月十五日、御禮申上候。天和二年閏五月十四日、芳賀内藏允組鐵砲引廻に被仰付。貞享元年二月四日、草加宇右衛門組鐵砲引廻被仰付。嫡子喜六、寛文六年三月朔日、十歳にて御目見仕、同六月十五日、侍從様へ御目見仕。

二二、有松與兵衛。

備前松田殿に罷在、其後播州別所殿へ罷出、初陣十七歳にて、ながらと申所にて高名仕、其後三年の籠城仕、其間攙成働、兩度御座候。二百貫賜り、別所殿滅亡の後、宇喜多中納言殿へ罷出候。作州の内三の宮城攻の時、大將村上を鑓下にて組臥、首を取申所、身方共首を奪取申候。後承候へば、岡豐前奪申候由、其後備前高城にて、大將岸修を打取申候。關ケ原の前、伏見城乗候節、高名仕、下人共に申付首數十一取申候。又美濃大垣表にて、九月十四日高名仕候。高麗陣兩度相勤、度々高名仕候得共委細

不存候。知行は二百貫より段々立身仕、三千石鐵砲足輕五十人預り申候。

慶長十二年、武藏守樣へ被召出、四百石被下候。大阪兩陣御供仕候。六十餘にて病死。

二三、有松次郎兵衛。 十三歲の時跡目無相違被仰付、二十歲於因州鳥取病死。

二四、有松源五左衛門。 二百石、五十六歲。

二歲の時跡目百石被仰付、三百石被召上。寛文元年於江戸御加增五十石被下。同六年十月、於江戸大小生に被仰付同十二年、母衣被仰付、於御前母衣絹拜領仕候。延寶元年十二月二十七日、御加增五十石被下。天和三年閏五月十五日、御鐵砲引廻被仰付。

二五、子長十郎。

天和元年十月二十八日、御目見被仰付。

二六、荒尾一色備後守。

二七、一色將監。 後清左衛門と改申候、後祖閑。

權現樣・常眞樣へも御奉公仕候由、其後荒尾清左衛門と申候。荒尾志摩方へ參り居申候。清左衛門妻は荒尾美作守娘にて、勝入樣御筋目御座候故、輝政樣へは被召出、無役二百石被下、志摩知行所へ參樂仕候へと被仰付、其時入道仕、祖閑と申候。播州御拜領の節、家中並に三割增の御加增にて二百六十石に被成下、次男儀大夫は明石に居申候に付、一所に被爲置候。其後因州にて寛永五年九月十三日、病死。跡知二百六十石孫長兵衛に被下。後荒尾内藏助改名す。

清左衛門子三人あり。嫡子荒尾豐左衛門・次男荒尾儀大夫・三男を内藏といふ。三人とも輝政樣へ被召出候て、嫡子・二男は後は宰相樣へ御付被成、豐左衛門は連々御知行四百五十石被下、四代相續相模守樣迄御奉公申上候處、四代目荒尾重兵衛と申、延寶七年病死。子なく家絶。儀大夫連々御知行五百石被下、三代相續于今伯耆守樣に御奉公仕。

二八、荒尾内藏之介。 清左衛門入道祖閑三男にて御座候。

於參州吉田武藏守樣へ十歲にて被召出、於播州二百五十石被下、備前へ被成御座候て二百五十石御加增被下、都

合五百石にて御小姓頭被仰付。大阪御陣の時、鐵砲二十御預り被成、兩陣御供仕候。手前不罷成旨被聞召、於京都御鐵砲二十人の内十人無役にて被下候。八九年は御役仕候。 武藏守樣へ御歩行一人召仕候樣に、と御意にて被下候。御卒去以後、右の御歩行を御鐵砲の小頭に直し申樣にと、御老中差圖にて、御鐵砲二十一人に被成下候故、小頭の外に預り二十一人御座候。正保元年九月、隱居被仰付、名をも祖閑と改申候。家督無相違、世悴へ被仰付、内藏之介と改申候。 悴部屋住にて被下候御知行、二百六十石隱居料に被下候。同四年正月十六日の朝、祖閑宅へ少將樣被爲成、御茶被召上、御時服二つ被下候。慶安二年七月二十七日、六十九歲病死。隱居料は、次男長兵衞に被下候。

二九、荒尾内藏之介。初は、長兵衞と申候。

寛永五年九月十三日、祖父清左衞門入道祖閑死しける以後、祖閑に被下置候隱居料二百六十石を部屋住にて頂戴仕候。正保元年、父内藏隱居被仰付、家督無相違、五百石、御鐵砲二十一人被仰付、名も内藏之介に改め申候。これ迄は長兵衞と云。御鐵砲二十一人といふは、外に並も無御座候に付、御断申上、一人指上申候。今迄被下候二百六十石は、隱居料に祖閑に被下候。 貞享元年霜月十三日、七十二歲病死。

三〇、荒尾猪左衞門。宮城大藏組、五百石、四十歲。　貞享二年正月二十七日、跡目無相違五百石被仰付。

三一、子市之助。　貞享二年極月朔日、十一歲御目見仕。

三二、荒尾長兵衞。内藏之介祖閑が次男にて、慶安二年七月二十七日、祖閑病死已後、祖閑が隱居料二百六十石被下候。延寶元年八月、四十四歲病死。

三三、荒尾長兵衞。伊木兵庫組、二百六十石、二十二歲。　延寶元年十月十三日、跡目無相違被仰付。

三四、青木内藏之介。佐々右衞門督處に罷在候由。

三五、青木長藏。

輝政樣へ於濃州池尻被召出、其後浪人仕、小川土佐守殿にて二百石被下候。 慶長十年、於備前武藏守樣へ被召出、百五十石被下。其節は青木三郎左衞門と申候。同十二年、病死。

三六、青木三郎左衛門。

慶長十二年、跡目無相違百五十石被仰付候。後に六郎左衛門と申候。 寛文六年十二月二十九日、隱居被仰付。同九年八月二十日、病死。

三七、青木忠大夫。 寛文六年十二月二十九日、家督百五十石無相違被仰付。同十二年八月十六日、病死。

三八、青木久五郎。 土肥飛彈組、百五十石、二十八歲。

寛文七年、忠大夫養子に被仰付、江戸より十歲にて備前へ罷歸候。同十二年十月六日、跡目無相違、百五十石被仰付。延寶三年實家高取傳右衛門立退申候に付、尋出し候へと被仰付候に付、三月十一日、江戸へ參尋申候候へ共、住所しれ不申に付、同五年九月、御暇申上浪人仕候。同七年十月八日、歸參被仰付。

實父高取彌左衛門、少將樣へ御歩行に被召出、本俵二十五俵、四人扶持被下、其後御徒横目被仰付、本俵五俵御加增被下、其後中小生に被仰付、本俵三十一俵三人扶持御加增被下、都合本俵六十二俵七人扶持被下、本多下野守樣御直樣へ御附被成、江戸へ引越申候。承應三年七月三日、御婚禮御供仕罷越申。寛文三年正月二十三日病死、彌右衛門跡目養子傳右衛門。（傳右衛門父を高取與次右衛門といふ。伊庭半藏方に罷有候由）。に被仰付、延寶三年傳右衛門不調法の儀御座候て、於江戸立退申候。

三九、淺野左馬助。 松永霜臺に罷有由。

四〇、淺野彥右衛門。

武藏守樣へ御馬役の小頭に被召出候。少將樣御三歲の時より、江戸へ御供仕、御奉公申上候。寛永十年春、百五十石被下。

四一、淺野七左衛門。

三歲の時養子に罷成、慶長十六年、少將樣江戸に被成御座候節、被召出御奉公仕候。寛永十九年彥左衛門御役御免被成、則百五十石無相違被仰付、御馬役被仰付。慶安四年九月、御馬役御免被成、寛文七年四月十五日病死。

四二、淺野孫助。 池田七郎兵衛組、百五十石、三十九歲。

萬治元年四月朔日、御目見。寛文七年五月二十八日、跡目無相違被仰付。

四三、荒井大津又兵衞。信長公に居申候由。

四四、大津喜右衞門。

勝入樣へ於攝州伊丹被召出、小田原陣にて少々働仕候に付、於參州吉田新知百石被下。於播州五十石御加增。慶長十年、病死。

四五、荒井六兵衞。

慶長十年十一月五日、跡目無相違、百五十石被下。同十九年、大阪御陣に竹村伊豆組にて十二月朔日罷立、伊豆煩候に付、御鐵砲五十被預置候に付打せ申、其後存寄御座候て荒井と氏を改申候。正保二年六月二十九日、病死。

四六、荒井六兵衞。

正保三年六月朔日、跡目無相違被下、延寶五年十月六日、五十八歳病死。

四七、荒井杢左衞門。實は、武藤勘右衞門末子なり、宮城大貫組、百五十石、二十五歳。

延寶二年、養子に被仰付。同年三月九日、侍從樣へ御目見仕。同五年十二月十三日、跡目無相違、百五十石被仰付候

四八、青地兵衞尉。秀次公へ與力奉公に出申候由、兄は右近尉と申候。

四九、青地小兵衞。

武藏守樣へ於備前八人徒の者に被召出、大阪陣に冬は御歩行にて御供仕、夏は芳賀内藏允組に被仰付、騎馬にて御供仕候。慶安四年隱居被仰付、萬治二年二月十日、七十九歳病死。

五〇、青地小兵衞。丹羽平大夫組、七十俵四人扶持、五十歳。

私實父は小兵衞妻の甥にて、鈴木氏にて御座候、小兵衞養子分に仕置候處、病死仕候。これに依て、私を養子に仕候。慶安四年跡目無相違被仰付、七月十三日、御禮申上候。

五一、子駒之介。天和三年七月朔日、御目見仕候。

五二、青地藤十郎。青地小兵衛子なり。

少將樣御十一歲の時、藤十郎十六歲、於因州御兒小生に被召出、備前へ御國替以後、本俵五十俵五人扶持被下候。四十一歲の時、御納戶役被仰付、新知百五十石被下。四十八九歲の時、瀨崎六兵衛弟源之丞、養子に奉願候へば、願の通被仰付、間もなく源之丞六十俵四人扶持被下、御弓組に被召出候。藤十郎五十七八歲の時、隱居奉願候へば、家督無相違源之丞に被下、則源之丞に被下置候御切米、隱居料に被下忝御意にて御內諸の御番物頭並に被仰付候。寬文九年正月十二日、六十六歲病死。源之丞儀は、其後二割御加增被下、信濃守樣へ御附人に被仰付、相勤申候處、奉公振御意に不應、御返被成候へば、不屆に思召、御改易被仰付候。

五三、青地藤四郎。岩千代樣附、八十俵七人扶持、二十九歲。藤十郎、源之丞を養子に仕候以後、私出生仕候。

寬文三年十月十五日、七歲にて御目見仕、十二歲の時藤十郎病死仕、同人に被下候御切米御扶持、無相違被下候。寬文十一年、十五歲の春、少將樣御兒小生に被仰付。御隱居被遊候後、侍從樣へ御奉公申上候。貞享二年四月二十三日、岩千代樣へ御附被成、十八俵三人扶持御加增被下。

五四、青地惣助。丹羽平大夫組、六十二俵四人扶持、五十七歲。青地小兵衛養子なり。

侍從樣へ西の御丸に御部屋住に被成御座候節、御右〔諸〕筆役に被召出候。寬永〔文カ〕六年正月二十二日、御目見被仰付、六十二俵四人扶持被下。

實父は西山玄賀といふ。少將樣因州に被成御座候時醫者にて罷在候。私三歲の時病死仕候に付、私を小兵衛養子に仕置申候。

五五、子惣三郎。　貞享元年九月朔日、御目見仕候。

五六、安宅但馬。安宅攝津守所に罷有候。

五七、安宅次郎左衛門。

仙石越前守方に罷有候。其後脇坂中務殿に罷有候。其後稻葉內匠頭所に浪人分にて五百石給罷有候。其後浪人仕。慶長十年武藏守樣へ被召出、三百石被下、同十九年病死仕候。

五八、安宅次郎左衛門。
慶長十九年十一月七日、跡目無相違三百石被下。萬治三年二月二十四日、七十二歳病死。
五九、安宅彌市郎。　實は、京都青蓮院殿代々家老の鳥井小路式部が子なり。次郎左衛門養子に被仰付候年月不詳。
十五歳にて寛永十八年九月、於江戸御兒小性に被召出、五十俵七人扶持被下候。萬治三年、跡知無相違三百石被仰付。延寶三年二月二十七日、五十歳病死。
六〇、安宅權兵衛。　草加宇右衛門組、百五十石、二十九歳。
十九歳にて延寶三年二月十五日、侍從樣へ御目見仕。同四年七月七日、跡目の內百五十石被仰付。
六一、芦屋三右衛門。　本多中務樣にて二百石被下居申、病死仕候。
六二、芦屋忠左衛門。　跡目無相違被仰付罷有候處、正保元年、病死仕候。
六三、芦屋與右衛門。　中村主馬組、四十六俵四人扶持。六十歳。
萬治三年二月二日、侍從樣へ小十人(姓)に被召出、三十九俵四人扶持被下。延寶五年八月二日、中小性に被仰付。同八年九月十二日、御加増七俵被下。貞享二年十月五日、御小性御免被成、中村主馬組被仰付。
六四、養子孫八郎。　石田彌次右衛門末子を奉願候處、被仰付。貞享二年九月九日、御目見仕。
六五、阿部高見越前。　備中猿掛城主、毛利備中守元清家の由。
六六、高見藤左衛門。
輝政樣播州御入國被遊候節、中村主殿奉(ママ)にて被召出、百五十石被下、則、主殿組に被仰付。中風煩、武藏守樣御代迄病中にて終に御目見不申上、播州姫路にて病死仕候。其砌、主殿も病死仕候に付、跡目立不申候。
六七、阿部多右衛門。　上坂外記組、百五俵八人扶持、七十三歳。
父由緒を以、日置豐前申上、少將樣へ御歩行に被召出、二十五俵四人扶持被下。寛永十九年、御歩行横目被仰付。正

保三年、御加增五俵。承應元年七月十二日、御加增五俵。同十月九日、中小生被仰付、三十五俵四人扶持被下、都合本俵七十俵八人扶持被下。侍從樣へ御附被成、則御膳奉行被仰付。同二年極月、御扶持に放候。寛文九年、歸參被仰付、御切米御扶持、無相違被下。

六八、子七左衛門。　寛文十年、十九歲にて、侍從樣へ御目見仕。

六九、秋田湯淺吉右衛門。　織田右衛門殿・淺野彈正殿・溝口伯耆殿にも居申候。

七〇、湯淺角右衛門。　後秋田五左衛門と申候。若原右京所に罷有、大阪御陣の砌、右京手前立退、大阪御城へ籠り、少々働も仕、數箇所手負候由。
大阪落去後、美濃へ參候處、松平攝津守殿へ被召出、二百五十石被下候所、大阪浪人抱申儀御法度に付、御暇被下候。其後因州へ罷越候處、御當家へ被召出、其刻名字替り、秋田五左衛門と申候。本知二百石被下。其後於備前寛永四年閏三月五日、御加增五十石被下。同十七年六月二十三日、病死仕。

七一、秋田五左衛門。　山崎大膳組、二百石、六十三歲。　寛永十七年十一月朔日、跡知三百石の內、二百石被仰付。

七二、子源之介。　延寶五年十一月十五日、侍從者へ九歲にて御目見仕。

七三、廣瀨清右衛門。　福島左衛門大夫殿に二百石被下居申候。

七四、廣瀨清兵衛。　跡目無相違被下居候所、左衛門大夫殿潰申候間、浪人仕、病死。

七五、淺野長兵衛。　山崎大膳組、六十俵六人扶持。五十六歲。
承應二年五月二十八日、侍從樣へ御步行に被召出、本俵二十俵四人扶持被下。淺野定右衛門不通故、奉願被召出候節、淺野氏に仕候。　萬治三年二月二十一日、本俵五俵御加增被下、同極月十六日、十人組人被仰付。延寶元年二月十一日、大御前樣へ御附被成、御小生組に被仰付。今俵二十俵二人扶持、御加增被下、都合六十俵六人扶持被下候。

七六、子定之助。　天和二年二月十一日、十一歲御目見仕候。

七七、青山彥九郎。　本多美濃守樣に罷有候て病死。

七八、青山善左衛門。若原監物組、五十四俵四人扶持。六十九歳。

父を鵜見彌助といふて、輝政樣御代に御鐵砲の小頭に被召出候。少將樣へ因州へ御國替の御供仕、於因州眼病煩、御暇申上、播州へ歸申候。養父青山彥九郎は、實父彌助ためにも不通者にて、私三歲の時養子に仕、七歲の時彥九郎病死仕、跡目切米に成申を、母堪忍不仕致浪人候。

承應二年五月、侍從樣へ被召出、三十俵四人扶持被下、同月二十七日、於江戶御目見仕候。同年暮、御步行橫目被仰付、七箇年相勤候節御加增兩度に十五俵拜領仕候。萬治三年五月、十人組に被仰付。寬文七年暮、小生組に被仰付、御加增被下。

七九、子源十郞。四十四俵四人扶持、二十六歲。

寬文十一年霜月十五日、小坊主に被召出、三十俵四人扶持被下。延寶四年、髮立候へと被仰付、御小性組に被成、御加增十俵被下。

八〇、相原市兵衛。尾州にて平岩主計所に與力仕、其後同所渡邊半藏與力仕候。

八一、相原市郞右衛門。半藏與力にて居申候處、浪人仕、松平市正殿御親父、松平丹後守殿豐後高田に御座候時、奉公仕、五・三年罷有、其後半藏方へ歸參仕病死。

八二、雨宮源右衛門。五十ヲ俵七人扶持、五十九歲。

牧野監物殿御肝煎にて、寬文三年七月二十二日、御步行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下。同七年十一月、御徒橫目被仰付、御加增今俵七俵一人扶持被下。延寶元年、御加增七俵被申。貞享元年十一月十六日、御前樣へ御附被成、中小性に被仰付、御加增十俵三人扶持被下。

八三、荒木助大夫。秀次公に奉公仕、以後浪人。

八四、荒木四郞大夫。一代浪人。

八五、荒木茂右衛門。九十俵七人扶持、六十六歲。

承應元年六月、大御前樣へ御步行に被召出。本俵三十俵三人扶持被下。寛文五年七月、中小生に被仰付、御加増本俵十俵二人扶持被下。延寶元年三月、御賄御用被仰付、御加増小俵十俵二人扶持被下。圓盛院樣御卒去以後、松姫樣へ御奉公仕、天和二年十一月、松姫樣御祝言に付、御加増小俵十八俵被下。

八六、荒木庄左衛門。 福島左衛門大夫殿に奉公仕、落去後に於備後府中、承應二年病死。

八七、荒木清大夫。

寛文十三年暮、十人扶持百俵被下被召出、料理人なり。正保二年正月二日、新知二百石被下。延寶六年七月二十三日、六十九歳病死。

八八、荒木清大夫。 料理人、二百石、三十九歳。

萬治二年九月九日、御目見仕、寛文九年正月十五日、少將樣御年祝、於御前鶴包丁被仰付、三十俵三人扶持被下。延寶六年十月朔日、跡知無相違二百石被下。

八九、稻葉。

九〇、疋田與次郎。 生國伊豫、後美濃國へ參、土岐殿に奉公仕、土岐殿感狀御座候。

九一、河野賴母。 父方は疋田氏、母方は稻葉氏。

羽柴左衛門督殿へ、兒小生無足にて罷有。十七歳の時、天正十年六月十四日、江州坂本合戰の刻高名仕、知行二百石賜り、其後百石宛兩度加増にて四百石に罷成候。天正十一年峯の城攻の時、敵城の內にて働申候付、左衛門督殿人數引退申刻、城中に賴母刺物を落、又城中へ取て歸し、刺物を取罷出候。同年柳ケ瀨御陣の時、中川瀨兵衛殿御打死の刻、左衛門督殿人數散々に罷成、敗軍の節、左衛門督殿側に七八人ならでは付不申に敵跡を慕申候に付、賴母踏留、敵一人鑓付、首を取可申と仕候處、左衛門督殿被申は、自分見申候へば、首を取候事無用と被申候。其後秀吉公尾州より御掛付、柴田人數越前へ追込被成候に付、御勝に成申候、左衛門督殿柳ケ瀨迄々返被申候時、賴母供仕候。天正十二年六百石加増賜り千石に成申候。左衛門督殿母衣の者共も賴母を可然と書出し、左衛門督殿も同意に吟味の上にて母衣預け被申候。天正十三年、千石堀城攻の時、賴母一番乘仕候

其時円幡に罷有候安養寺佐渡、父内藏助、賴母具足上帶とけ候と僞申候。投内藏助一番乘と申候へ共、左衛門督殿前にて穿鑿の刻、賴母より内藏助跡に乘候へばこそ、方便申と穿鑿極り、賴母一番乘に相定り申候。右千石堀の城、火矢にて燒拂申に付、秀吉公御意引取申樣にと御下知に付引取、則秀吉公御前へ左衛門督殿へ被出、賴母も御目見仕候由、秀吉公の御意に、左衛門督惡敷仕候はゞ、何時によらず來り候へと被仰候由。左衛門督殿歸陣有之、名字堀をくれられ、陣刀給る。小田原陣前、左衛門督殿より、猩々皮羽織・旗二本給はり、鐵砲三十人預けらる。左衛門督殿小田原にて死去の後、鐵砲の儀に付、羽柴久太郎殿・羽柴藤五郎殿狀御座候。其後越前より越後へ國替の刻、羽柴久太郎殿より二百石・三百石兩度加增給はり、都合千五百石に成申候。關ケ原陣の時、慶長五年九月八日、越後へ會津より二三千加勢にて、越後國下田口に一揆起り、羽柴久太郎殿・弟同美作殿、大將分にて以上五頭働申所、賴母手を碎敵追拂、首數多打取申候に付、羽柴久太郎殿幷堀監物、父子三人の證文御座候。則知行五百石の加增給はり、久太郎殿へ秘藏の魚住黑の馬を給り候。都合知行二千石に成、鐵砲五十增し、三十五人預れり。左衛門督殿父子度々折紙私父刑部兄持候て大阪へ籠り失申故、私方に取持不仕候。羽柴久太郎殿方にて、組頭被申付、則堀雅樂助・堀丹後兩人御座候。賴母御家へ罷出候はゞ、大阪冬の御陣、慶長十九年霜月朔日、攝津國久々智と申所、武藏守樣御陣所にて御禮申上、其日神崎の川を越相働申候。攝津國中島にて、御米千俵拜借仕候。翌年の御陣前に、播州姬路にて御鐵砲三十人御預け被成、銀子三貫目香西縫殿取次にて拜領仕候。元和元年五月七日、攝津國野里川瀨踏賴母仕候へば、武藏守樣御感被成候、御意にて御使被下候。就夫御側衆先へ罷越申度申候間、川の瀨必隱申候樣にと、御使御座候。その日大阪落城の節、物見に須加伊豆・薄田左馬助・賴母三人被遣候。罷歸大阪の樣子天王寺より上樣程近く御攻入被爲成候と相見申候。其上大阪より唯今石火矢を打出し申候。煙の體大阪上本町通、煙見へ申候間、御人數野里川御越、御尤と賴母申上候内に、敵仙石豐前、天滿の橋より人數繰出申候間、いよ／＼川御越御尤と申上候得ば、上使城和泉殿御越候て、左樣に被成候へば、上樣御軍法を御破被成候と、殊の外立腹にて、何角と武藏守樣へ御申上候。賴母重て申上候は、左樣に御座候はゞ、御先手計り、川御越可然由、達て申上候。いよ／＼城和泉殿腹立にて、賴母と迫合被申處、武藏守樣先賴母は小屋へ入申樣と御意にて、御前罷立申候。野里川の端森の有之處にて御座候。仙石豐前旗の樣子前廉に承候故、申上候。大阪船場の御堂、武藏守樣御本陣にて御座候。御家へ父子可被召出の御意にて身體の儀少も望不申、何樣とも池田出羽・日置豐前、次第と申罷出候。元和元年十月十一日、御知

行二千石被下候。頼母因幡にて煩、上方へ参、元和八年五月十七日、六十歳病死。

九二、稲葉刑部。

元和元年大阪御陣の刻、野里川瀬案内存知候に付、何角御僉議の内に、鐵砲の者召連、御先へ川を越申候。大阪にて武藏守様船場へ御着被成候刻、首二つ懸御目申候。内一は家来山川佐兵衛取申候。早く取申と御意被成候。御側衆船場にて取申儀は不存、御先手にて刑部取申より先は御座有間敷奉存候由、其節御旗も端々に立申體にて、御側に馬上二三人ならでは無御座候。一人は北島杢居申候。残る者は不存候由、右の首馬上にて掛御目申候由に御座候。御家へ父子共に可被召出、任御意候處、刑部に御心附無御座候に付、御断申上、上方へ罷越居申候。其後池田出羽・日置豊前・池田下総三人より、右存念の通相叶候間、歸參仕候樣にと被申越候に付、歸參仕候。

於因州元和四年十一月二十六日、從少將樣御知行五百石被下候。元和八年戌、頼母跡目刑部に御知行二千石被下、五百石の御知行は被召上、御鐵砲三十人、其儘被仰付候。寛永十九年十月二日、御番頭に被仰付、相組十五人。正保四年亥三月二十二日、五十四歳病死。

九三、稲葉四郎右衛門。 番頭、二千石、五十七歳。

正保四年六月十六日、家督、御知行二千石、御鐵砲三十人被仰付。寛文十二年子七月三日、御番頭被仰付。

九四、子 助五郎。 九歳。

寛文六年午十二月朔日、始て御目見仕候。侍從樣へ寛文七年八月十五日、始て御目見仕候。

九五、泉八右衛門。 近習足輕頭・場校奉行、三百石、六十三歳。

先祖は加州より出候由、後尾張日比津の城に住居仕候由、祖父を野尻久兵衛といふて、信長公に仕へ、不足の儀有之、立退、佐久間甚久郎殿へ仕候。甚九郎殿滅亡の後、奉公不仕。慶長十九年寅、京にて病死。七十三歳。父野尻藤兵衛若年の比、加藤左馬助殿に仕へ、暇申、山崎甲斐守殿に仕へ百五十石給、又暇申、山口修理殿へ仕へ二百石給、修理殿死去の後奉公不仕。島原陣の刻、板倉内膳殿打死の跡へ参、後の内膳殿より鍋島殿手へ被遣、落城の初日早く土居へ登り、鐵砲左の臏(ひざさら)を打抜き、右の股へ中り歩行不叶歸陣仕、延寶八年卯、岡山にて病死。

私十四歲にて松浦壹岐守殿へ被召出、同肥前守殿代に岩田氏の家へ養子に被申付、養父病死仕、跡目二百石給り候。二十歲の時樣子御座候て念比にて暇給候。

慶安三年寅春、於江戸少將樣へ被召出、二百俵十人扶持被下。承應元年辰冬、新知五百石被下。同二年、江戸へ御供仕、侍從樣へ御附被成、裏判役に御加へ、御持筒二十人御預け、御兒小性頭被仰付。同三年、御馬廻の子弟中小姓と御步行の間に可被召仕候間、望次第に十人召置候樣にと被仰付、則冬濟置候。明曆二年午春、江戸へ罷下候節、舊冬の十人致同道參、則十人者と御名付け被成、私に御預被成、和田興右衛門を小頭に被仰付候。同三年、奉願候へば被聞召届裏判役•兒小性頭•十人組頭御捨免被成候。寛文元年丑春より、簡略の御斷申上、蕃山に住宅仕候。寛文六年午七月九日、御近習に相勤、留帳を付け評定に可罷出旨被仰付、并願の通自分知行五百石內、二百石岩田十大夫被下、被召出候旨、少將樣御直に被仰付。同年十月、學校御用、御直に被仰付、水の手學校の內にて、家被下、蕃山より罷出候。御役料九十俵、御足輕二人被下。同七年三月十二日、和意谷御山、御預け被成旨、御直に被仰付。同八年中五月二十二日、御郡の手習所の儀、御直に被仰付、同年六月二十二日、津田重次郎•私御前へ被召出、池田伊賀日置猪右衛門、御前へ被召置、自分以後兩人を其役人に被仰付候間、御前御過り有之候はゞ、無憚御諫言可申上、老中諸役人過失有之候はゞ無遠慮可相規旨、委細被仰付。同九年酉正月、勝手不如意の段達御耳、御銀拜借被仰付十三貫目無利。同年春、新學校御普請御用被仰付、學校の內にて家屋敷被下。延寶元年丑正月晦日、御廟•學校惣奉行•同裏判役相勤、只今迄の通評定所へ可罷出、其外の御用御赦免被成旨、江戸より侍從樣被仰付。同二年寅二月二十四日、世悴藤兵衛初て御禮申上。同八年、勝手不如意の段達御耳、九月十五日、忝御意を以、御銀拜借被仰付旨、大學•左門被申渡、御銀十二貫九十匁餘利なし。右拜借銀殘り共に、十六貫九十匁餘。天和二年戌五月朔日、少將樣御病中、御寢間へ老中•小仕置の末座へ被召出、御遣言被仰聞。同年九月十七日、於西の御丸少將樣御遣物御自筆の諸賢の語一卷、丹波守樣御前にて拜領仕候。

九六、岩田十大夫。　岸藤右衛門組、二百石、三十八歲。

先々代々伊勢國岩田に罷有候由、曾祖父岩田順齋•牧野右馬允殿に致仕官、尾張より參河越後迄奉公仕候由。祖父甚右衛門牧

野右馬允に致仕官、三百石給候由。父又右衛門、酒井雅樂頭殿に奉公仕、宗子又兵衛に百五十石被下、相續御奉公仕候。祖伯父岩田治左衛門、松浦肥前守殿に三百石給、奉公仕候。治左衛門は、岩田甚右衛門弟、則泉八右衛門養父にて御座候。私生國上野大月、明暦二年泉八右衛門方へ參申候。八右衛門奉願候て養父岩田の氏を私に相續仕らせ、八右衛門知行五百石の内、二百石被遣被下候樣にと申上候處、願の通被仰付。

寛文六年七月十一日被召出、則二百石被下、主税樣御組に被仰付。同十二年三月二十七日、稻葉四郎右衛門組に被仰付候。延寶四年二月七日、學校御用被仰付、御役料四十俵被下、加世八兵衛手傳役勤申候。同五年、岸藤右衛門組に被仰付候旨、貞享元年十二月十六日、學校奉行中村又之丞相司に被仰付候。

九七、伊庭彦左衛門。 法名友軒。

花熊御陣の時、左弓にて鎧脇を射申候由、明智合戰の時、首二つ打取申候由。播磨宰相樣御守に被仰付、無役御知行五百石被下、七十八歳、於因州病死。 家督無相違次男の伊庭藤大夫に被下。

九八、伊庭和泉。 甲斐ともいふ。

勝入樣岐阜に被成御座候時、十四歳にて被召出。輝政樣へ御附被成、天正十八年、輝政樣參州吉田に被成御座候節知行百五十石被下、同所にて御加増百石被下、合二百五十石、歩行弓の者二十人御預被成候。慶長五年、新加納川越の時、高名仕候由、播磨へ御入國の時、一倍の御加増被下、都合五百石。慶長七年、武藏守樣備前に御入國被成候時、御附被成、於備前二百石御加増、合七百石被下、組頭に被仰付、御歩行弓十人御倍、合三十人御預被成。慶長十八年、播磨へ御入國被成、三百石御加増被下、千石に罷成候。右三十人の御弓の者の儀、御斷申上候處、二十人は被召上、十人は其儘御預け、鐵砲の者三十人御預け被成、以上四十人御預け被成候。元和三年、少將樣因州へ御入國被成候て右十人の御弓の儀御斷申上候。御弓の者、十人を御知行三百石に被成、伊庭左馬之進に被下候。 寛永十一年四月二十五日、六十六歳病死。

九九、伊庭半藏。 初名、源大夫。中比、主膳。後、半藏と改。

寛永十二年四月五日、家督千石、組御鐵砲、無相違被仰付候。寛文四年辰、江戸御留守御番に五月三日罷越候。榮姫樣御誕生に付、蟇目の御用被仰付、相勤申候。同九年、在宅遍塞奉願。但鐵砲指上、赤坂郡の内、知行所齋富村へ在宅仕、七月二十七日引越申候。延寶元年六月十七日、五十七歲病死。

一〇〇、伊庭與一右衛門。 寄合組、千石、四十八歲。

家督千石被仰付。寄合組に被仰付。延寶六年七月三日、家屋敷拜領仕、十月八日、御當地へ罷出候。

一〇一、子吉之助。 天和三年十一月十五日、十歲初て御目見仕候。

一〇二、伊庭關左衛門。 伊庭甲斐が子なり。(私に曰、甲斐とあるは、伊庭和泉の事なり)。御合力米を給はりありしが、父存生の内、三十七歲病死。

一〇三、伊庭平馬。

關左衛門せがれにて御座候。寛永十一年、十四歲にて被召出。右の關左衛門に被下候御合力米百俵被下候。同十四年閏三月五日、三百石の折紙被下、同十九年、大小生に被仰付。明暦元年御斷申上、大小生役御免被成、御馬廻に被仰付、同氏主膳組に御入被成候。寛文六年、同氏半藏預御弓の者十人の引廻に被仰付。同八年、四十八歲病死。跡式は嫡子半平に無相違被仰付候處、寛文十二年八月二日、十三歲病死。(私曰、十五未滿ゆへ家絕しなるべし)。

一〇四、伊庭源八郎。 池田七郎兵衛組、六十俵五人扶持、二十四歲。

寛文十二年九月八日、十一歲にて被召出、六十俵五人扶持被下、主計組に御入被成候。

一〇五、岩根傳五郎。

傳五郎父を平尾源五郎と申候。山崎源太左衛門に仕數陣相勤、信長公の御前へも兩度被召出、高名の御褒美被下候由。其後大谷刑部少に仕へ三百石給候。度々軍功高麗へも供仕、骨折申候由、足輕十人預り申候。於關ヶ原刑部打死の時は、在城きのめの在番に罷有候。其後浪人仕候。岩根と變り申候。

慶長五年子、輝政樣へ被召出。同六年、三百石被下、黑母衣被仰付候。武藏守樣備前御入國の刻、御附被成、四百五

十石に被成被下、母衣は右の通被仰付。大阪初の御陣御供仕候。其後煩申候に付、世忰源左衞門に家督四百五十石被下。源左衞門に被下候二百石、傳五郎隱居料に被下候。於因州元和四年十一月二十九日、病死。

一〇六、岩根源左衞門。

源左衞門實祖父渡邊雅樂之助、其子源七、周防國下津屋城に罷有候。只今の知高に仕十三萬石計仕候由。秀吉公西國御發向の刻、御敵仕、一家悉く打死仕候。其刻源七子源左衞門、胎內にて殘り、母方に養育仕、其後石川備前ゆかり申候に付、濃州へ連越養置、關ケ原犬山籠城にも召連參候。其後輝政樣被聞召上、雅樂之介父子御存被成候者の世忰不便に思召候間、可被召出旨備前へ和田可心と申者に被仰付被遣候。源左衞門其時は渡邊左彌壽丸と申候。

十五歲輝政樣へ御目見仕候。渡邊の名氏、大阪御城へ聞へ如何敷思召候間、辻九郎次郎と改、武藏守樣へ御奉公仕候へと御意被成、御部屋へ被召仕、武藏守樣備前御入國被成、慶長九年十一月十一日、百五十石被下候。同十七年十月、五十石御加增被下、御兒小生頭に被仰付候。九郎次郎儀、岩根傳五郎養子に被仰付、岩根九郎次郎と申候。大阪兩陣御供仕候。五月七日、落城の刻、城下へ早く參、首一つ打取、御本陣へ持せ差上候。傳五郎隱居仕、家督被仰付、源左衞門と改申候。正保四年十一月九日、病死。

一〇七、岩根周右衞門。寄合組、四百五十石、六十六歲。

寛永八年於因州初て御目見仕、翌年霜月、御兒小生に十三歲にて被召出、本俵四十俵五人扶持被下。其後中小生に罷成、源左衞門死後、家督無相違、四百五十石被仰付候。翌年九月、大小生に被仰付候。慶安四年四月、御馬廻りに被仰付、明曆三年八月十日、口上道郡奉行被仰付、寛文七年正月二十三日、備中郡奉行に御指替被仰付候。寛文十一年九月、御代官頭に被仰付、延寶二年十月十三日、右の御役儀御免被成、忝御意にて、御鐵砲二十御預被成候。貞享元年三月九日、病氣御斷申上候段被聞召屆、御役儀御免被成、寄合組へ御入被成候。

一〇八、子平九郎。延寶二年二月二十四日、九歲にて御目見仕候。

一〇九、稻川主馬。

慶長八年卯十一月十一日、於備前武藏守樣へ被召出、御知行三百石、無役に被仰付候。嫡子左兵衛慶長十九年武藏守樣へ被召出、別知五百石被下候。（左兵衛跡絶申候。）

一一〇、稻川十郎右衛門。（主馬二男にて御座候。）

慶長十四年、武藏守樣へ中小生に被召出、三十俵四人扶持被下候。同十九年、大阪御陣の刻、（大坂川口へ西國より入込候船御押に番船被遣候。菅若狹・岸越中組士共被遣候。）御中小生共御加へ被成候に付、其内に加り參候。同九月末より十月半迄、兵庫に相詰居申候處、十月十九日、姬路より武藏守樣兵庫表へ御發向被成、依之番船不入申、香西兵部組へ入、出陣相勤申候。元和元年五月、大阪御陣の節も兵部組へ入、御陣相勤申候。元和四年、主馬病氣に付、隱居奉願、十一月二十六日、主馬知行無相違、三百石十郎右衛門に被下、寄合組に被成、（主馬には十郎左衛門に被下候御切米、御扶持隱居料に被下候。）正保三年正月二十日、黑母衣被仰付、慶安元年正月、御取次役被仰付、同年十月、御取次御免、御橫目役被仰付。明暦□□（欠字）六月二十八日、御橫目役御免、御城代幷寺社御奉行被仰付、御鐵砲二十被仰付。寛文二年八月十五日、嫡子久右衛門御中小生被召出、同十年九月朔日、十郎右衛門隱居被仰付、家督を久右衛門被仰付。十郎右衛門隱居料に、久右衛門に被下候。給扶持の内、五人扶持被下、天和二年正月九日、八十七歲病死。

一一一、稻川久右衛門。

寛文二年八月十五日、少將樣へ中小生に被召出、四十俵四人扶持被下。同十年、家督無相違三百石被下、大小生役被仰付、安藤杢組に被成候。延寶五年八月三日、御小生役一同に御免、中村主馬組へ被仰付、同年閏十二月二十八日、水野三郎兵衛（組）御鐵砲引廻被仰付候。同六年四月十七日、四十六歲病死。

一一二、稻川久之丞。（水野三郎兵衛組、三百石、二十九歲。）

寛文十一年三月朔日、十五歲少將樣へ初て御目見。同六日、侍從樣へ御目見仕。延寶六年七月五日、跡目無相違、三百石被下候。

一一三、稻川藤八郎。　近習、歩行頭、二百石、三十九歳。

稻川十郎右衛門三男にて御座候、寛文三年十二月二十六日、侍從樣へ御兒小生に被召出旨、池田伊賀申渡。同四年五月二十七日、江戸へ參着仕、同晩御目見申上、本俵四十俵四人扶持被下。同十二年十月六日、日次記被仰付、延寶二年正月十八日、十俵一人扶持御加增被下。同七年六月二十二日、御徒十人御預被成、天和三年、新知二百石被仰付、貞享元年七月五日、御姫樣本多中務太輔樣へ御祝言御供被仰付、相勤申候。同年十月十一日、御預り人川田吉兵衛殿御請取に御評定所へ士中被遣候時も參候。

一一四、市川多兵衛。　織田信長公に仕へ、其後關白秀次公に仕へ、又其後金吾中納言殿にて七百石給り居申候。

其後慶長九年、武藏守樣へ被召出、三百石被下。寛永八年、病死。

一一五、田川勘太郎。　多兵衛子にて御座候へ共、他國させいかやうの樣子にて候や、不及承候。加藤左馬助殿に仕へ、百五十石給候由。

一一六、市川流清。　勘太郎が子にて、多兵衛が孫にて御座候。

祖父の家を繼ぎ、三百石無相違被下。承應二年、二百石御加增被下、福照院樣へ御附被成候。御卒去迄二十年御奉公仕、寛文十二年十月二十八日、御棺の御供仕罷越し、同年、福照院樣御遺物、黃金一枚・御家具十人前、拜領仕候。延寶元年六月二十八日、隱居被仰付、同七年九月四日、病死。

一一七、市川清兵衛。　中村主馬組頭、五百石、四十五歳。

丹羽藏人三男にて御座候。侍從樣へ御附可被成由にて、承應三年九月五日、兒小生に被召出、同月九日、少將樣へ御目見仕、御切米本俵五十俵五人扶持被下、同年極月四日、岡山罷立、同二十二日江戸へ參着、同二十三日、侍從樣へ御目見仕候。明暦元年、市川流清養子に被仰付、寛文十一年、新知百五十石被下、同十二年正月九日、御步行頭被仰付、延寶元年六月二十八日、流清跡知御加增共五百石無相違被仰付、天和元年二月七日、中村主馬組頭被仰付。

一一八、石田伊豫。　荒木攝津守に仕へ、仕置等申付罷有候由。勝入樣・輝政樣へも御目見仕候由。輝政樣高麗へ御船被遣候時分、尼崎より船中兵粮以下迄進上仕、色々御奉公仕候由。

一一九、石田鶴右衛門。是も荒木攝津守に仕へ、其後方々渡り奉公仕申候。御家へ參候迄は、加藤肥後守殿に居申候。

輝政様播州御入國の翌年八・九月比、播州へ參候。十月の比、被召出候。輝政様御存知の者故、知行の究も不被成、兎角脇へ被遣間敷由、忝御意にて罷出候。御目見仕候へば、御鐵砲二十挺被仰付、明る春の比、高七百石餘御座候在所を馬の草飼料仕候へと、被仰付候。其時知行高相違仕候と存、先草飼料御免被下候様にと、色々御佗言申上候へば、武藏守様へ御附被成、御知行も可被下とて備前へ被遣、其後武藏守様殊外御懇被成、御知行も身に當候て千五百石程被下、組鐵砲可被仰付と御內意、其上米・麥など每年拜領仕候。別て難有奉存、御知行所所付を待居申候所、不慮に煩出、御知行可被下以前病死仕候。鶴右衛門心馳の儀、高麗方々にて數度御座候由、播磨にて若原右京相尋被申、則慥成儀十七箇條書上申候様に承候。

一二〇、石田鶴右衛門。正保元年七月二十九日、病死。

一二一、石田鶴右衛門。實は甥にて、石田與左衛門世悴なり。伯父鶴右衛門養子に奉願上、則被仰付。

寛永四年卯、七歲にて少將様へ御目見仕候。正保元年九月十八日、跡知無相違、四百石被下候。寛文元年閏八月七日、宮城大藏組御鐵砲引廻役被仰付候。同七年正月十一日、池田藤右衛門組頭役被仰付、同八年、御町奉行役被仰付、延寶六年の秋迄、十二年相勤申候。延寶八年九月十五日、御町奉行御免、御足輕二十人被仰付候。天和元年十二月十九日、六十歲病死。

一二二、石田安右衛門。

跡目無相違四百石被仰付。天和三年閏五月十四日、草賀宇右衛門組の御鐵砲引廻役被仰付、同年十月五日、四十一歲病死。

一二三、石田孫六。草加宇右衛門組、百俵十人扶持。二十五歲。 兄安右衛門病死仕候に付、私に百俵十人扶持被下候。

一二四、石田與左衛門。初の鶴右衛門が次男、後の鶴右衛門が弟なり。

武藏守様の御供仕大阪兩度御陣相勤、似合の高名仕候。其節敵の鑓を打取申候。其鑓宮城筑後所に其節は有之由。尼崎へ宮城・筑後被遣候節、攝津

國道中一揆御座候樣取沙汰申に付、武藏守樣御意無御座候へ共、筑後組付の內、服部與兵衛・鶴右衛門・與左衛門、右三人筑後同道仕罷越候。早々取合申段御感被成候由。寛永二十一年申九月十四日、隱居被仰付、三百石無相違養子彌次右衛門へ被下。正保三年戌九月八日、五十六歲病死。

一二五、石田彌次右衛門。 岸藤右衛門組士鐵砲引廻、三百石、七十歲。

實は、大原孫左衛門子なり。寛永十九年、與左衛門養子に被仰付、同年九月、少將樣へ御目見仕候。明曆元年升改御川、伊喜三郎と兩人に被仰付、二十七年相勤申候。寛文十一年十二月、池田藤右衛門組御鐵砲引廻役被仰付候。延寶元年丑十一月十九日、池田七郎兵衛組士鐵砲頭役被仰付、并平御物成御用相勤可申由にて、御役料六十俵、人足三人分四十五俵拜領。同六年九月九日、岸右衛門組へ組替被仰付、役儀同前。同年簡略の顯申上、願の通被仰付、士鐵砲の組頭并平御物成御用指上申候。貞享二年九月朔日、士鐵砲の組頭被仰付。

一二六、子孫助。 御目見仕候年月、失念仕候。

一二七、石尾善左衛門。 善左衛門、父を荒木志摩、法名安志と申候。關白樣にて五百石被下、小生被仰付、其後寺澤志摩守にて千石被下、喧嘩仕果申候。

一二八、石尾善兵衛。 鹽川源介方へ養子に參候て、鹽川善兵衛と申候。源介父は鹽川伯耆守と申候。

元和八年、源介病死仕候。源介病死の節、源五左衛門胎內に居申、翌年、出生仕候に付、御知行源五左衛門に被下候樣にと、奉願候處、源五左衛門十五歲迄、名代仕候へと被仰付候。寛永四年十月二十九日、善兵衛果申候に付、御知行源五左衛門に被下候。

一二九、石尾喜六。 組外、百五十石、六十歲。

寛永十三年子、十一歲にて兒小生に被召出、少將樣へ御奉公仕候。

西と申女、私祖母にて御座候。御切米本俵 十俵五人扶持被下候。西、寛永十七年病死仕候。跡目二十俵二十人扶持、鹽川源五左衛門母に被下候。三十俵三人扶持、私に被下候。

寛永十九年十二月、江戸へ御供に參申候。於江戸侍從樣へ、寛永二十年正月、始て御目見仕候。慶安二年、光巖樣被仰付、御式臺御番被仰付、萬治元年御納戸役被仰付、寛文四年十月、御知行百五十石被下候。同十二月、御歩行頭被仰付候。延寶八年十一月、足輕御請御奉公御斷申上候處、十一月十六日、御赦免被成、組外被仰付。貞享二年十一月二十三日、養子の儀奉願候處、中川源五左衛門二男被仰付、十二月朔日、石尾善五郎に相改御目見仕候。

一三〇、井上藤助。組外、二百石、六十五歳。高會祖の事不存候。

一三一、父井上勝介。長谷川丹波守殿にて三百石賜申候。慶長七年、丹羽守殿死去、跡絶申候に付、浪人仕候。慶長八年、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。元和六年、於因州五十三歳病死。私、跡目無相違二百石元和八年被仰付候。御毛見御代官、其外、大阪御米拂升奉行など被仰付候。延寶四年十月十五日、京銀十四貫五百目拜領仕、御勘定奉行被仰付、爲人代御米四十四俵二斗・御扶持方三人六分、天和二年正月二十一日迄被下候。同六年、札遣被仰付候に付、札上奉行同七年正月八日被仰付、右爲骨折、御米六十俵宛天和二年正月二十一日迄被下候。天和二年正月二十一日、御勘定奉行銀札上奉行共御免被成、組外に被仰付候。

一三二、子源介。寛文十一年、少將樣へ御目見。延寶元年、侍從樣へ御目見仕候。

一三三、茨木藤右衛門。若年に筒井順慶に奉公仕候。其後堀尾帶刀に奉公仕、其後石田治部少輔に奉公仕候。治部少輔落去以後、武藏守樣へ被召出、四百五十石被下、母衣被仰付候。元和六年六月朔日、於因州病死。

一三四、茨木彌一右衛門。若年の時少將樣へ被召出、三百石被下、藤右衛門跡目四百五十石被下、其後御加增二百石被下、都合六百五十石被下候。寛永十九年三月十九日、病死。

一三五、茨木安大夫。稻葉四郎右衛門組鐵砲引廻、四百五十石　四十八歳。

寛永十九年八月、跡目四百五十石被下、加増地被召上候。寛文十年八月二十七日、若原監物組御鐵砲引廻被仰付、同年十二月四日、學校肝煎役被仰付、延寶元年七月十二日御免。同五年八月朔日、稲葉四郎右衛門組に被成候。

一三六、予 清 吉。

延寶六年三月十五日、侍從樣へ初て御目見仕、同八年二月十五日、少將樣御茶取に被召出、御直に左大夫と名御付被下候。同年九月二十六日、御側兒小生に被仰付、六十俵四人扶持被下候。天和三年五月四日、侍從樣御茶取に被仰付、貞享元年二月晦日、御側兒小生に被仰付候。同年御城日記御用被仰付。同二年二月四日、日記御用御免。

一三七、今 西 助 左 衛 門。

一三八、今 西 利 兵 衛。 公方光源院義輝公に奉公仕候。

美濃池尻にて輝政樣へ被召出候。關ヶ原陣御供仕候。慶長六年十一月三日、於姫路百五十石被下候。大阪御陣の節御供仕候。此時半之丞も召連參候由。寛永十四年十月四日、八十二歳病死。

一三九、今 西 半 之 丞。 跡目百五十石無相違被下候。寛永十九年九月十四日、四十五歳病死。

一四〇、今 西 半 内。 草加字右衛門組鐵砲引廻、二百五十石、五十二歳。

父跡知無相違被仰付、慶安三年九月、馬扶持拜領仕候。毛見御代官など相勤申候。寛文二年十月十九日、大小生被仰付、於御前母衣絹拜領仕候。同四年十一月十七日、松平五郎八樣御出世被成、公方樣へ初て御目見被成候御祝儀使者に江戸へ被仰付、御老中樣方共外方々相勤申候。同六年三月八日、侍從樣御煩に付、宮崎玄提迎に參、同道仕罷歸、逗留中會所へ相勤、四月二十六日、玄提送り上り、五月五日罷歸。同年七月十二日、江戸御使者被仰付、紀州樣御內小川拙齋御呼下被成、御當地に緩々と御留被成候に付、大納言樣へ御斷に被遣候。同七年三月十六日、江戸へ御供仕、八月十四日、江戸より伊豆の伊藤(東カ)へ少將樣御湯治被成候に御供仕候。同九年三月十九日、御加增百石被下、大阪御藏屋敷御留守居御用被仰付、同二十七日、岡山出船仕罷上り、御足米御扶持被下候。馬扶持も被下候。大

阪御用年々御斷申上候に付、延寶八年四月御赦免被成、岸藤右衞門組に御入被成候。天和元年十一月十一日、草加宇右衞門組御鐵砲引廻役被仰付、此節又馬扶持被下。同三年五月晦日、江戸へ御使者被仰付候。是は榊原虎之介様へ御繼目の御禮被仰上候御祝儀なり。

一四一、子辰右衞門。　延寶二年三月、於大阪十三歳初て御目見仕。同八年九月二十七日、十九歳病死。

一四二、石川久左衞門。

先祖の氏は丹後の一色の由申傳候。荒尾前の祖閑と申者の弟にて御座候　荒尾美作守に謀有候。美作守殿御息小太郎殿、遠州味方原にて合戰に打死被仕候に付、其後荒尾志摩方に浪人分にて罷有。

一四三、石川八兵衞。　慶長八年、武藏守様へ被召出、百五十石被下候。寛永八年病死。

一四四、石川善右衞門。

跡目無相違百五十石被下、御毛見御代官被仰付候。寛永十九年、郡奉行役被仰付候。慶安元年に御免。同三年、若原監物組鐵砲引廻役被仰付、承應三年又郡奉行被仰付、寛文五年迄相勤申候。寛文五年正月二十三日、御加增百石被下、御足輕十五人御預け、御普請奉行被仰付候。同九年極月朔日、六十三歳病死。

一四五、石川又五郎。　伊木兵庫組、百五十石、四十歳。

承應三年、少將様へ御目見、萬治三年、侍従様へ御目見仕。寛文十年三月四日、跡知本知百五十石被仰付、勝手不如意に付、御斷申上、延寶六年より萬成村へ在宅仕罷在候。天和三年閏五月十四日、伊木兵庫組に被仰付。

一四六、母方祖父今田三右衞門。　祖父牧野平右衞、本多甲斐守殿に奉公、其後浪人、病死。儀左衞門が父、牧野重兵衞、本多中務殿に奉公、其後浪人、病死。

生駒讃岐守殿にて四百石被下候處、浪人仕。慶長十五年、武藏守様へ被召出、早川猪兵衞名知百石被下、同十八年十一月七日、御折紙被下、寛永十三年七月、病死。

一四七、今田儀左衞門。　伊木兵庫組、百石、六十五歳。

一歳より三右衛門養子に仕、三右衛門跡目無相違百石被下、十五歳にて御目見仕、承應二年二月在宅仕、寛文元年岡山へ罷出、同十二年九月十九日、福井村へ在宅仕罷有候。代々監物組に居申候。天和二年閏五月十四日、伊木兵庫組に被仰付。

一四八、子 今田茂大夫。別に出る。八十俵四人扶持、三十七歳。

寛文元年七月朔日、初て御目見仕。同年八月二十三日、備後守様・丹波守様御寄子に被遊、少將様へ兒小生に被召出、同二十四日、御禮申上候。本俵三十俵四人扶持被下候。同二年十一月、御近習兒小生に被仰付、同七年正月二十三日、本俵十俵御加增被下候。同十二年九月二十一日、御加增今俵十八俵被下、都合八十俵に成申候。天和三年閏五月十四日、宮城大藏組に被仰付、同年十月十八日、御弓組に被仰付、丹羽七郎左衛門組に御入被成候。

一四九、生駒喜介。信長公に奉公仕、尾張の内ひみつと申所、領知仕居申候。

一五〇、生駒長右衛門。

織田常眞に罷有候。長右衛門嫡男生駒半左衛門も織田常眞に居申候。輝政様御家來和田八郎は、半左衛門舅にて御座候に付、見廻に參候へば、勝入様被聞召、長久手御陣へ御供候へと御意にて御留被成、御供仕、勝入様御打死の時、打死仕候。

一五一、生駒市兵衛

長右衛門次男にて御座候。母方の叔父、長田喜左衛門と申者の方へ養子に參候處、半左衛門戰死仕候に付、親長右衛門方へ立歸、生駒の名跡を繼申候。蜂須賀阿波守殿にて、三百石被下居申候。其後稻葉侍從殿に居申候處、阿波守殿御構にて歸參仕候。兩度の高麗陣御供仕候。後の高麗陣に南門の城攻、うるさんの後巻の時働申候由、歸陣の後又暇申、筑前中納言殿にて三百石被下候由。

慶長八年、武藏守様へ被召出、二百石被下、大阪兩度御陣に御供、御先手にて働申候段、齋藤織部・舟戸帶刀申上候に付、忝御意の旨、兩人申聞候。兩人は其節軍奉行にて御座候由。正保四年、隱居願の通被仰付、慶安元年五月二十九日、七十三歳病死。嫡子を善大夫といふ。於因州病死。

一五二、生駒市兵衛。
先市兵衛二男に而御座候。正保四年家督無相違二百石被下候。明暦四年四月十三日、於備前病死。

一五三、生駒市兵衛。學組、二百石、三十八歳。
明暦四年六月、跡目無相違二百石被下候。寛文十一年三月、學校御用被仰付。

一五四、生駒加右衛門。六十二俵四人扶持、六十八歳。
生駒市兵衛三男にて御座候。萬治三年被召出、九月九日御禮申上候。本俵四十俵四人扶持被下候。養子庄助は、池田伊賀家来石田十兵衛弟にて御座候。養子に奉願候處、被仰付、萬治三年初て御目見仕候。延寶元年九月、中小生に被召出、四十五俵四人扶持被下、其後中奥詰御腰物奉行被仰付候。天和元年三月、御改易被仰付。

一五五、生駒惣左衛門。土肥飛彈組、四十七俵四人扶持、六十三歳。
生駒市兵衛四男にて御座候。明暦二年正月八日、侍從樣へ十人者に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下候。其後御供横目、兩年相勤申候。萬治三年正月、中小生に被仰付、寛文二年霜月二十二日、本俵五俵御加增被下候。明暦二年より延寶五年迄の內、江戸へ八度罷越候。延寶五年八月、御中小生御免、芳賀內藏允組へ御入被成候。貞享元年二月四日、土肥飛彈組へ當分御入被成候。

一五六、千勘介。十歳にて延寶六年正月十五日、御目見仕候。

一五七、生駒攝津守。信長公に奉公仕、尾州生駒庄領知居城仕候由。

一五八、生駒將監。
攝津守嫡子にて御座候。攝津守果候後、蒙御勘氣、瀧川左近殿へ御預け被成候。播州神吉の城にて打死仕候。

一五九、生駒左近。
二歳の時將監打死仕候に付、羽柴藤五郎殿へ御引取、案楽にて成長仕候。十七歳堀尾山城殿へ罷出候處、風祓半平と申者、今一人と致口論、相手兩人切殺立退申候。

以後武藏守樣へ被召出、三百石被下、少將樣御幼少の時、江戸へ御證人に御越被成候刻、御供被仰付、御加增二百石被下、其後兩度御加增にて、都合千石被下候。私に曰、左近死後家督無相違、嫡子生駒玄蕃に被仰付て、次第昇進して、大小生頭となり、勤仕しけるが、正保四年正月二日、萩原又六と口論せしによりて、同月七日、御改易家絶ゆ。委しくは紀事に記す。合せ見るべし。

一六〇、生駒彌五右衛門。生駒將監が子にて、左近が弟なり。
十三歲にて武藏守樣へ被召出、大阪兩陣御供仕候。元和元年、二百石御折紙被下候。寬永九年七月二十九日、於因州病死。

一六一、生駒彌五右衛門。
跡知無相違被仰付、寬文三年九月二十九日、病死。

一六二、生駒彌右衛門。丹羽平大夫組、二百石、三十六歲。
跡知無相違被仰付候。

一六三、生駒權內。生駒左近が二男、生駒玄蕃が弟なり。
十三歲少將樣へ兒小生に被召出、其後三百石被下。延寶七年六月二十三日、山崎大膳組に被仰付。天和三年九月二十九日、七十二歲病死。

一六四、生駒新兵衛。山崎大膳組、二百石、三十二歲。
權內養子にて、實は伊東玄太郎殿家來、仙石平左衛門が二男なり。延寶七年正月十八日、權內養子に被仰付、天和三年十二月二十一日、跡目二百石被下。

一六五、市橋織部。
生國濃州池田郡の內市橋、不破河內守殿に罷有候刻、江州箕作の城・越前府中の城御陣の節、手をも爲申候。
輝政樣濃州池尻に被成御座候節被召出候由、八十五貫文の折紙、天正十二年八月九日頂戴仕候。於參州吉田天正十八年十月十八日、六十石餘の御加增被下、合百六十石餘の御折紙被下、於姬路慶長六年十一月三日、御加增被下

太左衛門、加藤にて高麗陣供仕、番船乗取候時、於船中矢手二箇所負申候。南の門の夜攻、其外働前後鼻数三十八上げ申候。西尾殿に居申候節大阪陣に供仕、國遣口にて物見に先へ參候へば内よりすはだ者一人出候を打取申候。

三百石の御折紙被下候。

一六六、市橋太左衛門。

輝政樣岐阜に御座候時被召出、於吉田百石被下、其後三十石御加増被下、其後吉田にて御暇申上。稲葉藏人殿に罷出二百石給る。其後

加藤左馬殿へ出候て三百石取申候。其後原隱岐殿にも三百石給り候。其後西尾豐後殿にて三百石に無隠二十挺預り申候。其後竹腰山城同心に出三百石取申候。其後浪人にて正保三年十二月七日、於備前病死。

一六七、市橋平太左衛門。

元和八年十一月二十一日、祖父織部病死。跡目三百石無相違被仰付、正保元年十一月八日、病死。

一六八、市橋平之丞。

跡目、百五十石被下候。平之丞眼病煩申候に付、御知行指上申候。市橋は年久敷者に候間御潰し被成候事不便に被思召候へ共、市橋の一類無御座候、慶安元年十二月二十三日、病死。

一六九、市橋孫右衛門。池田七郎兵衛組、六十二俵五人扶持、六十七歳。

平之丞母の弟にて御座候に付、別格に可被召出旨、慶安元年十月朔日被仰付、六十二俵五人扶持被下候。同二年二月朔日、御目見仕、中小生に被仰付、延寶五年御馬廻りに被仰付、丹羽平大夫組に御入被成候。

一七〇、子孫二郎。十一歳。

寛文六年二月十五日、初て御目見、同年十一月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

孫右衛門實方祖父森儀兵衛は淺井新八郎殿にて知行五百貫文被下候。新八殿死後、子息田宮殿に罷有、田宮殿死後浪人仕、土倉四郎兵衛にかゝり居、慶長十六年正月二十四日、於播州病死。孫右衛門實父土倉四郎左衛門は、土倉四郎兵衛甥にて御座候に付、四郎左衛門世悴の時分、證人に成、秀吉公へ參居申候。其後土倉市正召仕、二百五十石くれ申候。小田原陣に市正供仕、關ヶ原にて淺黄者首二つ打取、大阪陣にても淺黄者首二つ取申候。寛永二十年三月十六日、於備前病死。

本書に十八年とあれども、大阪陣に首二つ取るとあれば、二十年と改しなり。四郎左衛門跡目、私兄土倉角兵衛に無相違淡路申付候。角兵衛病死、世悴市左衛門に跡目、無相違申付候。

一七一、飯田半衛兵。織田常旨にて端城預り居中、後浪人、於京病死。

一七二、飯田勘右衛門。金吾中納言殿に罷有、家斷絶以後、三河守様へ被召出、慶長二年正月二十三日、十石被下、折紙于今所持仕、良正院様被仰。

慶長八年十月六日、輝政様へ浪人分にて被召出、三百石被下、寛永九年十一月十八日、於備前病死。

一七三、飯田忠左衛門。 跡知無相違三百石被下。寛永十九年七月四日病死。

一七四、飯田傳右衛門。

寛永十九年午八月、跡知の內二百石被仰付。正保四年亥正月十五日、七歳にて織田の御禮申上、寛文元年、權現様御祭禮流鏑馬相勤、同八年十一月二十九日、學校御横目役被仰付、同十年、御免被成、天和三年閏五月朔日、四十三歳病死。

一七五、飯田傳右衛門。草加宇右衛門組、二百石、十四歳。

實は奥山久兵衛次男なり。延寶四年八月二日、傳右衛門願の通私五歳の時養子に被仰付、天和三年七月二日、無相違二百石被仰付。

一七六、石黒甚右衛門。

輝政様御代被召出、於備前武藏守様より高二百石の御折紙、慶長十八年十一月七日、御加增五十石被下、同十九年大阪御陣の節は、甚右衛門病氣にて御供不仕候。祖父久兵衛御供仕候。甚右衛門へ大阪御陣所より御達書兩通頂戴仕、于今所持仕候。

一七七、石黒久兵衛。

跡知無相違、二百五十石被仰付、年月不存候。寛永七年十一月十九日、御加增五十石被下。承應元年霜月四日、病死。

一七八、石黒平內。

寛永十四年御中小生に被召出、二十五石五人扶持被下。慶安元年霜月、久兵衛隱居被仰付、隱居料五人扶持被下、跡式無相違三百石平內に被下。承應三年大小生役被仰付、寛文二年、御小生組の御鐵砲引廻被仰付、同四年六月二

十九日、病死。

一七九、石黑藤兵衛。伊木頼母組、三百石、四十七歳。

明暦元年正月十五日、少將様へ初て御目見、十八日御兒小生に被召出、御切米三十俵四人扶持被下。寛文四年八月二十二日、跡目無相違三百石被仰付、大小生役相勤申候。

一八〇、子久七。九歳。延寶四年五月朔日、侍從様へ御目見仕候。

一八一、今枝忠左衛門。後は内膳と云。

犬山にて勝入様へ被召出候。攝津國へ御處替の時、輝政様尼崎に被成御座候に付、御附被成候。其後濃州へ御處替其後參河へ御處替被成候。御知行二百五十石・寄騎十人・御持弓十人御預被成、御城代被仰付候。播州へ御處替被成、五百石に被成下、寄騎・御持弓同前、名を今枝内膳に被成候。其後子細御座候て浪人仕、法體仕閑齋と申候。武藏守様御意の趣、芳賀内藏允申聞候ば、御國へ子共召連參候へと御意御座候に付罷越、金川に罷在候。慶長十六年九月十八日、於金川閑齋病死。

一八二、今枝孫兵衛。

武藏守様へ被召出、少將様備前へ御入國、寛永十一年、二百五十石被下候。明暦二年七月二十一日、病死。

一八三、今枝孫兵衛。伊木頼母組、二百五十石、五十二歳。

明暦三年七月十三日、養子に被仰付候。養父孫兵衛、女は實父と從弟にて御座候。跡知無相違二百五十石被下候。寛文十二年、學校子共横目御用被仰付、延寶三年迄勤申候。延寶八年閏八月、伊木頼母預御鐵砲引廻被仰付候。

一八四、子孫六。

天和三年八月朔日、二十五歳にて御目見仕候。實祖父長屋善左衛門子細不存候。實父藤藏、作州森中將殿にて三百石被下、小生役仕候。内記殿御代に浪人仕候。寛永十三年二月十七日、病死仕候。

一八五、市原六右衛門。
勝入樣犬山に御座候時分、六右衛門親より御奉公仕候由。
一八六、市原加右衛門。
武藏守樣參河國にて御部屋住の時、被召出候。播州にて百七十石被下、於因州寛永七年午二月二十五日、病死。
一八七、市原五右衛門。　加右衛門嫡男なり。
寛永七年跡知無相違百七十石被下候。同十三年六月二日、於備前病死。
一八八、市原九郎兵衛。　加右衛門次男にて、五右衛門弟なり。
五右衛門子無御座候に付、弟九郎兵衛被召出、御家久敷者故無相違百七十石被下候。承應元年、江戸御留守番に參
十月十八日、於江戸病死。
一八九、市原九郎兵衛。　伊木頼母組、百七十石、四十五歳。
承應元年跡知無相違百七十石被下。
一九〇、子定之介。　延寶七年五月五日、初て御目見仕候。
一九一、岩井藤兵衛。　小野木縫殿の助にて千石賜はり、其後備前中納言にても千石賜り、其後黑田甲斐守殿にて七百石賜り候。　於播州輝政樣へ被召出五百石被下、元和八年五月二十五日病死。
一九二、岩井九郎左衛門。
跡目無相違五百石被下、承應三年、熊澤助右衛門組頭役被仰付候。萬治元年十一月十二日、病死。
一九三、岩井源四郎。
明暦三年九月、侍從樣へ被召出、五十俵五人扶持被下、萬治元年閏十二月二十六日、跡目無相違被仰付、池田主稅樣御組へ御入被成候。寛文九年神圖書組頭役被仰付、天和二年四月十日、五十三歳病死。

一九四、岩井小平次。浮組、五百石、十九歳。

天和三年八月三日、跡目無相違五百石御付候。

一九五、伊藤傳介。信長公にて五千貫被下、尾張國山名在城仕候。播州おとごの城にて打死仕候。

一九六、伊藤傳右衛門。

三歳の時、親傳介打死仕候に付、母の縁を以、岐阜にて勝入様へ被召出、百五十石被下、其後五十石御加増被下、播州へ御入國の後、池田加賀へ御附被成、於因州病死。二男善右衛門に跡目無相違被下、其後善右衛門病死仕、子無御座絶申候。

一九七、伊藤佐五右衛門。傳右衛門嫡子にて御座候。

傳右衛門存命の内、別知に二百石輝政様より被下、大阪兩陣相勤、於因州病死。

一九八、伊藤佐五右衛門。

寛永四年八月朔日、跡目無相違被仰付、寛文九年、池田主税様御組の御鐵砲引廻被仰付、貞享元年三月十九日、七十歳病死。

一九九、伊藤李兵衛。浮組、二百石、三十九歳。

六月十一日、跡目無相違二百石被下候。

二〇〇、石黒孫左衛門。信長公御下知に隨、尾州戸田に居申候由。

二〇一、石黒小十郎。後武左衛門と申候。

十六歳の時、森寺政右衛門申上候て輝政様へ兒小生に被召出、百石被下。攝州花熊御陣に御供仕手負申候由。段々御加増被下、四百石被下候由。森寺政右衛門相果、養子主水幼少に付、武左衛門儀は政右衛門顆子故、主水後見仕專立候様にと、輝政様被仰付、後迄主水家に罷有候。關ヶ原御陣の刻も主水若年故池田備中様御供仕、働き御座候由、播州へ御入國被成、輝政様御意を以加増被下八百石に成申候。於播州病死。跡目嫡子石黒庄兵衛相繼、池田下總内に家老仕居申候。

二〇二、石黒後藤兵衛。（右武左衛門三男。）

元和五年、下方覺兵衛申上、少將樣へ御歩行に被召出、二十五俵四人扶持被下、以後兩度御加增被下、都合六十俵拜領仕、中小生に被仰付、寛文十二年迄少將樣江戸御供に十八度參候。寛文元年、御長柄奉行被仰付、同八年九月替り指物被仰付、御近習に被仰付、天和三年六月二十三日、八十七歳にて病死。

二〇三、石黒後藤兵衛。（浮組、百五十石、三十一歳。田口五左衛門四男にて御座候。私兄小兵衛を後藤兵衛養子に仕候處、後藤兵衛存命の内延寶五年相果申候に付、私を後藤兵衛養子に仕候。）

延寶元年九月、御弓組に被召出、六十俵四人扶持被下、天和元年三月二十八日、御弓組御免被成、神圖書組に御入被仰付、同三年八月十六日、跡目無相違百五十石被下候。

二〇四、石黒六左衛門。（石黒孫左衛門次男にて、武左衛門が弟にて御座候。森寺政右衛門方に百石取居申候、播州へ罷越、百三十石に成申候。）

二〇五、石黒忠左衛門。（六左衛門相果跡目無相違申付、下總方に罷有候。下總相果池田清八代に浪人仕候。）

寛文三年三月、村代官被召出、本俵二十五俵四人扶持被下候。延寶七年九月二十八日、病死仕候。（跡目次男石黒市内へ被下候。）

二〇六、石黒仁兵衛。（稻葉四郎右衛門組、五十俵四人扶持、四十七歳。石黒忠左衛門が子にて御座候。）

萬治三年正月十一日、御歩行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下。寛文二年横目役被仰付、御加增本俵五俵一人扶持被下、同十年、十人組に被仰付、同七年五月二十一日、十一俵御加增被下、中奥に詰申候。都合五十俵四人扶持拜領。貞享二年十月五日、稻葉四郎右衛門組に御入被成候。

二〇七、石川市右衛門。

於岐阜勝入樣へ被召出、輝政樣へ御附被成候。播州にて元和元年五月十二日、病死。

二〇八、石川彦左衛門。

跡目被仰付、御歩行横目被仰付、本俵五俵御加增、三十俵に四人扶持被下候。正保三年七月六日、御中小生に被仰付。慶安三年於江戸新知百五十石被下、萬治三年、年被寄御川筋勤役御訴訟申上候へば御赦免被成、隱居被仰付候

寛文二年十一月朔日、又被召出、御切米三十俵三人扶持被下、御末番被仰付、同四年、中風煩、御切米等指上度と奉願候へば、御番御免被成、御切米被召上、二人御加扶持被成、都合五人扶持にて罷有候。同七年十月二十九日、六十九歳病死。

二〇九、石川彦左衛門。稲葉四郎右衛門組、百五十石、五十三歳。

萬治三年十月十九日、家督無相違被仰付、御弓組御入被成候。寛文六年九月二十六日、御膳奉行被仰付、同十年、御納戸奉行被仰付、延寶六年五月朔日、逼塞願の通仰付、御納戸御用御免被成、御馬廻り稲葉四郎右衛門組に御入被成候。少將樣御意にて天和二年三月二十七日、在宅より被召出、御納戸役被仰付、御扶持十五人被下候。同三年、十五人扶持指上又在宅仕候。

二一〇、子三大夫。十歳。

天和二年三月十五日、御目見仕候。

吉備溫故秘錄卷之七十二（干城二）終

吉備溫故秘錄卷之七十三（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城二（原本干城六）目錄

六九、片山越後。
七〇、片山源左衛門。
七一、片山孫兵衛。
七二、片山勘左衛門。
七三、片山若五左衛門。
七四、河合中務。
七五、河合源左衛門。
七六、河合兵吉。
七七、河合清大夫。
七八、河合源五兵衛。
七九、子　源太郎。
八〇、河合七左衛門。
八一、河合千兵衛。
八二、子　鐵之介。
八三、河合四郎左衛門。
八四、高木左吉。
八五、高木又五郎。
八六、河合助之丞。
八七、河合助之丞。
八八、子　孫左衛門。
八九、笠井太郎兵衛。
九〇、子　平右衛門。
九一、香川但馬。
九二、香川八左衛門。
九三、香川又右衛門。
九四、香川五郎兵衛。
九五、蟹江勘右衛門。
九六、蟹江勘平。
九七、蟹江利右衛門。
九八、蟹江善助。
九九、河瀬五郎左衛門。
一〇〇、河瀬與左衛門。
一〇一、子　伊左衛門。
一〇二、河瀬源兵衛。
一〇三、河瀬五郎三郎。
一〇四、水野式部。
一〇五、蟹江彦右衛門。
一〇六、蟹江治左衛門。
一〇七、蟹江新之丞。
一〇八、子　久五郎。
一〇九、蟹江三郎兵衛。
一一〇、蟹江三右衛門。
一一一、子　小兵衛。
一一二、河崎兵右衛門。
一一三、河崎段之丞。
一一四、河崎九市郎。
一一五、川口久右衛門。
一一六、川口吉左衛門。
一一七、川口忠左衛門。
一一八、川口喜兵衛。
一一九、香西主計。
一二〇、香西又市。
一二一、{香西五郎右衛門。香川縫殿助。
一二二、香西九郎兵衛。
一二三、香西五郎右衛門。
一二四、{子　源八。香西又次郎。
一二五、上泉常陸介。
一二六、上泉治部左衛門。
一二七、上泉佐左衛門。
一二八、上泉龜太郎。
一二九、片山加右衛門。
一三〇、片山加右衛門。
一三一、片岡八大夫。
一三二、子　八郎。
一三三、梶田喜八郎。
一三四、梶田九郎兵衛。
一三五、梶田惣左衛門。
一三六、梶田彦八郎。
一三七、子　惣左衛門。
一三八、神屋兵三郎。
一三九、神屋兵三郎。
一四〇、神屋久次郎。
一四一、神屋兵大夫。
一四二、神屋兵大夫。
一四三、神屋作左衛門。
一四四、神屋松之助。
一四五、武田庄右衛門。
一四六、梶田彦左衛門。
一四七、梶田吉之丞。
一四八、梶田與八郎。
一四九、垣見半兵衛。
一五〇、垣見半左衛門。
一五一、垣見半左衛門。
一五二、垣見半兵衛。

一五三、垣見半兵衛。
一五四、川村彦兵衛。
一五五、川村與九郎。
一五六、子　善二郎。
一五七、加世右近。
一五八、加世七介。
一五九、加世七右衛門。
一六〇、加世八兵衛。
一六一、加世藤三郎。
一六二、河野刑部。
一六三、河野權正。
一六四、河野又兵衛。
一六五、河野金左衛門。
一六六、河野彌平太。
一六七、子　又三郎。
一六八、河野七左衛門。
一六九、河村太郎作。
一七〇、河村源左衛門。
一七一、河村小四郎。
一七二、淡田佐渡。
一七三、安積喜太郎。
一七四、柏尾猪兵衛。
一七五、柏尾半左衛門。
一七六、梶尾六之丞。
一七七、川口仲右衛門。
一七八、川口半右衛門。
一七九、川口三右衛門。
一八〇、川口多左衛門。
一八一、梶田喜八郎。
一八二、梶田次郎大夫。
一八三、梶田喜八郎。
一八四、梶田五兵衛。
一八五、梶田喜左衛門。
一八六、河田助右衛門。
一八七、河田次郎八。
一八八、河田助右衛門。
一八九、河田助左衛門。
一九〇、金森安右衛門。
一九一、金森權左衛門。
一九二、金森安右衛門。
一九三、子　安兵衛。
一九四、加藤喜右衛門。
一九五、加藤甚右衛門。
一九六、加藤次郎左衛門。
一九七、加藤次郎左衛門。
一九八、河田吉兵衛。
一九九、河田忠兵衛。
二〇〇、河田杢右衛門。
二〇一、糟谷正藏。
二〇二、糟谷茂左衛門。
二〇三、糟谷茂左衛門。
二〇四、香取。
二〇五、先祖　香取修理大夫橘朝臣忠供。
二〇六、香取修理佐橘勝家。
二〇七、香取隼人佐橘勝利
二〇八、香取土佐。
二〇九、香取兵左衛門。
二一〇、香取儀右衛門。
二一一、香取儀右衛門。
二一二、香取七之進。
二一三、香取六之進。
二一四、吉田孫六。
二一五、吉田與三兵衛。
二一六、加藤文大夫。
二一七、片山大學。
二一八、片山治左衛門。
二一九、片山五郎兵衛。
二二〇、片山文七。
二二一、養子　園之丞。
二二二、加納小左衛門。
二二三、加納覺右衛門。
二二四、加納小左衛門。
二二五、神戸喜左衛門。
二二六、神戸喜左衛門。
二二七、神戸喜左衛門。
二二八、神戸佐右衛門。
二二九、神戸佐右衛門。
二三〇、子　權十郎。
二三一、神戸八左衛門。
二三二、子　權之丞。
二三三、加々野勘右衛門。
二三四、加々野吉大夫。
二三五、加々野又三郎。

吉備溫故秘錄卷之七十三(干城二)目錄終

吉備溫故秘錄　卷之七十三（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　二（原本干城六）

一、川村次郎左衞門。安藤伊賀守に仕へ、二百貫給り、於播州神吉城打死。

二、川村内助。次郎左衞門打死仕、跡目無相違賜り、伊賀守に仕へ居申候。天正十年六月二日、信長公御果被成候に付、同八日稻葉伊豫守城へ取掛打亡申候。其節祖父内助打死仕候。

三、川村内助。祖父内助打死の時、十一歳の由、石川備中守犬山拜領被仕候時、被呼出、百五十俵給候。明る年、三百石分とて、二百二十俵賜候。慶長五年、犬山城渡し申迄罷在候。

慶長五年九月十四日、美濃國野上に輝政様御人勢御立被成候時被召出、二百石被下候。武藏守様播州より備前へ御入國の時、二割御加增被下二百四十石拜領仕候。七十八歳にて隱居被仰付、萬治三年子四月十二日、八十九歳にて病死仕候。

四、川村平太兵衞。近習持弓頭、勘定奉行、五百石、六十八歳。

慶安二年丑二月朔日、父隱居、家督無相違被下候。明曆三年正月十一日、六十石御加增被下、寛文三年正月十三日、職知二百石被下。同七年正月十一日、職知指上申度と願候て差上候。同年二月御加增百石被下、寛文十二年九月十五日、主税様御家老に被仰付、百石御加增被下、都合五百石拜領仕候。

五、梶浦太郎兵衞。勝入様犬山御在城以前より、御奉公仕由。

六、梶浦久藏。後には勘兵衞と改、後に大隅と申候。

勝入様犬山御在城の時、十六歳にて御小生に被召出、天正三年五月、三州長篠合戰の時、森寺政右衞門物見に參候に同道仕首取申候。天正八年七月二日、攝州花熊城攻の時、森寺政右衞門しのびに參候時、同道仕首取申候。花熊城御攻被成候て引可被成と思召候時、勘兵衞御諫申上候て城乘取候事、天正十二年長久手敗軍の時、引取候首尾能候由。輝政様御感の由。慶長五年美濃新加納川御城□□（欠字）からせ候時、勘兵衞・山脇源大夫兩人參らせ申候。勘兵衞岐阜に

て三百石、吉田にて六百石、姫路にて千二百石。武藏守御奉仕、備前へ參候時、千七百石被下候。其後二千石に被成被下由候に付、西浦彌左衛門・高桑忠右衛門兩人を御直參に被成、百五十石宛被遣被下候樣にと奉願、其通に被仰付候。

七、梶浦大隅。

輝政樣へ吉田にて被召出、新加納川合戰の時、十八歲にて首取申候由、播州御入國の時、二百石被下。備前にて百石御加增被下候。慶長十八年、祖父大隅病死、跡知無相違千七百石、御鐵砲三十挺被仰付候。同十九年、大阪御陣の時、相組の外に士六騎御增し御預被成、二の御備に被仰付候。二十年、大阪落城の時、すはだ者の首十五打取指上候。正保元年江戸御留守御番に參、於江戸六月二十七日、病死仕候。六十一歲。

八、兄梶浦勘兵衛。　父跡知無相違被仰付、名も大隅と改申候。正保三年七月八日御改易。

九、梶浦勘介。　鐵砲頭、五百石、五十六歲。

慶安元年七月二十一日、少將樣被召出、六十石宛兩年被下、同三年九月朔日、五百石御折紙被下、延寶七年六月二十一日、御先筒足輕二十、御預け被成。

一〇、子傳吉。　寛文十一年三月十一日、七歲にて御目見仕、同年六月五日、侍從樣へ御目見仕候。

一一、梶浦平十郎。　初め大隅が二男。後に兵左衛門と申候。又杢之允と改、後由意。

慶長八年、武藏守樣へ被召出、同九年、百俵に十人扶持被下候。同十八年、曾祖父大隅病死。跡目千七百石祖伯父大隅に無相違被仰付、祖伯父大隅に被下候。四百石平十郎に被下候。後兵左衛門と名かへ申候。大阪兩度の御陣相勤申候。卯の年御陣にすはだ者の首一つ取申候。後に少將樣御意にて杢之允と名かへ申候。慶安二年正月、隱居被仰付、法體仕由意と申候。

一二、梶浦兵左衛門。

慶安二年正月、家督無相違四百石被下、延寶元年、病氣に成、家督私に無相違被仰付候。

一三、梶浦平四郎。丹羽平大夫組、四百石、四十三歳。
承應元年、御目見仕、延寶元年極月、父家督無相違四百石被下候。弟の夫兵衛養子に仕度旨奉願候、願の通被仰付、延寶八年三月三日御禮申上、貞享元年二月八日、夫兵衛病死。松田與三右衛門二男藤之丞を養子に仕度奉願候、願の通被仰付、貞享二年六月朔日、御禮申上。

一四、菅惣兵衛。生國淡州洲本、秀吉公御代兵庫に罷在候。淡路國取合幷高麗陣にも、心馳仕候由。

一五、菅小左衛門。
淡路國、高麗陣少々心馳も仕、手も負申候由。輝政様へ於播州被召出、四百石被下候。三四年後惣兵衛も被召出候、三百石被下候。輝政様御逝去以後武蔵様播州へ御入國の時、新參者御暇被遣候に付、惣兵衛も御暇被遣候。慶長十二年、伏見より駿河へ御荷物廻り候奉行被仰付參候。駿河清水にて、島津殿衆此□（欠字）加子の者四人五人に手を負せ、江尻へ引取申候、其節少左衛門陸に居候て承付、島津衆の船へ飛入、士一人下々四五人切殺し、士一人舟梁にからめつけ名乘候て罷歸候。其後小左衛門切腹、三十一歳。

一六、菅角左衛門。小左衛門果候時三歳、九郎太郎と申候。
跡知無相違四百石被下候。寛文六年十月六日、隱居被仰付、同九年九月二十九日、病死。六十五歳。

一七、菅彌四郎。寄合組、四百石、五十歳、實父を成田（後に瀨崎と改）七郎兵衛といふ。
慶安二年二月六日、十四歳、少將様へ御兒小生被召出、本俵三十俵四人扶持被下。承應元年、十俵御加増被下。同年十一月十二日、菅角左衛門養子に被仰付。萬治□年新知百五十石被下。寛文四年九月二十五日、五十石御加増被下同六年十月六日、角左衛門隱居、家督無相違四百石被下。

一八、子源四郎。延寶三年正月十五日、九歳、侍從様へ御目見仕候。

一九、加藤市右衛門。尾州中島郡淺宮と申所、一在所、領知仕居申候由、

二〇、加藤次右衛門。 淺井信濃守殿に居申候。濃州竹が鼻陣の節、淺井傳兵衛殿手負申候。翌年中合戰竹が鼻へ信濃殿取懸被申候刻、鑓を合深手負申候に付、信濃殿伯父ながら、家老淺井玄蕃と申者、次右衛門所に三十日仕置、養生被申付、信濃殿も切々見廻被申候由、信濃殿病死の後、子息田宮殿代迄居申候。

尾州長久手合戰の砌、勝入樣へ被召出、紀伊守樣へ御附被成候。三州吉田にて輝政樣より前池田出羽に御附被成、二百六十石賜候。下津井にて病死。

二一、加藤次右衛門。 若狹の時、一柳監物殿へ被召出、其後立退。

慶長九年、武藏守樣へ被召出、百五十石被下。正保四年正月二十一日、御母衣被仰付、御加增五十石被下。萬治三年三月十六日、病死。七十七歲。

二二、加藤與一左衛門。

承應二年五月朔日、少將樣へ被召出、四十俵四人扶持被下。萬治三年六月十五日、次右衛門跡目百五十石被下。延寶二年九月二十日、五十六歲病死。

二三、加藤平之丞。 中村主馬、百五十石、二十二歲。

延寶二年十二月十五日、與一右衛門跡知、無相違百五十石被下候。貞享元年、私大切に相煩候に付、同姓甚右衛門二男牛之助、養子に願候處、被仰付候。

二四、子牛之助。 貞享二年六月朔日、九歲にて御目見仕。

二五、加藤甚右衛門。 寄合組、三百石、六十一歲。後の加藤治右衛門が子にて、別家なり。

慶安三年十一月被召出、御祐筆被仰付、四十俵四人扶持被下、明曆二年十二月朔日、二百石被下、御近習を被仰付。萬治元年十一月十五日、御加增百石被下、都合三百石拜領仕。寬文九年春、指物御羚被下、御祐筆頭被仰付、同十二年、御旗の者十人御預り。

二六、子加藤小十郎。 岸藤右衛門組、六十俵四人扶持、三十一歲。

寛文六年六月朔日、少將樣へ御目見仕。同七年九月朔日、侍從樣へ御目見仕、同八年、少將樣へ御雇、兒小生に被仰付、用意銀二貫目并四人扶持被下。同十二年八月十五日、於江戸六十俵四人扶持被下、御側へ被召仕。

二七、加藤源七。 近習、江戸聞番加り、二百石、四十四歳。

曾祖父松井九郎兵衛、宇喜多中納言殿に居申候由、祖父松井九郎兵衛、宇喜多中納言殿に居申、以後戸川肥後殿に浪人分にて居申、暇申請備前にて病死。

二八、加藤七大夫。

寛永十四年丑八月二十八日、被召出、正保二年二月三日、新知百五十石被下、延寶六年四月五日、七十一歳病死。

養子 私、寛文元年二月十一日、七大夫養子に被仰付、同八年十一月六日、御弓持に被召出、六十俵四人扶持被下。延寶六年五月二十六日、七大夫跡知無相違被下。天和元年十月二十一日、吉崎甚兵衛・源七兩人、於江戸森下與惣兵衛に相加り、二年替り一人づゝ可相勤旨、御直に被仰付、御役料八十俵、人置料六十俵、江戸に相詰候。年々御足輕四人代米にて被下、一年に銀二十枚づゝ被下旨、老中申渡す。貞享二年二月朔日、於江戸相詰候年は、銀二貫目づゝ被下候旨、老中より申渡す。

二九、梶田彦左衛門。 三州吉田にて被召出候。三百五十石被下、慶長の末播州にて病死。

三〇、梶田清右衛門。 別家なり、下に記す。

慶長の末、喜左衛門跡目、無相違三百五十石被下、大阪御陣武藏守樣御供、大村伊織組にて相勤、寛永十四年三月十二日、備前にて病死。

三一、梶田清右衛門。 丹羽平大夫組、三百(石)五十石、六十二歳。父跡知無相違、三百五十石被下、寛永十五年三月十五日、繼目の御禮申上候。

三二、子作之右衛門。 病氣に付孫菊之助を養子に奉願、天和二年二月二十六日、願の通被仰付。同年秋、菊之助病死仕候に付、孫藤三郎養子に奉願、同三年七月朔日、願の通被仰付。

三三、加藤右馬允。 公方義昭公へ仕へ申候由、義昭公御浪人被成候後は、尾張犬山へ參、住宅仕候由。

三四、加藤喜右衛門。

於犬山勝入様へ若輩の時被召出、御奉公仕、姉川合戰の時、御旗本にて首を取申候。其後輝政様より慶長九年十月十八日、御知行百三十石被下、鳥殿にて病死。

三五、加藤九左衛門。

八歳の時於吉田被召出、慶長八年十月六日、新知二百石被下、同十四年十一月二十六日、御加増百三十石被下、御持筒伊賀者十一人御預け被成候。大阪御陣の節、瀧川出雲組にて相勤申候。於因州喜右衛門跡知百三十石、自分に御加へ被下、都合四百六十石拜領仕候。大小生役、其後御奏者役、其後大横目、其後御歩行頭、其後鷹方并御鐵砲十人筆御預け被成候。寛文二年七月三日、七十六歳病死。

三六、加藤九左衛門。

正保元年、九歳にて御目見仕、寛文二年八月六日、父跡知無相違四百六十石被仰付、草加宇右衛門組頭、五十四歳。

三七、子九八郎。　八歳にて延寶八年九月朔日、侍從様へ御目見仕候。

三八、河原藤左衛門。　信長公より知行七十貫被下、佐久間右衛門與力にて、津田孫十郎殿と致、同宿一年に一度づゝ天王寺に百日替に御陣在留仕候由。

三九、河原傳左衛門。　藤左衛門跡知、無相違被下、以後舅子久右衛門に家督相渡候。其後傳左衛門・久右衛門浪人仕候。

四〇、河原九郎兵衛。　傳左衛門末子、久右衛門弟なり。始は勝九郎と申候。

天正十八年、加藤主計頭へ歩行に被召出、高麗陣にて働御座候て、知行四百八十石被下候。石田治部少輔謀叛の節、主計頭殿は肥後に御座候。翌後、薩摩へ御働可被成由にて、母衣の者を庄林隼人・森本儀太夫・飯田覺兵衛此三人に吟味仕、書上候へと被仰付候處、三人の書付河原勝九郎を書出し候に付、十三人の母衣に被仰付、九郎兵衛も名を御かへ被下候、さて、母衣の出し吟味御座候。主計殿大筑紫陣に御さし候、母衣の出し金の一枚板に描題目書申たるを、九郎兵衛に被下候、右の出し於今所持仕候。後肥後殿御代公儀開番役被申付、足輕御預け候處、御斷申候へば、御廢立にて、御祖母正福院殿へ御附被成候、然れば右主計殿御目立、母衣無に成候と存、寛永五年立退申候。

因州へ參居申候處、少將樣被聞召、御合力米百石づゝ、寛永八。九兩年被下候樣御座候に付、御目見は不仕候。寛永十年七百石被下候。同十八年、御旗奉行被仰付候。慶安四年八月六日、病死。八十一歲。

四一、河原藤兵衞。

慶安四年十一月十四日、九郎兵衞跡知無相違七百石被下候。寛文三年十二月十四日、病死。五十五歲。

四二、河原九郎兵衞。 水野三郎兵衞組頭、五百石、三十八歲。

明曆元年、八歲にて御目見、寛文四年二月二十六日、父跡目の内五百石被仰付候。

四三、安東出雲。 濃州揖斐の城主、安東監物濃州立退以後、金吾中納言殿にて千石程のあてかい番頭格に候。金吾殿御果候以後浪人仕候。

四四、横卷義左衞門。

子細有て他氏を申候。廣內五郎兵衞父なり。氏家左京殿に居申候て、三度心馳御座候由。後に前田肥後守殿に罷在、越中國末森の籠城仕候處、本城迄敵攻入候へ共、味方十四五人にて、抱申候處、後詰有之運を開申候。義左衞門も其內にて御座者由、其後增田右衞門殿に居申、高麗陣にて打死仕、首取申候由、大和郡山の城籠城の砌に御座候時、右衞門尉家中にて義左衞門ともに二十人計妻子を城へ籠申候。右衞門尉殿より城開渡し可申由にて、浪人仕候。其後金吾中納言殿にて四百石賜候。中納言殿御果被成候以後、池田備中守樣にて御旗御預け被成候。出雲樣御代迄罷在、備中松山にて病死仕候。

四五、廣內五郎兵衞。 幼少の時より祖父監物養子に仕、一所に罷在、流浪仕。

慶長十九年、武藏守樣大阪兩度の御陣御供仕、御歸陣以後二百石被下候。明曆四年五月□日（マヽ）、病死。

四六、廣內權右衞門。 若原監物組頭、三百石、六十一歲。

寛永十四年二月、少將樣へ初て御目見仕候。承應元年極月、養父五郎兵衞隱居の願申上候處、明る正月家督無相違被仰付。貞享二年三月朔日、御加增百石被下、御城代若原監物組頭に被仰付。

四七、子儀左衞門。 寛文十一年三月朔日、御目見仕候。

權右衞門實方父は、安藤瀨兵衞といふ。（安藤監物が弟安藤猪兵衞、其子久右衞門、其子安藤瀨兵衞なり）。中村式部殿に浪人

分にて久右衛門•瀬兵衛父子共に罷在、御子息一學殿迄罷在候。一學殿伯母聟を横田内膳と申、則家老にて御座候。一學殿御にて、瀬兵衛事内膳妹聟に成申候。其後内膳不慮の讒言にて一學殿御手打に被成候。内膳子共外一類共、御敵を申取籠申候に付、内膳屋敷を取卷申、雲州よりも加勢參候由、其節瀬兵衛兩度鑓を合申候。一人は雲州より參候落合助九郎と申、今一人失念仕候。其後扱に成、内膳世悴切腹仕、殘者共は立退申候。彼纔言仕候兩人は、權現樣•台徳院樣御耳に達し、切腹被仰付候由。

四八、栢木九郎兵衛。組外、十二人扶持、七十三歳。

父栢木藤次郎、簗田左衛門佐へ奉公仕候。始は内田藤次郎と左衛門佐被申付候。其後左近と申候。左衛門佐沒落以後、浪人仕果申候。

私幼少にて離れ申候故、委儀不存候。私十六歳の時、寛永五年に松平備後守樣へ、御兒小生に被召出、十五石三人扶持、御仕着被下、同七年二人扶持御加増被下、同十四年、十五石と二人扶持御加増被下、正保三年十月二十日、新知百五十石被下、同十四年十二月十四日、五十石御加増被下、慶安五年正月朔日、五十石御加増被下、宍粟沒落以後、延寳七年四月十二日、十二人扶持被下候由、日置猪右衛門被申渡、和氣郡日生村に在宅仕候。

四九、梶川彌三郎。

信長公より三千石被下候。天正元年七月十七日、義昭公宇治槇島に御楯籠被成候時、信長公御攻被成候節、宇治川先陣仕候。其外軍功も御座候由。

五〇、梶川市左衛門。

羽柴藤五郎殿にて二百石被下候。高麗陣御供仕、組打の功名仕候由、其後丹羽五郎左衛門殿にて二百五十石被下候。其後山内對馬守殿にて、六百石被下候。其後金吾中納言殿にて、八百石被下候。其後浪人仕。

慶長八年、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。寛永元年二月十日、病死。

五一、梶川權左衛門。

慶長十九年、武藏守殿へ無足にて被召出、大阪兩度御陣御供仕候。二百石被下、萬治二年正月十八日、病死。

五二、養子梶川左二兵衛。土肥飛彈組、鐵砲引廻、二百石、五十九歳、實父加藤加右衛門、越前少將に仕へ、後浪人。

十五日、少將樣へ御目見仕候。明暦二年九月九日、權左衛門隱居被仰付、家督二百石被下候。

五三、子權六。　寛文十一年三月十五日、二十一歳にて、少將樣へ御目見仕候。

五四、肥塚大炊助。

代々播州赤松幕下に罷在候。秀吉公赤松家と御和睦の砌、秀吉公へ被召出、秀吉公於播州赤松家の娘、大田の御腹に御男子御誕生、太郎樣と申候。大炊助御守に被仰付、御幼少にて御死去被成候に付、大炊助入道仕、安淸と申候。其後福島左衛門殿御呼被成、廣島へ參病死仕候。

五五、肥塚彌六。安淸死後、京へ參、京にて病死。

五六、梶田半助。池田左兵衛組、鐵砲引廻、三百石、六十三歳。

寛永十二年、十三歳の時生駒壹岐守殿内、藤野助左衛門養子に仕、壹岐守殿へ兒小生に出し申候。同十七年夏、立退申候。其冬紀伊大納言樣へ被召出、翌年御暇はて、同十九年冬、少將樣へ被召出、五十俵七人扶持被下候。正保三年十二月下旬、二百石被下、慶安元年十一月十五日、大小生被仰付、百石御加增被下。

五七、子半兵衛。　延寶七年十一月朔日、二十六歳にて御目見仕候。

五八、河合善左衛門。

織田信雄公に罷在、其後勝入樣へ被召出、長久手御陣數箇所手負申候。其後御暇申候。慶長十年於備前、武州樣へ被召出、百五十石被下候。同十四年に病死。

五九、河合權右衛門。

慶長十四年、善左衛門跡地、無相違百五十石被下、大阪兩陣御供仕候。慶安四年十一月五日、病死。

六〇、河合善大夫。丹羽平大夫組頭、鐵砲引廻、百五十石、五十二歳。

慶安四年十二月十五日、權右衛門跡知、無相違百五十石被下候。

六一、子權次郎。　延寶元年八月十五日、初て侍從樣へ御目見仕。

六二、片岡次郎左衛門。　勝入樣へ御奉公仕候由。

六三、片岡次郎大夫。

米子にて御座候へ共、慶長二年、武藏守樣へ被召出、御切米被下、其後二百五十石被下。元和元年、大阪御陣御供仕、葉武者にて御座候得共、はやく手をふさぎ申候由、(須賀左京殿御座候)。寛永十六年九月八日、病死。

六四、片岡次郎大夫。　伊木頼母組、鐵砲引廻、二百五十石、五十九歲。　父跡知無相違二百五十石被下候。

六五、子勘兵衛。　延寶二年、十一歲にて侍從樣へ御目見仕。

六六、龜島四郎左衛門。

攝州にて池田勝政に奉公仕候。和田合戰の刻、栗生と申敵と於川中鎗を合、首取申候。手も負申候由。攝州伊丹落城、勝政沒落以後、京に罷有候。石田治部少、浪人分にて、佐和山へ呼被申候。關ケ原沒落後、又京に罷在候。慶長六年、輝政樣へ被召出候由にて、姫路へ參、御目見不仕内に、病死仕候。子猪兵衛其時五歲にて御座候。

六七、龜島猪兵衛。

慶長十九年、武藏守樣へ御目見計仕、元和三年、於江戸御奉公に被召出、二十石五人扶持被下。少將樣因幡へ御入國被成、五石御加增被下候。寛永十年正月朔日、百五十石御折紙被下、同十四年閏三月五日、御加增百石被下、承應三年二月十一日、御加增五十石被下、御鐵砲十人御預け被成、同五年正月十七日、六十九歲隱居被仰付、十人扶持被下、同七年八月二十八日、七十一歲病死。

六八、龜島左助。　岸藤右衛門組、鐵砲引廻、二百五十石、四十九歲。

少將樣へ御目見年月失念仕候。侍從樣へ明曆三年十一月朔日、初て御目見仕、寛文三年正月二十八日、少將樣へ中小生に被召出、二十石四人扶持被下、同五年正月十七日、父猪兵衛隱居被仰付、家督二百五十石被下候。

六九、片山越後。

濃州各務郡前渡村名田其高八十貫、先祖より取來所の國主へ罷出申候。此外川向尾張の内、島村と申所も名田高二十貫代々取來候。

七〇、片山源左衛門。

犬山城主織田七郎左衛門殿へ仕へ、島村にて名跡二十貫取申候。永祿七年、勝入様犬山拜領御入部被成、其年より源左衛門被召出、御奉公仕候。島村二十貫被下、其後犬山町の地子方五貫御加增被下、元龜元年六月、勝入様小谷御陣御供仕候。姉川合戰に高名仕候由。犬山より津國へ御所替被成候時、七十五貫被下、輝政様へ御附被成、尼崎に罷在候。天正十二年、源左衛門嫡子喜平次、勝入様へ被召出、長久手御陣御打死の時、喜平次も打死仕候。輝政様岐阜へ御移被成、源左衛門に八十貫被下候。景勝陣・關ケ原陣に煩候て、御供不仕候。播州へ御入部の時も煩候て、其明る春姫路へ參候に付、惣並の御加增拜領不仕候。知行百五十石被下候。

七一、片山孫兵衛。

天正十三年、輝政様へ被召出、景勝陣・關ケ原陣御供仕候。播州へ御入部、翌年慶長六年に、百五十石被下候。武藏守様備前より播州へ御移被成候翌年、慶長十九年、源左衛門隱去被仰付、孫兵衛に二百五十石被下。

七二、片山勘左衛門。

寛永七年、三十俵被下、其後五十俵に五人扶持被成被下。同十九年、孫兵衛隱居被仰付、勘左衛門御切米を孫兵衛に被下、勘左衛門に二百五十石被下、正保元年、御加增五十石被下、萬治元年、百石御加增被下、寛文十年八月二十七日、御城代幷寺社奉行被仰付、御鐵砲二十人御預被成、延寶四年十一月八日、隱居被仰付、同月十五日、七十六歲病死。

七三、養子片山新五左衛門。 伊木兵庫組、四百石、二十九歲。玉虫久之丞次男にて御座候。

十一歲にて片山勘左衛門養子に被仰付、寛文五年十一月十五日、少將様へ御目見候。延寶四年十一月八日、養父勘

左衛門隱居被仰付、四百石無相違、私に被仰付。

七四、河合中務。

勝入様より御奉公仕、輝政様播州御入國の節、千石被下候。其後隱居仕り、實々の嫡子平吉に七百石遣、三百石は隱居料に拜領。

七五、養子河合源左衛門。　源左衛門、實父は高木左吉にて御座候。

左吉は信長公に仕へ、後蒲生飛彈守殿に仕へ、武者奉行仕候由、源左衛門を河合中務へ養子に遣候。

源左衛門事、紀伊守様へ御奉公仕、三百石被下候。紀伊守様於長久手御打死の後輝政様へ被召遣、六百石鐵砲十挺被仰付、關ケ原にて心馳御座候由、播州へ御入國の節、千二百石但四人鐵砲三十挺御預け被成、武藏守様播州へ御移被成候刻、御斷申上。但鐵砲幷知行七百石指上、五百石無役に拜借仕候。元和六年五月十二日、於因州病死。

二男勝左衛門に三百石、三男七左衛門に二百石被下、其後勝左衛門病死、子も早世仕、跡絶申候。勝左衛門母に本俵二十俵被下候。

七六、河合兵吉。　源左衛門嫡子なり。

輝政様へ別知に被召出。慶長二年十二月二十二日、二百石被下、關ケ原にて心馳仕候由、慶長六年十一月三日、二百石御加増被下、同十一年十月九日、於姫路病死。

七七、河合清大夫。　六歳にて父跡目四百石被下、大阪御陣御供仕。寛文十一年八月八日、病死。

七八、河合源五兵衛。　土肥飛彈組、四百石、六十一歳。

寛永十七年、少將様へ御目見仕、承應元年八月二十六日、中小性に被仰付、本俵四十俵五人扶持被下、寛永十一年十一月十二日、清大夫跡目無相違四百石被下。

七九、子孫太郎。　延寶元年二月朔日、八歳にて御目見、侍從様へ申上候。

八〇、河合七左衛門。　源左衛門三男なり。

於因州源左衛門分知二百石、元和七年三月十一日被下、寛文十一年五月六日、六十九年病死。

八一、河合千兵衛。土肥飛彈組、二百石、四十七歳。

寛文十一年七月朔日、父七左衛門跡目二百石、無相違被下。

八二、子鐵之介。天和三年亥八月十五日、七歳にて侍從樣へ御目見仕。

八三、河合四郎左衛門。土肥飛彈組、百十俵七人扶持、五十八歳。河合勝左衛門母の甥にて御座候。幼少にて兩親相果申候に付、勝左衛門拙方へ呼取、養育仕候故、父の儀不存候。

寛永十五年霜月、十一歳にて被召出、衣裳銀御扶持方被下候。於江戶侍從樣へ御附被成候。同十九年三月、十俵三十俵三人扶持被下、正保三年三月、御加增四十俵四人扶持被下、合七十俵に七人扶持拜領仕候。河合七左衛門次男文四郎を養子に奉願候處、寛文元年七月十九日、如願被仰付、八月朔日、少將樣へ御目見仕候。延寶六年四月二十八日、文四郎出奔仕候。

八四、高木左吉。信長公に御奉公仕、後蒲生飛彈守殿に奉公仕、場數御座候に付、武者奉行仕候由。

八五、高木又五郎。信長公に御奉公仕、打死仕候由。

八六、河合助之丞。

叔父河合源左衛門奉願に付、慶長七年、輝政樣へ被召出、二百石被下。河合源左衛門は左吉子にて、又五郎弟にて御座候河合中務方へ養子に成候て、河合と名乘申候。河合中務も輝政樣へ御奉公申上候。

八七、河合助之丞。若原監物組、二百石、六十六歳。

承應二年三月五日、家督無相違、二百石被下候。

八八、子孫左衛門。寛永五年二月二十七日、八歳、少將樣へ御目見仕。

八九、笠井太郎兵衛。池田左兵衛組、三百石、八十一歳。

先祖代々小豆島庄官筋にて御座候。父笠井勘兵衛、元和六年、加藤肥後守殿より、合力米五十石大阪にて給り、鐵砲の者十人預り、小豆島石場番所役被申付候。備前にて病死。

私儀上道郡丸山村の内にて、正保四年、新田高五百四十九石餘、おこし申候。其内三百石拜借仕候。同年三月十五日、少將樣へ御目見仕候。御折紙は承應元年十一月十五日に被下候。

九〇、子平右衛門。　承應二年二月十五日、少將樣御目見、明暦三年十一月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

九一、香川但馬。　若狭國屋形武内孫八郎殿に奉公仕、三方郡不殘知行仕候由、屋形御死去被成候後、丹羽五郎左衛門殿に奉公仕候由。

九二、香川八左衛門。　十四歳より熊谷大膳殿に奉公仕、文祿三年に百五十石賜候。大膳殿死去の後、吉田兵部殿にて、二百五十石賜り候。其後暇もらひ申候。

寛永七年、於因州少將樣へ被召出候て、御合力米被下候。御國替已後、寛永十五年、於御當地三百石被下候。同十五年奉願、香西五郎右衛門次男又右衛門養子に被仰付候。數年病氣。慶安四年九月二十三日、七十四歳病死。

九三、養子香川又右衛門。

天和六年實祖父（香西又四）手前より御中小生に被召出、五十俵五人扶持被下候。八左衛門跡目三百石の内、二百石、慶安四年十一月二十八日被仰付。

九四、香川五郎兵衛。　池田左兵衛組、二百石、四十四歳。

承應二年二月朔日、十一歳にて少將樣御目見仕候。延寶五年極月十三日、父又右衛門跡目、無相違二百石被仰付、同十五日御禮申上候。

九五、蟹江勘右衛門。　勝入樣へ御奉公仕、輝政樣へ御附被成、母衣被仰付、長久手陣に打死仕候。

九六、蟹江勘平。　後に夢伯と申候。

九歳にて輝政樣へ被召出、長久手御陣にも御供仕候。三百石被下罷在候處、眼病煩、盲目に成候故、御知行指上申候處に、高百石被下候。不通者、知行所の脇へ、高六十三石七斗六升の處御座候を、振替に奉願、其通に被仰付候。正保二年十月六日、病死。

九七、蟹江利右衛門。

父跡目六十三石七斗三升被下候。延寶二年十月六日、願の通隱居被仰付、同暮より御米二十俵宛、每年被下。天和元年六月十七日、病死。

九八、蟹江善助。 池田左兵衛組、百石、三十一歳。實は村瀬平右衛門子、圓右衛門弟なり。

寛文六年二月十五日、利右衛門養子被仰付、利右衛門に懸り居申內、延寶元年十一月二十八日、少將樣へ中小生に被召出、四十五俵四人扶持被下候。同二年十月六日、利右衛門願の通隱居被仰付、六十三石七斗三升、無相違被下候。延寶五年二月朔日、從少將樣爲御加增、三十六石二斗七升被下、本知御加增、合百石被下候。

九九、河瀨五郎左衛門。

尾張大納言樣にて、二十五石に五人扶持被下候。十五・六年罷在、後御暇申請、其後本多甲斐守殿へ二十石に四人扶持にて、被召出、其後御暇申請候。寛永七年御家へ被召出、十石に三人扶持被下、萬治三年、病死。跡目無相違子吉大夫に被下候。

一〇〇、養子河瀨與五左衛門。 池田左兵衛組、四十七俵四人扶持、六十一歳。

正保三年極月十五日、少將樣へ御歩行に被召出、十石に三人扶持被下候。明曆二年極月、御手廻役被仰付、本俵五俵に一人扶持、御加增被下、寛文三年春、御横目役被仰付、本俵御加增被下候。

一〇一、子伊左衛門。 延寶元年三月十四日、御歩行に被召出、三十俵三人扶持被下候。

與五左衛門、實父杉浦權左衛門は、小笠原越中守殿に浪人分にて罷在候節、石川長左衛門と申者、曲事有之、立退候に付、方々追手に掛、十左衛門も尋に罷出、於勢州桑名長左衛門見合、互に働、長左衛門を打留申候。罷歸り、越中守殿刀賜り候。越中守殿身上果候に付、浪人仕候。於姬路本多美作守殿へ被召出、二百石被下、十箇年罷在候。美作殿御死去の後、家中數多御暇被遣候時、權左衛門も浪人仕候。其後菅沼織部殿へ、本知にて被召出、三・四年罷在候。望御座候て、暇申請、備前へ罷越、寛永十六年、病死仕候。私儀は河瀨五郎左衛門養子に成申候。

一〇二、河瀨源兵衛。 若原監物組、六十二俵四人扶持、六十歳。

私實父櫻井市兵衛は、松平下總守殿に代官役仕、二十四人扶持被下、和州郡山、寛永八年三月二十四日、五十九歳病死。跡目私兒櫻井新助に無相違被下候。

私儀、松平下總守殿へ、於姫路中小生椿に被召出、十石と三人扶持被下候。其後羽州山形所替の供仕候て、兄弟一同に暇申請候。私儀は御當地に參、河瀬五郎左衛門養子に成申候。承應二年五月八日、在江戶御步行に侍從樣被召出、本俵二十俵四人扶持被下候。萬治元年正月十一日、十人組に被仰付、〻加增本俵五俵被下、同三年五月十六日、中小生に被仰付候。寛文元年十一月十八日、御加增本俵五俵被下、同六年八月二十二日、御加增本俵十俵被下候。

一〇三、子 河瀬五郎三郎。納戶奉行、六十二俵四人扶持、三十三歳。

寛文五年霜月朔日、十三歳にて侍從樣へ御目見仕候。同五年正月十一日、御兒小生に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。

一〇四、水野式部。尾州大高城主、水野大膳殿に罷在、百貫餘賜り候。於彼地病死。

一〇五、蟹江彥右衛門。

若名兵吉と申候時、大膳方立退、內緣に付、荒尾美作へ罷出候。其後勝入樣へ被召出、百貫被下候。鼻熊御陣御供仕候。勝入樣の御娵樣三好孫七殿へ御祝言の時、香西又市・蟹江兵吉兩人御附被成候。孫七樣江州八幡山に被成御座、天正十八年尾州清洲へ御國替被成候て三百五十石被下候。然る處に被下候。居屋敷下にて屋敷替仕り、御法昔申旨被仰付候に付、兩方共に立退申候。已後文祿四年、加賀大納言殿にて、四百石被下候。慶長三年立退、同年十一月筑前中納言殿へ被召出、三百石被下候。伏見城乘候時、松の丸にて心馳首尾能候趣、松野主馬申上候に付當座に御褒美米三十石被下候。中納言殿備前へ御入國被成候て、津高郡虎倉村の城を松野主馬に御預け被成候に付、組中一所に參候時、彥右衛門は鐵砲二十・長柄二十預り城代仕候。其砌彥右衛門子治右衛門にも知行百五十石被下候。然る處に松野主馬不慮の儀にて立退申に付、一所に立退申候。

慶長八年武藏守樣へ被召出候。九年十一月十一日、二百五十石被下候。子治右衛門へも二百石被下候。慶長十三年十一月十五日、彥右衛門に御加增五十石被下候。元和四年八月二十九日、於因州病死。

一〇六、蟹江治左衛門。

元和四年十一月二十六日、彦右衛門跡、無相違三百石被下。治左衛門に被下候二百石は、治左衛門弟權右衛門に被下候。大阪陣冬夏共御供仕候。寛文二年五月二日、八十四歳病死。

一〇七、蟹江新之丞。山脇傳内組、三百石、七十六歳。

寛文元年四月二日、治左衛門隱居被仰付、家督無相違三百石被仰付候。

一〇八、養子久五郎。實子無之に付、淺野内匠殿御家來、山陰傳之助子久五郎を養子に奉願、願の通被仰付、延寶四年十一月八日、十二歳にて御目見。

一〇九、蟹江三郎兵衛。蟹江彦左衛門が子なり。慶長五年豫州へ參り、加藤左馬殿へ被召出、二百石賜候。其後暇申請候。

同十九年於播州武藏守樣へ被召出、大阪兩度御陣御供仕候。元和三年因州へ御國替に付、新參者御暇被遣候に付、奥州の内岩城へ參、内藤左馬助殿にて二百石賜り候。寛永五年暇申請候。同六年因州へ參候。同七年に被召出候。伯州久米郡の内にて二百五十石の荒地被申候。同九年、備前へ御國替被成、同十四年三月五日、二百五十石の御折紙被下候。萬治三年八月六日、病死。

一一〇、蟹江三右衛門。宮城大藏組、百五十石、五十三歳。

萬治三年十月十五日、父跡目の内、百五十石被下候。

一一一、子小兵衛。延寶二年三月朔日、御目見仕候。

一一二、河崎兵右衛門。

少將樣へ被召出、其後寛永十一年、新知百五十石被下候。慶安五年十月二十二日、病死。世忰段之丞に、無相違百五十石被下候。

一一三、養子河崎段之丞。下野掃部末子にて御座候處、兵右衛門方へ養子に被仰付候。

一一四、河崎九市郎。宮城大藏組、五十俵十人扶持、二十六歳。

寛文四年七月十六日、段之丞亂氣にて相果候時、私五歳にて御座候。少將樣より十人扶持被下候。同九年二月二十七日、御切米五十俵被下候。同三月

朔日、始て御目見仕候。

一一五、川口久右衞門。

金吾中納言秀秋卿に奉公仕、四百石給り候。其後武藏守樣へ被召出、三百石被下候。慶長十九年、大阪御陣の節煩申に付、名代子吉左衞門、冬・夏とも御供仕候。元和四年五月十一日、於因州病死。

一一六、川口吉左衞門。

元和四年、久右衞門跡知、無相違三百石被下、承應二年三月八日、病死。

一一七、川口忠左衞門。

承應三年、吉左衞門跡知、無相違三百石被下、寛文十一年十二月晦日、五十一歳、病死。

一一八、川口喜兵衞。　丹羽平大夫組、三百石、二十歳。

寛文十二年二月二十五日、忠左衞門跡知、無相違三百石被下候。

一一九、香西主計。

讃州香西郡に居城有之、其後尾州へ參、荒尾美作殿に附屬仕罷在、八十七歳にて病死。主計子三人皆勝入樣へ被召出、一男縫殿助は勝入樣御供仕、永祿十二年六月二十八日、姉川陣に打死仕候。

一二〇、香西又市。　主計二男なり。

天正九年十月十七日、攝津國伊丹にて從勝入樣、知行五十石被下。

其後政所樣秀次公へ御祝言の刻、又市儀御家久敷者と御意にて、御輿副に被遣候節、天正十一年七月二十六日、御加增五十石攝津國にて被下、都合百石拜領仕候。同十二年、長久手御陣の刻、秀次公御供仕、四月八日、秀次公の御手へ首數三十計打取申候由、其節又市も高名仕、翌九日、勝入樣御打死、同日又市三十八歳、打死仕候。子二人、一男五郎右衞門といふ。次男を縫殿助といふ。

一二〇、香西又次郎。　主計三男なり。

御使番被仰付、攝津國伊丹荒木籠城の節、勝入樣御取出、倉橋より每日御出被成候節、攝津

國鴨塚にて手負、倉橋へ引取、其手にて果申候。

一二一、香西五郎右衛門。

天正十二年、父市跡知、無相違秀次公被仰付候。雜賀陣の時、秀次公御供仕、十三歳にて御座候。千石堀柵際に罷有、振能御座候由、天正十三年、江州八幡山にて五郎右衛門組頭田中久兵衛、秀次公へ申上候に付、同年八月二十八日、百石御加增被下候。

北伊勢陣・阿波陣御供仕候。文祿四年七月、秀次公御切腹の後、於伏見十一月二十日、輝政樣へ被召出、二百石被下候。慶長五年、吉田より關原御陣御供仕、明る六年、於姬路御加增五十石被下、同九年十月十八日、御加增百石、都合三百五十石拜領仕候。大阪御陣の節、御使番被仰付。正保四年二月朔日、隱居被仰付、子九郎兵衛へ被下候。六人扶持隱居料に被下候。承應元年正月十七日、八十二歳病死。子三人あり。一男九郎兵衛、家を嗣ぐ。二男又右衛門、香川八左衛門養子。三男與平次、岩田膝兵衛養子。

一二一、香川縫殿助。又市次男、五郎右衛門弟なり。は、武藏守樣へ被召出、御取立被遊、二千石被下、御番頭役幷御足輕三十人被仰付、其後病死。世悴釆女に、跡知幷御番頭共に被仰付。

一二二、香西九郎兵衛。

慶長八年、輝政樣へ十三歳にて被召出、三十俵六人扶持被下、大阪兩陣御供仕候。正保四年、父家督無相違、三百五十石被仰付。寬文二年八月十五日、隱居被仰付、同三年正月二十二日、七十二歳病死。

一二三、香西五郎右衛門。草加宇右衛門組、三百五十石、五十五歳。

寬文二年八月十五日、父家督、無相違三百五十石被仰付。

一二四、子源八。　延寶二年二月十九日、九歳にて侍從樣へ御目見仕。

一二五、上泉常陸介。

生國上野、先祖俵藤太秀鄉、同嫡男小山下野鎭守府將軍、藤原知事より家を繼、上野國大胡の一城を踏へ、藤原重繩迄、代々右

の通に御座候。同憲綱代より城を退候。憲綱子伊勢守、同國箕輪城主永野信濃守殿旗下に相成、則家の十六人の鎗の内にて御座候。其後甲斐武田信虎に被召出、御名乘の信の字被下、伊勢守信綱と申候。其後致上洛、光源院義輝將軍本國寺に御楯籠の時、天下の軍監を被下、御勝利被成候時、兵法新當流軍法軍記天下第一の高札相納、則、禁裡へ伊勢守其子常陸介、父子共に參内仕、伊勢守從四位下武藏守に被成、世忰此時常陸介に被成候。公方の御師範に參り、御内書迄頂戴仕事に御座候。其後上野國へ下向、安中の城主と永野信濃守殿合戰の時、上野國一本の鎗と、信濃守殿より感狀を迄り被申事、上野國にて諸人能存候常陸介儀、其後北條安房守殿被招候。其後伊井侍從殿より、浪人分にて被召寄罷在、關原陣供供〔仕〕候。慶長十九年七月九日、常陸介病死仕候。

一二六、上泉治部左衛門。

九歳にて伊井侍從殿へ目見仕、十二歳の時、浪人分にて被召置度由に被仰、家老鈴木石見と申仁を以、被召出。兵部殿近習六人相詰候内にて、履物の役被申付候。其時兼光の脇指を被下候。其後取籠者有之、大勢取卷居申候時、三人一度に入申、内一人は治部左衛門にて、十七歳の時に候。慶長十九年大阪御陣に付、兵部少輔殿爲陣代、掃部頭殿御出陣供仕候。其手木俣右京亮治部左衛門親類にて、右京方へ軍法の役にて先手へ參候。十二月四日、天王寺表の城責の時、堀へ入大木を破、塀下に付申候。城へ仕寄申候時、自身竹束持參仕候由、二十三歳の時なり。元和元年五月六日、木村長門と合戰、同七日合戰の内、七日に高名仕候。御歸陣以後、中納言景勝へ被召出度由、鐵砲三十預け、三百石可被下由に候へ共、遠國故同心不仕候。元和九年迄、掃部殿に浪人分にて居申候。其後江戸へ罷下候刻、公方樣永井日向守殿に、治部左衛門事御尋被成候。日向守殿樣子被仰上候に付御旗本諸人國々迄存候事に御座候。淺野但馬守殿、五百石に鐵砲三十にて、無役に被召置度由、佐々權兵衛殿•牧野傳藏殿、兩人を以被仰候處、御舍弟釆女樣、治左衛門と知人に相成候て、被召置度由被仰候。御兄弟樣の事、何れと難申、御兩所へ御斷申候。加藤肥後守殿より、柳生但馬殿御相談にて、山崎甲斐守殿を以被召寄候間、御眼力次第と申、先三百石に鐵砲御預け、無役にて毎朝罷出、相伴仕候。肥後守殿身上果申候節、肥後國御横目、石川土佐守殿を以御當家へ被召寄候。

寛文十八年九月三日、少將樣へ御目見仕、十月十四日、御鐵砲二十御預け、無役にて三百石被下候。同十九年極月十二日、御家中指物帳幷御貝吹御預け被成候。慶安二年、預御鐵砲二十人の内、十人御弓に被御付、其時分御太鼓•

鐘御預に成候。同三年八月晦日、御加増三百石被下候。寛文十二年七月八日、治部左衛門病死。

一二七、上泉佐左衛門。

寛文十二年九月、治部左衛門跡目無役四百石被仰付、御貝吹・御太皷・鐘、御家中指物帳共儘御預け被成候。其上佐左衛門弟十五郎被召出、五十俵五人扶持被下候。延寶八年閏八月九日、佐左衛門病死、十五郎は延寶四年五月二十九日、病死。無子、御切米御扶持差上候。

一二八、上泉龜太郎。伊木頼母組、三百石、十六歳。

延寶八年十月朔日、父跡目三百石被下、同二日、御禮申上候。

一二九、片山加右衛門。父を野村左兵衛といふ。本國美濃、寛永六年二月二十一日、病死。

私、本氏野村にて御座候へ共、幼少より母方伯父片山孫兵衛に懸り、備前へ罷越、寛永十二年、十二歳にて少將樣へ御小生に被召出、四十俵五人扶持被下候。孫兵衛子分の仕罷出候に付、本氏を替、片山に成申候。正保二年暮、御加増二十俵被下、承應二年、御知行二百石被下、寛文六年八月七日、病死。

一三〇、片山加右衛門。伊木頼母組、百石、二十七歳。

寛文五年、七歳にて少將樣へ御目見仕、同六年十月十二日、父跡目二百石の內、百石被下。

一三一、片岡八大夫。伊木頼母組、六十二俵四人扶持、四十七歳。片岡次郎大夫二男なり。

寛文五年、於江戶侍從樣へ被召出、寛文八年秋、同姓次郎大夫と一所に浪人仕、同十一年歸參被仰付候。

一三二、子八郎。天和二年二月二十八日、七歳にて侍從樣へ御目見仕候。

一三三、梶田喜八郎。勝入樣に御奉公仕、長久手御合戰の時打死仕候。

一三四、養子梶田九郎兵衛。喜八郎實子無御座候。

輝政樣、九郎兵衛を喜八郎養子に被召出、二百五石被下候。元和八年八月晦日、病死仕候。實子無御座に付、番大膳・伊賀父、惣左衛門を養子に奉

類、願の通
被仰付候。

一三五、梶田惣左衛門。

松平石見守様に罷有、萩野猪之介と申候。石見守様へ番大膳申上、養子に成、家督無相違二百五十石被下候。惣左衛門實父、萩野甚五郎は、小出播磨守にて七百石被下、鐵砲三十・弓二十御預け被成候。嫡子頼母介に家督讓り、甚五郎は御斷申上、京へ引込申所、頼母助父に先立て病死仕、跡絶申候。甚五郎儀は板倉伊賀守殿御助成に付、菅沼織部殿へ百人扶持にて被召出候。江州膳所にて、寛永十年十月五日、病死仕候。惣左衛門は甚五郎三男にて御座候。

一三六、梶田彦八郎。山脇傳内組、二百五十石、五十六歳。

慶安□(欠字)年十一月朔日、御目見仕候。承應元年八月六日、中小生に被召出、四十俵五人扶持被下。萬治二年十一月十一日、父惣左衛門五十七歳にて病死仕、延寶六年正月十五日、八歳にて御目見。

一三七、子惣左衛門。　延寶六年正月十五日、八歳にて御目見。

一三八、神屋兵三郎。

參州吉田へ罷越、武藏守様へ被召出、備前へ御入國被成候て、二百石被下候。大阪兩度の陣御供仕、寛永三年四月四日、於因州病死。

一三九、養子神屋兵三郎。近藤與九郎末子にて、近藤覺兵衛弟なり。

寛永三年、跡目無相違被仰付、慶安四年十月朔日、病死仕候。

一四〇、神屋久次郎。浮組、二百石、四十三歳。

慶安三年、少將様へ御目見仕候、同四年十二月朔日、父跡目無相違、二百石被下候。

一四一、神屋兵大夫。

於參州吉田武藏守様へ十三歳の時被召出。元和元年十月十八日、新知百石被下、寛永十八年七月二十九日、病死。

一四二、神屋兵大夫。 跡目無相違被仰付、寛文六年十月二十八日、病死。

一四三、神屋作左衛門。 寛文七年二月、跡目無相違被仰付、同十二年七月十八日、病死。

一四四、神屋松之助。 浮組、百石、十四歳。 二歳の時、父跡目無相違被仰付。

一四五、武田庄右衛門。 生國甲斐、後に美濃國梶田と申知行所居申故、梶田と改申候。

一四六、梶田彦左衛門。 權現様へ御奉公仕候由。
其後於参州吉田輝政様へ召出、二百石被下、播州へ御入國被成、慶長十八年十一月七日、御加増一同五十石被下候
播州において病死。跡知無相違せがれ梶田清右衛門に被下候。

一四七、梶田吉之丞。 喜左衛門二男にて御座候。
元和四年、於因州十一歳にて少将様へ被召出、四十俵五人扶持被下。寛文四年十月二十九日、五十七歳にて病死。

一四八、梶田與八郎。 浮組、六十二俵五人扶持、三十五歳。
寛文二年九月九日、御目見仕、同四年十二月十一日、跡目六十二俵五人扶持被下候。

一四九、垣見半兵衛。
於犬山勝入様へ御奉公仕候。其後浪人仕、瀧川左近殿に罷在候。其節は丹羽福知山城中敵方致調略、蘆田兵次・荻野平七、城持堅候處、杉山十右衛門・垣見半兵衛兩人、才覺者蘆田・荻野を打取申仕形、秀吉公被聞候、御書被成下、予今所持仕候。其後左近殿暇申、中村式部殿にて六千石被下、與力預り申候。其時は垣見豐後と申候。

一五〇、垣見半左衛門。 父豐後中村式部殿立退申候時、半左衛門も立退申候。輝政様吉田に御座候時、土倉四郎兵衛義、半左衛門父方の伯母聟にて御座候故、土倉市政知行所に罷在候。播州へ御所替の時播州へ参候
慶長八年、武藏守様備前へ御入國以後被召出、三百石被下候。

一五一、垣見半左衛門。
親半左衛門死後、跡目無相違三百石被下、寛永九年九月二十四日、四十一歳病死。

一五二、垣見半兵衞。

寛永九年十一月朔日、跡目無相違三百石被下候。貞享元年極月十三日、六十六歳病死。

一五三、垣見半兵衞。中村主馬組、三百石、三十五歳、幼少久太郞。

萬治元年八月十五日、御目見仕、寛文三年極月二十六日、御兒小生に被召出、六十二俵四人扶持被下候。同七年、權内と名をかへ申候。貞享二年二月十六日、父跡目無相違三百石被下候。同年六月朔日に、半兵衞と名をかへ申候。

一五四、川村彥兵衞。

武藏守樣へ被召出、二十俵に三人扶持被下。寛永十四年十一月六日、六十八歳病死。

一五五、川村與九郞。中村主馬組、八十俵八人扶持、六十九歳。

寛永十五年二月十五日、無相違二十俵三人扶持被下、明暦二年十一月、中小生に被仰付、御加增本俵十五俵二人扶持被下、萬治元年四月、大御前樣御臺所御賄役被仰付、御加增本俵五俵一人扶持被下、寛文元年御加增、本俵十俵二人扶持被下、同八年、御加增、五俵被下、都合、今俵百俵八人扶持被下候。延寶元年二月、在江戶の儀日置猪右衞門を以、御斷申上候處、願の通被仰付候。然上は御切米百俵の内二十俵指上可申旨、猪右衞門迄申指上、御國へ同年四月に罷歸候。

一五六、子善二郞。延寶四年十一月朔日、十一歳にて御目見仕候。

一五七、加世右近。淺井備前守殿に奉公仕候。天明元年、長政公沒落の時、小谷の城にて打死仕候由。

一五八、加世七介。

右近打死の時、幼少にて江州長濱の内、磯野村に隠居罷有候。秀吉公江州御領地に罷成候時、秀吉公幕下加藤作内殿、長濱の御預ヶ被成候て、其地御仕居の時、兒小生に被召出候。天正十年六月十三日、於山崎表明智合戰の節、明智家臣丹波の住人野勢と申者と、作内殿鑓を合、危く見へ申候處、七助馳合、野勢を打取、首を揚申候。其節作内殿より褒美に脇指被下候。見方に

於今所持仕候。作內殿大垣御住居の時、七助に四十貫被下候。其後方々處替被成、甲斐國拜領被成候より、遠江守と申候。其時分七助に三百貫被下候て、帳頭と申者に被成候。文祿年中、高麗陣の時は煩候て留守に罷在候。遠江守殿於高麗御死去、御子息左近大夫、御幼少其上故有て、甲斐國被召上、美濃の內黑野と申所へ少身に御成候て御越に付、新參の士御暇被遣、古參の士悉小身被成、御供仕候。七助も御供仕參候。慶長十三年正月二十六日、病死。

一五九、加世七右衛門。

七右衛門病死の時、七右衛門幼少にて、少知被下罷在、慶長年中、左近殿伯州米子へ御所替被成、無程豫州大洲へ御替り被成、代々御奉公仕罷在候。寬文二年十月二十四日、病死仕候。跡知無相違太左衛門に被下候。太左衛門は八兵衛兄にて御座候。

一六〇、加世八兵衛。慶安三年の秋、御當地へ罷越候。

同四年、御花畠にて家屋敷被下、中江太右衛門に被遣候。御米の內御內意にて拜領仕候。承應元年冬、御目見仕候。明暦元年七月、二百石被下候。同年冬、在鄕邊に居住仕度と奉願候へば、同二年四月十四日、津高郡紙工(しとり)村に御普請被仰付、家屋敷被下、罷在候。萬治元年十二月、御廟の御番被仰付、同二年六月末、御番御免被成、每日御廟見廻り候へと被仰付、中村又之丞と替り〲相勤申候。同年七月三日、岡山へ引越申候。寬文六年十二月十三日、町奉行被仰付、延寶元年正月晦日、學校奉行役被仰付、貞享元年二月十日、病死。

一六一、甥養子加世藤三郎。稻葉四郎右衛門組、百五十石、二十五歲。加世太左衛門二男にて御座候處、八兵衛養子に奉願。

延寶二年二月二十四日、侍從樣へ御目見仕、貞享元年四月二十七日、百五十石被下候。加世太左衛門一男彌七郎と申候。天和二年霜月、太左衛門隱居仕、只今家督彌七郎に被下、加藤遠江守殿に罷在候。

一六二、河野刑部。

孝靈天皇第二の王子、蕃屛將軍伊勢國主に成給、從是代々豫州に住居、河野氏を稱し、河野刑部と數十代相續申候へ共、次第長々敷候故、略之刑部に二人一男又右衛門儀、大永年中湯治、於有馬病死仕候。同年、同國に一家の久留島致押領宗家亡仕候。太郎左衛門儀上洛いたし、義晴公奉賴候。此時一柳に替申候。

一六三、河野權正。阿州へ罷越、三好と賴罷在、三好滅亡の後、讃州十河正安を賴罷在、於讃州打死仕候。

一六四、河野又兵衛。

若年の時豫州を出、阿波國にて成長仕、十七年にて讃州十河正安に奉公仕、其節讃州まん原塚にて首取申候由、百石賜り候。正安被果候後、仙石權兵衛に奉公仕、備中高松陣に供仕參候。權兵衛方暇申、又五郎と名を替り。九州に兄彥右衛門と申有之由承り候て、慕參候處、彥右衛門は打死仕候由承、小西攝津守陣場をかり、首取申候に付、攝津守召出、百石賜候。其後梅北と申者、一揆起申時、一日の內兩度の働仕、首二つ取申候。加增三百石賜候。關ケ原御陣の初、伏見城攝津守も攻申候時、朋輩井上主水大手口の堀乘候節、母衣を忍返しにかけ、三人と突合打死可仕と見へ申候。主水に又五郎言葉を掛け、敵追拂母衣切落主水を助申候。關ケ原沒落に付、又五郎儀又右衛門と名をかへ、備前へ參候。羽柴中納言殿に被召出、三百五十石被下、御朱印于今所持仕候。中納言殿死去にて、浪人仕候。

慶長九年四月二十六日、於備前武藏守樣へ被召出、二百石被下候。此時は又兵衛と名をかへ申候。大阪兩度御出馬御供仕候。寬永十五年三月二十九日、病死。

一六五、養子 河野金左衛門。本氏安部にて御座候。

祖父安部傳左衛門、信長公に御奉公仕候由、父安部久右衛門、石田治部少に居申、其後福島左衛門大夫殿にて、七百石にて鐵砲預り申候由。金左衛門は久右衛門三男にて御座候。久右衛門弟安部忠左衛門、御家に被召出居申候故、金左衛門十四歲の時叔父忠左衛門を便り參罷在候て、河野又兵衛養子に成申候。於大阪御陣場十九歲御目見仕、寬永十五年五月朔日、又兵衛跡知無相違二百石被下、寬文八年二月八日、病死。

一六六、河野彌平太。上坂外記組、二百石、五十八歲。

寬文八年跡目、無相違二百石被下、六月朔日、御禮申上。

一六七、養子 又三郎。佐分利彌右衛門三男。又三郎を養子に奉願、願の通被仰付、天和元年八月十二日、十一歲にて御目見仕候。

一六八、河野七左衛門。

番大膳ため伯父にて御座候故、輝政様へ浪人分にて被召出、武蔵守様御代、二百石被下候處、大膳達て御斷申上、其知行福岡德右衛門に拜領仕らせ申候由、七左衛門には、上道郡の内大分御代官被仰付、天和元年六月十一日、病死。

一六九、河村太郎作。

後彦大夫と改、幼少より左衛門督様へ兒小生に被召出、十六歳にて元服、二百石被下、彦大夫と申候。大阪御陣御供仕候。御遠行以後、石見守様へ本知にて被召出、宍粟落去の時分、浪人仕御當地へ參、寛文四年七月二十七日、病死。

一七〇、河村源左衛門。

承應元年十月十七日、被召出、本俵五十俵五人扶持被下、棒火矢百本くゝり、御城へ上置申候。寛文元年五月初に、御暇申上。

常春院住僧にて御座候姫路慶雲寺へ被下、不思議の死仕候に付、穿鑿爲可仕江戸へ罷下、御評定所へ度々罷出、松平伊豆守殿稻葉美濃守殿・阿部豐後守殿・寺社奉行井上河内守殿・加々爪甲斐守殿、段々被聞召、同極月十四日は、上意此旨存分の通落着の御下知を請候。少將様何方へも被遣間敷の由、草加宇右衛門を以、御國へ可相歸候旨被仰渡、同二十五日、江戸罷立、翌年正月十日、御國へ參着仕候。寛文二年九月九日、歸參被仰付、同十五日、御禮申上候。延寶元年三月十七日、病死。

一七一、河村小四郎。 上坂外記組、五十俵五人扶持、十六歳。

延寶元年五月六日、四歳にて源左衛門跡目、今俵五十俵五人扶持被下候。同五年十一月朔日、八歳にて侍從様へ御目見仕候。

一七二、淡田佐渡。

先祖赤松家士の由申傳候。佐渡は播州神東・神西兩郡の内を以、高一萬石餘、宇喜多殿給り、郡の内柏尾村に居城仕候。宇喜多滅亡の後、浪人仕候由、傳承候。

一七三、安積喜太郎。 後次郎左衛門と改。

慶長六年、輝政樣へ二百石被下、被召出、其後武藏守樣へ御附被成候刻、二割加增被下、二百四十石拜領仕候。其跡は次郎右衛門と申候。大阪兩度御陣御供仕候。其後隱居被仰付、子猪兵衛に被下候、御切米御扶持被下候。寛永元年二月十一日、病死。

一七四、柏尾猪兵衛。

武藏守樣へ被召出、御切米御扶持被下候。大阪兩陣御供仕候。其後父隱居、家督無相違被下候。明曆二年、少將樣より御加增六十石、都合三百石被下、町奉行被仰付、萬治元年四月二十六日、七十四歳病死。

一七五、柏尾半左衛門。後猪兵衛と改。

跡目二百四十石被下、御加增六十石被召上、猪兵衛と名をかへ申候。寛文元年十一月二十一日、四十四歳病死。

一七六、柏尾六之丞。岸藤右衛門組、二百四十石、三十四歳。

萬治三年十一月十五日、十歳にて御目見、寛文二年正月、父跡目無相違被下。延寶三年三月二十八日、禁裏御造營に付、京都へ罷上、御門の番被仰付、十一月二十八日、罷歸。四年七月十九日、番人の儀に付、京都にて無調法申上、御改易被仰付候。八年五月五日、歸參被仰付、七月朔日、御禮御目見仕候。

一七七、川口仲右衛門。播州高野郡、有田合戰に打死仕候由。

一七八、川口半右衛門。有田左京殿に罷有、三百石賜ひ、有田合戰に打死仕候。

一七九、川口三右衛門。

二三歳の時、半右衛門打死仕候。有田左京殿御息源八殿へ十三歳より被召仕、三百石被下候。別所小三郎殿と數度合戰有之、三右衛門十六歳、初陣より相勤、折節は慥成印を取申候由、又は小三郎殿陣中へ夜中押込、旗一本取罷歸候由、指物は有田殿家にて拵り、指物白黒段々の吹貫にて御座候。其後筑前中納言殿へ被召出、三百五十石被下候。折紙慶長四年三月三日に被下候。藤堂與右衛門殿より、三右衛門參候は、侍組被仰付、足輕二十人御預け可被成候間、參候へと家來北田五郎介と申者へ、御

自筆の御内書被遣、則御内書三右衛門方へ指越、于今所持仕候。其節御當家へ可被召出、御内意御座候に付、與右衛門殿へは
不參候。

輝政様へ慶長八年に被召出、三百石被仰付、十月六日、御折紙被下候。大阪兩陣御供仕候。後の御陣に首一つ取申候。正保四年七月二日、八十八歳病死。嫡子兵大夫、正保元年正月二十四日、病死。

一八〇、川口多左衛門。水野三郎兵衛組、三百石、五十九歳。京極刑部少殿に罷出候處、兄兵大夫病死仕故、父三右衛門御斷申上、正保二年四月五日、岡山へ罷越。

七月朔日、少將様へ御目見仕、同年十二月、三右衛門隱居被仰付、跡目無相違三百石被下。

一八一、梶田喜八郎。勝入様へ御奉公仕候由、病死仕候由。始は、御切米被下、後二百石被下、於播州病死。

一八二、梶田次郎大夫。後、寺尾孫四郎と申候。

元和四年、於因州少將様へ御歩行に被召出、下方角兵衛組に被仰付、其時寺尾孫四郎と申候。明暦三年七月二十九日、病死。

一八三、梶田喜八郎。七十俵五人扶持、五十五歳。

父存命の內、御歩行に被召出、承應二年正月五日、二十俵三人扶持被下候。明暦二年十一月、御手廻歩行に被仰付、五俵に一人扶持御加増被下候。同三年、父次郎大夫跡目、三十俵に四人扶持被下、私に被下候切米扶持被召上候。寛文六年二月十一日、中小生に被仰付、十五俵に二人扶持、御加増被下。延寶元年八月、伏見御屋敷御留守居に被仰付、造作料二十俵被下候。

一八四、梶田五兵衛。梶田次郎大夫が子なり。

承應二年、侍從様へ御歩行に被召出、本俵二十五俵三人扶持被下、萬治三年、御加増、本俵五俵一人扶持被下、御小人十人に被仰付、延寶元年御加増、今俵十五俵二人扶持被下、都合今俵六十俵六人扶持拜領仕候て、御中小生に被仰付候。延寶八年五月二十四日、病死。

一八五、梶田喜左衛門。水野三郎兵衛組、六十俵四人扶持、二十七歳。
延寳五年、少將様へ御歩行に被召出、八年十一月十日、父跡目六十俵四人扶持被下候。
一八六、河田助右衛門。　勝入様へ御奉公仕、三百五十石被下、慶長十五年六月十三日、病死。
一八七、河田次郎八。後は助右衛門と申候、
輝政様へ御奉公仕、慶長五年、於播州百五十石被下候。助右衛門病死後、跡目無相違三百五十石被下、助右衛門と改申候。寛永三年、於因州病死。
一八八、河田助右衛門。
寛永三年、跡目無相違三百五十石被下。寛文四年、江戸御留守番に參、八月十九日、於江戸五十四歳病死。
一八九、河田助左衛門。山崎大膳組、三百五十石、五十歳。養父助左衛門ために甥にて御座候。養父助左衛門實子無御座候。私を養子に奉願、願の通被仰付。
萬治三年三月朔日、少將様へ御目見仕候。寛文四年十月五日、跡知無相違、三百五十石被下。
實曾父千原九右衛門・同弟喜右衛門、兄弟共に宇喜多中納言殿に奉公仕、九右衛門は病死、弟喜右衛門は八丈島に供仕候。實祖父千原仁右衛門、中納言殿沒落以後、備中に在宅仕、承應元年七月十六日、病死。實父千原右衛門、寛文五年三月五日、六十三歳病死。
一九〇、金森安右衛門。
木村常陸殿に罷有、其後福島左衛門大夫殿にて、千二百石被下、其後三代以前の京極丹後守殿にて、千三百石の内にて、與力鐵砲二十人被申付候。寛永九年八月三日、六十五歳病死。一男金森權左衛門に六百石、二男金森甚右衛門に四百石、三男金森德右衛門に二百石被申付候。
一九一、金森權左衛門。六百石。外に足輕二十五人被申付、安智代迄奉公相勤、承應元年三月二日、四十七歳病死。
一九二、金森安右衛門。山崎大膳組、三百石、五十三歳。
父存生の内、別知に三百石、足輕三十人被申付候。父跡目被申付候節、爲加増百石被下、都合四百石賜候。二男權兵衛に二百

石被申付候。安智在京迄奉公仕候。安智方より少將様へ御無心申上、寛文三年二月被召出、同十九日、御目見仕、翌年七月朔日、三百石御折紙被下候。

一九三、子安兵衛。　寛文六年十一月十五日、少將様へ九歳にて御目見仕候。

一九四、加藤喜右衛門。　加藤九左衛門書上にあり、爰に略す。

一九五、加藤甚右衛門。　幼名、喜六。

輝政様より武藏守様へ兒小生に御附被成、其後於播州輝政様より百八十石、別知に被下、武藏守様備前へ御入國の後、御加增七十石被下、寛永十年十月六日、病死。

一九六、養子加藤次郎左衛門。　寛永十年十一月十五日、跡知無相違三百五十石被下。

實父は土方六右衛門と申候。森寺清右衛門所に居申候。其後加藤左馬助殿にて、二百石被下候。豫州松山にて病死仕候。加藤甚右衛門實子無之、次郎左衛門を聟養子に仕候。延寶六年四月四日、病死。

一九七、加藤次郎左衛門。　山崎大膳組、二百五十石、四十八歳。

延寶六年五月二十五日、跡知無相違二百五十石被下。

一九八、河田吉兵衛。

父を河田淸右衛門といふ、委不存候。生駒讃岐守殿に罷出、四百石被下候。兩度御加增にて、都合八百石被下候。折紙于今所持仕候。高麗陣に心馳仕、歸陣の後、組頭に被申付候。其後立退、金吾中納言秀詮卿にて、七百石被下候。折紙于今所持仕候。一兩年罷在、浪人仕候。

慶長九年、於備前武藏守様へ被召出、三百石被下候。寛永十八年正月十七日、六十九歳病死。

一九九、河田忠兵衛。　後は吉兵衛と申候。

吉兵衛子無之候に付、河合父助之進は、吉兵衛聟にて御座候故、助之丞嫡子忠兵衛を幼少より養置、養子に仕度と奉願、願の通被仰付、吉兵衛跡知、無相違三百石被下候。寛文九年十月十三日、五十五歳病死。

二〇〇、河田杢右衛門。　湯淺半右衛門組、三百石、三十六歳。

明暦三年九月朔日、八歳にて少將樣へ御目見仕、寛文九年、吉兵衛跡知、無相違三百石被下候。

二〇一、糟谷正藏。秀吉公に奉公仕候由。

二〇二、糟谷茂左衛門。

寛永十一年、少將樣へ被召出、御切米御扶持被下候由、同九年正月朔日、新知二百石被下候。承應三年十一月病死。

二〇三、糟谷茂左衛門。湯淺半右衛門組、二百石、四十歳。

明暦元年三月十一日、養父跡知、無相違被仰付。實父糟谷玄行法眼、養父茂左衛門兄にて御座候。

二〇四、香取。先祖、下總國香取郡香取村の者。

二〇五、先祖香取修理大夫橘朝臣忠供。平將門御退治の時、致忠候。下總國香取郡・海上郡二郡領知仕候由。修理大夫嫡子は、大僧都法印宥玄阿闍梨海譽と申出家にて、沖の山と申所の中興院寺持居申候由。同二男香取中務少輔橘忠勝、同刑部輔橘勝貞。

二〇六、香取修理佐橘勝家。是は下總國大戸川城主、飯篠長威入道に兵法を習、家に傳申候。

二〇七、香取隼人佐橘勝利。同内記少輔橘勝房・同河内守橘勝政、右代々申傳候儀、又は書物に御座候通、書付申候。具儀は不存候。

二〇八、香取土佐。下總國司知葉殿に居申由。

二〇九、香取兵左衛門。

天正二年、下總より上方へ出、同三年、美濃國金山にて、森武藏守殿に罷出申候。同國伊不賀の城主肥田玄蕃と申御座候を、武藏守殿御攻被成候時、心馳仕候て、五十貫被下候。其後信州飯田郡高遠城、武藏守殿一時攻に被成候時、心馳にて、知行百五十石被下候。天正十二年、尾張國樂傳にて、武藏守殿御敗軍の時、二十人計殿（しんがり）仕候内、鐵砲頭可兒藤介・三浦清左衛門・荒尾彌平次、鐵砲六十挺を三段に仕、繰引に仕申内、羽黒にて兵左衛門追々隔、大勢に被取籠、七八箇所手負、難儀に及申所、瀧部越中可兒藤介懸付け、召れ退申候。同三月（四月ならん）に武藏守殿、於長久手御打死以後、同右近殿へ御奉公仕居申候。金山にて新影流太刀、疋

田文五郎に稽古仕、依之關白秀次公御打太刀に被召出候に付、參內被仰付、和泉守藤原忠家と被成被下候。其後御訴訟申上候事遂ニ意、浪人仕奥州へ參候。秀次公御切腹の後罷上り、加藤肥後守殿へ、浪人分にて居申所、慶長八年美濃國へ子共見廻に罷越度由、御斷申罷上り候節、備前へ立寄候へば、武藏守様御留被成、肥後守殿へ御斷申上、慶長八年被召出、同九年、二百石被下候。播州へ御國替の後、隱居被仰付、地藏院宗歸と申候。法體以後地火をたべ不申、天火にて食物を拵申候に付、天火取申水精玉を被下候。其水精於今所持仕候。地藏院には、本俵五十俵七人扶持被下候。嫡男作兵衛、家督無相違二百石被下、病死仕子治部右衛門に二百石被下候處、病氣に成申候に付、子權之丞に百石被下權之丞若輩にて病死、跡潰申候。

二一〇、香取儀右衛門。（地藏院二男なり。）

元和元年霜月二十四日、於姬路地藏院家督、武藏守様より被下候。正保元年、御加增十俵被下候。慶安三年十月二十八日、御知行百五十石被下候。萬治元年十月十五日、六十二歳病死。

二一一、香取儀右衛門。（湯淺半右衛門組、百五十石、四十一歳。）

七歳にて少將樣へ御目見仕候。萬治元年、父儀右衛門跡知百五十石被仰付候。延寶二年正月十五日、子兵五郎侍從樣へ御目見仕候。

二一二、香取七之進。（地藏院宗歸三男なり。）

慶安四年二月十一日、御小生組に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。天和元年二月二十八日、七十九歳病死。

二一三、香取六之進。（六十八俵四人扶持、三十一歳。）

寬文四年正月十五日、九歳にて少將樣へ御目見仕候。父七之進病氣に罷成候に付、名代御奉公申上度奉願、寬文十一年十月十日、願の通被仰付、延寶九年父家督、無相違被仰付候。

二一四、吉田孫六。

輝政樣岐阜に被成御座候時、兒小生に被召出、其後孫大夫と申候。於參州吉田病死。

二一五、吉田與三兵衛。（孫大夫病死仕候時、與三兵衛六歳にて跡目百石被下候。）

輝政様御卒去以後、左衛門督様へ御附被成候處、宮内様へ御貰被成、二百石被下候。其後御機嫌損申事御座候に付、荒尾内匠方より、宮内様御内意の由にて、池田備中守様へ御預被成、二百石被下、池田出雲守様迄御奉公申上候。御加増五十石被下候。出雲守様御遠行以後、浪人仕、慶安三年、於備中病死。御代々拜領仕候所付、御折紙于今所持仕候。

二一六、加藤文大夫。湯淺平右衛門組、八十俵四人扶持、五十五歳。

母方の伯父加藤源八、少將様御近習に被召仕候。病死無子跡斷絶仕候。依之不便に思召、跡目にては無之、私被召出候御意の由に付、氏を改め、加藤に成申候。

承應二年二月十五日、御目見仕、本俵三十俵四人扶持被下候。延寶二年二月二十七日、御加増三十俵被下候。

二一七、片山大學。秀吉公へ御奉公仕、長島陣に打死仕候。

二一八、片山治左衛門。

秀吉公播州三木城御取詰被成候時、蜂須賀右衛門殿御取次にて被召出、跡目御禮申上候。則彦右衛門組に被仰付候。播州御着村取出、敵明退申刻、十七歳にて鎧下の高名仕候。

播州廣瀬城主宇野落去の時も、度々手に合申候。彦右衛門殿に付、同國瀧野に罷在候。其後立退、岐阜三七殿へ罷出候。三七殿御切腹の後、在所濃州各務郡前渡村へ參居申候。

勝入様美濃へ御所替被成候に付、江州瀬田迄罷出、梶浦六七肝煎にて、勝九郎様へ被召出候。犬山の城一番働仕候に付、御感被成、則庭へ足輕十人被仰付、岩崎城にても手に合申候由、於長久手御父子様御打死被成候に付、浪人仕、蜂須賀阿波守殿に被召返、番頭被仰付、本知五百石、加増三百石、以上八百石被下、其後高麗陣に打死仕候。

二一九、片山五郎兵衛。後、治左衛門と申候。

次左衛門打死の時、五郎兵衛幼少故、跡御立不被成、加島主水に御預け被成候。成人仕り、跡目御立候事遲々仕候に付、立退福島左衛門大夫殿へ三百石にて罷出申候。廣島落去以後、加藤左馬助殿へ二百石にて出申候。會津へ供仕、式部少輔殿迄奉公仕於彼地病死。右兩家に居申時、治左衛門と申候。

二二〇、片山文七。湯淺半右衛門組、四十七俵四人扶持、五十一歳。

明暦二年極月、御家へ小十人に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下。萬治二年、中小生に被仰付、御加増今俵八俵被下、都合今俵四十七俵四人扶持被下候。

二二一、養子團之丞。　貞享二年十月十五日、御目見仕候。當年十八歳に成申候。

二二二、加納小左衛門。

勝入様へ被召出、百五十石被下、節々御備御供仕、心馳も仕候由。慶長五年一亂の刻、參州吉田より、若原勘解由を大阪御屋敷の御留主居被仰付參候。小左衛門儀、關ケ原御陣場より、大阪御屋敷へ御使被仰付、關所々々色々申通り、御書は細割にて笠の緒に仕り持參仕候。首尾仕候に付、御加増百五十石被下、都合三百石拜領仕候。其後池田加賀へ御附被成候。寛永三年十一月二十七日、病死。

二二三、加納覺右衛門。

次右衛門跡目、無相違三百石、佐渡申付候。佐渡煩に付、少將様へ被召出、三百石被下、承應二年十月朔日、御目見仕候。貞享元年三月三日、六十一歳にて病死。

二二四、加納小左衛門。若原監物組、三百石、二十五歳。

寛文七年三月十五日、少將様へ御目見仕、貞享元年六月十一日、從江戸跡目無相違、三百石被仰付候。

二二五。神戸喜左衛門。

勝入様へ御歩行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、於姫路病死。

二二六、神戸喜左衛門。

跡目無相違被下、於鳥取寛永七年三月六日、病死。

二二七、神戸喜左衛門。

跡目無相違被下、寛文九年正月十四日、病死。佐左衞門は、別格に被召出候故、跡目被召上。

二二八、神戸佐右衞門。

正保元年極月、少將樣へ御步行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下、同四年、十五俵三人扶持御加增被下、承應二年、中小生に被仰付、十五俵御加增被下、延寶二年、新知百石被下、同三年五月二十三日、病死。

二二九、神戸佐右衞門。若原監物組、百石、四十八歲。

明曆元年極月、侍從樣へ十人組に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、寛文六年、中小生に被仰付、本俵五俵御加增被下、延寶三年、父跡目無相違百石被仰付候。

二三〇、子權十郎。天和三年九月九日、御目見仕候。

二三一、神戸八左衞門。若原監物組、四十七俵四人扶持、四十六歲。西の神戸佐右衞門は二男なり。

寛文三年三月二十四日、侍從樣へ御步行に被召出、三十俵三人扶持被下、同六年、御近習步行に被仰付、同九年七月十一日、十人組に被成、八俵一人扶持御加增被下、延寶三年五月十二日、父佐右衞門病死仕候に付、跡目今佐右衞門に被仰付、今佐右衞門に被下候御扶持切米四十七俵四人扶持、私に被下、中小生に被仰付、父佐右衞門跡役被仰付候。

二三二、子權之丞。延寶八年二月十五日、御目見仕候。

二三三、加々野勘右衞門。

尾州犬山にて勝入樣へ御奉公仕、其後輝政樣へ御附被成、天正十八年十月十八日、百八十石被下、慶長六年十一月三日、三百五十石に被成被下、右の內二百石は加々野彥作と申甥に相渡、百五十石は、甥の吉大夫に心當仕居申所慶長九年十二月晦日、播路にて病死。

二三四、加々野吉大夫。母方の伯父、勘右衞門養子に仕候。

五歳の時養父病死に付、幼少の間知行御預り、十五歳に成申候はゞ、右の百五十石必可被下候の由、其内堪忍分と被仰、二十五俵七人扶持被遣候。十五歳に成不申内に輝政様御卒去被成候。右の通父書付置候。病氣に成候故、又三郎を名代に、寛永十八年より御奉公勤させ申候。寛文七年正月十三日、六十九歳病死。實祖父清左衛門、實父堀九右衛門事は、堀彌二郎書上に同じ。

二三五、加々野又三郎。若原監物組、三十九俵七人扶持、六十歳。

寛永十七年、十五歳にて少將様へ御目見仕、正保元年、父吉大夫隱居、家督無相違被仰付。

二三六、子勘右衛門。延寶六年二月十五日、十二歳侍從様へ御目見仕。

二三七、門田喜右衛門。荒木攝津守方に罷在候。

其後勝入様へ攝津國伊丹にて、山脇源大夫と一所に與力組に被召出候。於姫路輝政様より、慶長六年十月三日、三百石被下候。於濃州御川越の時、働御座候由。大阪にて五月七日、淺黄者打取申候由。於因州年罷寄、隱居奉願、家督無相違喜大夫に被下、隱居料も被下候由。於備前寛永十三年三月二十二日、八十二歳病死。

二三八、門田喜大夫。

於岐阜輝政様へ中小生に被召出、御切米御扶持被下候。於大阪五月七日、淺黄者打取申候由。寛永十八年、御銀奉行被仰付、正保元年御勘定指上、同年より相司に被仰付、御役料本俵四十俵充被下、慶安二年、御役儀御斷申上、御免被成候。承應三年十月二十六日、隱居被仰付候。萬治二年七月二十六日、七十五歳病死。

二三九、門田市郎兵衛。

慶安二年二月、少將様へ中小生に被召出、三十俵四人扶持被下、承應三年十月二十六日、家督無相違二百石被仰付寛文七年正月八日、五十八歳病死。

二四〇、門田新平。二百石、二十二歳。

寛文七年二月五日、跡目無相違二百石被仰付候。同九年三月二十二日、六歳にて繼目の御禮申上候。

一四一、門田茂右衛門。九十二俵四人扶持、五十八歲。門田喜大夫子、

慶安元年十一月二十五日、於御花畑御的被仰付、初て御目見仕、同三年十月十四日、御合力米本俵二十俵被下候。承應三年十月二十六日、中小生に被仰付、本俵四十俵四人扶持被下候。貞享元年二月十六日、御加增三十俵被下候

一四二、輕部圓之介。六十一俵四人扶持、三十四歲。若年の時、兒小生に被召出。

一四三、金光太郎右衛門。宇喜多中納言殿に、四百石給居申候。

一四四、金光安兵衛。宇喜多遠流の後、兒島郡之内へ引込病死仕候。

一四五、金光清右衛門。四十七俵四人扶持、四十八歲。

寛文二年二月二十二日、御歩行に被召出、三十一俵三人扶持被下、延寶二年正月九日、御側歩行に被仰、九俵一人扶持御加增被下、同五年七月二十七日、小生組に被仰付、御加增七俵被下候て、數馬樣へ御附被成、同六年十二月二十七日、數馬樣御卒去被成候。

一四六、子龜之介。天和二年正月十五日、十歲にて御目見仕候。

一四七、河原藤四郎。

寛文十年六月、御歩行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下候。延寶八年十月九日、病死。

一四八、養子河原左助。五十俵四人扶持、四十六歲。津熊彌二右衛門二男にて御座候。五歲の時、河原藤四郎養子に成申候。

寛文九年閏八月八日、少將樣へ御歩行に被召出、三十一俵三人扶持被下、同八年六月二十五日、御手廻歩行に被仰付、九俵一人扶持被下、同九年正月十日、御歩行横目被仰付、五俵御加增被下、天和三年八月二十一日、御小生組に被仰付、五俵御加增被下、御郡方吟味役被仰付に付、御役料米四十俵并鐵砲一人、御小人一人被下置候。實祖父津熊彌次右衛門池田下總方に罷在、於因州病死、實父池田下總方に罷有、於備前病死。

一四九、菅玄蕃。上杉景勝に奉公仕、後浪人仕、奥州福島に居住仕候。

二五〇、菅玄蕃。 始終浪人にて、福島に罷在候。

二五一、菅彌兵衛。 十三歳にて諏訪郡惣右衛門方へ罷越、馬稽古仕候後に惣右衛門方の御馬責に被召出候。正保三年、御暇申請候。
慶安元年二月十八日、於江戸荒木十左衛門殿御肝煎にて少將樣へ被召出、二百石被下候。延寶四年三月十一日、病死。

二五二、菅八內。 二百石、四十三歳。
慶安三年春、於江戸少將樣•侍從樣へ御目見仕候。寛文三年正月二十八日、少將樣へ被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。延寶四年五月七日、父跡目無相違二百石被下候。

二五三、子萬助。 貞享元年二月十五日、九歳にて御目見仕候。

二五四、菅半之助。 四十五俵四人扶持、二十二歳。菅彌兵衛次男にて御座候。
延寶四年九月十日、少將樣へ兒小生に被召出、四十五俵四人扶持被下候。

二五五、鄉司七右衛門。 七十俵五人扶持、四十歳。鄉司彌兵衛弟なり。
延寶六年七月、少將樣へ御小生組に被召出、七十俵五人扶持被下候。同八月十七日、五貫目炮烽火矢十町御野郡於波武村御上覽被成候。同九月十六日、二貫目棒•火矢五町於竹田河原御上覽。

曾祖父鄉司常閒、樂田殿に奉公仕候。樂田殿は信長公旗下の由。祖父鄉司作內、樂田殿死後、信長公へ被召出候由。信長公御傷害の後、勝入樣へ被召出、百五十石の御折紙被下、伊木清兵衛與力に被仰付、秀吉公於山崎明智光秀と御合戰の節、伊木清兵衛と小崋惣右衛門•作內三人、物見に出候て、一所に働申、作內指物黑き四半、何時より清兵衛家來に成候や、不存候。三百石鐵砲二十申付候。大阪兩御陣、伊木長門供仕候。其後隱居仕、常喜と申候。家督鐵炮共、無相違嫡子鄉司與三左衛門に申付候。寛永八年九月十九日、常喜八十四歳病死。父鄉司七兵衛、作內二男なり。伊木長門兒小生より被召使候。大阪兩陣、長門供仕候初知百五十石申付候。其後二百二十石持筒二十申付候。後の長門時分、裏判役仕置等仕候。慶安四年四月二十日、六十歳病死。家督嫡子鄉司彌兵衛に申付候。

二五六、鄉司覺左衛門。　六十俵五人扶持、三十八歲。鄉司七兵衛末子にて御座候。

伊木勘解由證人に江戶に罷在候時分、兒小生に呼出申候。其後三十六俵三人扶持申付候。延寶元年五月六日、暇もらい申候。天和元年三月、於江戶少將樣可被召出旨、山內權左衛門申渡候。御歸國被成、同十一月朔日、中小生に被召出、六十俵五人扶持被下候。

二五七、加藤彌藏。　信長公に居申候由。

二五八、加藤十郎兵衛。

武藏守樣へ於備前慶長八年被召出、百五十石被下候。正保三年七月、隱居被仰付候。承應三年十二月十七日、七十四歲病死。

二五九、加藤十郎兵衛。

家督無相違被仰付、正保四年正月十五日、御折紙被下、延寶元年四月二日、六十三歲病死。

二六〇、加藤權之丞。

跡目無相違被仰付、延寶四年九月十六日、二十八歲病死。

二六一、加藤權之丞。　養子傳兵衛子。

權之丞子無御座、私せがれ五郎三郎養子に被仰付、跡目無相違被仰付、延寶五年十一月二十四日、九歲病死。斷絕。

二六二、加藤傳兵衛。　初十郎兵衛が子なり。五十俵四人扶持、五十一歲。

延寶五年十二月十三日、被召出、五十俵四人扶持被下。

二六三、子次郎大夫。　天和三年正月十五日、御目見仕候。

二六四、梶原甚左衛門。　役小生、大船頭、水野三郎兵衛組、六十二俵四人扶持、三十九歲。高祖父梶浦駿河、播州高砂ニ身邊領知仕居申候由。

二六五、梶原左兵衛。

左兵衛兄兵衛佐と申候。兄弟一所に高砂二身邊領知仕居申候。秀吉公御出陣の時、高砂に押へ御座被成候に付、兵衛佐・左兵衛兄弟、共に高砂へ引籠、松原と申所にて一戦仕候。其後降參仕、右同所知行に被下候。其比九州にも梶原名氏御座候に付、播州の梶原と惣領・庶子の儀、秀吉公御吟味の上にて、播州の梶原惣領筋に相極り、兵衛佐を秀吉公より平藏に被成候。秀吉公九州御出陣の刻、平藏・左兵衛出陣、日限四五日遲く候由、御改易被仰付、宇喜多中納言殿家老花房志摩篤に、左兵衛は姉聟にて御座候故、志摩に懸り申候。兄平藏も備前へ罷越候。兄弟共に法體仕、平藏は永宗と申、備前にて病死仕、一族も知行所磐梨郡澤原近邊に葬申候。于今梶原塚と申塚御座候。左兵衛は長入と申候。長入子數多御座候。中納言殿へ被召出、何も知行にて居申候由、其後中納言殿家來次郎兵衛と申者の儀に付、家中出入御座候て、長入子共不殘立退申候。長入は二身へ引込居申候長入儀、中村主殿申上、輝政様へ浪人分に被召出、百人扶持被下候。

二六六、梶原五郎右衛門。

宇喜多中納言殿にて、三百石被下、花房志摩組に居申候。高麗陣南門夜打城乘の時、五郎右衛門首を取申候時、味方首を奪、五郎右衛門も手負申處、阿鄉五兵衛・更井藤次と申者、相組に御座候故、兩人彼者追拂、五郎右衛門に首とらせ申候由、更井藤次は、後與田彌五右衛門と申、宰相様へ被召出候由、五郎右衛門儀、中納言殿浪人仕、名島中納言殿へ本知三百石にて被召出、平岡石見組に居申候。名島中納言殿潰申候て、又浪人仕、長入方へ參候中村主殿を頼、御奉公仕度旨申候處、主殿申候は、長入大分の扶持方被下候上難申上候。幸御船頭の内明き有之候間、輕き奉公にて不苦候はゞ、入置可申やと申候に付、御船頭に罷出二十石に四人扶持拜領仕候。慶長十六年七月十九日、長入七十一歲病死仕候。跡目の儀何共、其品無御座候に付、五郎右衛門御暇の儀、主殿迄奉願候處、追て被仰付も可有之候間、先其儘御奉公申上候へと、主殿指留申候處、輝政様御卒去被成候に付、何の被仰付も無御座候。元和元年大阪陣供仕候。五月六日迄、武藏守様御陣所、尼崎に被成御座、候同七日に御陣所御替、神崎川御越被成、中の渡り下口に御陣取被成候。岸越中は船にて、同所中島に舟備仕居申候。新地村を燒立、武藏守様へ越中方より、御注進申上候處、中島村堅居申候様にと被仰付候に付、戸山五郎左衛門・安田茂兵衛此三人の者、舟より揚り、大阪の體見及に福島近邊迄參候處に、大阪に火の手上り、御所様御陣御競の様子見へ申候に付、則福島の在家に、右三人の者として火をかけ、岸越中にも申聞、川を越候へと申候。武藏守様へ注進に、戸山五郎左衛門・岸越中乘替の馬にて參ると、武藏守様も神崎

川御渡り、大阪へ御詰被成、首數多御手に入申候由。右三人福島の在家に火をかけ、御注進申上候儀、心懸の樣に御意被成候由。大阪御普請の時、犬島より大石獻上の時、長三間四尺・横九尺・厚八寸の石、大阪へ被遣候時、宰相樣御普請奉行、佐橋三郎兵衛・丸山三郎兵衛、犬島へ參、兎角段平に御石積れ不申候に付、右の石切申筈に相極申候處に、湯淺次郎右衛門を呼出し、御獻上の大石段平に積れ不申に付、切申相談に極申、何とぞ積れ申間敷やと尋申候處、五郎右衛門は、か樣成珍敷大石、御獻上に切候事、殘念に存候。何とぞ積上り可申と、五郎右衛門一人請相申候。海上にて大事出來申候へば、五郎右衛門切腹と相究居申由、御石段平に積、水の上五六寸御座候へ共、折節順風にて、海上無異儀大阪に着申候由。正保二年七月十八日、七十一歲病死。

二六七、梶原七右衛門。

寛永九年十月三日、十八石三人扶持にて被召出候。正保二年十月二十日、跡目無相違二十石四人扶持被下、御用共も無相違被仰付、寛文八年九月晦日、七十三歲隱居被仰付、同十一年八月二日、七十六歲病死。

二六八、甚左衛門。

寛文八年九月晦日、家督役儀共に、無相違被仰付、延寶三年四月十二日、私相勤候御用の分、梶原平右衛門役儀と入替に、相勤申樣に被仰付、安田茂兵衛相役、惣御船の預り御道具共に請拂仕候。天和三年十二月二十六日、寺見三右衛門・兒島惣次郎、御加子引廻し御用の安田茂兵衛相勤申候。御用右四人、兩御用打込に相勤可申と被仰付候

二六九、梶原平右衛門。　役小生、大船頭、水野三郎兵衛引廻四十七俵三人扶持、六十九歲。梶原五郎右衛門子にて御座候。

寛永十五年より正保三年迄、父五郎右衛門年寄御用多に御座候に付、中村主馬申付、五郎右衛門に懸り居申内より、御用相務候。正保二年六月八日、十五石〔マヽ〕扶持にて被召出、延寶二年十二月二十九日、中小生に被仰付候。

吉備溫故秘錄卷之七十三（干城二）終

吉備温故秘錄卷之七十四（原本、無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　三（原本、干城七）目錄

六九、熊田平介。
七〇、栗屋助大夫。
七一、熊谷八大夫。
七二、熊谷八助。
七三、工藤吉左衛門。
七四、子 半兵衛。
七五、桑原六郎兵衛。
七六、桑原甚五兵衛。
七七、桑原彦右衛門。
七八、桑原市右衛門。
七九、草谷助右衛門。
八〇、草谷藤右衛門。
八一、草谷八郎兵衛。
八二、子 草谷藤七。
八三、孫 九八郎。
八四、荒木徳右衛門。
八五、久代小兵衛。
八六、久代源八。
八七、楠 五郎四郎。
八八、楠 市平。
八九、楠 五郎四郎。
九〇、楠原五平次。
九一、楠原惣九郎。
九二、近藤與九郎。
九三、近藤覺兵衛。
九四、近藤覺兵衛。
九五、子 太郎八。
九六、内海惣四郎。
九七、近藤彦七。
九八、子 鹿之助。
九九、小畠越前。
一〇〇、小畠四郎右衛門。
一〇一、小畠儀左衛門。
一〇二、小畠四郎右衛門。
一〇三、子 小畠龜之丞。
一〇四、小畠助兵衛。
一〇五、小堀彦左衛門。
一〇六、小堀彦左衛門。
一〇七、小堀彦左衛門。
一〇八、山本藤左衛門。
一〇九、近藤治左衛門。
一一〇、近藤惣右衛門。
一一一、子 惣三郎。
一一二、五藤小左衛門。
一一三、五藤豐右衛門。
一一四、五藤八兵衛。
一一五、子 文左衛門。
一一六、國府民部。
一一七、國府市兵衛。
一一八、國府六左衛門。
一一九、國府四兵衛。
一二〇、子 權三郎。
一二一、小崎與七郎。
一二二、小崎半兵衛。
一二三、小崎半兵衛。
一二四、小崎彦大夫。
一二五、小泉忠兵衛。
一二六、小泉與右衛門。
一二七、小泉與右衛門。
一二八、子 權七。
一二九、小崎太郎右衛門。
一三〇、小崎吉左衛門。
一三一、小崎吉左衛門。
一三二、子 七内。
一三三、小塚與六。
一三四、小塚兵助。
一三五、安井猪右衛門。
一三六、小塚段兵衛。
一三七、小塚源藏。
一三八、後藤市兵衛。
一三九、後藤平大夫。
一四〇、後藤善右衛門。
一四一、子 多左衛門。
一四二、山名伊織。
一四三、山名六左衛門。
一四四、小林甚右衛門。
一四五、小林甚右衛門。
一四六、小林孫七郎。
一四七、小島若狭。
一四八、小島三助。
一四九、小島彌二兵衛。
一五〇、小島龜右衛門。
一五一、小林。
一五二、小林猪大夫。

吉備溫故秘錄卷之七十四（干城三）目錄終

吉備溫故秘錄　卷之七十四

大澤惟貞輯錄

干城　三（原本、干城七）

一、岸兵左衞門。

勝入樣へ犬山に被成御座候時、御奉公に出申候由。兵左衞門心馳の義、度々の由に御座候へ共、承及候は、攝津國花熊城勝入樣御攻被成候刻、兵左衞門と弟傳七と兄弟一同に一番乘仕由。勝入樣明智と御合戰の刻、於山崎寶寺、伊木淸兵衞手にて能働候由。於長久手、勝入樣御打死被成候刻、たきがはな權內押に被遣、長久手へは御供不仕候由。

二、岸越中。

十二歲にて勝入樣へ被召出、十六歲之時初て高名仕候由。於關原も手に合申候由、金松又四郎殿見申候處にて高名仕、則輝政樣へも被申上候由、武藏守樣備前入國之時、武藏守樣へ御附被成候由。大阪兩陣御供仕候。大阪後之御陣御舟共召連しんけいへ相詰、福島燒拂、あさき者には御座候へ共、首打取指上候。其使に申上候は、大阪せんば敵張出相見へ申候、天王寺の方にも武者煙夥敷立申候間、御合戰始候と相見へ申候間、急御人數川を御越せ可被成候旨御注進申上、越中は相組中並に御預けの御鐵炮の者召連て、一所に川を越、せんばへ參、大阪へ相詰、首共打取上申候。大阪落去以後武藏守樣御意被成候。天王寺大阪の見合、越中早御注進申上候。御感被思召候由。寬永三年卯月十一日、六十三歲於因州、病死。

三、岸織部。

跡知無相違六百石、相組御鐵炮被仰付候。元和元年大阪御陣越中と一所に御舟手より相勤申候。同十九年相組差上候趣意は、小身者組御預被成候ては、御急用之時諸作廻萬事に付て、御爲不可然奉存候。外に滯申心根無御座由、以神文御斷申上差上申候。同年御船手役義被仰付。承應元年六月九日、五十一歲病死。

四、養子岸藤右衞門。番頭、千石、六十二歲。

右梶浦大隅三男にて御座候。寬永十六年織部方へ養子に被仰付候。

慶安二年三月、本俵十五俵・御扶持五人被下候。織部跡目六百石・御鐵炮二十挺無相違被仰付、父織部不勝手に付、正保元年之暮、御城銀三十貫目、月一歩の利足にて拜借仕候。右の御定に返上仕候ては、御奉公難勤被思召候に付、御預けの御鐵炮十人・小頭相夫共の、御給・扶持共に、御米にて被下候故、年々利分に元銀少し宛加返上仕候。父相果候節返上の殘、二十五貫目餘御座候。此節より無利に被仰付候。上納銀高都合五十貫目餘にて、明曆三年迄に返上仕候、私不勝手に付在宅被仰付候。然共御鐵炮は其儘被仰付候。寛文二年春、簡略、明岡山へ罷出候。和氣郡寒川村在宅仕居申內、開地仕候。右之地罷出候へば、被召上候御法に御座候へ共、在宅之仕形宜樣に被聞召、後々迄私に被下候旨、寛文二年春、池田伊賀申渡候。寛文六年十月七日、御船手役被仰付。同十二年十月三日、御小生頭に侍從樣被仰付候、並忍の者八人御預け、御鐵炮二十挺は御持筒を被仰付候。御役料百俵宛被下、延寶二年十二月十五日より、禁裡御造營御手傳に付、御國の御用元〆判被仰下、同二年より四年まで相勤申候。依之物書一人爲小遣、御鐵炮並の者一人、右給・扶持御米にて被下候。物書分に三十一俵一斗、小遣者之分に二十九俵八升、但し一年分拜領仕候。同四年十月二十三日、御直に御小仕置役被仰付候。御小生頭は御赦免、御預來之御鐵炮二十挺、種ケ嶋になされ、足輕肩上役御免、拔人にては被召仕間敷旨被仰付、御役料二百俵宛被下候。同五年閏十二月二十八日、御番頭役被仰付、相組十六人御直筆に御書付、御直に被下候。御加增四百石被下、都合千石に被成下、御小仕置御鐵炮其儘被仰付、同六年九月九日、土鐵炮二十二人、爲組頭、右田彌次右衛門御添組に御入被成候。岩千代樣御養、侍從樣四十二之御二ッ子樣にて被成御座候間、御誕生被遊候はゞ、私方にて御成長被遊候樣にと御內意に付、五日目御吉日に付、同年九月十四日私宅へ被爲成候。御名私に奉附樣にと御意に付、三九郎樣と奉申上候。同年銀子一貫目拜領仕候、並翌年之春、三九郎樣爲御入用御米三百俵宛天和二年迄每年被下候。同七年十二月十四日、三九郎樣御名替り被成樣にとの御內意に付、岩千代樣奉申上候。同八年、近所より火事出來仕、私家類火に燒失仕、岩千代樣被成御座之處、作事御入用之爲、御銀二百枚拜領仕並淺野瀨兵衛屋敷御添被下、存之通心儘作事可仕候。右御部屋共に後々迄被爲下之旨なり。同年三月三日、岩千代樣西ノ丸へ初て被爲入、少將樣御腰物被進、同年三月十日御髮置、天和二年二月十一日、岩千代樣御袴召初、同三年

二月二十一日、岩千代様江戸へ御發駕、私幷世悴傳四郎御供仕、三月十日、江戸御着座、同十九日、御前へ被爲召、雖有御意にて、波平之御腰物、日置左門取次にて頂戴、並に御召御羽織拜領仕、世悴傳四郎御前へ被召出、御小袖一頂戴仕候。父子共御料理被下、御暇被下、四月朔日、岡山罷歸候。侍從様御意、私老母無事に居申旨被爲聞召候。岩千代様御機嫌能御發駕、恐悦可奉存旨、可申聞由被仰出候。岩千代様御機嫌能御着座、御滿悦因玆御前様より銀五枚被下、岩千代様より銀十枚私に被下、銀十枚私母へ被下、銀五枚傳四郎に被下、銀三枚私娘に被下、銀五枚梶浦勘介に被下、金子三百疋家來景山茂右衛門拜領、金二百疋私方にこ被召仕候女澤拜領、金三百疋私家來共頂戴仕候。

私名、傳四郎と申候。繼目之御禮申上候節、養父之名に改申様と少將様被仰付、天和二年迄は織部と申候處、堀田織部様に指合候間、替候様にと被仰付、同年八月十五日藤右衛門に改申候。

五、子傳四郎。

寛永四年六月朔日、少將様へ初て御目見仕、同五年十一月十五日、侍從様へ初て御目見仕。

六、木戸九郎左衛門。木戸十乘坊に奉公仕、丹波國に私田有之果申候由。

七、木戸源介。增田右衛門殿に奉公仕、二百石給候。小田原高麗陣相勤、其後浪にて果申候。

八、木戸作左衛門。增田右衛門殿に罷有、其後金吾中納言殿へ奉公仕、四百石給候。於關ケ原手負申候由。中納言殿卒去巳後、浪人仕候。

慶長八年武藏守様へ被召出、二百石被下候、慶安三年願之通隱居被仰付、家督無相違私兄木戸彌五兵衛に被仰付候。作左衛門は明暦元年九月十三日、病死。

九、木戸彦兵衛。寄合組、三百石五十六歲。

明暦二年春十人組被召出、二十五俵四人扶持被下、同年冬御加增十俵被下、御祐筆役被仰付。萬治三年正月十四日、御加增五俵被下。寛文二年正月二十日、御加增十俵被下、同五年五月十八日、新知百五十石被下、延寶二年十一月十三日、御加增五十石被下、同五年八月三日、御祐筆支配被仰付、御役料九十俵被下、同年十二月十三日、替り指物被仰付、同幕借銀高十六貫八百目の書出仕候。同八年正月十三日、借銀大分にて御奉公難勤可有之候間、右借銀

高の内、拜借銀十二貫三百目餘、御延捨被下候旨被仰渡、天和三年十二月十六日、御加増百石被下、御祐筆頭役被仰付、貞享二年三月、於江戸御通の儀に付、世悴彦次郎手前へ御尻被遊、私は御役儀被召上、閉門被仰付、十一月朔日、御捨免、寄合組へ御入被成候。

一〇、子彦次郎。始は梶之助と申候。

天和三年十月十五日御雇にて、來年江戸御供可被仰付旨、四人御扶持方被下、御法の通御國にては金子、江戸被召連候時は銀子被下候。貞享二年三月、於江戸御通の儀に付、御兒小生中一同に頭迄斷申候。仕形無調法に付、八月四日手前へ御尻被成、八月十五日閉門御免被成候。

一一、木崎久助。大谷刑部所に兒小生仕居申候。喧嘩仕、刑部方を立退、荒尾志摩方へ參居申候。

武藏守樣備前へ御入國の時、被召出、三十俵四人扶持被下候。きむしと申者御成敗被成候時、松村傳兵衛・木崎久助兩人に被仰付、打申候。慶長十六年、少將樣御三歲にて江戸に御下向被成候時、御加增二十俵二人扶持被下、江戸御供仕候。同十八年六月四日、於江戸病死。

一二、養子木崎作左衛門。久助ために養子にて御座候由。實父は大阪陣にて打死罷候由、幼少の時故、實父名・名氏其外品々不存候。久助ために、作左衛門は母方の親類故、養子に仕候。

跡目無相違被仰付。天和三年、少將樣因州へ御入國の時、三十俵御加增被下、寛永十四年閏三月五日、百五十石被下、寛文五年八月二十七日、七十歲病死。

一三、木崎久右衛門。近習旗本長柄頭、百五十石、五十一歲。

慶長元年十一月十一日、少將樣へ初て御目見、同三年三月四日、被召出、木俵二十俵三人扶持被下、兒小生役被仰付、承應四年三月十八日、中小生役被仰付、寛文五年十一月朔日、跡目無相違百五十石被仰付、同六年御納戸奉行被仰付、天和二年六月十五日、少將樣御遺物御道具、江戸へ山内與八郎私兩人、持參仕候樣にと被仰付、六月二十三日、岡山罷立、七月八日江戸へ參着、九月十九日、岡山へ罷歸候。同三年閏五月十四日、中小生に被仰付、澤權大夫組に御入被成、同年六月十八日、奧中小生に被仰付、同年七月十五日、御近習御鐵奉行被仰付。

一四、子源吉。

延寶二年二月十五日、少將樣へ御目見、同四年二月八日、少將樣兒小生に被召出、四十五俵四人扶持被下、天和三年閏五月十四日、池田左兵衞組に被仰付。

一五、喜多嶋和泉。

信長公へ御奉公仕、年罷寄、城之助殿へ御附、岐阜の御城番被仰付候。城之助殿御死去以後浪人仕、和泉聟堀左衞門方へ參、於江州澤山、病死。

一六、喜多嶋忠右衞門。

城之助殿に奉公、其後堀左衞門所に罷在、子息久太郎守に被附、越後の內小鶴木の城預け被申、二千石被宛行候。筑紫陣の時、左衞門聟召仕候。下村與次右衞門と申者慮外仕、左衞門聟深手負申所、忠右衞門被合、下村を仕留申候。忠右衞門其節は喜多嶋庄右衞門と申候。加賀野淸右衞門と申者助太刀を打申由、其節庄右衞門手負申候。爲褒美靑江の刀給候。淸右衞門は脇指もらい申候。和泉國千石堀にて相働、深手負申候由、長久手合戰敗軍の時、一揆相支候所、追拂無異義追申候。其節も手負申由、

其後久太郎方立退、岐阜中納言殿に奉公仕候。岐阜落去浪人仕候。

慶長五年、輝政樣へ被召出、千石被下候。武藏守樣備前へ御入國の刻、三百石御加增被下、寄合組の頭被仰付、其後播磨へ御入國の刻、御奏者被仰付、名御替、杢に成候へと被仰付候。大阪兩度の御陣御供仕候。願の通隱居被仰付、世悴左門に家督無相違、千二百石被下、左門無間病死、右の知行無相違、杢へ御戾し被下、寬永十二年五月十一日病死。

一七、喜多嶋忠右衞門。杢末子故、京へ遣置申候を呼下し、御目見被仰付候。

跡目七百石被下、承應元年御奏者被仰付、明曆二年六月二十八日、於御城御母衣被仰付、七月二十八日、於御前、母衣絹拜領仕候。御城に御座候金の十文字の出し申上拜領仕候。寬文十二年八月五日、侍從樣御弓組頭に仰付、延寶七年二月二十五日、五十八歲病死。

一八、喜多嶋忠右衛門。湯淺半右衛門組、七百石、四十一歳。

承應二年正月十五日、九歳御目見仕、跡目無相違被仰付。其刻父の名に罷成候。六月十四日山脇傳内組に被仰付候。父存生の內寛文十年八月晦日、學校の御用被仰付。同十二年十二月二十八日、御赦免、白銀五枚被下。天和三年閏五月十四日、浮組御鐵炮十挺引廻被仰付、同年六月二十九日、湯淺半右衛門組に被仰付。

一九、岸本藤左衛門。福島左衛門大夫にて千石足輕二十人預り居申、後暇申、浪人病死。

二〇、岸本新左衛門。

戸川肥後殿に兒小生に罷出候。關ケ原陣に組打首を取申候。又東の山の手にて鑓合申時、一番鑓を合、暫戰申內手負申候。爲褒美着料の具足道永の刀給候。歸陣の後二百石給候。後浪人仕、病死、江戶にて火事に具足折紙燒失、刀は拂申候。

二一、岸本六兵衛。池田左兵衛組、四十俵四人扶持、五十一歳。

承應元年九月より、浪人にて御勘定所へ相詰、同四年正月十五日、被召出、二十俵三人扶持被下、寛文五年二月十日、一人扶持御加增被下、延寶六年十月七日、少將樣御右筆役被仰付、御加增九俵被下候。天和三年閏五月十四日、池田左兵衛組に被仰付、貞享元年正月十八日寄奉行被仰付。

二二、喜多村甚三郎。

佐々陸奥守殿に罷有候。其後加藤肥後殿に千石鐵炮五十挺預り居申、高麗陣於ゑくてんと申所、先手にて無比類働仕、則打死仕候。

二三、野間重右衛門。

甚三郞一所に高麗へ罷越、甚三郞に不足申、小西攝津守殿陣へ走込罷有候內に甚三打死仕候。重右衛門事攝津守殿にて、浪人分にて三百石程の擬作にて罷有、心馳も有之候由、關原以後流浪仕、池田備中樣に纔の體にて罷有、於成羽病死仕候。

二四、野間平六。父存命の內備中立退、水野日向守殿へ罷出、其後生駒壹岐守殿にも少の內罷有候由。

寛永十八年七月、少將樣へ被召出、米俵六十俵五人扶持被下候。慶安元年十一月二十三日、新知百五十石被下、寛

文元年四月病死。

二五、喜多村甚七郎。中村主馬組、百石、四十一歳。

承應元年二月御目見仕、寛文二年跡目百石被下、池田藤右衛門組に被仰付。同六年三月朔日、御祐筆役被仰付、延寶五年迄十三年、勤申候。延寶五年八月、請御奉公御赦免被成、同月三日、中村主馬組に被仰付候

二六、子彌八郎。十四歳天和元年侍従様へ御目見仕候。

二七、岸兵左衛門。

勝入様犬山に被成御座候時、御奉公仕、二百石被下候由。

二八、岸孫九郎。

輝政様へ御小生に被召出、三百石別知に被下候。兵左衛門相果候時孫與次右衛門跡目二百石被下候。孫九郎世悴にて御座候。

二九、岸與次左衛門。

寛永三年、孫九郎病死、跡目無相違三百石、與次右衛門に被下候。與次右衛門に今迄被下候二百石は、與次右衛門世悴牛之丞に被下候。寛永九年、與次右衛門病死。

三〇、岸牛之丞。

跡目無相違牛之丞に被下、牛之丞に被下候二百石、牛之丞弟源太郎に被下候。寛永十五年、源太郎病死、跡絶申候。

牛之丞萬治元年六月二十九日、病死。

三一、岸久太郎。

跡知百五十石被下、延寶六年正月二十六日、病死。

三二、岸孫八郎。上坂外記組、百五十石、二十歳。

十三歳の時、跡知百五十石被下候。

三三、木全兵藏。
勝入樣へ被召出、輝政樣於播州、百二十石被下候。
三四、木全兵藏。
跡目無相違被仰付、武藏守樣備前にて六十石御加增被下。
三五、木全兵左衞門。
跡知百八十石無相違被下、寬文六年十二月十七日、五十八歲病死。
三六、木全彌次郞。岸藤右衞門組、百五十石、三十八歲。
寬文七年二月十五日、跡目百八十石無相違被下。貞享元年二月四日、岸藤右衞門組に被仰付候。
三七、紀谷與兵衞。
慶長十一年、輝政樣姬路に被成御座候時、御船手御奉公に罷出、中村主殿組に居申候、六箇年の間御奉公仕候。同十七年左衞門督樣御船手へ罷出、菅權之介組に居申候、二年御奉公仕候。同十九年、宰相樣御船手へ罷出、横川治大夫組に居申候、十八年、御奉公仕候。因州へ御國替の時分、備前に殘居申候。少將樣備前へ御入國被成、御船手へ罷出、中村主馬組に居申候、二十五俵二人扶持被下候。寬永十六年五月三日、六俵一人扶持御加增被下、小船頭に被仰付、寬文九年二月十八日、八十一歲隱居被仰付、延寶二年五月二十日、八十五歲病死。
三八、養子紀谷與兵衞。役小生、大船頭、水野三郞兵衞引廻、四十俵三人扶持、六十二歲。養父與兵衞存生の内は、御梶取にて居申候。
家督無相違被下候。延寶九年七月二十四日、御召替御船頭役御中小生に被仰付、御加增九俵被下、同年七月二十六日、陸陣の時御船手の者御法の人馬可被下候。刺物一布半ののれんに常紋可付旨、湯淺半右衞門申渡候。貞享元年三月二十四日、私共刺物五節ゑづる、下一節に假名實名書付申樣に、山內權左衞門・梶浦勘介申渡候。私實父浪人者にて御城下に町人仕居申候。私六歲の時果申候故、樣子不存候。

三九、草賀石見。

氏は源、石見迄二十四代の由。代々畠山殿家人の由領知、河內・能登・越中の內にて給候由。

四〇、草賀久左衛門。

阿州三好殿數度合戰の節手に合申候由、河內國落去以後浪人仕、和州生駒と申所に、罷有候處、筒井順慶に被呼出、和州國替後立退、福島掃部頭へ被呼出、罷有候由。

四一、草賀五郎左衛門。

宍戸備前所に罷有、二百石給候。勢州津之城攻に心馳御座候由、關ケ原陣以後浪人仕、寺澤志摩殿に二百石にて罷出、其後立退、阿州に罷有候。大阪籠城の節、秀頼公へ罷出、木村長門守組に罷有候。前勢州津城攻の節、並於大阪働の儀は、先年五郎右衛門書上候由に御座候。大阪落去以後住吉に罷有候。堀尾山城殿へ被呼出罷有候處、大阪は御法度に付、雲州立去、大阪に罷有候。元和九年片桐出雲殿より可被召出旨に候。大阪は御法度の儀に如何と申候へば、出雲殿小身に候へば苦かる間敷由にて罷出候。五百石足輕二十人被預候。寛永八年、世悴作左衛門に、知行二百石給候。同十年、五郎右衛門に、加增三百石、足輕六人被增候。出雲守殿死去の後浪人仕、奈良に罷有候。

寛永十八年、江戸へ罷下居申候處、十一月十一日、少將樣爲御意、牧野織部殿・石谷十藏殿被仰聞候は、御家に可被召出旨に御座候。御足輕三十人二千五百石可被下旨、御意の由に御座候。忝奉存候。世悴召連罷下候間、御知行高の內、五百石配分可仕候條被召出、被下候樣にと織部殿・十藏殿迄申上候處、願の通被仰付、十五日御目見仕、二十八日、御國へ可參旨、御意の旨出羽申渡、白銀百枚拜領仕、奈良迄罷登り、翌年三月御國へ罷越候。

四二、養子草賀宇右衛門。番頭、二千石、六十五歲。伴元察末子にて御座候。

寛永九年備前へ御國替の節、十二歲の時、十一月二十八日、御目見仕、四十俵五人扶持被下、同十四年春、八十俵五人扶持被下、同十六年の暮、百八十俵御加增被下、都合三百俵十人扶持に成申候。寛永十五年正月五日、侍從樣御誕生被遊、御七夜同十一日、私共並五人宛御前へ罷出、鳥目にて御禮申上候。同十八年極月二十三日、於江戸御知

行五百石被下候。同十九年、御兒小生頭役被仰付、正保二年六月、右近様に罷有候。忍の衆五人於江戸被召出、私に御預け被成、同三年十一月十六日に、青賀五郎右衛門養子に被仰付候。慶長元年江戸御供に參候節、牧野傳藏殿・同織部殿・石谷十藏殿・畠山民部殿・五郎右衛門への手筋に付私罷在候。御長屋へ御出可被成旨被仰候由、池田出羽申聞候。其段少將様被聞召、何も御出の節掛候様にと御意にて雪舟筆の御懸物拜領仕候。七月十六日の晩、少將様被爲成、右の衆御出御膳被召上候。裏判の御用御斷申上御免被成候。同二年、於江戸堀大藏跡足輕三十人の内、二十人御預被成、殘十人も當分御預被成、御歸國被成、御持筒二十挺に御替被仰付候。萬治二年五月十一日、御忍今中七右衛門被召出、私へ御預被成、同三年、五郎右衛門願通隱居被仰付、十一月十八日、家督無相違被仰付、御番頭役並郡御鐵炮の者二十人御預け被成、私に被下候。五百石五郎右衛門隱居料に被下、御鐵炮三十は其儘五郎右衛門に御預け被成、五郎右衛門儀大老故御鐵炮の役義御斷申上候へば、明る四年春、私へ被仰付、始に被仰付候郡御鐵炮二十人御扶持被放候。寛文三年の春、少將様御參勤前、私御前へ被召出、御意に於大阪木村長門守より五郎右衛門へ遣候證文先年御覽被遊、御留置被成、御懸硯に御座候を御覽被成候間、證文私へ被下候旨御意にて頂戴仕候。同六年五月二十日、五郎右門八十九歳病死。

四三、千次郎左衛門。

寛文元年正月十五日、十一歳にて、御目見仕、侍從様へも同年、御目見仕候。

四四、熊谷十左衛門。筑前中納言殿にて五百石被下候。

慶長九年十一月、武藏守様へ被召出三百石被下候。同十年正月、御普請奉行被仰付、御米百俵被下候。備前下津井・金川、淡路の由良三ケ所城石垣相勤申候。御公儀御普請丹波の篠山、尾張の名護屋、駿河の府中、江戸御本丸、右の所々石垣御普請相勤申候。慶長十九年、大阪冬の御陣、江戸御普請場より直に相詰仕、寄付申候。於大阪中嶋御鐵炮十挺御預け被成、金子拜領仕候。元和元年夏、大阪御陣御供仕、五月七日、落城の節城下へ早く參り、首二ツ打取差上、同年、米百石拜領仕候。因州へ御國替以後、御米百俵宛毎年被下候。寛永三年、御鐵炮十挺御增被仰付候。同

十左衛門父を香河治部少輔といふ。細川左京大夫に奉公仕、公方義明公御他界の後浪人仕、若狭に參、其後越前へ參、病死仕候。

七年、御加增百石被下候。同八年、御普請奉行御免被成、因幡・伯耆御郡代被仰付候。私宅作事仕候儀被聞召上、少將樣被爲成、御膳上申、其節御小袖拜領仕候。同九年、備前へ御入國の節、邑久郡改被仰付、罷越煩付、其後御奉公得不仕候。

四五、熊谷源太兵衞。

寛永元年被召出候。同三年六月、伯耆日野郡、鐵山改被仰付、其後御代官被仰付、同六年御城中御作事方奉行被仰付候。同九年十左衞門病中に付御足輕差上申候へば、御知行御足輕共源太兵衞に被仰付、御足米以下迄無相違被下候。同十一年、御普請奉行被仰付候。正保二年二月十五日、跡目御折紙被下候。寛文五年正月、御普請奉行御免被成、簡略被仰付候。延寶元年病氣に付、御足輕指上申候。同年五月、病死。

四六、養子熊谷傳兵衞。宮城大藏組、士鐵炮引廻、四百石、六十三歲。岩根源左衞門二男にて御座候。

寛永十五年、御目見仕、正保六年十月二十七日、御祐筆に被召出、本俵四十俵五人扶持被下候。慶安三年二月十一日、百五十石被下、馬扶持每年十石宛被下、同四年病氣に罷成御斷申上御免被成、御馬廻に被仰付候。寛文十二年、丹波守樣へ御奉公仕候へと被仰付、何も一等に御加增三十石被下、都合百八十石被下候。延寶元年病氣の段被聞召上被召歸、池田三郎左衞門組に被仰付、同年、源太兵衞名跡四百石被仰付、十二月九日、池田三郎左衞門組御鐵炮引廻被仰付、同二年、瀧川縫殿組に御入被成、同三年上坂外記組御鐵炮引廻し被仰付、同六年、池田左衞門組士鐵炮組頭被仰付候。

四七、養子熊谷淸八。近習步行頭、二百石、三十六歲。實は村上九左衞門次男にて御座候。

寛文三年十一月七日、江戶にて可被召出旨被仰付、同十二日侍從樣へ御目見仕、名を才三郎に成可申旨被仰付、本俵四十俵四人扶持並衣裝銀二十枚被下。寛文三年十一月十三日、少將樣へ御目見仕、同四年五月五日、御側兒小生被仰付、同五年九月二十一日、江戶御發駕御供仕罷歸候。江戶にて久々相煩、病氣根切不仕に付、父在宅へ罷越心儘に養生可仕旨被仰付、寛文六年九月八日、御出船御供仕、同年十月二十六日、於江戶十俵に一人扶持御加增被

下。同八年二月江戸にて私伯父村上市右衛門煩申候內、氣色養生に町屋へ出罷有候爲、看病付居可申旨被仰付、病中御使者御使度々被下候。三月十九日病死仕候に付、四月中比より御奉公に出申候。同十二年七月五日、元服被仰付、名を清八に可致旨被仰付、同年八月十一日、御書物奉行被仰付、同十月十九日、日記付可申旨被仰付、延寶二年正月十八日、十俵御加增被下、都合八十八俵に被成被下候。同年三月九日、傳兵衛養子に被仰付、同年十一月十三日、御弓徒十人御預被成候。御兒小生役御數寄道具御免被成、御銀一貫目、人置料六十俵、馬扶持十五石被下候。此後切々假橫目被仰付、同六年五月二十五日、如前の御側に可被召仕旨被仰付、銀三十枚被下、天和三年十二月十六日、二百石被仰付、御役料並人置料六十俵馬扶持七石被下候。

四八、熊澤。

先祖の家は不分明候。公家より出申由、罪に當候て紀伊の熊野へ流され、又陸奥の澤へ遷され候。然れども蒙赦免歸京仕候。其後尾張の瀨邊を被下、武家に罷成候。夫より代々瀨邊を居城に仕候。右の配所二所の名を取、熊澤と名乗申、歸京の節上を憚、洛中往來笠を着申候に付、紋に笠を付申候由申傳候。

四九、熊澤勝右衛門正英。

此時亂國にて美濃•尾張の間、偸盜多く御座候へ共、勝右衛門能守禦仕、偸盜も恐避候て無侵候。無事に一鄕を靖め、近邊の民迄勝右衛門を賴安堵仕候。終に何方の祿をも受不申候故、諸大將の戰場に出申武功無御座候。瀨邊に罷有候時、尾張地士寺澤越中と申者の婿に成申候。越中は寺澤志摩守父にて御座候。其時秀吉公六十餘州御手に入、舊識の者皆尋求、或は領知、或は金銀下賜候節、越中は秀吉公御幼少の時、於尾張、越中所へも御出入懇意に仕候に付、被召出、越中は老體故志摩守御取立、肥前國唐津八萬石拜領仕候。勝右衛門事姉婿の好を以、瀨邊より罷越、客人分にて罷有候。勝右衛門嫡子三郎右衛門と申者に二千石遣し、家老職に不被成候。

五〇、熊澤大膳。

勝右衛門次男にて御座候。壯年の時仔細有之唐津を立退申候。大阪兵亂の節、致籠城。仙石豐前部下にて騎士二十人の頭仕候。此時は久左衛門と申候。豐前堅め申候處は、一隅を闕て不圍の方に相當、東兵不來に付戰功も無御座、落城の後引退申候

時、豐前部下の士共各分散仕、跡に一人も無御座迄馬を控見合候へ共、猶東兵更に不來に付、長柄川を越引取申候。新參に召置し者共二十人許、於其場、是より何方へも落行候へと申付、皆方々へ參候。唐津より使馴候者六人殘申候。馬は兼て試水得たる上に我游泳に達者なれば、無遠慮馬を使々可渡と申付候に依つて、六人鞦(しりがい)ノ總、馬の尾に取付、川中にて馬の頭二度迄沈申候へ共、川向へ乘渡り申候。松浦壹岐守は志摩守由緒御座候。大膳志摩守甥の儀に御座候故、壹岐守を賴平壺に預置申候。知行七百石より與家老職に罷成候。其後壹岐守勝手難成に付、家老共申談、七百石の内二百石壹岐守藏に納、五百石にて罷有候。年を歷候て知行皆返し與へ、其上加增可遣由に申候へ共、樣子御座候て受不申、松浦肥前守代に成、又加增被與候へ共、存念御座候て終に受不申候。右の故に御座候や、壹岐守代嫡子熊澤隼人と申者に三百石足輕二十人被申付候。肥前守代に大膳次男熊澤數馬と申者に三百石、足輕二十人被申付候。大膳七十二歲病死仕候。

五一、熊澤權八郎。 小生組頭、三百石、五十七歲。熊澤大膳末子。

寛永十七年十二歲にて肥前守に被召出候。正保元年十六歲にて新知二百石被與候。慶安元年二十歲にて浪人仕候。
慶安三年十月二十二日、二十二歲にて御家へ被召出、先知二百石被下、熊澤次郎組に附申候。明曆三年、丹波守樣御與に附申候。萬治三年十一月二十六日、大小生に仰付役知百石被下、安藤杢與に附申候。寛文元年正月十一日、於御前、母衣絹頂戴仕候。同十一年九月十五日、小堀主殿小生頭被仰付に依與に附申候。延寶三年十二月四日、小堀主殿與の御鐵炮引廻被仰付候。其後母衣の出し替可申由被仰付、朱の劍先表裏金の師卦に仕候。同六年九月二十日、侍從樣御在國の節は、能勢勝右衞門・松尾助八郎に加り御取次可相勤旨、江戶より被仰付候由、池田大學申渡候。同七年六月二十三日、澤權大夫小生頭被仰付候刻與に附申候。御鐵炮引廻不相替被仰付候。天和三年閏五月十五日、小生組の與頭御直に被仰付、貞享元年三月十五日、母衣御止被成、金の半月白地黑紋暖簾に更申候。

五二、子八郎。

寛文八年十四歲、御目見仕候。

五三、久保田彥兵衞。

勝入様へ御奉公申上、百五十石被下候。輝政様より池田加賀殿へ御附被成、於因州病死。

五四、久保田六郎左衛門。彦兵衛の次男なり。

兄市大夫は別知に被召出候故に、次男六郎左衛門に跡知被申付、於備前病死。

五五、久保田彦兵衛。伊木頼母組、百石、五十歳。

六郎左衛門跡彦兵衛幼少故百五十石の内五十石五年の内預り申候處、四年目佐渡不慮の煩被仕候故、少將様へ被召出、五十石は間違にて百石被下候。江戸へも参候。大阪御米拂にも参候。寛文九年三月十九日、奥上道郡御郡奉行被仰付、延寶元年十二月迄、五年相勤申候。其後京御作事にも参候。切々御毛見に罷出候。

五六、子作之助。

延寶二年二月十五日十一歳、御目見仕。

五七、久保田市大夫。久保田彦兵衛嫡子なれども、別に被召出候。

慶長五年景勝陣に輝政様参州御出陣被遊候。御前様大阪御屋敷に御座候に付、若原勘解由に士十騎御附大阪へ被遣候。市大夫も十騎の内にて御座候。同六年、於播州新知八十石被下、武藏守様備前へ被成御座、五十石御加増被下、同十七年、御加増六十石被下、若原勘解由組に被仰付、大阪兩度御陣御供仕。正保元年中風煩、慶安元年五月下旬、病死仕候。

五八、久保田門右衛門。弓組頭、三百石、六十九歳。

慶安元年八月、跡知百九十石無相違被下、草加兵部組御小生に被仰付、同三年十月下旬、御家中若き者に弓指南仕取立可申旨、御直に被仰付。承應元年、御加増百十石被下、大小生に被仰付、年月の指物被下候。萬治三年十一月二十六日、大小生御免、杉山五左衛門組に被仰付、弓役相勤申候。寛文元年正月十一日、組頭被仰付、指物御免被成候。八月、江戸御供仕、御取次被仰付。

五九、子半之進。

萬治二年八月十五日、九歳、初て御目見仕候。延寶二年四月八日、學校御用相勤申候に付、米二十俵拜領仕候。

六〇、國枝賴母之介。

生國、美濃東國枝。稻葉伊豫守家來筋にて御座候。伊豫守息稻葉右京亮所にて、六百石給居申候。右京亮天正十一年、伊豫の國嶺の城攻被申、歸陣の節、美濃の國内古田篠立きたしと申所に一揆發起仕候。其時右京亮士七人從立、少々鐵炮二百挺にて防被申、一揆大勢にて右の人數つかれ申候故、氏家卜全被助候へ共、一揆彌つのり卜全難儀候。又右京亮二百挺の鐵炮者悉被打、六人に成候へ共、七人の士は無恙一揆打取申候。賴母之介七人の內にて御座候。歸陣の後七人の者共振舞被申、それ〴〵褒美給候。賴母之介其時刀打折候に付刀貰申候。其砌に取合御座候へ共、此時程危事は無之候とて、稻葉家にて古田篠立の鑓振舞と、于今申傳候。其後賴母之介訴訟の儀叶不申に付、立退申候。賴母之介幼少の時、父人に被打申候を成人仕、十六歳にて父の敵を打申候由、大谷刑部少輔殿、越前鶴賀は面白所に候間、遊山に參候との儀に付參居申內、高麗の陣御座候故刑部少輔殿に付參、少心馳も御座候由、其後守澤志摩殿へ二千五百石にて有付、家老分にて筑前の境•かきあけ小城預り、城付代官も仕、妻子等預け置、則右京亮肝煎を以、越前少將樣へ二千五百石にて有付、番頭仕罷有候。其節筑前中納言殿より稻葉內匠と申者を以、六千石にて可被召抱由に御座候へ共、越前へ右京亮殿肝煎、其上唐津に居申內より高屋筑後と申者を以、御呼に付越前へ參申候。賴母之介子三人御座候。惣領•次男は越前へ召連參申候。私父作左衞門幼少故右京亮に預け、豐後殘置申候。賴母之介越前へ有付候以後寺澤志摩殿より岡嶋次郎兵衞と申者を以、歸參仕候へ七八千石可被下由、紀伊大納言樣よりも龜田權兵衞と申者を以、御呼被成候。加藤肥後守殿よりも齋藤伊豆殿を以、御呼被成候。加藤肥前守殿より稻葉左近と申者を以、知行一萬石可被下由にて御呼被成候へ共、越前少將樣御懇故參不申、就夫又肥前守殿より中江壽庵と申者を以、父作左衞門、右京亮手前暇取候はゞ千石可被下由被仰付候へ共、譜代の主懇に付是又參不申。賴母之介越前にて病死、于今越前に子孫有之候。賴母之介越前へ有付候知行高自分に二千五百石、惣領平右衞門五百石、次男又兵衞三百石、給候。

六一、國枝作左衞門。

十六歳より右京亮に奉公仕、三百石鐵奉行仕居申候。能登守手前にて九年已前病仕候。兄國枝佐左衞門に跡目被申付、能登守

所に居申候。

六二、國枝平助。組外、三百石、六十三歲。佐左衛門次男にて御座候。

熊澤助右衛門肝煎にて慶安三年霜月朔日、少將樣へ被召出、本俵五十俵五人扶持被下候、馬扶持十五石御馬拜領仕候。寛文七年正月二十一日、新知二百石被下候。備中淺口郡七嶋村新田出來の時分、それ〳〵に割符被仰付候節、私甥共にも新田拜領仕、御百姓に仕御年貢百(姓)並に出させ可申由稻葉四郎右衛門を以て申上候處、延寶三年十月十六日、淺口郡奉行職の勤御意に應候とて同郡七嶋村の内十町御褒美に爲御加增作取に從侍從樣拜領仕有がたく奉存候。同氏弟多右衛門と申者、牧野又兵衛三男左大夫と申者、是は私養子分に仕、右兩人の者、自然の儀候はゞ、一疋一本にて召連可申由申上、十町の内割符仕遣置申候。延寶八年、川堤切れ水留仕候節、百姓共水におぼれ難儀仕迯申に付、其儘私川へ飛込下知仕候段被聞召上、年寄病氣には候へ共、左樣の所見候ては居申間敷者と被思召候由、扨又私新田屋敷惡所を取立、十町の内に仕取候段いさぎよき仕樣と被思召候に付、御褒美に屋敷年貢の外又外に被下候。此段老中被申渡、其後御直にも御意被遊候。御郡役二十八年相勤、天和二年正月二十二日、御意にて新田十町を高百石に御直し、都合三百石にて御奉行札方共に被仰付候。其後町奉行役御免被下候へと度々申上候處、貞享二年十月朔日、御赦免被成、組外被仰付候。

六三、熊澤與右衛門。

與右衛門兄熊澤平三郎權現樣へ十五歲より御奉公仕、二十二歲にて遠州味方ケ原御一戰の刻御馬前にて打死仕候。權現樣尾州清須にて與右衛門一類の儀御尋被成、平三郎弟與右衛門被召出、二百石被下候。權現樣駿河へ御下被成候時、與右衛門儀御供仕候由、尾州に罷有候へ共、心次第仕へと被仰付候に付、尾州に罷有度と申、尾州に居申候。

六四、魚住平左衛門。

御前樣御祝言の節、丹羽玉峯樣より御附被成、萬治三年四月十四日御家へ罷越申候。玉峯樣より百五十石被下候故、御家にても百五十石被下候。寛文十年正月二十六日於江戶御長屋病死仕候。

六五、熊澤宇平太。伊木兵庫組、百石、二十九歲。

寛文七年八月十五日、初て御目見仕候。同十年、跡知百石被仰付候。本氏熊澤にて御座候故御斷申上、熊澤に成申候。同十二年若原監物組に被仰付、天和三年閏五月十四日、伊木兵庫組に被仰付。

六六、熊田助左衛門。勝入様御代より御奉公仕候由。

六七、熊田猪右衛門。始石見神様に罷有、其後暇申請。

因州にて少將様へ被召出、備前御入國以後二百石被下候。寛永十七年五月十五日、病死。

六八、熊田猪左衛門。

跡目若手故百石被仰付候。萬治元年十一月十五日、百石御加増被下候。同三年七月二十日、病死。

六九、養子熊田平介。池田左兵衛組、百石、三十七歳。

養父熊田猪左衛門病死仕候以後、實父村田彌兵衛に被仰渡候は、熊田の家御潰被成間敷と思召候。其上老母・娘有之由不便に思召候。依之跡目百石私に可被下候。猪左衛門存命の内私を養子に仕度と望申候へ共、彌兵衛同心不仕段も御耳に達候。少將様御意の上は、御請申上候へと萬治三年八月二十八日、於御城彌兵衛に被仰渡候に付御請申上、九月朔日繼目の御禮申上候。御兒小生に被召仕候。其時十二歳。寛文七年十月三日、御弓組被仰付候。延寶五年迄十年勤候。延寶五年二月打身痛申候に付、御斷申上御免被成候。

七〇、栗屋助大夫。

藤堂和泉守殿に三百石被下居申候。孫子助大夫當和泉守殿に居申候。

七一、熊谷八大夫。助大夫次男にて御座候。

寛永八年十一月五日、少將様へ兒小生に被召出、百俵十人扶持被下御側に被召仕候。寛永十四年閏三月五日、三百石被下候。肥滿仕御斷申上候へば、御近習御免被成、明暦二年十二月六日、若原監物組に被仰付、延寶元年十二月九日、池田三郎左衛門組御鐵炮引廻役被仰付、同二年三月二十五日、稻葉四郎右衛門組御鐵炮引廻被仰付、同六年

五月十八日、池田藤右衛門組頭役被仰付、病氣故御斷申上、同八年閏八月十八日御免被成、同九年二月十日、六十八歳病死。

七二、養子熊谷八助。草賀宇右衛門組、三百石、二十九歳。實父淵本長介は八大夫弟にて、藤堂和泉守殿に三百石被下居申候。私御當地へ罷越以後病死仕候。私四歳の時八大夫手前へ參候。

八歳の時寛文六年正月十五日初て御目見仕候。延寶九年四月二十二日、跡目無相違三百石被下、草賀宇右衛門組に被仰付候。

七三、工藤吉左衛門。伊木賴母組、七十八俵十人扶持、七十六歳。

祖父大田丹後江州長濱城主内藤豐前守に居申候。父大田彦八内藤豐前守殿息紀伊守殿にて二百石給候。私五歳の時十一月二十四日父彦八病死、私父死後豐前守殿家中に木村六兵衛と申者伯父にて御座候に付、育候て十一歳にて紀伊守殿息豐前守殿へ兒小生に被召出候。此節は豐前守殿奥州板倉の城主にて御座候。十八歳にて立退申候。大阪御町奉行久貝因幡殿與力工藤次郎右衛門と申者姉聟にて御座候に付、子分に罷成、此者手前に罷有、二十三歳の時御家へ芳賀内藏允申上被召出、寛永八年三月二十二日御目見仕、本俵五十俵十人扶持被下候。

七四、子半兵衛。御目見年月失念仕候。

七五、桑原六郎兵衛。

森左衛門殿•同武藏殿•同美作殿三代奉公仕、五百石給候。

七六、桑原甚五兵衛。

森美作殿にて五百石給申候。信州川中嶋の内葛尾合戰能働仕候に付加增被下候。働の樣子於作州大塚主膳存候。作州立退、元和九年御家へ被召出五百石被下候。寛永十六年六月三日病死仕候。

七七、桑原彦右衛門。大原孫左衛門にて御座候。

桑原甚五兵衛養子に奉願、寛永七年御目見仕、同十六年、跡知三百石被仰付、天和三年十月二十六日、隱居奉願被仰付候。

七八、桑原市右衛門。納戸奉行、三百石、四十二歳。
明暦三年侍従様へ兒小生に被召出、六十二俵五人扶持被下、十三歳にて御座候。寛文六年、中小生に被仰付、延寶五年六月納戸役被仰付、當年迄十二年相勤申候。天和三年十月二十六日、家督無相違三百石被仰付候。

七九、草谷助右衛門。
武藏守樣へ御奉公申上候。

八〇、草谷藤右衛門。
少將樣御酒方御奉公仕。正保三年三月四日、病死。

八一、草谷八郎兵衛。八十二俵七人扶持、五十三歳。
正保三年六月、父跡目七石に二人扶持被下、其儘通子にて御奉公申上候。承應二年正月五日、御步行に被仰付、六俵に一人扶持御加增被下、同三年二月、五俵御加增被下、萬治三年三月、御臺所横目被仰付、寬文元年、御扶持一人御加增被下、十人組被仰付、同四年十一月十一日、中小生に被仰付、六俵御加增被下、延寶五年九月十八日、在江戸呉服方御用被仰付、十月二十三日、三十五俵三人扶持御加增被下、在江戸に付京銀九百九十目御捨被下、天和三年九月九日より、造作料每年金十兩宛被下、貞享二年二月朔日、水野作左衛門組に被仰付。

八二、子草谷藤七。
延寶六年御步行に被召出、三十俵三人扶持被下。

八三、孫九八郎。
貞享二年四月二十五日、熊千代御雇兒小生に被召出、銀子十枚御小袖、御帷子一ツ上下二具宛每年被下候。

八四、荒木德右衛門。
荒木攝津守に罷有、攝津守身上果候後浪人仕、御國にて病死。

八五、久代小兵衞。

慶安元年十二月二十八日御勘定方に被召出、本俵二十俵三人扶持被下。其時分は荒木を名乘候へ共、萬治元年より、母方の久代を名乘申候。同二年三月十日、江戸御發駕前日頭分に被仰付、同三年十二月、本俵五俵御加增被下、寛文三年二月二十三日、扶持二人御加增被下、延寶元年七月二十四日、六俵御加增被下、都合四十五俵五人扶持被下候。同八年五月十一日、小生組に被仰付、澤權大夫組に被仰付、寄奉行被仰付、天和二年十二月十九日、五十九歳病死。

八六、久代源八。四十俵五人扶持、二十八歳。

天和元年十月二十八日、二十四歳にて初て御目見仕、同三年二月二十九日、跡目四十俵五人扶持被仰付、澤權大夫組に被仰付候。

八七、楠五郎四郎。菅沼新八郎參州野田城居住の節二百貫給候由。

八八、楠市平。牧野駿河守殿上州大室在城の時分合力米にて罷有病死。

八九、楠五郎四郎。

幼少にて父に離候に付、叔父加藤新左衞門方へ引取申候。新左衞門は駿河守殿にて二百石被下罷在候處、暇申請候、新左衞門小身菅沼半兵衞是は權現様へ罷有候。新左衞門竝五郎四郎共に半兵衞方へ引取、知行所參州田口に置申候。新左衞門病死仕候に付、五郎四郎儀半兵衞へ呼、駿河府中にて家來分仕置申候。其後半兵衞義紀伊大納言様へ御附人に被仰付、紀州へ御供仕に付、五郎四郎も紀州へ參候。先年京二條御城　普請紀伊大納言様へ御手傳被仰付の節、菅沼半兵衞御自分御普請大奉行被仰付候に付、五郎四郎も供仕罷登申候。在京の内半兵衞側に召仕候者に意趣御座候て、立退備前へ罷越、名氏替り、楠原惣左衞門と申候。御國替御後片山孫兵衞家來に罷成、片山勘左衞門時分迄罷有、年寄申候に付、寛文八年勘左衞門手前隙、子楠原惣九郎方に掛り居、天和二年九月二十九日病死仕候。勘左衞門方より三人扶持果候時分迄合力仕候。

九〇、楠原五平次。役小生勘定河村平大兵衞引廻三十九俵五人扶持、四十九歳。

萬治二年三月十五日、少將樣へ御勘定方に被召出、本俵十六俵三人扶持被下候。同三年四月朔日、本俵四俵御加増被下、寛文五年御加増一人扶持被下候 天和二年正月十五日、中間頭役中小生に被仰付、御加増八俵一人扶持被下候。

九一、楠原惣九郎。役小生勘定 河村平大兵衞引廻、三十九俵五人扶持四十歳。楠五郎四郎二男楠原五平次弟にて御座候。

寛文七年二月朔日、御勘定方被召出、本俵二十俵三人扶持被下、同十一年正月朔日、一人扶持被下、延寶五年七月二十四日中間頭役中小生に被仰付、八俵一人扶持御加増被下候。

九二、近藤與九郎。

於濃州勝入樣へ若年の時被召出候由、於播州輝政樣より新知百八十石被下、於備前武藏守樣御加増七十石被下、元和二年於姫路病死。

九三、近藤覺兵衞。跡目無相違被仰付候。寛永十七年三十六歳於岡山病死。

九四、近藤覺兵衞。六百石、五十五歳。

十歳の時跡目無相違被仰付、正保元年、十四歳の時江戸御供觸被仰付、初冬御雇兒小生にて御城詰仕、翌年江戸御供被召連、同三年春、御供仕罷歸、直に御兒小生に被仰付、明暦三年、二十七歳迄兒小生役相勤申候。明暦三年秋、侍從樣へ御附被成、同年十月二十六日、御入國より御奉公仕候。萬治三年十二月十八日、御徒頭役被仰付、寛文二年九月八日、御加増五十石被下、十一月十三日、御横目役被仰付、延寶二年十一月十三日、御加増五十石被下候。江戸御供・御留守番共十五度、内三年詰三度仕候。天和三年閏五月十四日、御前へ被召出難有御意にて、御横目役願の通御赦免被成、御持弓十挺御預け、御留帳役被仰付、貞享元年十一月二日、岩千代樣へ御附被成候て、來正月中に妻子引越、江戸着候樣に被仰付、同二年正月十一日、岡山發足、二十九日、江戸へ罷着、早々御目見被仰付、翌二月朔日、御前へ被召出、池田大學披露、岩千代樣御守役被仰付、番頭格に被成、御加増二百五十石都合六百石に被

成下候。御持弓十挺御增二十挺御預け被成、段々難有御意の上、熊千代樣御用も可相勤旨御直に被仰付、預二十人の內四人自分名遣候樣にと被仰付、同二年五月十四日、岩千代樣初て御目見被遊候節、御登城の御供仕、森本與惣兵衞・加藤源七一所に、蘇鐵の間に罷有候。爲御祝儀從侍從樣銀五枚、從御前樣金千疋拜領仕候。少將樣御代御橫目役は御出陣の刻、黃羅紗の羽織御免被成候。御代替後延寶元年九月十五日、於御前黃羅紗の御羽織頂戴仕候。其後猩々皮に御替被成、一同に又御羽織拜領仕候。

九五、子太郎八。後作之丞と改。

寬文六年正月九日、侍從樣へ九歲にて御目見仕、十七歲の時、延寶二年正月十二日、御兒小生に被召出、六十俵四人扶持被下候。同六年七月、元服被仰付、同七年十一月四日、御側へ可被召仕旨被仰付候。今年二十八歲。

九六、內海惣四郞。少將樣へ御奉公申上、寬永七年三月十二日病死仕候。子無御座跡目不被仰付候。

九七、近藤彥七。近習留守居足輕頭、二百石、五十六歲。父惣四郞果申候節は、胎內に罷有、母方の伯父近藤與九郞方にて出生仕候、私若年の時與九郞相果申候故、先祖之儀不存候。

正保三年九月於江戶、侍從樣へ御徒に被召出、十二石五斗四人扶持被下、承應二年御小生に被仰付、五石御加增被下、萬治二年五石御加增被下、同三年二石五斗御加增被下、寬文四年十一月二十二日、新知百五十石被下、延寶二年十二月十三日、五十石御加增被下、同十二月二十五日、御留守居役被仰付、同三年五月二十五日、足輕十人御預被成候。正保二年より、相勤申候役儀御武具奉行到來奉行御供橫目到來奥服奉行御膳奉行御腰物奉行相勤申候。

年月は覺不申候。

九八、子鹿之助。

延寶五年三月十五日、御目見仕候。

九九、小畠越前。

代々丹波舟井郡𫝶人と申所の者にて御座候。公方に奉公仕候。其後明智日向に居申、丹波多喜郡にて打死仕候。

一〇〇、小畠四郎右衛門。

明智身上相果、其後大和大納言殿にて四百五十石給候。其後筑前中納言殿にて四百石給候。其後輝政様へ被召出、三百石被下候。大阪冬陣の節御代官仕罷有候て御陣に不被召連、夏陣に御斷申上、大阪へ御供仕、御陣中大阪より江戸へ御使者被仰付、落去前大阪へ罷歸候由、寛文八年五月十九日、於因州病死。

一〇一、小畠儀左衛門。

同年六月十九日、跡知三百石無相違被下候。寛文五年、池田主税様御預御鐵炮引廻被仰付、同十年六月三日病死。

一〇二、小畠四郎右衛門。近習奥方附、足輕頭 三百石、五十歳。

正保四年二月十五日、初て御目見仕候。明暦三年九月二日、被召出、本俵四十俵四人扶持被下、侍従様へ被進候。萬治二年十二月、中奥御番組に被仰付、寛文二年、十俵御加増被下、同六年八月六日、二十俵御加増被下、都(合)小俵百五俵被下、同十年九月、跡知無相違被仰付、父儀池田主税様御組にて御座候故、其通被仰付、同十二年十月二十日、淺府御屋敷へ相詰、大小生役被仰付、延寶元年正月十九日、大小生に被仰付、同二年正月十一日、於御前母衣絹頂戴、同年十一月、岸藤右衛門組御鐵炮引廻被仰付、就夫御法の通母衣出し御替被成、同四年十月十五日、於御居間、御直に品々忝御意の上、御前様へ御附被成候。就夫足輕十人御預け被成候。古京銀六貫九百目御拾被下、引越料御法の通被下候。同五年二月五日、丹羽左京様より、御知行御物成代金(以下無)

一〇三、子小畠龜之丞。

貞享二年二月朔日、岩千代様へ御附被成、四十五俵五人扶持被下候。同四月二十五日、御人足一人定夫被下候。今年十四歳。

一〇四、小堀助兵衛。小堀遠江守弟にて御座候。いつ比被召出候も不存候。

一〇五、養子小堀彦左衛門。

元和三年十月六日、少將様へ被召出候。同四年、かふろに被仰付、三十俵三人扶持被下候。同七年、かふろからけ御兒小生役被仰付、二十俵三人扶持御加增被下候。寛永五年、百五(十)カ俵五人扶持御加增被下、同七年、新知三百石被下、同十一年、小堀助兵衛養子に被仰付、知行千石拜領仕候。彥左衛門實父は、出石平介と申候、宇喜多中納言殿にて少知給候。中納言殿身上果候以後、慶長九年福照院様へ被召出、五十八俵八人扶持被下候。元和八年於江戸病死仕候。寛永十六年、裏判役被仰付、慶安三年迄、十二年御役相勤申候。同二十年霜月、御持弓二十人被仰付、慶安三年、御小生肝煎被仰付、明曆八年二月、御番頭被仰付、萬治元年十一月十五日、五百石御加增被下、延寶六年五月三日、於備前七十四歲病死。

一〇六、養子小堀彥左衛門。

正保三年春、被召出、五十俵五人扶持被下、同三年冬、御膳番被仰付、慶安二年正月十三日、祖父彥左衛門養子に被仰付、同三年閏十月十四日、新知二百石被下、萬治元年三月六日、侍從様へ御附被成、御兒小生頭役被仰付、十人組御預被成、同二年六月二十五日、二百石御加增被下、寛文二年、御鐵炮十挺御預け被成、十人組は奥山市兵衛に被仰付、同三年十二月十一日、江戸より罷歸候。御兒小生頭は澤權大夫に被仰付、十人組又引廻候様に被仰付、同七年江戸御供仕、同八年四月二十九日、於江戸御小生頭被仰付、組頭に長尾新左衛門・山田孫左衛門被仰付、十人組は被召上、同十二年九月十五日、御小生頭御改被仰付、まとい旗被仰付、並幾利丹奉行被仰付、御鐵炮十挺御增都合二十挺被仰付、同月二十九日、忍の者六人御預け被成、翌年忍の者御增被仰付、百石御加增被下、延寶四年極月二十八日、祖父彥左衛門跡知無相違被仰付、同七年六月二十三日、御番頭被仰付、相組の御書付御直に被下、御鐵炮二十挺御預被成候。天和二年六月二日、於備前五十五歲病死。

一〇七、養子小堀彥左衛門。

寄合組、千五百石、二十七歲。實は若原後の監物子にて御座候。

彥左衛門私を養子に仕度奉願通被仰付、延寶八年十月朔日、少將様侍從様へ初て御目見仕候。天和二年八月三日、彥左衛門跡無相違、千五百石被下候。

一〇八、山木藤左衛門。

輝政様參州吉田に被成御座候刻、輕き御奉公に被召出候。小田原陣御供仕候。奥州へ御檢地に被成御座候。御供仕候。於彼地人喰馬放候て御前近馳來り、氣色荒く御座候處、藤左衞門罷出、平首にいだき付候へば、左の肩を深被喰候。然共無別條いだき留申候。此疵爲養生御在所へ先へ御暇被下候。其節甚御感被成難有御意御座候由。播州へ御入國の節、瓢庵様へ被爲附候由。

一〇九、近藤治左衞門。

幼少より輝政様へ御奉公に被召出、近藤と氏をかへ申候。慶長七年、播州御入國の節、父一所に瓢庵様へ御附被成、三十五俵五人扶持被下、瓢庵様御遠行以後、寛永二十年五月朔日、少將様へ被召歸、御知行百石被下池田佐渡組に被仰付、明暦三年正月十一日、隱居被仰付、嫡子惣大夫に家督無相違被仰付、其儘佐渡組に御附被成候。其後二十石御加増被下候て信濃守様へ被爲附候。同年十月二十七日、治左衞門七十四歳病死。

一一〇、近藤惣左衞門。寄合組、二百石 六十二歳。

慶安二年四月五日、少將様へ御徒者に被召出、二十俵三人扶持被下、承應二年四月、侍從様へ御附被成、五俵御加増被下、町買御用被仰付、明暦元年四月、町買御用御免被成、御徒横目被仰付、同二年二月十五日、於江戸小十人組に被仰付、同三年九月晦日、中小生に被仰付、十俵二人扶持御加増被下、同極月於備前觸番支配被仰付、萬治元年四月二十二日、江戸御供、六月十五日、於江戸御納戸役被仰付、觸番支配御免被成候。同二年、御國十俵御加増被下、同三年正月、五俵御加増被下、寛文四年十一月二十二日、新知百五十石被下、延寳二年十一月十五日、五十石御加増被下、同五年八月三日、備前御城中御用被仰付、御納戸御免被成、足輕十人御預被成、同七年極月八日、御居間御前へ被召出、私病氣罷成、連々御斷申上候通被聞召屆、御城内御用御赦免被成、寄合組に被仰付、御足輕並下屋敷同二十九日、差上候。

一一一、子惣三郎。寛文九年十一月十六日、惣三郎と變名仕候へと被仰付候。翌年六月二十六日八歳にて御目見仕候。

一一二、五藤小左衞門。五藤茂右衞門、先山内對馬守殿にて小左衞門も三百石、茂右衞門も三百石、父子にて六百石被下候。

武藏守樣備前へ御入國の年、茂右衛門被召出、三百石被下、茂右衛門大阪冬御陣に武藏守樣より尼ケ崎へ加勢被遣、其内へ參候。兩年の御陣相勤申候。御陣中にて大小生被仰付候。岸和田城一揆寄申沙汰に付、武藏守樣より淺野但馬殿へ御使者被遣、御鐵炮十挺御添召連參、岸和田城に一夜相詰申候。其時一揆寄不申罷歸候。元和四年六月二十三日病死。

一一三、五藤豊右衛門。

茂右衛門跡知無相違三百石被仰付、土方備後組に被仰付、慶安二年二月十五日、瀧川縫殿組の御鐵炮引廻被仰付、貞享二年八十二歲に罷成候。

一一四、五藤八兵衛。池田七郎兵衛組 三百石、六十歲。

延寶五年豐右衛門病氣御斷申上、願の通御赦免被成、家督無相違三百石被下候。瀧川縫殿組に被仰付候。同八年閏八月十四日、池田七郎兵衛組頭役被仰付候。

一一五、予文左衛門。

十一歲延寶六年十月朔日、御目見仕。

一一六、國府民部。伊勢國司に屬し、伊勢の國府と申處に、小城構居申候由。

一一七、國府市兵衛。幼少にて父に離、關長門所に奉公仕、三百石賜候。後筑前中納言殿にて四百石給候。

其後輝政樣へ四百石にて慶長七年被召出、其後因州にて御郡奉行八・九年勤候由。寛永三年十二月十四日、病死。

一一八、國府六左衛門。

寛永四年正月二十五日、跡知無相違被仰付、明暦元年四月、備中の内御代官被仰付、萬治四年迄、相勤候。同三年正月十七日、小堀彦左衛門組御鐵炮引廻役被仰付、寛文十年八月二十七日、隱居被仰付、同十三年八月二日、於備前病死。

一一九、國府四兵衛。（稻葉四郎右衛門組、鐵炮引廻、四百石、五十歲。）
親懸りの内萬治二年九月十七日、權現樣流鏑馬相勤申候。寬文九年六月十一日、學校御用、戸田流太刀の師に被仰付、同年家督無相違被仰付、延寶五年八月朔日、稻葉四郎右衛門組御鐵炮引廻被仰付。

一二〇、子權三郎。
延寶六年正月十五日、八歲にて御目見仕候。

一二一、小崎與七郎。（信長公に罷有候、奥州會津陣に打死仕候。）

一二二、小崎半兵衛。（幼少にて父に離申候。秀吉公に伯父小崎兵右衛門と申者有之、養育仕、蒔田權之介殿に預け申候。其後堀左衛門督殿にて六百石給候。）
其後輝政樣へ慶長十六年、六百石被下、被召出候。慶長十八年、左衛門督樣へ御附被成、備前へ御入國不相替御知行被下候。大阪御陣御供仕、荒尾志摩手に罷有候。元和元年、左衛門督樣御卒去、宰相樣御代御繼被仰付、正保二年病死。

一二三、小崎半兵衛。
跡知無相違被仰付。九州一揆の節、樣子有之、彼地に參、細川越中殿先手に罷有、本丸の出丸天草丸にて鑓付首取申候刻、深手負申候。寬文八年十一月十八日、御旗五本被仰付候。御旗に樣子御座候に付御斷申上、同九年正月二十五日、因州立退申候。延寶二年十月十五日、御家へ被召出候間、御國本へ參候へと御意の旨、松平求馬樣被仰渡、江戸より十一月十九日、當着仕候。同三年二月七日、御目見被仰付、寄合組に被成、三月十五日、三十人扶持被下候。同五年七月十五日、於御城、日置猪右衛門を以難有御意にて、三百俵御合力米被仰付、右の三十人扶持も其儘被下、同年閏十二月二十八日、忝御意にて御鐵炮三十挺御預被成、知行に先六百石被下候旨、御直に被仰渡、延寶六年二月二十二日、病死仕候。

一二四、小崎彥大夫。（湯淺半右衛門組鐵炮引廻、六百石、二十七歲。）

延寶六年四月二十二日、跡知無相違被仰付、五月朔日、瀧川縫殿組に被仰付、同七年六月二十五日、水野三郎兵衞組に被仰付、天和三年閏五月十四日、浮組御鐵炮引廻被仰付、同六月二十九日、湯淺半右衞門組に被仰付。

一二五、小泉忠兵衞。

武藏守樣へ被召出、御勘定方御郡の御用被仰付候由、寛永十年正月朔日少將樣より二百石被下候由。

一二六、小泉與右衞門。

若年より少將樣御小生に被召仕候。承應元年十一月　御歩行頭被仰付、明暦二年、病氣に罷成、御斷申上、御免被成、若原監物組に被仰付、同三年六月二十四日、四十八歳病死。

一二七、小泉與右衞門。（伊木兵庫組、二百石、四十五歳。）

承應二年三月朔日、初て御目見仕、明暦三年、跡知無相違被仰付、天和三年閏五月十五日、伊木兵庫組に被仰付。

一二八、子權七。

延寶六年八月十五日、十一歳侍從樣へ御目見仕。

一二九、小崎太郎右衞門。

三好孫七殿に奉公仕候、秀吉公孫七殿播州三木城御攻の刻、城内の樣子御聞被成度由被仰候へ共、御返事申上者無之處、太郎右衞門罷出御請申上、城内へ忍入、具に見屆、殊に旗一本奪取罷歸、樣子申上候。從秀吉公爲御褒美御召羽織一、金錢五文、銀錢五匁被下候。其後江州大津城主京極宰相殿へ被召出、度々御座候。四百六石八斗四升證文于今所持仕候。子二人御座候。次男惣右衞門と申、別知に百石被下候由。

其後武藏守樣へ被召出、五百石被下候。其後病死仕、跡目は惣領に二百五十石、次男惣右衞門に百五十石被下候。（惣領名不存候。無程病死、跡絶申候。）惣右衞門後に吉右衞門と名をかへ申候。

一三〇、小崎吉左衞門。

大阪兩度御陣御供仕候。正保元年十一月十五日、病死。

一三一、小崎吉左衛門。伊木兵庫頭組、百五十石、七十二歳。

跡目無相違百五十石被下、若原監物組被仰付、天和三年伊木兵庫組に被仰付。

一三二、子七內。

寛文三年三月、三十九歳御目見仕。

一三三、小塚與六。瀧川左近殿に罷有、勢州をかはち陣に打死仕候。

一三四、小塚兵助。

是も瀧川左近殿に罷有、勢州長嶋陣の時、尾張界早尾と申取出に居申、敵働申に付、內より出、敵組打に首取候へ共、深手負、其時果申候、此時子猪右衛門當歳子にて御座候故、兵助弟小塚七と申者呼出、猪右衛門十五に成候迄、名代仕候へと、被申候處、小塚七關ケ原武藏の陣にて打死仕候、其後左近身上果申候て浪人にて罷有候。

一三五、安井猪右衛門。伯父安井新左衛門方にて、成長仕候に付、安井に替申候。

參州吉田輝政樣へ被召出、關ケ原陣歩行にて、御供仕、御直に被仰付候は、銘々高名心懸、御馬に付不申候は可爲越度由、岐阜關ケ原御馬に付申候、播州御入國被成、同六年、百五十石被下、大阪御陣にも、御旗本に居申候、寛永九年、御郡奉行相勤、其後御作事奉行、樋奉行久勤申候、明暦二年五月五日、病死。子三人御座候。

一男、安井彌三兵衛。右の安井新左衛門子淺右衛門へ養子に被仰付候。二男、小塚段兵衛。三男、安井三郎右衛門。猪右衛門跡知無相違百五十石、三郎右衛門に被下、三郎右衛門子彌三右衛門家督相續申、貞享元年七月五日病死。

一三六、小塚段兵衛。

寛永十四年二月二十七日、被召出、本俵三十俵四人扶持被下。同十八年、十俵御加増被下。同十九年十俵御加増被下。正保元年十月十七日、百五十石被下、同霜月、御陣幕奉行被仰付。承應元年、御鐵砲御藥込役被仰付。明暦二年極月朔日、御加増五十石被下。右の役御免被成御膳奉行被仰付。寛文八年十月三日、右の御役御免。御近習の御鑓奉行被仰付。同十年九月朔日、右の御役御免。御鷹方御城代被仰付。御鐵砲十挺御預け、延寶四年、病氣に付、御斷

申上御役儀御免被成、寄合組に被仰付、同五年七月十一日、病死。

一三七、養子小塚源藏。宮城大藏。二百石。二十九歳。山内權左衛門三男にて御座候。

寛文七年三月、段兵衛養子被仰付、延寶五年九月三日、段兵衛跡知無相違二百石被仰付、天和三年、宮城大藏組に被仰付候。

一三八、後藤市兵衛。

勝入樣へ御奉公仕候。攝津國兵庫の御陣、森寺政右衛門に付にて罷立申候。兵庫の町口にて打死仕候。

一三九、後藤平大夫。若年父に離、浪人仕居申。

慶長十三年、輝政樣へ被召出二百石被下候。寛永八年七月十五日、於因州五十八歳病死。

一四〇、後藤善右衛門。山脇傳内組。二百石。七十歳。

跡目無相違二百石被仰付、切々御毛見被仰付候。

一四一、子多左衛門。

承應三年、十四歳にて御目見仕候。

一四二、山名伊織。

一四三、山名六左衛門。

伊織相果候て、以後參州奥平九八郎殿に親類有之、是を便に、慶長二年參州へ罷越候。九八郎殿御開被成三百石にて被召出候。天正四年長篠御合戰に高名仕候へ共、何の御褒美も無御座候付、暇申能登に參候、前田又左衛門殿五百石にて被召出候。天正十年能州石動山合戰の刻、又左衛門殿、御發向被成、六左衛門供仕、此節物見役被申付候　同十二年又左衛門殿、加州在城の刻、能州春木の出城を、北畠中將殿被攻候節、金澤より早速御出馬、六左衛門此時一番鑓合申候、歸陣にて五百石加增給候。

其時より父の名、伊織に罷成候。

一四四、小林甚右衛門。十六歳にて春木へ供仕、少々働候由、其後喧嘩仕相手を切殺候に付父子打連立退申、參州の内山家にかくれ居申内、父伊織病死仕候。

輝政様参州吉田在城の節、今枝内膳申上被召出、本俵五人扶持被下候。其時分よりかくれ居申候に付、母方の氏小林に成、小林與四郎と申候。其後七俵御加増被下、後に名を替甚右衛門と申候。寛永十四年、病死。

一四五、小林甚右衛門。

跡目無相違被下、寛文五年十一月二十三日、病死。

一四六、小林孫七郎。稲葉四郎左衛門組。五十八俵五人扶持。四十五歳。

萬治三年、父甚右衛門隠居被仰付、家督無相違被下、在方御用色々相勤申候。延寶元年二月晦日、御郡奉行被仰付十年相勤候て御免被成候。天和二年四月二十日、稲葉四郎右衛門組に被仰付。

一四七、小島若狹。秀吉公にて、四百五十石被下候。

一四八、小島三助。

家督無相違四百五十石被下候。大阪一亂の節打死仕候。

一男、彌大夫。次男、彌二兵衛。右兩人、大阪落城の後、森掃部母方の祖父にて御座候に付、掃部方へ引取、養育仕候。元和八年十月十六日掃部病死仕候。同暮、掃部子千五百石の内、嫡子十左衛門に千石、次男九兵衛に三百石、扨二百石は、小島彌平太に分知被仰付候、彌平太寛永十六年病死仕候、家督無相違二百石子權大夫に被仰付、權大夫幼少に御座候に付、成人仕候迄、彌二兵衛に名代仕後見被仰付候處、權大夫・彌二兵衛を訟申儀御座候、御詮議上にて、權大夫追放被仰付候、此節彌二兵衛は五十俵五人扶持被下候。

一四九、小島彌二兵衛。

右の通、彌二兵衛に五十俵五人扶持被下。瀧川縫殿組に被仰付。寛文十一年二月二十二日、六十一歳病死。

一五〇、養子小島龜右衛門。山崎大膳組。三十二歳。吉崎勘兵衛次男にて御座候。

寛文十一年正月、彌二兵衛養子に奉願、二月朔日、願の通被仰付。同月二十二日、彌二兵衛病死仕、三月十六日、跡目無相違、五十俵五人扶持被下。延寶七年六月二十三日、山崎大膳組に被仰付、御毛見に折々出申候。

一五一、小林。本多美濃守殿に居申たる由。

一五二、小林猪大夫。浪人にて、伯父小林甚左衞門處に罷有。
承應二年四月八日、侍從樣へ御步行に被召出、二十俵三人扶持被下、其後二人扶持御加增被下、其後小十人に被仰付、本俵五俵御加增被下。

一五三、養子小林彌三郎。三十九俵五人扶持。三十六歲。九歲より猪大夫養子に罷成候。
養父存生の內寬文七年閏十月十七日、御步行に被召出、二十俵三人扶持被下。天和二年、跡目無相違被下。實父加藤七兵衞、水野日向守殿に百五十石賜居申候。

一五四、小森大藏。下野國那須郡喜須と申所に浪人にて罷有、寬永十七年病死。

一五五、小森惣助。
喧嘩仕那須を立退、丹羽五郎左衞門樣、御旗二十人の小頭に罷出、大阪陣御供仕、御馬先にて働、甲首を取申候、御歸陣以後、達御機嫌、終に働の御褒美無御座、寬永半過病死仕候。

一五六、小森杢兵衞。四十七俵七人扶持。五十二歲。
五歲の時、惣助病死仕候、其節丹羽左京樣御代にて三人扶持被下、十三の秋より、奧坊主に被召仕候。後還俗奉願候へば、料理方へ御入被成、二十歲より七石被下、御扶持は、右の三人扶持にて御座候。
御前樣御祝言に付、金十兩五人扶持に被成、御家へ御供に御附被成候。御祝言年より當年迄二十六年御奉公申上候。貞享元年五月晦日御中小生に被仰付。四十七俵七人扶持被下。

一五七、兒嶋段右衞門。森中務殿にて百五十石被下、作州に居申候。

一五八、兒嶋與右衞門。若輩にて段右衞門果申候所、跡目無足に被仰付候由。病氣にて暇申、浪人仕備前へ參病死仕候。

一五九、兒嶋長右衞門。左衞門督樣御船手に御奉公仕居申候。

宰相樣・相模守樣迄相勤候、相模守樣因州へ御國替の時分、少將樣御船奉行、相模守樣御船奉行相對にて備前に居申候由。少將樣より二十俵三人扶持被下。寛永二十年二月五日、本俵十俵被下。大船頭被仰付、梶取加子引廻役儀被仰付。

一六〇、兒嶋惣次郎。役小生大船頭。水野三郎兵衛引廻六十俵四人扶持。五十五歲。

寛文二年十一月二十五日、跡目役儀共無相違被仰付。延寶二年、中小生幷に被仰付。同四年九月十五日、御船手一同の類刺物、白きのれん、下に銘々紋付可申、陸御陣にも共年の當番の者、可被召連由被仰付。同年十一月四日、今俵十三俵一人扶持御加增被下、都合今俵六十俵四人扶持被下候。天和三年十二月二十六日、梶取加子引廻役儀、御船入御船預り役儀、梶原甚左衛門・安田茂兵衛・寺見三右衛門・私四人、打込に勤可申と被仰付、貞享元年三月二十四日、刺物えつるに被仰付。

吉備温故秘錄卷之七十四（干城三）終

吉備温故秘録巻之七十五（原本、無卷數）

大澤惟貞輯録

干城四（サシスセソ）之部（原本、干城八）目録

六九、子　孫右衛門。
七〇、佐分利五郎右衛門。
七一、佐分利四郎左衛門。
七二、佐分利五郎左衛門。
七三、佐分利甚五郎。
七四、佐分利平右衛門。
七五、子　五郎四郎。
七六、櫻木淡路。
七七、櫻木九郎兵衛。
七八、櫻木吉之丞。
七九、櫻木長大夫。
八〇、岩松左近。
八一、寒河江半兵衛。
八二、寒河江源太左衛門。
八三、寒　源太左衛門。
八四、齋藤齋宮頭。
八五、齋藤九兵衛。
八六、齋藤新助。
八七、澤　市兵衛。
八八、澤　權左衛門。
八九、澤　權大夫。
九〇、澤　權平。
九一、笹岡彥次郎。
九二、笹岡久兵衛。
九三、笹岡平七。
九四、子　次郎七。
九五、齋藤五郎兵衛。
九六、齋藤右近。
九七、齋藤七右衛門。
九八、子　權八。
九九、佐久間九郎五郎。
一〇〇、佐久間八郎左衛門。
一〇一、佐久間九郎右衛門。
一〇二、佐々木左兵衛。
一〇三、河本宗十郎。
一〇四、佐藤彌右衛門。
一〇五、下濃將監。
一〇六、下濃彌五左衛門。
一〇七、下濃宇兵衛。
一〇八、子　千松。
一〇九、下濃七助。
一一〇、神　小兵衛。
一一一、神　圖書。
一一二、同。
一一三、神　小兵衛。
一一四、子　吉三郎。
一一五、神　才兵衛。
一一六、鹽川吉大輔。
一一七、同。
一一八、同。
一一九、子　喜左衛門。
一二〇、下方左近。
一二一、下方九郎左衛門。
一二二、下方覺兵衛。
一二三、下方主稅。
一二四、下方覺兵衛。
一二五、下方忠左衛門。
一二六、下方淸藏。
一二七、下方佐右衛門。
一二八、下方久大夫。
一二九、下方甚四郎。
一三〇、鹽川伯耆守。
一三一、鹽川源介。
一三二、鹽川源五左衛門。
一三三、庄野市郎兵衛。
一三四、庄野喜左衛門。
一三五、庄野市右衛門。
一三六、庄野長左衛門。
一三七、子　平三郎。
一三八、庄野彌八郎。
一三九、柴岡喜兵衛。
一四〇、柴岡彌市兵衛。
一四一、柴岡松之丞。
一四二、進藤三左衛門。
一四三、進藤惣左衛門。
一四四、同。
一四五、進藤小助。
一四六、鹽田左馬允時勝入道一鑑。
一四七、鹽田又助。
一四八、鹽田仁兵衛。
一四九、柴山關左衛門。
一五〇、子　淸六。
一五一、志水彌四郎直近。

一五二、志水九左衛門直裡。
一五三、志水助十郎延直。
一五四、志水治右衛門。
一五五、進藤重右衛門。
一五六、花房與三右衛門。
一五七、進藤忠四郎。
一五八、子 清六。
一五九、神西小助。
一六〇、魚住勝左衛門。
一六一、神西傳左衛門。
一六二、薄田安齊。
一六三、薄田八左衛門。
一六四、薄田兵右衛門。
一六五、薄田兵右衛門。
一六六、玉野七兵衛。
一六七、鈴田次大夫。
一六八、鈴田半四郎。
一六九、安養寺次郎右衛門。
一七〇、安養寺孫兵衛。
一七一、薄田惣右衛門。
一七二、薄田孫兵衛。
一七三、野々村半入。
一四七、薄田長兵衛。
一七五、薄田與三右衛門。
一七六、薄田長兵衛。
一七七、子 文彌。
一七八、角南十右衛門。
一七九、角南太郎右衛門。
一八〇、角南太郎左衛門。
一八一、杉山大膳吉賴。
一八二、杉山兵衛尉。
一八三、杉山惣吉。
一八四、杉山惣兵衛。
一八五、同。
一八六、杉山傘右衛門。
一八七、野々村半入。
一八八、薄田加兵衛。
一八九、薄田五右衛門。
一九〇、薄田半六。
一九一、杉浦左太郎。
一九二、杉浦次右衛門。
一九三、杉浦忠兵衛。
一九四、杉原作左衛門。
一九五、鈴木登之助。
一九六、鈴木加左衛門。
一九七、同。
一九八、鈴木雅樂之助吉春。
一九九、鈴木九郎右衛門吉直。
二〇〇、鈴木庄左衛門。
二〇一、鈴木新兵衛。
二〇二、鈴木三十郎。
二〇三、菅沼八郎左衛門。
二〇四、菅沼源兵衛。
二〇五、菅沼小源太。
二〇六、瀬尾想右衛門。
二〇七、周藤清助。
二〇八、須賀平四郎。
二〇九、岩田右馬助。
二一〇、須賀與八郎。
二一一、須賀小八郎。
二一二、矢部助左衛門。
二一三、杉山久大夫。
二一四、杉山治右衛門。
二一五、杉山文大夫。
二一六、杉山忠右衛門。
二一七、杉山五左衛門。
二一八、杉山權兵衛。
二一九、杉山甚平。
二二〇、杉山武大夫。
二二一、子 彌兵衛。
二二二、福尾九左衛門。
二二三、福尾才兵衛。
二二四、鈴木所左衛門。
二二五、子 吉十郎。
二二六、鈴木彌右衛門。
二二七、鈴木理右衛門。
二二八、鈴木甚兵衛。
二二九、鈴木。
二三〇、山本與一左衛門。
二三一、鈴木九郎次郎。
二三二、鈴木彥大夫。
二三三、鈴木左七郎。
二三四、仙石忠左衛門。
二三五、仙石清左衛門。

吉備温故秘錄卷之七十五（干城四）目錄終

吉備溫故秘錄　巻之七十五（原本、無巻數）

大澤惟貞輯錄

干城　四（原本、干城八）

一、齋藤備中。

讃州豊田郡藤目と申所に、城持居申候由。讃州・阿州の内、知行所御座候。

二、齋藤下總。

備中長子にて御座候。居城同前。右二代度々武功御座候由。於于今、讃州地士古き者は承傳語申候者も御座候得共、分明に書留申物無御座候故、省略仕候。就中下總時分、土佐の長曾我部殿、武威盛に御座候て所々城々へ押寄、燒拂或は降參、或は追出、四國漸々手に入申時分、領國の多勢を以、藤目の城取掛、數月攻申候へ共、度々逆防戰得勝利、城堅固に相抱申候に付、其比阿波・讃岐の者共、小歌に作り申候は、「土佐殿のくせに〳〵、藤目の城を茶のこじやとおしやる、赤飯ちやのこ、こわちやのこ」、とうたひ申由。其時代少後迄も、四國にて普く流布仕たる儀と申者、只今も御座候。其後從秀吉公、城被召上、讃州浪人仕、名替り齋藤與左衛門と申候。秀吉公筑紫御陣に、與左衛門浪人にて仙石權兵衛殿に合宿仕、三十八歳、於豐後打死仕候。

三、齋藤加右衛門。

下總次男にて御座候。幼少にて父にはなれ、成人の後、方々渡り奉公仕候由、私も又若年にて、父に隔り申に付、何事承覺不申候。大阪御陣の刻、木村長門守與にて罷有、霜月二十六日佐竹左京大夫殿と、長門合戰の刻、働の儀并張番に罷出、心操み品々又天王寺長門持口へ寄手詰掛候節の働、同極月四日、天王寺口へ越前衆攻懸候時の働等御座候へ共、始終委は承不申候。翌年は御使番被仰付、五月六日於若江表、働御座候得共、味方敗軍仕、其上大阪無程落城候故、慥成證文も無御座候に付、正保元年少將樣御改の節も書上不申由。其砌承申候。大阪落城の後、浪人共御赦免の時、紀州大納言樣へ被召出、五百石被下候由。又浪人仕、讃州生駒壹岐守殿より御招少立身、足輕預り候へ共、所存御座候て寬永十六年九月立退申候。

同十七年御當家へ被召出、千石足輕二十人被仰付候。正保元年、少將樣奉毀御機嫌、霜月、河野刑部に御預け、極月二十六日、土倉淡路に御預、三十五年以前慶安四卯年なり。於佐伯六十六歳病死仕候。

四、齋藤加助。旗奉行、三百石五十五歳。

父紀州に罷有候內、若山にて出生仕候。父讃州立退浪人の內、私は紀州母方の祖父に預け申、十一歳にて、寬永十八年正月御國へ參候。十三歳寬永二十年七月七日、御目見仕候。正保元年、私十四歳極月二十五日の晚、河野刑部に御預け、翌二十六日、父同時に池田下總に御預け、建部に籠居候。寬文三年、御預より二十年目)三月三日、建部の內田行御免被成、御扶持本帳五十俵宛被下候。同五年三月七日、御目見被仰付、初て御當地へ罷出、其後は五節句幷御送迎の刻、在鄕より罷出候。

同六年、侍從樣へ御目見仕。同八年霜月朔日、御知行三百石被下、池田主稅殿御與へ被仰付。同極月十七日、御當地へ借宅仕罷出候。同七月晦日、於門田屋敷被下。同十年八月二十七日、伊木頼母組大小生被仰付、此後江戶御供其外御使者に參候。延寶元年長崎へ唐船着岸仕候に付、私御使可被遣候間、武具人馬用意仕可罷有候旨、六月七日、岸藤右衛門申渡、相拵御一左右奉待候處、彼舟無事に成參不申候。同年霜月八日、岸藤右衛門預り、御小生組、御鐵砲引廻役被仰付、母衣出し心次第被仰付。同三年五月十三日、正木主計組頭役被仰付、同六年六月三日、正木主計相果、相組の儀、御番頭被仰付候內、私肝煎候へと被仰付。同年九月九日、主計浮組池田七郎兵衛に御預け被成、私儀其儘組頭役相勤。同八年五月、病氣に付、一圓物覺無御座、御祝義相申儀無心元奉存御斷申上候處、八月十八日、奉願候通御赦免被成候。天和三年閏五月二十五日、御鑓奉行武田猪兵衛相役、御直に被仰付、貞享二年十月朔日、御直に御旗奉行被仰付、同日、父加右衛門具足、先年御城へ上り御座候を父若き時の具足一領幷私少年の時の具足合二領拜仕候。

五、子大九郎。

天和三年九月九日、十歳にて御目見仕候。

私に曰、一本に小一郎とあり。大九郞後變名か、又初め小一郎といひしか。後大九郎と改めしか。但し、小一郎は兄にて、早世

せしか未詳。

六、雀部伊豆。

三好修理大夫殿に奉公仕、二萬八千石被下候。攝津かつら合戰打死仕候。伊豆弟雀部治兵衞、和泉の內家原の城預居申、則右の城にて打死仕候。伊豆子四人、內一人女子少將と申。武藏守樣御袋樣へ、御奉公仕り、病死、武藏守樣御袋樣の御樣體御尋の御書、少將方へ御自筆にて被遣候。右の御書于今所持仕候。一男雀部六左衞門。二男雀部淡路、秀次公御親父、三位法印に居申候。其後秀次公に被召出、八千石被下候。秀次公高野に被成御座候砌、淡路儀、從秀次公御赦免被成候へ共、御跡を慕高野へ參、秀次公御介借仕、則追腹仕候。淡路子雀部新六と申候を秀次公淡路樣子被聞召、被召出候。新六子六大夫と申、于今御旗本に罷有候。三男雀部市郞右衞門、別に家起す、下に記す。

七、雀部六左衞門。

於播州、勝入樣へ被召出候。輝政樣より、天正十二年、御知行百貫被下候。同十七年、百石被下、都合二百石にて御座候。於參州吉田病死。

八、雀部與作。

跡知無相違被仰付、九歲より御近習奉公仕候。於播州百石御加增被下、武藏守樣、大阪御陣御供仕候。攝津の內大嶋先祖の在所知行にて御座候。

右の大島御燒拂被成に相極候處、大島より願立候者共、與作方へ相詰、何とぞ御燒捨不被成樣にと、相詰申候へ共、與作儀に御座候へば、許容不仕居申候。與作は香西縫殿姪聟にて御座候に付、右の樣子縫殿承、武藏守樣へ申上候刻、御前へ與作を召、大島は其方先祖の知行かと、御尋被成、御陣の障にも成間敷候間其儘置候へと、縫殿へ被仰付候。依之大島の者共難有奉存、御馬のぬかわら、尤御家中儀、引を以入申候由、於因州病死。

九、雀郞重大夫。

元和四年十一月、祖父跡知無相違、三百石被仰付。

一〇、雀部六左衛門。湯淺半右衛門、三百石、五十四歲。
十一歲の時、重大夫家督無相違被仰付、寛永九年初て御目見仕候。天和三年閏五月十四日、湯淺半右衛門、組頭被仰付候、

一一、子治兵衛。
延寶元年十月十五日、侍從樣へ御目見仕。

一二、雀部市郎右衛門。
雀部伊豆三男にて御座候。中川右衛門大夫殿に奉公仕、千石堀御攻崩被成候時、深の城にて、心懸仕候由、其後秀次公御舍弟、丹波少將秀勝へ附、高麗へ御供仕、けくしゆんと申處にて、三度功名仕候。藤堂和泉殿御存被成候由にて、歸朝以後秀次公へ、被召出小知被下候。
其後慶長七年、輝政樣へ被召出、三百石被下候。同十八年、輝政樣御卒去に付、新參者御暇被遣候節、市郎右衛門も、御暇被遣候。同十九年、武藏守樣被召歸候、新參者數人御暇被遣候處、餘例に成候間、知行は重て被下候由、御意にて、御合力米被下候。元和二年、武藏守樣御卒去以後浪人仕、戸田太門殿へ、少の間罷有立退、於因州病死仕候。
嫡子五右衛門、慶長十八年、備後守樣へ被召出、於宍粟病死仕候。倅權十郎宍粟浪人仕候砌、備前へ被召寄罷有候。二男二郎兵衛、實は足立猪之介子なり。三男玄古、松本出羽守殿に罷有病死、倅玄德と申、于今雲州に罷有候。

一三、雀部二郎兵衛。實父は足立猪之介と申候、
輝政樣へ被召出、慶長五年、輝政樣新加納川御越の刻、高名仕、御家中にて四番目に首上げ申候由。又於關ケ原輝政樣御陣所の前の山にて與藏組山より二十間餘落、下の川にて敵を組打、首を取申候處、能首取候と御意被成、一兩度首を爲廻御覽被成候由。播州へ御入國にて、右の首茶の湯仕候へと、御意被成、米少々被下候由。翌年二百石被下候共砌、長柄の者五十人、御預け被成候由。關ケ原の刻、山本加兵衛・那須忠右衛門・足立猪之介三人共、歩行にて御供仕候處、御陣所より馬御免被成候由。

慶長十四年、於姫路三十四歲病死仕候。此時二郎兵衛一歲にて御座候所、跡目不被仰候故、雀部市郎右衛門養子に仕候。則市郎右衛門子共は、二郎兵衛と同腹にて御座候。

二郎兵衛儀、寛永七年春、於因州少將様へ被召出、同九年より二百五十石被下。同十四年閏三月五日、御折紙被下候。承應元年九月より御郡奉行被仰付、萬治二年迄八年勤申候。延寶元年七月、稻葉四郎右衛門、但鐵砲引廻被仰付候。同五年七月二十四日病死。

一四、雀部左内。 池田七郎兵衛鐵砲引廻 二百五十石、三十七歳。

明暦三年三月三日、少將様へ御目見仕、同十月侍從様へ一統御目見仕候。延寶五年、跡知無相違、二百五十石被仰付、同八年九月二十九日、池田七郎兵衛組、鐵砲引廻被仰付。

一五、雀部五右衛門。 雀部一郎右衛門嫡男にて御座候。

慶長十八年十二歳にて、備後守様へ被召出、百八十石被下候。延寶三年一月、於宍粟病死。

一六、雀部權十郎。 池田七郎兵衛組、四十五俵六人扶持。十七歳。

兄市郎右衛門は養子にて御座候所、五右衛門跡式、私に被仰付候様にと、奉願候處、豐前守様、兄市郎右衛門に百三十石、私に十五石三人扶持、被仰付候。

兄市郎右衛門、延寶六年十月、病死仕、子無御座候故、從數馬様私に爲跡式二十五石に五人扶持被下候。同七年浪人仕候砌、從侍從様六人扶持被下、五月六日御當地へ罷越候。同八年正月十日、御兒小生に被召出、四十五俵六人扶持被下候。貞享二年八月四日、御兒小生御免被成、池田七郎兵衛組に被仰付候。

一七、齋藤山城守利正。 濃州。

一八、齋藤新五郎。

美濃國の内、加茂郡無毛村令知行候由。浪人仕、於尾州信長公奉賴候。美濃國へ信長公被遣候、次の日長井隼人と、美濃國海老山と申所にて合戰仕、自身鑓を合、二箇所手負得勝利申候。其時信長公、御母衣の衆十人見繼に被參、十人ながら手合候由。美

濃國道洞と申所に、新五郎居城の押のために、長井隼人より付城仕、岸勘解由籠置申候處、信長公御馬を被出候刻、新五郎御先を申請、即時に攻落、勘解由を打取申候。

江州姉川合戰の時、稻葉伊與(豫カ)と一手に居申、心馳御座候由。參州長篠合戰の時は、信長公御側に居申、新五郎者共七十人餘、御馬廻り衆御同前に居申候由語傳へ、此時も心馳御座候由。

播州神吉の城、信忠公御攻被成候刻、池田紀伊守樣無類の御働に付、從信忠公紀伊守、引取候樣にと切々御使被遣候へ共、御引取不被成候に付、新五郎私參引取らせ可申と御請申候。紀伊守樣を引上させ申候。其時新五郎働故、紀伊守打死不仕と被仰、從信忠公新五郎へ御褒美の御意候。新五郎も手負申候由。御家に居申、堀尾與左衛門・須賀左京、其時の働度々物語仕候由。信長公伊勢國小河内へ御馬被出候刻、小河内の城投に成、城の一揆共城を渡、舟に取乘退候刻、信長公上意にて鐵砲撃懸申候へば、一揆共はだかに成、舟より切て上り信長公衆被追立候刻、新五郎備、道筋に居申、少も備を不亂、士卒共に高名させ、其身も手負働申候。新五郎家中士二十人餘、打死仕候由。信長公御褒美の由。

越前の朝倉御退治の刻、齋藤常陸介龍興、美濃國より浪人仕、越前に罷有、引田にて打死仕候、其時龍興差申候脇指を獅子貞宗と申、信長公へ上り申候を信長公御意にて新五郎家の道具にて候間、今度の働爲御褒美、拜領仕候。

越中國河田豐前・推(椎カ)名小四郎徒黨を立、信長公に隨不申處、新五郎を被遣、馬乘八十騎にて罷越、合戰仕、首三千餘打取、安土へ注進申上候へば、無比類働仕候と、信忠公より御感狀、天下の覺可然と被遊、首數も三千餘と、御感狀御座候。其感狀于今御座候。此時飛彈國拜領仕候。

明智日向守逆心の刻、稻葉等と京邊稻荷に同所に居申候。稻葉申候は、其方は此度美濃にての御加增、飛彈拜領の上は早申老にて候間、貴殿旗下に付、我も働候はゞ、其日に美濃國手に入可申候間、急退候へと、いろ〳〵稻葉異見仕候。新五郎申は、今度の御感狀に、天下の覺と被遊被下候間、御眼力無に成可申候、退申間敷と申。信忠公御座候二條へ歩行者二十人、馬乘一騎にて馳付候へば、明智日向守家老齊藤内藏介、二條を取圍居申候。新五郎を内藏介見付、二條へは入申間敷、其故は是非日向と一味仕候か、美濃へ退候、可仕候へと申候處、新五郎我等事は、其方能と存候、御父子御懇の上にて候間、是非共、城の内へ入候と申に付、左樣に被仰候へば、無是非候。餘人ならば、此所にて打取可申候へ共、貴殿の事は、我等一度命の御恩蒙候、被

虎候へと、新五郎を入申候。内藏介其後木戸を開し二三度切て出働候處、鐵砲當り引取、二條城にて切腹仕候と、語傳に御座候。

一九、齋藤織部。

九歳にて新五郎に離申其刻、新五郎家老共、織田三七殿と一味の秀吉公御下知に付、不申と被仰、秀吉公天下御治の時、跡を不被下候、其後織部本知の御約束にて秀吉公へ仕居申候處、御他界の事、大谷刑部へ御内證にて美濃の内新五郎跡を被仰付候由、上意候處、其後御他界被成候。

石田治部少輔亂の刻、織田中納言殿、美濃國岐阜に籠城の節、繪馬堂の橋にて中納言殿母衣衆九人、津田將監・齋藤織部十一人殘り、一先敵を橋より追返申候。

慶長七年、輝政樣へ被召出、六百石被下、同九年十一月十一日、於備前二百石御加増被下候。同十九年、大阪御陣相勤申候。此節黒母衣被仰付候。元和六年十一月二十三日、少將樣於因州御加増、三百石被下、都合千百石被成、番頭に被仰付。寛永十七年病死仕候。

二〇、齋藤久兵衞。

是も寛永十七年病死。私に曰、病死にてはなく、狂死か。

二一、齋藤彌三郎。組外、四百石五十四歳。

一本に、幼少共上、織部孫に候へば、千百石の内七百石被召上、寛永二十一年、私十四歳の時、四百石被下候と有り。

幼少故、殊に織部孫の義と被仰、四百石被仰候。正保元年十一月二十八日、御兒小生に被召出、慶安二年閏十月朔日浪人仕。同四年歸參被仰付候。寛文七年三月五日、池田美作組頭に被仰付、同九年九月十九日、落馬仕不行步被成、御斷申上、組頭役御免被成、組外に被仰付候。

二二、佐々信濃守。信長公へ御奉公、其後秀吉公へ御奉公、其後權現樣へ御奉公仕候。

二三、佐々權兵衞。

二四、佐々文右衛門。

二歳にて權兵衛に離申候に付、信濃處に養育仕、若年の時、杉原伯耆守殿へ浪人分にて預け置申候。其後有馬玄蕃殿へ三百石にて被召出候。暇申候處、被留候へ共、立退申候に付、被構候。久々浪人にて罷有候。

玄蕃殿御死去、以備後守樣被仰上、正保元年五月於江戸、少將樣へ被召出候。其暮御藏米九十石拜領仕候。同二年二月三日、三百石被下候。明曆三年江戸大火事、御屋敷燒失、波多野夫左衛門、文右衛門相仕にて御長屋作事奉行被仰付候。萬治元年十月二日、御暇の義奉願候、意趣は、前年於宍粟、佐々外記備後守樣、御機嫌に違ひ、御暇被遣候。就夫備後守樣、御機嫌の程難計奉存、右の節於江戸、早速御暇の儀申上度奉存候へ共、大分の御用被仰付候處、御勘定等埒明不申內は、延引可仕儀と奉存罷過、御國へ罷歸申上候旨、書付を以奉願候處、被聞召上、無別條儀に被思召候間、前々の通御奉行可仕旨、被仰出候、右の趣、備後守樣にも被聞召、無別條思召候由、御意にて候、其後岡山へ、御越被遊候刻、御迎にも罷出、御目見仕候樣にと、被仰付、年恐御迎にも罷出、御會所にても、御目見仕候。前々の通り御念比の御意にて、綿二十把拜領仕候。其後不相替宍粟へも奉窺御機嫌候。岡山へ被成御座候節、每度御目見に罷出候へば、綿等拜領仕候。大阪御米拂御用にも參候。延寶元年七月十二日、草賀宇右衛門組御鐵砲引廻役被仰付、同四年正月四日、七十三歲病死。

二五、佐々長兵衛。草加宇右衛門組鐵砲引廻、三百石、三十八歲。

明曆三年二月十五日、御目見仕、寬文八年親懸りの內、學校御用仰被付、同十年七月五日、御免被成候。延寶四年二月二十七日、跡知無相違、三百石被仰付候。病氣故御斷申上、同年御免、草賀宇右衛門組へ被仰付、貞享元年二月四日、草賀宇右衛門組、鐵砲引廻役被仰付候。

二六、佐分利彌右衛門。佐分利の氏は、室氏より出申候由、申傳候。

生國尾州一之宮、信長公の旗下、關十郎右衛門に仕へ、十六歲より戰場へ出、度々軍功、方々にて取申甲首十七、近國に名顯申候。長久手合戰、關重郎右衛門、勝入樣御相備にて同日打死仕候、關の家絕申に付、孫右衛門浪人仕候。尾州一の宮へ引込居申

段、秀吉公御聞被成、可被思召候旨、富田左近將監より被申越候節、父輝政樣より伊木淸兵衛を以、渡邊丹波守殿御相談の上にて、被召抱度由被仰付、南條蟄決候處、彌右衛門老母上方へ參候事、同心不仕候付、於岐阜輝政樣へ罷出候。

二百五十石被下候。其後於參州百五十石御加增被下、其後於播州又三百石御加增被下、都合七百石拜領仕候。元和四年十月、七十四歲於因州病死。

二七、佐分利彌左衛門。

關ヶ原の時分、樣子能御座候段、輝政樣御稱美被成、於播州別に被召出、新知二百五十石被下候。播州にて、彌右衛門隱居被仰付候節、家督無相違七百石彌左衛門に被下。彌右衛門に被下候二百五十石隱居料に被下候。彌右衛門隱居の內元和四年、末孫養子に仕置、彌右衛門病死仕候砌、隱居料二百五十石、末孫名を彌右衛門に被成候て無相違被下候。彌左衛門儀寬永二十年六月、六十六歲病死。

二八、佐分利彌一右衛門。

九歲の時、慶長十二年十二月晦日、輝政樣へ被召出候。十六歲の時大阪冬陣、武藏守樣御供仕、於陣中御扶持四人被下候。夏の御陣も御供仕候。其後御兒小生に被仰付候。備前へ御國替二三年過、少將樣より御合力米三十俵、右の御扶持共に被下候。寬永十九年、彌左衛門隱居被仰付、家督無相違七百石被下候。承應三年十月六日、內藏允組頭被仰付。萬治三年草賀宇右衛門組頭被仰付。寬文十三年七月、七十五歲病死。

二九、佐分利源之丞。 後に市右衛門と申候。

寬文九年二月二十九日、彌一右衛門隱居被仰付、同十一年十二月十七日御免被成。延寶元年九月二日、若原監物組頭被仰付。同極月十五日、市右衛門名替り申候。同七年病死。

三〇、佐分利彌八郞。 伊木兵庫組、七百石、二十一歲。

跡知無相違、七百石被仰付、若原監物組に被仰付候。天和元年十一月朔日、若原監物御城代被仰付候に付、浮組にて罷在候。同三年閏五月十四日、伊木兵庫組に被仰付。佐分利氏は、桓武天皇十四代の末孫、親範元祖の由、代々の系圖、同姓彌八郞方に持傳申候。

三一、佐分利彌右衛門。佐分利彌左衛門末子。元和四年春祖父彌右衛門、隱居の養子に奉願候處、願の通被仰付。

同年十月四日、祖父彌右衛門於因州七十四歳病死仕候。隱居料一百五十石、無相違彌右衛門に被仰付。萬治三年十一月十八日、草加宇右衛門組の、御鐵砲引廻役被仰付。天和元年御鐵砲引廻役儀、蒙罷寄候に付、御斷申上候處、御免被成候。貞享元年七月二十四日、於備前、七十七歳病死。

三二、佐分利彌右衛門。草加宇右衛門組、二百五十石、二十三歳。

延寶元年十二月十五日、侍從様へ御目見、十一歳にて申上候。貞享元年九月二十三日、跡目無相違、二百五十石被仰付候。

三三、佐橋彌右衛門。

勝入様に御奉公、御知行被下候由。蒙御勘當候て、立退申候。其後可被召返と、御意御座候處、病死仕候。

三四、佐橋平右衛門。

彌右衛門一所に立退、佐々陸奥守殿にて二百五十石給候。其後浪人仕、犬山に罷在候處、輝政様御代歸參被仰付、武藏守様へ御奉公仕、本俵二十八俵、五人扶持被下候。平右衛門儀花隈城乘の時、手負不行歩に成申候由。寛永十七年十一月七日病死。

三五、佐橋庄左衛門。

寛永二年九月、中小生に被召出。同十七年跡目無相違、本俵二十八俵、五人扶持被下候。病氣被成、正保四年御小生御斷申上候。御免成被、若原監物組に被仰付候。延寶八年九月二十二日、病死。

三六、佐橋夫右衛門。伊木兵庫組、四十俵五人扶持、二十八歳。二男にて御座候。兄彌右衛門は御歩行に被召出、相勤候處、無調法仕、延寶三年御改易被仰付候。

父跡目私に今俵四十俵、五人扶持被下候。天和三年閏五月十四日、伊木兵庫組に被仰付候。

三七、酒井孫市。

濃州岐阜にて勝入様へ被召出、寛永十三年十月二日病死。

三八、酒井七郎右衛門。

寛永七年八月被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、明暦元年中小生に被仰付。承應元年御加増被下、其後兩度被下、都合本俵六十二俵四人扶持被下候。延寶五年隱居被仰付、御扶持三人被下候。

三九、酒井善六。

家督無相違、本俵六十二俵四人扶持被下。天和三年閏五月十四日、土肥飛彈組へ被仰付。同年九月七日病死。

四〇、酒井七十郎。 土肥飛彈組、四十五俵四人扶持、八歲。

天和三年十一月十四日、跡目四十五俵四人扶持被下、并祖父七郎右衛門に、二人扶持被下候。

四一、佐野藤右衛門。

勢州龜山城主、關長門守殿にて、二千石給、家老仕罷有、後剃髮仕、世推と申候。七十六歲於龜山病死。一男內膳。二男兵右衛門。內膳事父跡目給、長門殿に居申候。關原陣に高名仕候。權現樣上意にて、關長門殿より感狀給候。并道具給候。其後長門殿家中、出入公事御座候內、內膳儀は長門殿に諫言申、家中へも扱申候へ共、無承引、いまだ長門殿身體亡不申以前、龜山立退、京都に居申候所、台德院樣上意の趣、稻葉丹後守殿被仰渡、內膳被召出、五千石被下、追付越前少將忠直公へ御附被成候。七十八歲於越前病死。

四二、佐野兵右衛門。

兄內膳一同に龜山立退、生駒讚岐守殿に、三百石にて被召出居申候。後立退申候。慶長四年勢州桑名城主本多美濃守殿へ三百石被下罷出候。元和元年大阪御陣御供仕、於天王寺表、相働首を取申、其後天王寺口にて深手負、安方左傳次二人打死仕候。此時四十三歲、一男多宮介(後主稅と申候。)二男彌左衛門。

四三、佐野彌左衛門。 兄主稅、越前へ召連參、宰相殿より、百五十石被下候處、寛永十八年浪人仕、其後御當地へ參、片山勘左衛門手前に罷有候、

四四、佐野兵右衛門。 池田七郎兵衛組、六十二俵四人扶持、三十二歲。

寛文四年十二月九日、中小生に被召出、六十二俵四人扶持被下候。同八年六月二十一日、六十歲病死。

同年九月十四日、跡目無相違被下、延寶五年八月三日、小堀彥左衛門組に被仰付。

四五、堀金覺大夫。

慶長十年、輝政樣へ被召出、二百石被下、方々御普請に相勤候。大阪御陣御供仕候。夏陣に首一取、下人一人生捕申候。其後百石御加增被下。寛永元年大阪御普請相勤、御加增百石被下、御普請の內、御足米二十石宛被下、同十一年病死。

四六、養子堀金亦右衛門。

覺大夫跡知の內、三百石被下候。方々御普請に相勤候。延寶五年病死。實父櫻井清左衛門事、駿河大納言樣に御奉公仕、其後浪人、京へ參候。

四七、櫻井夫右衛門。宮城大藏組、三百石、二十四歲。

江州に罷有候。堀金出雲大阪梅檀木橋筋に持來候。父亦右衛門屋敷、先代より押領仕居申由、江戸御評定所へ出雲訴申候に付延寶五年極月、江戸へ罷下、於御評定所申開仕、私利運に罷成、翌年四月罷歸候て私役儀の願、段々申上候處、被爲聞召屆、父の役儀御免被成、御知行二百石被下、名氏改櫻井に罷成候て宮城大藏組に被仰付候。右江戸へ罷下候時分、米五十石拜領仕候。

四八、櫻井淡路。

瀧川左近所に罷有、數箇所の陣、首尾能儀度々御座候。其後城之介樣に罷有、甲斐國高遠城攻の時、早く乘、其上働能候由。其後岐阜中納言樣へ四百石被下居申候。岐阜立退、加賀國小松に罷越、丹羽五郎左衛門殿へ四百石被下、關ヶ原の時分、加州金澤城主前田筑前守殿、同國大聖寺の城御攻落、金澤へ人數御打入の時、人數出喰留申節、於淺井繩手、世悴源大夫、働能仕候由。

輝政樣被聞召上、於播州被召出、千五百石被下、御鐵砲三十挺預り申候。源大夫にも二百石被下候。武藏守樣備前へ被成御座候節、淡路に三百石御加增、源大夫に五百石、御加增被下候、武藏守樣御代、於播州御暇申上、立退候處

其後酒井雅樂頭樣御言葉被爲添、少將樣御代、元和五年、於因州被召返、父子ともに右の御知行被下候。元和七年淡路、於因州病死。

四九、櫻木源大夫。

跡知無相違、千八百石被下候。御禮不申上内、元和八年病死。（二男櫻木九郎兵衛にも四百石賜はる。）

五〇、櫻木源大夫。

四歳跡知四百石被仰付、明暦二年九月十七日より中風煩申。寛文八年七月二日、隱居被仰付、同年八月十六日病死。

五一、櫻木作之丞。（丹羽平大夫組、四百石、三十三歳。）家督無相違、四百石被仰付。

五二、子九重郎。 貞享二年十一月朔日、十歳御目見。

五三、齋藤仁左衛門。 二百石被下御奉公仕。正保元年六月十六日病死。

五四、養子齋藤仁左衛門。（丹波内記前腹の世悴にて御座候。養祖父仁左衛門病中、養子に仕度願、申上置果申候。）以後願の通被仰付、跡知百五十石被仰付。正保元年八月二十一日、御禮申上候。寛永十三年七月十三日、草加宇右衛門組、御鐵砲引廻役被仰付。天和二年十月二十一日、五十三歳病死。

五五、齋藤仁左衛門。

延寶七年、十歳にて御目見仕。天和二年十二月二十三日、跡知無相違百五十石被仰付候。

五六、佐々茂左衛門。

森武藏守殿に、兒小生仕罷有候。天正九年、勝入樣へ被召出候。無役に百五十石被下候由。於播州慶長十二年病死仕候。

跡知の儀、茂左衛門嫡子佐々善左衛門は、武藏守樣へ別知に被召出、御奉公仕候に付、中村加兵衛弟、中村庄八を養子に願上、

被仰付候由。

五七、養子佐々庄八郎。後に庄大夫と申候。實は中村加兵衛弟にて御座候。母方の伯父佐々茂左衛門方へ養子に奉願候處、少將樣願の通被仰付候。

茂左衛門病死仕、跡知百五十石、無相違被仰付候。因州御國替の節より、庄大夫と名をかへ申候。寛永十一年九月二十四日、三十九歳病死。

五八、佐々庄大夫。親の庄大夫に子二人御座候。惣領は別腹にて因州に預置申候。

次男次郎吉四歳の時、跡知百石被下候。正保二年二月十五日、御禮申上候。其後病氣に付、十六歳迄歩行難叶に付、一類共願申上候て次郎吉替に因州に預け置候。別腹の世忰儀申上候處、願の通被仰付。明暦二年六月十五日御目見仕、百石の知行被下候。延寶七年八月二十三日、於在宅五十一歳病死。

五九、養子佐々庄大夫。草加宇右衛門組、百石、二十三歳。私儀庄大夫伯父、中村加兵衛次男にて御座候。

延寶元年八月二十五日、父庄大夫養子に願の通被仰付。同二十八日十一歳、侍從樣へ御目見仕、同七年十月二十七日、跡知百石、無相違被仰付。

六〇、佐々善左衛門。佐々茂左衛門嫡子にて御座候。

武藏守樣御部屋住の節、慶長七年十一歳にて、御側に被召仕、同十三年別知に、新知百五十石被下候。大阪兩陣御供仕、草賀内藏允組にて罷立候。落城の時分、すはだ者の首取申候、委樣子相組新庄杢大夫・伊藤小三郎見申候由。

萬治元年十二月二十九日、六十八歳病死。

六一、佐々藤左衛門。跡目無相違被仰付候。延寶八年四月十一日、五十五歳病死。

六二、養子佐々小次郎。草加宇右衛門組、五十俵四人扶持、二十七歳。先の伊藤半左衛門二男にて御座候。佐々藤左衛門母方の從弟にて御座候。

藤左衛門病死の後、草加宇右衛門願申上、養子に被仰付、爲跡目五十俵四人扶持被下候。

六三、坂田權右衛門。

秋田城之介殿へ罷有、四百石被下候由、大阪陣にて高名仕候。其外仕[使]者數度被申付候處、首尾能相勤申候由。城之介殿身上相

果候以後、内藤伊賀守殿にて、三百石、鐵砲四十挺被仰付候由。

六四、坂田權兵衛。 幼少の時、城之介殿に罷有候。

其後於因州寛永六年、少將樣へ被召出、同七年春、御兒小生被仰付、五十俵十人扶持被下候。同十四年三月五日、於江戶二百石御折紙被下候。同十九年御兒小生御免被成候。寛文十二年十一月二十七日、稻葉四郎右衛門組に被仰付。天和元年七月二十三日病死。

六五、坂田權兵衛。 稻葉四郎右衛門組 二百石、十八歲。

天和元年九月十八日、跡知無相違被仰付。前の名淸大夫と申候へ共、其節名をかへ權兵衛に成申候。

六六、先山武右衛門。

織田源五殿・同七兵衛殿・金森法印・福島左衛門大輔殿・毛利河内殿・川尻肥前殿・本多出雲殿に罷有候。此外方々渡り奉公仕候由。織田七兵衛殿に居申時、藤堂和泉殿、いまだ御凡俗にて七兵衛殿御家臣の節、和泉殿と武右衛門と兩人に仕者被付候。武右衛門一人にて仕候に付、和泉殿より、後々迄不和の由。若狹の御屋形を、信長公御成敗の時、屋形寺に取籠御座候を、七兵衛殿・丹羽五郎左衛門殿、何も御取卷の處、裏の窓を破り一番にはいり、屋形と切合相打に仕候。武右衛門刀長候て、向をば一刀にて切臥申候。武右衛門も膝に少手負申候。後迄ちんばにて御座候。攝津國伊丹城夜攻の時、はやく壁裏へ付、狹間を閉罷有候處、七兵衛殿御越御見廻被成、明日御穿鑿被成、御自分御指物白しなひ、武右衛門の被下候。信州高遠城攻の時も高名仕候由。其刻知行八十貫被下候。福島左衛門大夫殿に居申刻、筑紫陣の時心馳仕候に付、御歸陣被成、御穿鑿の上にて、六人に御加增被下候。其内にて、加增拜領仕候。知行は二百二十石被下候。慶長八年、武藏守樣へ被召出、二百五十石被下候。

六七、先山武右衛門。

大阪御陣、父子共に御供仕候。御歸陣以後、武右衛門へ御扶持被下候。元和四年後三月六日、祖父武右衛門病死、跡目無相違被下候。承應三年、御鐙奉行被仰付。明曆二年士鐵炮頭被仰付、百五十石御加增被下、都合四百石被下候。萬治三年二月二十七日病死。

六八、養子先山百右衛門。上坂ト記ス、二百五十石、七十六歳。片山孫兵衛次男にて御座候。

寛永四年、少將樣へ被召出、同八年御切米三十俵被下、同十年五人扶持被下、同十九年、先山武右衛門養子に被仰付候。承應元年御膳奉行被仰付、御加增二十俵被下、同二年御納戸奉行被仰付。萬治元年御知行百五十石被下、御馬拜領并御家屋敷被下候。同三年養父死後、養父四百石の內、御加增百五十石と、私に別知に被下候。百五十石と被召上、爲跡目二百五十石被仰付候。御詰奉行三十五年相勤候。寛文十年九月二十二日、御納戸役御免、組外に被仰付。同十三年六月四日、伊木賴母組に被仰付。延寶二年十一月八日、上坂外記組の御鐵炮引廻被仰付、同七年六月二十三日、御鐵炮引廻の御役儀病氣故、御斷御免被成。

六九、子孫右衛門。天和二年二月朔日、二十二歳、初て侍從樣へ御目見仕候。

七〇、佐分利五郎右衛門。

尾州一之宮地士にて罷有候。其前分明に無御座候。五郎左衛門・富田左近將監殿被召出、鉾に被仕、知行五千石給申候。何時にても左近殿大身に被成次第、十分一の身上に可被仕由。其後左近殿子息伊豫國板島の城主信濃守殿時分立退、於京都病死。

七一、佐分利四郎左衛門。

信濃守殿被召出、二千五百石給、士供預け置被申候。信濃守殿身上果申後、武藏守樣へ被召出、元和元年十月二十九日、千石御折紙被下候。少將樣御代、正保元年八月、先主の子息身上の儀に付、御暇申上候處、御城へ被召出、御料理被下、御盃頂戴の上、御召の御小袖・御羽織拜領仕、御暇被下候。同三年歸參被仰付、同七月七日、本知被下候。同十一月十七日、五十九歳病死。

七二、佐分利五郎左衛門。

寛永十四年、少將樣へ御目見被仰付、本俵四十俵五人扶持被下、御小生被仰付、丹羽藏人組に御入被成候。正保元年、親四郎左衛門、一度に御暇被下、四郎左衛門同事に、御城へ被召出、御料理被下、御盃頂戴の上、御小袖拜領仕

候。後四郎左衛門、一度に歸參仕候。同三年極月、四郎左衛門跡目七百石被仰付、池田佐渡組に被仰付、承應三年十月六日、信濃守樣御組に被仰付。明曆二年正月、信濃守樣御領の内、御鐵炮引廻被仰付、指物御持被下候。萬治元年六月二日、四十一歲病死。

七三、佐分利甚五郎。 山崎大膳組、五百石 三十八歲。

明曆三年二月十五日、少將樣へ御目見、同十月侍從樣へ一同に御目見。萬治元年跡目五百石被仰付、信濃守樣御組に被仰付。寛文十年八月二十七日、丹羽平大夫組に御入被成候 延寶七年六月二十三日、山崎大膳組に被仰付。

七四、佐分利平右衛門。 岸藤右衛門組、百五十石 四十九歲。

慶安三年十月九日十四歲、少將樣へ御兒小生に付被召出。同霜月本俵三十俵四人扶持被下候。明曆三年極月十三日、御加增本俵二十俵被下。寛文元年、江戸御屋敷、御作事の見廻横目被仰付。同二年極月二十五日、新知百五十石被下候。幷御役料小俵四十俵、馬扶持十石被下候。同七年、奥中小生に被仰付、伊木頼母組に御入被成候。同十年八月二十七日、御使役被仰付、金劍に銘々名氏書付候指物拜領仕候。人置料六十俵、御役料八十俵宛被下候。延寶元年四月二十四日、如願御知行借銀の方に被召上、外に八十俵宛、其儘被下、御小生組にて岡山に罷有、御野郡の内御代官可仕旨被仰付、小堀一學組に御入被成候。

簡略仕候上は在宅仕度旨奉願候へば、同月七日、森本與三兵衛申渡候は、近年簡略人在宅御赦免不被遊候へ共、平右衛門儀、在御用被仰付候上は、如願被仰付候。今度大小生役の者一同に白母衣被成候。平右衛門事、雖爲逼塞、役儀無御免上は、母衣被仰付候由申渡候。

同九月十五日、於御前母衣絹頂戴仕候。延寶二年二月五日より、御野郡原村に在宅作事被仰付被下。同三月九日、在宅へ引越申候。同四年正月二十一日、半田山御鹿狩に付、御野郡勢子頭被仰付、勢子三千召連罷出相勤申候。同二十三日、於御城鹿一頭拜領仕候。同年三月九日、御代官役御斷申上候へば、御免被成候。爲勝手在御用被仰付候處、不仕付儀打はまり相勤候樣、宜樣に被聞召、寄特に被思召候。岡山へ罷出、如元大小生役可相勤候。明屋敷有次

第可被下候旨被仰渡。同五年霜月二十四日、岡山町屋へ罷出候。同十二月二十二日、長屋新左衛門跡屋敷被下候。同六年五月朔日、於小堀主殿宅申渡候は、其方事勝手不如意に付、江戸雜勤段被相聞召、江戸御供・大小生役共に、御免被遊候由。同十七日、中村主馬組へ御入被成候。同八月三日、手錢作廻積書指出申候處に、同六日願の通被仰付旨、御老中中村主馬に被仰渡、極月十三日田町屋敷指上、同姓甚五郎長屋へ引越申候。天和三年二月二十七日、重々難有御意にて一番町丹羽彦八郎跡屋敷被下候。同年閏五月十四日、岸藤右衛門組に御入被成候。同四年三月二十五日、於御城御勘定上聞役被仰付候旨、御老中被仰渡付、御役料六十俵宛被下候。

七五、子五郎四郎。　天和二年正月十五日、十歳、侍從樣へ御目見仕。

七六、櫻木淡路。

元和七年病死。跡目、子源大夫に、千八百石無相違被仰付候處、御禮不申上内、源大夫同八年病死。源大夫嫡子源大夫に四百石次男九郎兵衛に四百石被下候。

七七、櫻木九郎兵衛。　櫻木源大夫次男にて御座候。

源大夫死後四百石被下、若年より被召出、御近習に御奉行仕候由。寛永十九年三月十八日病死。

七八、養子櫻木吉之丞。　土倉作人次男にて御座候。櫻木九郎兵衛方へ養子に被仰付候。

寛永十九年九月、跡知四百石無相違被仰付候。正保二年、土倉隼人惣領左馬之丞、病死仕候に付、吉之丞を隼人嗣子に願申上候。願之通被仰付、櫻木を潰、隼人世悴に被仰付候。明暦三年九月被仰出、御米三十俵被下候。江戸御供に罷越、御兒小生當分引廻候へと被仰付、萬治元年罷登、同年御兒小生頭被仰付、寛文六年九月、櫻木九郎兵衛假名絶申候間、吉之丞櫻木を名乘申度と、御訴詔申上候處、願の通被仰付、櫻木御取立可被成由にて本知四百石被仰付、吉之丞嫡子登之介を隼人養子に被仰付候。寛文十年病氣故、右の御役儀御訴詔申上候處、御赦免寄合組に被仰付、貞享元年十月朔日、六十一歳病死。

七九、櫻木長大夫。　山崎大膳組、二百五十石二十一歳。

貞享元年霜月二十五日、跡知二百五十石被下、山崎大膳組に被仰付。

八〇、祖父岩松左近。最上源五郎殿に奉公仕候、

八一、父寒河江半兵衛。

最上源五郎殿に奉公仕候。源五郎殿身上果候に付浪人仕、仙臺に罷有、其後私母離別仕、半兵は上方へ參、只今武山半兵衛と申、永井市正殿に罷有候。母離別の時、私は懷胎にて御座候。

八二、養父伯父寒河江源太左衛門。

最上源五郎殿に奉公仕候。源五郎殿身上果候て一同に浪人仕、上方へ罷上り、松平左近様へ、御馬乘形に被召出、百俵十人扶持被下候。氏名を寒河と名乘可申旨、左近様被仰付候。御身上果候て浪人仕候處、御家へ被召出、二百石十人扶持被下。明暦二年霜月二十三日病死。同三年三月、跡目寒川彌五兵衛に百五十石八人扶持被仰付候處、同年八月逐電仕候。

八三、寒川源太左衛門。山崎大膳組、百石十人扶持五十四歳。

源太左衛門跡目三郎被召出、五十俵七人扶持被下、御馬乘形御奉公相勤申候。寛文十年十月、百石十人扶持に被成被下候。在江戸仕候。天和二年、在江戸御赦免候て霜月に御國へ引越候へと被仰付引越申候。貞享二年十月、山崎大膳組に被仰付候。

八四、齋藤齋宮頭中納言殿爲家司。後秀吉公御附被成候、居城濃州洲俣に罷有、高一萬三千石、此通に承申候。

八五、齋藤九兵衛。京極丹後守様に三百石被下居申候。私幼少にて離申候。

八六、齋藤新助。納戸奉行、七十八俵五人扶持四十三歳。

寛文元年八月十九日、於江戸御兒小生に被召出、本俵五十俵五人扶持被下、同六年正月十三日、前髮取候へと被仰付、中奧（なかおく）に相詰申候。延寶二年十二月、御腰物奉行被仰付。同六年二月八日、御前奉行被仰付。同七年六月二十三日御納戸役被仰付候。于今相勤申候。

八七、澤市兵衛。武藏守様へ被召出、本俵七十俵十人扶持被下候。於因州病死。

八八、澤權左衛門。

跡目無相違被仰付、伯州相見郡御郡奉行被仰付候。寛永十年四月十二日病死。

八九、澤權大夫。出生以後五十日めに權左衛門病死仕候に付、跡目本俵二十俵三人扶持被下候。

寛永十八年、少將樣へ御目見仕、同二十年正月五日、御兒小生に被仰付。慶安三年本俵二十俵二人扶持、御加增被下候。承應元年正月十二日、侍從樣へ御附被成、此時爲御加增本俵四十俵に五人扶持被下、都合八十俵に十人扶持拜領仕候。同三年秋の比より御兒小生の內、御納戶奉行被仰付。(自)寛文二年迄九年相勤、同年夏御免被成、其後御數奇道具奉行被仰付。明曆元年正月朔日、侍從樣御前髮御取被成候時、御月額代(さかやけ)被仰付候。御髮の儀は前後十五六年相勤申候。萬治二年十二月十六日、新知百五十石被下候。寛文二年九月八日、御兒小生頭被仰付、五十石御加增被下、御數奇道具御用御免被成候。同四年十一月十一日、百石御加增被下。延寶元年十二月二十七日、二百石御加增被下候。同七年六月二十三日、御小生頭被仰付、忍の者御持筒二十人御預被成候。御兒小生頭被仰付候內は、其儘裁判仕候へと被仰付。天和元年、一星栗毛の御馬拜領。天和元年七月十一日、御兒小生頭御免。同三年七月十五日、引廻の忍の者、八田彌三右衛門に御預被成候。同年十一月二十一日、御小生頭御免、番頭格に被仰付、五百石御加增被下、都合千石に被成、跡役被仰付候內は、御小生組裁判仕候へと被仰付。同十一月二十六日、曙月毛の御馬拜領。貞享元年正月二十五日、下屋敷被下。同年七月、江戸にて以の外相煩、從侍從樣御頼被成、御典藥延壽院・井上傳庵・奥山立庵、御見廻被成、延壽院の御藥用にても驗氣無御座候に付、度々御使の上、雖有御意にて御暇被下、御國へ參心儘に養生仕候へと被仰付候。然共、池田大學迄、其儘江戸にて養生仕度旨、御斷申上候へ共、重て御意重く御座候に付、御請申上、則御目見被仰付、七月十四日の朝、御屋敷へ罷出、御目見仕、雖有御意の上、御召被成候御羽織幷御枕御(蒲)團迄拜領仕、同日江戸罷立候。富田道徹・金光清右衛門幷世悴權平、道中御附被成、御預の足輕五人御借被成、伏見迄の內、追々氣色の注進申上候。貞享元年十月晦日、五十二歲病死。

九〇、澤權平。六百石、十八歲。

延寶四年正月朔日、九歲、侍從樣へ御目見仕、同八年正月八日、御居兒小生に被仰付。同十五日四人扶持被下。天和三年五月十五日、六十俵被下、御側に被召出旨被仰付。貞享元年十二月二十一日、跡目六百石被下、其儘御側に被

召仕。

九一、笹岡彦次郎。叢川左近殿に居申候由。

九二、笹岡久兵衞。瀧川家士共離散の時、浪人仕。

慶長十九年、於播州、武藏守樣へ被召出。耳聞不申に付、法體仕玄忠と申候。本俵五十俵十人扶持被下候內、玄忠依奉願、私兄笹岡彥三郎、二十俵五人扶持被下候。寛永十九年九月二十八日、玄忠病死。

九三、笹岡平七。八十俵五人扶持 五十六歲。

跡目三十俵五人扶持被下、御兒小生に被仰付候。正保元年十俵御加增被下候。慶安元年、中小生被仰付、丹羽藏人組に被仰付。寛文十二年、於江戶中奥に相詰候へば、被仰付候。延寶三年九月二十八日、御膳奉行被仰付。同六年、御膳奉行御免被成、御納戶奉行被仰付。同八年六月十五日、十八俵御加增被下、天和三年五月二十八日、當分池田左兵衞組に被仰付。同閏五月十四日、御小生組に被仰付。澤權大夫組に御附、六月十九日、中奥詰に被仰付候。貞享元年、武具修復奉行被仰付。同二年三月十五日、吳服奉行被仰付。

九四、子次郎七。天和三年七月朔日、十一歲御目見仕候。

九五、齋藤五郎兵衞。四十七俵四人扶持 四十七歲。

越前齋藤元祖利仁將軍の、一男越前の齋藤、二男加賀の富樫、三男越中の井口、古來地士と申來候。齋藤の系圖、先祖の兵粮井綸旨、公方家武衞、朝倉より代々、御朱印御感狀共、越前亂に紛分御由。右の斷書記候一卷、私迄所持仕候處、坪內半三郎殿一見望に付、遣置。寛文元年丑正月江戶大火事燒失仕候。元龜年中、曾祖父齋藤刑部少輔基雄迄、其家を繼、越前國處々に罷在候。其內代々戰功敗軍擊死。右の卷物に記御座候へ共、數代の儀不分明承傳候所迄、書上申候。

曾祖父齋藤刑部少輔基雄は、越前の地士、後に武衞淺倉の旗下に罷成、同國刀根と申所に在城、代々士大將にて其節戰國走廻共場數、於于今越前一乘谷、刀根の鄕人共、傳承居申候由、身上人數地高不承傳候。元龜年中信長公、淺井備前守長政御對陣。同六月二十八日、江州姉川合戰、淺井方にて打死仕候。其子右近幼少に付、刑部少輔、弟小次郎陣代に罷成、後刑部少輔に名を

更申候。越前の齋藤は一門廣く、富樫・井口・石黒・宮崎・入善・倉光・津幡・上木・宮地・山峰の者共、其外北國古き家の者、同流の由、就中刑部少輔を本家と申候て惣領會釋に仕由承及候。

九六、齋藤右近。

母は淺井備前守長政妹にて御座候。幼少の時父戰死仕、無程越前没落後に、關白秀次公へ被召出、武道の御奉公三度申上候由、其場所不分明候。熊谷大膳承候て、御代々成候はゞ、於越前國御取立、城主に可被仰付上意の由。いまだ御知行は不被下、三千石計の御扶持拜領仕、京都北野に屋敷被下罷有候。其跡を近比迄齋藤屋敷と申候由、秀次公高野山への御跡慕候へ共、秀吉公御免不被成候。古鄕越前へ引込、剃髮仕宗也と申候。小太刀修行仕候。或時盜に出合、盜は鐵の筋金入候棒、右近は刀を拔合、盜を仕留申候由。其刀私所持仕候。銘は藤嶋と御座候。右近於越前病死。

九七、齋藤七右衛門。［松平肥前守殿に三百石被下罷有、寛永十八年九月二十五日、三十五歳、於加賀金澤病死。］私三歳の時、父病死故流浪仕候。

寛文元年七月十三日、於江戸下谷御屋敷、侍從樣御步行者に被召出、本俵二十俵三人扶持被下、水野治兵衛組に附申候。同二年三月、江戸御供道中、假橫目役被仰付。

同十九日御先へ罷立候節、自然於道中、山崎八兵衛に逢申事可有之候哉、可得其意旨、谷田甚五右衛門申聞候。同月二十三日曉、大阪御藏屋敷前に着、伏見罷登候。船用意仕候處、山崎八兵衛西國方へ通申由、小人頭那須茂右衛門申屆、承懸々船より上り候節、八兵衛西の方へ通申に付追掛候。各は心次第と申捨、肥後殿橋渡り越、西國橋迄走著候へ共、乘出船多、何れとも難見分候處、那須茂右衛門、先より犬を付置、八兵衛は、乘合船に乘、汀より五六間乘出申候由、私にしらせ申候故立向、其船山崎八兵衛在之と見付候。上り候へと詞を掛候刻、船は留、返答は無御座候。其内追々御步行衆、船場より參候。私刀に手を掛、八兵衛早く上り候へ、臆病者、其船此所へ着候へと申懸候。其時八兵衛船中に立上り候、上場にて勝負可仕儀と請寄候へ共、無事に上り申候に付、其方江戸立退樣惡敷故、母を於御國獄（含）者被仰付候。御着迄此表に奉待請候へと申渡候。榊十郎兵衛に申談、御屋敷御藏へ入置、御船へ申上、爲御意御船頭中へ、八兵衛を相渡、同二十七日曉、伏見へ罷登り、江戸御供仕候。

同年於江戸、永々相煩候故、新參の儀旁迷惑仕、御暇申上、北國へ參養生仕度旨、山田彌太郎近藤覺兵衛迄奉願候處、同霜月中旬、井關玄說藥を用、養生仕候へ共、今一度可被召仕御意の旨［同盛樣被召遣候霜申聞候。］同三年五月、頰本復仕罷

出候。難有御意の旨、山田彌太郎申聞候。同六年正月十三日、於御國御中小生に被仰付、二石五斗御加増被下、小堀彦左衞門組に付申候。

私儀御捨不被成、埒在三人共、其者存間敷候。然上は、いか様の儀有之候共、侍從様へ御奉公可申上旨、尙二月天樹院様御病中に御意被成候由。前中府様被召仕候。丸岡私に申聞候。延寶五年四月、鹽田仁兵衞腫物大病故、平臥の節、同姓平九郎狂氣に成り山田道悦跡家書院の奥に、刀持取籠候。家内迷惑仕旨賴來候。私同家内の合壁に罷有候故、承懸に罷越、俣棒を提一番に押込立向、平九郎刀を叩候。其腕を棒にて打放し、則其刀の把を胸かけて、後の壁へ押付、不働候處へ、二番に古岡清右衞門、木刀を持飛込、刀奪取申候。

同年七月、丹羽平大夫組に被仰付。同七年五月、神圖書組被爲附候。同年十月、札方御用被仰付、每年役料四十五俵宛被下候。同年十月御小生組に被仰付、澤權大夫組被爲附候。

九八、子權八。 八歲御目見仕、天和二年三月十五日なり。

九九、佐久間九郎五郎。

勝入様以來御奉公申上候。輝政様より二百石被下候。於吉田八十石御加増被下、前池田出羽に御附被成候。出羽所にて五十石加增申付候。

一〇〇、佐久間八郎左衞門。 後出羽所に居申候。私兄佐久間八郎左衞門只今主水所に居申候。

一〇一、佐久間九郎右衞門。 四十六俵、四人扶持 五十歲。

萬治三年正月十一日、侍從様へ御歩行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下候。寛文元年七月三日、山野加右衞門弟子に被仰付。同八年迄すゑもの稽古仕候。同七年極月二十三日、十人組に被仰付、八俵一人扶持御加増被下、小堀主殿組に附申候。延寶五年八月二日、御小生組に被仰付、主殿組に附申候。同七年六月二十三日、澤權大夫組に附申候。同八年八俵御加增被下候。

一〇二、佐々木左兵衞。 浮田中納言殿に少知給罷有、中納言殿遠流の節より浪人仕、備前赤坂郡河本村にて耕作仕居候由。

一〇三、河本宗十郎。　河本村にて醫者仕少々作等も仕候。

一〇四、佐藤彌右衛門。　役小生勘定河村平太兵衛引廻三十五俵五人扶持、五十九歳。

承應二年閏六月二十六日、少將樣御勘定方へ被召出、二十俵二人扶持被下、氏を佐藤に仕候。明暦元年正月十五日、三俵一人扶持、御加増被下候。同八年十一月六日、御算用方頭役被仰付、八俵一人扶持、御加増被下候。

一〇五、下濃將監。　若年の時、柴田處に罷有、其後尾張常眞に罷有、其後由良玄蕃處に居申候由。

天正十一年輝政樣へ於美濃被召出、同十二年、岩崎御陣御供仕、御退被成候節、前後御側不離御供仕候故、御感被成、七十貫御知行被下、御折紙被下候、其後御知行、二百石被下候。其後御加増五十石被下、御持弓十張御預け被成、關ヶ原御陣御供仕、播州御拜領被成、御知行五百石被下、備前御拜領被成、武藏守樣に御附被成、百石御加増被下、都合六百石、御鐵炮二十御預被成。慶長十九年、大阪御陣の砌波多野丹波相果、組幷御鐵砲浮組にて居申候に付、將監に引廻罷出申候へと被仰付。丹波兄弟共、一所に御陣相勤申候。於因州七十一歳病死。

一〇六、下濃彌五左衛門。

於岐阜武藏守樣へ十二歳の時被召出、備前へ御入國、十七歳の時、百五十石被下、大阪兩陣相勤、其後於因州、三十一歳大小生役被仰付、百五十石御加増被下、寛永十年、御使番役にて剌物金の半分被仰付。同十九年奏者役にて黒母衣被仰付。同二十年、御持筒十挺御預け、翌年正月、御鐵砲十挺御かさみ御預被成候。慶安二年七月、奏者役御免被成、御加増百石被下、御旗御預け被成。寛文七年三月五日、隱居被仰付。同極月三日、七十九歳病死。

一〇七、下濃宇兵衛。　近習大横目、四百石五十八歳。

寛永二十年正月十五日、御目見仕、寛文七年三月五日、家督無相違四百石被下、尾關兵庫組に被仰付、同十月十五日、池田藤右衛門組の與頭被仰付。同十二年十月三日、中村主馬組み與頭被仰付。延寶元年霜月九日、御小生の組頭幷御使番の黒母衣被仰付。同六年正月十一日、於御前役儀猩々皮の羽折拜領仕候。

一〇八、子千松。　延寶六年四月八日、六歳にて御目見仕候。

一〇九、下濃七助。　水野三郎兵衛組、八十俵七人扶持、五十一歳。下濃彌五右衛門三男にて御座候。

正保四年、少將樣へ被召出、本俵四十俵五人扶持被下候。寛文十年八月二十七日、御膳奉行被仰付候。延寶二年五月、十八俵御加增被下、都合今俵八十俵五人扶持拜領仕候。病氣に成御斷申候處、同四年十一月十五日、御免被成、丹羽平大夫組に被仰付、同五年十二月十八日、水野三郎兵衛組に被仰付候。

一一〇、神小兵衛。　方々渡り奉行仕候由。其後蒲生飛彈殿へ罷出、數年罷有八百石被下、母衣被仰付、知行外に御合力米二百石被下候由。

輝政樣播州御入國の翌年、建部內匠殿御肝煎を以御家へ被召出、慶長七年十月十八日、千石被下、折紙頂戴仕候。

一一一、神圖書。

小兵衛隱居被仰付、家督無相違、慶長十八年十一月七日被仰付。寛永十三年二月、圖書病死。

一一二、神圖書。

九月八日、跡知無相違被仰付、承應三年、池田數馬組の組頭被仰付、明曆元年十月五日、御船手の御用被仰付、足輕二十人御預被成。寛文六年迄十二年相勤、同年十月七日、土倉隼人相組不殘并御船手にての御足輕二十人、其儘御預け、御番頭役御直に被仰付。天和元年霜月朔日、御簡略奉行被仰付、雜作料百俵被下。貞享元年十月三日、病死。

一一三、神小兵衛。　鐵砲頭、千石　四十五歳。

同十一月二十五日跡目無相違被仰付。寄合組小堀彥左衛門次へ御入被成候由。日置左門被仰渡。同二年十月朔日、御鐵砲二十人、御預け被成候旨、御直に被仰付。

一一四、子吉三郎。　延寶八年八月朔日、十二歳御目見仕。

一一五、神才兵衛。　宮城大藏組、六十俵五人扶持　四十四歳。

十五歳明曆二年七月二十七日、侍從樣へ御兒小生に被召出、六十俵五人扶持被下候。寛文四年八月、宮城大藏組に

被仰付候。後の神圖書が次弟にて御座候。

一一六、塩川吉大輔。

鹽川伯耆守家來に罷有、其後信長公へ被召出。其後大和大納言殿へ被召出、御子息中納言殿迄奉公仕候。千石給候由。中納言殿御果の後、秀吉公へ被召出、本知被下、御奉行仕候由。慶長二年十月二十一日病死。

一一七、塩川吉大輔。鹽川太郎左衛門子なり、祖父吉大夫養子に仕候。大和大納言殿に奉公仕、其後跡知無相違、千石秀吉公より被下、御馬廻りにて被召仕、伏見・大阪相詰候、慶長五年關ヶ原落去の節、浪人仕候。

武藏守様へ於備前被召出、二百石被下、大阪兩陣相勤候。正保元年十二月二日、隱居被仰付。同三年九月九日病死。

一一八、塩川吉大輔。鐵奉行、二百石、七十四歳。吉大輔養子に仕、幼少より因州に參居申候。

寛永三年十五歳、御目見仕。正保元年養父隱居仕、跡目無相違、二百石被下候。寛文五年正月二十三日、備中の郡奉行被仰付、同七年正月二十三日、口上道郡へ御入替被成。延寳六年七月迄十四年相勤、御赦免被成、池田藤右衛門組の、御鐵砲引廻に被仰付候。同八年八月十八日、池田藤右衛門組の組頭役被仰付。同九年十一月朔日、其後若原監物組組頭に成申候。貞享二年十月朔日、組頭役御免被成、御鐵奉行被仰付。

一一九、子喜左衛門。　正保四年、御目見仕。

一二〇、下方左近。

小笠原の一族數代、尾州下方の郷領知仕候由。左近義、織田彈正忠信秀御旗下に成、天文年中於參小豆坂、今川義元を突崩し鐵を仕候事、世上に七本鐵と申傳候。又天文年中、尾州海津合戰の節も、鐵場の心操仕候由。永祿年中尾州浮野合戰、江州箕作の城攻、元龜年中宇治合戰、刀根山合戰、尾州長島合戰等、度々戰場の走り廻り世上に花鐵七度と申たる由。此等は、信長公御旗下にて相勤申候由。從信長公被下候御太刀于今尾州に罷有候。同姓方に所持仕候。

一二一、下方九郎左衛門。

左近嫡子の由、十六歳より信長公に致近侍、永祿年中濃州森野輕海瑞龍寺等、合戰相勤申候。就中尾州桶挟(狹)間にて信長公今川義元を御打取被成候刻、九郎左衛門義元の近臣と組合候處、又一人來、九郎左衛門を可打と仕候故、九郎左衛門初の敵を突

捨、當の敵を組伏首を可揚と、しころを疊候へば、法師にて御座候故、名字を尋候へば、今川義元の同朋、林阿彌と答申、則手拭を以からめ信長公懸御目申候。今川出頭の者にて御座候故、此度信長公御手へ被打取候義元の御首を初、戰死の首共、名字分明に白狀仕候。依之、九郎左衞門首數打取たる忠功、莫大に思召候由。信長公御褒美被成候由。此時十八九歲の由、於尾州越田、二十五六歲にて病死。

一二二、下方覺兵衞。

父に幼少にて離候故、母と一所に、尾州森山の方に被養育、十六七歲の比、森山不遁者を打藏、尾州を立退、關東筋に五三年忍罷有候。左近孫たるを以、蒲生氏鄉に被召出、四百石被下候。同州岩石の城、奥州九の戶の戰場にて心操の働仕候由、殊に九の戶の城へは一番に乘込、首を取申仕形、氏鄉感被成、朱塗のうつはいの甲を被下、母衣に被成候。其時額に鎗疵蒙申候。蒲生秀竹の代、御領地被減候刻、堀左衞門殿に罷出、越後にも居申候。其後筑前中納言殿へ御呼被成、千二百石に足輕三十人預り申候。所付朱印于今御座候。中納言殿死去の刻、土肥周防より、定て浪人可仕候間、早々播州へ參候へと、上にも被思召候旨申越、伺(候カ)公仕候。慶長八年、輝政樣へ被召出、播州に罷有候處、武藏守樣へ御奉公仕候へと被仰付、氏鄉にての本知とて四百石折紙被下候。此節の中納言浪人と申、唯今無双の御當家へ、被召出候義に御座候へば、如何樣とも、御請可申上候へ共、兼て先知の通、半も可被下旨、土肥周防申聞候處、相違の段迷惑仕候通、御斷申上候へば、當時諸浪人、多先知を減じ相濟申砌候故、御心持御座候て右の通被仰出候、行々御心付可被仰付旨、委細御趣意、御內意の通、周防申聞せ、翌年より百俵宛御合力米被下候。

同十三年中、御加增百石幷母衣被仰付候、其節も御斷申上候へども猶又御懇の御意御座候。慶長十六年、少將樣御三歲の時、御守に御附被成候刻、輝政樣・武藏守樣御相談の上、御家御譜代同意に思召、被仰付旨、雖有御意にて三百石御加增被下、妻子共に在江戶仕候。御幼君樣奉守、且又其時分は、江戶御留守役人も無御座故、武藏守樣御在國の比は公儀御用幷外諸事の義相勤申候由。武藏守樣御下知の御書、御直書共に頂戴仕、于今數通御座候。

元和四年、因州へ御入國の御供仕、三百石の御加增被下、都合千百石拜領仕候。同七年六月二十四日、三十一歲病死。

一二三、下方主稅。

七歳の時、跡目無相違、千百石被仰付候家督以後若年の間も毎日御城へ被爲召候。主稅宅へも度々被爲成、抒姉共迄御前へ被召出御懇に御意被成候。主稅前髮候以後、御城詰被仰付、御近習被召仕候。幼名牛之助を此節主稅と名を御替被遊、難有御意の上、少將樣御手自御替被遊候守家の御腰指、名字の似合敷御道具と御意被成、拜領仕候其外年々御直書・御書致頂戴、于今所持仕候。御國替以後、御當地にても主稅宅へ、少將樣度々御成被遊候。其以後御國供水前迄は毎冬御茶指上申候。其刻は御手作にて御料理被下候。御番頭の次に列を被召出候。萬治三年八月二十二日、四十六歳病死。

一二四、下方覺兵衛。寄合組、千石四十九歳。

寛永十九年十月、六歳にて御目見。萬治三年十月十三日、跡知千石被仰付、寄合組の列に罷出候樣にと被仰付、餘知百石は、私弟忠左衛門に被仰付候、寛文十二年十月三日、池田藤右衛門組頭に被仰付。延寶四年十月四日、池田藤右衛門御城代被仰付候に付私儀御直に組頭役御免被成、寄合組に被仰付候。延寶三年九月十六日、對馬樣御當歳の御時、私子同前に奉存御守立候樣にと侍從樣御直に御意にて被仰付、天和元年七月、備前・備中の御國繪圖御書、直被仰付、同十六日より私宅にて書始、十月十四日出來。同十五日差上申候。貞享元年、江戸御供仕候。御客應答被仰付候。

一二五、下方忠左衛門。宮城大藏組、百石四十七歳。下方主稅次男にて御座候。

承應三年九月、十六歳にて、侍從樣へ御兒小生に被召出、五十俵五人扶持被下候。翌年江戸へ參、侍從樣へ御奉公申上候處、病氣度々指發申候付、御斷申上、御扶持切米指上、御國へ罷歸、引込居申候。萬治三年父主稅病氣仕、同年十月十三日、跡知の內分知百石被仰付候。

一二六、下方清藏。田中兵部大輔殿、三州岡崎住城の時分奉公仕、三百貫被下、其後病死。

一二七、下方佐右衛門。幼少の時、清藏果申候に付、伯父下方覺兵衛に懸り居申候。

慶長十七年、御小生に被召出、御奉公仕候。元和四年十一月、新知百五十石被下、御腰物奉行被仰付。寛永九年幕よ

り御代官所被仰付候。同十四年二月、百石御加增被下、同十九年十二月朔日、隱居料として御代官所被仰付。惣領小左衛門に家督無相違、二百五十石被下、御馬廻に被仰付候。然所小左衛門病氣に成候故、正保四年、小左衛門弟久大夫を養子に奉願候處、無相違久大夫に被下候。御馬廻に被仰付候。

一二八、下方久大夫。
寛文十一年六月十六日逼塞仕、延寳五年逼塞明、同八年十一月二十七日、岡山にて屋敷拜領仕候。同年十二月八日、亂氣仕相果申候。

一二九、下方甚四郎。 草加宇右衛門組、七十俵七人扶持十二歲。
天和元年二月十五日、七十俵七人扶持、八歲の時被下候。

一三〇、塩川伯耆守。
播州河鍋郡多田庄の士、信長公へ楯を築申候。信長公多田庄へ御出馬被成候處、歷々を打取申に付、御陣御引取被成候、以後丹羽五郎左衛門殿•菅野屋九右衛門殿兩人へ被仰付、歸參候へと被仰出、任其意御奉公仕候由、荒木攝津守、信長公へ御敵仕候刻、色々御忠節仕候。其勳功に能勢郡•有馬郡、爲御加增被下候

一三一、塩川源介。 信長公御他界以後、四歲にて在所罷出京都に浪人仕居申候刻、宇喜多中納言殿へ奉公仕候由。
其後於播州、輝政樣へ慶長九年に被召出、四百石被下候。元和八年七月二十九日、四十八歲病死。

一三二、塩川源五左衛門。 池田左兵衛組頭、四百石六十三歲。
元和九年跡知無相違、四百石被下候。幼少故從弟同姓善大夫名代可仕旨被仰付候。寛永四年十月二十九日、三十五歲にて善兵衛病死仕候。私儀家督の折紙、寛永十年正月元日被下候。慶安二年、一條姬君樣御祝言の御供被仰付。十月十九日、岡山罷立江戶へ罷下、於江戶從少將樣時服二•白銀五枚被下候。霜月二十八日、姬君樣御發駕被遊御供仕致上京候。十二月二十五日、從姬君樣白銀二枚拜領仕御暇被下、極月二十九日罷歸。寛文十年十二月二日學校御用被仰付、十三年七月十六日御免被成候。延寳五年八月朔日、芳賀內藏允組、鐵砲引廻役被仰付候。天和三年閏

五月十四日、池田左兵衛組の組頭役被仰付候。

一三三、庄野市郎兵衛。

安宅神五郎所々罷有候。其刻無比類忠節仕候由、其節は庄野兵庫と申候。其後若狹少將殿に居申、二百六十石被下候。其後金吾中納言殿にて三百五十石被下候。慶長九年武藏守樣へ被召出、三百石被下候。市郎兵衛於神五郎處、忠節の證文御座候由。寛永二十一年に私父市右衛門書上申候へ共、右の證文、市右衛門兄、市兵郎衛所に御座候。寛文九年市郎兵衛家より出火仕、火急にて諸道具透と燒申候、右の證文も燒申候。

一三四、庄野喜左衛門。市郎兵衛御斷申上、隱居仕候に付、三百石内二百石喜左衛門へ被下、百石市郎兵衛、隱居分に被下候。

喜左衛門病氣にて御國他國ともに御奉公無御座候。寛永十四年三月十二日病死仕候。

一三五、養子庄野市右衛門。實は岡助右衛門世忰にて御座候。庄野喜左衛門養子に被仰付候。

寛永十四年、跡目無相違、二百石被下候。御毛見每度罷出候。慶安三年、若安監物預御鐵炮引廻役被仰付。明曆元年三月十五日、口津高郡御郡奉行被仰付、十六年相勤。寛文十年八月二十七日、御普請奉行被仰付、足輕十人御預被成候。延寶元年十一月十九日、願の通御役儀御免、隱居被仰付。天和元年正月十六日、七十二歲病死。

一三六、庄野長左衛門。組外、二百石四十四歲。

慶安三年九歲にて御目見仕候。明曆元年三月二十六日、半田山御鹿狩の節、十四歲にて鹿射留申候。依之於半田山少將樣御前へ被召出、右鹿射留申樣子御直に御尋被成、忝御意にて翌二十七日、御兒小生に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。同年江戶御供被仰付、七月二十一日、於江戶御側兒小生に被仰付。寛文十二年九月二十一日、三十三俵御加增被下。延寶元年十一月十九日、父市右衛門跡目無相違、二百石被下候。其節私弟彌八郎、御中小性に被召出私に被下候八十俵四人扶持被下候。同四年十一月三日、少將樣御取次役被仰付、其後御步行頭并御役料六十俵被下候。同年極月二十一日、私簡略に付大分上知仕置勝手迷惑可仕候間、人置料五十俵被下旨、被仰渡。在宅の簡略奉願候處、願の通、同五年五月朔日、御役儀御赦免被成、組外に被仰付、同年極月より在宅仕候。

一三七、子平三郎。 天和二年正月二十八日、侍從様へ御目見仕。

一三八、庄野彌八郎。 八十俵四人扶持、三十八歳。庄野長左衞門弟にて御座候。

延寶元年十一月十九日、侍從様へ御小生に被召出、八十俵四人扶持被下、小堀一學組に被仰付、同七年六月二十二日、澤權大夫組に附申候。同年九月十五日、御船宮御用被仰付、當年迄七箇年相勤申候。

一三九、柴岡喜兵衞。

於因州少將様へ御歩行に被召出、其後侍從様へ被爲附、十六年在江戶仕、於御國新知百石被下、御中小生に被仰付、寛文七年八月二十七日、五十八歳にて病死。

一四〇、柴岡彌市兵衞。

親掛り候て居申內に、御中小生に被召出、喜兵衞病氣に成候に付、家督百石無相違被仰付、其後五十石御加增被下都合百五十石の御折紙、延寶二年十一月十五日頂戴仕候。同五年九月御役儀御免被成、若原監物組に被仰付。同六年四月二日、四十四歳病死。

一四一、柴岡松之丞。 伊木兵庫組、三十俵四人扶持十六歳。

延寶六年九月二十五日、三十俵四人扶持被仰付。若原監物組に被仰付。天和元年十一月朔日、若原監物御城代被仰付候に付、浮組にて罷在候。同三年五月十四日、伊木兵庫組に被仰付。

一四二、進藤三左衞門。

宇喜多中納言殿に足輕預居申候。慶長五年關ヶ原陣以後權現様より中納言殿行衞御尋被成候節、中納言殿家來蘆田作內罷出申上候は、中納言殿御立退の刻、進藤三左衞門と申者供仕候間、進藤三左衞門御尋被成候はゞしれ可申と申上候に付、方々御尋候故、三左衞門罷出候へば、中納言殿儀は御敵仕候へ共、三左衞門儀は主へ忠節の者、無比類頼母敷思召候間、可被召出との上意にて何方へ主取仕候とも御貰可被成と御意の由に御座候。其後黃金十枚拜領仕候。重て中納言殿差申候鳥飼國次の脇差、行衞相尋候へと上意にて御朱印被下、關ヶ原へ參尋出し指上申候。其後中納言殿より被出候節、本多上野殿・德山大藏殿

を以て中納言殿へ三左衛門儀御尋被成候へば、五十日餘關ヶ原の在鄕にて三左衛門育申候由に申上候。右三左衛門申候は三日附其後別申候由申上候。右の達、却一入賴母敷思召候由、度々御直に御念比の上意にて御座候由、其後被召出候。

一四三、進藤惣左衛門。關ヶ原の時分、丹羽五郎左衛門殿に罷有、其後方々に罷有、後は織田上野殿に三百石被下罷有、病死仕候。

一四四、進藤惣左衛門。跡知無相違上野介殿被申付候。上野介殿病死の後、浪人仕候。

寛文三年二月十八日、少將樣へ被召出、同四年七月朔日御目見仕、三百石の御折紙被下、土肥飛彈組に被仰付。同十一年極月十八日學校御用被仰付、延寶元年幕御免被成、同五年九月二十三日、六十歳病死。

一四五、進藤小助。土肥飛彈組、二百石十四歳。

延寶五年十一月十九日、跡式二百石被仰付。

一四六、塩田左馬允時勝入道一鑑。一鑑は、三好修理大夫長慶姉聟にて、惣領左馬丞俊政は、三好長慶甥。

天正十三年八月、蜂須賀彥右衛門殿、阿波國を秀吉公より御拜領被成、御入國迄、阿州美馬郡三谷城主にて長曾我部元親へ相隨、祖父左馬允弟又大夫、私父又助三谷城主にて罷有、知行高城付共三千五百石領知仕罷有候。蜂須賀彥左衛門殿御入國早々阿州國中諸士共、御觸には十月十五日の內、御城下渭津へ參御禮申上候は、三好家又は長曾我部より取懸の村郡を可被下候。品々より御加增をも可被下由、御觸にて御座候。自然御禮遲參候ては、御成敗可被成由、十四五日の內は每日御觸被成候。祖父左馬允は娘を人質に、土佐國元親へ遣し、中の內善助と申家司に預け置申に付、御禮不申上、居城三谷村蜂須賀家臣稻田太郎左衛門、拜地の內にて御座候に付、稻田太郎右衛門に被仰付、三谷の內宮成と申所にて鹽田一鑑弟左兵衛、切腹被仰付候。依之左馬允弟又大夫•父又助八歳成候を召連、讃州の國主十河又八郎は、從弟にて御座候に付、十河所へ立退申候處十河も秀吉公へ讃州指上、則仙石權兵衛殿御拜領被成、十河孫六郞も家來に成。翌年天正十四年九州日向の國、高鍋島津相支候に付、從秀吉公四國衆被遣由、仙石殿は御目代の由、十河孫六郎•鹽田左馬允俊政弟又大夫一所に高鍋陣罷立。十河孫六郎•鹽田左馬允打死仕候。孫六郎世悴孫六•鹽田又大夫•仙石殿本陣に罷有、讃州罷戻候。權兵衛殿高鍋陣御裁判惡敷、讃州被召出、尾藤甚右衛門殿御拜領被成候。然處鹽田又大夫父又助召連、阿州古鄕へ歸參候樣に申來、罷歸候へば、結句流浪人に罷成、天正十

九年八月十二日、叉大夫病死仕候。

一四七、塩田叉助。阿州三谷に罷有、一生百姓仕、寛文八年三月十七日、九十一歳病死。

一四八、塩田仁兵衛。池田七郎兵衛組、七十八俵七人扶持、六十三歳。松平阿波守殿家司、福田修理亮側に十三歳より罷有、世忰九郎兵衛、父子の右筆仕申候。

御當家様へ侍従様御部屋住の時分、寛文二年九月朔日、被召出、七十八俵七人扶持被下候。同七年爲鹽田孫大夫御歩行に被召出。延寳元年霜月、正木主計組に被仰付。

一四九、柴山關左衛門。山崎大膳組、四百石 五十九歳。

祖父柴山兩二、於播州輝政様へ被召出、二百石被下候。武藏守様へも御奉公申上、其後病死。父柴山新右衛門兩二存命の內、於播州九歳にて輝政様へ御兒小生に被召出候。十五歳にて新知二百石被下候。兩二果申後、知行一所に被成、都合四百石被下候。於因州大小生に被仰付、備前へ御國替以後も相勤候。正保二年八月三日、五十四歳病死。

私跡知無相違四百石、九月六日被仰付。延寳七年六月二十三日山崎大膳組に被仰付。

一五〇、子淸六。延寳六年二月朔日、十二歳、少將様へ初て御目見仕候。

一五一、志水彌四郎直近。

數代播州住人にて御座候。彌四郎播州の內、上三原村•田中村•合山村•萬願寺村、四箇所知行仕候由、書付御座候。於富田表、林與四郎と申者打取候。感狀御座候。於丹波國山家病死。

一五二、志水九左衛門直裡。細川越中守殿にて七百石被下候。寅年御上洛の刻越中殿供にて在京仕、吉田と申所にて病死仕候。

一五三、志水助十郎延直。遺跡相續仕、以後暇申浪人仕、於江戸病死。

一五四、志水治右衛門。七十八俵八人扶持 五十歳。

寛文三年十一月二十二日、於江戸中小生に被召出、本俵四十俵五人扶持被下候。同五年九月十六日、在江戸被仰付三人增の御扶持、人足代米十五俵、御加增に御直し被下、都合七十八俵八人扶持被下。同七年十二月十八日、御小

作事の上奉行被仰付、五年勤申候。同十一年在江戸御赦免、御國に歸申候。同十二年九月十五日、小堀主殿組に被仰付。
延寶七年六月二十三日、澤權大夫組に被仰付。

一五五、進藤重右衞門。
十八歳、於參州輝政樣へ御歩行に被召出。武藏守樣・少將樣迄御奉公申上度に御加增被下、四十俵五人扶持拜領仕候。切々江戸御供仕、因幡・伯耆にて御代官・竹奉行・御横目被仰付、於備前、寶永十五年十一月七日、六十三歳病死仕候。

一五六、花房與三右衞門。
跡目無相違被仰付、御歩行・横目役、其儘相勤江戸へも度々御供仕候。子細御座候て母方の氏を名乘申候。承應四年正月十八日、四十二歳病死。男子無御座候に付、老母に二人扶持被下候。寛文八年九月三日病死。

一五七、養子進藤忠四郎。六十二俵三人扶持、四十一歳。寛文三年正月五日、花房與三右衞門養子に被仰付。
少將樣御歩行被召出、小俵三十一俵三人扶持被下。延寶四年十一月八日、中小生に被仰付、御六樣へ御附被成候。
私伯母岩田、西の丸・御丸・御屋敷樣へ御奉公仕、小俵三十一俵三人扶持、被下候處、岩田御切米、私拜領仕、都合六十二俵三人扶持、拜領仕候。

一五八、子清六。天和二年正月十五日、十五歳御目見仕候。
實祖父小川助左衞門、松平相模守樣御家臣津田將監處に知行二百石にて罷有、病死仕候。實父小川彌五左衞門將監、子周防處に右の少知にて于今罷有候。

一五九、神西小助。
觀應の比より代々播州神西に少分の居城所持仕候由。足利家代々の御教書共、惣領家の者、數通于今所持仕候。赤松家衰へ候刻浪人仕、法名不樂と申、播州書寫引込申候。武藏守樣備前御入國の節、聟九右衞門方へ引越申、病死仕候。

一六〇、魚住勝左衞門。

十六歳にて、淺野紀伊守殿へ奉公、知行千五百石被下、紀州へ罷有候。其節は井上左傳次と申候。此氏斷絶有之間敷所御座候て、於于今、松平安藝守殿御家來に井上治部右衛門と申者、千三百石被下罷有候。私爲に再從弟にて御座候。左傳治十九歳にて紀州浪人仕、其年大阪へ籠城仕候、趣意は、後藤又兵衛は祖父神西小助弟にて御座候。大阪へ籠城仕候前に少の間、於播州、丸山九右衛門方に罷有候。紀州父方へ罷越し申候砌、父子細御座候て訴訟申入置候處、永々返答無御座故、見合立退可申覺悟仕候折節故、大阪へ籠城仕間敷やと、伯父又兵衛申を幸に存、紀州立退、又兵衛同道仕、十九歳にて籠（堀）仕候。丸山九右衛門、後に太郎大夫と申候者、父勝左衛門爲に姉聟にて御座候。右の筋目故、後藤又兵衛大阪籠城前、九右衛門方に罷有候。委細の義、鈴田半四郎、九右衛門直の物語、承覺可申候。勝左衛門事大阪にて道明寺口の働の次第、又兵衛手崩候て引退申節、播州浪人吉村左門と申者、一所に立退申候。半月の指物持たる武者、二人づれにて引取申候。勝左衛門申候はゞ、半月は又兵衛指物にて候。大將打死と相見へ候。大將打たる者にて候間、打果可申と申候へば、左門申候は、敗軍に不入事に候。其分にて退可申と申候へども、其方とは違、大將と申、伯父の儀に候へば、各別に候とて引返し候へば、左門も一所に返、半月の指物持申者は、父鑓付申候。今一人は、左門鑓付申候。其後敵二人かさみ、四人に成申候へども、勝左衛門勝たる强力者にて御座候、其故か無恙引取、泉州岸和田に勝左衛門兄、神西七左衛門と申者有之、是へ落着申候。其後浪人にて江戸に罷有候。或時紀州大納言様御家老三浦長門守方へ參、大阪物語仕候處、一座に居申山内八大夫と申者、其半月の指物取持候者は、我等にて候と申。勝左衛門申候は、鑓疵可有之候。草摺の端を突たると覺申候と申候へば、左の方細腰に鑓疵有之、其段早速、大納言様御聞に達、五百石御加增被下、都合八百石に成候由。十五六年以前迄、右の八大夫存命仕候。八大夫にて大阪にての働相知申候に付、吉村左門は、保科肥後殿へ千石にて被召抱候。勝左衛門は前々より高知を望申候に、剩左門千石にて相濟候に付、猶以本知に加增無之候ては罷出間敷と申、永々浪人仕候。其後松平伊豆守殿•黑田市正殿御肝煎、榊原飛彈守殿•舟越伊與（豫）守殿御取持にて、細川肥後守殿へ御扶持方にて可被召出と、寛永十八年十月十六日、右の御衆より相濟候段申來候。其日松平主殿頭殿にて御料理被下、食傷仕、同十八日病死仕候。

勝左衛門大阪働の事、備後守様御物語被成、少將様被聞召、可被召出首尾も御座候を、身上望御座候て御請不申上候由承傳候。備後守様へは御目見仕、御懇意の御書共數通御座候を火事に燒失仕、于今少々相殘御座候。

一六一、神西傳左衛門。　〔右筆、七十八俵四人扶持、四十四歳、〕

寛文十四年〔四年カ〕十二月十日被召出、七十八俵四人扶持被下候。延寶五年九月、二十年在鄕、逼塞仕度奉願候。翌年四月二十九日、願の通在鄕被仰付候處、木戸彦兵衛、御右筆〔著〕中間少く御事缺に候間、何とぞ御奉公相勤候樣にと、達て申聞、少し分も有之候間、先其分に勤候へと申に付、其年より、京銀二貫目返上は、御下知有之間、取立候事、延引可有之旨、大學左門指紙に出候て返上不仕候。貞享二年十二月二十八日、御銀七貫目拜借仕候、是は私不勝手の段〔達〕奉御聞爲御救被仰付候。

一六二、薄田安齋。　〔輝政樣へ被召出、御前近被召仕候由。〕慶長六年二百二十石拜領仕候。

一六三、薄田八左衛門。

慶長五年、十二歳にて於播州、輝政樣へ被召出候。同六年二百石被下候。同十二年安齊病死仕候に付、安齊へ被下候御知行、八左衛門に被下候、御知行共に、四百二十石、八左衛門に被下候。慶安元年十月朔日、隱居被仰付、宗睿無相違、兵衛門に被下候。

一六四、薄田兵右衛門。　〔土倉隼人組、御鐵炮引廻被仰付、年月不存候。〕

萬治三年十月土倉隼人組頭役被仰付候。寛文九年二月九日、病死。

一六五、養子薄田兵右衛門。　〔岸藤右衛門組頭、四百二十石、二十八歳。寛文元年、薄田兵衛門養子に被仰付養父兵右衛門は母方の伯父にて御座候。私は、林小左衛門二男にて御座候。〕

寛文九年四月二十八日、跡目無相違被仰付、神圖書組に被仰付。延寶五年閏極月二十八日、岸藤右衛門組頭被仰付候。

鈴田半四郎先祖書

一六六、玉野七兵衛　〔氏家左京亮殿に罷有、其後織田上野殿に罷有、其後浪人、病死。〕

一六七、鈴田次大夫。

織田上野殿に兒小生仕居申、七兵衛立退申時、一所に浪人仕候。關白秀次公へ御奉公申候。其後加賀大納言殿にて四百石被下候。其節玉野彦左衛門と申候。大納言殿立退、金吾中納言にて三百五十石被下候。松平薩摩守殿にて三百石被下候。薩摩守殿御遠行以後、浪人仕候。

慶長十四年、武藏守様へ被召出、三百石被下候。大阪御陣御供仕候。寛永十九年七月五日病死。次大夫跡目、兄夫兵衛に無相違被仰付。

一六八、鈴田半四郎。 弓組與頭、二百石五十一歳。

正保三年十一月二十一日、少將様へ兒小生に十二歳にて被召出、本俵三十俵四人扶持被下、其後十俵御加増被下候。明暦二年九月十七日、權現様御祭禮流鏑馬被仰付候に付、供奉仕、於御旅所相勤申候。首尾能相勤候段、御機嫌に被思召由にて、於御城、御料理被下、御時服一つ拜領仕候。萬治三年十月十八日、新知百五十石被下、古田齋組に御入被成候。寛文七年、於江戸松平土佐守様强き御的弓少將様へ御持參被成、被仰候は、御家來中に眉入仕者無御座候。私に的射可申旨被仰付、早速射申候處、御譽被成、其弓被下候。寛文九年二月二十五日、御弓組の組頭に被仰付。延寶元年九月二十三日、於御菜園、勸進的御覽可被遊被仰付、射手五十五人罷出、弓太郎私に被仰付、相勤申候。同二十七日の晩、射手中其外御役相勤申銘々於同所御料理被下。同二年正月十八日、從侍從様御加増五十石被下候。同五年八月八日、御城詰御免被成、弓役儀は其儘可相勤旨、被仰付半役仕候。同七年十一月四日、前の通御城詰被仰付、御取次役被仰付。同八年、下人不足米二十石宛可被下旨、左門被申渡。

一六九、安養寺次郎右衛門。 淺井備前守殿に奉公仕候。安養寺と申所の近所にて知行取申候由。

一七〇、安養寺孫兵衛。

片桐市正殿に奉公仕、市正殿大阪に被居候時、大阪町奉行仕候由。其後片桐出雲守殿代、組頭役仕、六百五十石給候。孫兵衛末子安養寺瀬兵衛に右知高の内、百五十石分知仕候。歩行二十人、出雲守殿より御預け候。其後孫兵衛病氣に付、隱居仕、家督則瀬兵衛に被申付、瀬兵衛分知百五十石、無役に隱居料に被下。

一七一、蒲田惣右衛門。 孫兵衛嫡子にて御座候。

蒲田隼人正御肝煎にて慶長十九年三月、於播州武藏守様へ被召出、十月十五日、三百石被下候。氏の儀、蒲田を名乘候へと、隼人正指圖にて蒲田に成申候。大阪兩度御陣御供仕候。萬治三年三月九日、七十二歲、病死。

一七二、蒲田孫兵衛。　水野三郎兵衛組、士鐵炮引廻三百石、四十五歲。

萬治三年六月十六日、惣右衛門跡知無相違、三百石被下候。延寶五年十一月二十八日、永野三郎兵衛組頭役被仰付。天和三年閏五月十五日、御町奉行被仰付、貞享二年十月朔日、御赦免被成、水野三郎兵衛組、士鐵炮引廻役被仰付。

一七三、野々村半入。

氏家卜全に罷有、三百貫給候。其節は野々村左平次と申候。其後織田常眞公に罷有、五百貫被下候。母衣并鐵炮百預り申候。其節野々村半六と申候。右兩家にて二三度心馳も御座候由。其後浪人中風仕上方に居申候。關ケ原陣以後播州へ參、世悴に養はれ罷有候處、輝政様被聞召上、御扶持方被下候。其時半入と申候。於因州病死。

一七四、蒲田長兵衛。　織田常眞公御息兵部少輔殿に小生仕罷有、二百五十石被下候。關ケ原陣の時、替指物使番被仰付、其節は、野々村庄九兵衛と申候。

慶長六年、輝政様へ被召出、三百五十石被下候。武藏守様へ御奉公仕、大阪兩陣御供仕候。夏の御陣には、替指物被仰付、御先手横目仕候。寛永十七年病死。

一七五、蒲田與三右衛門。

跡目無相違、三百五十石被仰付。正保二年十二月八日、四十六歲病氣。

一七六、蒲田長兵衛。　土肥飛彈組、鐵砲引廻、三百五十石、五十四歲。

跡目無相違、三百五十石被下。寛文十年十二月二日、學校御用被仰付。同十三年七月十六日、被赦免、銀五枚被下。延寶六年十二月二十七日、土肥彈組、御鐵炮引廻被仰付。

一七七、子文彌。　九歲、寛文十一年、御目見仕候。

一七八、角南十右衛門。　宇喜多中納言殿にて千石被下候由。

一七九、角南太郎右衛門。

跡知被申付候。戸川肥後宇喜多家立退申候節、一所に立退申候。權現様へ戸川肥後殿被召出、庭瀬拜領に付、則家來に成、四百石給候。其後病死。子傳三郎幼少故、跡目減て被申由にて立退申候。後京都壽德院法印弟子に成、醫術を學、角南玄好と申、松平丹羽守殿へ三百石にて奉公仕候。其後病死。子玄俊と申、家督相續仕罷有候。

養母妙達は、祖父太郎右衛門姪にて御座候。幼少の時分、福照院様へ御奉公に罷出、其後御女中頭に仰付候。

一八〇、角南太郎左衛門。 池田左兵衛組、三十一俵六人扶持二十七歳。

妙達養子に奉願候處、中小生に被召出。延年五年閏十二月朔日、御目見仕候。侍從様へも同日御目見仕候。妙達に被下候三十俵三人扶持、私に被下候。天和三年閏五月十四日、池田左兵衛組に被仰付候。

一八一、杉山大膳吉賴。 濃州原見郡河手村に居住仕候。

一八二、杉山兵衛尉。 同國山縣郡高畠村に居住仕候。

一八三、杉山惣吉。

於參州吉田御鷹方に被召出、五十俵五人扶持被下候。惣吉世悴杉山惣左衛門、輝政様へ被召出、百三十石被下、其後宮内様へ御附被成候。

一八四、杉山惣兵衛。 惣吉二男にて御座候。

武藏守様へ被召出、三十五俵三人扶持被下候。其後惣吉跡目無相違被仰付候。惣兵衛に被下候御切米、嫡子惣吉に被下候。承應三年二月二十八日病死。

一八五、杉山惣兵衛。 鷹匠津田重次郎•服部與三右衛門引廻七十八俵五人扶持、七十三歳。

初め惣吉父惣兵衛家督の時、惣兵衛に被下置候三十五俵三人扶持、私に被下候。承應三年跡目無相違被仰付、自分に被下候。御給御扶持被召上、名も父の名、惣兵衛に成申候。

一八六、杉山金右衛門。 丹羽平大夫組、五十俵四人扶持、六十七歳。〔杉山惣兵衛(初の)なり。〕

明暦元年少将様へ御歩行に被召出、二十俵三人扶持被下、同年四月江戸御供仕、五月二日於江戸、侍従様へ御附被成候。同三年十月五日、御歩行横目被仰付。萬治元年正月十三日、小十人(人)に被仰付、五俵一人扶持御加増被下候。寛文十二年十二月三日、十俵御加増被下、御酒奉行被仰付。貞享二年十月五日、丹羽平大夫組に被仰付。

一八七、野々村半入。

一八八、蒲田加兵衛。

織田兵部少輔處に兒小生仕居申候。其後浪人仕、美濃に罷有候。其節駿河御普請に付、富田八大夫と申者、御歩行罷越候處、八大夫家來、御公儀に越度有之、美濃へ走り居申候處、兄蒲田長兵衛に輝政様被仰付、播州より追掛參候處、彼者取籠居申に付、折節加兵衛出合、早速搦捕、長兵衛に相渡申候。

此等の趣、輝政様御聞に達、則加兵衛被召出、二百石被下候。慶長十二年より御奉公申上候由。御家へ被召出候節、母方の氏、蒲田を名乗申候。同十九年大阪御陣、組外にて蒲田修理一所に御供仕候。夏陣も同前。寛永十三年三月十日、於江戸病死。

一八九、蒲田五右衛門。

寛文十三年七月、跡目無相違二百石被仰付。慶安二年二月、池田數馬預り、御鐵炮引廻被仰付。寛文十二年九月、伊木頼母組、御鐵炮引廻被仰付。天和二年二月八日病死。

一九〇、薄田半六。　伊木頼母組、二百石　三十三歳

天和二年四月二十九日、跡知無相違二百石、被仰付。

一九一、杉浦左太郎。

梶浦大隅組に罷有。大阪御陣御先へ大隅川越申節、同船仕乘沈果申候。何の年に召出候も不存候。

一九二、杉浦次右衛門。

左太郎果候を打死同事に被思召候由にて、早速跡目被仰付候由。右御陣中にて被召出、首一つ打取申候由。寛永十五年五月十

六日病死。

一九三、杉浦忠兵衛。

跡目無相違被仰付。寛文五年七月十日、池田數馬引廻組に被仰付。同十一年九月、伊木頼母組引廻に被仰付。延寶七年九月十六日、病死。

一九四、杉原作左衛門。 伊木頼母組、二百石 二十五歲。

延寶七年十二月九日、跡目無相違被仰付。

一九五、鈴木登之助。

筑後國久留米侍從に奉公仕、十七歲にて高麗陣に罷立候。小西攝津守順天と申所に罷居候を、かこなみ人數萬騎にて取卷申に付、引かね被申候。攝津守を捨候て、引取申儀ひけ被成候。後卷可仕と被申候所、寺澤志摩守殿・島津兵庫頭殿・立花左近殿・筑紫上野殿・同主水殿・高橋主膳殿・久留米侍從、此七人順天より三里近所迄、押寄候處に、かこなみ人大船數百艘夜の內、湊口へ押寄、日本勢を悉打取、日本の船共を取卷及難儀申候處、此方の二艘にて番船を一艘取申時の者共、一艘には福長久兵衛・草賀七兵衛・眞田五郎兵衛・荒木作之丞・湯淺十郎右衛門・松村源助・村上源十郎・登之助此八人の者共、思々に乘申候。湯淺十郎右衛門は打死仕候。番船に乘移申候處、荒木作之丞を、敵射掛申、二つ矢つかひ申候て福永久兵衛を射申處を、登之助立向打取申候。其時登之助、左の目じり、左のすね、二箇所手負申候由、今一艘には、野津多兵衛・湯淺善右衛門打死仕候。水沼久大夫・坂口源右衛門・庄田少七・同少二郎此六人の者共も同前に番船に乘申候。如此せり合申候內、小西攝津守も引取申候に付、後卷の衆も、歸朝仕候由。

江州大津陣、侍從殿出陣の節、登之助供仕候。城より森（毛利カ）元安の手へ夜打出申候節、仕寄の內、士十七八人居候內より登之助共に六人出申候へ共、敵早々引取、手に合不申、其後惣構を乘破申時、小川瀨兵衛と申者と登之助早々乘込、三の丸の內にて敵引取申所を、言葉を懸、鑓突申候へ共、登之助も右のほうさき、右のかいな、鑓にて二箇所、深手負申候。瀨兵衛は首を取申候。

高麗順天番船の時、百目玉の鐵炮中り申候。

大津城攻、七百目玉にて搏申し、手田庄七郎と申士召連仕籠にて搏申候、二重日の日の天守を搏申候。

武藏守様へ被召出、慶長十四年十一月朔日、百石被下候。兒島小串にて大筒を御搏せ御覽被成候。同十七年十月十四日、五十石御加増被下候。

大阪陣へ被召連候節、士六人御附被成候。貝福右衞門・大島六大夫・小川關大夫・津村左助・志賀九左衞門・林與右衞門、此者共にて御座候。又小人六人御附被下候。菅若狹、尼崎に居申候て武藏守様へ申上候は、鈴木登之助に下人と申越登之助參候へば、新家表へ大阪より唐船をかこひ候て乘出居申候間、見及候へと申に付、小船にて新家表へ罷越、繪圖を仕罷歸上げ申候。其晩に新家へ參候へと御意にて終夜よし原に居申、夜明候て菅若狹・同權之助・新家へ渡り申に付、登之助も渡り申候。若狹内の三大夫・源右・助左衞門、鐵炮の小頭村田彦兵衞と申者など、野田村を燒拂申候處、其時福島より新家へ敵罷出候て、鐵炮互に搏申候、其後大阪より人數を出し候時、白しない五十本計、其外あかね母衣など、見え候へども、物かげにて人數何程出申も、見え不申に付、登之助罷越見及候へと、若狹申に付、小船にて川をこぎのぼり、福島表へ參候て敵の樣子を見及候へば、指物計土手へ立ならべ、人數は皆藪陰に置候を、能見候て罷歸申聞候。其日は鐵炮搏、相互に手負死人も御座候。半時計せり合、相引に仕候。右の段々、又大筒を搏せ候事、被聞召、於大阪銀十枚拜領仕候。十二月朔日、大阪天滿口へ御押詰被成候て、大阪と天滿の間を、川をへだて仕寄仕、朔日より二十日夜迄、晝夜相詰候て、せいらうをくみ上げ、大筒を大阪へ搏かけ申候。登之助儀、大野修理方より、兩度狀指越呼申候へ共、不參候。其段番大膳迄、兩度の狀を上げ申候。則御覽被成、殊の外御感被成候。其後大阪へ參、大阪の樣子能聞候て參候へと被仰付。卯月八日大阪へ參居申内、十二日の夜。大野修理を闇打に仕候へ共、打おふせず、打手は當座に打連申候由、登之助十三日、大阪を出罷歸樣子申上候。後の御陣には貝福右衞門・大島六大夫、別の御川被仰付、武田庄七郎・津村左助・林與右衞門・小川關大夫・齋木權十郎、以上六人、登之助自分に馬に乘せ、召連候て參申候　御陣濟候て、於姫路米大豆四十俵(酒)拜仕候。新家表にて、野田の家、三百目玉にて、五町餘にて搏申り申候。是は島彌左衞門殿・服部權大夫殿御指圖にて搏申候。新家にて、大阪より出申敵を打拂申候。其後大阪より番船出申、九鬼長門殿とせり合申候時、橫矢搏申せと、島彌左衞門殿・服部權大夫殿御指圖にて、七町餘にて番船へ三はなし搏申候へば、一つ中り申候。其刻御覽に成候衆、戸川肥後守殿・向井將監殿にて御座候。大阪今橋の角兵濊・池田攝津守搏候へと申に付、天滿の川中より搏、中り

申候。後藤又兵衛持口の矢倉搏候へば、中り申候。又天滿の橋を敵かこひ出申候を搏候へと御意にて、搏候へば、かこひに中り申候。新家にての儀、烏彌左衛門殿・服部權大夫殿・公方樣へ御書上被成候由。其通宮野總之助能存候。大阪御陣の砌、大筒成程大に仕候へと御意被成、播州國中の寺社の鐘を大阪に被召寄候。登之助申上候は、鐘は當座御借り被成候や、以後迄の儀に御座候や、と申上候へば、御歸陣被成、それ〴〵に御禱させ、寺社へ可被遣候由、御意に御座候。左樣に候へば、事の外御造作に御座候間、町人共に右かねを被仰付候樣にと申上候へば、天野屋甚太郎仰付、相調上げ申候。播州より鑄物師共不殘、大阪へ御呼被成、大筒鑄立申用意仕、其道具、播州姫路へ持參。四月十八日に大筒鑄立上げ申候。

慶長十八年十月七日、百五十石御加增被下。寛永六年御米百五十俵兩年に拜領。同十八年十二月二十三日、二百石御加增被下、都合五百石、足輕二十人被仰付、御預け被成候。御鐵砲手傳の者、山中勘兵衛・內藤數右衛門にて御座候。正保元年九月十五日、病死。

登之助男子無御座、娘一人御座候に付、松原助左衛門養子聟に願上候處、願の通被仰付、助左衛門右の娘と一所に仕置候。助左衛門儀、御知行百六十石、右より被下、御馬廻りにて罷有候。登之助養子に成候ても、右の通知行被下候。助左衛門子二人出生仕、其後女病死。助左衛門登之助と趣意御座候て、義絕仕候て別家に成、御奉公仕候。二人の子の內、惣領加左衛門は、登之助方に殘し置、二男助六は、助左衛門方へ召連申候。助右衛門儀、登之助孫故奉願候。願の通被仰付候。

一九六、鈴木加左衛門。

正保元年十月十一日、登之助跡知の內、三百石被下候。承應二年六月十七日、大筒御役儀被仰付、御筒御願被成候。

貞享元年三月八日、五十一歲病死仕候。

一九七、鈴木加左衛門。　山脇傳內組、三百石　三十三歲。

一九八、鈴木雅樂之助吉晴。　上杉景勝にて五百石足輕三十人預申候。不足を申浪人仕、紀州へ引込、病死仕候。

寛文三年正月十五日、十一歲にて御目見仕候。貞享元年六月十一日、跡目無相違三百石、大筒役儀共に被仰付。

一九九、鈴木九郎右衛門吉直。

丹羽五郎左衛門長重様にて三百石被下、町奉行相勤、同心の者二十人預り申候。左京大夫様御代隠居被仰付、跡相無相違、子安兵衛に被下、役儀同の者迄、父同前に被仰付、左京大夫様御意にて江口三郎左衛門聟に成申候。男子無御座、娘三人御座候内、二人、三郎右衛門方へ引取、一人は庄左衛門養候て大御番衆福島七兵衛方へ遣候。

二〇〇、鈴木庄左衛門。

安兵衛弟にて御座候。丹羽五郎左衛門長重様へ被召出、其後新知百五十石被下、御上洛御供の時、遠州懸川にて、召仕候馬取亂氣仕馬を切、其膽指を振廻り申候を打捨申候。首尾能候て御意被成、御馬鞍鐙共拜領仕候。五郎左衛門様御遠行以後、左京大夫光重様御右筆頭被仰付候。後に目を痛御斷申上候。二本松へ行込罷有候内、御銀奉行被付候。寛文四年九月十五日、百五十石御加増被仰付、御前様へ御附被成、同年霜月御家へ罷越、同六年極月足輕十人被仰付、同年極月十八日、從左京様三百石被下候、御兩所様より都合六百石拜領仕候。同九年十月二十四日、五十六歳病死。

二〇一、鈴木新兵衛。二百石、三十六歳。

寛文五年正月十九日、侍從様へ御兒小生に被召出、六十二俵四人扶持被下候。同年九月十八日より御櫛上げ申候。私紋輪違にて御座候處、類多軍道具に付候て紛敷可有之候間、八重輪違に仕、可然と御意被成、御自筆にて被遊拜領仕、難有奉存、只今以定紋に仕候。寛文九年極月十四日、爲跡式二百石被仰付候。

私弟九郎右衛門、左京様へ被召出、百五十石被下候。同十年四月二十七日、私弟三十郎御兒小生に被召出、六十俵四人扶持被下候。延寶元年十月、兒小生御免中村主馬組に被仰付、天和三年十月十八日、御弓組に被仰付。

二〇二、鈴木三十郎。山脇傳内組、六十俵四人扶持、三十歳。鈴木新兵衛弟にて御座候。

寛文十年四月二十七日、侍從様へ十四歳の時、御兒小生に被召出、六十俵四人扶持被下候。延寶三年霜月十九日、御中小生岸藤右衛門組に被仰付。同五年八月九日、御中小生御免被成、山脇傳内組に被仰付候。

二〇三、菅沼八郎左衛門。

駿河大納言様、四百石被下候。御身上果候後、浪人仕候處、荒尾平八殿被仰上、少將様へ被召出、百俵十五人扶持被下候。慶安

五年十一月十一日、病死。

二〇四、菅沼源兵衛。

慶安五年跡目五十俵五人扶持被下候。萬治三年新知百五十石被下候。寛文三年正月十八日、病死。

二〇五、菅沼小源太。 中村主馬組、六十二俵五人扶持、三十歳。

寛文三年正月十五日、御目見仕、同年跡目本俵四十俵五人扶持被下候。同年信濃守様御組に被仰付、同十年八月二十一日、中村主馬組に被仰付候。

二〇六、賴尾想右衛門。 備中瀬尾村に罷有御當地へ越居申候。明暦三年九月十一日、病死。

二〇七、周藤清助。 稲葉四郎右衛門組。六十二俵四人扶持、三十歳。

母河野と申、御内證に被召出、御奉公仕居申候に付、十一歳寛文六年正月十一日、御兒小生に被召出、同月十五日、侍従様へ御目見仕候。六十二俵四人扶持被下候。少將様へ始て御目見、月日失念仕候。延寳五年元服被仰付、八月九日稲葉四郎右衛門組に被仰付。

二〇八、須賀平四郎。

方々武者修行仕、其後勝入様へ浪人分にて於岐阜被召出、尾州犬山へ勝入様御働の時、城へ一番乘仕候由。羽黒合戦の節、舟戸帶刀・平四郎兩人、物見被仰付、敵陣見及引取申節、羽黒町中にて敵出合鑓を合、敵一人打取、首持參仕候由。其後御知行千五百石、御鐵炮三十人、御預け被成、須賀左京と申候。其後所々にて、働は分明に不存候。慶長十九年從播州大阪へ御出陣の前、武者奉行被仰付、元和七年三月二十五日病死。

二〇九、岩田右馬助。

須賀左京養子聟にて御座候。右馬助儀浪人の内、方々にて場數も御座候由。左京武者奉行仕候節出合、互に父子の契約仕、其後左京聟に成申候由。右馬助岩田新平と申候時、福島左衛門大輔殿、七百石、鐵炮二十預り申候。其後慶長九年正月、藝州立退、御家須賀左京方へ參、御家を望申内、同年九月九日、左京手前にて病死仕候。

子二人御座候。兄須賀長兵衛、弟同與八郎、左京孫にて御座候故、兄弟ともに左京手前にて養育仕候。慶長十七正月、兄弟ともに御小生に被召出、御扶持被下候由。左京隱居の願申上、千五百石の內、世忰伊豆に千石、御鐵炮三十被仰付、隱居料に四百五十石被下候。元和七年三月二十五日、左京病死仕候、兼て願置申候通、隱居料跡目孫二人に被下旨にて、四百五十石の內、二百五十石須賀長兵衛に、二百石同與八郎に分知被仰付候。

二一〇、須賀與八郎。

慶長十七年正月、御小生に被召出、御扶持被下、大阪兩陣御供仕候。五月七日首一つ打取、池田出羽先手に居申候に付、早々出羽に見せ首帳に付申候。元和七年、左京跡知の內、二百石被仰付候。明暦三年四月二日、池田美作預り足輕二十人の內、十人引廻被仰付、毎度御毛見に出申候。大阪へ御米拂にも參候。寛文十年隱居被仰付。同十三年七月十九日、病死。

二一一、須賀小八郎。　上坂外記組、二百石　三十九歲。

二十歲の時、寛文六年十二月十五日、少將樣へ御目見仕、同七年、侍從樣へ御目見仕、同十年冬、與八郎隱居被仰付、無相違二百石被仰付候。

二一二、矢部助左衛門。　浮田左京殿にて二百石被下候。大阪一亂以後浪人仕、備前八幡村へ引込、病死仕候。

二一三、杉山久大夫。　母方の氏、杉山に成申候。福島左衛門大夫殿に、二十人扶持被下、小生相勤罷有、其後浪人病死。

二一四、杉山治右衛門。

武宮久兵衛に鐵炮の合藥、同加兵衛に鐵炮一流稽古仕、備前へ參候處、右合藥仕候儀達御聞、正保二年被召出、正月二十八日御目見仕、延寶五年御馬廻組に被仰付、芳賀內藏允組へ入申候。天和二年九月二十三日病死。

二一五、杉山文大夫。　水野三郎兵衛組、五十俵　五人扶持、三十三歲。

天和二年十二月六日、跡目五十俵五人扶持被下候。貞享元年二月四日、水野三郎兵衛組へ當分被仰付。

二一六、杉山忠右衛門。

少將様御三歳の時、御懐守被仰付、六十俵七人扶持被下。元和五年、新知百五十石被下、元和五年、病死。

二一七、養子杉山五左衛門。忠右衛門實子無御座候に付、五左衛門幼少の時より、養子に仕置候。

五左衛門儀十歳の時被召出、元和元年四十俵御扶持被下、元和五年忠右衛門、跡目無相違、百五十石被仰付、寛永十一年暮、江戸御供被仰付候。五左衛門勝手成不申に付、五十俵被下、江戸相勤申候。同十二年江戸御供、於江戸も五十俵被下、同十三年も五十俵被下、江戸相勤候。同十四年三月五日、百石御加増被下候。正保二年二月三日、五十石御加増被下候。萬治三年十月十九日、百石御加増、都合四百石に被仰付、御弓組十人被仰付。寛文十一年御旗奉行被仰付。延寶二年六月八日、七十歳病死。

實父を加賀崎越後といふ。成田下總守殿武州忍城に在城の時、百貫被下居申候て病死仕候。越後子加賀崎加左衛門、忍落城の後、權現様へ被召出、御奉行仕候内に口論仕候て立退、浪人仕後五左衛門處にて病死。

二一八、杉山權兵衛。山崎大膳組、四百石二十二歳。

寛文十一年三月朔日、御目見仕、延寶二年八月十九日、跡目無相違被仰付。同七年六月三日、山崎大膳組に被仰付。

二一九、杉山甚平。杉山忠右衛門弟にて御座候。

御手廻歩行に於因州被召出候。當御地へ御國替の時分は御目付役被仰付候由、其年八月六日、於因州病死仕、御國替の砌、御事多、跡目の被仰出無御座候。

二二〇、杉山武大夫。湯淺半右衛門組、五十俵四人扶持、六十歳。

水野日向守殿へ、正保四年二月、二十二歳にて御祐筆被召出、二十石四人扶持被下候。御息美作守殿、其御息日向守殿へ、右の役に奉公仕候。其御息民部殿迄相勤候。寛文六年暇申立退申候。

寛文八年十月三日、被召出、五十俵四人扶持被下候。延寶六年十一月、草賀宇右衛門組へ被仰付。天和三年六月、湯淺半右衛門組へ被仰付。

二二一、子彌兵衛。

延寳六年十月朔日、十七歳、少將樣へ御目見、同七年七月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

二二二、福尾九左衛門。

於參州無足に被召出、其後石見守樣へ御附被成、御奉公申上候。於播州姫路、六十九歳病死。

二二三、福尾才兵衛。

（幼）少の內、輝政樣へ御奉公、武藏守樣・少將樣迄、御奉公申上候。大阪兩陣御供仕候。江戸御供御使度々罷越、其外方、大阪の御普請、大津若狹の小濱、越前の鶴賀へ御米拂にも參候由。因幡・備前にて御代官、又は少宛の御作事、在鄉普請・御毛見にも出申候。口上道・奧上道・邑久郡、以上三郡の御郡奉行、四五年被仰付候。先々牛窓へ在宅被仰付候。

二二四、鈴木所左衛門。　若原監物組、四十七俵六人扶持、六十九歳。

右近樣へ御奉公仕候處、不慮の御仕合に付、浪人仕、其後少將樣へ求馬樣被仰上、明曆三年九月三日、被召出、三十俵四人扶持被下候。方々在方普請其外學校作事、八木山村御宮作事、村々池繕等相勤申候。天和元年十月より片上の役儀被仰付、二人扶持御加增被下。

二二五、予吉十郎。　天和元年霜月十五日、九歳御目見仕。

二二六、鈴木彌右衛門。　那須衆蘆野彌左衛門殿へ奉公仕永樂十貫文、又地方にて給候。

二二七、鈴木理右衛門。　丹羽五郎左衛門樣へ、元和元年、御步行に被召出、左京樣へ御奉公仕候。以後病死。

二二八、鈴木甚兵衛。　五十俵七人扶持五十四歳。

明曆元年御步行に被召出、十石三人扶持被下。寬文元年十一月十二日、二十石に五人扶持被成、御前樣へ御附被成候。其幕より二十石を金十兩にて被下候。寬文十二年四月二十四日、中小生に被成、五十俵七人扶持被下候。

二二九、鈴木□□□。

備前國天神山城主浦上宗景の、代々家人にて御座候。本氏山本にて御座候。通生氏とも同姓にて御座候。山本左衛門・通生與十郎・山本修理亮・同孫太郎・同孫次郎、此者共、先祖親類にて御座候。天文の比、右の者宗景へ忠戰の功依有之、通生與十郎儀宗景の感狀二所持仕候。雲州衆へ政宗相談、至當城押寄難儀の節、晝夜に盡粉骨の條、忽敵退散令祝着候。如此の者共に、直判御座候。并宗景同家の衆中より、先祖の者共へ、感狀・褒美狀數通給り、唯今私迄相傳所持仕候。右の外感狀數多御座候を、本多下野守様に罷有山本關左衛門手前へ先年遺置候。

二三〇、山本與一左衛門。

宗景落去の後、宇喜多中納言殿へ出、其後筑前中納言殿に出申候。死去の後浪人にて罷在候處、武藏守様へ被召出候。

二三一、鈴木九郎次郎。　山本與一左衛門子にて御座候。於播州輝政様へ被召出候節、鈴木氏に成申候。

其後宰相様へ御奉公仕候。九郎次郎子彦大夫も同事に被召仕候。御卒去以後少將様備前へ御入國の年、寛永九年、九郎次郎被召出、本俵五十俵四人扶持被下、同十一年十俵御加增被下候。

二三二、鈴木彦大夫。

寛永十六年、少將様へ被召出、二十俵三人扶持被下候。萬治三年十一月、九郎次郎隱居被仰付、彦大夫に被下候。御扶持切米九郎次郎に被下候。御扶持切米鷹匠頭役共に、無相違、彦大夫に被仰付候。延寳五年正月十三日、六十三歲病死。

二三三、鈴木左七郎。　鷹匠津田重次郎・服部與三右衛門引廻九十四俵四人扶持、二十八歲。

少將様・侍從様へ寛文十一年御目見仕、同年三月八日、跡式無相違被仰付候旨、從江戶被仰付候。同年九月御鷹匠頭役儀も彦大夫通に被仰付、于今相勤申候。

二三四、仙石忠左衛門。

氏家常陸入道卜全に久敷罷有候。江州姉川合戰に高名仕候由、其後秀次公に罷有、知行千石、組も被仰付候由。其後秀吉公へ被召出、病死。

一二三五、仙石清左衞門。

三百五十石被下候。其後秀吉公に被召出、右の知行被下候。秀頼公御代、金の旗奉行被仰付候。大阪落城の砌、板倉豊後殿に參合、心馳仕候由。其後淺野但馬守殿へ千石にて罷出。元和四年十一月十四日病死仕候。嫡男半兵衛、松平安藝守殿に罷有候。明暦三年八月二十一日、病死。跡絶申候。

一二三六、須賀忠左衞門。

世倅の時、秀頼公に罷有、大阪落城以後、伊藤修理殿・新清左衞門被懸御目候に付、忠左衞門參候へと被仰候故參、浪人分にて罷有候。其後母方の須賀伊豆、播磨へ參候へと申に付、罷越氏を須賀に改申候。

於因州少將樣へ被召出の旨被仰出、備前へ御國替以後、寛永九年十二月二十五日被召出、御目見仕、同十四年閏三月五日、二百五十石被下候。明暦元年赤坂郡の内御代官被仰付、萬治元年迄相勤候へ共、病氣故御斷申上候へば、御赦免被成、草賀宇右衞門組、御鐵砲引廻被仰付、寛文十一年九月二十九日、病死。

一二三七、仙石久右衞門。　上坂外記組鐵炮引廻 二百石、五十三歲。

寛永二十年正月、少將樣へ十一歲にて御目見仕候。萬治三年九月、權現樣御祭禮流鏑馬被仰付相勤候。寛文九年、忠左衞門江戸へ御供被仰付候へ共、老人故名代に參候。延寶六年十一月二十七日、上坂外記組、鐵炮引廻被仰付。

母方の祖父、須賀左京の須賀を、忠左衞門名乘候へ共、他所に罷有候。仙石を名乘申候者絶申候に付、御斷申上、本氏仙石を名乘申候。

一二三八、子文右衞門。　十一歲にて、延寶四年正月十五日、侍從樣へ御目見仕。

一二三九、高橋九郎左衞門。

江州志賀郡の内、名田二三箇村知行仕候。膳所ケ崎、山岡對馬守殿、右名田知行共儘給り奉公仕候。對馬守殿家來齋藤と申者成敗被致候時、仕手を被申付候へ共、仕損申に付、九郎左衞門取合仕留申候。此時刀きれ過候て膝に當り、ちんばに成候故、隱居分に二百石給り、法體仕淨通と申候。次男飯田加兵衞と申候に千二百石給候。對馬守殿身上滅亡故浪人仕、先日根野織部正殿へ九郎左衞門呼出被申、惣領は中村式部少殿に奉公仕候。

二四〇、高橋新右衛門。日根野織部に少の間浪人分て罷有候。

慶長十一年、鵜殿・兵庫殿・同善六殿取次にて、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。正保元年七月隱居被仰付、法名快叟と申候。同三年十一月十四日、八十二歲病死。嫡子高橋新右衛門、次男高橋又右衛門と申候。

二四一、關屋又右衛門。

松平右近樣に、關屋六兵衛と申者不遁故、子分に仕、關屋に成申候。寛永十年、日根野織部正殿、百石被下奉行仕候。織部正殿御病死、跡目無御座に付、浪人仕、明曆二年六月十一日、御國へ參候。

關屋與一兵衛 又右衛門嫡子なり 寛文二年、少將樣へ御右筆に被召出、六十二俵四人扶持、被下候。延寶三年、十八俵御加增被下候。同四年九月十六日、四十歲頓死。

二四二、關屋左助。池田七郎兵衛組、四十五俵四人扶持、三十九歲。

與一兵衛頓死以後、老親御座候段、御聞に入、不便に被思召候間、與一兵衛跡目にては無之、別に被召出旨、四十俵四人扶持被下候。天和三年閏五月十四日、池田七郎兵衛組に被仰付。

二四三、佐藤佐渡。信虎殿に三百貫被下居申候由。

二四四、今村市左衛門。尾張御本城に奉公仕、伊賀陣に心馳仕候由。其後木村常陸所に少の間奉公仕候由。

其後勝入樣へ被召出、輝政樣御代、關ケ原陣に繪馬堂表荒由橋にて心馳仕由。其後大垣表にて心馳仕候。播州へ御入國の砌、新知百五十石被下候。

二四五、今村仁右衛門。後芹川與右衛門と改。

市左衛門名代に罷出、御奉公仕候由。其後芹川與右衛門と名も氏も替申候、樣子不存候。

御郡奉行數年勤申候。明曆三年正月十五日、宮城大藏預り御鐵砲引廻被仰付。寛文元年八月四日、病死。

二四六、養子芹川與右衛門。宮城大藏組、百五十石四十七歲。

寛文元年閏八月八日、養父與右衛門、跡目無相違被仰付。延寶五年十二月十七日、奥津高郡御郡奉行被仰付。天和

二年正月十三日、御郡奉行役御免被成、銀五枚被下候。貞享二年十月朔日、御勘定上間被仰付。實父大野四郎右衛門、池田攝津守殿にて百五十石申請居申、浪人病死。幼少の時、四郎右衛門病死仕、實先祖承傳不申候。養父芹川與右衛門、兄弟にて御座候。

二四七、西村備後。

三好筑前守殿にて、三千石給候由。三好滅亡の後、荒木攝津守與力に罷有、本知三千石にて阿州森口の城預り居申候。播州神吉城攻の刻、三十一歲にて打死仕候由、一代所々にて働御座候様に承候へ共、不存候。

二四八、西村新七郎。

備後跡知無相違被申付、森口城に居申候。攝津守身上沒落の後、中川瀨兵衛樣へ罷出候。瀨兵衛様於しづが嶽、御打死の後、中川右衛門大夫樣へ御奉公仕、鐵奉行被仰付、其時は西村彡兵衛と申候。右衛門大夫様高麗陣の御供仕、心馳も御座候由、右衛門大夫樣、高麗にて御打死の後、少の內、中川修理大夫樣に罷有、立退、秀次公へ被召出、二十五六歲の比、母衣被仰付、山城・尾張の內にて知行被下候由。其後福原右馬之介殿にて七百石被下、足輕二十人御預け被成候。右馬之助身上果候後、加藤肥後殿家臣庄林隼人と申者不通に付、隼人手前へ參候へば、肥後守殿浪人分にて被召出、知行五百三十石、內三百石無役被仰付候。其時は瀨崎猪右衛門と申候。後成田六兵衛に成申候、肥後國宇土、小西攝津守居城一戰の砌、比々野兵庫・薦野九大夫・問內匠・岡田九兵衛・伊丹半右衛門・成田六兵衛、六人押寄、心馳の働仕候に付、肥後守殿前へ被召出、御念比の言葉に預り申候由。其後肥後立退申候。

慶長八年、於備前武藏守樣へ被召出、四百石被下候。同十九年五十歲、於播州病死。

二四九、成田七郎兵衛。御斷申上、後に瀨崎七郎兵衛に成申候。

慶長十五年、淡路由良の御普請の刻、芳賀內藏允召連罷越、由良にて武藏(守)様へ被召出、五十俵六人扶持被下候。慶長十九年、六兵衛跡目無相違、四百石被仰付、慶安三年正月十六日、六十二歲病死。

二五〇、瀨崎六兵衛。浮組、四百石六十歲。

寛永九年少將様へ御目見仕候。慶安三年三月、跡目無相違、四百石被仰付候。延寶七年、簡略奉願在宅仕候。

二五一、子牛右衛門。　延寶七年十二月朔日、御目見申上候。

二五二、十河六之丞。　熊千代様附。銀十枚小人一人。十四歳。鈴木甚兵衛三男にて御座候。

貞享二年二月朔日、熊千代様へ、御雁兒小生に被召出、御奉公仕候。銀十枚御小袖一、御帷子一、御上下二具宛、毎年被下、幷御小人一人被下候。御目見仕候節、近藤覺兵衛に相斷、母方の氏、十河と改御禮申上候。

吉備溫故秘錄卷之七十五（干城四）終

吉備溫故秘錄卷之七十六（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城五（原本干城一〇）目錄

吉備溫故秘錄卷之七十六（干城五）目錄終

吉備温故秘録　卷之七十六（原本無卷數）

大澤惟貞輯録

干城　五（原本干城一〇）

一、津田左京。本國尾張。信長公に御奉公仕、其後勝入様へ被召出候由。

相續で播磨宰相様へ御奉公申上候由。參州吉田にて從播磨宰相様御知行五百石被下候由。少宛の心馳御座候由。具儀は不承傳候。

慶長五年奥州上杉景(勝)御退治、權現様御發向被遊候に付、播磨宰相様も奥州へ御出陣被遊候由。此時諸大名衆の御妻子方、大阪の御屋敷〳〵に御住宅の由、依之左京儀、當時御留守居に御差加へ被成。播磨宰相様へ御前様、幷御幼少の御子様方へ御附置被成候由。然所に石田治部少輔依逆謀、諸大名衆の御妻子方、大阪城中へ人質に取入可申趣の由、就夫、播磨宰相様の御前様をば、別て城中へ可奉入との趣故、從權現様御附被成候、石原市右衛門と申談、伏見の御城御留守居鳥井彦右衛門殿へ大阪の趣を申遣し、何とぞ仕、御前様幷御子様方を伏見の御城へ奉入度由、相達候處、彦右衛門殿より被仰越候は、被申越候趣得貴意候、然共伏見の御城、堅固持こたへ候事、難計候間、如何と申來由。依之、其時分の大阪の模様を考、無是非相談を決し、御屋敷・御屋形、所々焼草を込、急押込候はゞ、相待居申處に、其節細川越中守殿御奥方を急に城中へ可取入と仕候に付、御奥方自害有之由。然る處、播磨宰相様御屋敷へ押込候儀無之由、治部少輔逆謀の樣子、關東へ相聞、播磨宰相様、若原勘解由を被仰付同與力共に大阪へ御差登被遊候由、無程關ケ原御合戰、權現様御勝利に罷成候に付、於大阪播磨宰相御屋敷別儀無之由、關原御歸陣の刻、此度の御留守首尾能相勤候旨、忝御意にて、從播磨宰相様、志津の御(物)腰物、左京拜領仕候由、承傳候。此御陣の御留守は、彼是事變難相計儀共御座候由、傳承申候。然る處、左京相計候首尾、播磨宰相様御意に應じ、別て御機嫌にて、右の通の由、傳承候。播磨へ御入國の節、播磨宰相様御内に御知行千石可被下候間、其儀御奉公可相勤候や。但無役五百石にて隱居休足可仕やとの仰の由、左京申上候。年罷寄候間、無役五百石にて隱居休足仕度旨奉願、則願の通被仰付、剃髪仕名を友心と改候由、登城御咄等申上候様にと種々忝御意共御座候由。或時御咄の節、播磨宰相様御威光を申上候て、其時分世上のとなへ

の儀を申上候へば、以の外御機嫌損じ、外の者に候はゞ、被仰付様も有之候へ共、友心儀は大阪にて御留守居被仰付候時の首尾有之候へば、か様成通り三度迄は、御免被成候はではならぬと御意被成、却て前の儀被仰出、悪命を蒙候由傳承候。又日切の節は、播磨宰相様友心宅へ度々被爲成候由に御座候。

播磨宰相様御卒去の後に左衛門督様備前へ被召連、相次で從宮内少輔様、其儘御知行被下置候由。元和四年、於備前岡山病死仕候由。友心家督は、友心次男津田久右衛門世忰、津田又左衛門に、無相違五百石、從宮内少輔様被仰付候由。

二、津田彌次右衛門。友心嫡子にて御座候。

播磨宰相様へ御奉公申上、天正十九年、參州吉田にて御知行二百石被下候。御折紙于今八左衛門所持仕候。慶長五年御出陣の御供仕候や。其節吉田の御留守居の内に指加置候や。父左京と一所に大阪御屋敷へ被差置候や。此段不承傳候。同六年、播磨へ御入國の節、如何様の首尾にて御座候や、御加増四百石拜領仕、都合御知行六百石被下候、御折紙于今所持仕候。同十二年、於播磨姫路、病死仕候由に御座候。

三、津田左源太。生國參河吉田。

慶長十二年十二歳の時、從播磨宰相様、彌次右衛門跡知無相違、六百石被仰付候、跡目の御禮申上候刻、御懇の御言葉を蒙り候由。播磨宰相様友心宅へ御成の刻、度々御給仕等仕候由に御座候。相繼で武藏守様・少將様・侍從様へ御奉公申上候。慶長十九年・元和元年、大阪兩度の御陣、武藏守様御供仕、相勤申候由。元和三年、播磨より因幡へ御國替に付、因幡へ罷越候由。寛永元年、大阪御普請に正月十一日因州罷立相勤、八月中旬、因幡へ罷歸候。同九年、御留守御番に二月十二日因州罷立江戸相勤。同年因州より備前に御國替に付、同十年二月十三日、備前へ罷歸候。同十九年、江戸御供、十二月九日、岡山罷立、同二十年正月七日より平川口御普請所へ相詰、御普請相濟候。以後御取次役被仰付相勤。同年十一月十一日、江戸より日光へ御使に參、同十六日、江戸へ罷歸候。正保元年六月二十日、御供仕備前へ罷歸候。同三年十月八日、他國より御使者御馳走の役被仰付候。同四年正月二十日、御見立の御母衣被仰付旨、伊木長門於御城申渡、即刻於御前、御母衣絹頂戴仕候。承應二年、江戸御供被仰付、御先立の士中同道仕、二月二十七日、岡山罷立候。

於江戸御取次被仰付候。同年四月二十四日、從江戸姫路へ御使に參、五月十六日、罷歸候。同三年御先立の士中同道仕、五月十一日、備前へ罷歸候。承應三年十月六日、池田美作組頭に被仰付候。明暦元年、朝鮮人御馳走の御役人の內に被仰付、七月四日、牛窓へ參、八月二十五日、朝鮮人着岸、御馳走相勤。同二十七日、岡山へ罷歸候。同三年正月二十五日、播磨宰相様御忌日の御祭、初て御執行の刻、御役人の內に被仰付相勤候。萬治二年二月朔日、御祖考様御神主御遷廟の節、行列の御供被仰付相勤候。同三年十月二十六日、信濃守様御組の組頭に被仰付候。其刻、御前へ被召出、御意被成候は、此度池田藤右衛門を番頭に被仰付候 信濃守様御年若に候故、年比なる者を組頭にと被思召候に付、藤右衛門跡役、信濃守様御組の組頭に左源太を被仰付候間、御組中の儀は不及申、信濃守様御家來中の作法迄無遠慮、可相計旨被仰付候。寛文二年正月二十五日、播磨宰相様五十年忌の御法事、於國淸寺被仰付候に付、此御法事の肝煎被仰付候。同六年年罷老候に付、他國よりの御使者御馳走の御役御斷申上候處、同年九月二十日、御赦免被成候。同年十二月十二日年罷老候とて乘物御赦免被成候。同十年八月二十七日、御前へ被召出、御意被成候は、左源太儀、年久敷御奉公無恙相勤候、此度足輕二十人被仰付候。頓てにも可被仰付と被思召候へ共、信濃守様年若候に付、組頭御指替被成候儀、如何と被思召、御延引被遊候。いまだ達者にも候間、今度御足輕被仰付候旨、御直に御意候由。九月十七日、權現様御祭禮の供奉被仰付、御足輕召連相勤申候。同十一年、江戸御供奉願、三月十日、御先立の士中同道仕罷立候。於江戸、御客あしらいの御役被仰付候。同年十一月二十六日、信濃守様江戸御立被遊候に付、道中御供仕、十二月十二日、岡山へ罷歸候。於江戸少々相煩候、老人故御用捨にて御登せ被遊候由。延寶二年四月朔日、於御城池田大學・日置猪右衛門、被申聞候は、今朝侍從様御意被遊候は、左源太儀老年に候、然共、侍從様御年若に付、年寄候者御物頭の內に有之段宜被思召候間、隨分養生仕、長命に候様にと被思召候。右の旨兩人として左源太に、具に申聞候へと、御意の由被仰渡候。是は、內々隱居の儀御年寄中迄奉願置候に付、如是御內意の由。同四年二月二十四日、侍從様御前へ被召出御意被成候は、左源太儀若き時分より、久々御奉公仕、于今堅固に有之段、一段の事に候。今度隱居被仰付候間、樂を仕、隨分長命にて可罷有候。世悴八左衛門に、家督無相違被仰付候。池田左兵衛組頭に、被仰付候旨、御直の御意の由。同月二十七日、隱居の御禮申上候。同九年十月十六日、信濃守様より左源太に被仰聞候は、今日瓶井山邊狐狩被仰付候。少將様・侍從様御出

被遊候。老人見物仕度存候はゞ罷出候様にと、少將様•侍從様御內意候由。就夫、岡山東へ罷出、御目見仕候處、備殿様御懇意の御意共蒙り候。中川村御辨當所於御勝手御料理被下候。翌十七日の朝、西の御丸へ左源太御禮に罷上り候へば、少將様御前へ被召出、御意被成候は、御鷹野に御出被爲成候節は、折々御供に罷出見物可仕候、乍去、勤ては無用に候。心次第に罷出候様にと、御直の御意の由。天和三年正月二十五日、播磨宰相様御忌日御祭の御役被仰付、御廟へ長上下にて罷出相勤申候。（明暦三年より天和三年迄二十七年の間、正月二十五日御忌祭の砌、御役人に被仰付相勤候 右の內寛文二年正月二十五日は、於國淸寺、播磨宰相様五十年忌の御法事の肝煎被仰候に付、御廟へは不參候。）同年七月朔日、於御城日置左門私に被申渡候は、左源太儀此間も御目見に罷出、御直被遊候。達者に有之、一段の事に候。播磨宰相様より御奉公申上、左源太ごとく今に達者成者外に無之候。補養生仕、長命に可罷有候。隣の明屋敷、左源太に被下候間、菜園など申付、歩行仕養生可致旨、御內意の由被申渡候。翌二日、左源太登城、右の御禮申上候。同年十一月十七日、行年八十八歳にて病死仕候。

病中度々御懇意の御意を蒙り、度々御藥拜領仕候。左源太存生の內、御殺生の雁、御狩の鳥、度々拜領仕候。同四年二月十二日、御前へ池田大學に申上候由に候ば、津田左源太病中御懇意儀共、重々難有がり申候。左源太病中に世忰共に申候は、左源太儀御主様御四代に御奉公申上、終に御機嫌惡敷事も無之、閉門は不及申、御しかり被成候事も無之候。勝入様の御代様、若千代様へも御目見申上候所、御目見は御主様御六代へ申上、八十八歳にて終り申候。遺物と申事は恐多儀に候 若き時分より所持仕候、古き樂笛有之候、是も乍恐掛御目申度念願の由、申たる由承候と被申上候處、御意被成候は、あのやう成者は、類も無之事に候。早々指上させ可申候。左源太ごとく代々奉公仕、老年に及迄達者にて、相果候迄も體成者は有間敷と、御懇意の御意の由、大學內にて被申聞、翌十三日、右の樂笛、澤權大夫を以指上候。

四、津田八左衛門。（山崎大膳組頭、六百石、五十六歳。）

寛永十四年、十八歳の時、少將様へ初て御目見申上候。承應三年七月、洪水以後、御國中飢人の儀、無御心元被思召候旨にて、民家へ踏込見及救候様にと、熊澤次郎八奉（逹カ）にて口津高へ罷出候。明暦三年四月十七日、權現様御祭禮の刻、流鏑馬被仰付相勤候。十一月朔日、侍從様へ初て御目見申上候。寛文四年九月十七日、權現様御祭禮の刻、流鏑

馬被仰付相勤候。延寶元年十一月二十六日、學校御用被仰付候。同四年正月十三日、御免被成候。同年二月二十四日、父左源太に被仰付候家督無相違六百石、私に被仰付、御前へ被召出、御直に忝御意にて、同時に池田左兵衛組頭に被仰付。同二十七日、總日の御禮申上候、四月十七日、權現樣御祭禮の供奉相勤申候。同五年九月朔日、他所よりの御使者御馳走の御役被仰付候。七年六月二十三日、山崎大膳組被仰付候。同年堀田備中守樣・土井能登守殿、御老中被仰付、并松平因幡守殿・石川美作守殿、若年寄被仰付候爲御祝、七月二十一日、江戸へ御使者被仰付、同二十三日罷立、八月二十一日罷歸候。十二月十六日、御殺生の雁拜領仕候。天和四年二月朔日、亡父左源太に被下候隣の屋敷、其儘私に被下旨、山崎大膳申渡、同日御禮申上候。貞享元年、江戸御供被仰付、御兒小生・御中小生同道仕、三月二十三日岡山罷立、江戸へ罷下、在江戸中御取次役被仰付、相勤申候。同二年正月十八日、於江戸岩千代樣へ初て御目見申上候。同年御兒小生、并御料理人通の子同道仕、五月二十二日、岡山へ罷歸候。

五、子左助。

延寶四年五月十五日、二十歲にて侍從樣へ初て御目見仕候。十二月朔日、少將樣へ初て御目見申上候。

六、津田重次郎。（近習足輕頭、國中在方元〆五百石、四十六歲。津田左源太次男にて御座候。生國備前岡山。）

承應二年二月十日、十四歲の時、少將樣へ御兒小生に被召出、同月十五日、御目見仕候。同十八日、御切米本俵三十俵四人扶持、拜領仕候。同年、江戸御供被仰付、同姓左源太一所に御先へ可罷下旨被仰出、二月二十七日、岡山罷立候。三月十七日、於江戸侍從樣へ御目見仕候。八月五日、御側兒小生に被仰付候。同三年、同姓左源太一所に御先へ罷登候樣にと被仰付、五月十五日、岡山へ罷歸候。同四年、江戸御供四月十二日御出船の御供仕、岡山罷立候。明暦二年五月二十五日、御歸城の御供仕、罷歸候。七月朔日、御側不寢の御番被仰付、（辰三年迄九年相勤候。）同三年六月四日、御櫛上げる樣にと御直に御意被成、（辰三年迄八年相勤候。）同年江戸御供、九月八日御出船御供罷立候。同十一月十七日、日景（陰）を以日の長短を計可申旨、御直に被仰付、（萬治三年迄相勤申候。）萬治元年九月十九日、御歸城の御供仕罷歸候。同二年、江戸御供被

仰付、三月十一日、御出船の御供仕、岡山罷出候。同年四月五日、御兒小生中間の橫目被仰付、（寅の年迄四年相勤申候。）同六月二十二日、御書物奉行被仰付、（辰年迄六年相勤候。）同九月四日、御藥煎の儀被仰付、（度々御藥煎じ上申候。）同三年二月朔日、御召の御小袖拜領仕候。六月六日、御歸城の節御供仕罷歸候。同年十月九日、新知百五十石拜領仕、同日於御前、御所付預戴仕候。同月二十五日、前髮取候樣にと被仰付候。寛文元年、江戸御供被仰付、閏八月十日、御出船の御供仕、岡山罷立候。同年十一月三日、日帳可付旨、御直に被仰付、（御在江戸中相勤申候。）同二年七月十八日、御歸城の御供仕候。同年八月二十五日、御步行頭被仰付、御步行十人御預け被成、（但、御鐵炮組。）御加增百石被下、都合二百五十石に被仰付候。同日於內山下家屋敷拜領仕候。此度御步行頭に被仰付候へ共、只今迄の通御側兒小生同前に相詰御奉公可申上旨、被仰付候。同十月十五日、於御前御加增の御所付頂戴仕候。同十一月十四日、自今以後、御宮・御佛殿・御廟へ肩衣着の御供仕候又御鷹野の刻、御腰物持候樣にと被仰付、（寛文四年迄相勤申候。）同三年、江戸御供被仰付、三月十一日、御出船の御供仕候。同月二十八日、御城內幷上野增上寺へ肩衣着の御供可仕候。又常々御他出の刻も、御步行頭兩人の內、一人宛御供に可罷出旨、被仰付候。同年夏日光へ御參詣の御供被仰付、六月八日、江戸御立被遊、同十四日、江戸へ御歸被遊候。（此御往來の內、假の御橫目役被仰付候。）同四年閏五月十日、御歸城の御供仕候。同年九月二十五日、御前へ被召出、御直に大橫目役被仰付、御步行橫目三人、御步行二十人御預け被成、御加增五十石被下、都合三百石被仰付候。同月二十六日於御前、此度御加增の御所付頂戴仕候。同十月二十一日の御評定日より、御評定所へ出座仕候。（同年十一月十四日、御評定所へ池田伊賀・日置猪右衞門、其外、御役人中出座仕、邑久郡朝日寺村より訴狀を差出候。百姓共呼出、口上一通り被聞候。翌十六日、此公事私に可承旨被仰付、承見申候へば、殊の外入交雜難承屆に付、何れぞ御添御聞被下候樣にと、右の公事承候內に、兩度迄御年寄中迄申上候へ共、先其儘私一人承候樣にと被仰出候に付、同十二月十二日迄に承り、翌十三日、御前へ罷出委細申上候。事訖て、伊賀・猪右衞門へ御向被成、御意被成候は、重次郎にか樣成儀、初て被仰付候。大勢の公事人共、品々入交難決儀共有之處、細に決定承り屆候旨、御直に忝御意を蒙り候。）寛文五年二月二十五日、御祖考樣御改葬の地可見立旨御內意にて被仰付、四月二十三日より罷出、御國中山々巡見仕候。同六年十月七日、此度學校被仰付候に付、學校御用御橫目役に兼可相勤旨、御直に被仰付候。同十二月十八日、御前へ被召出、御意被成候は、橫目役は只今迄、赤しないの剌物、被仰付候へ共、向後は、御羽織被仰

付候間、左樣可相心得候。又足輕五人被下候間、可召使旨被仰付候。同十二月二十日、播磨宰相樣・武藏守樣の御遺骸、從京都、和氣郡片上村へ御到着に付、爲御迎、池田主稅助殿片上へ被遣候間、私も片上村へ可罷出旨、御直に被仰付罷出候。同二十七日、御尊骸片上村へ御着岸、同二十八日、八木山村の御宮へ假に御納被遊候故、片上村より八木山へ御供仕候。同年十月二十七日、御祖考樣御改葬の御地、少將樣爲御見立、御出城被成候に付、私御案內可仕旨被仰付、御供仕候。同晩和氣郡片上村に一宿、同二十八日、同郡木谷村の山御見及被遊、同晩同郡吉田村に御一宿、同二十九日、同郡脇谷村の山、御見及被遊、同晩同郡和氣村に御一宿、十一月朔日、御歸城被遊候。同七年正月六日、和氣郡和意谷御山、御改葬の御地形御普請、御壙內の御用、御墓誌銘、御墓表の儀、御墓所御普請の品々、御直に被仰付候。同正月十一日、舊冬被仰付候御羽織、於御前頂戴仕候。同七年二月十五日、御國中の桝御改の儀被仰渡候。此改桝の御用被仰付候。御祖考樣御尊骸和意谷へ御改葬に付、二月二十三日、閏二月十三日、御役人の內に被仰付相勤候。同二十三日、此度依御改葬、於和意谷御普請相勤候に付、於御城御料理被下、御前へ被召出、忝御意候て、御召用の御小袖拜領仕候。三月八日、私相煩候に付、從少將樣爲御使、中江彌三郎を被下、氣色無油斷養生可仕旨、忝御意を蒙り候。同十二日、和意谷御山御預被成旨、御直に被仰付候。同七月六日、侍從樣御前にて御召の御袴拜領仕候。同八年、江戶芝御堀御普請に付、和意谷御墓所御普請、御指延被遊に付、私儀も罷下り御横目役可相勤旨被仰付。正月六日、岡山罷立候。同年、江戶大火事に付、御堀普請御指延被遊旨被仰出候故、御普請に付罷下候者共、御上せ被成候へ共、私儀は江戶高繩大崎御屋敷御求め被成候御用被仰付、御殘し被成候。二月二十日御前へ被召出、去る朔日、芝筋火事、御小屋隣迄、燒失仕候處、能防止、御小屋無恙旨、難有御意を蒙候。四月十七日御召の御袷御手白被下候。備後守樣へ御內意の御使被仰付、同月十八日、江戶罷立宍粟へ參、五月四日、岡山へ罷歸候。四月二十二日、御郡々手習所の儀、御直に被仰付候。同六月二十二日、御前へ被召出、大横目役御赦免被成、御先筒二十挺御預け被成、學校幷御郡の手習所、和意谷御山御留帳の御用專相勤。尤、御評定所へも、只今迄の通出座可仕旨、御直に被ト付候。此時池田伊賀・日置猪右衞門、其儘御前へ被召置、泉八右衞門に私を御前近く召御意被成候は、自今以後兩人を其役人に被仰付候間、御前の御過り有之候はゞ、無憚御諫可申上候。老中諸役ノの過失有之候はゞ、無遠慮可相止旨

委細被仰付候、和意谷御山御墓所の御普請成就に付、同九月十五日、御料理被下、於御前白銀十枚拜領仕候。寛文九年春、學校御新作の御普請御用被仰付候　同年、學校御圍の內にて家屋敷被下候。同年依召、八月四日岡山罷立、江戸へ罷下候。侍從樣御歸國に付、同月二十日、箱根晝御休にて御目見仕候處、於御前御召の御帷子拜領仕候。八月二十八日、當分御兒小生中肝煎被仰付、此御在江戸中相勤候。此年承應三年洪水以來の御記錄、幷御家中諸士家譜編集の御用、御直に被仰付候。同十年四月二十三日、江戸御發駕、道中假の御橫目被仰付。五月八日、御歸城の御供仕候。同年十二月十一日、和氣郡友延村の新田、古の井田の地割に可申付旨、御直に被仰付候。同十一年正月十四日より井田地割仕御普請申付候。。同年十月十六日、於和意谷備後守樣御葬禮に付、彼地へ罷越相勤申候。同年十月十六日、池田大學・日置猪右衞門被申渡候は、本多下野守樣奥樣へ御銀千貫目、米にメ二萬石、古の社倉米に準じ、御郡々へ借し候へと、少將樣御意の旨、江戸より池田主稅殿承候て申來候由被申渡候。同年依召十二月十五日岡山罷立、江戸へ罷下候。此年父左源太御物頭役にて江戸御供被仰付候處、少々相煩候、老人故御用捨に可、御登せ被成候由、御內意の旨、依之□儀父爲替、私に御預けの御□輕召連、罷下候へとの御にて罷下候。同十二年八月八日、此度御隱居被遊候に付、少將樣諸事の御積りの儀、水野三郎兵衞・山內權左衞門・瀧波與兵衞・服部與三右衞門・私に被付、同二十八日に御帳差上申候。同日信濃守樣・主稅之助樣御積り、御直に被仰付、九月二十九日御帳差上申候。同年十月二十六日、福照院樣御卒去被遊候に付、御棺內諸事、禮式の御用被仰付、相勤申候。同年十月二十八日、於江戸御居間、少將樣・侍從樣御一座にて日置猪右衞門被召置、御前へ被召出、少將樣御意被成候は、重次郎役儀只今迄、殊の外繁多事に候間、評定所の出座と學校奉行御赦免被成候。和意谷學問所御祖右樣御改葬の御地見立候樣にと、先年被仰付、和氣郡脇谷の山と、同郡木谷の山奥見立、少將樣へ懸御目申候刻、脇谷の山を、御改葬の御地に可被遊候、木谷の山奥へ、往々學校に可被仰付と、其節御內意にて御座候。其以後御郡々手習所、被仰付候刻、和氣郡の手習所をば、先年御見及被□候。山奥取立置、じねんに、か樣／＼に可申付旨、御內々に一少將樣仰を蒙り候。　井田・在々手習所、同葬祭の儀、在々御借米、是等の儀、只今迄の通りに被仰付候間、可相勤候。右の品々の御主意を重次郎能存候間、御郡奉行共と申談宜可申付候。御主意末々迄行屆、一同仕樣に可相勤候。閑谷學問所の儀は、別て御□（マヽ）被思召候事に候。只今迄の通りにて、其分に成候ては、無益事に被思召候。□初より御主意を、重次郎能存たる事□候間、彌宜役々迄、御主意の通續候樣に仕成し可申候。同山の御用も無之事に候間、在宅仕宜候はゞ、在宅仕候て成共、右の御用共、可相勤旨被仰付候。　同日福照院樣御尊骸、江戸御

發柩被遊、十一月十六日、御柩和意谷へ御斉山被遊候。此道中の間、判形役・御横目役を兼、御供可仕旨被仰付相勤申候。同二十六日、福照院様御葬禮の御役被仰付、相勤申候。同極月朔日、和意谷御葬禮の御跡仕廻罷歸、西の丸へ上り候へば、少將様御前へ被召出、忝御意にて、御羽織拜領仕候。同月福照院様御墓所の御普請可申付候。同十三年七月九日、日置猪右衛門被申渡候は、重次郎儀、内々在宅の儀申上候、此度改り被仰付候御用共、在宅より仕候ては、成間敷候間、在宅可仕候旨、侍従様御意の由、被申渡候。八月七日、私儀此度在宅被仰付、岡山の家屋敷差上候に付、御野郡中村の内、先年求置候菜園地の御年貢、御免被成候旨、日置猪右衛門被申渡候。同年十月九日少將様和意谷へ御參詣、翌十一日御墓參、同日閑谷へ被爲成、聖位拜被成、其より井田御覽被遊、難田村より御船に召、片上村に御一宿、少將様御前へ被爲召、和意谷・閑谷・井田被仰付候以來の儀を、御意被遊、重々難有御意を蒙り候。此節先達て和意谷・閑谷へ罷越相勤、閑谷よりは御供仕、井田懸御目申候。同四年十月八日、侍従様和意谷へ御參詣、翌九日御墓參、此節先達て和意谷へ罷越相勤申候。同五年正月二十九日、於和意谷、豐前守様御葬禮に付、罷越相勤申候。同年三月十一日、少將様江戸へ被成御座がけに和意谷御登山、翌十二日御墓參、同日閑谷へ被爲成、聖堂御拜、先達て右兩所へ罷越相勤申候。同六年三月十日、少將様和意谷へ被爲成、翌十一日御墓參、同日閑谷へ被爲成、聖堂御拜、其より難田村へ御越、御船に召、鹿喰(かくひ)島御ねらい、塞(そっこ)川村に御一宿、翌十一日、鹿喰島御狩被遊候に付、責(せ)子(こ)肝煎被仰付相勤申候。御物數鹿四十三留り申候。此節鹿一疋拜領仕候。同三月二十日、侍従様御前へ服部與右衛門・私被召出、御主意を被仰聞、御領國巡見仕候様にと、兩人に被仰付候。四月十四日より御郡へ罷出候。同年九月十日、今度御簡略の儀、於御評定所、詮議被仰付候間、私儀も御評定所へ出座可仕旨、侍従様御意の旨、江戸より申來由、池田大學被申渡候、御國中半廻相止、評定所へ相詰、翌未の春迄に御領分不殘巡見仕候。九月十一日、於西の御丸、池田大學・日置左門被申渡候は、當春申上候御郡々新田所定る見立可申候、左候はゞ、來春より御郡奉行共申談取立可申候。入用米は御簡略の節の儀に候間、重次郎作廻の御米にて先可申付旨、侍従様御意の旨、江戸より申來由被申渡候。十一月二日、於和意谷、圓盛院様御葬禮に付、和意谷へ罷越相勤申候。十二月二十一日、和意谷圓盛院様御墓所御普請可申付旨被仰付候。同七年正月三日於和意谷、新八様御葬禮に付、罷越相勤申候二月朔日、内々申上候、上道郡湊村・丸山村・海面村の沖新田、幷同郡吉井村井手の内より、右の新田への用水を取申、次でに東川より岡

山川へ高瀬舟通し申候積り。又は同郡寺山村と內ヶ原村の間、がんきよに用水溝付候儀、以繪圖申上候へば、可然儀に候間、追付より取付、彌御普請可申付旨、少將様御意の由、池田大學・日置左門被申渡候。同十日、新田働初仕候。延寶七年二月十日、少將様江戸へ御參勤の刻、鹿喰島へ被爲成、御狩被遊、（鹿四十二留り申候。同夜、寒川村に御一宿被遊、翌十一日、又鹿食島御狩、鹿六十四當り申候。）兩日共に責子肝煎被仰付相勤申候。此節鹿一疋拜領仕候。同日三石村甞御休迄、御供仕候處御前へ被召出、前々より只今迄、私勤の儀品々被仰出、重々忝き御意にて御召用の御羽織・御手自被下候。同年八月二十三日、池田大學被申渡候は、御領分に牧を御取立被成度被思召候。御簡略の節に候へ共、外の義とは違たる儀に候間、可被仰付と被思召候。左候はゞ、重次郎作廻の御米の內を以取立候様に可仕候。少將様へ御相談被遊候由。牧の一式、重次郎へ被仰付候間、如何様共宜様に可申付旨、侍従様御意の由、大學被申渡候。（和氣郡梔島・鴻島・鹿喰島 右三の島、牧に取立申候。）十二月二十七日、於和意谷御六様御葬禮に付、罷越相勤申候。同八年二月二十九日、少將様・侍従様・信濃守様寒川村へ被爲成、鹿喰島御狩被遊に付、責子肝煎被仰付相勤申候。（御物數鹿四十五留り申候。此節鹿一疋拜領仕候。）同晦日閑谷へ被爲成、少將様・侍従様・信濃守様、聖堂御拜被遊、それより和意谷へ被爲成、同夜和意谷御一宿、朔日御墓參被遊、其以後於和意谷、御狩被遊に付、責子肝煎被仰付相勤候。（御物數、猪十五・鹿一留り申候。）延寶八年五月十五日、從江戸、嚴有院様御他界の由申來に付、侍従様江戸御參勤の儀、御差急被成被下様にとの儀、京都御所司代戸田越前守殿へ被仰進候御使者に私を被仰付、差急候様にとの御內意にて同日申の下刻岡山罷立、同十七日午の中刻京都へ參着、八つ前に越前守殿御屋へ伺公（候）仕取次を以御書差上げ、御口上申上候へば、殊の外御取込被成候間、暫相待候様にと被仰出、七つの太鼓を打候以後御返書出申候。（越前守殿、私へ御逢可被成候へ共、江戸への御注進狀、御調懸り被成候に付、御逢不被成候由。）同日申の中刻京都罷出、同十九日午の上刻、岡山へ致歸着、登城仕御返書差上、御返事の御口上申上候處、殊の外早く罷歸候由、忝き御意を蒙り候。六月二十七日、侍従様御前へ被召出、於和意谷圓盛院様御墓前御普請の儀、一々御尋被遊候に付、申上候へば、御意被成候は、先年より、和意谷御普請の申付様、扨は閑谷學問所、當春御覽被遊候て諸事の仕様、尤の事共に被思召候旨、御意被成。次に上道郡の新田・新川水門などの儀も被仰出、忝き御意共にて御召用の御帷子拜領仕候。九月十五日、侍従様御前へ

服部與三右衛門・私を被召出、池田大學・日置左門被召置、御意被成候は、重次郎事、和意谷・閑谷の御用を初、其外御用數多被仰付置候處、數々の御用精を出し能相勤候。新田・新川の普請等も大分の事に候。少將樣御仕置の時分より數年御用被仰付、御用剿の間、只今迄の御用の上に、御評定日には、御評定所へ罷出、僉議の品存寄無遠慮可申候。近年は御普請等の儀に付、大形當地に居申候間、當地にて家屋敷可被下候條、兩谷の儀は爰元より通可申付旨、御意被成候。扨又、重次郎・與惣右衛門に御郡々巡見被仰付候處、御郡方の爲には慥有樣に被思召候間、此以後も御郡方の儀に付、存寄候はゞ、御郡奉行共に可申談候。又在へ罷出可然時分は、不時に何方へも罷出可申旨、御意被成、重々忝き御意を蒙候。延寶八年九月二十五日、日置左門被申渡候は、只今上泉龜太郎居申候家屋敷は物頭屋敷、其上同姓左源太方へ程近く候間被下旨御意の由、被仰渡候。同日私在宅の内、岡山へ罷出候節、住居のために居家敷被下候上は、采園地の御年貢如以前指上申度旨、日置左門迄申上候處、私なみの者には、居屋敷の外には屋敷不被下候へ共、其儘御年貢御赦免被成候間、下屋敷に可仕旨、侍從樣御意被成候由、同十月朔日、日置左門被申渡候。同年十月十四日、少將樣御前へ被召出、重次郎取立候新田にて初て被遊候と御意被成、御鐵炮の雁拜領仕候。新田・新川、大なる事を存立候に首尾仕と、忝御意を蒙候。十一月十四日、少將樣半田山御狩被遊候に付、責子肝煎被仰付相勤申候。御物數寃十三留り申候。此節鹿二肢拜領仕候。十二月十四日、少將樣江戸へ御參勤の刻、和氣郡熊山御狩被遊候に付、責子肝煎被仰付相勤申候。御物數猪十二・鹿十三留り申候。鹿一疋被下候。同年十二月二十三日、日置左門・服部與三右衛門、私に被申渡候は、如以前在々見分被仰付候間、見聞に罷出、可然時分を考、可罷出候。民困窮の救樣、又は諸事存寄の儀候はゞ、御郡奉行共可申談の由、御意の旨、池田大學承り江戸より御申越候由被申渡候。依之翌年六月六日より服部與三右衛門と二手に仕、罷出申候。天和元年三月五日、江戸よりの御巡見、御迎に御領分地迄、服部與三右衛門・私可被遣旨御意の由、江戸より申來候旨、日置左門被申渡候。

依之九月朔日、備中淺口郡口林村へ罷越候。同三日、彼地御通り被成候に付罷出、高木忠左衛門殿・服部久左衛門殿・佐橋甚兵衛殿へ、路次にて掛御目候。御口上は、同日御泊り、備中淺口郡西阿知村にて御宿へ參申上候。御領分不殘御跡を慕、御泊々へ

罷越可然模様に付、其通に仕候。同四日は雨天にて、西阿知村の御逗留。同五日御立、木下肥後守殿御在所足守に御宿に付、備前御國境、津高郡勝尾村迄罷越、同六日、足守より御通り、御國境迄罷出居申、勝尾村に晝御休被成、同郡野々口村に御一宿。七日赤坂郡西軽部村に晝御休み、和氣郡矢田村に御泊り。同八日、磐梨郡吉原村に晝御休、上道郡沼村に御泊り。同九日、岡山に御一宿、同日御好み御書出し、池田主水・日置左門持参にて、佐橋甚兵衛殿御宿、中之町柳屋所にて御巡見衆御三人御一座の所へ御書付御差出、此節服部與三右衛門・私も主水・左門一所に御三人の御前へ罷出、口上に委細申上候。翌十日、岡山より兒島郡天城村に高木罷右衛門殿、藤戸村に服部久右衛門殿・佐橋甚兵衛殿、御泊り被成候。同十一日、日吉村に晝御休、日比村に御泊り。同十二日、御船にて直島へ御渡り、彼地に御一宿被成候に付、私共は御船に居申候。同十三日、彼地御仕廻、又御船にて邑久郡牛窓村へ御渡り御泊り被成。同十四日、磯上村晝御休、和氣郡片上村に御泊り。同十五日、三石村に御泊り。同十六日、御國御仕廻播州へ御通に付、御國境迄御見送仕、岡山へ罷歸申候。御泊々にて自然火事等も有之候や、其外御用も可有之やとの儀にて、御鐵砲二十人召連候様にと被仰付候。岡山より天城迄御船。從日比、牛窓迄御船、右御三人御別船に付、高木忠右衛門殿御船には私、服部久右衛門殿御船には服部與三右衛門、佐橋甚兵衛殿御船には川村兵太兵衛乘申候。

天和元年十二月二十七日、侍從様御前へ服部與三右衛門・私被召出、御意被遊候は御郡方の御仕置は、殊の外重き事に候。士共の儀は御自分の事に候。民は公儀より御預けの事に候へば、御仕置の肝要の所にては、兩人事は何か六か敷御用等、度々被仰付候處、能相勤候と、重々難有御意にて御召用の御小袖、於御前拜領仕候。同二年正月二十一日、侍從様御前へ、服部與三右衛門・私被召出、池田大學・日置猪右衛門御前へ被召出、御意被成候は、

度々被仰聞候通り御國は從公方様御預の事に候へば、民の御仕置肝要に被思召候。公方様の御下、廣事に候故、國主〳〵に其國を御預け被成、侍從様にも御自身に在々の御仕置は不被爲成儀に付、其役人被仰付候。國々御巡見被仰付趣、御考被遊候に國々在々は、御手達成事に候へば、民の有付無心元被思召候ての事に候へば、何とぞ在々の御仕置宜様にと被思召候。兩人事は、少將様御心易被召仕、何角御用被仰付、扨近年侍從様も何角被召仕、御心易被思召候。其器量有之と被思召、大學・左門は來の事迄、兩人ごとくには不存わけに候へば、御領分御郡方の儀、服部與三右衛門・私に御任せ被成候間、引請裁判可仕候。孫次郎儀は、尤閑谷・和意谷、其外勤來の儀は只今迄の通相勤可申旨御意に付、大學・猪右衛門迄申候は、在々の儀近年立入様子

を見聞仕候に、末々品々大勢の事に御座候へば、中々私共に被仰付可宜とは不存候。御請の儀は、追て大學迄可申上と申候へば、色々御考被遊候に、此儀兩人をのけ、外に可被仰付と被思召候は無之候間、先々打はまり勤見可申、兩人共に小身に候間、五百石宛御足し被下候と、御意被成候。御次に罷出、大學・猪右衛門、御前より罷出候を御待申上候は、只今の御意、重々難有仕合には奉存候へ共、在々の御仕置宜樣に可仕とは、中々得不存候。私共器量にて御心に叶候樣には得仕間敷と奉存候へば、御請の儀、難申上候。何とど御前宜樣に奉願候と申上候へは、申所も尤には候へ共、中々御免は被成間敷候、然共先達御聞可申と被申御前へ被罷出、其以後私共兩人へ、御次にて被申聞候は、只今の趣達御聞候處、兩人は左樣に可存候、中々思樣には成間敷と、大事に可存者と思召候に付、被仰付候と御意に候間、先相勤可見旨、大學・猪右衛門被申聞候故、此上は如何にも奉畏候。先相勤見可申旨御請申上候。此節日置左門は煩にて不罷出候。

天和二年二月五日、侍從樣御前へ宮城大藏・岸藤右衛門・水野三郎兵衛・泉八右衛門・服部與三右衛門・私、被召出、御意被成候は、立合の寄合被仰付候間、一箇月に三度づゝ御評定所へ出座仕候樣にと被仰付。二月二十二日、少將樣・侍從樣、赤坂郡鍋谷山御狩被遊候に付、責子肝煎被仰付、相勤申候。御物數猪三・鹿十一留り申候。此節鹿一疋拜領仕候。三月二日、少將樣・侍從樣、和氣郡田土村大神山御狩被遊候に付、責子肝煎相勤申候。御物數猪二・鹿七十八留り申候。四月十七日、權現樣御祭禮御足輕召連、供奉仕候。五月朔日申の刻、少將樣御病中御寢間へ被爲召、丹波守樣御一座にて御意被成候は御食不被召上候に付、御草臥被成候。御生身は不知儀故被仰聞候由、段々蒙御意候。此御意の趣書上不申候。此節池田主水・伊木勘解由・池田大學・日置猪右衛門・池田隼人・土倉四郎兵衛・土倉淡路・岸藤右衛門・水野三郎兵衛・泉八右衛門・服部與三右衛門・私被召出候。五月二十二日、少將樣御逝去、同二十三日、於西の丸御沐浴以後、御召物・小斂・大斂御入棺の御用被仰付、相勤申候。尤御葬禮御用意の一式被仰付候。六月十二日、西の丸御出柩、和意谷への御供仕、同晩和意谷御着柩。同十三日、御葬禮の御用相勤、御葬以後、同月二十三日迄、御葬場に晝夜相詰、御假墓築、御墓所廻りの〆り出來、以後其々番人等申付、同二十四日、岡山へ罷歸候。朝鮮人來朝に付、牛窓へ罷出、諸事肝煎候樣にと被仰付。六月二十八日より牛窓へ罷越申候。朝鮮人七月二十一日牛窓へ着岸、二十二日彼地出船罷上候に付、同二十四日、岡

山へ罷歸候。宗對馬守殿御家老、其外用人も牛窓へあがり申筈の由、前岸少前に申來候に付、俄御馳走所出來、右の御馳走御中小生共被仰付、右の御馳走場打廻り、肝煎候様にと服部與三右衛門・私へ、池田大學被申渡候。九月十七日、丹波守様西の御丸へ御出座被成、丹波守様御前へ被召出、少將様御遺物被下候間、頂戴可仕旨、侍從様御意の由仰にて、少將様御自筆の大極圖説幷諸賢語の御卷物拜領仕候。九月二十三日、少將様御墓所御普請、如先例可申付旨被仰付候。朝鮮人歸帆の節も罷出、前のごとく、肝煎候様にと被仰付。十月六日牛窓へ罷出、同月八日、朝鮮人罷下候へ共、直に罷通り候に付同十日、岡山へ罷歸候。同三年十月六日、御前へ被召出、御意被成候は、先日御覽被遊候牧馬、あれ程に無之候ても御調法成事に被思召候。先日御覽被遊候に成御馬、間に出來候は、別て御調法に被思召候旨、忝き御意にて御召用の御羽織頂戴仕候。極月十九日、內々申上候。邑久郡乙子村・神崎村・沖新田、來春より彌取立候様に可被仰付哉と、服部與三右衛門を以申上候處、翌二十日、右新田來春早々より可申付旨御意の由、服部與三右衛門を以、池田大學・日置左門被申渡候。私忌中にて罷有候故、右の通に御座候。天和四年正月九日樋方の儀、只今迄小作事一所に太田又七奉行候へ共、服部與三右衛門私に被仰付候間、裁判仕下々奉行可被仰付旨に付、池田大學・日置左門被申渡候。其後、虫明又八、樋奉行被仰付、私共裁判仕候。二月朔日、幸島新田鍬初仕候。二月十五日、世忰八助十一歲にて初て御目見被仰付候。二月二十一日赤坂郡鍋谷山御狩に付、貴子肝煎被仰付、相勤申候。御物數猪八・鹿八留り申候。三月二十八日、去年被仰付候御加增の所付、於御前頂戴仕候。貞享元年、此度邑久郡幸島新田成就仕候儀に付、池田大學承りにて重々忝き御意の趣、九月二十九日の日付にて大學よりの書付、江戶より到來奉拜承候。御普請方・御鷹方支配、此二品御簡略中、服部與三右衛門・私支配可仕候、但、御普請方の者、在々御普請奉行、只今迄の通被仰付候間、私共差圖を受て相勤候。御鷹方も肝煎の頭廻し、二人程申付、私ども差圖を受申候様に可仕候。樋方は彌只今の通裁判可仕由、十月九日、日置左門被申渡候。同二年、信濃守様へ御預の飯河平四郎殿御死去に付、爲御檢使大阪御在番の內、小宮山傳三郎殿御越被成候由、就夫私儀御國境迄罷出候様にと、日置左門被申渡候。正月十九日、御船にて御國境迄罷出居申候處、同二十二日御檢使の御乘船相見候に付、取上嶋前へ出向候へば、御舟に乘候へとの儀にて、吉崎甚兵披露仕、傳三郎殿御逢被成候同二十四日、御歸船の節も、右同前へ罷出候へば、御逢被成候。八月十一日、御國中御林・御籔の支配、服部與三右衛門・私に被仰付、御奉行には士鐵炮の內を可申旨、池田大學・日置左門御意被申渡候。十二月二十八日、上道郡倉田・富倉・倉益の沖新田取立申度存

寄申上、則繪圖を以相窺候へば、來春右の新田可申付旨、御意の由、日置左門被申渡候。

少將樣御筆跡、其外御器物少宛の物、度々頂戴仕候。少將樣・侍從樣より御殺生の鳥魚、御狩の鹿度々拜領仕候。四季御忌日御祭御社行の節、御役人の内に、度々被仰付、相勤申候。

七、鶴見七右衞門。

勝入樣へ御奉公仕、其後播磨宰相樣御部屋住より御小生仕罷有候由、播磨宰相樣、參州吉田に被成御座候刻、御知行五百石被下候。其節高麗陣御座候に付、波多野彌兵衞・曾祖父七右衞門兩人、御船手奉行役被仰付、肥前國名護屋迄罷越、秀吉公へ御目見仕、御帷子共拜領仕候由。慶長元年、四十四歲にて病死仕候。

八、鶴見長九郎。

曾祖父七右衞門病死仕候節、長九郎四歲に成申候に付、御知行被召上、御切米、本俵四十二俵七人扶持被下罷有候。

於播州御兒小生に被召出候。成人仕候はゞ、七右衞門跡目可被下旨、御意被成候處、病氣に罷成候に付、慶長十八年十一月七日、御知行百三十石の御折紙被下、引込養生仕候。武藏守樣へ於播州御禮申上候。其節御馬廻り組に被仰付、名を七左衞門に成申候。病氣彌不復不仕候に付、隱居の儀御斷申上候へば、元和七年に御免被成候。正保元年九月二十一日、七左衞門六十五歲にて病死仕候。

九、養子鶴見七右衞門。

生國、藝州廣島。

七左衞門隱居仕候に付、家督無相違百三十石被仰付、九月九日、少將樣へ御禮申上候。寛永十五年二月二十八日岡山罷立、江戶御留守御番に參、翌年四月罷歸候。慶安三年極月三日、御家中拜借銀返辨に京都へ持參仕候。明曆元年四月四日、江戶御留守番に罷越、福照院樣御式臺に相詰、罷登候節、福照院樣より金子一兩拜領仕候。翌年四月罷歸候。寛文十年三月二十五日、江戶御留守御番に參候。同年八月八日、於江戶、土肥飛彈御鐵炮引廻被仰付。翌年四月罷歸候。在鄕荒地又は御檢地・御毛見等四五度罷出候。禁裡御普請に付、火消役被仰付。延寶二年十二月十四日、飛彈一所に岡山出船、同十八日京着岸、翌年十二月四日出京、同九日罷歸候。其後飛彈に御意被成候は、七右衞門儀、年罷寄候處、於京都御普請中夜廻等迄、無懈怠相勤候由、達御耳、老年奇特に被思召候由、御念比の御意の由。飛彈申聞候。延寶六年居

在宅簡略被仰付、御鐵炮引廻役御免被成候。年罷寄候に付、少將樣御鐵炮の雁兩度拜領仕候。年月覺不申候。貞享元年九月十五日、八十一歲にて病死仕候。

實父は市橋五左衞門、藝州廣島福島左衞門大夫殿に小生仕罷在、知行三百石被下候。七右衞門は五左衞門次男にて御座候。

一〇、鶴見七右衞門。 土肥飛彈組、百三十石、五十二歲。

明曆二年正月十五日、少將樣へ初て御目見仕候。同三年十月に侍從樣御入部の節、御家中一等に初て御目見仕候。萬治三年九月十七日、權現樣御祭禮流鏑馬被仰付、相勤申候。貞享元年十一月二十五日、父七右衞門跡知無相違百三十石被仰付候。同二年六月朔日、繼目の御禮申上候節、名を七右衞門に成申候。

一一、子牛六。 貞享二年十二月朔日、十一歲にて侍從樣へ初て御目見仕候。

一二、津川彌右衞門。 生國、尾張。津田友心方に罷有、其後同姓加左衞門方へ罷越、備前にて病死仕候。

一三、津川加左衞門。 生國、播磨高野郡。

元和四年於因州少將樣へ御步行に被召出、御切米二十五俵五人扶持被下候。寬永十年於江戶、御中小生に被仰付、十五俵御加增被下候。同十六年四月、侍從樣へ相詰可申旨被仰付、御奉公申上候。同十八年五月、侍從樣へ御附被成候。其節御切米扶持一倍の御加增にて、都合八十俵に八人扶持被仰付候。慶安二年十一月二十六日、新知百五十石拜領仕候。承應二年十二月十四日、五十石御加增拜領仕候。御入部以後、加左衞門永々相詰年寄候間、詰申儀御赦免被成、折々罷出申候。寬文九年十一月十五日、加左衞門隱居被仰付、御知行二百石無相違、世悴治大夫に被仰付。治大夫に被下候御切米扶持加左衞門に被下候。大小生役、幷母衣被仰付候。加左衞門・治大夫度々御小袖拜領仕候。

一四、津川治大夫。

承應三年二月、於江戶侍從樣へ御中小生被召出、四十五俵四人扶持被下候。延寶三年四月二十五日、五十二歲にて病死仕候。

一五、津川甚左衛門。山脇傳內組、二百石、三十歳。

治大夫跡知無相違二百石被仰付。六月朔日、織日の御禮申上候。山脇傳內組へ御入被成候。寛文十年十五歳、侍從樣へ初て御目見仕候。少將樣へ御目見仕候。少將樣へ御目見仕候年月失念仕候。延寳四年江戸御留守御番に三月朔日罷越、翌年四月罷歸候。同六年四月十七日、權現樣御祭禮、山脇傳內組にて供奉仕候。同年在鄕被仰付、十月十三日罷越、于今在宅に罷有候。

一六、堤掃部。生國、肥前。同國龍造寺高延に致仕官、知行五十貫給候。度々心馳も御座候由、同家中にて病死仕候。

一七、堤藤兵衛。跡目無相違給候由。其後兵部少輔殿に罷出、知行三百石給候由。兵部少輔殿氏名不存候。

慶長十年、武藏守樣へ被召出、無役に御知行百五十石拜領仕候由。正保三年、隱居被仰付、慶安四年九月十八日、八十歳にて病死候。

一八、堤八兵衛。

寛永十四年閏三月、少將樣へ被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。御國中桝御改に付、奉行被仰付候。鹽硝御用に付、大阪へ參候。年月失念仕候。寛永十八年、切支丹御改の節、於牛窓御番所出入の船改候樣に被仰付參候。同十九年、江戸平川口御普請御用被仰付。十一月十二日罷立、翌年五月罷歸候。正保三年、藤兵衛跡知無相違、百五十石被仰付候。同四年、龜松樣御不例に付、窺御機嫌江戸御使者被仰付。翌年、丹羽藏人組に被仰付候。慶安二年、大筒の御用被仰付、承應元年迄四年の內、新筒捐立打入申候。同二年御斷申上、御免被成候。同三年閏十月二十一日、幾里支丹紋屋吉右衛門召連、江戸へ罷越、同十一月二十六日罷歸候。明曆元年三月、中橋に橋御作事御用被仰付、相勤申候。同三年二月朔日、西の御丸御作事、御用被仰付、十月二十五日迄相勤申候。萬治元年六月十四日、丹後宮津へ御使者に罷越、二十一日罷歸候。同三年、江戸御留守番に三月朔日罷立、於江戸御勘定役相勤、翌年四月二十日罷歸候。寛文五年江戸御供、三月十一日岡山罷立、江戸にて御勘定役相勤、翌年罷歸候。延寳元年十月、御小生役御免被成、中村主馬組に被仰付

候。同二年七月十四日、六十七歳病死仕候。

一九、堤八兵衛。　中村主馬組、百五十石、三十六歳、

寛文五年、少將様。侍従様へ初て御目見仕候。月日覺不申候。　延寶二年九月十八日、父跡目無相違、百五十石被仰付候。同三年、禁裡御普請に付、三月二十八日岡山罷立、禁裡御門の御番相勤。十二月二日罷歸候。同五年、江戸御留守御番被仰付、二月二十八日岡山罷立、江戸にて武具の御用被仰付。翌年四月二日罷歸候。

二〇、辻宗三。　俗名不存候。辻忠兵衛、右兩人、私共に、生國濃州古橋、則宗三領知古橋に先祖の抓に屋敷拵御座候。

辻忠兵衛儀、氏家左京進殿にて度々御加増にて千石、羽柴左衛門佐殿にて母衣御預、一兩度御加増にて二千石、岐阜中納言殿にて先知にて御持筒三十人御預け、備前中納言殿にても先知にて罷有候。家老稲葉内匠と同國在所、其上類親の儀に候へば、立退申節、一所に立退申候。中納言殿より深き御構候處、黒田筑前殿より被召寄參候。右の仕合故、御城下にも御置不被成、御領國の内、牛島と申所に被爲置、別て御念比にて御合力米申請罷在候得共、遠國如何と御暇是非と申罷退候。然る處、黒田殿より御構被成候由、被仰聞候。泉州堺に居申候へば、淺野紀伊守殿、御家淺野右近より申來候は、程近にも候間、少參候樣にとの儀に付、右近在城熊野へ參候へば、右近被申候は、黒田殿御構の由承候。左候はゞ、今の内は在付難成候。其内紀伊守殿御聞へ可被立候。先はか樣にも罷有、可然と存候。一兩年も過候はゞ、紀伊守殿より、何卒御斷可被仰遣候。左候はゞ、埒明可申候。其上は先知にも可被仰付候間、先御合力米にて愛元に忍居申候樣にとの儀に付、任其意罷有候處、無程紀伊守殿御死去、右近も死去候。同但馬守殿御代迄罷有候へ共、樣子御座候て立退、古鄕古橋に罷有候處、紀伊大納言樣いまだ駿河に被成御座候時羽柴左衛門督殿にて母衣預り申候林平之丞と申仁を三千石にて被召置候。其以後、堀井波守殿•稲葉内匠殿より飛脚被下、駿河へ被召寄被仰聞候は、大納言樣へ御肝煎可被成由御申候。其後御兩殿被仰候はゞ、先年羽柴左衛門佐殿にて相役の内、林平之丞如此に召置候。其方事、平之丞同前に三千石に一被召出候間、左樣に心得可申と、被仰渡候。御聞に被立候上は、兎角に不及と、御請申上罷有候。大納言樣御若年の御、心操在之者御噺の衆と御座候、其内へ被仰付御奉行仕候へ共、樣子御座候て、御家立退申候。然處に、右御肝煎被成候御兩殿御爲にても有之候間、是非左藤帶刀迄御斷被仰上、歸參仕候樣にと被思召候へ共

早速は難成、折を以可被仰上と御座候。其内名を辻無庵と申、京都に罷有候處、稲葉淡路殿より浪人爲續之と被仰、御合力米京都へ被下、後々は淡路殿御在城、丹波の福知山へ參、彼地にて相果申候。

右の趣、私未生以前の儀に御座候、親兄弟共、物語を承置、右の通書上申候。淺野但馬殿に居申候より以來、私若年の時分、見聞に及處に御座候。

忠兵衞心操の儀、備前中納言殿にて書上仕候。留書子孫爲可存殘置候付、只今被仰渡候、隨て寫上申候。

備前中納言殿御家中稲葉內匠へ書申跡書之事

一、今度御家中侍御吟味に付、拙者式（或カ）方々にて似合の心操の儀、御家中證據人御座候分、書付を以申上候。

一、濃州安八郡の內津布良村にて夜打の事

拙者十八九の時分、親の手に罷有候刻、伯父稲葉左近と種村助之丞と、知行所出入御座候て、彼助之丞領內、津布良村へ押入左近方より抓上仕人數百計宛にて番手仕罷有候處、稲葉兵庫殿丹羽五郞左衞門様・堀久太郞殿兩三人被聞召、助之丞と左近兩人を、江州安土へ被召寄、御噯（あつかい）（爭の仲裁の義）被成過半無事に罷成候故、津布良村の番も小勢にて仕候折節、我等當番故、上下二十人計にて罷有候處に、彼助之丞多勢川邊にてすつぱ（間者）を百五六十集、夜打を入、四方より喧と亂入、松明を振立切懸候を、我等懸合數箇度、門外へ突出、散々に相戰申內、身方の者數多手負・死人出來仕、殘る七八人計にて、爰（けんど）を專と戰申候所、鐵砲の音を聞在所、古橋より加勢の者、鯨波を上參候を聞、夜打の者退申候。身方の者競候て彌突懸り、四方へ追散申候。夜打の者數人の手負を團、引退申候。然處氏家左京進殿被聞召、拙者爲若輩彼抓上持堅候段、無比類働の由被仰、被召出、御扶持を被下候、右の樣子は御家中に罷有候。遠山四郞兵衞、其比左京進殿に罷有候間、御尋可被成候事。

一、氏家左京進殿に罷有候內之事

播州神鬼の城攻候事、城之助様御下知に付、右の城御攻被成候砌、諸大名衆彼城へ、被押寄候て惣堀を被相破候時、氏家左京進殿御家中に頭三つ參候內に、一つ拙者取申候。左京進殿は二三町跡に同勢を控御入候に付、右の頭我等若黨に持せ遣候て、左京進殿に懸御目候樣にと申付、拙者は亦五六人並に本城の塀へはやく着申候。然所諸家中の衆、手負數多出來候故、何も攻あぐみ申に付、二の丸迄引取仕寄に致候へと、御下知の故、引取申候。然る所我等從弟辻十郞と申者、鐵炮に深手負、堀底に居

候て日暮手負退きて参候者に言傳を仕申越候様は、兩股を打ぬかれ候て居申候。迎を越候へと申越候故、我等自身迎に罷出候處、傍輩の者共申候は、日暮候へば、城中よりさか火をはしらし、堀底迄暉、鐵炮案打候間、下々を申付、可然旨各々申候へ共、同名十郎手負痛罷有候を下々を遣申所、如何と存罷出候を、皆々小手の鎖に取付、引留候へ共、無理に罷出同名を堀底より連てあがり申候、其時某兩三度心操奇特を仕たると、林玄蕃・寺西庄三郎兩使を以預御懇候。右の段遠山四郎兵衛存候事。

一、信濃高戸の城攻の事

城之助様御下知に付、右の城諸大名衆御攻候。其時左京進殿家中へ頭五参候。内一つ拙者取申候、殊に廣間の座敷の内にて組打仕候。右の段遠山四郎兵衛存候事。

一、羽柴左衛門督殿に罷有候時の事

江北柴田合戦の時、柳瀬表の事。秀吉公岐阜へ御働可被爲成と、濃州大垣迄被成御出馬候。其砌柴田勝家は越前・加賀・越中・能登四箇國の人數を相催、柳瀬表へ御着陣候。佐久間玄蕃人數三萬計にて先手を仕、則中川瀬兵衛様取（當）用候、押寄即時攻落し候て、則高山右近殿取出へ押寄候處、高山殿取出を被明、木本へ退被申候。佐久間賤嶽の城を爲可攻、其日の申（後五）下刻、彼城へ押寄取候へ共、其日は晩候故、翌日可攻由にて賤ケ嶽の山下に居陣仕候。然ば柴田勝家・佐久間働の様子、其日の午の刻、羽柴左衛門督殿より注進被申候。同申の下刻、秀吉公大垣を御出馬被成、戌（後八）の刻木本迄御着陣被成候。其時御供の衆馬を乘殺申候程、御急被成候に付、御歩難續、木ノ本山迄續勢纔御旗本□□（欠字）千計にて着陣被成候、其夜の寅（前四）の刻に佐久間陣取の上、高山へ乘上られ、鯨波を作り鐵炮を被爲打掛候に付、敵方驚、横の入海ぎはの細道をあし〳〵に、十二三町引取、山のうら、くひ□□（欠字）の細道の所迄、人數引上踏留り候。互に鐵炮軍初り申（後四）時、秀吉公御馬印を御自身御振被成候故、歴々猶以勵申候に付、敵も御鋒先には不得直、敗軍仕候。然處羽柴左衛門督殿は、勝家爲押、柳瀬道筋に居陣被仕候處、御旗本の御合戦初り申に付、左衛門督も被懸合戰、柴田も相懸りに懸合候へ共、佐久間敗軍仕候故、柴田も不得直、敗軍仕候。然所に柴田家中の侍一人鑓を持陣屋へ參り候を、拙者仕懸名乘候へと申候へば、水野久助と申者にて候。小屋の内にて自害可仕ため如此候と申候を、名乘出鑓を合互に相突に突申處に、拙者仕合能候て彼者を突伏、頭を取申候、右の段伊藤清左衛門、先手左衛門督殿に罷有候て只今御家中に居候間、可被成御尋候事。

一、越前北庄城攻の事

柴田柳瀬を逃延、北庄に取籠候、然に大手口へ左衞門殿被押寄候、其刻三牧勘兵衞鐵炮の者三十人計に込草を取寄、門の扉に火を付申時、城中より爰を專と鐵炮を打申候故、勘兵衞手負候て、罷退候に付、火消申候。其時拙者五六人並に門の脇に着候て居申候處、二の目に控たる者共申候は、其火消候と見へ候間、門脇に被居候衆として吹付可然の由申候。拙者申候は、此火吹付不申候ば、以來ひけに申なし候はん間、被吹付間敷かと申出し候へ共、兎角返事に不及に、本郷平左衞門火本へ走出候、我等も續て罷出候。相殘者共同前に火本へ罷寄、吹立申候故扉に火付門矢倉□□（大字）へ火移り申候に付、勝家天主にて切腹被申候。即落城申候。右五六人の者覺悟故、羽柴左衞門督殿被致手柄候と、秀吉公御感の餘一廉加增、其上北庄の城拜領被申候。右の段、伊藤淸左衞門存候事。

一、和泉千石堀の城攻の事

秀吉公右の城へ被押寄候砌、拙者も五六人の者、同前に城の塀へ早く着申候處、城中より鐵砲の狹間より鑓を突出申候、つかを鑓のしほくひ、我等取候てこなたへ引申候へば、しほくひ二三尺程にて引折取申候。右の段、伊藤淸左衞門存候事。

一、伊勢の峰の城攻の事

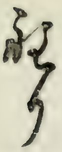
敵外構へ罷出候て在之所を、諸手の衆城中へ追込申候處、城中より又突て罷出候。何も先へ罷越たる者共突立られ、百間計も引退申候。其時堀監物を諸手衆先へばら〳〵に懸候間、突立られ可申候間、兼て覺悟仕候て二の目に三百計にて控申候。如案城中より敵突して罷出に付、身方の者あし〳〵に罷退候處を、監物手より押返し、城中へ追込申候。其時拙者も五六人並に高名仕候。則監物手柄を仕たると、秀吉公より御使者被下候。右の段伊藤淸左衞門存候事。

一、尾州岩崎合戰の事

勝入様•森武藏様御打死の刻、羽柴左衞門督殿、先一手の備計敵を突立申時（後•四）、拙者一番頸を取候て左衞門督殿に見せ候て、又一つ取申候を柴田主計に見せ、鼻をかぎ申候。其時の合戰に都合二つ取申候。此段伊藤淸左衞門存候事。

一、九州秋月にて左衞門督殿を下村與次右衞門切申時の事

左衞門督殿陣前より爲見廻、前田肥前守殿より葛牧十右衞門御使者に被參候に付、門迄左衞門督殿被出候て彼者に時宜をさ


十二行目

しらつぶき被申候處を、下村□□（欠字）を懸、後より左衞門督殿を切申處を、早く被抜合、下村に切付被申候。其時左衞門督殿側に喜多島勝右衞門・菅野清右衞門・拙者有合候間、下村を切伏申候。右の段、伊藤清左衞門存候事。

一、岐・阜・中・納・言・殿・に・罷・有・候・時・の・事。・濃・州・新・加・納・合・戰・の・事・

權現樣御人數五萬餘の積にて木曾川筋を川上・川下兩年に御人數被分被爲乘渡候。其砌、岐阜中納言殿爲先手、木作左衞門尉くゞ百々越前、人數二千計候て新河野に取出を拵、居陣申候處、東の御人數川を越候に付、取出を罷出、隨分防候へ共、敵多數故、卽時に被突立、敗軍仕候、其時中納言殿、川手迄御出馬被成候。卽川手にて可被成旨被仰候へ共、敵多勢にて御座候間、岐阜へ御引取被成、町口にて御合戰可然由、家老の者達て申候に付、御引取被成見、園口を先手御人數を備候、然處、拙者御持筒三千人預り申候。此節の事に候間、秀信の御跡を仕、敵の樣子見屆、鐵炮を左右間配り、敵を待懸居申處に、身方敗軍の內より心懸の侍返し申殘も有之、又同勢の內より殘申者も候て、以上侍二十人計居候處に、案の內橋詰迄追打仕參候時、鐵炮つるべさせ汲替〳〵打せ申候に付、手負多出來仕、其上淺野左京大夫殿・奧村茂右衞門を打落し申に付、敵しらみ、馬を乘留申候。身方者名乘此方へ懸入申候。其時我等一人殘申候に付、侍二十人計殘候て防戰申候故、敵馬を引返申候。身方の者共、橋を越、したひ候へ共、敵は續て參候。身方少勢、其上跡のきれたるを敵見候て、惣返しに返候て、身方の□□無詮働に付、相引に退候て尤の由、皆々同□□（欠字）申候。右の橋詰に拙者殘り不申候はゞ、岐阜町口迄追打に可成處、無比類働候間、以來一廉御加增可被成と、入江左近を以、秀信殿より忝き御意に預り候。翌日には、先手の弓・鐵炮拵り候間、瑞龍寺取出を一筒所御預け被成候間、花村左兵衞を以、被仰付候故、夜半迄被取出に罷有候處、治部少より爲加勢、柏原罷越、町口を抱居候處、取出を御預候へと、訴詔申候に付て我等に御預け被成候取出を柏原に渡し候へと、被仰、則引渡し、本城へ上り申時も七曲筋坂の上にても、拙者心操を仕候。右の段、西脇土佐先年岐阜の家中に罷居候。只今御家中に被居候間、御尋可被成候。

慶長六、九月日　　　　　　　　辻　忠　兵　衞

稲　葉　內　匠　殿　參

右先年備前中納言殿御家中にて、侍穿鑿の時書申跡書也。他人の不可入披見候。拙者若時隨分先を心懸、二六時中離油斷無之、替品も無之候。各其嗜可爲肝要者也。

二一、辻勘介。 生國、濃州古橋里。

若年の時分忠兵衞一所に京都に罷有候。稻葉淡路殿無庵へ被仰聞候は、其身老體の儀に候間、子供二人の内一人、手前に置可然被思召候。勘介事は松平下總殿へ、御仕付被成可被下旨被仰候。其内先御合力米被下候との御心付に預り申候。忠兵衞相果子細御座候て兄弟共に立退、永々浪人仕居申候處、御家へ明暦三年被召出。

翌十二月十五日、御知行二百石被仰付、御折紙頂戴仕候。寛文二年、江戸御留守番被仰付罷下。翌年罷歸候。延寶四年冬、一條樣御祝言に付、辻堅之御用被仰付、十月末に京都へ罷登相勤申候。政所樣・一條樣より白銀二枚づゝ被下候。十一月中旬罷歸候。同七年春、江戸御留守御番被仰付候處、老年不行步故御斷申上、爲名代世悴罷越候。三月三日罷立、翌年三月罷歸候。同九年二月六日、七十八歲病死仕候。

二二、辻勘助。 湯淺半右衞門組、百五十石、二十七歲。

寛文五年、七歲にて少將樣へ御目見仕候。侍從樣へ御目見仕候、年月失念仕候。延寶九年四月二十二日、父跡目百五十石被下候。天和三年八月二十三日、津高郡の内御毛見被仰付、九月十八日仕廻、又同月二十三日、上道郡の内御毛見被仰付罷出。十月八日仕廻申候。貞享元年江戸御供、三月朔日罷立。同二年正月十日於江戸、岩千代樣御式臺へ相詰申樣に被仰付。二月十一日迄御番相勤申候。此正月十八日、岩千代樣へ御目見仕候。三月十二日江戸罷立、同二十九日岡山へ罷歸候。罷歸候節岩千代樣御前へ被召出、御召御小袖拜領仕候。

二三、吉井源兵衞。 生國、出羽由利郡仁、加保兵庫方に罷有候。

二四、吉井五左衞門。 右同斷。私幼少にて父に離申候故、先祖の儀不存候。

二五、塚本吉右衞門。 若原監物組、六十二俵七人扶持、六十七歲。

明暦三年十月八日、小十人に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。其年御國へ御供仕候。萬治元年、江戸御供仕、江戸にて御銀

奉行相勤申候。翌年御供仕、右の御銀御勘定仕、同年七月、中小生に被仰付。同三年、江戸へ御先立に罷越候。道中御道具奉行仕候。同年八月、在江戸被仰付、三人增の御扶持を定扶持に被成、都合七人扶持に被成被下、其年御長屋奉行、御鐵砲御小人奉行仕候。在江戸九年の内、右の御役仕候。寛文八年、下谷御屋敷燒失仕候に付、在江戸御赦免、妻子引越罷歸候。同十年、江戸御留守御番被仰付、淺□欠字御屋敷にて御前樣御式臺に相詰、翌年罷歸候。延寶二年江戸御留守番に罷越、翌年罷歸候、其歸りに宇治へ御茶壺持參仕候。四月二十八日、御當地にて御居へ相詰候樣にと被仰付、則御銀奉行相勤于今罷有候。御前樣御祝言の節、御銀・御小袖何も並に拜領仕候。其外御小袖・御帷子・御上下拜領仕候へ共、年月覺不申候。

二六、子平藏。　寛文十二年、十五歳にて御目見仕候。

二七、津澤先祖。

一家ともに代々武田信玄樣奉公仕候由承傳候、何の時分にて御座候や、權現樣より御陣に拜領仕、於于今信州に罷有候兄關口新左衛門所持仕候。拜領仕樣子不存候。祖父の名不存候。

二八、長谷川金右衛門。

眞田伊賀守所々罷有二百五十石給り候。牧野右馬允樣被申に付、伊賀守方首尾能暇給、右馬允方へ罷出、知行三百石給候。右馬允後は駿河守と申候。駿河守子息大和守・同子息飛彈守迄罷有候て病死仕候。跡式私兄長谷川甚三郎に無相違給候。

二九、津澤八郎兵衛。　高二百石、三十九歳。

牧野飛彈守所々兒小生に被呼出、罷在候處、子細御座候て十五歳の時立退、能勢市十方に浪人罷有候。

延寶八年五月二十九日、御家へ被召出、侍從樣へ御目見仕候。同六月二十七日、少將樣御目見仕候。天和二年五月二日、銀五十枚拜領仕候。同十二月、江戸御屋敷へ引越申候。同三年、江戸御留守中御取次被仰付相勤候。貞享元年五月四日、新知二百石被下、大小生被仰付候。同二年五月五日、江戸御發駕、同月二十三日、御歸國御供仕候。同年、長崎御奉行川口源左衛門殿、江戸へ御通りに付、御使者被仰付、十月九日、下津井へ罷越、二十日、源左衛門殿下津

井表御通、同日罷歸候。

三〇、石井與次兵衛。

秀吉公御船手裁判被仰付、播州明石に致居住候に付、明石與次兵衛と申候。秀吉公朝鮮御征伐の砌、豐前國内裏前沖にて御船破損仕候、與次兵衛自分無調法と奉存、切腹仕候。

三一、戸田左次兵衛。 明石與次兵衛嫡子にて御座候へ共、母方に付、戸田に改申候。

池田攝津殿・同信濃殿へ致奉公、四十俵四人扶持給、兒島郡の内十一村代官仕候。其後暇乞致浪人、於備前病死仕候。

三二、戸田吉兵衛。 池田攝津殿に兒小生致居申候。

死去以後暇申請、松平備後守様へ被召出、三十俵四人扶持被下、御右筆役相勤申候。其後御暇被下、何の御構も無御座故、備前へ妻子共引越、戸田徳兵衛と致變名、于今浪人にて罷有。

三三、津川又六郎。 六十俵四人扶持、二十八。外祖父津川加左衛門致同名。

寛文十二年二月十五日、十五歳に罷成候節奉願、侍從様へ初て御目見仕候。延寳三年二月十五日、十八歳にて侍從様へ御兒小生に被召出、四十五俵四人扶持被下候。同六年、江戸御供相勤、翌年四月、御先へ御數寄道具裁判仕罷歸候。同八年、江戸御供被仰付、御先へ御荷物裁判仕罷越。天和元年五月、御跡より御道具致裁判罷歸候。同二年三月、江戸御下向の節、木曾路へ被成御座、歩行御供被仰付、相勤申候。同三年五月三日、江戸御發駕、木曾路へ御越被成、歩行御供被仰付罷歸候。此節片上より和意谷へ御越被成御供仕候。 同年十月二十三日、十五俵御加增被下、御側へ相詰候へと被仰付候。同年□月□日（欠字）、帳付候樣にと被仰付候。（貞享二年二月四日迄相勤、於江戸御免被成候。）貞享元年、江戸御供相勤申候。同二年五月六日江戸御發駕御供仕罷歸候。同十一月二十四日、御櫛揚候樣に被仰付候。同年十二月二十三日、此節御人少相勤背折

の由御意にて、御鷹の鴨一羽拜領仕候。

吉備温故秘錄卷之七十六（干城五）終

吉備温故秘錄卷之七十七（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城六（原本干城一二）目錄

吉備温故秘錄卷之七十七（干城六）目錄終

吉備温故秘録　巻之七十七（原本無巻数）

大澤惟貞輯録

干城　六（原本干城一一）

一、寺澤藤左衛門。生國、尾張國岐阜。

秀吉公御領知三千石之節、被ニ召出一、百二十石被レ下候由、其後秀吉公播州御領知之節、秀吉公之元知三千石藤左衛門に被レ下、名を越中と御替に成候由。其後、世忰忠次郎に、三千石讓り隱居仕、病死仕候由。

二、寺澤忠次郎。

父越中家督無ニ相違一三千石秀吉公より被レ下、其後名を志摩と被レ成、知行二萬三千石被レ下候由、其後、高麗陣思召立之節、又二萬石加增被レ成、都合四萬三千石被レ下、高麗へ被レ遣、惣人數之兵粮、其外諸事裁判被ニ仰付一候由。番船之時分、加藤右馬助殿一所に番船を取、其節、二萬石加增被レ成、都合六萬三千石被レ下候。高麗陣相濟申、秀吉公肥前名護屋御仕廻被レ成、御登之節、二萬石加增被レ成、都合八萬三千石被レ下、於ニ肥前國唐津一、秀吉公繩張にて新規に城を志摩守に被レ下候由。慶長五年、關原御陣之節、志摩守軍功にて從ニ權現樣一於肥前國天草四萬石御加增被レ成、都合十二萬三千石被レ下候由。於ニ江戸一、寛永十一年四月十一日、七十一歳にて病死仕候。

三、養子寺澤市丸。志摩守甥にて御座候。生國、攝津國大坂。

志摩守子無ニ御座一候に付、甥共之養子に可レ仕旨存居申處、市丸實父今井新右衛門肥前唐津に居申候處、新右衛門預りの出城へ罷出候留守、厩より火事出來申候時、市丸九歳にて厩へ走込、馬之絆繩を力にて切、馬を疋出し申候、此段志摩聞居甥共多候得共、何と難レ分、此者幼少ながら爲働事とて、則九歳にて養子に仕、十六歳之時、江戸へ證人に下し申候、權現樣・台德院樣へ逢ニ御目見一、名を忠右衛門と御替被レ成、左文字之御脇指拜領仕候由。爲ニ證人と一江戸仕之付二百人扶持被レ下候由。其後、志摩守に實子出生仕候に付、致ニ辭退一江戸引取、唐津に罷在候。其後、子細御座候而、唐津迄退、慶長七年（考に十七年ならん）、生駒壹岐守殿へ罷出、

知行給候。其後様子御座候而、壹岐守殿身體いまだ果不レ申以前立退申候由。寛永九年、淺野但馬守殿へ奉公仕、足輕二十人被レ預候。其後、又様子御座候而、浪人仕候處、水谷伊勢守殿より爲ニ合力一三十人扶持被レ下、備中新見に罷在候。明暦元年二月十六日、六十七歳にて病死仕候。

右之忠右衛門實父今井新右衛門、生國信濃木曾、寺澤と申鄕に而御座候。秀吉公へ被ニ召出一、大番役相勤申候由。寺澤志摩守、高麗陣出陣之時、秀吉公御取立大身に被ニ仰付一候節、家老職之者有レ之間敷、新右衛門を家老に御附被レ成候由被ニ仰出一、志摩守家老職相勤、知行千五百石、與力組十人、鐵炮四十人被レ預、其後於ニ肥前唐津一、慶長九年八月二十一日、五十五歳にて病死仕候。

四、寺澤藤右衛門。鐵炮頭、四百石、七十歳。

生國、肥前唐津。父寺澤忠右衛門三男にて御座候。一男・二男は他所へ有付申候、私儀惣領に仕り父忠右衛門一所に藝州廣島に罷在候處、寛永二十年三月十三日、松平安藝守殿へ被ニ呼寄一、知行二百石被レ下、馬廻りにて罷在候。同二十一年八月朔日、大小生役被ニ申付一、於ニ江戸一者假取次役仕候。度々爲ニ褒美一時服給候。承應三年七月七日、廣島を父忠右衛門一所に浪人仕。

明暦二年、戸川土佐守殿へ御肝煎を以少將様へ被ニ召出一、九月朔日御禮申上、組外に被ニ仰付一、本俵二百俵被レ下候。

同三年侍從様初而御入國之節、御家中一同に御目見仕候。萬治元年十二月十五日、御知行四百石折紙、從ニ少將様一拜領仕、同日、宮城大藏組に被ニ仰付一候。寛文元年江戸御供被ニ仰付一、三月十日、御先へ罷立、於ニ江戸一御取次役被ニ仰付一候。翌年七月十二日、御國へ罷歸り、同年、水戸中納言様腫物御煩被レ成候に付、御國許より參候分にて、江戸より水戸へ御使者被ニ仰付一、八月二十一日江戸罷立、二十六日罷歸、下谷御座敷へ罷出、侍從様へ右之御返事申上候。於ニ水戸一時服五ツ・銀十枚拜領仕候。同四年八月二十日、御奏者役被ニ仰付一、翌日、御禮申上候。翌年正月十一日、黑母衣被ニ仰付一、即日母衣絹拜領仕候。五年、江戸御供被ニ仰付一、二月十六日、御出船御供仕罷立、松平式部大輔様御死去に付、大磯より御先へ御使者被ニ仰付一參候。翌年五月十日、御歸國御供仕罷歸候。同九年、江戸御供被ニ仰付一、四月五日、御出船御供仕、翌年五月十日、御歸國御供仕罷歸候。同十年八月七日、江戸より被ニ仰付一候而、三十日之用意にて梶浦勘

助・私兩人へ参候樣にと被二仰付一。九月十六日、兩人共御國罷出、江戸へ罷下、十一月三日、少將樣江戸御發駕之御供被二仰付一、福照院樣御葬に付、和意谷に參、十一月二十七日、御歸國御供仕罷歸候。延寶元年、江戸御供被二仰付一、二月二十八日、少將樣御出船御供仕、同年十月十日、御歸國御供仕候。同三年、京都御普請に付、正月十二日、侍從樣御上京に付、御供仕、同月二十四日、御歸國御供仕罷歸候。

同年、少將樣御自筆之書物一册、侍從樣御自筆之繪一幅、月之大文字一枚、右三色、淺尾・長澤へ被レ遣、長澤嗣子彌八郎に讓申候、彌八郎於二御國一病死仕候に付、彌八郎字村等私裁判仕候處、右之品留置候而差上申候へば、御機嫌にて被二召出一、忝御意にて、少將樣より大學誠意章御自筆拜領仕候、侍從樣へ指上候處、同文大文字拜領仕候。

同四年、江戸御供被二仰付一、十一月五日、御先へ罷立、御道具・御納戸荷物引廻被二仰付一、於二江戸一火事出來之節は、御一同樣へ相詰可レ申旨被二仰付一、罷出候節は、預り七人、小人四人、挑灯二ツ御渡被レ成候。翌年二月二十八日より煩、大形本復之處、御先へ御暇被レ下、四月二十六日、江戸罷立、五月十日、御國へ罷歸候。同六年正月元日、御禮之御取次を梶浦勘助・私兩人にて仕、同三日、大勢之取次兩人にて首尾能仕廻申候に付、忝御意にて、御召料のしゞら・御熨斗目之御小袖一ツ宛、兩人共拜領仕候。九月九日、於二西之丸一奏者役御免被レ成、同十一日、母衣役者共儘可レ仕旨被二仰付一候。同年、私勝手迷惑仕候に付、人馬を減、十年、手前にて簡略仕度旨申上候處、願之通被二仰付一候。同年十一月三日より國盛院樣御神主御對面所へ被レ爲レ入に付、御香役被二仰付一、翌年正月十二日、御遷廟之節迄相勤申候。同七年正月十三日より、西之丸へ御香被二仰付一。同二月十二日、少將樣御參勤に付、同晝迄相詰申候。同年、從二少將樣一宍粟へ御使者被二仰付一、翌十三日罷立、同十六日罷歸候。同年六月二十三日、御鷹方被　仰付、御鷹匠　御鳥見・御餌指・御餌飼・御犬牽、並預り鐵炮二十人御預被レ成、又預り鐵炮十人裁判被二仰付一候。同月二十七日、右之御禮申上候。天和三年九月三日、老中より備中松山水谷左京亮殿仕置人中へ使に被レ參、翌四日罷歸候。同九月五日、從二侍從樣一、水谷左京亮殿へ御使者被二仰付一參、同七日罷歸候。十一月朔日、御召料之皮立付拜領仕候。貞享元年、御殺生場境目見廻りに八月九日罷出、同十四日罷歸候。同年十月九日、御簡略に付、御鷹方御赦免被レ成候旨、御先筒十人被二仰付一候。同二年九月十七日、權現樣御祭禮供奉被二仰付一

罷出候。戸田土佐守樣へ度々御使者被二仰付一參候、年月失念仕候。少將樣御參勤前御歸國後、御近習御休め被レ成候に付、毎戸（度か）西之丸へ相詰申候年月失念仕候。水谷ヶ京亮殿上り下りの節御領内にて晝休之節、毎度御使者に參申候、年月失念仕候。

五、子源太郎。　延寶六年正月十五日、七歳にて初而御目見仕候。貞享二年十月四日、御居兒小姓被仰付候。

六、寺內喜左衛門。　生國、上■と承傳申候。

宇喜多中納言殿にて知行作州之內はいた郡高野村・押入村にて千二百石、備前之內和氣郡香々戸（てか）村にも五百石、都合千七百石被レ下、備前之內・作州之內・播州赤穗之內・備中川東、大代官仕候。關ヶ原陣に討死仕候。

七、寺內太郎左衛門。　幼少にて浪人仕り、其後本多美濃守樣浪人分に五十人扶持被下罷在候。

寛永九年五月二十日、少將樣へ被二召出一、御知行三百石之御約束にて罷出候處、二百石之御折紙頂戴仕候。御取次に御約束と相違と奉レ存候、日置豐前所迄願申候處、達二御耳一、其後寛永十四年、父喜左衛門被二召出一、右之百石御切米に御直し、本俵五十俵七人扶持と被二成下一、御城御式台相詰申候。寛文五年四月十二日病死。家督百五十石、寺內彦兵衛へ被二仰付一。

八、寺內喜左衛門。　御奉公之品不存候。萬治三年二月五日、四十二歳にて病死仕候。

九、寺內安右衛門。　池田左兵衛組、五十俵五人扶持、二十八歳

萬治三年三月二十一日、三歳にて跡目五人扶持被レ下、安藤杢組に被二仰付一候。寛文四年七月七日、七歳にて初而少將樣御目見仕候。同五年六月十五日、初而侍從樣へ御目見仕候。同九年二月二十七日、五十俵五人扶持被二仰付一候。延寶元年七月十五日より御城御式台相詰申候。其節小堀主殿組に被二仰付一候。同四年正月晦日、少將樣へ相詰可レ申旨被二仰付一、二月朔日より西之丸へ詰申候。同五年三月十一日、江戶御供仕、十一月十日、少將樣江戶御發駕、大御前樣御上屋敷へ御移被レ爲レ成候內、相詰候へと被二仰付一、御移被レ成候以後御暇被レ下、岡山へ十一月晦日罷歸候。中川內膳守樣之奧樣、御平產御悅之御使者被二仰付一、天和二年正月二十一日罷立、江戶へ參候。其節內膳守樣より銀二枚拜領仕候。二月二十三日罷歸候。少將樣御卒去以後、天和二年八月十五日、於二西之丸一黃金一枚拜領仕候。同三年四月二十三

日、於二西之御丸一、重付御上下被レ爲レ下候。同年閏五月十四日、池田左兵衛組に被二仰付一候。

一〇、調所清四郎。 有馬玄番殿にて知行二百五十石被下罷在、病死仕、跡目清四郎惣領甚兵衛に被仰付候由。

一一、調所吉右衛門。 清四郎次男にて御座候。有馬中務殿にて兒小生仕罷有候由。其後浪人仕、致病死候。私幼少之時故、知行・切米之義も不存候。

一二、調所喜右衛門。 上坂外記組、六十二俵四人扶持、五十二歳。
生國、山城。承應元年十月、御家へ被召出□月十二日、少將樣へ御目見申上候。本俵四十俵四人扶持被下、御小生組に被二仰付一候。同二年三月、江戸御供仕、同月、侍從樣へ御目見申上候。翌五月、罷歸候。明暦元年三月、江戸御供仕、翌八月罷歸、萬治三年八月、御弓組に被二仰付一、寛文七年迄、八年間相勤申候。寛文六年極月、江戸へ侍從樣・松平能登守樣、御病中御見廻之御使者に被レ遣相勤申候。翌正月罷歸候。同七年十月十二日、御房樣江戸御下向御供仕、道中宿割相勤、同極月罷歸候。其節江戸にて、御時服拜領仕候。延寶元年二月、江戸御留守御番に罷越、到來之御用相勤、翌三月罷歸候。同二年、御馬廻組に被仰付候。

一三、子半右衛門。 二十一歳にて天和元年十二月朔日、侍從樣御目見仕候。

一四、本家 寺内喜左衛門。 寺内太郎左衛門兩人之事は、寺内安右衛門處に有。

一五、寺内彦兵衛。
太郎左衛門跡目、寛文五年五月十八日、百五十石被二仰付一、安藤杢組にて居申候。同年より延寶三年迄十一年、御城御式台に相詰申候。寛文八年より學校御横目役被二仰付一候、同十年之冬、御捨免被レ成、其節御羽織拜領仕候。同十一年三月十日、江戸御供に參、翌十二年四月、御先へ罷歸候。延寶三年閏四月十三日、病死仕候。

一六、養子 弟 寺内太郎左衛門。 水野三郎兵衛組、百石、三十七歳。
寛文十二年正月二十五日、信濃守樣へ被二召出一、三十俵三人扶持被レ下候。同年六月二日、江戸御供に參候、翌延寶

元年十月六日、御供仕罷歸候。於ニ江戸一御責馬被ニ仰付一、忝御意にて御紋附之御小袖拜領仕候。同年、池田豐前守様御婚禮に付、御使者に五月二十日江戸へ罷越候。(從ニ豐前様一銀子拜領仕候、同奥様より御帷子拜領仕候、松倉市正殿より羽二重一疋被レ下候。)同三年三月、兄彦兵衞實子無ニ御座一に付、私を養子奉レ願候處、被ニ仰付一候。六月七日、彦兵衞跡目五十石之內、百石私に被ニ仰付一、六月十五日、侍從様へ繼目之御禮申上候。小堀主殿組にて御城御式台に相詰申、同四年正月晦日、少將様へ相詰申様に被ニ仰付一、二月二日より西之御丸へ詰申候。同五年三月十一日、江戸御供仕候、參道中御宿割仕候、江戸にて御家中下々人改之御用被ニ仰付一候。同年十一月十日、江戸御發駕、同月二十八日、御供仕罷歸候。同六年、甲府宰相様御逝去に付、同九月二十四日、江戸へ御使者被ニ仰付一、公方様爲ニ御機嫌御窺一、酒井雅樂頭様・稻葉美濃守様・久世大和守様・大久保加賀守殿・堀田筑前守殿・土井能登守殿參候、爲ニ御悔一、千代姫様・左近將監様へ伺公仕候。傳通院へ御香奠持參仕候。同十月六日、稻葉美濃守殿御奉書御渡し被レ成候、同月十一日、從ニ侍從様一御暇被レ下、江戸罷立、同月十八日罷歸候。同七年二月十日、江戸御供仕、同年十月十九日、御供仕罷歸候。同八年極月五日、江戸御供仕、天和元年十月五日、御供仕罷歸候。天和二年五月二日、水谷左京殿御當地御通に付、備中口へ御使者に罷出候。同年、少將様御卒去已後、八月十五日於ニ西御丸一黃金一枚拜領仕候。同三年四月二十二日、於ニ西御丸一御上下御單物頂戴仕候。同年五月十四日、水野三郎兵衞組に被ニ仰付一候。

一七、寺內喜左衞門。　寺內太郎左衞門。(右同斷。)

一八、寺內杢左衞門。(山崎大膳組、八十俵四人扶持、五十七歲。)

承應二年二月二十六日被ニ召出一、本俵四十俵四人扶持被レ下候 明曆元年三月二十八日、江戸御供仕、於ニ江戸一四月二十六日侍從様へ御目見仕候。翌年五月十八日、御供仕罷歸候。同二年九月十七日、權現様御祭禮流鏑馬被ニ仰付一相勤、吳服被レ下候、(同年初而被ニ仰付一。)同三年八月、磐梨郡・和氣郡・邑久郡御鍬奉行被ニ仰付一相勤申候。萬治元年、御獻上之大島狹間石切被ニ申付一、奉行被ニ仰付一相勤申候。同二年三月十日、江戸御供仕、翌年五月、御供仕罷歸候。於ニ江戸一

御一同様方方角火事之節、火消道具爲二持參一申候御用被二仰付一候。同三年七月、戸川土佐守殿へ兩度御使者に鹿瀬へ參候。同年八月、御弓組被二仰付一、寛文七年迄相勤申候、寛文三年三月十一日、江戸御供仕、同年六月、江戸より日光へ御供仕候。翌年閏五月、御供仕罷歸候。於二江戸一御一門様方方角火事之節、火消道具爲二持參一御用被二仰付一候。同四年・五年・六年、磐梨郡・和氣郡・邑久郡、御籔奉行被二仰付一候。同七年十月十二日、毛利甲斐守様奥様御供被二仰付一、江戸へ參申候。此節甲斐守様奥様より呉服拜領仕候、御祝言之御供相勤、其儘江戸に居留、御堀普請之節、作事方之御用被二仰付一、翌年五月御供仕罷歸候。同八年八月、相模守様・御袋様御墓石、蓮昌寺より國淸寺へ引せ申奉行被二仰付一、相勤申候。此節相模守様より銀三枚拜領仕候。同九年九月、關白様御祝言に付、京都にて御用被二仰付一相勤申候。此節從二關白様一熨斗目御上下拜領仕候。京都より直に大政所様御使者に罷成、紀伊宰相様へ伺公仕候、十月九日、京都へ罷歸候、此節宰相様より銀十枚・呉服一ツ拜領仕候。福照院様御使者京都に居申內被二仰付一、同年九月、大政所様・關白様へ御祝言之御使者伺公仕候、此節大政所様より銀一枚拜領、關白様より呉服一ツ拜領仕候、大御前様御使者京都に居申內被二仰付一、同年九月、大政所様・關白様御祝言之御使者伺公仕、此節大政所様より白銀一枚拜領、關白様より呉服拜領仕候、同九年十一月三日、御鐵炮之御藥込之御用被二仰付一、延寶之五年迄相勤申候。寛文十二年三月、江戸御供仕、翌延寶元年十月御供仕罷歸候。江戸にて御用御菓子方見屆、御書院之掃除奉行相勤申候。延寶元年極月六日、少將様より御藥込之御用骨折と御意、鷹拜領仕候。同二年二月二十七日、御加增十八俵被レ下候。同年、江戸御供仕、翌年十月四日御供仕、道中御宿割仕罷歸候。江戸にて御用御陣幕・御弓預申候。同四年正月十六日、少將様より御藥込之御用骨折之御意にて鷹拜領仕候。同五年三月十一日、江戸御供仕、同年十一月二十八日、御供仕罷歸候。江戸にて御用御陣幕・御弓預り申候。同年十二月十五日、御膳奉行被二仰付一、天和二年迄相勤申候。同七年二月十日、江戸御供、同年十月十九日、御供仕罷歸候。天和二年、少將様御卒去以後、八月十日於二西之御丸一金子十兩拜領仕候。同三年四月二十二日、於二西之御丸一御紋付之御熨斗目□（マヽ）先御袴拜領仕候。同年五月十四日、澤權太七人組に被二仰付一、御式台相詰申候。同六月十九日、中奥御番被二仰付一候。貞享元年三月より翌五月迄、御城御番之侍共判形改申御用相勤申候。同二年十月五日、御小

生御免、山崎大膳組に被二仰付一候。

一九、子十之丞。　天和二年二月八日、少將樣へ御目見仕、同年二月十一日、侍從樣へ御目見申上候。

二〇、服部三郎右衛門。　備前和氣郡寺見村に住居仕候。其後も如何樣之首尾に御座候哉、村名を取、氏に仕候由。

二一、寺見三四郎。　天神山城主浦上遠江守宗景へ知行二百石給り奉公仕居申、候少々心馳も御座候由。宗景沒落以後は、寺見村へ引籠り病死仕候。

二二、寺見三右衛門。

幼少にて父に離、成人仕候て、元和二年宰相樣へ御船手に被二召出一、其後寛永九年七月、少將樣因幡より備前へ御國替被レ成候砌、中村主馬方より宰相樣御家來横川治大夫方へ中通御船手諸事功者成者殘置候樣にとの義に付、御船手之模樣委細爲レ成者之由、治大夫方より主馬へ申傳へ、宰相樣御代より、其儘御當家御船手へ罷出に被召出候。

少將樣武州江戸より備前へ初而御入國被レ遊候刻、御雇分にて大阪迄御迎に罷登、御船中御供仕、八月二十六日罷歸候。同年九月十四日、十八石に三人扶持被レ下、御加子引廻被二仰付一候。同年、細川越中守殿肥後國御拜領之節、上使内膳殿・仙石大和守殿御算用方小林十郎右衛門殿へ御船大小三十艘被レ遣候に付、同十月二十七日、岡山出船仕、大阪へ罷登、彼地より豐前國小倉迄御供仕、右御三人之御船中御馳走之諸事、御賄方・御入用請込、其外御船々之御雇船頭之義等、裁判被二仰付一、肥後國御仕廻之内、彼地逗留、翌年正月三日、大阪へ御供仕、罷登申候。此節内膳殿より御家來村雨三郎右衛門取次にて金一兩被レ下候。大和守殿より御小袖一被レ下候。正月十二日罷戻り申候。同十一年四月十一日、少將樣御歸國、伏見迄迎に罷登、同二十七日罷戻申候。同年、福島村に御船入被二仰付一候に付、諸事見分仕候へと被二仰付一、三月十六日より相勤申候。同年御上洛に付、少將樣御上京被レ成、六月三日、岡山御出船。此節伏見へ相詰居申候而、備前より登り申候以來、大豆大坂より過書船にて積登候を請込、其外、尼崎より大關之御肴参候をも京都御本陣へ指上申候。上使酒井阿波守殿京都より大阪へ御下被レ成候刻、御左川御座候、其外御供船共御馳走被レ遊候に付、大阪迄御供申候。阿波守殿より御帷子御單物拜領仕り七月八日、岡山へ罷戻申候。同十二年四月十一日、備前御本丸火事之節、御天守へ火移り申候に付、中村主馬下着仕、御加子共大勢召れ罷登、重々人を火凌申候處、離レ消候に付、御天井相

引破り消留申候。同年四月十九日、新大網被二仰付一、御預置、其以後度々引せ申候御用出申候。同十三年七月五日、少將様御歸國被レ成候に付、伏見迄御迎に罷登、二十二日罷歸候。同年、朝鮮人來朝に付、十一月朔日より下津井へ罷出、播州室津迄送屆、同二十三日、岡山へ罷歸候。同十四年、朝鮮人歸帆、正月二十五日より牛窓へ罷出、備後國鞆迄送、同二月十二日罷戻申候。同年、少將様御參勤、閏三月五日、岡山出船、伏見迄御供仕、同十二日、罷戻候。同年、豐後國蒔內之御目附牧野傳藏殿・林丹波どの御下之節、五月八日より牛窓へ罷出、御馳走之大網引せ申候、同十二日、罷戻申候。同年、長崎御奉行榊原飛彈守殿・馬場三郎右衞門殿御下之節、牛窓へ六月二日より罷出、御馳走之大網引せ、同十四日罷戻候。同十年、右御兩人從二長崎一御登に付、九月二十七日より牛窓へ罷出、大網引せ、十月八日、罷戻候。同年、肥前國島原一揆蜂起之節、板倉內膳殿・石水十藏殿、彼地へ御下被レ成候に付、御船御馳走、十一月十六日、岡山出船、大阪に罷登り、直に豐前國小倉迄御供仕罷下、同十二月十四日罷戻候。同年、松平伊豆守殿戶田左衞門殿、肥前國嶋原へ御下之節、御船御馳走被レ遊に付、二月二十日、岡山出船、大阪に罷登、彼地より直に豐前之小倉迄御供仕り罷下り、翌年正月二十三日、罷歸申候。同十五年、少將様御歸國被レ成候に付、二月十一日、岡山出船、伏見迄罷登、同十九日、罷戻申候。同年、島原への上使三浦志摩守殿登之節、二月二十一日より少將様牛窓に被レ成二御座一御供仕、同二十六日、罷戻候。同年、松平伊豆守殿・戶田左衞門殿、島原より御登に付、御船御馳走三月九日、岡山出船、豐前之小倉へ御迎に罷下り、大阪迄御供仕り、四月二十三日罷戻候。同年、山崎甲斐守殿御下之節、少將様五月六日より牛窓へ御越被レ成御供仕、同十一日罷戻候。同年、高力攝津守殿御入部に付、御下向之節少將様五月二十三日より牛窓へ御越被レ成、此時大網召連御供仕、同二十六日罷戻候。同年、牧野織部殿備中より岡山へ御出、御船にて大阪迄御登之節、八月十五日、於二高島前一御馳走大網引せ申罷出候。同年、新に御召替船出來申候に付、小串村前にて外之御船と押くらべ、行足御覽被レ成候。少將様十月十四日、御出被レ遊候御供に罷出候此節御羽織一拜領仕候。同年、豐後府內へ御目付齋藤左源太殿・三宅半七殿御下りに付、爲二御馳走一十一月五日より牛窓へ罷出、同十五日罷戻候。同十六年、少將様御參勤、三月五日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十四日、罷戻り

申候。同年、備後守様備前に御座被レ成節、爲ニ御迎一五月六日、岡山出船、大阪へ罷登、同十六日、御供仕罷戻申候。同年、太田備中守殿九州へ御下之節、爲ニ御馳走一備後守様七月十二日より牛窓へ御座候に付、御供仕、同二十二日罷歸申候。同年に太田備中守殿九州より御登り之節、八月二十一日より牛窓へ罷出、同二十七日、罷戻り申候。同年、松平隱岐守殿御通之節、備後守様十一月二十六日より牛窓へ御出被レ成、御供仕、同晦日、罷戻り申候。同十七年、備後守様江戸へ御下向被レ遊候に付、二月二十一日、岡山御出船、伏見迄御供、同三月十一日、罷戻申候　同年、少將様御歸國爲ニ御迎一、正月二十三日、岡山出船仕、伏見迄罷登り、六月六日、御供仕罷戻申候。同年、加々爪民部殿野々山新兵衛殿九州へ御下に付、少將様六月十日より牛窓へ御越被レ成御供仕、同十四日、罷戻申候。同十七年、加々爪民部殿・野々山新兵衛殿九州御登之節、少將様・木下淡路守殿御同船にて七月七日より牛窓へ被レ成ニ御座一候に付、御供仕、右御兩人様播州室津迄御同道被レ遊、七月十五日、御歸城被レ遊候。同年、青山大藏殿・井上筑後殿・花房勘右衛門殿・藤田數馬殿、讃州高松へ御越之節、御船御馳走、八月四日、岡山出船、大阪迄罷登、彼地より直に高松へ御供仕、同二十三日、罷戻候。同年、青山大藏殿讃州より御登之節、少將様九月四日より牛窓へ被レ成ニ御座一御供仕、同八日、罷戻候。同年、井上筑後守殿從ニ讃州一御登之節、少將様十一月十二日より牛窓へ被レ成ニ御座一御供仕同十六日、罷戻り申候。同年、小濱久太郎殿・間宮唐之助殿、浦邊御見分に御通之節、爲ニ御馳走一十一月二十二日より下津井へ罷出、二十九日、罷戻候。同十八年少將様御參勤、三月十六日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同二十七日、罷戻申候。同年、石川八左衛門殿・小濱彌十郎殿、浦邊御見分に御廻被レ成候に付、爲ニ御馳走一四月八日、牛窓へ罷出、同十四日、罷戻申候。同年、丹羽牛右衛門殿・堀三右衛門殿、豐後國へ御下之節、爲ニ御馳走一六月二十日より牛窓へ罷出、同二十七日、罷戻申候。同年、青山大藏殿讃州へ御下之節、爲ニ御馳走一十月三日、牛窓へ罷出、同十日、罷戻候。同年、山崎甲斐守殿讃州へ御渡海之節、爲ニ御馳走一十月十五日より牛窓へ罷出、同二十二日、罷戻申候。同年長谷川四郎兵衛殿豐後へ御下之節、爲ニ御馳走一十二月十四日より牛窓へ罷出、同二十日、罷戻申候　同年、丹羽半右衛門殿・堀三右衛門殿豐後より御登之節、爲ニ御馳走一十二月十八日より牛窓へ罷出、翌正月六日、罷戻候。同十

九年、向井右衞門殿・小笠原安藝殿、浦邊御巡見被レ成候に付、四月八日より牛窓へ罷出、五月七日、罷戻申候。同年少將樣御歸國御迎に六月九日、岡山出船、伏見迄罷登、同二十三日、御供仕罷戻申候。同年、少將樣御參勤、極月十二日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同二十三日、罷戻申候。同二十年、朝鮮人來朝に付、五月六日より、備後國鞆へ罷出、播州室津迄送り、八月二十七日、罷戻申候。正保元年、馬場三郎右衞門殿長崎へ御下りに付、爲二御馳走一三月二十一日、牛窓へ罷出、四月、罷戻申候。同年、少將樣御歸國爲二御迎一、六月六日、岡山出船、伏見迄罷登、同二十一日、御供仕罷戻申候。同年、榊原香庵樣備前へ御越被レ成候に付、九月二十八日、岡山出船、大阪へ罷登、十月七日、御供仕罷戻候。正保二年、少將樣御參勤、二月十九日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同二十八日、罷戻候。同三年因州へ御目付蒔田數馬殿・加藤平內殿備前へ御出、御船にて大阪へ御登被レ成候節、當川口迄御川御座候て御供仕り、二月晦日、仕廻申候 同年、少將樣・戶川土佐守殿御同船にて鹿喰島御狩之遊、直に下津井・天城迄御廻被レ成候に付、十月四日より御供仕參、同十四日、罷戻候。同四年、少將樣御參勤、三月十二日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十八日罷戻申候。同年、井上筑後殿長崎より御登に付、爲二御馳走一五月二十六日より下津井へ罷出、十月三日、罷戻申候。同年十二月二日、因州鳥取より御船板代銀之義に付、御使に罷越、同十日、罷戻候。此節白銀二枚拜領仕候。同年中川內膳樣長崎へ御下之節、爲二御馳走一十二月十三日より牛窓へ罷出、同二十日、罷戻申候。慶安元年、井上筑後守殿長崎へ御下之節、爲二御馳走一三月四日より牛窓へ罷出、同十日、罷戻申候。同年、少將樣御歸國爲二御迎一六月三日、岡山出船、伏見迄罷登、同十一日、御供仕罷戻申候。同年、井上筑後殿長崎より御登之節、十月二十七日より少將樣牛窓へ御出被レ成候に付、大網船召連御供に參、十一月九日、罷戻り申候。慶安二年二月十五日、御加增七石拜領仕候。同年、御荷船出來に付、小串村前にて人馬乘せ荷ためし之積仕見申樣に被二仰付一七月十九日罷越、同二十三日仕廻申候。同三年、肥後國熊本へ上使朽木民部殿・兼松五左衞門どの・蒔田數馬殿・能勢小十郎殿、御下之節、爲二御馳走一六月十一日、牛窓へ大網船召連罷出、同二十一日、罷戻申候。同年、少將樣御歸國爲二御迎一七月廿五日、岡山出船、伏見迄罷登、八月十二日、御供仕罷戻申候。承應元年、少將樣御歸國爲二御迎一五月十二日、岡山出船、

伏見迄罷登り、同二十三日、御供仕罷戻申候。同三年、少將樣御參勤、三月六日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十一日、罷戻申候。明暦元年、中川山城守樣御下に付、少將樣、二月五日より牛窓に被レ成二御座一御供仕、同二十八日、罷戻申候。同年、少將樣御參勤、四月十二日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十八日、罷戻申候。同年、朝鮮人來朝、七月五日より備後國鞆津迄罷出、播州室津迄、八月二十七日、罷戻申候。同歸帆之節は、十一月二十八日より播州室津迄罷出、備後鞆迄送り、十二月二十日、罷戻申候。同三年、中川山城守樣御通に付、少將樣六月二十七日より牛窓へ御出、御供に參、同晦日、罷戻申候。同年、侍從樣初而御入國被レ成候に付、爲二御迎一、十月十五日、岡山出船、伏見迄罷登、同二十六日、御供仕罷戻り申候。同年、榊原釆女樣、播州姫路へ被レ成二御座一候に付、十一月十六日、岡山御出船、御供に參、同二十三日、罷戻申候。萬治元年、少將樣御歸國爲二御迎一、九月十一日、岡山出船、伏見迄罷登、同十九日、御供仕罷戻申候。同二年、侍從樣御歸國爲二御迎一、五月十四日、岡山出船、伏見迄罷登、同二十七日、御供罷戻申候。此節御帷子一被レ下候。同三年、少將樣御歸國爲二御迎一、五月二十三日、岡山出船、伏見迄罷登、六月六日、御供仕罷戻申候。同年、白鷗丸出來、少將樣十二月十七日、高島前にて御召初被レ成候に付、御供に出申候。寛文元年、少將樣・榊原香庵樣御同船にて、日比表へ鯛網御見物に御出被レ遊候、此節御船備御覽被レ成候に付、四月十六日より御供に參、同十九日、罷戻申候。同年、少將樣御參勤、閏八月八日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十七日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲二御迎一、十月八日、岡山出船、伏見迄罷登、同十六日、御供仕罷戻申候。同二年三月四日、八幡丸出來、侍從樣高嶋にて御召初被レ遊、御供罷出申候節、御小袖一ツ拜領仕候。同年、少將樣御歸國爲二御迎一、六月九日、岡山出船、伏見迄罷登、同十八日、御供仕罷戻申候。同三年、少將樣御參勤、三月十一日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十九日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲二御迎一、八月二十四日、岡山出船、伏見迄罷登候時、御歸國相延、九月十九日、罷戻申候。同五年、少將樣御參勤、三月十六日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同二十二日、罷戻申候。同年九月九日、六十九歲にて病死仕候。

二三、寺見三右衛門。　役小生、大船頭水野三郎兵衛組、七十八俵三人扶持、六十二歲。

萬治二年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、五月十四日、父三右衞門一所に罷登り、同二十七日、御供仕罷戻申候。此節金子百疋拜領仕候。寛文二年三月四日、八幡丸出來、侍從樣高嶋前にて御召初被レ遊候御供罷出、御羽織一ツ拜領仕候。同五年十月二十六日、父三右衞門跡目二十五石三人扶持御役義共被ニ仰付ニ、御加增之義は無ニ懈怠ニ相勤申候に付、無ニ相違ニ被レ下候旨被ニ仰渡ニ候。寛永十四年、少將樣御參勤被レ成候に付、閏三月五日、御出船、此節父に加り御供仕り、其後寛文五年迄、父に相添、度々御用相勤候。同七年、少將樣御參勤、三月十六日、岡山出船、伏見迄御供仕、同二十三日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、五月十六日、岡山出船、伏見迄罷登、六月二日、御供仕罷戻申候。同年、御房樣江戸へ御下向、十一月十一日、岡山を御出船、伏見迄御供仕、同二十一日、罷戻申候。此節金子二百疋拜領仕候。同九年、少將樣御參勤、四月五日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十二日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、八月十八日、岡山出船、伏見迄罷登、九月五日、御供仕罷戻申候。同十一年、少將樣御參勤、三月十五日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同二十一日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、五月二十八日、出船、伏見迄罷登、六月七日、御供罷戻申候。同十二年、福照院樣御卒去に付、少將樣御歸國爲ニ御迎ニ、十一月十一日、岡山出船、伏見迄罷登、御供仕罷下候處、天氣悪敷、兵庫より陸地御歸國被レ遊候、御船は同二十四日罷戻申候。延寶元年、少將樣御參勤、二月二十八日、岡山御出船被レ成候處、天氣悪敷、兵庫より陸地被レ成ニ御座ニ候御船は三月四日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、六月十二日、岡山出船、伏見迄罷登、同二十四日、御供仕罷戻申候。同年七月、新御船入被ニ仰付ニ、諸事見分仕候樣にと之義に付、折々罷出、翌年七月、相勤申候。同二年十二月二十九日、御中小姓に被ニ仰付ニ候。同三年、丹羽守樣御參勤、七月二十二日、御出船、伏見迄御供仕、同二十七日、罷戻申候。同四年九月十五日、御船奉行一人宛、陸御陣之節、可レ被ニ召連ニ旨被ニ仰出ニに付、私共にも馬一疋・中間・鑓持以上四人、同一人有人に可レ被レ下由、則刺物は一布半之暖簾に銘々紋付可レ申と、丹羽治郎左衞門申渡候。同七年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、五月八日、出船、伏見迄罷登、同十九日、御供仕罷戻申候。天和元年、丹羽守樣御參勤、五月十一日、岡山御出船、伏見迄御供仕、同十八日、罷戻申候。同年、侍從樣御歸國爲ニ御迎ニ、六月八日、岡山出船、伏見迄罷登、同十六日御供仕罷戻申候。同年、御巡見高木忠右衞門殿・服部久右衞門殿・佐橋甚兵衞殿御廻りに付、御船御馳走、天城・日比・直嶋・牛窓迄御渡海之節罷出、九月十日より同十四日仕廻申候。同二年、侍從樣御參勤、三月

一三

九日、岡山御出船、伏見迄御供仕、四月六日、罷戻申候。同年、朝鮮人來朝、七月六日、出船、備後鞆迄罷出、播州室津迄送、二十四日、罷戻申候。同歸帆之節、十月三日、出船、牛窓へ罷出、備後鞆迄送、同十日、罷戻申候。同三年十二月二日、侍從樣於當川口三諸丸御召初被レ遊、此節金一兩拜領仕候。扨、三諸丸と八幡丸と行足見分仕候樣にと被二仰付一、沖合に乘出し、同五日罷戻申候。貞享元年三月二十四日、私共刺物五節之惠つる一節に假名を付申樣にと、山田權左衛門・梶浦勘介申渡候。同年、侍從樣御參勤、三月二十九日、岡山御出船、伏見迄御供仕、四月五日、罷戻申候。同二年、御吉樣七月十一日高嶋へ被レ成二御座一候に付、御供罷出申候。同二年、御撰使小島傳三郎殿、岡山より御戻りに付、正月二十三日、御出船、大阪迄參、同二十九日、罷戻申候。同年、丹羽守樣御參勤、三月十九日、岡山御出船、伏見迄御供に參、同二十九日、罷戻申候。

二四、土肥孫左衛門。信長公に罷有、心馳に御座候由。

二五、土肥周防。生國、尾張之由。

信長公に罷在、其節は助次郎と申候。御知行、元龜元年五十貫文、天正十年八十五貫文、都合百三十五貫文、兩度之御折紙二枚所持仕候。眞奏仕候處、御念比之上意にて、御知行被レ下候由、前廉直廉仕候者御成敗被レ成候以後にて難レ申處能申たるとの由。元龜元年六月、信長公近江淺井郡へ御發、淺井備前守長政御追伐之節、佐々内藏助敵一人突伏、助次郎に其首取候へと申候處、何ぞ人之首奪可レ申哉と申候而、猶進先陣高名仕候由。攝津國大阪、發誓上人籠城之節、同年九月十四日、城中より森口邊へ敵出申候故、御旗本より助次郎杯罷出、早く川を越高名仕候よし、首數々取り來り候其内にて御座候由。天正元年八月信長公越前御發向、江越之界刀根山と申大山、朝倉義景高計(マヽ)にて陣取、山下に信長公御先手衆對陣、一夕信長公從二城構一御覽被レ成、敵兵退、先手油斷仕義と軍使及二度々一、諸將畏候とは乍レ申、殿は何事を仰候ぞ、大軍と言、言戰(マヽ)と言、殊に山陣也可レ退樣(マヽ)も無と申由、夜に入、而も信長公猶城構に其儘御座候而、不レ放二御目一被レ爲二御覽一候、助次郎御本陣に罷在、丑之刻詰番を替り、自分小屋へ罷歸候道にて一番貝を承、小屋へ不レ歸、佐々内藏助殿有て入魂仕候故、直に其小屋へ入、飯を喫候内、二番貝を承出候へば、早御出被レ成、漸追付奉り候へば、先手之大ぬる山(信長公油斷する事を、大ぬる山と被レ仰候由。)共は油斷

仕候に、旗本之者共へ名高させると被レ仰馳給ふ、如レ案、先手はいまだ臥居申候、御旗本先に成り、大勢御打取被レ成候由。

右刀根山にて之義、内々承及候、其上少将様へ祖父飛彈申上候由。少将様・丹羽守様へ御咄被レ遊候由、丹羽守様私へ被二仰聞一候。此時助次郎も高名仕候、二番首にて御座候由。

信長公御役後、在所尾張に罷在候へば、従二勝入様一何とて左様に仕居申候哉、何方成とも可レ被二仰遣一候條、先罷上候様にと御念比之御意に付、天正十年、大阪へ罷越候處、則御留被レ成、翌十一年より御奉公仕候由。身躰年月不存レ候。天正十二年四月九日、於二長久手一勝入様御討死之節、丹羽勘助弟高助と鑓を合、打取申由、其節は周防義七右衛門と申候由。播磨宰相様天正十八年十月十八日千七百石、慶長六年十一月二日、都合三千五百石、両度之御折紙二枚所持仕候。武蔵様より慶長九年十一月十一日四千八百石、同十年二月八日、二百石御加増。慶長十八年十一月七日、五千石御折紙、以上三枚所持仕候。慶長十九年冬、大阪陣之節、姫路御城代仕候。十二月十二日、權現様御陣廻之節、武蔵守様御陣所にて土肥助次郎はと御尋被レ遊候、池田攝津守に罷出、姫路之城預置候由御請被二申上一候旨、湯淺民部承届申聞候、民部咄承者于今罷在候。翌十三日、武蔵守様より周防方へ、昨日大御所様其方事御尋被レ成候、姫路に御置被レ成候由被二仰上一候旨、御直書被二成下一于今所持仕候。同二十二日、武蔵守様より周防方へ、其方事御所様御尋被レ為レ成候間、為二御目見一可二罷上一之旨、御書被二成下一候、于今所持仕候。右之品に付、同年十二月下旬、京都へ罷登り、両御所様へ御目見仕候由。元和元年、大阪夏御陣之節も姫路御城代仕候。其節、武蔵守様御兵粮御不足に付、米五百俵差上申候、御満足被レ遊候由、御懇之御直書被二成下一候、于今所持仕候。元和二年、少将様播州より因州へ御國替之節、姫路に殘り、本多美濃守様へ御城渡し、其節台德院様就二御上洛一、世倅助次郎召連上京仕、台德院様へ父子共御目見仕候。月日失念仕候於二因州一元和四年十一月二十六日、五千石御折紙頂戴仕候。其砌、名を改飛彈と申候。武蔵守様備前に被レ成二御座一候節より御仕置役被二仰付一。其他品々御用相勤、拝領仕候ものも、數多御座候由に候へども、不レ存申候。寛永四年、少将様江戸御供に參、同六年迄相詰同年之春因幡へ罷歸候道中より煩出、三月二十三日、行年七十七歳於二京都一病死仕候。

二六、養子 土肥左吉。

生國、肥後熊本にて候。慶長十六年、左吉九歳之時、周防養子に仕、追付武蔵守様へ御目見仕候刻、於御前助次郎に仕候由。周防妻は、左吉實父高木右近妹に而御座候

武藏守様播州に被レ成ニ御座一候節、御側に相詰申候。御煩被レ成、江戸より御上被レ成候節、京都へ罷登候、元和二年六月十三日、御卒去被レ成候已後、播磨へ罷下候。飛彈儀、寛永六年病死仕候以後、跡式之儀、私父左吉と舎弟玄蕃と申分御座候に付、被ニ仰出一無ニ御座一、翌七年、伯耆國御國廻以後、追々御[illegible]可レ被レ遊候條、其上にて可レ被ニ仰付一之旨、御意御座候、然る處、日置豊前又援申候へど、母同心不レ仕候、其後池田攝津守御内意爲被レ申候處、同心仕候へば、御満足被ニ思召一候由御意候、御爲に候間、是非同心仕候様にと被レ申候に付、御爲と御座候上は、下レ及ニ異議一同心仕候。玄蕃世倅三九郎八百石分遣申候而事濟、跡式四千二百石被ニ仰付一。三九郎義私内に被ニ仰付一被レ下候様に申上、御禮少滯申候處、兎も角も御意次第仕罷出候様にと御意に付、同年十月十四日、織目の御禮申上候。玄蕃義御意違背仕江戸へ罷越、御理申上候段不屆被ニ思召一之旨被ニ仰出一、玄蕃・三九郎、並森十左衛門御改易被ニ仰付一候。右之御知行八百石御預り被レ成候由に而被ニ召上一候。武藏守様・少將様より、左吉實母に御扶持方被ニ下置一候員數年月失念仕候。養父飛彈病死、左吉跡目被ニ仰付一候以後、差上申候。寛永九年、從ニ因州一御國替之節、八月始、岡崎御城請取、伊木長門・池田伊賀並左吉相加り罷越候、日限失念仕候。同年之秋、御年寄衆へ所付被レ下候、左吉義も御年寄衆並御野郡大安寺村所付被レ下候。惣士中へは、翌年正月朔日、御折紙被レ下候。同年八月、上使稻葉丹後守殿九州へ御通に付、光若原監物・左吉兩人、牛窓へ御馳走に罷出候、日限不レ存候。同年九月、作州森中將殿へ御使者罷越候、日限不レ存候。中將殿より、無銘小脇指被レ下候。右は從ニ因州一御當地へ御國替に付、中將殿より森采女御使者に罷越候、右之御返禮にて御座候。同年霜月、上使板倉内膳正殿・仙石大和守殿・小林十郎右衛門殿、肥後國へ御通に付、牛窓へ少將様にも御出被レ遊候、丹羽兵部左吉に御馳走被ニ仰付一罷出候、日限不レ存候。同十一年二月、本多上野守様奥様御誕生、同十五年正月、侍從様御出生之節、從ニ大御前様一黄金一枚宛兩度拜領仕候。日限不レ存候。同年八月、大猷院様御上洛被レ遊、還御之御悦使者に江戸へ罷下、同十月、罷歸り、同十二年、私水野吉右衛門御預被レ成候。九月二十五日、切腹被ニ仰付一候。同年霜月、江戸小石川見付御普請に付、罷下、同十三年、御普請相勤申候。於ニ彼地一、池田出羽・伊木長門兩人並に左吉にも、御走中へ罷出候様にと少將様御意に付、御走中へ三人罷出候、御町場へ大猷院様御成、矢倉台之上へ渡御、右三人被ニ召出一、御直に難レ有上意にて御紋御羽織於ニ御前一拜領仕候。御普請相濟申以後、卯月十六日、登城仕、御暇被レ下候節、時服御羽織・白銀五十枚拜領仕候。同五月、罷歸候。同十三年、朝鮮人來朝に付、御馳走牛窓へ罷出候。同十四年極月、上使松平伊豆守殿島原へ陸地御通被レ成義も可レ有

レ之かと之義に付、御馳走御用意申付、片上へ罷出候、然共舟路御通被レ成候。同十五年、出雲御勘定方之衆三人御通に付、片上へ御馳走罷出候、然ども、首尾遣御馳走には無二御座一候、（御名月日不レ存レ申候）同十六年六月三日、岡山罷立、和州郡山本多内記様へ御入部御悦之御使者に参、七月十六日、罷歸候。同十七年、石見守様御家來松屋五郎右衛門御預被レ成、（八月五日、切腹仕候。）同十八年十月十四日、片上へ罷出候、井上筑後守殿、從二長崎一御戻被レ成候御馳走被二仰付一候、御泊前俄に八木山へ替り、彼地へ罷越、御馳走仕候。同十九年九月、和氣郡・磐梨郡・赤坂郡へ御用被二仰付一、先若原監物・左吉罷出申候。（右は、薄田右馬助御改易被二仰付一、其跡改に出候。）同霜月、右三郡へ左吉一人、右之御用罷出申候。（同二十年、江戸平川口御普請に付、相組並自分役人罷下に付、少知遣置申候家來青山八右衛門と申者差下申候。）同年、朝鮮人來朝に付、上官五三三之御馳走被二仰付一、六月、牛窓に罷出候。同歸帆、九月朔日、牛窓へ罷出、同十四日、罷歸候。正保三年三月、江戸御留守御番罷下、翌四年四月二十六日、罷歸候。慶安四年朽木民部殿・能勢小十郎殿・兼松彌五左衛門殿九州へ御下之節、下津井へ御馳走、池田數馬・左吉兩人、六月十二日罷出、同二十一日、罷歸候。承應三年、後光明院様就二崩御一、江戸へ御使者に九月罷下、十月二十九日、罷歸候。於二彼地一侍從様御召之羽織拜領仕候。明曆元年、朝鮮人來朝に付、上々官上五三並宗對馬守殿御馳走被二仰付一、七月十六日、牛窓に罷出、八月晦日、罷歸候。寛文三年、江戸御供被二仰付一、三月朔日、罷立、翌四年閏五月九日、御供仕罷歸候同六年九月十七日、權現様御祭禮鎧にて供奉仕候。同七年二月、御家中御軍用人馬改被二仰付一相勤申候。同九月二十二日、御帳仕立差上申候、並御家中京銀作廻兩三度相勤申候。同年八月晦日、浦邊御巡見上使高林又兵衛殿・向井八郎兵衛殿御當地御出船にて、從二侍從様一爲二御使者一播州赤穗境迄、右同日罷越、九月二日之夜罷歸候。（同八年江戸淺草御堀御普請之節、相組並自分役人罷下に付、少知遣置候家來石丸五郎右衛門と申者差下申候。）同十年二月二十六日、江戸御留守番罷越、於二彼地一左吉乘物之義從二侍從様一御日附牛込農左衛門殿へ被二仰遣一御赦免被レ成候。翌十一年四月朔日、罷歸候。少將様御成之節、御時服御鷹之鳥、其外、御在國之節、御鐵炮之鴈・御狩之鹿。御川狩之鯉、度々拜領仕候。（年月失念仕候）侍從様御在國之節、毎度御鐵炮之鴈、其外靏之内之者御狩之鹿、度々拜領仕候。（年月失念仕候。）延寶四年二月十五日、隱居被二仰付一候。（當年八十四歳に成申候。）

實祖父高木左吉、生國、尾張之由。信玄公へ仕、其後丹羽五郎左衛門殿に罷在候由。世伜高木右近、蒲生氏郷に居申候に付、左

吉義も呼申樣にと氏鄕被仰、奧州會津へ罷越由。場數御座候に付、武者奉行仕候樣に承及候。

父高木左近、初號助六、生國尾張にて御座候。織田常眞に罷在候、年月身體不レ存候。其後、蒲生氏鄕罷出、知行三千石給知仕候組與力も御座候樣に承傳候、年月其外委義存不レ申候。奧州九郡修理亮謀叛城攻、同國にゆくに城攻之節、心緒仕候由。氏鄕家來亘理八右衛門、氏鄕若年之時分より守役仕、出頭にて罷在候、然る處、八右衛門義不屆之義有レ之候由にて、氏鄕家老蒲生四郎兵衛、八右衛門を成敗仕候、其節四郎兵衛、高木右近を頼申候、右近申候は、八右衛門義外之者とは違ひ申候由、異見仕候得共、既に秀吉公達ニ御耳一、事極たる義之由申に付、然る上は相心得候由、契約仕候。會津城中奧之通り申□二□(マヽ)御座候、一方に右近罷在、八右衛門通候はゞ打すて候、一人今一事に四郎兵衛居可レ申由申合せ、四郎兵衛居申□(マヽ)へ八右衛門參り候に付、四郎兵衛打留め申候、氏鄕右之段立腹、四郎兵衛・右近兩人義御成敗被ニ成下一候へと、秀吉公へ御訴訟被ニ申上一候へ共、兼而秀吉公へ四郎兵衛寬候內意申義に候へば、不レ被ニ仰付一、其節、高麗陣之砌にて御座候に付、高麗へ可レ被レ遣候、加藤肥後守殿備へ參り候樣にと被ニ仰付一、渡海仕候、高麗蔚山にて清正船小屋を放燒立申節、正林隼人・森本義大夫並高木右近三人能働申候。慶長五年、肥後國にて小西攝津守行長居城宇(戶)大城を加藤清正被レ攻候時、清正御息加藤百助鼠田口へ被レ向候節、芦野九大夫・高木右近杯、進ニ先登一稱を破乘込申由、伊丹重助祖父伊丹半右衛門、其節百助備に罷在候由承及申候。右近、高麗より歸朝仕、直に清正に罷在は身體之樣子存不レ申、其後清正へ暇を乞申候所、清正被レ申には、秀吉公より被レ下候者之義にて候間、暇遣候事不レ成との義に御座候、右近重而申は、高麗へ罷越、肥後守備へ可レ參由秀吉公被ニ仰付一候、肥後守殿へ被レ下との譯にては無ニ御座一候由再三申、熊本を立退申候、清正强く椿候故、京都に蟄居仕候、年月不レ存候。右近京都に罷在候節、從ニ武藏守樣ニ御合力米拜領仕候由、員數年月存不レ申候。御當地へ一兩度罷下候由。慶長十六年二月六日、右近五十五歲、於ニ京都一病死仕候。左吉九歲之時にて御座候故、委敷義不レ存候。

二七、土肥飛彈。　番頭、四千二百石、四十四歲。

正保四年正月二日、少將樣に六歲にて初而御目見仕候節、於ニ御小書院一御盃・御肴頂戴、御前にて、康光の御小脇指拜領仕候。明曆三年十月、侍從樣御入國之節、御家中一等に御目見仕候。萬治二年、江戶證人被レ下候に付、從ニ少將樣一御米三百俵拜領仕候。同年四月十六日、岡山罷立申、於ニ彼地一登(城)場仕、參勤之御禮、以ニ御太刀目錄一御老中迄

中上候。翌三年正月三日、年始御禮致ニ登城一、公方樣へ御太刀目錄差上、御目見仕、同三年、御暇被レ下候節、御小袖一重御拜料可レ被レ下旨、御老中被ニ仰渡一、頂戴仕候、四月罷歸候。寛文二年二月十六日、岡山出船、江戸證人に罷下候。右同斷。翌三月二十八日、江戸罷立、四月十五日、歸着仕候。同六年九月十七日、權現樣御祭禮、父左吉鑓にて供奉仕候、私義も罷出候。禁裡御造營に付、火消役被ニ仰付一候。延寶二年十二月十三日、御城にて御料理被レ下、於ニ御前一御盃・御肴頂戴、退出已後、御鐵炮之鷹拜領仕候。翌十四日、出船、同十八日、京着仕候。同三年十一月二十五日、火事之節精を出候由、同二十六日、於ニ御小屋一、御直に御懇之御意御座候。同十二月三日、御暇被レ下、翌四日出京仕候。同九日、歸着仕候。同四年二月十九日、父左吉隱居、私に家督無ニ相違一、四千二百石被ニ仰付一、同二十一日、御禮申上、御折紙頂戴仕、寄合に被ニ仰付一候。同二十一日之朝、京都より罷歸り候者共、並私義も於ニ御城一御料理被レ下、御前へ被ニ召出一、御召之御小袖一ツ拜領仕候。同年五月朔日、御番頭被ニ仰付一組二十人、並足輕三十人、父左吉通り無ニ相違一被ニ仰付一、同五日、御禮申上候節、相組之御書付、御自筆にて被レ遊、御直に被レ下候。同年、御家中拜借之京銀作廻被ニ仰付一、十一月十日、池田藤右衛門より御帳請取、同暮取立相濟、翌五年八月二十八日、若原監物へ御帳相渡申候。同六年、江戸御供被ニ仰付一、二月晦日、御先へ罷下、三月十八日、江戸より參着仕候。於ニ彼地一御客會人被ニ仰付一候。同年、御前樣御賄頭谷田五郎右衛門、同人手代世賀久助と新論之義有レ之に付、右兩人、並御台所横目清水平大夫・山田藤助御預被レ成、八月二十七日夜、右四人召連一鴫子御屋敷へ罷越申、御穿鑿落着被ニ仰付一、十月五日、御上屋敷へ罷歸候。同十月十三日、圓盛院樣御遺骸之御供仕江戸罷立、同晦日、和意谷へ罷越、十一月三日、御神主之御供仕、御當地へ着仕候。同十日、御當地罷出、同二十六日、江戸へ下着仕候。圓盛院樣御寵に有レ之由にて瀧波與兵衛奉ける御小袖之表五端拜領仕候。同七年三月十八日、江戸罷立、四月九日、罷歸候。同九年、伊木勘解由下人御穿鑿之儀有レ之候に付、五月二十三日より私手前へ一人御預被レ成候旨、日置左門申渡候、同六月二日より勘解由下人又一人御預被レ成候。同八月二十一日、落着被ニ仰付一、右兩人共勘解由方へ相渡申候。天和元年、松平樣御緣組、松平三河守樣へ被ニ仰付一候に付、爲ニ御使一五月六日、岡山罷出、同十五日、江戸へ參着、六月十九日、彼地罷立、七月二日、罷歸候。同三日、登城仕、御

口上申上候。同年九月十七日、權現樣御祭禮供奉仕候。天和二年、朝鮮人來朝に付、上々官七五三、並上判事醫師學士五三三御馳走被二仰付一、七月三日、牛窓へ罷越申候、官船二十一日夜着岸仕、翌二十二日出船に付、同二十四日、岡山へ罷歸候。同十月、朝鮮人歸帆に付、四日、牛窓へ罷出、同八日、官船罷通候、拵置申候御菓子、私小早に積、河合源五兵衞官船へ持參、通詞へ渡罷歸候、同九日、岡山へ罷歸候。同三年十二月十七日、伊木兵庫・私火消被二仰付一候。貞享元年、御目付戸田又兵衞殿・小田切喜兵衞殿長崎へ御渡海に付、爲二御使者一、伊木兵庫・私二月十四日、牛窓へ罷出、同二十一日、御目付衆御通に付、前島東の鼻迄出向、戸田又兵衞殿・私罷出、干鯛一籠・手樽一ツ・御茶兩種差出、御口上申達而、三種直に御受納。但、御茶は納り東東は戻申候。同二十一日、岡山へ罷歸候。右兩人長崎より御歸帆に付、同年七月七日之夜、下津井へ罷出、同十八日御通に付、上田又兵衞殿・私罷出申候御音信物右同斷。同夜牛窓御船懸に付、同所へ罷越、翌十九日朝、御出船之刻、御菓子三重指置、御船へ持參仕候。是又御受納候。同晩岡山へ罷歸候、侍從樣より御在國之節、每度鐵炮之鴈、並御狩之鹿、御山鷹野雉子、度々拜領仕候。年月失念仕候。

二八、富田猪兵衞。生國、濃州地出之由、承仕申候。

於二尾州犬山一、勝入樣被二召出一、御知行三百石拜領仕由。猪兵衞嫡子彌左衞門義、播磨宰相樣へ被二召出一、新知二百石拜領仕候。依レ之彌左衞門與領庄兵衞を猪兵衞子に仕候間、老後隱居被二仰付一候節、入道仕明心に罷成、庄兵衞を猪兵衞に被レ成、家督無二相違一三百石被二仰付一候。明心義、元和七年十二月二十九日、病死仕候。

二九、富田久兵衞。明心二男。

於二播州一、播磨宰相樣へ中小性被二仰出一、年月・御切米・御扶持高、不レ存候。慶長九年十月十八日、新知百五十石拜領仕候。武藏守樣御出陣大阪兩度之御供仕候。落城之節、太刀打に敵一人打取申候。大阪御米拂御用兩度相勤申候。御宅見・御檢地之御用、每度被二仰付一、年月不レ存候。備前城三之丸御普請御用被二仰付一、相務申候。少將樣御意には、御内證之義御普代之筋目御心易無相司被二仰付一旨被二仰渡一候由、年月は覺不レ申候。從二少將樣一度々御用相勤申、爲二御褒美一御米三十代拜領仕候。年月覺不レ申候。承應二年二月二十日、久兵衞隱居被二仰付一、入道仕、一閑に罷成、家督私に被二仰付一無二相

遣㆒百五十石被㆑下候、三月朔日、御禮申上候。

三〇、富田久兵衞。　山崎大膳組、鐵炮引廻、百五十石、五十七歳。

父懸りにて少將様へ御目見申上候、年月は覺不㆑申候。明暦元年、江戸御供被㆓仰付㆒、同年三月朔日罷立、同十九日參着仕候。翌朝侍從様へ初而御目見仕、翌年四月、罷歸候。萬治元年、在郷簡略申上、願之通被㆓仰付㆒、同年極月、在宅へ引込申候、養父一閑義、大老之在宅御不便に被㆓思召㆒、依㆑之一閑畠三畝歴々可㆑仕旨忝御意にて拜領仕候。簡略明にて寛文四年正月、岡山へ罷出、翌年六月七日、一閑病死仕候。寛文八年九月十七日、權現様御祭禮供奉、池田美作に被㆓仰付㆒候節、美作組にて相務申候。同九年、江戸御供被㆓仰付㆒、三月、岡山罷立、於㆓彼地㆒御勘定上聞、御用被㆓仰付㆒相勤、翌年四月、罷歸候。同十二年六月、大阪御米拂御用被㆓仰付㆒、九月十六日岡山罷立、其節保科肥後守殿御遠行に付、女院様へ御悔使者從㆓江戸㆒被㆓仰付㆒、大阪より上京仕、相務申候、月日覺不㆑申候。延寶元年、今西半内湯治仕候に付、逗留中、半内役義被㆓仰付㆒相勤申候。六月、侍從様御歸國之節、大阪より堺御奉行水野伊豫守殿へ御使者被㆓仰付㆒相勤、則御返事、川口御船にて申上候、御用相務申十月罷歸候。十一月十九日、池田美作組之御鐵炮引廻役被㆓仰付㆒候。同二年極月、禁裡御普請御用被㆓仰付㆒、翌年正月二十一日罷立、上京仕、繪方御用相務、翌年二月十日罷歸候。同六年十月、大御前様御卒去被㆑成候に付、使者留御用被㆓仰付㆒候而、御野郡西長瀬村へ十月二十二日罷出、十一月三日罷歸候。同七年六月二十三日、山崎大膳組へ被㆓仰付㆒候。同八年、江戸御供被㆓仰付㆒、三月、岡山罷立、御參府被㆑遊候而、御取次御用相務申候。於㆓江戸㆒信濃守様へ新院使御馳走被㆓仰付㆒候節、御雇にて翌天和元年正月二十日より二月四日迄、傳奏御屋敷勤番仕候。依㆑之、信濃守様より三百疋拜領仕候。同年、御代替御祝義之御能首尾能く相濟候以後、爲㆓御祝義㆒白銀二枚拜領仕候、四月罷歸候。貞享元年四月十七日、權現様御祭禮供奉、山崎大膳被㆓仰付㆒候節、大膳組にて相務め申候。

三一、子甚六。　少將様・侍從様へ、初而御目見申上、年月覺不㆑申候。

三二、富田伊兵衞。　濃州地士之由。

於二大山一勝入様へ被二召出一御知行三百石拜領仕候。従二播磨宰相様一年罷寄に付隱居被二仰付一、名を明心と改、倅彌左衛門に被二下置一候御知行二百石、明心拜領仕、彌左衛門倅庄兵衛を明心養置、二百石之御知行庄兵衛に被レ下候

三三、富田彌左衛門。（初之名惣六と申候。）

關ケ原御陣御供仕、十八歳、新加納山遠之衛、手に打申候由、御歸陣之已後、慶長六年十一月三日、二百石被レ下候。其後、高祖父猪兵衛家督無二相違一被二仰付一、其後、彌左衛門と倅庄兵衛御知行奉願、其替に被二仰付一候由。委細之義不レ奉レ存候。（庄兵衛後々名を猪兵衛と改申候。）慶長十九年。元和元年大阪両御陣、武蔵守様御供仕候　元和八年、大阪御普請に罷越相勤申候　寛永八年七月、松平對馬守様武蔵守様之奥様へ御附被レ成、在江戸にて御奉公相勤申候。明暦二年七月六日、病死仕候。（存生之内より同氏富田猪兵衛二男又兵衛を養子に奉レ願、）彌左衛門跡知無二相違一二百石又兵衛に被二仰付一、同年九月九日、繼目之御禮申上候。

三四、富田猪兵衛。（生國、濃州。）

大夏御陣之節、父彌左衛門一所に武蔵守様御供仕（十六歳之時、追首にて御座候得共、手に打申候由。）寛永十九年、江戸平川に御普請之節、八田求馬組にて罷下相勤候、松平對馬守様へ御使者被二仰付一、土佐迄参候。（年月不レ存候。）慶長四年八月二十日、病死仕候。

三五、富田猪兵衛。（生國、備前。）

領知二百石無二相違一被二仰付一候。明暦二年、江戸御供被二仰付一、罷越相勤、翌年罷歸申候。寛文元年四月十七日、權現様御祭禮、流鏑馬相勤申候。同八年九月十七日、權現様御祭禮、池田美作組甲冑にて御供仕候。同十二年春、上道郡御毛見被二仰付一候。延寶二年、備中窪屋郡御毛見被二仰付一候、（月日覺不レ申。）同三年、江戸御留守御番被二仰付一、罷越、翌年罷歸候。（月日覺不レ申候。）天和元年七月二十四日、病死仕候。

三六、富田庄兵衛。（丹羽平大夫組、三百石、十九歳。生國、備前。）

延寶三年、侍從様へ御目見仕候、（月日覺不レ申候。）天和元年、富田猪兵衛跡目無二相違一、三百石被二仰付一候。十月朔日、繼目之

御禮申上候。

三七、富田猪兵衞。 富田彌左衞門。 上に同し。

富田又兵衞・同名伊兵衞、二男彌左衞門養子奉レ願候處、祖父死後に、在江戶にて被レ下候二百石之御知行無ニ相違一被レ下、明曆二年九月九日、繼目之御禮申上候。萬治元年、江戶御供仕、翌年、罷歸候。寬文元年四月十七日、權現樣御祭禮、流鏑馬相勤申候。同三年九月二日、赤坂郡御毛見被ニ仰付一、同二十二日、仕廻申候。同四年極月二日、江戶へ御使者に參、同二十三日、歸申候。松平土佐守樣御卒去被レ成、御悔に同土佐守樣へ參、其節御祭例、池田美作組にて鎧供奉仕候。同十一年六月、學校御用被ニ仰付一、同極月迄相勤申候。延寶七年極月八日、病死仕候。

三八、富田彌左衞門。 上坂外記組、二百石、二十歲。生國、備前。

侍從樣へ延寶二年三月十九日、九歲にて初而御目見仕候。同八年二月二十七日、父又兵衞跡目無ニ相違一二百石被ニ仰付一、三月六日、繼目之御禮申上候。

三九、富田市郎兵衞。 百石、四十六歲。富田一閑二男にて御座候。

寬文六年正月二十三日、侍從樣へ御步行に被ニ召出一、十石三人扶持拜領仕候。同年、江戶御供仕、翌年罷歸候。同七年、江戶御城御普請に付、十月御參勤御供仕候。翌年御供仕罷歸候。同十年、江戶御供、道中上下共船割被ニ仰付一相勤、翌三年、御供仕罷歸候。同十一年十一月御中小生に被ニ仰付一、御加增十五代一人扶持被レ下候。同十二年、江戶御供、道中上下共船割被ニ仰付一相勤、翌年御供罷歸候。延寶元年八月、御弓組に被ニ仰付一、御加增十五代被レ下候。同二年、江戶御供仕宿割御用被ニ仰付一相務、翌年、御歸國之節、道中船割御用相勤申候。天和三年閏五月十日、御的御覽之節、御居間へ被ニ召出置一、御意にて大鳥御的矢五手拜領仕候。同年八月二十六日、於ニ御城一御圖的被ニ仰付一、破魔を射申候、爲ニ御褒美一、於ニ御前一靍之御的矢一手拜領仕候。貞享元年三月十八日、新知百石被レ下候。同年、江戶御供被ニ仰付一、御先へ道中御弓道具御用被ニ仰付一相勤、翌年、御供仕罷歸候。

四〇、益田勘四郎。（生國、三河。）

同國吉田にて播磨宰相樣へ被ニ召出一、本俵二十五代四人扶持被レ下、御馬醫者に被ニ仰付一候由、播州御入國御供仕候ニ御卒去之後、武藏守樣へ御奉公申上候。少將樣因州へ御國替之御供仕、天和九年□（欠字）月十七日、病死仕候。其節、（嫡子東條四郎左衛門他國に罷在候故）二男東條猪右衛門に被レ下、御步行之者被レ成、慶安三年迄二十七八年御奉公申上、江戸御小作事之御用被ニ仰付一、同所にて病死仕候。（倅無御座候故、御扶持切米被取上候。）

四一、東條四郎左衛門。

少將樣へ寬文六年、因幡にて御步行之者被ニ召出一、本俵二十五俵四人扶持被レ下候。同七年九月、伯耆御國廻り被成候節、御供仕候。十月二十日、江戸御供仕、翌年七月より於ニ江戸一御小作事奉行被ニ仰付一、（御在江戸中相勤申候。）同九年三月二十八日、江戸御立被レ遊候御供仕、同年、因幡・鳥取にて麵方御用被ニ仰付一、相勤申候。同年五月二十三日、江戸へ御供に罷下、同七月十日、從ニ江戸一因幡へ御横目永井監物殿・花房勘左衛門殿御越被レ成候節、播州より鳥取迄道筋御案內仕候樣にと被ニ仰付一、御供仕相勤、其より備前へ罷越し申候。寬永十年正月二日、江戸へ御供に罷下、江戸大火事に付、御屋敷燒失之跡、御普請方御用被ニ仰付一相勤申候。同十一年、江戸御立之節、備後守樣へ御屆被レ成、道中御供仕罷歸申候。其節、御羽織一拜領仕候。同年五月末、御上洛之御供に參、同七月二十日、京都御立被レ成候へ共、御跡に御殘し被レ成、御勘定方手傳被ニ仰付一、八月中、京伏見に相勤罷歸候。同年十月下旬に、若狹國酒井讚岐守殿へ御使に罷越、（先方にて金五百疋被レ下候。）同十二年正月十五日、江戸へ御使に罷下、江戸にて御勘定御用被 仰付、翌年七月罷歸候。同十四年、江戸御供に罷下、江戸にて御小作事奉行被ニ仰付一、翌年三月罷歸候。同年八月、伏見御屋敷破損に付、御作事奉行被ニ仰付一罷越、同年暮、罷歸候。同十六年三月、於ニ御花畑一御魂屋御作事之節、塗物・金物・繪方、張付奉行被ニ仰付一、翌年三月仕廻申候。正保四年、江戸へ御供に下り、江戸にて萬古道具之御藏奉行被ニ仰付一相勤、翌年、御供仕罷歸候。慶安二年、江戸御供に下り、翌年、御供仕罷歸候節、道中御銀奉行被ニ仰付一相勤申候。同年十月、御步行橫目被ニ仰付一、御加增本俵五代被レ下候。同四年、江戸へ御供に罷下、大御前樣御台所御賄方見屆被ニ仰

付一相勤申内、侍從樣熱海御湯治被レ遊候御供仕候。承應二年、江戸へ御供に罷下、翌年、御供仕罷歸候。明暦元年、江戸へ御供に罷下り、同年日光御參詣之御供仕、翌年御國へ御供仕申候。同三年正月より御城御賄方被ニ仰付一、寛文元年九月迄相勤申候。萬治二年、御賄方にて江戸へ御供に罷下、翌年御供にて罷歸申候。同三年十二月十七日、中小生に被ニ仰付一、御加增本俵五代被レ下、都合三十五代被レ下候。寛文三年、江戸へ御供に罷下、御賄方相勤、翌年、御供仕罷歸申候。同七年二月、御郡御普請方大役人奉行役被ニ仰付一候。同八年正月二日、江戸御場普請に付、右之儀不レ殘召連れ罷下候之條、江戸大火事に付、御普請無ニ御座一候、同年五月罷歸申候。同九年、一條樣御祝言に付、上京仕、同年罷歸候。同十年、中奥相詰候樣被ニ仰付一候。延寶元年十月二十日、御馬廻に被レ成、芳賀內藏允組に被ニ仰付一候。同二年十二月十八日、禁中御普請に付、御酒奉行被ニ仰付一相勤、翌年十二月二十五日、罷歸候。同八年八月二十九日、七十五歲にて病死仕候。

四二、東條猪兵衛。池田七郎兵衛組、五十俵四人扶持、三十五歲。

寛文三年、少將樣へ初而御目見仕候。同年、侍從樣へ初而御目見仕候　延寶八年九月二十三日、父四郎左衛門跡目五十俵四人扶持、私へ被仰付候。

四三、鳥井九郎兵衛。生國、三河國牛久保にて御座候。善德院樣へ罷在候。御知行百石被下、御斷二十人御預被成候由。働も御座候由。

四四、鳥井九郎兵衛。生國、三河牛久保にて御座候。

善德院樣に罷在、御知行三百石致ニ拜領一御弓二十人御預被レ成候由。善德院樣より御入分之節、隱岐守樣御附被レ成、伏見御城代之時分迄罷在由。働も御座候由。

四五、鳥井淸左衛門。生國、遠州懸川。寛永元年、大猷院樣へ御步行に被ニ召出一、七十代五人扶持被レ下、手數有レ之、二之御丸夜居御番被ニ仰付一、正保二年迄相勤、同年御家へ被ニ召出一候由。

慶安二年、大野主馬子役兒島郡へ罷越候由。承應二年、江戸御留守番に罷越、翌年罷歸候由。明暦元年七月十六日、朝鮮人來朝之節、長老衆御馳走之御用被ニ仰付一、牛窓に罷越候。萬治三年十一月十八日、草賀宇右衛門組之御鐵炮引廻役被ニ仰付一候。寛文十年、江戸御供被ニ仰付一、御先へ參、翌年罷歸申候。同十一年閏六月六日、七十一歲にて病

死仕候。

四六、鳥井彌太之進。 草賀宇右衛門組、二百石、生國、備前。

承應二年九月十五日、少將様へ七歳にて御目見仕候。明暦三年十月、侍從様初而御入國被レ遊、御家中一等初而御目見仕候。寛文三年九月十七日、權現様御祭禮、流鏑馬相勤申候。同十二年、江戸御留守之内七月二十五日、父跡目二百石被二仰付一、翌年六月二十五日、繼目御禮申上候。延寶元年七月十二日、於二學校一子共見屆之役義被二仰付一、同年十二月、御役之者共一等に御赦免被レ成候。同年九月十七日、權現様御祭禮、草賀宇右衛門相役同道、馬上にて供奉仕候。同二年九月十五日、和氣郡御毛見に罷出申候。同年十月八日、逼塞願之通り被二仰付一候處、同四年四月二十八日忝御意にて父拜借銀之殘五貫目餘御捨被レ下、草賀宇右衛門組之御鐵炮引廻役被二仰付一候。同六年、江戸御供被二仰付一、三月朔日、御先へ罷下、御取次役被二仰付一、相勤申候。翌年正月十八日、從二少將様一年頭之御使者として瀧波與兵衛同道にて登城仕、御太刀指上申候。同七年、禁裡御疱瘡御酒湯御祝詞之御使者被二仰付一、三月五日に江戸罷立、同十三日、京着仕候、同十九日、於二長橋一御奏者衆御太刀指上申候。同二十三日、京都罷立、同二十六日、岡山に罷歸候。天和元年八月二十五日、木下肥後守殿御家督以後、初て入郡に付、御祝義之御使者備中足守へ罷越候、時服二被レ下候。同二年、木下肥後守殿より、一條様關白宣下之爲二御祝一使者參候爲二御禮一、使者二月二十五日足守へ罷越候。同年九月二十八日、和氣郡御毛見に罷出候。同三年八月二十四日、同郡御毛見に罷出申候。手前不レ被レ成在宅之義奉レ願、同年九月二十三日、御免被レ成候。翌年二月十四日より、兒島郡田井村に罷在候。

四七、戸田彌助。 生國、駿河。宇喜多中納言殿にて知行百五十石給り罷在候、中納言殿滅亡之砌、浪人仕、其後病死仕候。

四八、戸田又之進。 生國、備前。

武藏守様御代、伊庭甲斐預御歩行弓引廻に罷成、大俵三十代に四人扶持被レ下被二召出一候。江戸銀冶橋見付之御普請御用相勤罷歸、五俵御加増被レ下候。正保二年正月四日、父戸田七郎兵衛。祖父又之進存生之内、御歩行被二召出一、御切米大俵二十代三人扶持被レ下候。同月六日、御目見仕候。同年三月、御供に參、御銀奉行被二仰付一、御在江戸中御上下道中共相勤申候。翌年於二御國一御勘定無二相違一指上申候。

同年九月十日、福岡御茶屋様作事被仰付、十一月五日仕廻、御勘定指上申候。同四年、江戸御供仕、御在江戸中、御小作事奉行被仰付相勤、御勘定指上、翌年御供仕罷歸候。慶安元年九月九日、祖父又之進七十五歳病氣仕候、同年十月十三日、祖父又之進跡目三十五俵之内三十俵、御扶持は其儘七郎兵衛へ被仰付候。

四九、戸田七郎兵衛。生國、備前岡山。

慶安四年、江戸御供に參、御式台御見繕帳付役、御在江戸中相勤、翌年、御供仕、道中宿割被仰付候。承應元年十月四日、犬嶋にて石切申御用に參、十一月二十日、仕廻、勘定指上申候。同二年、江戸御供に參、御式台帳附役相勤、翌年、御供仕罷歸申候。明暦元年、江戸御供に參、福照院樣御台所賄方見屆相勤、同二年御供仕罷歸申候。同年御當地御城廻り、並御鷹部屋處々破損、修繕作事奉行被仰付。八月二十五日より十一月二十九日迄相勤申候。明暦三年六月より御供米倉之奉行被仰付、相勤申候。萬治三年春迄寛文元年正月二十日、江戸大火事に兩御屋敷燒失之跡作事御用被仰付、二月中旬江戸へ參、福照院樣內御長屋外、御長屋建前相勤、御勘定差上、十月下旬罷歸候。同二年三月五日、江戸御留守之御用に參大御前樣御賄見屆横目相勤、翌年四月、罷歸候。寛文三年十月、御豐倉之奉行被仰付、相勤。同五年迄六年、御小人奉行被仰付、勤申候。同九年迄相勤申候。御勘定指上申候。同九年十一月二十三日、御歩行横目役被仰付、同十年之春、右御小人奉行之勘定差上申候。同十一年、大阪御藏奉行波多野甚左衛門・雀部次郎兵衛兩人手前見屆被仰付、九月罷上、翌年極月罷歸候。同十二年十二月二十一日、御中小生に被仰付、西御丸御內證御居に相勤申候。延寶四年病氣罷成、御奉行難仕に付、御斷申上候處、御赦免被成、私被召出、七郎兵衛に被下候御扶持切米無相違被仰付候。十一月十七日より御中小生組にて、西之御丸御廣間御番相勤申候。貞享二年七月二十四日、七十四歳にて病死仕候。

五〇、戸田權七郎。山脇傳內組、四十七俵四人扶持、二十七歳。生國、備前岡山。

延享二年正月二十三日、十六歳にて少將樣へ御目見申上候、同二月朔日、侍從樣へ御目見申上候。少將樣御卒去已後、天和二年八月十五日、於西之御丸黄金一枚一等拜領仕候。同三年四月二十二日、御召料之御上下一具一等に

被下候。同年五月迄、西之御丸御番相勤申候。同五月二十四日より山脇傳内組に被仰付候。

五一、片桐瀨兵衞。生國、播州。

片桐半右衞門方にて百五十石給り罷在候。慶長十九年、大阪御陣供仕、相勤申候。半右衞門子息河内代に暇申請、平岡石見守殿知行二百石にて罷在候。如何樣申品にて御座候哉、又御暇申請、備前へ罷越、土倉淡路知行所に罷在、寬文元年、病死仕候。

五二、豐島與左衞門。中村主馬組、六十二俵四人扶持、六十五歲。生國、因州。

父瀨兵衞、右之仕合に付、身體有付し爲高々仕候。花房五郎右衞門殿・久貝忠左衞門殿・松平美作守殿、浪人分にて年々居申候

父瀨兵衞煩申候に付、備前へ罷越、土倉淡路知行所に罷在候。

萬治二年十一月二日、侍從樣へ御祐筆に被召出、十五石四人扶持、拜領仕候。同月三日、初而御目見仕候。此節より母方之苗氏豐嶋に改申候。寬文二年、御加增五石被下候。被召出候節より每年江戶に御供仕、御部屋住之節は、御人少々御座候間道中連著可仕候由、伏見より江戶迄兩度連著仕、御懇之御意にて、御召之御小袖兩度拜領仕候。桑名にて、松平越中守殿御馳走之御召船御舟奉行方へ時服被遣日に、御使者に被仰付相勤申候。於一宮尾張樣御使者へ御使被仰付、兩度相勤申候。年號年月日覺不申候。江戶御留守御番兩度、再三年詰兩度、相勤申候。年號月日覺不申候。延寶八年、眼相煩候役儀御斷申上候處、九月十三日御赦免被成、直に御膳奉行被仰付候。翌天和元年より貞享二年まで、五年之內、江戶御供兩度相勤申候。彌眼重く罷成候に付、御斷申上候處、貞享二年十一月二十三日、願之通り御奉行御赦免被成、中村主馬組被仰付候。

五三、子長三郎。　延寶四年正月十五日、九歲初而御目見被仰付候。

大橋三次郎　寫
丸山子堅　校㊞

吉備溫故秘錄卷之七十七（干城六）終

吉備温故秘録巻之七十八（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城七（原本干城一二）目錄

一、中村助兵衛。　二、中村主馬。　三、中村主殿。　四、中村主馬。
五、子 右平次。　六、中村四兵衛。　七、中村四兵衛。　八、中村甚介。
九、中村孫右衛門。　一〇、中村次郎右衛門。　一一、中村四郎左衛門。　一二、中村治左衛門。
一三、子 角右衛門。　一四、三男 中村傳次郎。　一五、中村加兵衛。　一六、中村權介。
一七、末子 中村善兵衛。　一八、中村善右衛門。　一九、中村甚右衛門。　二〇、弟養子 中村右衛門八。
二一、中村又右衛門。　二二、中村忠左衛門。　二三、中村孫四郎。　二四、子 權四郎。
二五、行田治兵衛。　二六、行田喜兵衛。　二七、行田治兵衛。　二八、行田藤兵衛。
二九、中村勘兵衛。　三〇、中村十兵衛。　三一、中村又之丞。　三二、子 長次郎。
三三、近藤九大夫。　三四、近藤九右衛門。　三五、中島六右衛門。　三六、子 源内。
三七、名倉若狹。　三八、名倉勝六。　三九、名倉左衛門。　四〇、名倉平藏。
四一、孫養子 名倉二郎四郎。　四二、中牟田三河。　四三、中牟田孫市郎。　四四、中牟田三郎大夫。
四五、中牟田三次郎。　四六、中村長兵衛。　四七、中村長左衛門。　四八、（中村多兵衛。子 佐市郎。）
四九、中村清兵衛。　五〇、中村五郎右衛門。　五一、中村孫四郎。　五二、長屋新左衛門。
五三、長屋茂兵衛。　五四、長屋九郎左衛門。　五五、長屋左太郎。　五六、長屋傳次郎。
五七、長屋藤兵衛。　五八、長屋新左衛門。　五九、養子 長屋新左衛門。　六〇、長屋新左衛門。
六一、子 長屋忠兵衛。　六二、中野與兵衛。　六三、中野九郎左衛門。　六四、中野後兵衛。
六五、子 吉三郎。　六六、中野半介。　六七、中村若狹。　六八、中村長兵衛。
六九、中村平藏。　七〇、中村彥八郎。　七一、行田治兵衛。　七二、行田六郎右衛門。

吉備溫故秘錄卷之七十八(干城七)目錄終

吉備温故秘録　巻之七十八（原本無巻數）

大澤惟貞輯録

干城　七（原本干城一二）

一、中村助兵衞。生國、播州武庫郡中村。

於同所兵衞付申渡代々其所之庄官にて御座候由、荒木攝津守殿に罷在候、攝津守殿居城伊丹落城以後浪人仕、在所中村へ引籠罷在候。輝政樣播州へ御入部以後、主殿呼越高砂にて病死。

△主殿の誤（朱書）

二、中村主馬。若名、九郎左衞門。

於參州輝政樣へ被召出三百石被下、御船手被仰付候。文祿元年、高麗陣秀吉公肥前名護屋御出張之節、諸大名衆之大船、名護屋へ廻申候に付、輝政樣御船主殿召連廻申候處、他よりは小船にて候故、湊手前に控、夜に入御船を飾り、大提灯數多燈し入津仕候、大船之勢より增樣に相見申候哉、秀吉公矢倉より御覽被成由にて、御尋に付、輝政樣御舟之由申上候。翌日入津之船共爲御覽御出、輝政樣御船を御尋、則御召被成、御前へ主殿被召出、忝御意にて御羽織・御帷子致拜領候由。右之趣、追て輝政樣被聞召、御感之御意候由。慶長五年、御步行弓三十人被仰付候。同年、景勝御退治、幷關ケ原御陣御供仕候。同年、播州へ御入部被成、御加增七百石、御足輕三十人、御船手御船頭五十人、水手五百人、御小人五十人御預被成、御仕置、並御國御代所被仰付候。其後千石御加增、都合二千石拜領仕候。高砂に御城築申儀被仰付、則御預被成、並御騎馬牢人衆都合九十騎餘り、其外忍之衆三人被仰付候由。此砌迄九郎左衞門と申候處、御意にて、主馬に替り申候由。慶長十七年、輝政樣御直に御意被成候は、高砂御城武具不足無之拵置候段被聞召御感被思召候、來正月淡路國由良へ被成御座、御本丸繩張可被仰付候、其節高砂へ可被御座候、左之一萬石之御取付於彼城可被下候、外に騎馬同心一萬石と都合二萬石餘之格に可被仰付候　近年病氣に成候間、來春有馬へ致湯治養生可仕由、御意にて御銀二十貫目拜領仕候。嗣子太郎吉と申候。私父主馬幼名にて御座候。來暮には御知行可被遣候。先當分御合力米被下候。娘共緣組をも可被仰付候　重々難有御意に御座候。然る處、慶長十八年正月御卒去被成候。其節主殿相煩罷在候、此段如何仕達上聞候哉、武藏守樣御歸國之刻、於駿府權現樣主殿煩無油斷養生可仕旨、武藏守樣へ

主馬の説（朱書）

上意にて御藥萬病丹拜領仕候由、罷歸國被遊主殿宅へ被爲成、御直上意之趣被仰聞、御藥頂戴仕候（其後も上意有之茂助殿承之由。又萬病丹頂戴仕候。）終本腹不仕、慶長十八年三月二十四日、四十九歳於姫路病死仕候。

三、中村主殿。（幼名、太郎吉、其后隼人、其後左兵衛、其後主馬。）

慶長十七年より輝政様御近習に被爲召仕候。其節御直に、來暮は知行千石被下候、當分爲御心付御米五百俵被下候。（其砌武藏守様へ爲御禮罷越候處に、御直之御意にて、名隼人に改候へと被仰付候。）慶長十八年、武藏守様播州へ御入部被成、隼人に五百石被下候。其節池田出羽を以て御斷申上候得共、當分之御心付に候、追付主殿跡目可被仰出御意之旨、出羽重而申聞候付、御請申上候。（其節榊原遠江守様より柘植彌之助爲御使、當年之儀如何様之御擬心被仰付候得共、御斷申上間敷旨、重而被仰下、旁以同年十一月七日、御折紙頂戴仕候。）同十九年、大阪冬御陣、武藏守様御供相勤申候。

御歸陣之節、様子御座候由にて、御家を立退、京都に罷在、後元和元年、大阪夏御陣之節は、榊原遠江守様御上京、大阪へ被召連、御家來伊木忠兵衛、左之先手一所に罷在候。五月六日、於久寶寺表野呂六右衛門と申者と名乘合鑓を合、則討取申候。其日遠江守様御手之一番首にて御座候由、同日御手へ討取候首、大久保喜六と申者母衣者被仰付、御本陣へ被指上候處、御雨上様御出馬に付途中にて御實験被遊、中村隼人一番首と御帳にも付申候由、生年十九歳にて御座候。右野呂六右衛門從弟野呂源六と申者、松平石見守様御家に居申、隼人歸參以後、於姫路致參會、六右衛門儀をも承候由。

翌七日、天王寺表茶磨山下之段にて遠江守様先手之御人數立兼申候に付、隼人頭分面々へ言葉を合應を以て御人數を立替其勢にて天王寺惣構まで押詰被成候。右之段彼御家中又は旗本にも、其節は存知之旨御座候由。榊原遠江守様御陣中より腫物相煩ひ、京都迄御歸陣被成、御病中以之外に御座候。其節隼人御傍へ被召寄、御本腹被成候者御雨上様へ御目見之儀、御願可被成と思召、酒井雅樂頭殿・土井大炊頭殿へ御内意被仰達置候由被仰聞候處、無程御卒去に付、先京都に浪人仕罷在候。其節加賀中納言殿内本多阿波守より、前御家中に罷在候柳田半助を以て、身上加州へ肝煎可申由申來候、折節津田平左衛門殿先祖津田香庵老在京縁所御座候に付、內證候得者、加州は遠國にて候間、井伊掃部殿肝煎可申由にて大形相濟可申由申候。然る處酒井雅樂頭殿より榊原遠江守様御内近藤庄兵衛御使にて早々江戸へ被下候へと被仰付候に付右之切紙指置、元和二年、江

戸へ罷下候處、雅樂頭殿より武藏守樣へ隼人身之上之儀何方へ成共働可申にて可有御座旨、爲御屆被仰進候處他へは被遣間
敷旨御返事に候間、歸參可仕旨被仰聞候付、御請申上候。其節武藏守樣御煩、無程御卒去被成候付、歸參以後、御目見不仕候。

元和三年、少將樣因州へ御入國被遊、千石被下候、御斷申上時節と存候、同四年十一月六日、御折帋頂戴仕候。（其刻名を左兵衛に替申候。）寛永七年八月七日、當分之御心付と御意之由、日置豐前申渡御加增五百石被仰候。同九年、備前へ御入國被遊、九月、御足輕二十人、並御船手被仰付候。同十一年正月十一日、備前御本丸火事之節、御天守へ火移り候付私父子御預し者共召連罷上候處に上重窓より火先强入候付段々人殘し置上重へ罷上消候得共、水絕候に付難消留候、其段土倉市正見及、あやまり有之候ては御爲にも如何に候間、指置下候へと申越候、追付生駒左近父子も罷上市正同意達旨申候付任其意二重目迄罷下候得共、又上重へ罷上候處に、左近方より水指上候而、終には消留申候。（同年名主馬に替候へと被仰付候。）正保二年、御加增五百石被下候。二月三日、御禮申上候。同年五月十三日、五十一歲病死。

四、中村主馬。（番頭、千五百石、六十七歲。幼名、佐太郎其後左兵衛。）

寛永七年、初而御目見仕、（同十一年、名左兵衛に替り候得と被仰付。）同十五年、被召出五人扶持五俵被下、御近習に御奉公仕候。正保二年九月六日、跡知之內千五百石被仰付候。御加增地御役儀は、御新法にて被召上候處に御足輕直に被仰付御加增其年之御物成は致拜領候。（其上身弟右門、後左兵衛と申候。被召出、私へ被下候御扶持兩御支配被仰付候處、少し樣子御座候て御家立退他國にて病死仕候。）同三年八月二十八日、御直に難有御意にて御船手被仰付、（主馬に替り候へと被仰付。）寛文十年八月二十七日、於西御丸御前へ被召出、御直に難有御意にて御番頭被仰付候。

五、子右平次。　延寶八年三月三日、十五歲御目見仕。

六、中村四兵衛。（中村主馬弟にて御座候。）

十二三之時、於播州輝政樣へ御傍に被召仕、三百石被下候。大坂兩陣武藏守樣御供仕候。寛永十九年十二月二十五日、於備前病死。

七、中村四兵衛。　寛永二十年、跡目無相違三百石被下候。寛文六年十二月十三日、五十二歳病死。

八、中村甚介。 水野三郎兵衛組、御鐵炮引廻、三百石、三十八歳。

明暦二年十一月十五日、九歳にて少將樣へ御目見仕、寛文七年跡目無相違三百石二月二日に被仰付、同十五日、瀧川縫殿組にて御禮申上候。延寳二年、水野三郎兵衛組被仰付、同八年九月四日、水野三郎兵衛組御鐵炮引廻し役被仰付。

九、中村孫右衛門。

荒尾美作守殿にて八十貫給候。三方ヶ原陣之時は年寄に付惣領惣重郎荒尾小太郎殿致御供討死候。其後孫右衛門義勝入樣へ被召出候。子供四人も被召出候。

一〇、中村次郎右衛門。

勝入樣へ被召出候。岩崎御陣之節は神戸大炊を大垣之御城番に被爲置候。大炊は次郎右衛門緣者故、次郎右衛門御指加へ被召置候。輝政樣御代方々御陣御供仕候。於御前百三十石被下、神戸大炊組に御入被成。外に惣領中村助兵衛に百二十石被下、御小姓に被召仕候。

關ケ原陣之時も神戸大炊吉田之御城番被仰付、次郎右衛門義留主居候事迷惑に存奉り、子供三人騎馬にて召連、荒尾左志摩手にて關ケ原御陣御供仕候　輝政樣能罷出候と御意被成、播州御入國之節は、御加増被下都合三百石被下候。世悴助兵衛・惣兵衛・傳次郎にも御知行被下候に付神戸大炊御斷申上候。被仰付候組にはなれ御陣御供仕候事不屆之由申立、三百石之内百石減じ二百石に被成、如前々與へ御入不被下候はゞ御家を立退可申旨大炊より申上候。次郎右衛門は大炊組を御はなし被下と御訴訟申上候。四五年も落着無御座に付、二百石立御知行さし上入道仕候。其時輝政樣荒尾志摩を以て御内證被仰渡候は、小狀手前をも被思召、埒立不被下候、行々は宮内樣へ御付被成、淡路へ可被遣との御意にて、末子中村善兵衛被召出、七十俵十人扶持被下候。助兵衛・惣兵衛は後宮内樣へ御附被成候。次郎右衛門元和三年五月二十一日於播州病死。

一一、四男中村四郎左衛門。

慶長六年、十三歳之時於播州、武藏守樣へ被召出、御膳番之兒小姓に被召出候。同九年、於備前、新知百五十石被下

夏役不採（朱書）

候。同十一年、兄中村傳次郎病死仕此知行二百五十石を四郎左衛門に被下、四郎左衛門百五十石を傳次郎子中村加兵衛に被下候。

慶長十九年・元和年大阪兩陣之時、御小兒姓衆十人之内御白母衣被仰付御供仕候。五月七日、大阪へ御詰寄被成候時、中島を御立之節、十人之兒小姓共御免被成候間、御先へ參り候へと御意被成候、何も忝旨申し、一同罷出候。四郎左衛門儀、今橋の下川をこし、せんばへ移り御堂筋之土橋より城中へ入申候處、南之寄衆入込申に付北へ廻り西之御門の前へ參り候へば、敵一人出候間切倒申候處に北より入申候森左近殿衆、四半をさし申士四人、金の短册ゐつるさし申士一人、以上五人して首をうばい申ゐつるさし申士にうばいとられ申候。其節太田善右衛門と内藤三郎四郎參、助可申と存、急候へども跡にては首は金の短册ゐつるさし申士慥にはい申を見申候に付惡口申掛參候由。次に丹田八郎右衛門・荒木德左衛門も參候。其後せんばにて御前へ罷出候へば如何仕たると御意に付首をはいとられ申よし申上候。其節善右衛門・三郎四郎も罷出、右の様子申上候。其晩御小屋にても様子御尋被成、刀をも御覧被成候。翌八日之朝、能勢攝津守殿御出御咄の内にても御前へ被召出、せんば口の様子申上候へと御意被成候由。

元和六年、於因州大小姓被仰付、寛永七年五月、十石御加增被下、同十二年、御普請奉行被仰付、御鐵炮五人被下、自分に召仕候。同十四年三月、於備前百石御加增被下、正保三年正月、御鐵炮十人御增、十五人被仰付、武藏守様御代より少將様御代まで、以上十八度御供使に參候。寛文二年十一月朔日、隱居被仰付、五人扶持被下、同六年十月二十九日、七十八歳於備前病死。

二二、中村治左衛門。（鐵炮頭、四百石、五十八歳。）

明暦二年十二月二十日、中小姓に被召出、五十五人扶持被下候。寛文二年十一月朔日、家督四百石、御預之御鐵炮十五人、御普請奉行共に、無相違被仰付。同八年十月十五日、江戸御公儀使被仰付、御加增二百石被下、御預之御鐵炮十五人、御弓に被成、御預被成候。同十年、病氣に罷成、御役儀難勤奉存候に付、御加增二百石差上、役儀御赦免被下候様に奉願御免被成、同年十一月二十八日、江戸罷立十二月十八日、歸着仕御預之弓、御鐵炮に御直し被下候。同十三年七月十二日、御普請奉行御直に被仰付。延寶元年十一月十九日、御鐵炮五人御增御預被成候旨、御直に被

仰付。同二年寅、禁裡御普請に付御小屋場受取同年六月二十八日、罷立七月三日、京着仕仙石因幡守殿・前田安藝守殿之與力、御代官平野藤四郎殿、小野長左衛門殿手代中出合、御小屋地被相渡受取申候。同七月十八日、京都罷立同二十一日、歸着仕候。同年十二月十一日、京都へ可被遣旨被仰付、同十三日、於御城御料理被下御前へ被召出御盃御手自御肴被下奉頂戴候以後、鷹拜領仕候。新院樣御所御普請相勤申候。延寶三年二月十一日、永井伊賀守殿御屋敷へ仙石因幡守殿・中根京右衛門殿・島角右衛門殿・下條長兵衛殿・加藤源左衛門殿・能勢日向守殿御出合、池田大學本〆三人、普請奉行六人御呼出被成、被仰付候は御作事首尾好出來仕候爲御悦被遣候旨被仰渡呉服三ッ御銀三十八本頂戴候。同四年二月五日、仙石因幡守殿普請奉行六人御呼被成、勝手次第御國へ罷歸候へと被仰渡、同六日、京都罷立同十日、歸着仕候。同十一日之朝、御城へ罷登り、御目見仕候。同二十二日之朝御料理被下、御前へ被召出、御召之御小袖奉頂戴候。貞享元年十月九日御普請奉行御免被成、御預御鐵炮は其儘被仰付候。

一三、子角右衛門。　延寶四年三月十五日、十二歲初而御目見仕候。

一四、三男中村傳次郎。中村次郎右衛門三男。　二百五十石なりしが慶長十一年七月八日、病死。

一五、中村加兵衛。

慶長十一年十一月、跡目輝政樣被仰付、則名をも傳次郎と改申、此時六歲にて御座候故、祖父傳次郎弟中村四郎左衛門知行と入替に被仰付、父傳次郎成長仕迄四郎左衛門へ御預被成候由。　同十八年十一月七日、百五十石之御折帋被下武藏守樣へ十一歲にて御小姓に被召出。元服以後加兵衛と成申。　延寶六年正月二十三日、病死。

一六、中村權介。伊木頼母組、百五十石、三十一歲。　同年三月十三日、跡目無相違被下候。

一七、末子中村善兵衛。中村次郎右衛門末子也。

慶長十年、十三歲にて輝政樣へ被召出兒小姓に被召仕候。武藏守樣御代に中小姓に被召出候。大坂御陣之時は、香西縫殿助手に御附、騎馬にて御供仕候由。正保元年七月より邑久郡・上道郡の御郡奉行被仰付。慶安元年六月二十七日、五十七歲病死。

夏役不採（朱書）

一八、中村善右衛門。

跡式無相違被仰付九月四日、丹羽藏人組へ被仰付候。郡普請奉行被仰付。其後明暦三年正月二十八日、安藤杢組に被仰付、同年十月朔日、吳服奉行被仰付、寛文七年正月二十一日、吳服奉行御免被成、新知二百石被下、御房様へ御附被成。延寶八年八月二十五日、五十九歳病死。

甲斐守様より被下置候二百石、次男中村七郎左衛門に甲斐守様より被下只今御奉公仕候。

一九、中村甚右衛門。

延寶八年十月二十二日、跡目無相違二百石被仰付、岸織部組へ御入被成候。同九年春、相煩、病重り申候故、弟右衛門八養子に奉願候處、願之通被仰付、四月十一日、二十八歳病死。

二〇、弟養子 中村右衛門八。 岸藤右衛門組、百五十石、二十二歳。

同年六月二十一日、跡目百五十石被仰付岸織部組に御入被成候。

二一、中村又右衛門。 中村孫右衛門□男なり。 勝入様へ御奉公申上候。

岩崎御陣之時、又右衛門十七歳、神戸大炊與力にて大垣御城番仕候由。岐阜より小田原御陣には荒尾但馬手に御附被成、二十三歳騎馬にて罷出申由。栗木助三郎と申者之家來仕寄之外にて鐵炮にうちぬかれ、捨殺かと呼ばり申候得共、出合申者無御座候、加納五介・又右衛門兩人罷出取込申候。於岐阜輝政様河崎大助と申者御成敗四人に被仰付候、又右衛門一人にて仕廻申由。

參河へ御國替、惣並御知行取遣候時、百三十石被下候。慶長三年三十一歳病死。子次郎兵衛忠左衛門兄也。十一歳、跡目被仰付、播州にても二百石被下候。

二二、中村忠左衛門。

慶長十年、武藏守様に被召出同十八年、於播州二百石被下同十九年、大坂御陣に白母衣被仰付、十人之内。

翌年五月七日、大阪落城之時、白母衣剌申者ども何も御先へ参り居候得と御意に付片岡次郎大夫・江藤彦右衛門・忠左衛門三

人乘連一手にて三人ながら淺黃もの取申候由。

於因州元和六年より寬永六年迄高百石助物成にて被下候。同七年に百石御加增御折帋被下、於備前寬永十年、如意半月被仰付、十五人之内。寬永十八年、又百石御加增被下都合四百石。同十九年、黑母衣被仰付、少將樣御代御年寄御役儀黑母衣被仰付承應元年御役儀御斷申上候處、御敎免被成池田佐渡組に被仰付然共黑母衣は其儘被仰付、其後邑久郡高七千石御代官被仰付。同三年七月二十七日、病死。

二三、中村孫四郞。稻葉四郞左衞門組、三百石、五十八歲。

慶安元年七月二十二日、御兒小姓に被召出九月、四十俵五人扶持被下承應三年九月十二日、父跡知四百石之内三百石被下、同十二月、芳賀内藏允組に被仰付明曆二年十月二十二日、御小姓被仰付寬文六年九月二十六日、伊木頼母組御小姓被仰付同八年十月三日、江戶御公儀御使役被仰付依て二百石御加增被成、足輕十人被仰付候處病氣に付御斷申上候得ば同十五日御敎免被成丹波守樣御組に被仰付、同十二年十一月二十七日、稻葉四郞右衞門組に被仰付延寶五年、簡略奉願、上道郡湊村に在宅仕候。

二四、子權四郞。　延寶二年三月十九日、侍從樣へ御目見仕候。

二五、行田治兵衞。岐阜中納言殿にて三百石被下、刺物あかね母衣被仰付。

文祿四年、於參州輝政樣へ被召出、二百石被下。慶長五年、景勝陣•關ケ原陣御供仕於播州二百五十石御加增被下、刺物黑に白き繩の日之母衣被仰付、慶長十四年九月十四日、病死。

二六、行田喜兵衞。

慶長五年、關ケ原陣之時分に被召出、兩御陣御供、御歸陣以後、於播州新知百五十石被下候。慶長十四年、治兵衞病死父子之知行合六百石之内三百石喜兵衞に被下、殘る三百石は弟兩人に被下候。寬永九年、病死。

二七、行田治兵衞。

跡知無相違被下候。寛永十年、御小姓役被仰付、同十九年七月、御小姓役御免被成、伊庭半藏組に被仰付。寛文八年極月八日、於江戸病死。

二八、行田藤兵衛。 宮城大藏組頭、三百石、四十歳。

寛文元年五月朔日、少將樣へ御目見仕同九年正月十七日、跡知無相違三百石被下伊庭大藏組に被仰付延寶五年八月朔日、正木主計頭御鐵炮引廻役被仰付、剌物赤き角取紙三ツ被仰付、同八年閏八月十八日、宮城大藏組之組頭被仰付。

二九、中村勘兵衛。 松平加賀守殿御先祖に、百五十石被下、奉公仕候由。

三〇、中村十兵衛。 江州御代官木村惣右衛門に被頼、少之内家老役等相勤、無程暇取引籠り、承應三年十月二十九日、五十二歳病死。

三一、中村又之丞。 伊木兵庫組、二百石、五十九歳。

若年之時より父一所に居不申先祖之儀不存候。慶安二年春、備前へ罷越同四年夏、御花畠にて御普請被仰付、家屋敷被下、少將樣御内意にて中井太左衛門へ御合力之内拜借仕候。

承應元年冬、初初（下ノ初衍字カ（朱書））而御目見仕浪人分之品にて御前へも度々被召候。明暦元年七月中旬、新知二百石被下、若原監物組に被仰付。在宅望申候付、同二年四月十四日、津高郡紙工村にて御普請被仰付、家屋敷被下候。萬治元年冬、御廟御役儀被仰付、依之同年三月上旬、中山下にて家屋敷被下、引越申候。天和三年五月十四日、伊木兵庫組に被仰付、貞享元年二月十六日、御役替學校奉行被仰付、學校へ引越申候。

三二、子長次郎。 天和元年九月十五日、八歳にて御目見仕。

三三、近藤九大夫。

中村式部少輔殿にて千石被下、足輕二十人、忍之者十人預り罷在候。九大夫弟宗太郎と申者、三河御普請之筋目にて駿河にて權現樣へ被召出、大御番被仰付其世悴近藤五郎介二百五十俵被下嚴有院樣御藥込役被仰付候。五郎介果候て世悴新五右衛門

に跡目被仰付、只今大御番相勤罷在候。

三四、近藤九右衛門。式部少輔殿御子息一學殿御家絶申砌、九右衛門儀は、幼少にて浪人仕、其後高力攝津守殿へ被召出、二百五十石被下候。

三五、中島六右衛門。伊木兵庫組、二百石、六十歳。

増山彈正殿一萬石之時分奉公仕、二百石給候。私弟近藤朝大夫と申候。公方樣御本丸火之番役被仰付候。於今弟朝大夫、其世悴・甥・從弟、公方樣に御奉公仕罷在候。私母方之祖父中島越後と申堀尾山城殿に罷在候。越後果候て世悴中島治大夫と申、則私母方之外父にて御座候。治大夫時分に山城殿御家絶申候。治大夫は御國先若原監物兄にて御座候故、從雲州治大夫悴二人召連、御國監物方へ參居申候。治大夫悴二人共に病者にて奉公難仕候に付治大夫九右衛門に申談、私には中島を名乘せ申候。増山彈正殿にても中村を名乘罷在候。少存寄御座候間彈正殿手前暇を申請浪人仕候。

萬治二年、於江戸牧野野間吉峰少將樣へ被仰達被召出候。私儀年若に御座候間侍從樣へ御奉公申上度奉願候得ば侍從樣御在國に御座候間、少將樣より被仰進同年十二月十七日、江戸罷立、同月晦日に御國へ參着、翌萬治三年正月九日、侍從樣へ御目見仕本俵百俵十人扶持被下候。寛文元年、二百石之御折帋頂戴仕候。侍從樣御家替御入國之年御小姓組小堀主殿預り御鐵炮引廻し被仰付候。延寶三年、私儀大煩仕候て物覺無御座、御小姓役御斷申上候に付御馬廻りに被仰付、若原監物組に御入被成候。

三六、千源内。寛文二年八月四日、十二歳、於江戸御兒小姓に被召出本俵四十俵四人扶持被下候。

三七、名倉若狹。權現樣へ御奉公仕罷在候由。

三八、名倉勝六。

權現樣御前近被召仕候處、傍輩大道寺三十郎と申者、別而啀申候。彼三十郎喧嘩仕出し立退申候。則一所に立退、妙心寺へ引籠罷在候を、加藤左馬助殿被聞召、浪人分にて被呼出候其後病死仕候。

三九、名倉佐左衛門。加藤左馬助殿にて千石給居申候處、傍輩と喧嘩仕、相手を過り立退申候。

寛永二年、少將樣へ浪人分にて被召出、御切米三百俵宛被下、同七年病死。

四〇、名倉平藏。

跡目無相違三百俵被仰付、同十四年三月、四百石御折帋被下候。瀧川出雲組に罷在、其後池田數馬組に罷在、慶安三年大小姓に被仰付、寛文十二年江戸御供に參煩病中養子に私を奉願候處、被仰付、同年六月二十九日、平藏病死九月朔日、二百石、私に被仰付。

四一、孫養子名倉二郎四郎。土肥飛彈組、二百石、十五歲。

參州岡崎より二歲にて九月八日に岡山へ參候。平藏儀、實は私祖父にて御座候。延寶五年十二月二十八日、土肥飛彈組に被仰付、同六年二月十五日、八歲にて纔目之御禮申上候。

實父は德賀市之丞と申、市之丞養父は德賀七左衛門と申候。參州岡崎水野右衛門大輔殿に二百五十石給、籏奉行役にて御座候。市之丞實父は私祖父名倉平藏にて御座候。右德賀七左衛門方へ養子に參、水野右衛門大輔殿中小姓役相勤申候。

四二、中牟田三河。

筑前國早良郡安樂平・小田部上總所に代々罷在、中牢田對馬二代、三河三代、右三代目之三河私曾祖父にて御座候。外に同名攝津・紀伊・三家、三中牟田と申候。右三人一門同名百七十人一家中に罷在申候。每度方々取合仕候處、右之內一人にても不働仕候者御座候得者、名字の疵に罷成候とて爲惣中牟田成敗仕候由。右小田部上總筑前國安樂城に罷在候處肥前龍造寺之人數取卷攻候得共中々落城不仕候故、肥前勢引取、翌年又肥前勢取懸候由承、此方より三里計り罷出、先手計にて山越候て肥前勢之先備・三備突崩追拂、引取申內敵手分仕、山之谷廻り小田部本陣に懸り、散々攻合、自身之太刀打上總父子打死、家老・物頭六十人打死仕候、其節中牟田參河敵五六人と切合、五ケ所深手負、息絶候間、安樂平へ引取上總末子新介十三歲に成候を大將に仕候、肥前勢又安樂平へ取懸申候處兩手攻候得共三河能下知仕以上三年籠城仕候樣之扱に成申候に付城相渡申、其前數度之手柄仕小田部一門共之感狀共御座候。其後豐前之屋敷大友義統よりの感狀も今日所持仕候。小田新介三河召連て參方無御座候に付、兼々立花道雪御念頃に付、召連參賴、筑後之柳川へ參り申候。夫より三河同世悴孫市郎父子、立花道雪・左近將監二代に奉公仕候。

四三、中牟田孫市郎。

筑前國高島之居城、薩摩より攻取卒星野と申者入置候處立花統虎卒星野を討取首數多秀吉公へ上げ被申候。其節孫市郎分捕高名仕候而統虎よりの感狀今に所持仕候。小田郡新介成人仕候へ共世に出し不申、左近殿聟に相成、知行千石被遣候故、御斷申上、筑前之高祖と申處へ引込居申方々より呼申候得共、三河一代古主の行末見屆申すとて、罷出不申、孫市郎永々浪人仕、續不申に付、中村市左衛門と名苗氏をかへ、備前へ罷越、筑前にての馴依を以て平岡石見を賴候て、筑前中納言殿へ罷出候。其後平岡石見立退候に付孫市郎代官所より直に立退申、關ヶ原陣之刻、何之御手にて働申哉、其段は不存候。江州佐和山城攻之時、渠倫仕矢負、神吉淸兵衛と申仁、其矢ぬきくれ申候。神吉淸兵衛、後は黑田右衛門佐殿に罷在八十歲餘、御談合人に取成肥前島原へも乘物にて被召連候由。

慶長七年、輝政樣へ山脇源大夫取次を以て被召出候節、本氏中牟田三右衛門に罷成申、同八年、二百石被下、同十九年、大坂御陣前に病死仕候。

四四、中牟田三郎大夫。

慶長十九年、大阪御陣之節までは、いまだ御目見不仕候故、方々仕其後は備前へ參り三右衛門病死承り播磨へ罷越申候得者、早や御出陣被遊候に付御跡より御供に罷越、攝津兵庫にて御目見仕。

兩度之御陣相勤申。其節は丹羽山城組に被仰付御歸陣以後三右衛門跡目二百石被下候。大坂御普請・江戶木川御普請に罷越し方々御代官所被仰付。其後久々御銀奉行相勤、御役料二十石被下候。明暦三年六月朔日、世忰両人相果候、不便に被思召、銀奉行御免被成其後眞田將監組御鐵炮引廻被仰付候。寛文五年正月二十三日、御城御居間御用被仰付、足輕十人御預被成、同六年に御役料六十俵被下、同十年十一月十日、病死。

四五、中牟田三次郎。池田七郎兵衛組、二百石、四十四歲。

萬治元年正月十五日、御目見仕寛文五年正月二十三日、御弓組に被仰付、四十俵四人扶持被下左田齋組被仰付。同十一年正月十二日、跡知被仰付候。其節、父三郎大夫御役料殘米知行役之者指引、私に被下、御切米、並扶持米曾引之御米其儘可被下候ため只今まで跡目被仰付候儀、御延被成被仰付候由、忝御意にて大分之御米

拜領仕候。　其節病氣に付、御弓組御免被成候。眞田將監組に被仰付候。延寶三年、御弓組丹羽七郎左衛門組に被仰付、御役料四十俵被下候。同六年、御弓組御免被成、池田七郎兵衛組に被仰付。

四六、中村長兵衛。　稲葉藏に奉公二百五十石被下候。

慶長七年、於播州武藏守様御目見仕、同九年、百五十石被下候。正保元年、隱居被仰付候。

四七、中村長左衛門。

家督無相違百五十石被仰付御小姓役被仰付候。承應二年之暮、御赦免、宮城大藏組に被仰付。江戸御留守御番、病氣に付世悴門平名代に相勤申。其後立退申。延寶三年八月八日、長左衛門病死。

四八、養子中村多兵衛。　宮城大藏組、百五十石、三十三歲。

延寶三年、長左衛門養子に奉願則被仰付三月十五日、御目見仕候。同年十一月四日、跡目無相違被仰付、宮城大藏組に被仰付候。實父は上野次郎左衛門と申生駒壹岐守殿にて三百三十石被下候。

四八、子佐市郎。　貞享元年三月三日、御目見仕候。

四九、中村清兵衛。　天球院様へ御奉公仕候。

五〇、中村五郎右衛門。

寛永六年十月、天球院様へ御歩行に被召出四十五俵四人扶持被下明暦三年二月、中小姓に被仰付二十五俵三人扶持御加増被下三月、御□〔滿カ〕起様へ御附被成、萬治元年九月、御□起様御死去被成、十月御國へ歸り申候。寛文元年より御酒方被仰付、延寶三年迄十六年御酒奉行仕候。　延寶三年、隱居被仰付、天和三年九月晦日、八十歲にて病死。

五一、中村孫四郎。　丹羽平太夫組、七十八俵七人扶持、四十歲。

寛文三年、少將様•侍從様へ御目見仕延寶三年極月、家督無相違七十八〔五カ〕俵七人扶持被下、同四年霜月十三日、御酒方被仰付、天和二年迄、御酒奉行仕候。

五二、長屋新左衛門。

慶長九年武藏守樣へ被召出、四百石被下、大阪兩陣御供仕候。寛永四年十二月二十日、病死。跡知養子新左衛門・實子茂兵衛兄弟に、二百石づゝ被下。

五三、長屋茂兵衛。

慶長二年三月、番大膳頭御鐵炮引廻し被仰付、萬治元年、上道郡之內御代官被仰付、寛文二年迄相勤申候。寛文十年八月、湯淺民部組與頭役被仰付、同十一年、御免被成、眞田將監組御鐵炮引廻し被仰付。延寶三年正月十七日、病死。

五四、長屋九郎左衛門。　延寶三年三月十一日、跡知無相違二百石被仰付、天和元年三月十八日、病死。

五五、長屋左太郎。　跡知無相違、六月二十八日、被仰付候處同年九月六日、病死。

五六、長屋傳次郎。　丹羽平大夫組、五十俵四人扶持、八歳。　天和元年十月二十八日、新に被召出、五十俵四人扶持被下候。

五七、長屋藤兵衛。　何方に奉公仕候や不存候。

五八、長屋新左衛門。

稻葉右京亮殿に居申候。其後立退、豐後臼杵城主太田飛彈守殿へ罷出四百石、足輕三十人預り申候。飛彈守殿身上果、臼杵城稻葉右京殿請取申候、其節振能相渡右にも心馳有之に付當分武者羽織被下、其上呼戾し、四百石・足輕三十人被預候。

慶長九年、武藏守樣へ浪人分にて被召出、四百石被下候。大坂兩陣御供仕寛永四年十二月二十日、病死。跡目新左衛門に二百石茂兵衛に二百石翌年被仰付。

五九、養子長屋新左衛門。　寛永十二年十二月七日、病死。

實父は水野彥右衛門と申候て信長公に御奉公。其後尾張內府信雄公に仕、秀吉公小田原陣之刻、山中城御攻之時、從信雄公御使に參り、一ノ木戶にて鑓下之高名仕、從秀吉公金錢被下候由。木下肥後守殿にて五百石・足輕二十人被預候。肥後守殿に居申節播州姬路惣社にて取籠者有之時枝與市兵衛と申者一處に罷出、則彥左衛門打留申。長岡越中守に居申六百石被下候。浪

人仕候て備前へ罷越候。右衛門督様へ被召出、右京大夫様へ御付被成、三百石被下病死。

六〇、長屋新左衛門。湯淺半右衛門組、三百石、五十五歳。

新左衛門跡知無相違被仰付。萬治三年、侍從様御雇にて三月四日、江戸御供仕、翌寛文元年春、其儘御部屋へ可被召仕之旨被仰付、同七年、於江戸御小姓組之與頭被仰付、同十二年正月九日、御奏者役被仰付。延寶元年十二月二十七日、御加増百石被下、同二年十一月十三日、御横目役被仰付。貞享元年十一月十一日、御馬廻被仰付。

六一、子 長屋忠兵衛。湯淺半右衛門組、六十俵四人扶持、三十二歳。

寛文六年正月九日、十三歳御目見仕、同七年、御兒小姓に被召出、六十俵四人扶持被下。延寶三年十月十八日、小堀彦左衛門組中小姓に被仰付候。天和三年十月十五日、中與に相詰可申旨被仰付。貞享元年正月十八日、屋敷奉行被仰付、同十一月十一日、御馬廻り被仰付。

六二、中野與兵衛。

秀次公へ被召出三百石被下、三十人之御弓之中に罷成、尾張の案内存候に付、御國横目被仰付、其上自由に仕候得との義に付御鷹御免被成候。其後金吾中納言殿浪人分にて八百石被下候。其後福島掃部殿へ浪人分にて三百石・忍之者三十人被仰付候。伊勢長島和田郡一萬石之代官に被申付候。少様子御座候て浪人仕候。

其後武藏守様へ被召出、三百石被下候。寛永七年六月十四日、病死。

六三、中野九郎左衛門。大阪兩陣父懸りにて御扶持方被下、御供仕候。

跡目無相違被仰付。寛永二十年三月朔日、芳賀内藏允預御鐵炮引廻し被仰付。萬治三年十一月十八日、草賀宇右衛門組御鐵炮引廻し被仰付、同年同月晦日、前より奉願候通隱居被仰付。寛文十二年十月十六日、九十六歳病死。

六四、中野後兵衛。草賀宇右衛門組、三百石、五十二歳。　家督無相違被仰付。

六五、子吉三郎。富田又兵衛二男にて御座候を養子奉願、延寶二年二月十三日、願之通被仰付。　同十八日、十一歳御目見仕候。

六六、中野半介。草賀宇右衛門組、六十俵四人扶持、四十八歲。中野九郎左衛門二男にて御座候。

御弓組之御歩行奉願候處、寛文七年正月二十七日、少將樣被召出三十俵三人扶持被下、渡邊友之介組に被仰付、同八年十月二十三日、二十俵一人扶持御加增被下、御弓組之中小姓被仰付、指物絎拜領、杉山五左衛門組に被仰付、同七年、草賀宇右衛門組に被仰付。

六七、中村若狹。生國、近江。何方に罷在候とも、身上之義も不存、中村彌兵衛・羽柴久太郎殿に罷在候由。

六八、中村長兵衛。富田信濃守殿に罷在、伊勢津之籠城之刻、心馳之働仕候由。其後稻葉藏人殿にて二百五十石被下候處、御暇申。

慶長七年、武藏守樣へ被召出、同九年、百五十石被下候。正保元年、隱居被仰付。跡目中村長左衛門に無相違被付候。

六九、中村平藏。長兵衛次男にて御座候。

慶安三年、弓稽古仕候由被聞召、御前へ被召出、御的被仰付、御米二十俵拜領仕候。承應三年十月二十六日、御中小姓に被召出、二十石四人扶持被下候。萬治二年、御弓組に被仰付、延寶四年、池田左兵衛組に被仰付、同七年六月二十五日、草賀宇右衛門組に被仰付、在番仕候。天和二年十月八日、五十二歲病死。

七〇、中村彥八郎。草賀宇右衛門組、三十俵四人扶持、二十六歲。

寛文九年正月十八日、九歲御目見仕、天和二年九月十七日、跡目之內三十俵四人扶持被仰付。

七一、行田治兵衛。行田六郎右衛門、治兵衛子三人、惣領喜兵衛、二男四郎兵衛、三男六郎右衛門。

喜兵衛事慶長五年、治兵衛存生之內被召出景勝・關ケ原兩陣御供仕、御歸陣以後、新知百五十石被下候。六郎右衛門事慶長十一年、被召出、四十俵三人扶持被下候。知行都合六百石之內、三百石喜兵衛、二百石四郎兵衛、百石六郎右衛門に被仰付。萬治三年四月二日、病死。

七二、行田六郎右衛門。伊木頼母組、百石、五十六歲。　跡目無相違百石被下候。

七三、予仁八郎。　延寶八年正月十五日、九歲にて侍從樣へ御目見仕候。

七四、大久保伊豆。勢州大久保古城之城主之由。

七五、南部長右衛門。　於播州輝政様へ被召出三百石被下候。元和四年三月五日、於因州病死。

七六、南部治郎右衛門。

同年十一月二十六日、跡目無相違三百石被仰付候。寛永十九年七月二十九日、大小姓役被仰付、天保四年、江戸御供に罷下、同五月十日、在江戸御公儀使役被仰付。慶安元年正月二十日、二百石御加増被下、同秋、御足輕十人御預被成。明暦元年十月、御公儀使役御免被成、裡判役被仰付。同三年十月、又御弓十張御預被成候。寛文九年、在江戸御役義御免被成、延寶七年十月二十七日、七十四歳病死。

七七、南部七之助。　山脇傳内組、三百石、十六歳。

延寶七年六月十五日、父存生之内、侍從様へ十歳にて御目見仕、同年十二月十九日、跡知之内三百石被下候。

七八、中野仁右衛門。

元和元年、於京都八月、十三歳之時武藏守様へ被召出五十俵五人扶持被下候。寛永十年、二十俵御加増被下候、同十九年十一月御膳奉行被仰付、新知百五十石被下候。正保元年七月浪人仕候。同三年七月、歸參被仰付、寛文二年十月、御長柄之者十人御預被成候。同八年二月、於江戸百石御加増被下、御弓之者十人御預被成候。大御前様へ御附被成候。延寶二年八月九日、七十二歳於江戸病死。

七九、中村與一右衛門。　中村主馬組、二百五十石、四十一歳。

寛文三年正月二十八日、被召出、六十二俵四人扶持被下、御弓組に被仰付。延寶二年十一月三日、跡知二百五十石無相違被仰付、同三年、病氣に付御弓組御免被成、御小姓組に被仰付、同五年、御簡略に付御小姓組御免被成、稲葉四郎右衛門組に被仰付、同八年五月十一日、大小姓役被仰付。天和三年十月十一日、大小姓役御免被成、中村主馬組に被仰付。

八〇、楢村新五兵衛。

松田元脯に罷在、度々働御座候内、証文四通給候由。其後浦上宗景に罷在此節も証文二通給候由。其後宇喜多中納言殿にて二百石給候。栴村監物は新五兵衞伯父にて御座候故、監物組に罷在候由。其後病死。

八一、栴村新三郎。　新五兵衞存命中病死。

八二、栴村市郎左衞門。　新五兵衞病死之後、筋目御座候て横井養元方へ罷在候。

寛永十四年、少將様へ御中小姓に被召出、二十石、五人扶持被下候。種ヶ島傳受仕候に付、二百目之筒御預け被成候。寛文元年極月病死。

八三、栴村孫之丞。　中村主馬組、四十七俵四人扶持、二十七歳。

寛文二年跡目之内、俵四十七俵四人扶持、私四歳にて拜領仕候。同五年二月朔日、七歳にて御目見仕同十年八月二十七日、中村主馬組に被仰付、延寶二年十六歳より御番勤申候。

八四、永田所左衞門。　稻葉四郎右衞門組、六十二俵六人扶持、七十三歳。

父は三河浪人にて播州へ參り、斎西縫殿所に罷在、寛永十六年六月二十九日、於備前病死。

私儀、寛永九年十一月朔日、御步行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、同十九年、御手廻りに被仰付、正保元年御奉公無懈怠相勤候に付、御加增十俵拜領仕候。明曆二年、中小姓に被仰付、本俵十五俵二人扶持御加增被下、福照院様へ御附被成候。延寶元年十月、御馬廻り被仰付、稻葉四郎右衞門組に被仰付候。

八五、予善十郎。　延寶二年二月十五日、八歳にて侍從様へ御目見仕候。

八六、成瀨新兵衞。

參河引込士、田畠・金銀澤山にて常に人馬所持仕候。權現様切々新兵衞所へ被爲成、何角御相談にも被召加、別而御懇に被遊候由。新兵衞子共・孫共多有之、御陣之節、共之內御雇被成度と被仰候得者、一類之外浪人共迄、共に相添御出陣之御供、其加勢仕らせ候由。

八七、成瀨九右衞門。

權現樣へ奉公仕後結城中納言樣へ御附、三百八十石被下候。御陣幾度も勤申候。いづれの御陣にや一日に首二つ取申、九右衞門初陣之樣語り申働共有之手印宗領孫へ渡し申、中納言殿より御褒美被下候。御甲ばかり末子上心權兵衞に讓申權兵衞大阪御陣にも、十七歲より冬・夏御供仕候。其後年罷寄隱居仕、嫡子に懸り申候處寬永十一年、嫡子果申候故御國へ呼越申、其節九右衞門に御扶持被下候由に御座候得共、身樂に仕度旨申拜領不仕候。然者上より夫役可被下候間、見立にて新田を仕樂に暮候得と被仰付候得共老人之何之御奉公も不仕、冥加恐敷奉存候、御免被成下候へと御斷申上候。其後於江戶慶長元年子暮、侍從樣御前へ被召出、九右衞門八十餘歲に御あやかり可被成にて九右衞門が盃を被召上候、御差圖にて御座候故、九右衞門持合せ候古き帶・古き襷を指上候。御樽・肴・白銀等頂戴仕候。

八八、上山權兵衞。 九右衞門と一所に越前に罷在候由。權兵衞二十歲之時、傍輩を打候て因州へ立退罷在候。

元和五年、少將樣御十一歲之時、權兵衞二十二歲、御手廻り步行被召出、二十五俵四人扶持被下候。寬永十一年戊正月、御本丸火事出來、 御天守へ火移り候故誰か御天守へ上り可申哉と御座候へ共大勢之內上り申者無御座候權兵衞何の道にも命を捨、御奉行に候と申、只一人上り、火を消し申候所追而一人上り候者名は失念仕候。 兩人にて火を消し御天守無恙候。同年、 父九右衞門嫡子果申に付外に養育仕無作御座御暇被下候樣にと申上候得者權兵衞事御暇被下者にて無之由、難有御意にて少將樣御手より直に金子過分被下、 九郞右衞門を御國へ呼越申候。同年、中小姓に被仰付、十五俵御加增被下候。同十七年、侍從樣御三歲之時御懷守に御附被成、一倍之御加增にて八十俵八人扶持被下候。江戶御供之內より直に御殘し被成、勝手迷惑可仕金子十兩被下候。同十八年、銀十枚拜領仕候。年々拜領物多く年月日失念仕候。 慶安二年霜月二十日、新知百五十石被下候。承應二年五月、奏者役被仰付、明曆元年四月十一日、於江戶五十八歲病死。跡目無相違、後之上山權兵衞に被仰付候。

八九、成瀨雲平。 上坂外記組、二百石、五十歲。

七歲之時侍從樣御五歲之時寬永十九年九月二十日、被召出、御目見仕、御手より御小袖頂戴仕、則其時より御奉公仕候。 正保二三年之頃より三十俵四人扶持被下候。慶安二年、髮はやし候へと被仰出、髮結申時、御脇差被下候。承應二年、御加增十五俵被下、元服被仰付、中奧に相勤申候。寬文二年十五俵御加增被下、同年五月十一日、新知百五十石被下、同八年九月、大小姓役被仰付、延寶元年、於御前綟衣頂戴仕候。同十二月二十七日、五十石御加增被下。同三年、病

氣故御斷申上候、役儀御免被成、御馬廻に被仰付。

九〇、子市左衛門。　延寶六年正月十五日、十一歳御目見仕候。

九一、中川讃岐守。

武田信虎へ仕候。甲斐一國之奉行役勤申候。知行五千貫之所被宛行之由。讃岐先祖之儀は、公方樣へ被召出候、中川彌五兵衛家之系圖・卷物相傳申候處、彌五兵衛相果、伜無御座、跡絕申、其節失申。

九二、中川采女。

病氣にて甲州八代郡田中村に蟄居仕罷在候。甲州役落以後權現樣へ被召出候處、病氣に付、御斷申上候得者、弟雅樂助被召出翌年江戶へ罷越申相極申候處、其年病死仕候故、雅樂之助、中川彌五兵衛被召出、武州瀧山に居住仕候。天正十九年、采女正行年七十二歳於甲州八代郡田中村病死仕候。

九三、中川孫兵衛。

加藤左近大夫殿甲州御拜領御入國之砌、采女正儀御聞及候に付孫兵衛其時は勘太郎と申候を御呼出相勤、知行三百石被下候其後左近大夫殿伊豫大州へ御國替供仕慶安四年四月四日、七十二歳於大州病死。

九四、中川權左衛門。　慶安三年、御國へ罷越同四年、於御花畠家督被下中江多左衛門へ被下候。御米之內御內意にて致頂戴罷在。

承應元年、少將樣へ初而御目見仕明曆元年七月、二百石被下萬治元年十一月十八日、三十五歳にて病死。

九五、中川來助。　上坂外記組、五十俵十人扶持、二十八歳。

權左衛門病死之後十人扶持被下、萬治二年正月、江州小川へ罷越、寛文七年四月十五日、備前へ罷歸、同八年五月九日、十一歳にて御目見仕同九年二月二十九日、五十俵御切米被下、合五十俵十人扶持拜領仕候。同年、主稅樣御組に被仰付、其後山脇傳內組に被仰付、延寶八年七月二十六日、中小姓組に被仰付、澤權大夫組に相成、貞享二年十一月朔日、上坂外記組に被仰付。

九六、那須彈正。

三州西三河之內、矢草と申處にて城をも構居申由。其節信長公尾州淸州に被成御座之由。彈正男子幼少に付、信長公御舍弟國

丸殿を養子に仕候處、無程御果被成候由。其後彈正追付相果申候由。其砌子供若年に付、中條將監と申者、彈正元一族家來にて御座候、國丸殿御乳と一所に信長公被仰付、彈正跡式被遣、彈正一類は將監家來に罷成候由。

九七、那須與三右衛門。

將監内に罷在、江州小谷退口之時、太刀打之働仕、伊勢陣之時も能働仕、蒙矢疵、濃州明知城攻之時も、早く城に付、壁裡にて深手負申由。知行百貫にて將監一代罷在申、其後在所へ引込。

天正十五年、輝政樣へ於岐阜被召出、二百石被下。與三右衛門相果、跡式養祖父半兵衛兄に被仰付。

九八、那須半兵衛。

文祿二年、輝政樣へ無足にて被召出慶長五年、石田治部少輔御退治之刻、十九歳にて御供仕、岐阜城之本丸大手門脇へ、福島左衛門大夫殿先衆一手に、御家中にては尾關八兵衛・坪田八郎・梶浦彌三郎・半兵衛四人、門脇之壁に付候由彌三郎は鐵炮に中り打死仕、八兵衛も少手負申候由。同年、播州へ御入國被成、半兵衛に三百石被下候。同十六年より武藏樣へ御奉公仕候。大坂御陣には御目付被仰付剰物ゑつる被仰付候由。五月七日、大坂落城之刻、人並にあさぎ物取申由。元和元年より、少將樣へ御奉公仕備前にて二百石御加增被下、都合五百石に被仰付候由。少將樣御代に黑母衣被仰付、江戶御普請奉行被仰付、其後御馬廻り被仰付。其後寺社並御城代御足輕二十人被仰付。其後御旗奉行被仰付。萬治三年六月十七日、病死。

九九、養子 那須忠次郎。

土肥金右衛門二男にて御座候。那須半兵衛孫にて御座候故養子に仕。

跡知五百石之内三百石被仰付、草賀宇右衛門組被仰付寛文五年九月二十三日、病死。

忠次郎實祖父土肥内記、信長公に罷在、東尾州張之內、篠木・柏井兩所にて知行被下、篠木に在宅仕三千石計り取申候由。實祖父土肥主水信長公に罷在、其後秀次公にても内記知行程被下候由。其後福島掃部殿伊勢龜山に御座候時、浪人分にて三百石ばかりのあてがひにて居申候由、實父土肥金右衛門京極丹後守殿に罷在百五十石被下候由 慶長十年武藏守樣へ被召出二百石被下候明曆三年、病死致し、跡目彥太郎に無相違被下。

一〇〇、那須半兵衛。

岸藤右衛門組、三百石、二十八歳。

寛文五年十一月十八日、忠次郎跡目無相違三百石被仰付同七年六月二十五日、岸藤右衛門組に被仰付。

一〇一、中村源兵衛。

朝倉茂景殿に罷在候時分、中村と申所名田を被下候。其後蜂谷出羽守殿に奉公仕其後秀吉公へ被召出三百石被下、尾州がくでん御陣之時より御奉公仕候由。其後病死。

一〇二、中村閑齋。 若名源三郎と申。源兵衛存生之時より秀吉公へ被召出二百石被下小田原御歸陣之節より御奉公仕り、源三郎病死跡目無相違三百石被下、名も源兵衛と罷成候、自分に被下候二百石被召上。

大坂落城以後、元和八年、御雇分にて少將様江戸御供仕候、御合力米八十石十人扶持被仰付。其後本米二十石御加増被下候。寛永十四年、三百石に被成下候。正保元年十月三日、七十六歳病死。

一〇三、中村徳左衛門。 京極修理殿に無足にて少しの内罷在候。

寛永八年、少將様へ中小姓に被召出、同十九年、閑齋隱居被仰付、家督無相違三百石被下、御馬廻りに被仰付。寛文八年九月三日、於江戸病死六十七歳。

一〇四、養子中村源右衛門。 山崎大膳組、三百石、三十六歳。中村徳左衛門養子に奉願、寛文二年、願之通り被仰付。

同八年、跡式無相違被仰付延寶七年六月二十三日、山崎大膳組に御入被成候。實父は河原藤兵衛にて御座候。

一〇五、西村備後。 三好筑前守方にて三千石給候。三好果候後、荒木攝津守與力にて罷在候、其時にも本知三千石にて河内國守口之城預り申。播州神吉城攻之節三十一歳討死仕候。

一〇六、成田猪右衛門。 八歳之時備後討死。

成長之後武藏守様へ被召出、其後備後守様へ御附被成候。正保三年十月十八日、二百石被仰付候。正保三年、御仕置役被仰付候。同四年十二月十八日、六十石被仰付。慶安二年正月二十日、四十石御加増被下。同年六月十八日、六十七歳病死。

嫡子市十郎に跡目無相違被仰付候。成田氏に改申事御奉公に出不申内より替り申。同年七月七日、市十郎十一歳病死。

一〇七、成田鄕左衛門。 山崎大膳組、百五十石、四十五歳。

同年七月二十八日、新知百石被下候宍粟へ御入部以後承應元年二月朔日、五十石御加増被下延寶七年四月十二日御當家へ被召出、十五人扶持被下。同年十一月朔日、山崎大膳組に被仰付。

一〇八、長井清右衛門。

十四歳にて越前三河守様へ兒小生に被召出、十六歳之時御家老久世但馬御成敗之時、心馳仕候。右清右衛門父は長井善左衛門と申權現様へ御奉公仕小田原御陣以後、身體之儀に付立退蒲生氏郷・上杉景勝兩家に居申由。善左衛門名を替へ長井道存と申其後三河守様へ罷出、武者奉行被仰付罷在候處權現様御構被爲成候付、清右衛門も父一所に立退大阪御陣之刻迄浪人にて父子共に罷在候。權現様御馬之御先に罷出候處に久世三四郎殿を以て何者と御尋被成候、五七年先に御面目仕候長井善左衛門父子と申上候處三四郎殿達にて將軍様之御陣所に罷在候様に上意之趣三四郎殿被仰渡候。清右衛門十八歳大坂陣中、心馳仕候由。御歸陣被成、元和三年、將軍様へ被召出、善左衛門に五千石(内二千石與力十騎 外に足輕五十人、御旗奉行被仰付、清右衛門に五百石被下候。善左衛門相果以後五千五百石之内(二千石は與力十騎)外足輕五十人被仰付、御旗奉行に被召出候于今御朱印、私所持仕候。

一〇九、長井善右衛門。

清右衛門甥にて御座候。養子に仕候處御目見不仕内に養父病死仕候付、跡目不被仰付。右清右衛門果申三日前に板倉左内膳殿申請、善右衛門義いまだ御目見不仕候間御老中へ被仰達善右衛門に無相違跡目被仰付下候と賴申内膳殿御心得被成、則土肥大炊殿へ御申越被下候處、大炊殿此程御果被成、左内膳殿大炊殿へ被仰候。其月に島原へ御立御討死被成候故、(途)斗方無御座候、浪人に罷成、江戸に永々罷在、四十三歳病死。

一一〇、長井善左衛門。

寛文二年極月十五日、板倉内膳殿被仰候て御前へ被召出、二百石被下、湯淺民部組に被仰付候。延寶九年七月二十八日、四十一歳病死。

一一一、長井清右衛門。　湯淺半右衛門組、百五十石、二十歳。

延寶九年(月脱)十八日、跡目百五十石被下候。

一二二、中島新左衛門尉。

代々備中國居住仕候。賀陽郡之内三十貫致所知、同郡小寺片山在城仕候。毛利陸奥守元就幕下に罷成り同郡之侍大將庄伊豆守・同兵部大夫、尼子方に成り、雲州勢之先陣仕、國中毛利家方之城に攻取申時、中島居城へ押來節、遂防戰、尼子勢追崩、數百打取、加増給候由。感狀今に所持仕候。其後備中侍大將根矢與七郎・藥師寺彌五郎、備前瀧ノ口城主仕候節、浮田和泉守・松田左近將監・伊賀左衛門、國中之勢を以て瀧ノ口取卷候時、備中侍大將後卷仕候故、以相圖切て出、數十人打取無事に立退申時、根矢方へ感狀于今所持仕候。此時於妙善寺浮田直家と備中侍共相闘候節、石川左衛門尉・中島加賀守（新左衛門事）・根矢七郎兵衛討死致候、此外惣勢五百餘打死仕候。

一二三、中島大炊助。

備中賀陽郡之内三千五百貫、又千貫加増、合四千五百貫致所知、同國小寺片山に在城仕候。毛利右馬頭輝元幕下にて居申内備中松山城主三村修理をば、天正二年、信長公味方に成て毛利家逆心、國中之數城、備前常山城、所々へ楯籠り之時毛利輝元・小早川佐衛門尉、備中へ出馬、所々之城攻給時中島大炊助爲案内者、先陣仕、度々戰御座候故、千貫加増仕候由、感狀于今所持仕候。天正六年、輝元・隆景播州上月城攻給時、織田信忠公・羽柴筑前殿後詰被成候御戰陣之節清水長左衛門尉・中島大炊助、備中勢八千を以て水之手へ堀寄、水筋を堀切城中難義仕尼子兄弟切腹、山中鹿之助降參、毛利被得勝利歸陣之時隆景備中高松・高山之兩城へ立寄、多年之軍功、今度之忠戰、無類之由、感狀給候。其上備中半國之侍大將を清水長左衛門尉組下に被申付、從藝州侍大將を高松城主に申付、殘半國之侍大將中島大炊助組下に被申付、從吉田勢を被召、信長爲押境目高山城主被申渡候。天正七年、宇喜多直家信長公味方に成、毛利家へ逆心故、於境目度々相戰、得勝利、其時に小早川左衛門佐・毛利治部大夫感悦之書狀數通所持仕候。天正十年、毛利家爲退治、信長公陣代織田御次丸・羽柴秀吉、備中へ御出陣之時、從毛利家信長勢爲押、高松之城主清水長左衛門尉四千二百餘中島大炊助、（長左衛門甥、其上聟故）、爲軍議四千餘にて二之丸に楯籠候。自藝州加勢御座候、數月遂防戰持抱候由。輝元・隆景・元春高松近邊へ出張、御對陣之處清水長左衛門・同月清入道、籠城之勢之命に替り切腹仕候て天下御和議に成、大炊助は兩御大將任御下知存命仕候。高松之城を黒田官兵衛・杉原七郎左衛門へ相渡し、城々之仕置其儘毛利家へ御願、秀吉は御登り被成候に付國中諸仕置毛利治部太輔、中島大炊助に被申付、大炊助は二之丸千騎相

隨、秀吉卿旗本之攻ロ半分出崎持堅數度働御座候、在所之居城自秀吉卿御攻被成候時、弟中島九右衞門能持拘候、無比類由にて從輝元・隆景・刑部卿三千二百貫加增給候感狀今に所持仕候。此時大炊助七千七百貫知行仕候。秀吉公天下一統御治、備中川切、蜂須賀彥右衞門殿・黑田官兵衞殿へ相渡申、淸水・中島在城は宇喜多秀家卿へ被遣候時、秀吉公爲御意黑田官兵衞殿・吉川治部少輔へ被申候は、中島大炊助・淸水源三郎可被召出由被申聞候、大炊助・源三郎斷申上候は、何分にも毛利家中に居申樣に御取成、官兵衞殿へ願申上候由にて不罷出候。其後輝元被申候は大炊助・源三郎に知行遣度候得共、秀吉公の仰を背く恐有にて二百人扶持づゝ給候內秀吉公より隆景へ筑前・筑後被遣節中島大炊助・淸水源三郎呼被越、大炊助に百五十人扶持、外に銀子給候。淸水源三郎・中島又十郎爲合力少知を給、備中より呼被拘候侍を、兩人與力に被申付候。朝鮮御陣之時、隆景御供仕、於朝鮮自大明加勢來り日本勢惣先手小西攝津守引退給時、都之先手隆景此の先手左備粟屋四郎兵衞、右備井上五郎兵衞・淸水五郎左衞門　源三郎事）・中島治右衞門　又十郎事）相備にて大明勢を切崩し、大いに得勝利候節、粟屋・井上・淸水・中島へ同文章之感狀給候。隆景死去之後、秀俊を家督被仰付候節、淸水五郎左衞門・中島治右衞門、伏見へ被召、秀吉公へ御目見仕、御朱印被下大炊助は御暇申上罷備中へ被歸候。御代替、罷退候段不屆に被思召候間、在所へ致蟄居候樣にと山口玄蕃申渡候、大炊助・治右衞門引籠罷在候時、宇喜多秀家卿へ御下知に備中小寺村中島居城之跡地、御免地に被成被下候。其後中島大炊助惣領次右衞門子細御座候て大炊助義絕仕、次男中島宇右衞門を惣領に仕候。從毛利秀就、中島大炊助周防へ參候得と、淸水美作中島筑後迎に參り候、大炊助罷越、毛利長門守殿御逢ひ被成、中國兵亂、高松陣之樣子御尋に付、數日御物語仕候。記錄へ御留其節中島宇右衞門被呼出候處、不足御座候て立退申候得ば、構無御座候故、備中へ引込申大炊助は御懇意之故周防に罷在病死仕候。

一一四、中島宇右衞門。

女子一人御座候、同國根矢七郎兵衞と申者中島大炊助聟にて御座候。七郎兵衞次男與介事、大炊助に孫、于宇右衞門甥にて御座候を養子に仕、娘と申合候。私事宇右衞門孫子與介實子にて御座候。與介病氣にて引込申故、私を宇右衞門惣領に仕候。與介儀備中小寺村先祖城跡御免地外構堀埋地迄蒔田權介殿より除地に被成被遣御懇意に御座候て、今に小寺村に居申候。根矢七郎兵衞代々備中賀陽郡服部鄕三千貫、所々にて二千貫、合五千貫所持仕候、數代窪木八幡山城主にて御座候、中島大炊助聟

にて御座候、毛利輝元幕下にて居申内、秀吉公同國高松城御攻被成候節、根矢七郎兵衛三千餘を相譜へ、冠山之城主仕候時、秀吉公御旗本數萬騎を以て冠城御取巻、數日御攻被成候節逐防戰堅固に持抱候處火難にて不存寄落城、七郎兵衛五十騎計り召連、敵之備切拂立退申節大勢を以て御取巻、御打留可被成由御座候時、七郎兵衛度々小返仕、數十人打取、其身も薄手數候無比類働仕候由、從輝元・隆景感狀給候由、今に所持仕候。宇右衛門儀、小寺村に引込居申内、元和元年、大阪御陣出來之節、從類七八人召れ大阪へ參り山口左馬之助を賴、籠城仕候。木村主計相備にて居申内五月六日、木村長門守・同主計・山口左馬助・内藤新十郎、八尾筋へ罷出山田村之内にて逐防戰之時、宇右衛門[illegible]五十一人へ首十二打取申明日七日大阪を立退申節人馬召連、蒔田權介殿知行所攝津國熊野田村へ落着申。先權介殿御申籠城之内蓋紛骨退口に人馬を召連候段、名譽と思召と被申、其後も毛利長門守殿構御座候て浪人仕居申。

一一五、中島治大夫。 湯淺半右衛門組、百五十石、四十三歲。

寛文元年、少將樣御參勤被成候時、山田道悅御聞に達候。御歸國被成候はゞ可召出申聞候處、一兩年眼病氣にて居申內、御代官被召抱之節、其身も在役相勤申內眼病能之、右之御意も有之候間外聞能樣に可被召仕と申候に付、御奉公罷出候。

寛文三年三月三日、少將樣へ初而御目見仕同五年十一月、侍從樣へ初而御目見仕、備中秦村に在宅被仰付、代官相勤申。春夏は每年村々池・川御普請奉行相勤申候。同年九月、御餌指半助欠落仕備中井山寶福寺へ參居候間渡遣與次兵衛と私出候樣安藤德兵衛より願、手下之者共も追賦參候。與次兵衛出合申候得共、井山は御朱印地、門前は蒔田權佐御知行所にて遠慮仕候、私儀權佐殿へ懸御目候、寶福寺も心安御座候故、權佐殿御家來中、寶福寺へも斷を申届、寺家中內、權佐殿御家來中百姓二百計り召連出合申、與次兵衛殘る御代官共おも近付に仕、半助を尋申候處に寺內塔之二重目に父子共に取籠り居申、何も打寄、半介をすかし出し召連德兵衛宅へも屆候。依之日置猪右衛門方へ呼被申欠落者他領に居申候、早速召捕出御機嫌之御意之由被申渡候。同四年、備中御領分見廻。

橫谷南村之山へ、他領之百姓私を出し古來より入來申、御領分川西之御百姓、水谷左京殿御領分山へ入申候處、右之山左京殿より御留被成候付、川西之御百姓申上山無御座迷惑仕、同御領分山之由を申見延山札を取申候へども他領村々より申候新規に川西御百姓見延山へ入申義不成由申、馬之鞍を取、日々打合仕候公事に成申、都志源右衛門・淺邊與次兵衛相濟申樣に色々

談合仕候得共埒明不申、他領百姓江戸へ被下、公儀へ可申上と申時、郡志源右衞門申候は、私に他領之奉行と出合古來之儀抔申聞せ和合仕候樣に談合仕候へと指圖候故、他領奉行と出合申候得共往古より川西御百姓見延山へ入申儀不承傳と申、埒明不申候時中島大炊助地頭仕候時も此所に出入御座候、其節之繪圖・書物、私より見せ候得者、何分にも私に濟申樣にと、他領より賴申候に付、源右衞門內談仕、他領へは札代を少し下げ遣之、御領分川西五千石計りの御百姓新規に見延山へ入薪仕悅申。

延寶三年二月、御代官御赦免、同年、從少將樣御意にて備中國高松陣之節軍馬之圖、同國所之戰之覺書、可差上旨、靑木善大夫申渡候故、差上申。諸方御尋被成候得共、無御由御意被成、御機嫌宜敷旨、靑木善大夫申渡し差上申、御留書被成候。私被召出候首尾、十五町餘之新田高可被仰下由にて新田所拜領仕漸出來仕候刻同所之御新田所堤破損仕候節、私新田へも潮入作物も捨申候。其節神圖書組にて居申、圖書申は、私新田差上候はゞ古田百五十石被遣、拜借米も被遣候樣圖書願上可申旨申聞候。延寶三年八月、池田七郎兵衞組にて罷在候節は御暇之願申上候。同八年六月六日、高百五十石御知行被下、並重次郎手前より拜借米百八十俵拜借仕候。新田入用殘る他借は百五十石之物成を以て、九年に返濟仕候樣にと別段に簡略被仰付候。天和三年六月二十九日、湯淺半右衞門組に被仰付。

一一五、子源三郎。　九歲、天和二年六月二十八日、御目見仕候。

一一六、中村庄之助。　初謙信にて奉公、少知給候。其後尾州生國にて御座候故罷歸、又丹波福知山へ參り、浪人にて居申候。

一一七、中村助之進。　公方義輝公へ御奉公仕其後三好殿を賴り泉州茂津と申所に浪人分にて罷在旨候。

一一八、中村四郞兵衞。　世悴之時、前田左近殿に奉公仕、五十俵に六人扶持被下候由。其後淺野紀伊守殿にて六十俵十人扶持被下候。其後百俵十人扶持加增被下候由。其後浪人仕武藏守樣へ二十八歲之時被召出候。本俵三十俵五人扶持被下、其後度々御加增被下、百俵に七人扶持被下候。正保四年正月十五日、知行高百六十石に御直し被下候。大坂御陣落城之時、致追討則首懸御目候。

芳賀內藏允・淺山治左衞門と申者寅年、江戶御奉行に付伊豆山に於て大石・栗石・金銀、御入用之御用被仰付候處伊豆山にて、

金銀拂不申、治左衛門罷上り候付、伊豆之石屋大阪冬御陣所へ參、右之段芳賀内藏允へ斷申に付、治左衛門手前故申候得者、治左衛門申は手代之者遣申故、切々相尋候へば、攝州郡山に居申由聞立申此者連出し候得者、金銀相濟候間、此段川を（マヽ）不仕候迷惑に存候得共手代輕可申候間御暇被下候樣にと申上候に付、内藏允御前へ被申上、御暇被遣候へば其儘大阪城中へ籠申落城之後京都五條寺町筋に隱居申と訴人内藏助方へ申來候、武藏守樣へ右之段申上候へば、早々踏殺可申旨被仰渡則打手四郎兵衛被仰付、罷越踏殺申、其時内藏允家來村瀨半之丞召連候。

寛永九年より郡奉行被仰付十ヶ年相勤申候。慶安三年七月、病死。

一一九、中村十左衛門。若原監物組、百五十石、六十一歳。

寛永十四年八月十五日、御目見仕、慶安三年九月朔日、跡目無相違被仰付候。切々御毛見に出申、寛文十年極月四日、學校御用被仰付、延寶元年七月御免、銀五枚被下候。延寶六年十月、御城代組に被仰付、御武具藏御用被仰付候

一二〇、子淺右衛門。寛文六年三月十五日、十一歳少將樣へ御目見仕同年九月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

一二一、岡村藤兵衛。羽柴秀家に罷在候。秀家御身上相果候以後赤坂郡斗有村へ引越、耕作仕居申。

世悴岡村甚作御當家へ御醫者被召出、三百石被下候 福照院樣へ御附被成候。甚作死後跡目玄林に被下。玄林病死後、家に三人扶持被下候。二十四年以前、病死仕候。

一二二、岡村五郎左衛門。玄佐（林）弟にて御座候、私八歳之時病死仕候。

一二三、楢村彌五右衛門。若原監物組、四十五俵四人扶持、五十六歳。

母方之祖父楢原彦右衛門と申秀家に罷在、其後戸川肥後守にて二百五十石給、同縫助殿迄彦右衛門悴彦右衛門奉公仕候。私儀五歳にて母に離れ、八歳にて父に離れ、楢原彦右衛門に懸り、養育せられ候故、楢原を名乘申。

萬治三年正月、御歩行に被召出候。寛文二年五月、一人扶持御加増被下、同極月、御横目役被仰付、五俵御加増被下延寶元年、惣並御加增五俵被下、同八年五月、御小姓に被成、御居間御番被仰付。

一二四、中山又左衛門。

勝入樣御代被召出、御奉公仕候。因州より備前へ御國替之翌年、八十一歳にて病死。
嫡子は於因州病死。次男は、少將樣へ御步行に被召出候處、立退申。三男彦左衛門、私實父は、幼少より他家へ遣置候。其後御國へ參り、浪人之内、病死仕候。

一二五、中山長左衛門。右之通故、坂井長兵衛弟を聟養子に仕置申候。

又左衛門跡目無相違長左衛門へ被仰付、御步行に被召出候處、寛永二十年、病死仕候。

一二六、中山長左衛門。納戸奉行、百石、五十七歳。實は中山彦左衛門嫡子にて御座候。幼名龜之介 長左衛門に男子無御座に付、私養子に仕置候。

跡目本俵二十俵四人扶持被下候。寛永二十年暮より十五歳御台所通に被仰付候。慶安元年、十九歳御步行被仰付候。承應元年春、於江戶侍從樣へ御附被成候。萬治元年七月、御步行橫目被仰付、五俵御加增被下、同三年正月、十人組に被仰付、寛文七年極月、中小姓被仰付、五俵御加增被下、同十年中奥へ可相詰旨被仰付、延寶元年、御納戶役被仰付、貞享元年二月十六日、新知百石被下候。子、長大夫、延寶八年九月十五日、御目見仕候。

一二七、內藤數右衛門。

於因州被召出、鈴木登之介手前大筒手傳役義被仰付候。於備前寛永二十年二月十八日、病死。

一二八、內藤數右衛門。七十俵四人扶持、五十九歳。川村太郎作三男にて御座候。幼少より番大膳を便り罷在候。寛永十九年四月朔日、十六歳にて內藤數右衛門養子に罷成候。

同二十年、養父跡目本俵二十五俵四人扶持無相違被下候。同三月二十一日、池田出羽申渡、則大筒役相勤申、同二十年七月七日、於萬成十二町を擣可申由被仰付、御檢役丹羽藏人・御橫目生駒八左衛門・玉付役岡田喜左衛門・御步行目中村五郎左衛門罷出候、其時擣申者松原助左衛門・野間久右衛門・山中勘兵衛、私儀は養父數右衛門病氣に付名代罷出候。星入・町着能御座候付藏人より書付差上候處登之助被爲召、若輩之稽古に四人之內を抽候樣、御機嫌に被思召候由、難有御意を蒙り候。承應元年八月、東之藥師之堤より門田村十町之場大筒擣申候樣に被仰付候、其節戶川土佐守殿・木下淡路守殿、御入來、陞光院にて御覽被成候。擣申者以上十四人、三百目玉之御筒にて幕入仕候。依之白銀被下候。同八月十八日、草賀宇右衛門。

岡田喜左衛門、御檢使にて右町場にて百目之捧火矢搏申候處町着・燒共慥に有之候旨被聞召、御重寶に被爲思召、依之百目之火矢筒御預被成候。萬治二年二月七日、本俵五俵御加増被下、御歩行横目役被仰付。寛文元年、私兒鏡天京都妙心寺より播州姫路慶雲寺へ被下、不思議之死に及申、此儀穿鑿爲可仕御暇申上、七月六日、御暇被下、江戸へ罷下、公儀へ訴訟仕、御評定所へ度々罷出、私共利運に落着被仰付候趣、松平伊豆守殿被仰渡候、件之趣少將樣へ菅加宇右衛門・鈴田夫兵衛を以申上候得者、歸參被仰付候。同二年、前々之通御歩行横目役被仰付、同七年正月二十三日、御歩行横目役御免被成、御小姓組に被仰付、中奥に詰可申旨、池田伊賀守申渡候。延寶六年十一月二十四日、於西之丸御加増二十三俵被下候。同六年六月二十四日、於西之丸少將樣御銀奉行被仰付、御役米三十俵被下候、外に七石二人扶持、手代一人被下候間、可召抱旨被仰渡。同八年六月、御膳奉行に役替被仰付、同六月十九日中奥詰被仰付、貞享元年、御在江戸中御長柄二十人引廻被仰付、並火事之節水まとひ裁判被仰付。

一二二九、子小八郎。　延寶二年二月十五日、御目見仕候。

一二三〇、中山又左衛門。　四十五俵四人扶持、四十一歳。中山彦左衛門次男にて御座候。

寛文二年正月二十八日、御歩行に被召出三十一俵三人扶持被下候。山田彌太郎組に被仰付候。延寶二年正月九日、御近習奉行に被仰付、九俵一人扶持御加増被下候。同十二月二十六日、熊谷清八郎組に被仰付、相役之肝煎被仰付候。天和元年十二月十八日、御小姓組被仰付、五代御加増被下、澤權大夫組に被仰付。同二年七月十五日、中奥被仰付。

一二三一、森屋孫兵衛。　嫡子森屋六左衛門、二男森屋七郎兵衛、三男森屋四郎兵衛と申。

彦（孫カ）兵衛・六左衛門・七郎兵衛三人は、於播州輝政樣へ御船頭に被召出、二十石三人扶持づゝ被下御卒去以後御人分之節、何も一同に一割減十八石三人宛に被仰付候。左衛門督樣へ御附、備前へ御供仕候。左衛門督樣御卒去被成其後宰相樣へ御奉公仕候。宰相樣御卒去之後相模守樣因州へ御國替之時御船奉行相對にて其儘罷在候。少將樣御入

國、直に右之御切米にて三人共に御奉公仕候。孫兵衞は御入國一兩日過病死仕候。嫡子六左衞門御加子引廻、其上能相勤申由にて兒島郡大崎村御代官被仰付候。

一三二、森屋四郎兵衞。後、六左衞門と改名。

伊豫國松平美作守殿に奉公仕候處寛永十五年二月、浪人仕、備前へ參、同年三月、池田出雲守樣被召出、備中へ備同十七年、出雲守樣御遠行被成御世繼無御座に付浪人仕候。

同年六左衞門病死、子無御座に付爲跡目召出され、無相違十八石三人扶持被下候。名も六左衞門と替申。萬治二年、病死。世悴龍左衞門幼少に付跡目を俵十五俵三人扶持被仰付、其後延寶二年十五俵御加增被下、貞享元年十俵御加增被下候。

一三三、中西利右衞門。七十俵四人扶持、五十七歲。森屋六左衞門一類にて御座候得共、實父淸次郎知音にて御座候に付、養子と仕候。

明暦三年四月九日、士鐵炮に可被召出候由、御船奉行神圖書を以て被仰渡候。然共年若に付、道中御乘物邊に成共御前近く御奉行申上度故、同日御步行に被召出被下候樣にと圖書を以て奉願候處御步行は士鐵炮より格も劣り、御切米も少く候、年若成者奇特之願申上候由御感被遊、願之通御步行に被召出、御切米は士鐵炮並本俵二十五俵三人扶持、御步行並に被仰付、安藤德兵衞組に被仰付。萬治三年十二月十六日、本俵五俵一人扶持被下、御橫目役則水野三郎兵衞組に被仰付、寛文四年十月二十一日、津田重次郎組に被仰付、同五年二月十七日、御小姓組中奧詰被仰付、伊木賴母組に御附被成、延寶元年十一月二十八日、同俵二十三俵御加增被下、都合七十俵四人扶持拜領仕候。同二年四月十三日、野村御涼所にて四十間目當被仰付、玉十にて四ツ中り、内三ツ星仕候、御前へ被召出、御持扇被下候、同四年六月十五日、大筒早打被仰付、心懸奇特に被思召之由にて被召出、御羽織被下候。天和三年五月二十八日、池田左兵衞支配被仰付、同年閏五月十五日、澤權大夫組に被仰付。

實曾祖父近藤帶刀伊豫國桑村郡河内城居申候由。實祖父近藤太郎左衞門•久留島右衞門佐殿に物頭仕在候。私實父幼少之時、太郎左衞門病死仕候而其節より浪人仕伊豫に罷在候。實父近藤淸次郎高麗陣之時、十四歲にて福島左衞門大夫殿伊豫之國府に御座候時被呼出高麗へ供仕、十七歲にて罷歸り、十七石給候由。關ケ原にて三十二歲之時、心馳仕候付二百石之御加增被下

二百十七石之折紙給候。但十七石に二百石之加増給候段働大分たる故との旨折紙に戴給候由。其後於藝州國廻之節備後東條にて喧嘩仕、相手仕留立退右兩所之敵多く御座候付、忍て大阪に罷在候。伊豫今治に藤堂宮内少輔殿御座候節、浪人にて彼地へ參り居申時、加藤左馬助殿御家中に太刀之師を仕浪人御座候、彼は不形儀仕、今治へ退散候、依而左馬助殿より宮内少輔殿へも來召捕被遣候樣との事に候へ共、遲々仕折節、其邊に居合飛入首尾能召捕、左馬助殿へ御渡候。大阪御陣之節、右之趣意故か、弓之達者か、宮内少輔殿より弓之者二十人宛、深田又兵衛と兩人に被遣、藤堂和泉守殿手に加り御陣相勤、歸陣以後、本知にて可被呼出との事に御座候得共、年寄身を靜に罷在度御斷申、今治に居住仕候。並地一町餘永代作取に可仕との折紙給はり、其上一萬石代官心附に被申付七十七歳病死。

一三四、長井忠左衛門。

美濃國齋藤山城守殿に罷在、山城守殿子三人御座候、嫡子義龍、二男喜平、三男彌平次と申。山城守殿常々義龍之上たるの仕たる生付を被見、弟二人之内に跡式繼すべきと被改、義龍之仕懸惡敷御座候付、義龍此の氣色を悟り、以後は必ず可被追出と被存、家老共と心を合せ、山城守殿鷹野に被出候時分、二人之弟を振舞二人共に殺害被致候。山城守殿供に參候侍共、妻子人質に取、義龍城に入合戰之定有之、合戰前日忠左衛門義龍の前に出て、明日之御合戰は御利運無疑候、山城守殿私抱取可奉申候處、其座に小牧源太と申者山城守殿御首は我等取可申と申。明日及合戰、山城守殿方は雜兵共千五百、初之陣に義龍方敗軍仕候、山城守殿高座に登り、再拜を持樣子被見合、義龍も高所に登り、再拜を持被居候體を山城守殿見被申、義龍はいつの間にケ樣に軍功者に成たるや、此軍必定負なりと被申、義龍能時分を計り、再拜を振打て取懸候、山城守殿方は小勢、義龍方は大勢、備正く、兵いさみ、勝利に成申。前日忠左衛門申候如く、山城守殿を抱、義龍の陣所へ趣んと仕候處、小牧源太山城守殿を後より鑓にて突申故、忠左衛門は無是非山城守殿を放申候。其後源太山城守殿之首を持、義龍之見參に入、昨日申上候如く御首捕せ申候へば、義龍何となく泪を流し被申由。其後忠左衛門義龍の前へ參り、昨日申上候如く、山城守殿を抱、此方へ趣候處を源太後より突申候に付、源太に御死候を渡し候へと申上候。義龍替而言葉も無之、諸人不審に存候體なり。其時忠左衛門、其証據には御鼻を噴切せと具足のわたつみより取出し、義龍の御目に懸候。忠左衛門兼て御親子之間之事に候へ者、山城守殿を抱取、義龍之陣へ參り、御申直し可申との所存にて御座候、其上長井は齋藤の一家に御座候故、右之通に仕候由。異

名を杉崎と申候、子細は何時も備の形、杉なりの先に進み申故と承傳候。其後高野へ引込申處、信長公へ被召出、知行二千貫被下候。後法師の長井道銛と申。後輝政様へ被召出、御合力米被下、度々御前へ被召出、軍物語申上候、九十八歳の存命にて病死仕候。

一三五、長井新太郎。忠左衛門嫡子にて御座候。織田城之助殿に罷在、二條御城にて明智弑逆之時戰死。

一三六、纐纈(ハタ)六右衛門。長井忠左衛門聟にて御座候。

池田庄九郎様へ御奉公仕、其後輝政様へ被召出、天正十四年九月十二日、百貫之御折帋被下候。同十八年十月十八日、百六十石之御折帋被下候。文祿三年十二月十二日、四十石御加増被下、都合二百石拜領仕候。關ケ原陣之時分合渡川之瀬踏被仰付、慶長五年八月二十二日、一人先へ瀬踏仕、新知納にて敵二人打取、四十二歳にて戰死仕候。右之首尾、八田豐後十八歳之時、間六七町賜り見申と語申候由。右拜領之御折帋爾今所持仕候。

一三七、纐纈三十郎。九右衛門嫡子にて御座候。

十三歳より武藏守様被召仕候、六右衛門討死仕候後、輝政様へ被召使、慶長六年十一月三日、於播州三百五十石之御折帋被下、其後祖父忠左衛門名氏を名乘り候へと被仰付、忠左衛門に罷成、長井三十郎と申。慶長九年八月二十七日、於備前四百五十石、輝直様御判御折帋被下候。同十五年八月二十七日、於備前高同前。輝直様御判之御折帋被下候。此節より、長井九郎左衛門と申す也。同十八年十一月七日、於播州高同前。玄隆様御判之御折帋被下候。大坂冬陣之節、香西蓬殿を以て御先手を望候へ共、御免不被成候 夏陣於播州西宮水野數馬を以て四月二十八日、又御先手を望候へ共御免不被成候。

同二十九日、數馬を以又申上候趣者、不肖之者に御座候へ共、被聞召及候事も可有御座哉、私祖父は於先と申、長井新太郎は私伯父にて御座候、是は織田城介様へ御供仕、打死仕候。父六右衛門は輝政様御供仕、新加納にて打死仕候。ケ様之者之子孫にて御座候間、被遣被下候はゞ、必首尾好罷歸、御目見可仕候、若手に合不申候はゞ、二度罷歸申間敷と達而申上候處、武藏守様御意に、今度之御陣、御大事に被思召候、御旗本に罷在候へ、御歸陣被成候はゞ、御鐵炮之明直に被仰付、其上身上を宜様可

被仰付候間、存留り候へと達而の御意に奉隨候。五月七日、小和田川を瀧川出雲・大久保源左衛門、其次長井九郎右衛門越申候。中津川向之堤へ瀧川出雲・大久保源左衛門・加藤九左衛門・長井九郎右衛門四人着申中より、九郎右衛門一人拔懸仕、少先へ乘上申候處、出雲見附堅く留申候。

於因州御暇申上、浪人にて病死。

一三八、熊田所左衛門。　森右近樣へ罷在、右近殿御果被成、浪人にて病死仕候。

一三九、長井權介。　四十七俵四人扶持、四十三歲。　寬文元年十一月八日、中小姓に被召出、三十俵四人扶持被下候。

一四〇　子權四郎。　貞享元年二月十五日、十三歲にて御目見仕候。

一四一、中村又左衛門。

於因州少將樣へ御步行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、其後五俵御加增被下、御近習步行被仰付。正保三年八月二十二日、病死。

一四二、中村忠大夫。

慶安二年正月四日、少將樣へ御步行被召出、承應元年九月二十三日、病死仕候。私弟中村才右衛門に跡目被下候。

一四三、中村八郎左衛門。　五十俵四人扶持、四十七歲。

正保三年十月十五日、養父又左衛門跡目十五俵二人扶持私八歲之時被下候。同四年十一月朔日、御次通に被仰付。萬治二年正月五日、御步行被仰付、本俵五俵一人扶持御加增被下候。寬文七年十月十三日、御横目役被仰付、十四俵一人扶持御加增被下候。天和二年二月二日、御小姓組に被仰付、五俵御加增被下、澤權大夫組に被仰付、在方吟味役被仰付、御役料米四十俵・足輕一人・人足一人被下候。

一四四、內藤五郎兵衛。　大野修理亮所に罷在、大阪陣に討死仕候。

一四五、内藤多左衛門。大阪落城以後、浪人にて病死仕候。

一四六、渡邊多左衛門。承應元年二月、渡邊武兵衛方へ養子に參候處、武兵衛長病にて御奉公難成段御斷申上候得者、家督無相違四十俵四人扶持被仰付。

同十二月二十八日、少將樣へ御目見仕、明暦元年十一月、於江戸御近習歩行被仰付。寛文七年、御横目役被仰付、五俵御加增被下候。延寶二年六月、中小姓被仰付、御六樣へ相詰申。同四年十月、小堀主殿組に被仰付、同八年正月二十三日、澤權大夫組に被仰付、同八年正月、中奧被仰付、御酒奉行相勤。五月、御賄方御用被仰付候。貞享二年八月、御賄方御赦免、同十二月二十三日、御膳奉行被仰付。

一四七、内藤八助。四十五俵四人扶持、二十八歲。本氏内藤に成申。

延寶元年十一月二十八日、御少將樣へ御兒小姓に被召出、四十五俵四人扶持被下候。天和三年閏五月十四日、澤權大夫組に被仰付。

一四八、今井鄉右衛門。尼子殿に罷在申候。永祿年中尼子殿落去之時分戰死仕候。

一四九、長島加右衛門。尼子落去之時分は幼少にて、其後成長仕今井七十郎と申阿波國にて何方へやらん奉公仕候内、喧嘩仕、相手を仕留立退。

名氏を替り、參河へ參り、武藏樣御幼名新藏樣と申奉り、いまだ御部屋に被成御座候時、芳賀内藏允其時之名兵助と申。取次にて文祿四年、御鷹役義に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。靏合羽申候處、爲御褒美御小袖並米二十俵被下候。天和二年、武藏守樣六月十三日御卒去被遊候節、禪門被仰付道伯に成申候。無役に被仰付候。十三年改命仕候。

寛永六年八月二十八日、病死。

一五〇、長島彌大夫。

元和五年、少將樣御歲九歲之時被召出候。幼名、惣八郎と申し 十三歲より御奉公仕候。御扶持三人、御召下し御時服被下候。

寛永六年、道伯跡目無相違被下候。同十年九月、江戸にて大鷹被召上。同四月、御國へ罷歸、靏合羽申、爲御褒美米

十俵被下候。同十六年、下總國泉と申す處へ雲雀鷹被仰付。（江灣・藻髪と申御鷹は五月より八月迄相勤申候。）同十七年、江戸にて大鷹被召上御國へ罷歸雷合羽申、爲御褒美銀五枚被下候。寛文元年正月十四日、御中小姓に被仰付、天和二年七十三歳病死仕候。

一五一、長島彌大夫。（鷹匠引廻、六十二俵四人扶持、三十五歳。）

寛文四年三月三日、十五歳御目見仕、同年十一月、侍從樣へ御目見仕。延寶元年、少將樣御參勤被遊、二月二十八日御出船御供被仰付候。爲御雇分御銀一貫目、御扶持五人被下候。天和二年八月八日、跡目無相違被仰付候。

吹野磯太郎　寫

守水宗模　校　㊞

吉備温故秘錄卷之七十八（干城七）終

吉備温故秘錄卷之七十九(原本無卷數)

大澤惟貞輯錄

干城 八(原本干城一三)目錄

一、丹羽助兵衞。 二、丹羽山城。 三、丹羽平大夫。 四、山城二男 圖書。
五、山城三男 勘解由。 六、山城四男 兵部。 七、眞田將監。 八、丹羽平大夫。
九、子 勝次郎。 一〇、眞田藤三郎。 一一、丹羽勝解由。 一二、丹羽藏人。
一三、丹羽藏人。 一四、丹羽七郎左衞門。 一五、子 大助。 一六、丹羽治郎右衞門。
一七、丹羽助大夫。 一八、丹羽左平太。 一九、丹羽次郎右衞門。 二〇、(姓氏書落せり)
二一、子 治大夫。 二二、丹羽惣兵衞。 二三、丹羽惣兵衞。 二四、丹羽惣左衞門。
二五、西浦彌左衞門。 二六、西浦源左衞門。 二七、子 惣左衞門。 二八、西村孫之進。
二九、西村源三郎。 三〇、西村小四兵衞。 三一、西村小兵衞。 三二、西村吉兵衞。
三三、西村九大夫。 三四、西村六之助。 三五、西村久五兵衞。 三六、丹羽八右衞門。
三七、丹羽與一左衞門。 三八、丹羽平之丞。 三九、養子 丹羽小平太。 四〇、西村彥右衞門。
四一、西村久大夫。 四二、西村杢兵衞。 四三、戶田久兵衞。 四四、能勢勝右衞門。
四五、能勢勝右衞門。 四六、子 權之丞。 四七、能勢助五郎。 四八、野々村四郎兵衞。
四九、野々村平大夫。 五〇、野々村平大夫。 五一、野々村次郎兵衞。 五二、子 平七。
五三、野々村市平。 五四、養子 八兵衞。 五五、野々村平太左衞門。 五六、子 平助。
五七、野中吉右衞門。 五八、野中市左衞門。 五九、野中忠三郎。 六〇、野中市左衞門。
六一、野間忠右衞門。 六二、野間忠七郎。 六三、野間五左衞門。 六四、養子 野間太郎兵衞。
六五、野間三大夫。 六六、野間久右衞門。 六七、野間三之丞。 六八、野村越中。

吉備溫故秘錄卷之七十九（干城八）目錄終

（朱書）
郷政卒條には不採

吉備温故秘録　巻之七十九（原本無巻数）

大澤惟貞輯録

干城　八（原本干城一三）

一、丹羽助兵衛。　生國、尾張。勝入様被仰上、信長公へ被召出、於尾州桶迫永祿三年今川義元合戰之節、三十七歳にて討死仕候。

二、丹羽山城。　生國同斷、幼名千尋。父助兵衛死後、助兵衛と申。其後淡路と申處に播摩宰相様三ケ國御領被成候時、淡路を憚り、山城と申候。

山城十三之時、信長公勝入様へ被仰候は、丹羽助兵衛せがれ物にも可成眼ざしに付、つかい立見候へと被仰候に依て、伊木清兵衛取次にて勝入様へ被召出、御奉公仕候。山城義（マヽ）・稻葉内匠・谷出羽・渡邊勝兵衛・辻古作・高田道明寺・可兒才藏、七人申合、武勇を勵み申由、世上風說申候由。其身一代之間、三十七度之場數、一度もおくれ不申。天正六年寅、荒木攝津守攝州伊丹にて籠城いたし候節、勝入様御出馬被遊候處、倉橋と伊丹との間、鴻口と申所にて强働仕、勝入様御感被成候旨承傳候。同十年明智日向謀叛之刻、筒井順慶城州槇島出し申さるゝ心懸之風說御座候に付、日置猪右衛門・土倉四郎兵衛・丹羽山城を從勝入様御使者に被遣候節、各々申上候は、順慶若味方に同心不仕候はゞ、其場を去らせず打果し可申旨申上罷向ひ、順慶に致對顏、右三人之者共、順慶側につと罷寄、兩脇へ詰懸、勝入様被仰趣申渡、無異議槇島を味方へ請取り、勝入様思召之儘に仕候由、濃州九鄕之城を從勝入様山城に御預け被成置候。上下百計り御座候。淸水と申敵之城へ致放火、引入申時分、稻葉一族千計りの人數にて九鄕・淸水兩城之間を障切候處に山城下知仕り、乘割、無異議九鄕之城へ籠り申候、一鐵勢寄來繰立攻候得共、堅固に持堅め、見合門を開き突て出、數多打取申候、中にも一鐵甥共日の大將分にて參候を討取、悉追拂申候。勝入様大に御感之御書、並爲御褒美のし付の御脇指被下候由、御書は於今所持仕候、天正十二年美濃國にて播磨宰相様御知行割被成候節、御家老共には秀吉公御判形にて御知行被下候、山城も千五百貫之御折紙被下候、御折紙今に所持仕候。天正年中、播磨宰相様三州吉田に被成御座候刻、山城所存御座候て、親子一所に立退申候處、淺野紀伊守殿甲斐國に御呼被成、三千三百石被下候。文祿年中、高麗陣之時、於東國木曾城淺野紀伊守殿攻口にて山城一番乘、龜田大隅二番乘仕候、然る處に淺野左衛門佐一番乘と披

露候故、山城・大隅詮議を可遂と申候へ共、佐兵衛佐は家老と申、殊に御一族之事に候へば、於異國同士軍も不可然と存、不及沙汰候由に御座候。蔚山にて敵朱の鉤鑓を以て不意に突懸候故、山城長刀を提、左手にて敵の白刃を取留打取申候、其時左之中指・頭指二つ〻、疵を蒙り候由。慶長五年庚子美濃國樫原彦右衛門、砦紀伊守殿・福島左衛門大夫殿、其外関東勢攻圍候、山城此時法名德入と申、馬上にて鑓を提罷出候處、敵方より從なる者一人、德入を目懸一文字に馳來る、德入鑓を以て内冑を突候、二度目に胸板を突倒し、家來之者に致下知、首取らせ候はんと存候處に、味方よりすはた者一人かきの羽折すそに立波付たるを着候が、德人に向ひ此首被下候へ、私之高名に仕度由申候、味方にては誰が家人ぞと尋候へば、淺野左衛門佐内、何ノ八郎左衛門と申候、則首を遣はし申候、八郎左衛門此首を左衛門佐陣へ致持參、其手一番首に注し恩賞に預り候由。其後、此八郎左衛門申候は、自分高名仕候處、德入奪首可致仕形御座候由を申候を承、德入日頃の武邊も皆左樣に表裏成事に可有と噂申候由、德入承り傳へ候得共、左衛門佐は、左樣申間敷と取上不申候。然共關ヶ原落去已後、紀伊守殿諸士に一獻を進められ候事御座候、其席に左衛門佐德入參會仕候、德入能次手に存、左衛門佐に承度事御座候、我等表裏の由御噂と承傳候、實否承度由之處、左衛門佐申候は、如何にも其事に候、家來八郎左衛門心馳之働いたし候刻、奪首可被致仕形候由承候故、德人に不似合之義と存し、日比之武邊も表裏候哉と申候、德入扨は實にて候か、其八郎左衛門取申候首、内冑に鑓疵御座候、かの八郎左衛門徒屑にて腰刀一つを頼みたる者の取たる首に鑓疵御座候、吟味も不被致候哉、初より此事可申上候へ共、一旦とらせ申首之事に候へば、二度不申出義と存候へ共、此席にて御申出候、我等鑓疵内冑・胸板二ヶ所手を負せ申者にて候、かの八郎左衛門達而望候故、何れ程之者戰場へ歷、首を取り、高名致たがりし事尤よと存、其方一分にて是程の首一つ取申事は、手間入可申、はや取候へと申、揚させ申候。尤も八郎左衛門は下﨟にて、惡口申共、左衛門佐殿程之人無穿鑿成事は有之間敷と存、日比心にも不懸過し候、若し表裏を申上候はゞ、於高麗東國木會城一番乘と申さるゝ事、無隱表裏にて候、則龜田大隅と存候、木會城一番乘は我等、二番は龜田大隅明白の事に候、さらば此儀僞りにて候哉と、せりつめ候へ共、左衛門佐一句も不出、致赤面、喧嘩に成可申體に御座候。紀伊守殿、德入老聞屆候、堪忍せられ候へと座中へ目を配り被仰候故、双方引退申候、その後八郎左衛門は斬罪候由。同時瑞龍寺砦を紀伊守殿御攻之時、首尾能働共仕候由、紀伊守殿紀州へ御所替之刻、御供罷越候。**慶長五年關ヶ原落去後、紀伊守殿御供仕、大阪へ罷越候。**

同極月従播磨宰相様、紀伊守殿へ御斷被仰、德入歸參被仰付候。同六年四千石被下、同十年千石御加增被下、與力十八人（五百石一人、三百石八人、二百五十石三人、二百石五人、百五十石一人、知行高合四千八百石銘々名有之。）足輕五十人御預被成候。大坂御陣之節、前島を大坂方へ取可申樣子に相見候刻、家康公御意として武藏守樣へ丹羽山城を前島へ被遣候樣にと被仰出候間、武藏守樣被仰付、與力之士、並足輕五十人御加勢被仰付候。山城前より御預置被成候與力、並足輕御加勢共に、與力三百騎、足輕百人召連參候用意仕候處、最早山城參候に不及候由、家康公御意にて御座候由。寛永九年甲六月二十四日八十四歲於因州病死仕候。

三、丹羽平大夫。（山城嫡男にて御座候。於高麗紀伊守殿之城へ漢南人大軍寄來り候節、平大夫拔出て働き、討死仕候。二十四歲にて御座候由。）

四、（山城二男）丹羽圖書。（參州より山城一所に立退、幼少にて筑前中納言殿へ罷出、其後浪人仕、淺野紀伊殿へ參り、關ケ原御陣に立心馳も仕候由。）山城歸參被仰付候以後、千石被下。尾州名古屋御普請之節、山城名代に罷越相勤申候。其後御加增千石被下、並山城五千石之內分知千石被遣、都合三千石被下候。慶長十八年播州にて病死仕候。（家督無相違、世悴內記に被下候。）

五、（山城三男）丹羽勘解由。

御知行兩度に五百石被下、並山城分知千石被遣、都合千五百石にて御奉公仕候。品は丹羽彥左衞門方より書上申候。

六、（山城四男）丹羽兵部。

幼少之時、證人として江戶に相詰申候、山城十八歲に及、江戶へ罷下、酒井雅樂頭殿へ色々歎申上候處、被達上聞、山城登城仕則御目見被仰付、御前近被爲召、勝入樣御討死之樣子、委言上可仕旨、於御前雅樂頭殿より被仰渡候、山城申上候は、恭畏候、當座には委細之義難申上候へ共、考而言上可仕旨申上、暫時得心仕、扨物覺への通り、有體に言上仕候處、前々被爲聞召候と、少も無相違申分神妙に被思召候。上意にて御紋附御羽織拜領、其上証人御免被成候間、兵部召連鳥取へ罷歸候。

寛永九年山城病死仕候節、子供に分知仕候內、二千三百石、與力、並足輕五十人無相違兵部に被仰付候。寛永二十年十月十四日三十七歲にて病死仕候。（男子無御座候故、養子奉願候得共、死後之養子不被仰付、女子三人之內、長女は少將樣御意にて私妻に被仰付候。二女は中村治右衞門妻に遣し申候、其後病死仕候。三女

は丹羽主殿妻に遣申候、主殿亂心已後、寛文十年松平伯耆守樣御内津田將監妻に遣申候。

七、眞田將監。

生國、甲州府中。童名、鍋之助と申候。

山城歸參被仰付之刻、紀伊守殿被仰付候は、我等爲に平大夫討死仕候間、世悴鍋之助は、母方之祖父遠山丹波に預置候へ、成長仕候へば家督可被仰付候由被仰候。山城御請には難有奉存候、併、私歸參被申付候上は、且那内意相尋、其上にて御請申上候、先遠山丹波預可申とて殘し置申候。其已後、丹波果申候故、鍋之助を播州へ呼取申候。

十三歳に罷成申候節、紀伊守殿より被仰下候は、鍋之助成人可仕候間、紀州へ差越候樣にとの義、則播磨宰相樣へ奉窺候處、此方にて被召仕候間遣申事無用と被仰出、則十三歳にて被召出、十五歳御側近に召仕、十六歳御前番被仰付御直に助三郎と名御付被成候。御趣意に、武邊は祖父助兵衛にあやかり候へば、果報は我等にあやかり候へと、冥加なる御意。依之山城即時御直に申上候は、御名之字被下義冥加至極に奉存候、然しながら三之助に被仰付被下候樣にと、達而申上候へば、申分尤と思召候へ共、先武を第一にあやかり申候本意に候、然る上は愈々助三郎と御付被成候。御知行三百石被下候。同年江戸御供相勤申候。武藏守樣御代、山城御斷申上、子供に分知仕候節、助三郎にも七百石都合千石にて相勤申候。大坂兩度之御陣、武藏守樣之御供仕候。夏御陣之節は、青齒者之首一ッ打取申候時、十八歳にて御座候。山城義は、御旗本に被召置候間、山城與力、並足輕、丹羽助三郎・丹羽右近兩人下知可仕旨被仰付相勤申候。

右近と申候は、丹羽七郎左衛門祖父勘解由、少將樣因州に被成御座之比、寛永二年山城と將監、聊申分仕、御家を立退候て江戸へ罷下、母之叔父眞田隱岐守所に罷在候、山城と不和にて立退申候上は、名氏改可申と隱岐守へ申斷、眞田次郎兵衛と改申隱岐守肝煎にて駿州大納言樣へ被召出候、翌年大納言樣御身體果申に付、また浪人仕候。

山城病死以後、御訴訟申上候處、被聞屆下、寛永十一年被召返、如先規千石被下候。正保元年於御城被仰渡候は、丹羽兵部義、山城名跡之事に候得共、死後之養子御立不被成候。女子三人有之由、姉女は世悴三彌妻に可仕候、殘二人致介抱緣付可申、山城義御代々忠勤勵候、因茲其方御取立被成候、御加增千石被成候、都合二千石、並兵部組侍御預け、番頭被仰付候由にて將監と變名被仰付候。明曆二年、足輕二十人御預け被成候。正保二年正月二十八日、少將樣將監宅へ御成被遊候時、時服二拜領仕候。御相伴に木下淡路守殿・戸川土佐守殿御出被成候。慶安元年子江戸御留守御番に五月罷下、

翌年五月罷歸候。萬治元戌年頭之御使者被仰付、極月三日罷立、翌二年二月六日罷歸候。寛文六年午江戸御留守御番、五月十一日罷立、翌年三月罷歸候。同八年九月十七日、權現様御祭禮之供奉、甲冑にて相組、並御鐵炮二十召連供奉仕候。其節、私も罷出申候。同九年酉、御入用に付、御使者被仰付、十一月五日罷立、同二十二日致參內、御太刀・御馬代黄金三十兩、並女御様御所へ白銀二十枚献上、二十八日罷歸候。十一年亥二月六日、御藏奉行石岡六郎右衛門御穿鑿之義に付、御預被成、同月十六日、六郎右衛門御追放被仰付候。延寶四年寅二月十九日、隱居被仰付候。貞享二年六月五日、九十六歳にて病死仕候。

八、丹羽平大夫。

番頭、二千石、六十二歳。生國、因州鳥取。父將監立退申候節は、土倉市正方にて養育仕候。

十三歳之時、市正奉願少將様御小姓に被召出、江戸御供御赦免候様にと市正申上、因茲御切米拜領不仕、年々時服頂戴仕、御奉公仕候。病氣に付、御斷申上、寛永十九年、御小姓御免被成候。侍從様明暦三年、御入國被遊、十一月八日、初而御目見仕候。寛文十年戌極月二日、學校御用被仰付、延寶元年七月二日、御免被成銀五枚被下候。禁裡御造營に付、父名代に御用可被仰付旨、同年寅三月二十八日、被仰付。翌日登城仕候處、祖父之名に改、平大夫と成候様にと御意之旨、日置猪右衛門申渡、則改申。同三年卯三月二十七日罷立、於京都火消役被仰付、極月十日罷歸候。翌年春御城へ被爲召、御料理被下、御紋附御小袖拜領仕候。同四年辰二月十九日、御前へ被召出、父將監家督無相違被仰付、向後本名に可改旨、御直に被仰付、丹羽に成申。二月二十一日父子共御禮申上、三月朔日二千石之折帋頂戴仕候。同年五月朔日、御前へ被召出、相組、並御鐵炮二十御預け御番頭被仰付、同五日御禮申上候。御富利姫様御縁組被仰出候節、爲御禮江戸へ御使者被仰付、延寶四年八月三日罷立、同月十五日江戸參着、十六日、久世大和守殿へ參、御口上書差上、翌十七日、御奉書出、同二十一日江戸罷立、九月三日罷歸候。在鄕簡略奉願、此節相組御鐵炮共指上、延寶六年午より天和二年戌迄、逼塞仕候。天和元年之暮、奉願候趣は、他借銀未濟不申候へ共、御城下へ引越、年若に候內、相應之御用御奉公仕度旨、池田大學迄願申候處、達御耳、願之通被仰付。同二年、岡山へ引越、二十六日、御禮申上候。同二十九日、御前へ被召出、御直に如前相組、並御鐵炮二十被仰付候。御歩行目付小山角右衛門御穿鑿之義有之、御預被成候旨、日置左門貞享元年五月一日申渡。八月十一日於私宅角右衛門御成敗被仰付候。江戸御留守御番に貞享二年三月罷下候。三

月十九日、岩千代樣へ初而御目見仕候。於江戸堀田下總守樣御取替之御祝義、御使者被仰付、九月晦日江戸發足、十月十日羽州山形登城、御進物一荷一種・御小袖五・御太刀・馬代黃金十兩指上申候。御料理被下、御本領幷御小袖五拜領仕。同月十八日江戸へ罷歸候。御鐵炮雁・御符高皮、父將監・弘度々拜領仕候、年號失念仕候。

九、子勝次郎。嫡子、喜平次。天和二年八月二十四日六十八歲にて病死仕候に付、次男勝次郎御目見之儀奉願候處、願之通被仰付。貞享三年八月十五日十一歲にて御目見仕候。

一〇、眞田藤三郎。將監次男也。生國、備前岡山。

承應三年十六歲之時、侍從樣御小姓に被召出、御切米五十代五人扶持被下、同年極月江戸へ罷下、御奉公相勤申候。明曆三年、相煩御暇申上、備前へ罷歸、翌萬治元年四月十五日、爲養生致上京、同六月二十二日、二十歲にて病死。

一一、丹羽勘解由。山城三男。生國、山城同前。

於岐阜武藏守樣へ被召出、參州へ御供仕候。山城浪人仕、淺野紀伊守殿に罷越候節、勘解由も甲州へ罷越、山城一所に罷在候。紀伊守殿に罷在候内、慶長五年子、奧州景勝陣御供仕、直に濃州へ御上り之御供仕、於岐阜樫原砦を紀伊守殿御攻之節、塀を乘申候節、左之手脈所脇より少肘之方、鐵砲深く蒙り、大手すと口より丸之内へ乘込申刻、はや落城仕候。翌年春、播州へ山城被召返候而罷越之刻、勘解由一所に參候。併勘由幼少之比、武藏守樣に召使候故、則被召出御奉公仕候。

播磨宰相樣より三百石被下候、武藏守樣備前へ御入國被遊候節、御供仕。慶長十九年寅二百石御加增被下、御兒小姓頭被仰付。其節は傳十郎と申し其後、右近と申し、武藏守樣之大坂陣兩度共に相勤申候。山城爲賴、自分知行之内千石勘解由に遣申度由申上候處、被仰付。元和四年午、千五百石之御折帋被下候。寬文六年午二月十五日、八十七歲にて病死仕候。

丹羽山城世悴四人御座候。嫡子丹羽平大夫、後高麗陣に罷越、討死仕候。

二男丹羽圖書。御知行、兩度に二千石被下、山城分知遣、都合三千石拜領仕候。

三男丹羽勘解由。

四男丹羽兵部。山城存命之内分殘り知行二千三百石、與力、並に足輕五十人被仰付、御奉公申上候。

山城孫眞田將監も、分知七百石遣申候。委細之義、丹羽平大夫より書上申候。

一二、丹羽藏人。

幼名兵八。後四兵衛。成田兵衛三男にて御座候。生國、播州。

六歲にて備前に參り、慶長十四年酉五月五日十歲にて被召出、少將樣御宮參り御供仕候。十二歲之時、江戶御供に罷越、御切米三十代五人扶持被下候。其後武藏守樣江戶御下向之節、御加增二十代被下、重而武藏守樣御參府被成候刻、御加增三十代三人扶持被下、都合八十代八人扶持拜領仕候。少將樣因州御入國の冬、御知行三百石被下。寛永四年卯、於江戶御徒者二十人御預被成、同九年、備前へ御入國被遊、翌正月元日、二百石御加增被下、都合御持筒十人御預被成候。同十一年、御參府之節、丹羽勘解由養子に被仰付、女緣申合、勘解由は致隱居、別屋敷を被下、家督無相違千五百石被仰付。同十九年、御鐵炮十人御加增、都合二十人、御小姓頭被仰付候。藏人を勘解由養子に不被仰付候以前、成田源五兵衛と申、其時分藏人宅へ少將樣一度御成被遊候。勘解由養子に被仰付候以後、三度被爲成候。拜領物も御座候由。一條姫君樣御產之御附使者被仰付候。慶安二年、備後守樣宍粟へ御入部之節、御使者に參候。備後守樣より盛光御脇指・眞綿・樽肴被下候。同三年、御番頭被仰付、先筒二十人御預、過分之拜借銀御捨被下。明曆二年六月二十六日、五十七歲にて病死。

實父西村新七郎。祖父は西村備後と申。本國、攝津國攝州三好筑前守方に罷在、三千石領知仕候。三好身上果申後、荒木攝津守與力にて罷在、本知三千石致領知、河內國森口の城預居申。播州神吉城攻之節、三十一歲にて討死仕候由申傳候。子は新七郎。生國、播州三本。則藏人實父にて御座候。十二歲之時、父備後戰死仕候得共、遺跡無相違令領知少々間罷在、攝津身上果申後、中川瀨兵衛殿へ被召出、瀨兵衛殿於志津ケ嶽戰死被成候後、中川右衛門大夫殿に罷在、西村多兵衛と申、鉛奉行被仰付候由。高麗陣御供相勤、心操も御座候由。右衛門大夫殿高麗陣にて討死被成候後、中川修理大夫殿被召出罷在、其後關白秀次公へ被召出候て母衣被仰付候刻は、二十六七歲と承候。如此方々仕官之祿の程不承傳候。文祿四年七月秀次公御傷害之後、福原右馬助方にて知行□□石鐵炮二十預り申候。右馬助身上果候以後、加藤肥後守殿へ罷出申、知行五百三十石被下、瀨崎猪右衛門と申。其後、成田六兵衛と變名仕候。於肥後守士小西攝津守居城一戰之時、比々野兵庫・芦野九大夫・岡內匠・岡田九兵衛。伊丹半右衛門・成田六兵衛、六人抑寄、心操の働仕候由。其後致浪人、武藏守樣へ被召出、四百石被下候。六兵衛嫡子成田七兵衛

と申候。瀬崎六兵衛實父にて御座候。次男成田傳左衛門は、松平石見守様へ被召出、二百石被下、於宍粟早世、世嗣無御座候。

藏人は六兵衛三男にて御座候。

一三、丹羽藏人。（初之名、忠三郎。）

十五歳より、御兒小姓に被召出、藏人死後、千五百石無相違、同年八月二十九日、被仰付。（則藏人と申。）寄合組に御入被成候。萬治二年亥二月二日、病死。二十三歳。

一四、丹羽七郎左衛門。（寄合組、八百石、三十九歳。後之藏人弟。幼名七之丞。後七郎。）

兒病死之時分養子に奉願候に付、跡目八百石、同年三月三日被仰付、組外に御入被成。其後寄合組に御入被成候。寛文十年十月十三日、來年頭之御使者被仰付、十二月四日の朝御相伴被仰付。則名を七郎左衛門と改候へと御直に被仰付。延寶元年丑七月十二日、御弓頭に侍從様御直に被仰付。

一五、子大助。

延寶六年午三月十五日、十一歳御目見仕候。同八年、御兒小姓役御雇被成候旨、正月八日、被仰付、同年六月十三日大助に金子十兩、被召出候日より四人扶持被下候。

一六、丹羽治郎右衛門。（鐵炮頭、千石六十歳。）

一七、丹羽助大夫。（生國、尾張。信長公に罷在り。）

一八、丹羽左平太。（生國、尾張。）

天正十年十八歳、信州高遠落城の節、塀を乘於廣間之庭高名仕候由。此節織田城之助殿に罷在候哉、組は親懸りにて參候哉、不存候。天正十二年長久手合戰之節、織田常眞信雄公に左平太兒小姓に罷在、幌武者組押名を尋候へば、石黑善内と答申候。善内も左平太相小屋石黑八十郎伯父にて、勝入様に罷在候由、かねて承候付、申候處、高木主人殿被見敵に候と申候へ共、左平太味方之者と申達、助申候。其後於其場別人を高名仕候。右之趣、權現様へ主人殿被申上達上聞、常眞公御小屋にて權現様常眞へ左平太義、御尋被成、其節御前に御酌取罷在候、左平太義權現様へ可被召仕趣御座候得共、常眞公譜代之者の由被申上

不罷出候。常眞公よと伊勢於坂露村千石給り、善內後は松平宮內樣に罷在、善右衞門と申由。常眞公秋田へ遠流之節、諸士供御禁制に候處、左平太、並弟丹羽左吉、其外三四人申合、秋田へ罷越、御奉公可相勤、常眞公御赦免、大阪へ被罷登候節、右之者共供仕罷登候へば、左平太義は秀吉公より先知千石被下被召出、殘る者共も方々罷出、左吉は權現樣へ被召出候。以後喧嘩仕、相手切留立退、手筋御座候而日置豐前方に罷在、寬永十五年三月、備前金川にて病死仕候。左平太義は秀吉公より秀次公へ被遣候。秀次公御切腹之後、秀吉公へ罷戾り、秀賴公迄罷在、使番相勤、大阪春陣之節、秀賴公より駿府•江戶へ使に罷下相勤上りに御持馬被下、大阪へ罷歸候。家來一兩人遲參仕、藤堂和泉守衆押留候へ共、左平太使に罷越候趣申斷、城內へ入候由。大阪落城以後、京都にて權現樣上意に、左平太義、今度於存命は可被召出候、先年於長久手石黑善內を助け、此度彼善內可相圍旨被仰出、御尋被成候。其節左平太京妙心寺迄罷出相伺候處、則被召出、先知千石被下候。其後台德院樣へ御奉公可仕旨被仰付、江戶へ參り御書院番被仰付、大猷院樣御代迄御奉公申上候。寬永十二年十月八日、七十一歲にて病死仕候。

一九、丹羽次郎右衞門。 生國、山城。

加州松平肥前守殿へ兒小姓仕、一兩年罷在、申事仕相手仕留立退、秀賴公に兒小姓仕罷在候。大阪落城已後、次郎右衞門義左平太常眞公へ預置申候、爲飼料二百五十石給り候。淺原吉大夫と申者、常眞公に罷在、不實之義有之走退、其後次郎右衞門へ意趣存、元和六年六月晦日の夜に、京都常眞公屋敷より次郎右衞門下人一人召連、宿へ罷歸候刻、北の千本の辻にて淺尾吉大夫兄弟意趣切仕候、相手三四人有之、其內兄淺尾七左衞門を切留候へば、本人吉大夫共外之者共、引散申候、追懸候へ共、次郎右衞門も三ケ所深手負申候故、追失ひ申候。寬永四年常眞公江戶へ下向之供仕り罷下り候節、十一月二十九日の夜、尾州宮にて常眞公旅宿より次郎右衞門下人二人召連、宿へ罷在申刻、五六人前後より出合切申候、前より三人切申候內、二人手付一人切伏申、殘る者共も手負引散申候、追掛申候へ共、次郎右衞門も兩足共に七ケ所手負申故、追失申候、其內に右切伏申者を引懸退申由、其後承候得者、是も淺尾吉大夫相催、右之通りに御座候由、右之首尾に付、兩度に常眞公、並御息織田出雲殿より刀•脇指貰、加增も被申付、四百石給り候。常眞公御死去後、出雲殿へ暇罷出申候。

同八年七月、於江戶少將樣へ被召出、御知行千石、御鐵炮二十挺被仰付、因州へ御登世被成候刻、時服•黃金一枚拜領仕候。備前御國替以後、同十年正月元日、所付御折紙被下候。同十三年、朝鮮人來朝之節、中官御馳走役被仰付、

私、生國大和。の私は何人なるか原本になし。

牛窓へ罷越候。歸帆之節も、同前。同十四年肥前島原松倉長門殿御領分一揆爲御仕置、板倉内膳殿・石谷十藏殿御越に付、從江戸被仰付、十二月二十三日、岡山出船御使に罷下、彼樣子に有之候はゞ、御注進可申上と被仰付、御徒山内孫之丞・上島安兵衞同道仕罷下候。

十二月二日、豐前小倉へ參着仕候へば、一揆共原の城へ立籠り候に付、内膳殿・十藏殿・島原長門殿居城へ御越、人數御集、彼地より近日原之城へ御押寄之由承り候、其節は、長崎海道往來と申候へば、道法遠く遲々仕候に付、一揆共地燒仕退申道筋へ參、野宿仕急罷越、同六日、島原長門殿御居城へ參着仕、内膳殿・十藏殿へ御書御進物差上、同八日惣人數一同に原の城へ罷立候。同日上島安兵衞戻し御注〔進〕を仕候。同十日、原の城へ參着仕候。同十一日、山内孫之丞戻し御注を仕候。同日江戸より寺崎茂左衞門御下し被成、江戸より御下り御衆中へ御進物御狀被遣、夫々に披露可仕旨、從少將樣十一月十一日之御書頂戴仕候。茂左衞門義は、方々御返事取揃指上申候由。其後も繪圖仕、追々御注進申上候。江戸よりの御飛脚に、十二月晦日の御書頂戴仕候、御羽織被下候。榊原飛彈守殿御頼みの由にて、内膳殿・十藏殿被仰付候は、飛彈殿の子息左門殿若候間、御差圖仕申樣にと被仰候故、御斷申上候へ共、手筋も有之哉と、達而被仰付に付、任其意、鍋島信濃守殿備に左門殿一所に罷在候。十二月二十日の夜、三の丸立花左近殿御攻之刻も、左近殿先手へ罷越、先之樣子見計申候。寛永十五年正月朔日、惣攻之節、鍋島信濃守殿先備鍋島安藝殿先手へ左門殿一所に罷在候、朝九つ前先へ罷出首尾能鐵炮にて手負申、深手にて有之腕叶不申候へ共、彼地の樣子見屆罷登可申と逗留仕罷在候處、十藏殿登候樣にと達而被仰、其上手所痛煩申候に付、二月二日三日比罷立登申候。手負之段於江戸被聞召、御國へ戻り申候樣にと、正月二十六日御飛脚にて御書頂戴仕候。

二月十七日に歸宅仕、手前養生に有馬へ早速罷越候。有馬に罷在候内、原の城落城と承り候に付、緩々入湯仕罷歸候。其内少將樣御歸城被成候。有馬より罷歸候ても、手所透と無御座相煩候罷在候。病中切に御使被下、難有御意にて手所氣色の樣子被聞召上候。寛永十六年三月三日、御加增三百石被下、同十九年六月六日病死仕候。

二〇、私、生國大和。

寛永十二年子の春、少將樣へ初て御目見仕候。同十九年午九月、父本知千石被仰付候。同年十二月朔日、御折紙頂戴仕候。慶安元年播州姬路へ松平大和守殿御所替之爲御目付、松田善右衞門殿・丹羽平右衞門被參候に付、同八月

御兩人へ御使に罷越候。承應三年十月六日、番大膳組之組頭被仰付候。十二月十九日、御鷹の靏御拜領に付、同二十日に江戸へ御使者に罷越、同二十六日下着仕候。其節侍從樣へ初て御目見仕候。明る正月六日に江戸罷立、同十八日罷歸候。御鷹の鴈拜領仕候。萬治元年十二月十五日、主税殿の組頭被仰付、寛文元年丑八月九日、使者御馳走役被仰付、同十二年子迄組頭役十九年相勤申候。同十二年十月三日、足輕二十人、御船御奉行役被仰付候。侍從樣爲御意池田大學申渡候。延寶元年、松平安藝守殿御家督初而御入國に付、御使者被仰付、霜月二十日出船仕候。十二月二日罷歸、於彼地御鷹之鴨二・小袖五被下候。同二年寅四月六日、御參勤御船中御供仕候、兵庫より陸御登り被成候、於兵庫御役付御小袖被下候。同年十月十五日御歸國、御迎船に伏見迄罷登、陸より御船に被召、御船中御供仕、二十四日下着仕候。同年十一月十一日、少將樣御參勤、御船中御供仕候、兵庫より濱路御登り被成候へ共、御船共過半大坂へ參候に付、私も罷登、同八日罷戾候。同三年卯正月十二日、禁裡御普請に付、御上京、御船中伏見迄御供仕候。御下には陸御歸被成候に付、御先へ十二日に罷歸候。同年鹽飽へ大坂御船奉行森川六左衛門殿御越候に付、爲御見廻御使被仰付、四月十二日罷越、十三日に罷歸候。同年十一月五日、禁裡御普請に付、御上京、御船中伏見迄御供仕候、御下には陸御歸被成候に付、御先へ十二日に罷歸候。同四年辰十二月十日御參勤、御船中御供仕、兵庫より陸路御登被成候、於彼地御役付御小袖拜領仕候、御船過半大坂へ參候に付、罷登り、同十九日罷歸候。同五年六月二十八日、御歸國御迎船に罷登申筈に御座候處、持病眩暈指起り申候に付、世悴治大夫伏見迄罷登り、山崎より御船に被爲召御供仕、七月九日下着仕候。御船中にて御紋附御給、治大夫拜領仕候。同六年午五月二十八日、御參勤御船中御供仕、伏見迄罷登り、六月三日罷戾候。同八年迄九年御船手御用相勤申候。八年中、病氣に付、御斷申上候處、七月二十八日、御前へ被召出、難有御意にて、御船手御用御免被成、御鐵炮頭に被仰付候。天和元年酉、靏姫君樣へ紀伊中將樣より御結納之御祝義相濟に付、御使被仰付、八月九日罷立、江戸へ參り、九月十六日罷歸候。同二年四月十七日、權現樣御祭禮、御弓二十持せ供奉仕候。同二年、朝鮮人爲御馳走下津井へ被仰付、七月四日罷越候。官船宗對馬守殿御船、同二十日、六口嶋へ御船懸り候節は、對馬守殿御船へ罷越、翌朝御出船之節迄相勤め、同二十二日罷歸候。同年歸帆之節、十月四日同所へ罷出相勤、同月十日に罷歸候。

同三年、江戸御留守御番被仰付、二月二十四日、御馬廻衆同道仕罷下、同四年三月十三日、御馬廻衆同道江戸罷立、四月二十八日朝歸着、御城へ罷出、御目見仕候。其以後、又御前へ被召出、頭五郎殿御預被成候間、御養育仕候樣にと難有御意にて被仰付候。頭五郎殿御坐所取膳五月三日に私宅へ被爲入候。貞享二年丑十一月十五日、御鐵炮の雁拜領仕候。其外少將樣・侍從樣より、度々雁・鹿・鯉・鯛拜領仕候。

二一、子治大夫。

萬治二年正月十五日、七歲にて少將樣へ初而御目見仕、同年六月朔日、侍從樣へ初而御目見仕候。

二二、丹羽惣兵衞。

慶長八年卯、輝政樣へ被召出三百石被下、大坂兩陣御供仕、正保三年戊八月朔日、隱居被仰付。

二三、丹羽惣兵衞。

家督無相違、八月朔日、被仰付。慶安二年丑、一條姬君樣御祝言之御供被仰付、十月十九日、江戶へ參候。承應三年午十月六日、眞田將監組の組頭被仰付。延寶三年、病死。

二四、丹羽惣左衞門。宮城大藏組、鐵砲引廻三百石、三十八歲。

延寶元年十二月四日、中小生に少將樣へ被召出、同三年父跡知無相違被仰付。天和二年八月三日、宮城大藏預御鐵炮引廻被仰付候。

二五、西浦彌左衞門。荒木攝津守所に居申候由。浪人仕梶浦大隅を賴在候處、關ケ原陣之時大隅手にて參り、淺黃者の首取り、少々心馳も仕候。

梶浦大隅に高二千石に御足被下旨に仰出候處に、大隅願申上候は、西浦彌左衞門被召出被下候へと申上候に付、彌左衞門被召出、百五十石被下、慶長十五年、武藏守樣へ御禮申上、御折帋被下候。大坂兩度の御陣御供仕候。寬永二年十一月三日、病死。彌左衞門中風煩申候內、廣島陣と申時、私幼少に付、番頭大隅私姉に聟を取、御陣之御用勤を申度と奉願、則姉聟に家督無相違被仰付候。

姉聟後の彌左衞門義、馬場藤左衞門と申す浪人の子に御座候。姉聟後の彌左衞門、寬永十五年、亂氣仕候に付、大隅より御鑑置申候、二三年置候へば本氣に成申候間、內證にて籠より出し置候へば、姉聟申候は、此體に成御用にも立不申候、子も無御

座、其上實父之知行にて御座候間、私跡目被仰付被下候様にと、番頭を以て奉願候へば、寛永十九年家督私に被仰付。

二六、西浦源左衛門。若原監物組、鐵炮引廻 百五十石、六十六歳。

正保二年正月、姉聟亂氣指發り申候哉、無行衛見不申候に付、御暇申上、方々尋申候得共、終に逢不申久々浪人仕難儀續候故、讃州高松松平讃岐守殿、寛文二年被召出百石被下候。

同九年、少將様六十の御祝に歸參被仰付、本知無相違百五十石被下候。天和二年八月三日、若原監物御鐵炮引廻し被仰付候。

二七、子惣左衛門。延寳二年二月朔日、侍從様へ御目見仕候。

二八、西村孫之進。

大阪陣之時、眞田左衛門佐組下に罷在候。五月六日、道明寺表にて左衛門佐と正宗殿と兩度のセリ合御座候時、二度正宗殿衆敗軍、眞田方追懸候處、正宗殿衆三十人計り返し合せ、其儘折敷居申候處に、眞田方より突懸り申者三人、内、園助大夫と申者、夏陣以後京極丹後守殿に罷在候、牧野四郎兵衛と申者は、手負引取相果申候、一人は孫之進にて御座候、孫之進正宗殿物頭秋保刑部世悴甚平と申者と、鎗を合候、突臥首を取可申と仕候處、甚平與力共立隔り、孫之進を突申故、孫之進五ヶ所手負、其場にて倒れ申處に、眞田方より同勢參候故、正宗殿御家來東海村平左衛門と申者、其場にて働き申候に付、孫之進働具に見申候、木村長門守組下にて、鴨野七平鎗仕候、井上與左衛門と申者も具に存候。

右之段熊澤助左衛門御耳に達し、少將様被召出候。慶安三年九月朔日、被召出、五十人扶持被下、士鐵炮二十人御預被成候。明暦二年四月十三日、病死。被召出候節、子無御座候故、同姓源三郎養子に仕候。源三郎に三百石被下、其後御加增百石被下候。

二九、西村源三郎。伊木頼母組、三十一俵 五人扶持、三十一歳。

父孫之進病死仕候時二歳にて御座候。其節三十一俵五人扶持被下候。寛文二年少將様へ御目見仕、翌年侍從様へ御目見仕候。

三〇、西村小四兵衛。荒木攝津守方に罷在候。

三一、西村小兵衛。

於播州山脇源大夫取立にて、慶長九年十月十八日、輝政様へ被召出、百五十石被下候。大坂御陣山脇主馬組にて兩陣共に參り、落城之節、淺黃者打取申候由。寛永十二年七月八日、病死。

三二、西村吉兵衛。

跡知無相違百五十石被下、萬治二年正月隠居被仰付。同年正月五日家督無相違、子九大夫に被下。延寶元年七月二十日、六十五歳病死。

三三、西村九大夫。　家督無相違被仰付。寛文二年九月二十一日、三十三歳病死。

三四、西村六之助。　山脇傳内組、百石 二十四歳。

寛文二年十一月十六日、父九大夫跡目百五十石之内百石被仰付候。此時二歳にて御座候。殘る五十石に、同名久五兵衛被召出被下候。同七年二月朔日、七歳にて御目見仕候。

三五、西村久五兵衛。　山脇傳内組、五十石 四十九歳。

寛文二年十一月十六日、兄九大夫跡知百五十石之内、百石六之助に被仰付、五十石私に被仰付候。

三六、丹羽八右衛門。　勝入様犬山に被成御座候時、如何様之様子にて御座候哉 八右衛門五歳に成候迄御城に罷在候由。

以後大和大納言殿へ奉公仕候。其節不逭者喧嘩仕退申候付、八右衛門も立退申候。大納言殿より構御座候て、織田常眞公へ被顧候て罷在候、百五十石被下候。後三百五十石加増にて五百石被下候。其後立退申候。此度も常眞公より構御座候、前田德善院八右衛門不逭散、常眞公へ御斷申、岐阜中納言殿へ浪人分にて罷出、三百石被下候。關ケ原陣前中納言殿秀頼公へ御對面、御歸りに江州佐和山にて石田治部少輔御參會之節、八右衛門佐和山より岐阜へ御使に罷在候、中納言殿岐阜へ御歸被成、黒母衣に被仰付。岐阜籠城前後相詰申由にて感狀賜り、今に所持仕候。此節源左衛門と申淺黃者にて候得共、生捕も仕候由。

慶長五年、大坂において輝政様へ被召出、三百石被下候。武藏守様御斷被仰、備前へ被爲召四百五十石に大小姓に被仰付、大坂兩陣御供仕候。正保元年、隠居被仰付、五人扶持被下、同四年三月十五日、七十三歳、病死。

三七、丹羽與一左衛門。

五十俵五人扶持被下候。正保元年、八右衛門跡知四百五十石無相違被下、大小姓に被仰付。慶安元年、伊木頼母組

鐵炮引廻し被仰付。同三年六月二十四日、四十三歳病死。

三八、丹羽平之丞。

慶安三年、與一左衛門跡目無相違被仰付。寛文九年五月十七日、二十三歳病死。

三九、養子丹羽小平太。 中村主馬組、二百五十石 二十八歳。

平之丞病中養子に奉願候へば被仰付、寛文九年六月二十九日、平之丞跡知之内二百五十石被下候。十月朔日、侍從樣へ十歳にて御目見仕候。

實父丹羽三郎左衛門は、右衛門二男にて御座候。寛永九年少將樣御目見仕候由。御斷申上、讃州へ參り、生駒讃岐守殿へ浪人分にて一兩年罷在落去、前年斷申播州へ參り、松平下總守殿へ罷出、二百石被下候。下總守殿御死去以後、羽州最上へ御所替、一兩年前御暇申候。寛文十一年於備前病死。

四〇、西村彦右衛門。

池田勝政の家老池田右近之家來にて少知給居申候。右近義、京六條合戰に討死仕候。其子御家に罷在候。堀内六郎兵衛、後久閑と申、四歳之時、本知無相違勝政より被下候。勝政淡落に付、久閑幼少にて浪人仕候。彦右衛門養育守立て、御家へ被召出候。

四一、西村久大夫。 堀内六郎兵衛所に罷在 寛文五年病死。

四二、西村杢兵衛。 役小姓勘定河村平太兵衛引廻 三十九俵五人扶持、五十七歳。

明曆二年九月十五日、少將樣へ御勘定方へ被召出、本俵十五俵二人扶持被下。萬治元年十一月十六日、五俵に一人扶持御加增被下。寛文五年二月十日、一人扶持御加增被下。同十三年、八俵に一人扶持御加增被下、御算用頭廻中小姓に被仰付。

四三、戶田久兵衛。

永井齋藤別當實盛末孫。越前國に小城持居申候由。如何樣之首尾にて浪人仕候哉、朝倉義景へ奉公仕候。氏を前波と改申。義

景滅亡之後、戸田民部少輔殿へ被召出候。秀吉公御代故、前波と羽柴と似通唱を以て、可然氏を改可申由にて戸田を賜り、其後浪人仕、攝州能勢郡へ引籠、病死仕候。

攝州能勢郡を能勢攝津守と申者、代々取來居申候。少右衛門父久兵衛、攝津守と親類、其上井上半入と申者の筆にて御座候に付、久兵衛浪人仕、能勢へ引籠居申候。少右衛門、初は戸田彌太郎と申し、其後能勢に仕候。攝津守子供數多御旗本へ被召出居申候。少右衛門義、本多上野殿御子息出羽殿被召出、兒小姓奉公仕候。十八歳の時、新知百石被下候。上野介殿・出羽守殿竟流被仰付、家來二三人從公儀御免被成候。少右衛門儀配所へ參、出羽殿御死去以後、江戸へ罷在候。其後本多中務様へ被召出、播州へ罷下候。其年中務様御死去にて又浪人仕候。京極安知様へ二三年奉公仕候。

四四、能勢勝右衛門。（初の名、彌太郎。）

安知様御口入にて少將様へ被召出候。寛永十年五月十七日、御禮申上候。御合力米本俵六十俵七人扶持被下候。同暮に三百石被下、同十一年山内主水に加り公儀使役被仰付、同十七年、御加增二百石被下候。同十九年より主水御役儀御免被成、私一人勤申候。慶長元年御鐵炮の者十人御預け被成、內四人自分若黨に召遣候樣に被仰付候。同三年、南部治郎右衛門を相役に被仰付、兩人にて相勤申候。承應元年、御鐵炮之者十人御增御預け被成候。同三年、治郎右衛門裏判役被仰付、又一人にて相勤申候。寛文六年四月二十三日、御役御赦免、御加增三百石被下、自分若黨に被下候四人指上げ、御鐵炮二十人殘置申候。延寶元年、隱居被仰付、本知御加增共に八百石、私に被仰付置候百五十石、私に被下候。足輕二十人は被召上候。同年八月六日、江戸詰御免被成、九月二十一日、御國へ歸着、同三年閏四月十日、七十七歳病死。（百五十石被召上候。）

四五、能勢勝右衛門。（近習寺社奉行、八百石、四十七歳。私儀父四十二歳、二タ子故、能勢出雲守祖父攝津守養置申候。攝津守名も附て數馬と申候。）

承應元年四月十八日、兒小姓に被召出、本俵四十俵に四人扶持被下候。（牧野數馬殿に名指合に付、數之介に改申候。）侍從樣へ御附被成候時、名を權助とかへ申候、侍從樣へ四百石御部屋住御知行被遣、其極月十八日、新知百五十石被下、大小姓被仰付、寛文十二年御小姓組頭役被仰付。延寶元年四月九日、於江戸父少右衛門願之通隱居被仰付、私へ本知御加增共に

八百石無相違被仰付。天和元年閏五月寺社奉行役被仰付。

四六、子權之丞。　延寶二年九月十五日、少將樣•侍從樣へ御目見仕。

四七、能勢助五郎。　上坂外記組、六十俵五人扶持、二十二歲。勝右衞門二男にて、後の勝右衞門弟也。

寛文十一年八歲之時、少將樣へ御目見仕、延寶三年十二歲之時、六十俵五人扶持被下、兒小姓に被召出。

四八、野々村四郎兵衞。

四九、野々村平大夫。　若年の時、岐阜中納言殿に罷在候由。

慶長五年十一月武藏守樣へ被召出、御切米御扶持被下候由。同十三年四月、少將樣之御抱守に被仰付、元和四年十一月、於因州新知百五十石被下。寛永七年十月御加增百五十石被下。同八年二月十一日、五十六歲病死。

五〇、野々村平大夫。　同八年三月、跡目無相違被仰付、同二十年七月二十一日、三十三歲病死。

五一、野々村次郎兵衞。　中村主馬組、鐵炮引廻二百石、四十七歲。

寛永二十年八月二十九日跡目三百石之內、二百石、五歲之時被仰付候。殘り百石私伯父同姓一平へ被下候。寛文八年十月二十九日、於閑谷學校御横目役被仰付。同十年迄相勤申候。　同十年八月十六日、大小姓役被仰付。延寶七年六月二十三日、中村主馬組鐵炮引廻被仰付。

五二、子平七。　天和元年三月三日、十歲にて御目見仕。

五三、野々村市平。　若原監物組、百石、七十歲。初の野々村平大夫の二男なり。

寛永三年於因州被召出。同四年二月、本俵二十俵二人扶持被下、カブロに被成候。同十年、御加增本俵三十俵三人扶持被下、元服仕、御腰物拜領、御兒小姓に被召出候。同二十年十月、御知行百石被下、御馬廻役に被仰付、御折帋は、正保二年二月十五日被下候。

五四、養子八兵衞。　同姓平太左衞門二男にて御座候を養子に奉願、願之通り被仰付。　延寶七年九月朔日、二十三歲にて御目見仕。

五五、野々村平太左衛門。若原監物組、六十二俵、四人扶持、六十四歳。初の野々村平大夫の三男なり。

寛永十四年三月朔日、御児小姓に被召出、同十九年霜月、本俵二十俵二人扶持被下、中小姓に被仰付。正保二年、御加増十俵二人扶持被下。寛文元年十月大坂御蔵横目に参り、同二年七月罷歸候。御加増本俵十俵被下、都合御切米合俵六十二俵四人扶持被下候。

五六、子平助。嫡子勘平、延寶三年二月八日、病死仕候に付、次男平助を同四年三月三日、二十歳にて侍従様へ御目見仕候。

五七、野中吉右衛門。美濃國野中と申所に少々構仕居申候。稲葉一族と取合、終に打負、浪人仕候。

於濃州輝政様へ浪人分にて被召出、武蔵守様へ御附被成、備前へ参、病死。

五八、野中市左衛門。

輝政様へ被召出候。景勝御陣御供仕、野州宇都宮迄参候處、石田治部少輔謀叛に付、輝政様市左衛門被為召、大坂に被成御座候。御前様へ御使被仰付候。御書こよりに仕り、笠の緒に仕、参府、御前様へ御書指上候。御歸陣の刻、百五十石被下、参河より播磨へ御國替の刻、二割御加増被成、百八十石に被成下候。武蔵守様へ御附被成候。備前にて病死。

五九、野中忠三郎。後、市左衛門に成申候。

九歳之時、武蔵守様御意に、市左衛門に御加増可被遣と思召之處、相果申候間、幼少に候へ共、二十石御加増に付遣候由にて、二百石に被成下候。名も市左衛門に成申候。明暦三年五月二日、五十六歳病死。

六〇、野中市左衛門。土肥飛彈組、二百石四十四歳。

承應三年十月朔日、少將様へ御目見、明暦三年六月二十六日、跡目無相違二百石被下。

六一、野間忠右衛門。本氏、松本。

勝入様へ被召出、知行五十石被下候。輝政様播州御入國之刻、御加増五十石被下、其節氏を野間に改申。其後武蔵守様へ御附被成候。備前へ御入國之節、御加増五十石被下候。慶長十四年病死仕候。

六二、野間忠七郎。　跡目無相違、百五十石被下、名も忠右衛門に成申候。　於御當地病死。

六三、野間五左衛門。

跡目無相違百五十石被下候。中川佐渡守様御奥様へ被爲附、萬治元年、江戸へ引越申候。其刻御加増百石被下候。從佐渡守様も二百五十石被下、都合五百石に罷成、十二年相勤。　寛文九年八月、隠居被仰付候。同十二年正月二十二日、於江戸七十歳にて病死。

六四、養子野間太郎兵衛。　片岡次郎大夫二男にて御座候。五左衛門實子無御座候に付、奉願候へば、養子に被仰付。

寛文九年八月、五左衛門家督無相違二百五十石、役儀共に被仰付。十六年相勤。　天和三年六月九日、五十一歳於江戸病死。

六五、養子野間三大夫。　稲葉四郎右衛門組、百五十石、二十五歳。野間久右衛門二男にて御座候。若年より江戸へ罷越、佐渡守様御座敷、同姓太郎兵衛方に居申候。

延寶七年極月二十八日、佐渡守様御兒小姓に罷召出、五十俵に四人扶持、衣裳銀五枚ヅヽ被下、因幡守様へ御附被成候。太郎兵衛に實子兩人御座候。嫡子は病者にて御座候、二男母方の祖父原田源兵衛と申者の方へ幼少より養子に仕置候に付、太郎兵衛病中に、因幡守様へ申上、私を養子に仕度旨奉願、追附病死仕候。備前へ罷越候へと御意之旨、天和三年八月二十日、水野作右衛門申渡候。九月三日、江戸罷立、同二十日、岡山へ參着仕候。同二十六日、太郎兵衛本知百五十石被下候。

六六、野間久右衛門。　野間忠右衛門二男にて御座候。

寛永四年三月、少將様へ被召出、四十俵五人扶持被下候。慶安元年邑久郡・奥上道郡御郡奉行被仰付候。　承應元年迄五年相勤申候。其内新田開度由申上候て、奥上道郡之内、金岡村之内にて百十八石五斗一合、口上道郡中川村にて百八十一石四斗四升九合、兩所都合高三百石に御結ひ被下候。御折帋少將様より明暦二年八月朔日、頂戴仕候。寛文十一年七月十四日、病死。

六七、野間三之丞。　稲葉四郎右衛門組　三百石、三十歳。

寛文十一年九月跡目無相違、三百石被下候。

六八、野村越中。 信長公へ被召出、六條合戰之後大坂守口にて討死仕候。

六九、野村越中。

森美作守殿に五三年罷在、後浪人仕、小田原御陣に山中にて森常陸殿先手にて心馳仕候由。其後加藤遠江守殿へ罷出、高麗へ罷越、度々心馳仕候由。歸朝仕、堀左衛門佐殿へ罷出、千二百石被下候。

關ケ原御陣之後、輝政様へ被召出、千石被下候。大坂翌年之御陣に、鐵炮二十挺御預け被成候。於因州少將様より御加増五百石被下候。寛永十三年六月十日病死。

七〇、野村惣左衛門。

元和八年御小姓に被召出、五十俵被下。寛永十年三百石被下候。明暦三年正月二日、池田美作組御足輕引廻に被仰付候。寛文十年隱居被仰付。天和二年四月十一日、病死。

七一、野村善左衛門。 寛文十年家督無相違三百石被下。貞享二年九月二十三日、病死。

七二、弟、養子 野村小十郎。 上坂外記組、三百石、三十歳。兄善左衛門養子に奉願候處、望之通り被仰付。

七三、野口彌平兵衛。 が祖父八萩重左衛門、北條氏直公御舍弟十郎殿に少知被下罷在候。五月二十二日、病死。年號不存候。

延寶九年六月九日、御目見仕候。貞享二年十一月二十日、家督無相違被仰付候。

七四、野口宗把。 重右衛門病死之時、幼少にて伯父野口半右衛門養育仕候故、野口を名乘申候。乍然養子に成而、野口の家を継申にては無御座候。

宗把義於備前宰相様へ被召出、九十俵十一人扶持被下、御近習之法師武者と御意被成、御納戸奉行相勤申候。宰相様御懇に被召仕候故、御卒去之後、御墓所へ引込、遁世にて居申候。跡式は嫡子に被仰付罷在候處、少し様子御座候て、因州ゟ退申候。次男同名治兵衛被召出、百五十石被下、其後五十石御加増被下、唯今相模守様に罷在候。宗把義慶安四年三月十三日、宰相様御墓所にて病死仕候。

七五、野口彌平兵衛。 湯淺半左衛門組、四十七俵四人扶持、五十八歳。

正保四年正月九日、少將樣へ被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、御小姓組に被仰付候。萬治元年暮、本俵五俵御加增被下、只今都合俵四十七俵被下候。

七六、子彌一右衛門。

寛文七年三月朔日、少將樣へ十五歲にて御目見仕、同年六月、侍從樣へ御目見仕。

七七、野尻治右衛門。

武藏守樣御部屋住之時、御鷹匠に被召出候。少將樣因州へ御入國之御供仕、父治右衛門養子に仕、無程病死。

七八、野尻治右衛門。 長谷川半四郎世忰にて御座候處、於因州野尻治右衛門方へ養子に參候て、元和四年十六歲にて養父の名跡を繼。

則本俵三十八俵三人扶持無相違被仰付候て少將樣へ御鷹匠役勤申候。寛文二年十月、中小姓に被仰付、同七年二月九日、病死。

實曾祖父長谷川賴母、勝入樣へ御目見仕傳三郎と名を替申候て、天正十二年、勝入樣御手にて討死仕候由。

實祖父長谷川吉右衛門、天正十三年於美濃輝政樣へ被召出候。播州へ御入國之翌年、新知被下候處、物成惡敷所之由にて、今枝內膳迄御折紙差上申候由。慶長十二年十二月二十二日病死。世忰二人、半四郎・茂左衛門と申候。吉右衛門家督、次男茂左衛門に來願候處、被仰付。則吉右衛門と申候。後の吉右衛門養子に、長谷九介世忰與惣に後の吉右衛門跡目被仰付、無程丹羽守樣へ御附人に被仰付、御奉公仕候。

實父長谷半四郎、右近樣へ被召出候。寛永五年十一月六日於備前病死。

七九、野尻平十郎。 六十俵四人扶持 四十歲。

父彌右衛門病氣に付、寛文四年隱居被仰付、家督無相違被仰付候。同八年十月三日、御弓役杉山五左衛門組に被仰付、翌年江戸御供被仰付、一人扶持御加增被下候。

八〇、野尻勝助。 五十俵四人扶持、三十二歲。野尻次右衛門二男、平十郎弟にて御座候。

延寶四年二月六日、少將樣へ御歩行に被召出、三十俵三人扶持被下、天和三年七月十五日、御中小姓に被成、御加

增二十傔一人扶持被下。

拜郷書之丞寫
加藤熊吉校⑪

吉備温故秘錄卷之七十九（干城八）終

吉備温故秘錄卷之八十（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城九（原本干城一四）目錄

七三、林　六左衛門。　七四、弟養子林　七兵衛。　七五、子　源三郎。　七六、長谷川甚兵衛。
七七、長谷川四郎兵衛。　七八、長谷川利兵衛。　七九、長谷川源藏。　八〇、長谷川兵大夫。
八一、馬場左兵衛。　八二、馬場七右衛門。　八三、馬場平六。　八四、馬場半平。
八五、長谷川播之助。　八六、長谷川市兵衛。　八七、長谷川新十郎。　八八、長谷川甚左衛門。
八九、子　甚助。　九〇、波多野彥八郎。　九一、波多野忠左衛門。　九二、波多野八郎左衛門。
九三、波多野八郎左衛門。　九四、宮岡加賀。　九五、服部善大輔。　九六、服部善大夫。
九七、服部善大夫。　九八、子　源六。　九九、橋本藤左衛門。　一〇〇、橋本藤左衛門。
一〇一、原田五右衛門。　一〇二、原田帶刀。　一〇三、原田大郎助。　一〇四、原田理左衛門。
一〇五、葉山治兵衛。　一〇六、葉山太郎左衛門。　一〇七、葉山孫右衛門。　一〇八、子　三平。
一〇九、葉山傳介。　一一〇、橋本甚六。　一一一、養子　橋本甚六。　一一二、橋本半右衛門。
一一三、梶浦太郎兵衛。　一一四、梶浦忠兵衛。　一一五、林　小左衛門。　一一六、林　安兵衛。
一一七、佐野彥四郎。　一一八、馬場久兵衛。　一一九、松村宇右衛門。　一二〇、馬場半七。
一二一、子　八助。　一二二、長谷川八藏。　一二三、長谷川又兵衛。　一二四、長谷川彌平次。
一二五、子　亦八。　一二六、伴　兵右衛門。　一二七、養子　伴　安右衛門。　一二八、守田將監。
一二九、守田三之丞。　一三〇、守田源右衛門。　一三一、服部源右衛門。　一三二、春木九部右衛門。
一三三、養子　春木豊左衛門。　一三四、春木又五郎。　一三五、長谷川新九郎。　一三六、長谷彌五兵衛。
一三七、(長谷川五兵衛。子　彌三郎。)　一三八、野中吉右衛門。　一三九、早川平兵衛。　一四〇、早川小助。
一四一、馬場岩法師。　一四二、馬場重介。　一四三、馬場十三郎。　一四四、馬場十郎右衛門。
一四五、八田八郎兵衛。　一四六、八田久右衛門。　一四七、原　掃部。　一四八、原　次郎九郎。
一四九、小堀與三大夫。　一五〇、原　彥八郎。　一五一、服部山城守保次。　一五二、服部甚兵衛。
一五三、服部竹右衛門。　一五四、服部安之丞。　一五五、林　彥兵衛。　一五六、林　加右衛門。　一五七、子　彥三郎。

吉備溫故秘錄卷之八十（干城九）目錄終

吉備溫故秘錄　卷之八十（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　九（原本干城一四）

一、服部左京。

尾州の小城主の由。永祿の頃、權現樣へ忠功依有之、子供之內一人可被召使之旨、上意之由に候へ共、進上不仕、甥服部權大夫を養子に仕、御奉公に出し申候由、故に今類族御旗本に御座候。其後左京信長公敵討仕、打負落城、一類大方討死仕由。

二、服部源兵衛。左京世悴にて御座候。左京討死之時三歲にて、乳母抱出申候。

十三歲、勝入樣へ直訴仕候處、父左京御存被成候樣被召出候由。其後三河にて輝政樣より百五十石被下、於岐阜新加納籠有之に付播州にて三百五十石被成、御母衣被仰付、爲御心付一萬石餘御代官被仰付。實子無之、親類栗木平右衛門と申者之子治兵衛と申を養、始と一所に仕置候。此治兵衛關原陣相勤申候。親類之內百五十石被下、後は淸右衛門と申候。

三、養子服部淸右衛門。

四、服部源助。

源兵衛年寵寄、隱居奉願候。養子淸右衛門悴源助は孫にて御座候間、此者に跡式被仰付被下、養子淸右衛門は、別格に御奉公仕候樣に被仰付被下候樣に申上候處、願之通りに被仰付、源兵衛跡目無相違、源助に被下候。其後源助名を源兵衛に成申候。淸右衛門跡式は、末子に被仰付、只今は跡服部半助にて御座候。栗木平右衛門と申も、御譜代之者にて、此類族之者にて伯耆守樣へ御奉公仕居申候。此源兵衛元和元年大坂陣に御供仕候。

五、養子服部與三右衛門。江習足輕頭、國中在方元締、五百石。四十三歲、小名、作十郎。後源兵衛、又與三右衛門、後に圖書と改め、若原市郎左衛門世悴にて御座候（〇中略朱書）。

後之源兵衛實子無御座、養子奉願候處、願之通被仰付。承應元年極月、十歲にて御國へ參り、同月十六日、御目見仕候之時、名作十郎と申し、明曆二年七月、侍從樣へ兒小姓に被召出、本俵四十俵五人扶持被下、萬治二年、養父源兵衛、五十九歲病死。

十月二十九日、跡目無相違三百五十五石被仰付、宮城大藏組に御入被成候。此刻作十郎を源兵衛と替り申候。寛文二年十月十九日、大小姓白母衣被仰付、同三年、少將樣江戸御供にて罷下候。但、田中源兵衛御取次役にて江戸御供仕候に付、此節名改與三右衛門に替り申候。同十年八月二十七日、少將樣御前へ被召出、御横目役御直に被仰付、御羽織も被仰付候。延寶二年十一月十二日、御横目役御赦免、寄合組へ被仰付候。是は江戸已來病氣に成、御斷申上候に付て也。同六年三月二十日、御前へ被召出、御國中不殘見分仕候樣に、津田重次郎・私兩人被仰付候。同七年六月二十三日、侍從樣御前へ被召出、御鐵炮・足輕二十人御預け被成候由、御直に被仰付候。同年十一月十八日、御前へ被召出、御借銀元締役被仰付。此已後京大坂へ毎度御用銀御用に參候。同八年九月十五日、御前へ津田重次郎・私とも召出、大學・左衛門被召置にて御意被成候は、少將樣御仕立之時分より御用相勤、御用相調候間、御用日には御評定所へ罷出、詮議之品承、無遠慮存寄可申候。重次郎・與三右衛門、御郡々巡見被仰付候處、御郡分のためには有益成と思召候間、此已後も御郡方之義に付、存寄之義候はゞ、御郡奉行共へ可申談候、又在へ罷出可然時分は、何方へも不時に可罷出旨被仰聞候。貞享元年正月二十日、樋方之儀、小作事一所に太田又七奉行仕候へ共、津田重次郎、私に被仰付候間、裁判可仕下奉行に虫明又八被仰付候。同年、御普請方、御鷹方支配、此二品御簡略中津田重次郎、私支配可仕候。但、御普請方は在之御普請奉行、只今迄之通被仰付候間、私共指圖を請可相勤候。御鷹方も肝煎頭廻し二人程申付、私共指圖を請申上候樣可仕候。樋方は只今迄之通り、裁判可仕候由、貞享元年十月十日之日付にて日置左門より、右之通り九月二十九日之御飛脚に御直筆にて遊被下、昨九日津田重次郎へも申渡候間、可奉得其意旨、御飛脚にて、私御借銀御用にて大坂に罷在候處に、被申越候。同二年八月十一日、御國中御林・御藪支配津田重次郎、私に被仰付、御奉行には士鐵炮之内を可申付旨御意之由、大學・左門申渡候。

・・・・・・・

實父若原市郎左衛門、先藤堂和泉殿被召出、千石鐵炮三十挺御預け被成、御奉公仕居申候。市郎左衛門儀若原右京世悴、是以御當家御譜代之者、輝政樣御傅に被召仕、二百石被下候由。其後御見立と御意被成、老功同前母衣被仰付、慶長五年八月二十二日、於新加納輝政樣、一柳監物殿其外川越之節、祖父右京（其比は若原源三と申）、はやく川を越、敵一人突伏、若原藤五郎に打取被申候。只今之監物父に御座候。又間もなく申付之敵一人突伏、高名仕候而、輝政樣上覽に入申候。其後關ケ原御一戰之節、南宮山に無利家人數大勢陣取申故、輝政樣・淺野紀伊守樣御兩所樣は、南宮之押に被仰付候處、右京義福島左衛門大夫

補。子作十郎、後樣左衛門と變名、早世ゆへ、山崎源五左衛門二男長四郎を養子として家を繼しむ。

樣御手へ御使に參り、一戰宮中へ罷越、則鎗を合せ、下にて高名仕候。場所之儀は、福島左衛門大夫樣御內大崎玄蕃・松田下總本庄將監と申者杯、月をかはし、右之通りに御座候由。右京義、其後度々御加增被下、四千五百石被下候。其外一萬石與力組被仰付、輝政樣へ御奉公仕候。市郎左衛門義十三歲、左衛門督樣江戶・駿河御下被成候時御供致し、駿河にて權現樣に御目見仕、於江戶台德院樣へも御目見仕、其節諸大夫に被仰付、名も大學と御替、御馬拜領仕候。從江戶左衛門督樣御上り之節、御參內之刻、供奉にて參內仕候而、卿宣を頂戴、今所持仕候。慶長四年五月にて御座候。

輝政樣御卒去以後、右京浪人仕、其後病死仕候。實父市郎左衛門義は、先藤堂和泉守樣被召出、千石、足輕三十人御預被成候。市郎左衛門義、大阪御陣之時分は、浪人にて罷在候に付、若原監物手へ加り罷在候。

六、子作十郎。

延寶二年二月二十四日、十歲にて御目見仕候。

七、服部淸右衛門。

服部源兵衛聟養子、別に被召出、百五十石被下候。關ケ原御陣、大坂御陣相勤申候。實は、栗木平右衛門子、初治兵衛といふ。

八、服部半左衛門。

當初、谷半助。中、半左衛門。後、淸右衛門と改。

正保三年九月、跡目被仰付候。寬文七年正月十一日、宮城大藏預り御鐵炮引廻被仰付、同八年、江戶御堀御普請に付、正月六日、罷下候へ共、江戶火事に付、御堀普請やみ申候。同二月二十四日、罷歸候。其節御堀普請奉行堀半左衛門抔と申候に付、父半右衛門、此時名を替り淸右衛門と申候。延寶八年七月、五十三歲にて病死。

九、服部半助。

百五十石、三十七歲。

寬文元年十二月、兒小姓に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。同六年二月、兒小姓御免被成、小堀半彌組被仰付、六ケ年中奧へ相勤。同十二年、御式台一同に相詰申候。延寶八年閏八月跡目被仰付候。私弟忠兵衛、天和三年六月十三日、田中與兵衛養子に被仰付候

一〇、八田掃部。

伊勢國に仕へ申候。先祖八田八郎成忠、本國河內楠家に罷在、應永之比、千劔破落城以後、勢州に參り、國司家へ代々奉公仕、掃部迄相續、勢州に罷在候處、天正四年冬に國司具敎滅亡に付、浪人仕、於攝州病死。

一一、八田彌三右衛門。播部一所に罷在。

勝入樣播州伊丹御在城之節被召出候。勝入樣•輝政樣へ御附被成候由。於三州千石、組士二十、足輕三十御預け被成、御仕置之内へも相加り、爲御合力御代官をも被仰付候由、御陣御供仕、六七度も心馳の御奉公仕候由。

慶長五年、關ヶ原御陣之砌中風煩居申候に付、世悴太郎兵衛十八歳にて組鐵炮召連、陣代に罷在候。八月二十二日、於新加納、岐阜中納言樣御内番頭前田半左衛門と申者と太刀打仕、手負申候へ共、討取申候由、右半左衛門は德善院之甥、刺物むらさき母衣之由。太郎兵衛は陣代に罷在候樣、父之刺物白黑段々之しなへを用申候。八月二十四日より九月十四日迄、於大垣日々足輕迫合御座候節、茂みに敵籠居、鐵炮嚴敷搏懸申候に付、中島源大夫•竹村伊豆•八田太郎兵衛三人に被仰付、藪を切拂退申節、敵喰留難退御座候、依而太郎兵衛は若き者之儀に御座候間、是非殿可仕と兩人に斷、退不申候故、兩人引取申候、太郎兵衛は五六町も跡に退申候。其刻味方被下候四五人も鐵炮に中り申候。太郎兵衛家來柏原杢右衛門と申者、持筒の鐵炮にて敵壹人搏申候由、依之敵慕不申と承及申候。

八田彌三右衛門は慶長六年七月、五十三歳にて於播州病死仕候。爲遺物三條宗近之刀指上申候由。太郎兵衛に彌三右衛門跡目被仰付、千石之御加增にて都合三千石被下、組鐵炮無相違被仰付候。太郎兵衛事、輝政樣參議御拜任之刻、御太刀持之御役義被仰付。則丹後守に罷成、卿宣頂戴仕、爾今所持仕候。其後豐後守に成申候。右豐後守は私伯父にて御座候へども、關ヶ原御陣之刻、祖父彌三右衛門病氣に付、陣代罷立候故、彌三右衛門御奉公之内へ書入申候。

一二、八田彌三右衛門。祖父彌三右衛門末子にて御座候。

慶長六年、幼名、千松と申、五歳之時、於播州輝政樣へ御目見仕候由。其年祖父彌三右衛門病死仕候刻より、五十人分の御扶持被下、兄豐後組へ被仰付候。慶長十九年、大坂冬陣之砌り十七歳、武藏守樣御供仕候。元和元年二月中旬、尼崎御番勢に兄豐後專一所に罷越候。同四年上旬、大坂へ武藏守樣御出馬御供仕、五月七日、豐後守備にて甲付之印一ツ取り、武藏守樣へ懸御目候。寛永十年正月元日、五十人扶持被召上、御知行に御直し、二百二十石折紙被下候。慶安二年二月、伊木頼母組御鐵炮引廻被仰付候。寛文二年六月、六十六歳病死。

一三、八田彌三右衛門。近習持筒頭軍用役、二百五十石、四十九歲。幼名、彌一郎。

十一歲之時、正保四年二月朔日御目見仕、寛文二年七月二十八日、跡知無相違二百五十石被下、名も彌三右衛門に可成旨、御意之由、津田左源太申渡候。信濃守様御組に罷在候。延寶元年七月十五日、池田美作組之鐵炮引廻被仰付、同年十一月十九日、池田吉左衛門組士鐵炮組頭被仰付。同六年、手前不罷成候に付、御斷申上、極月末、在鄕へ罷越候。此節池田七郎兵衛組に被仰付、同八年十月朔日、從在鄕被召出、上泉佐左衛門跡役被仰付、御貝吹五人御預け被成、御知行百石、拜借銀之方に指上、殘る百五十石にて御城詰可仕旨被仰付、御合力米百俵被下、家繕料銀三十枚被下。天和二年七月十五日御忍十五人御預け被成、御貝吹も共儘支配可仕由にて、奥御近習被仰付候。貞享二年極月二十七日、於御城日置左門御意之趣被申渡候は、近年從在鄕中途に被召出、手前不罷成候段聞召被屆候、依之上知百石御返し被下、御城銀十貫目拜借被仰付、以後も被召仕度被思召候間、勝手取續申様に相談仕可遣旨、御內意之由被申渡候。

一四、子佐助。

寛文十一年、十一歲にて御目見仕候。天和三年極月十六日、御中小姓に被召出、六十俵四人扶持被下候。貞享二年十月四日、御兒小姓被仰付候。今年二十五歲。

一五、八田久次郎。

八田彌三右衛門庶子にて御座候。慶長八年、輝政様へ被召出、二百石被下候。同十八年、池田攝津守へ被爲附候。大坂御陣相勤申候。明曆二年二月、病死。久次郎老後隱居仕、家督嫡子傳左衛門無相違、前信濃被申付候、前信濃死後、慶安三年、少將様被召出、知行無相違被下候。

一六、八田庄兵衛。五十五俵四人扶持、五十歲。久次郎二男にて御座候。

明曆二年正月、小十人組被召出、二十五俵四人扶持被下。翌年冬、中小姓被仰付、十俵御加增被下、御膳奉行被仰付大納戸御用、只今迄十七年相勤候。

一七、伴右馬太郎。祖父元察、四歲之時病死仕候。委細不在候。

一八、作元察。 若年之比、松平丹波守組無足にて罷出、其後浪人仕候。

輝政様参州吉田に御座候時、慶長三年石丸脊徹取次を以被召出、奥州御陣・關ヶ原御陣御供仕候。御陣中より御側へ被召仕、それより切々御加増被下候。慶長十四年十一月二十六日、於播州百五十石被下候。慶長十八年十一月七日、武藏守様より三百五十石御加増被下、都合五百石被下候。少將様因州へ御入國被成、元和四年御知行、御小姓並五物成被下候。其上高原郡御代官被仰付候。同五年、御足輕十人被仰付、寛永五年、御足輕十人御増御預け被成、御城番被仰付。備前御國替、同九年、右之五ツ物成を高に被仰付、都合七百石致拜領、不相替御城番被仰付候。同十四年、隱居之願、御免被成、御足輕二十人、御知行七百石無相違、作安左衛門へ被仰付、同二十年七月十日、七十二歳にて病死。

一九、作安左衛門。

寛永四年十一月、少將様御祝言に付、二十一歳之時江戸へ被召寄、御奉公相勤。同十四年、元察隱居、三月四日、繼目之御禮申上候。寛文六年十月十八日、六十歳病死。

二〇、作安左衛門。 草賀宇右衛門組、四百石、二十四歳。

寛文六年十二月十三日、五歳之時跡知四百石被仰付、草賀宇右衛門組に被仰付候。

二一、野々村平大夫。 幼少之頃、岐阜中納言様に罷在候。

慶長五年十一月、於播州武藏守様へ被召出、同十四年四月、少將様御附被成、江戸へ御供引越罷在候。元和四年七月、於因州新知百五十石被下候。寛永七年十月、百五十石御加增被下候。同八年二月十一日、於江戸御長屋、五十六歳病死。

二二、野々村平大夫。 同年、跡目無相違三百石被下、同二十年七月二十五日、於備前三十三歳病死。

二三、作半兵衛。 近習ヶ行頭、二百石、四十三歳。幼少之比より叔父草賀宇右衛門手前へ引取、母方祖父作元察名氏を名乘申候。

萬治三年五月十四日、御中小姓に被召出之旨宇右衛門へ被仰付、同十五日、侍從様へ江戸御屋敷にて御禮申上候。

歳十八、御切米四十七俵四人扶持被下候。寛文二年九月十七日、中奥に相詰可申旨被仰付。同十二年七月十二日、御膳奉行被仰付。天和二年三月十五日、二十三俵御加増被下。同三年五月十五日、御歩行頭被仰付、御先歩行十人御預け被成。同四年二月十六日、新知二百石被下。貞享元年三月八日、向後御藥煎可申旨、御直に被仰付。

二四、草賀五郎右衛門。

天龜年中、於尾州犬山勝入様へ被召出候由。天正八年、攝津國花熊御陣御供仕、高名仕候。同年、輝政様御附被成、尼崎に罷在候。同十二年、於岐阜三十貫被下。慶長元年、於三河四十貫に罷成、於播州十七石被下候。同八年、武藏守様へ御附被成、同九年、於備前知行百石被下、同十年病死。

二五、芳賀內藏允。

天正十八年、於岐阜武藏守様へ被召出候。慶長五年、關ヶ原へ御供仕候。同年、播州へ御國替之節、御知行被下候由同九年、於備前六百石被下、組並御鐵炮二十挺被仰付、自分爲使之歩行五人之御扶持切米被下候由。同十一年、四百石御加増被下、同十一年於播州一倍之御加増被下、都合二千石に被成下、伊賀者十人御預け、其後御弓之者十人御加へ、士鐵炮共三十人被仰付候。同十九年・元和元年大坂兩陣御供仕候。武藏守様御代、番大膳相司にて御仕置之御用被仰付相勤。少將様御代にも右兩御仕置御用被仰付相勤申候。御用御捨免被成候節、右召使歩行五人之扶持切米指上申候。池田民部様御養育申上候様被仰付、內藏允宅へ被爲入、御遠行之時分迄、被成御座候。寛永十九年病死。

二六、養子芳賀次郎兵衛。（實父松田與右衛門にて御座候。內藏允子分に仕候。）

元和四年に少將様へ被召出、御兒小姓に被召仕、（其時は兵內と申候。）寛永十年、新知三百石被下、同十九年、御横目役被仰付御歩行二十人御預け被成、同年、內藏允跡、無相違二千石被下、（名も內藏允と被成、）御横目役御歩行指上申候。其後御番頭被仰付、足輕三十人御預け被成。萬治二年七月十二日、病死。

實父松田與右衛門。五歳にて父に離れ、浪流仕、常眞公御内丹羽勘助所に罷在、其後浪人仕。慶長十年、武藏守樣被召出、二百石被下、大坂付制物御替被下候。同十二年十月四日、兒島郡御郡奉行被仰付。延寶二年十一月八日、御郡奉行御免被成、上東外記組之組頭被仰付。同四年五月朔日、土肥助次郎組之組頭被仰付替、八月二十二日、又外記組に御戻し被成候。右之役義相勤候。

二七、予助八。　七歳にて延寶八年九月十五日、侍從樣御目見仕。

二八、馬場新三郎。　尾張内府樣に御奉公仕、長久手陣之砌り討死仕候。

二九、馬場茂右衛門。

新三郎討死之節、幼少故流浪仕、石河掃部殿へ罷在、其後浪人仕、池田備中樣に被召出、慶長五年九月二十五日、御知行二百六石餘之御折紙被下候。

池田加賀幼少之時、備中守樣へ御預け被成、輝政樣より御呼返し被成候時、加賀へ御附、播州へ參り候。加賀より、二百五十石被申付候。大坂兩陣加賀供仕候　寛永十二年二月二十二日、病死仕候。

三〇、馬場茂右衛門　跡知無相違加賀被申付候。大坂兩陣加賀供仕候　池田佐渡代迄奉公仕候。

佐渡殿中に付、承應二年、少將樣へ被召出、其時は御藏米にて二百五十石分被下候。同三年十月朔日、御目見仕候。

二百五十石之御折紙被下候。明暦二年六月十九日、病死。

三一、馬場茂右衛門　組外、二百五十石。

承應四年四月朔日、少將樣へ御目見仕候。明暦三年九月朔日、跡目無相違被仰付。寛文五年正月二十三日、御勘定上聞御用被仰付。延寶五年三月迄十三年相勤候。同四月二日、御借し米之御用被仰付、只今迄九年相勤申候。山脇伊内組に罷在候得共、御用に付組外に被仰付候。

三二、子孫次郎。　寛文七年二月十五日、少將樣へ御目見仕候。

三三、伴五左衛門。

（朱書）
輝政卒後には不採候

若輩之時より輝政様へ御奉公申上、御卒去之後、左衛門督様へ御奉公相勤申候處、良照院様より五左衛門義御望被成、右近大　様へ御守役に被仰付、御四歳之時より御奉公仕候。良照院様左衛門督様御卒去以後、右近大輔様御若年之由にて播州姫路御呼請被遊候節、武蔵守様爲御意、元和元年九月二十日二百石、右近大輔様より被下候。寛永十八年三月十八日、病死。

三四、伴五郎左衛門。

右近大輔様御四歳之時より五左衛門一所に御奉公仕候、其後五郎左衛門別知に百五十石被下、御横目役に被仰付并御歩行三十人御預け被成候。跡目無相違二百石被下候。卽自分へ被下來之百五十石指上候、慶安三年十二月二十六日、少將様へ被召出、二百石被下候。寛文六年十月、若原監物預り御鐵炮引廻被仰付候。延寳二年五月十八日、病死。

三五、伴三右衛門。土肥飛彈組、鐵炮引廻、二百石、四十七歳。

延寳二年七月二十二日、跡知無相違二百石、侍從様より被仰付候。同六年十一月二十七日、土肥飛彈組御鐵炮引廻被仰付候。

三六、番與左衛門。尾州丸根之城にて討死仕候由。

三七、番藤左衛門。

荒尾小太郎様に居申候由、武田信玄遠州表出張に付、従信玄公御加勢被遣、荒尾小太郎様も被致出陣候。於味方原権現様御合戦之節、味方敗軍仕候に付、小太郎様馬に放れ難儀に見及候に付、藤左衛門引懸負候而、且虎口を通立退候へ共、猶々敵前後より強かに暴れ、萬死一生之處、當敵を防ぎ候間に、敵中に被押隔候に付、其場を切抜け退申候、跡にて小太郎様御討死之由。

其後藤左衛門事勝入様へ被召出、天正三年五月二十一日、長篠合戰に藤左衛門高名仕、敵之頭相添、勝入様へ指上候處、卽刻信長公へ御持參被成候由。

同十二年四月九日、長久手御合戰之刻、勝入様紀伊守様御討死被成候節、輝政様被仰付候は、勝入様御討死と見候間、同御討

死可被成とて御掛込可被成心體奉見、藤左衛門御馬口に取付き、あなた可被成御座か、惜に勝入様にて候と相謀、先此場を御替、敗軍之御勢御集被成候様にと、達而御諫申上、堀切之悪敷御座候を御馬を飛せ申候、右堀切越かれ打れ申者も多御座候由其刻御側、御馬取一人と藤左衛門と兩人、御難儀の處を御供仕候。其後御勢二三十人集り、犬山迄御退被成候。

其後藤左衛門さのみ御取立も無御座候處、御家を立退申所に、伊木清兵衛異見仕候間、歸參仕、因州まで罷越、元和八年、病死仕候。跡知百五十石無相違、養子森川惣右衛門に被仰付候。

惣右衛門儀は備前迄罷越候處、御機嫌を損じ、御暇を被遣候。右惣右衛門實父森川茂左衛門は、大膳行合兄弟之由承及候得共委細は不存候。

三八、番大膳。

若年より武藏守様へ被召出、御奉公仕候。慶長五年、關ケ原之陣に於新加納高名仕候由。

同十九年、大阪御陣之刻、攝州尼崎表にて片桐市正者共、中島にて一揆に被打候時、尼崎より御人數出し助不申候義を大に憤り、武藏守様へ御逆意之様に被致、其上權現様御機嫌不宜、既に御爲悪敷様成候に付、被仰分之御使に、誰を可遣候哉と御詮議の上にて、名指之入札被仰付候處、先づ武藏守様大膳に御入被遊候、御家中頭分過半大膳に入札落申候故、右之御分之御使西之宮御陣所より京都二條御城へ罷上り、段々御誤り無之旨、權現様へ直言上候處、會而御機嫌不宜に付、倚尼崎表之繪圖を致懐中備上覽、其上にて再三委細致言上候へば、武藏守様無御如在旨、速に被聞召上候。其節御前に本田上野様被成御座候而大膳退出之節、不恐御意、御言葉より押返致言上、子細を申披候段、御感被成候由、申傳候。武藏守様御國に被成御座候刻、叡山坊中夜討強盜之輩類、御膺匠に居申候由、公儀より假名御附屆御座候に付、大膳所へ呼寄せ、自身捕へ、早速上方御奉行へ御渡し申候由。

少將様因州に被成御座候節、鳥取之御城へ石丸等右衛門從弟亂氣にて押込置候所、籠を破り、御城奥之御寢間へ走入候、其時田中其頃居番人長刀を引提、戸を立込、倚大膳方へ申屆候に付、早速懸付け、則長刀にて打臥せ召捕申候由。元和元年、大阪後之御陣之節、四月、福照院様・三五郎様江戸御下向之節、大膳御供仕り、於三州岡崎、台德院様へ御目見仕候。福照院様へ御米千俵、三五郎様へ中鶯来御脇指御拜領被成候。次に大膳も御羽織・御小袖頂戴仕候。

御知行大膳拜領之次第

二百五十石、於播州武藏守樣御部屋住之節より被下候。 五百石御加增、備前へ御入國之刻、被下候。

二百五十石御加增に付、都合千石に被成、組士、並忍之者五人、鐵炮共御預。(備前に被成御座候内に被仰付候)。

千石御加增、播州へ御替り被成候刻被下、二千石に被成下候。

五百石、此分は備前に被成御座候節迄、御忍之者分に被仰付候得共、大阪御陣之節より自分へ被下候由にて、十人之步行者預、五人分迄も被下御意之由、(年月不明)。元米百五十石御步行•御忍之者十人之扶持切米(一人に三人扶持、切米十石宛、年月不明)。九十八石五斗御預け、御步行五人(一人に付四人扶持、切米本俵二十五俵宛、年月不明)。組士御加增、並御鐵炮十挺御增、以上三十挺被仰付、(年月不明)。御長柄之者三十人御預け、組之内上田惣右衛門渡置、直に御用勤させ申候。備前に御入國之時指上申候由。

御仕置役、武藏守樣•少將樣御二代共に存命之内勤申候。寬永十三年、江戶御供に罷下り、七月六日、病死。

三九、嫡子 番和泉。 祖父大膳嫡子にて御座候。

大膳跡目、二千石、外に五百石、御忍之分に被成被下候。其後於江戶忍之者五人被召抱、則御預け被成、並組侍鐵炮無相違被仰付。祖父大膳儀大坂後之御陣、福照院樣江戶御下向之御供仕候に付、和泉儀、大膳陣代にて大坂へ罷立度旨、武藏守樣へ直訴申上候へば、行年十三歲にて願申段、奇特に被思召候との御意にて被召連、其年より御俵百俵宛被下。其刻大膳には御指料之兼光之御腰物被下候由。 明曆二年、江戶御供被仰付候節、祖父名に御替、 大膳に被成被召連候。同三年十二月二十一日、後大膳病死仕候、五十五歲。悴五郎三郎跡目二千石被仰付、組鐵炮は被召上候。五郎三郎儀、萬治二年十月八日、病死。跡斷絕仕候。

四〇、二男 番與右衛門。 和泉弟にて御座候。

元和元年、播州より江戶證人に罷下り、十八年相詰、寬永十一年、妹と相替罷歸候。同十二年、御知行三百石被下候父大膳果申候節より二百石御加增に付、都合五百石被成被下候。萬治三年四月二十三日、病死。

四一、番兵左衛門。 池田左兵衛組、鐵炮引廻、五百石、四十六歲。

同年、父與右衛門跡知五百石之内三百石被仰付候。寬文五年六月二十二日、少將樣御前へ被召出、先祖之義被仰出

御直に御念比之御意之上、御加增二百石被下候。同十二年十二月二十八日、學校御用被仰付、翌年十二月十六日、御免被成候。天和三年閏五月十四日、池田左兵衛組被仰付。

四二、子數之丞。　天和元年十月二十八日、八歲にて少將樣並侍從樣へ御目見仕候。

四三、波多野彌九郎。

先祖は伊勢國直弓御尉之地頭波多野筑後守子孫、代々地頭職被仰付候。將軍義尚公之御時、文明十五年三月十六日、尾張國春日井郡篠木三鄉之御代官職被仰付候旨、氏家余次郎・板倉周防入道兩人被仰渡、每年千貫文之御貢進納仕候波多野駿河守と申者之孫にて御座候。彌九郎代迄、公方之大番役相勤申候由。

四四、波多野丹羽。　幼名、彌藏、又、彌左衛門ともいふ。

彌藏と申時、勝入樣尾州犬山に被成御座候時、被召出、攝州花熊御陣御供仕候。心馳御座候に付、勝入樣攝州伊丹に被成御座候時御知行被下。其後大坂に被成御座候節、御鐵炮御預け被成候。大坂より濃州大垣へ御國替之時、御加增、寄騎人・御鐵炮かさみ申候、御代官被仰付。其後長久手御陣御供仕候。輝政樣三河へ御國替之節、御知行六百五十石、鐵炮三十挺被仰付候。此時、彌左衛門と名替り申候。關ケ原御陣之時、彌左衛門子長藏・彌七郎父子三人御供仕候。播州へ御入國之時、御加增三百五十石被下、都合千石被下候、外に長藏に二百石、彌七郎に百五十石被下候。武藏守樣備前御入國、彌左衛門に千三百石に被成、御鐵炮三十・組十人餘被仰付、此時、丹波と名替り申候。外に二百四十石長藏、二百石彌七郎、父子合千七百石四十石被下候。慶長十九年三月二十三日、丹羽六十五歲於播州病死仕候。同年十月十六日、知行子供六人に割符被成被下。

七百石、長藏。後安右衛門と改、跡絕。　三百石、彌七郎。後文右衛門と改。　二百四十石、彥太郎。後彥左衛門と改。
二百石、甚太郎。後傳左衛門と改。　百五十石、清兵衛。後源兵衛と改。　百五十石、大藏。跡絕。

大阪冬陣之節、丹波に御預被成候鐵炮足輕・浮組にて居申候に付、兄弟六人として引廻、下濃將監一所に大先手相勤申候。

四五、波多野文右衛門。　幼名、彌七郎。

慶長六年、關ヶ原御陣之時、父と一所にて勤申候。同十九年・元和元年大坂兩陣相勤申候。寛永十七年正月十八日、五十九歳病死。

四六、波多野夫左衛門。 水野三郎兵衛組、三百石、七十歳。

跡目無相違被仰付候。萬治元年極月、上道郡御郡奉行被仰付、同三年八月迄相勤申候處、同郡國府市場村百姓公事出來、御穿鑿に付、私手代百姓加はり、段々不屆御座候趣、私不存儀不念に被思召、同八月九日、御改易被仰付候。寛文五年六月二十一日歸參被仰付、翌年八月二十二日御目見、同十二月十五日、御知行無相違、御折紙被下候。延寶元年十一月十九日、湯淺半右衛門組士鐵炮引廻被仰付、指物御替被下、同五年、水野三郎兵衛組に被成、士鐵炮組頭役被仰付候。私病氣にて御斷申上、役儀御免被成、其儘水野三郎兵衛組に被仰付候。

四七、子定之進。 萬治二年、九歳にて御目見仕候。

四八、波多野彦左衛門。 幼名、彦太郎。波多野丹波三男にて御座候。

慶長十年、於備前被召出、四十俵四人扶持被下、同十九年十月十六日、丹波知行之内二百四十石被下。大坂兩陣相勤。萬治三年十月、池田藤左衛門預御鐵炮引廻被仰付。延寶二年十二月二十四日、八十六歳病死。

四九、波多野五郎左衛門。 上坂外記組、二百四十石、五十六歳。

寛永十九年、十三歳にて御目見仕候。寛文四年、彦左衛門隱居、家督無相違被仰付、十月十五日、御禮申上候。

五〇、子孫次郎。 貞享二年九月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

五一、波多野傳左衛門。 丹波四男にて、幼名甚郎と申候。

番大膳申上、御切米御扶持被下候由。丹波死後二百石被下候。大坂冬陣は兄弟六人一所に罷出、夏陣には芳賀民部組にて先手相勤申候。寛永十一年正月五日、津高郡御郡奉行被仰付。承應三年迄十一年相勤。同十二月十一日、御斷申上、御免被成候。明暦二年正月五日、眞田將監預り鐵炮引廻役被仰付、寛文元年、御長柄奉行被仰付、年罷寄御斷申上候へ

ば、同七年三月六日、御免被成、隱居被仰付候。天和三年三月二十二日、九十三歲病死。

五二、波多野彌九郎。（山脇傳內組、鐵炮引、二百石、四十八歲。）

寬文七年五月六日、家督無相違二百石被下候。延寶五年八月朔日、山脇傳內へ御預け之足輕引廻被仰付候。

五三、子五郎三郎。　天和二年二月二十八日、御目見仕、十一年之時也。

五四、波多野源兵衛。（丹波五男にて、幼名、清兵衛と申候。）

丹波死後百五十石被下候。大坂兩陣兄弟六人一同に相勤申候。寬文四年、眞田將監預り足輕之內十人引廻し被仰付。同八年、御斷申上、足輕引廻御免被成候。延寶八年十月二十五日、八十八歲病死。

五五、養子波多野助七。（水野三郎兵衛組、百五十石、四十歲。波多野彥左衛門末子にて御座候。）

源兵衛實子無御座私を養子に奉願候へば、被仰付、寬文九年三月朔日、御目見仕、同年九月九日、侍從樣へ御目見仕候。天和元年正月十日、跡目無相違、百五十石被仰付候。

五六、波多野九兵衛。（四十六俵四人扶持、五十六歲。波多野文右衛門末子にて御座候。）

明曆二年正月、小十人に被召出、二十五俵四人扶持被下候。萬治二年、御小姓組被仰付、小堀主殿組に被仰付。同三年、同姓大左衛門御改易被仰付候に付、私儀浪人仕候。寬文七年十月、歸參、同月二十四日、御目見仕候。同九年、五俵御加增被下候。同年暮より馬醫御用被仰付、延寶七年、澤權大夫組に被申付候。

五七、波多野彌藏。（後、彌左衛門と改、又後に、丹波と改。）

五八、波多野次郎右衛門。

輝政樣に被召出、二百石被下候。大坂兩陣共、武藏守樣御供仕候。元和九年五月五日、病死。

五九、波多野甚左衛門。　次郎左衛門跡目無相違、二百石被下候。萬治二年六月六日、病死。

六〇、波多野甚左衛門。（伊木賴母組、鐵炮引廻、二百石、五十二歲。）

同年七月、跡目無相違、二百石被下。延寶六年三月、伊木頼母預鐵炮引廻被仰付候。

六一、子猪助。 寛文六年十一月十五日、十三歳にて御目見仕り候。

六二、長谷川但馬。 織田城之介様に居申候。 其後輝政様へ被召出候。

六三、長谷川九郎大夫。

幼少より輝政様へ被召出、其後武蔵守様へ御奉公仕。慶長九年十二月四日、新知百石被下候。同十五年八月二十七日、五十石御加増被下、御弓役被仰付。大坂御陣御供仕候由。寛永十九年二月十三日、病死。

六四、長谷川九郎大夫。 若原監物組、鐵炮引廻、百五十石、六十二歳。

同年六月二十二日、跡知無相違十九歳之時被仰付。寛文八年十月十五日、伊庭半藏組之御鐵炮引廻に被仰付、同十一年、池田美作組之御鐵炮引廻被仰付、延寶二年、丹羽平大夫組之御鐵炮引廻に被仰付。同六年、池田藤左衛門組之御鐵炮引廻に被仰付。天和元年十一月朔日、若原監物組之御鐵炮引廻に被仰付候。

六五、子務右衛門。 寛文十一年正月十五日、十六歳にて御目見仕り候。

六六、八田治部。

伊勢國員非郡を所持仕、八田に少々かきあげ仕居申候。治部病死、子無御座候に付、從禁中德丸縫殿と申者、養子に被仰付、治部跡式相續仕、八田に居申候由。

六七、德丸縫殿。 いづれの戰場にて候哉、討死仕候由。

六八、八田彌右衛門。 縫殿討死仕候に付、浪人仕。

其後於岐阜輝政様に被召出、百石被下候。大阪御陣之節、年罷寄候に付、世悴彌一兵衛、兩陣共に名代に勤申候由。元和三年正月、八十二歳病死。

六九、八田彌一兵衛。

慶長九年、十三歳於姫路輝政様へ無足にて御兒小姓に被召出候。元和三年、跡目無相違被下候。萬治三年十一月十

六日、六十九歳病死。

七〇、八田彌兵衛。 土肥飛彈組、百石、五十一歳。 正保三年九月朔日、初而御目見仕候。萬治三年、跡目無相違百石被下候。

七一、林辰左衛門。 柴田修理様に罷在、其後、佐久間玄蕃様に罷在、其後、加賀大納言様に罷在、五百石與力預り申由、數度心駈も有之候由。

七二、林六左衛門。 幼少より藤田孫四郎様に居申、小姓頭仕、百石被下候由。孫四郎様御身上潰れ申に付、金森中納言様三百五十石にて罷出、中納言様死後、浪人仕候。

慶長八年、堀尾帶刀様御肝煎にて、輝政様へ御無心被申上候へば、武藏守様へ被召出候様にて御意被遊候而、於武藏守様三百石被下候。土肥飛彈組に御入被成候。

六左衛門被召出候翌慶長九年、曾祖父辰左衛門、武藏守様に被召出候。老體にて御奉公難勤候に付、無役二百石拜領仕候。元和八年、世悴助右衛門無相違二百石被仰付候、助右衛門病死仕り候而、悴辰左衛門•定之丞兩人に百石宛被仰付候、兩人立退申候に付、曾祖父辰左衛門跡無御座候。祖父六左衛門孫四郎様に身在候時分、加州大聖寺之城前田肥前様•同孫四郎様御攻取之節に、敵大勢土藏に取籠り居申候に付、土藏之口にて迫合御座候時分、敵之首を取り働申候由に御座候。御旗本近藤勘右衛門殿と孫四郎殿にて傍輩にて罷在候。勘右衛門殿爲御横目、先年因州へ御越之刻、六左衛門働之節、能御存にて御噂御申之旨に御座候。元和八年、病死。

七三、林六左衛門。 跡知三百石同年被仰付。土肥飛彈組被仰付候。萬治二年、願上之通、隱居被仰付候。

七四、弟養子林七兵衛。 池田左兵衛組、三百石、八十歳。

近藤勘右衛門殿御肝煎にて、元和八年、少將様へ被召出、大俵四十俵六人扶持被下、御中小姓に被仰付候。私義六左衛門弟にて御座候處、六左衛門病氣に罷成、世悴無御座候に付、養子に仕、隱居奉願候處、願之通り萬治二年二月、被仰付、家督無相違三百石被下候。土肥飛彈組に被仰付、天和三年閏五月二十四日、池田左兵衛組に被仰付候。

七五、子源三郎。

寛文二年十月十五日、七歳、少將様へ御目見、同五年十一月九日、侍從様へ十二歳にて御目見仕候。天和元年、父七

兵衞老人、殊に病氣に付、私を名代奉願、名代勤させ申候。

七六、長谷川甚兵衞。

信長公に御奉公仕、其後秀吉公に御奉公仕、千五百石被下、黄母衣之役仕候。景勝陣之節、權現樣御供仕、直に關ケ原御陣御供仕、翌年御加增、都合三千石に被成下、其後病死。

七七、長谷川四郎兵衞。

秀吉公・秀頼公迄、御奉公申上、父跡目千五百石被下候。慶長十二三年比より權現樣へ御奉公仕り、台徳院樣御代御使番被仰付候。寛永八年、病死。

七八、長谷川利兵衞。

寛永八年、於因州少將樣へ被召出、御兒小姓役被仰付候。同十年正月朔日、三百石御折紙被下候。明暦二年七月二十六日病死。

七九、長谷川源藏。　池田七郎兵衞組、二百石、三十二歲。　跡目二百石被下候。

八〇、九郎大夫別家長谷川兵大夫。　長谷川九郎大夫子にて御座候。

慶安二年、少將樣へ御目見仕り、弓料御米十石宛、三年拜領仕候。同四年暮、被召出、四十俵四人扶持被下候。萬治二年九月、御加增十俵被下候。同霜月十九日、新知百五十石被下候。寛文六年十月、大小姓役被仰付候。同八年、大小姓役御免被成、御馬廻に被仰付、伊庭半藏組に被仰付候。其後池田七郎兵衞組に被仰付候。今年五十四歲にて御座候。

子兵五郎。　貞享元年七月朔日、八歲にて御目見仕候。

八一、馬場左兵衞。　先祖は、馬場美濃守流之由承傳候。

桑山治部卿法印方浪人分にて合力米受罷在候處に、をのづから家來同樣に被致、新知三百石被申付。桑山之家老職被申付候。

曾祖父左兵衛より私迄四代相勤罷在候。左兵衛義江州志津ヶ嶽・高麗・紀州之新宮一亂等之節、治部卿法印嫡子二男出陣に付供仕、何も首尾能御座候。

八二、馬場七右衛門。

初は四郎三郎と申候。跡知三百石無相違被申付候。關ヶ原陣・大阪共に治部卿法印より四代目左衛門佐に供仕候。大阪陣五月六日、於道明寺甲首二ツ打取申候。内一は付取にて御座候。即座に爲褒美銀子並雨足給候。歸陣にて兵粮米二十石、其後兩度加増百五十石、都合四百五十石給候。左衛門佐子息修理亮家督と成候とも、餘程久敷奉公仕候。正保元年十一月二十三日、六十六歳にて病死。嫡子七兵衛に跡目四百石被申付、則名も七左衛門と改申候。寛文六年八月十一日、六十一歳病死。實子無御座候に付、妻之甥を養子仕、跡式三百五十石被申付、七左衛門と名改、修理亮子息美作守代共相勤申候。

八三、馬場平六。　祖父七左衛門二男にて御座候。修理亮被呼出、段々取立二百五十石給候。明暦元年八月晦日、四十九歳にて病死。

八四、馬場半平。　宮城大藏組、合力米二百五十俵、三十五歳。

平六病死之時、六歳にて御座候に付、當分扶持方被申付、後に家督二百五十石、無相違修理亮被申付候。修理亮隱居被致、子息美作守代に罷成候得共、私儀隱居之方に相勤申候。桑山修理亮御家へ申上候に付、貞享二年五月十二日、岡山へ罷越候。同六月十八日、侍從樣へ被召出、同月二十九日、宮城大藏組に被仰付、同年八月十六日、御合力米二百五十俵被下候。

八五、長谷川播之助。

織田備後守殿に御奉行仕候。尾州左渡之城にて御人分御座候時、信長公へ御附被成候。其後西近江へ御發向之時、坂本にて討死仕候。世悴無御座故、同姓丹波守庶子市兵衛を名跡繼せ、是又信長公へ奉公仕り、信長公御傷害之後、岐阜へ引込、入道仕、呂庵と申候。

八六、長谷川市兵衛。　童名、才三郎。

十三歳之時、濃州大垣城主石川長門守殿に被召出、明る十四歳之時、家老長門守殿機嫌に違申候。此時、才三郎長門守殿御刀

を持、御後に居申候處、双向申す體を見付、則爲持御刀にて撞伏仕留申候、若輩之働依爲勝、新知二百石給候を、家老之一類不服に存、從父呂庵承付、御暇申引取申候。

天正之比、於岐阜輝政様へ少しの間御奉公仕、其後三州吉田へ御處替に付、存寄御座候て、御暇申上引取申候。寛永九年、土倉市正を以、浪人中に歸參被仰付、百俵被下、其後入道仕、名を宗右と申候。六十一歳病死。

八七、長谷川新十郎。　跡目五十俵七人扶持被下候。正保三年、三十九歳病死。

八八、長谷川甚左衛門。　丹羽平大夫組、六十二俵四人扶持、四十三歳。

正保四年、跡目二十俵三人扶持被下候。承應元年十一月二十五日、御兒小姓に被召出、十歳より相勤申候。萬治三年六月十三日、二十俵一人扶持御加増被下、御弓組被仰付、今俵六十二俵四人扶持被下候。延寶五年閏十二月二十五日、朝通備略被仰付、御弓組御免、丹羽平大夫組被仰付候。

八九、子甚助。　天和二年二月十一日、御目見仕候。

九〇、波多野彦八郎。

勝入様へ被召出。信長公御代大坂御陣相勤候て、其後勝九郎様御供仕、花熊御陣に手負申候由。其後輝政様へ御奉公仕、於參州新知百五十石被下候。奥州御陣・關ケ原御陣御供相勤、播州御入國慶長六年十一月三日、五十石御加増被下候。武藏守様備前へ御入國之時、慶長九年十一月十一日、五十石御加増被下候。十五年、病死。

九一、波多野忠左衛門。　跡目無相違二百五十石被下、大坂兩陣御供仕候。寛永十三年三月六日、病死。

九二、波多野八郎左衛門。　跡式無相違二百五十石被下、寛文四年九月十六日、五十二歳病死。

九三、養子波多野八郎左衛門。　草賀宇右衛門組、二百五十石、三十二歳。

元來、養父八郎左衛門一類にて御座候故、私養子に奉願、被仰付。寛文三年二月二十五日、少將様へ十歳にて御目見仕、同四年十月二十五日、養父八郎左衛門跡目無相違、二百五十石私十一歳之時被仰付候。

實高祖父中條小市郎。若き時分、信長公に奉公仕居申候。中條將監と申す者之弟にて御座候。信長公に居申内、度々戰場御座候由。其後浪人仕、方々渡り奉公仕候砌、尾州・參州・勢州堺目之取合に毎度高名仕候由。首數三十二打取、其内五度之組打、六度鑓を合、高名仕候由。信長公より五十貫被下、歸參被仰付候處、煩出、御目見不仕内病死。

曾祖父彌六郎。若輩之時、小市郎果候故、叔父中條將監養育仕置、彌六郎十九歳之時、江州小谷にて越前之朝倉義景と御合戰之砌、佐々内藏介・柳田出・中條將監三人に殿被仰付、三段に敵と返合之節、彌六郎鑓を合、後太刀打にて高名仕候。信長公御本陣虎御前山より右之働御覽被成、及晩義景首實見之節、將監被召出、今日小谷之橋詰にて返合太刀打之高名仕候若者名字、御尋被成候に付、小市郎生悴彌六郎にて御座候由申上候得者、年若成者無比類働、御感被成可召出旨被仰付、即座に坪内惣兵衛樣御披露にて御目見仕、御折紙拜領仕候。信長公於本能寺御傷害之節は、尾州在所に居申候て手に合不申、其後信雄公にて奉公申上、御折紙被下候、兩通御折紙、當今弟方に所持仕候。但知行高不明に御座候。其後浪人仕居申候處、輝政樣へ八田彌三右衛門申上、御知行可被下御約束にて被召出候刻、彌三右衛門組に被仰付候。三年程御奉公仕、立身之望御座候而、御暇申上浪人仕、參州に罷在候處、太田飛彈守殿より秀頼公の御弓之頭川口久助・國府藤左衛門を以て、知行五百石・士三十人之頭可被申付候間、參候得と被申越、豐後舊木に參居申候。飛彈守殿折紙、當今所持仕候。石田治部少輔一亂之刻、飛彈守殿身上果にて浪人仕、大坂に罷在候。其砌輝政樣播州へ御入國被遊候處、伊木清兵衛方より飛彈守殿にて其身上被召、歸參之儀可申上候間、早々參候樣に申越候。清兵衛在所三木迄參申候處、清兵衛申聞候に、歸參之儀奉願候處、以之外御機嫌惡敷候、子細は飛彈守殿に居申内、城織部を以て三度迄歸參候事被仰付候處、不隨御意之段不屆に思召候條、清兵衛に御預け、他所へ退き候はゞ、天下御構可被遊候由に付、清兵衛方に浪人分にて罷在、伯州倉吉にて病死仕候。

祖父中條權左衛門。伊木長門より知行三百五十石遣候。足輕預け置申候。備前虫明にて病死仕候。

父中條八郎右衛門。權左衛門家督相續、伊木勘解由にて斷申付置、今年病死仕候。私共中條彌六郎家督相續申候。

服部善大夫先祖書

九四、宮岡加賀、（荒木市郎之御取立之城主にて御座候、伊賀崩之時於右之城討死仕候。）

九五、服部善大輔、（蒲生飛彈守殿へ奉公仕、其後筒井伊賀守殿に罷在候。度々心懸も御座候由、承申候へ共、委義不存候。其後浪人仕候。）

寛永九年、少將樣へ被召出、二百石被下候。寛永十八年、病死。

九六、服部善大夫。　跡知無相違二百石被仰付、萬治二年十一月十日、病死。

九七、服部善大夫。　伊木轁母組、二百石、四十一歲。

同十二月十五日、跡目無相違二百石被仰付候。寛文十一年より在宅仕申候。

九八、子源六。　延寶八年三月三日、九歲にて侍從樣へ御目見仕候。

九九、橋本藤左衛門。

武藏守樣へ十二歲之時被召出、御奉公仕候。慶長十八年十一月七日、於姬路三百石被下候。大坂兩陣大小姓にて御供仕候、其後大小姓御免被成、丹羽藏人組に被仰付。寛永十四年閏三月五日、二百石御加增被下。慶安四年正月晦日、五十九歲病死。

一〇〇、橋本藤左衛門。　山脇傳內組、三百石、四十歲。

同年六月十四日、跡知五百石之內三百石被仰付、五歲にて御座候。山脇修理組に被仰付、寛文十一年、簡略奉願、赤坂郡大久保へ在宅仕候。

一〇一、原田五右衛門。

先祖より代々攝州豐島郡原田之近くへ知行仕、少々攙揚をも仕罷在、家來に原田肥前•原田對馬•勝部加賀と申三人之者共にも、加俸之攙揚、或は屋敷構たせ仕指置申候。其比信長公荒木彌助と申者を取立被成。則荒木攝津守と名を改させ、攝州河部郡伊丹に新城を築、攝州之諸士共を、荒木が旗下に被仰付置候。然る處に、荒木逆心之企有之、旗下之士共を催促仕、同心無之者共方より人質を取り、既に籠城仕候。就夫五右衛門も荒木と一所に籠城仕罷在候處、信長公早速御出馬被成候へば、攝州の諸士荒木手前之人質を捨て信長公へ御味方に參、御先手可仕由申上候段、荒木傳兵衛伊丹之城を捨て、夜中に立退申候。然れ共五右衛門義は、一度荒木と一味仕候上は、命を捨て城を堅固に所持可仕所存にて、城中に踏留り罷在候樣子、信長公御見及被成、城主立退候上は、其方城を持堅候ても無詮事に候間、城を明相渡候へと、五右衛門方へ被仰下候に付、無是非城を明、信長

公へ相渡申候、依之五右衛門義は命御助被成。其後五右衛門事、中川瀨兵衛殿へ御筋目有之者に候へば、御引取可被成由にて先祖之在所原田へ被遣置候。其上中川石見と申者を使者に被下、五右衛門義此度知行被召放、勝手次第可仕由被仰、田御手作之田畠を被下候故、此田畠を耕地仕、致渡世罷在候。其後五右衛門義、此處にて病死仕候。

一〇二、原田帶刀。

五右衛門と一所に浪人仕、原田へ引籠罷在候處、五右衛門死後、帶刀義は石子紀伊守取次を以て秀吉公へ被召出候。然共御知行被下候御定は無御座、御藏米、又は金銀等を度々拜領仕候。其後秀頼公へ御附被成候。

一〇三、原田太郎助。

忰之時より父帶刀一所に秀頼公へ被召出候。幼少之者之事に御座候へば、天樹院樣之御側へ被召寄、常々御碁等被遊候御相手にも罷成候。其比大野修理方より太郎助處へ七月末踊をかけ申候、其樣子天樹院殿御耳に達し、早速踊返仕候樣に御意被成候、秀頼公醍醐御花見之御裝束を御借し被成、金子等被下、右之踊返し仕候由。大阪陣之前方、於御本丸諸士大將之軍評定有之場所へも、祖父帶刀・父太郎助義、每度罷出申候。殊に帶刀手前に指置申候三宿道悅と申者、若名は勘兵衛、最前上杉景勝に罷在、士大將仕、後に越前と申候。若時分に權現樣と兩度迫合仕、於其砌手疵負申候故、左右之手ともに不自由に御座候へ共、武功の者に御座候に付、軍評定之場へも、帶刀と彼道悅を召連罷出申候。道悅も秀頼公へ被召出、人數をも引廻申候。夏御陣之刻、祖父帶刀・父太郎助父子共に、御本丸相詰候樣被仰付候へ共、御先手を奉願候へば、然ば甲の甲斐守を御本丸に被指置候間、甲斐守鑓をも帶刀父子引廻候樣被仰付、御先手に罷越候。大阪五月七日之御陣に、右之三宿道悅義人數を召連、天王寺表にて討死仕候。祖父帶刀・父太郎助兩人は人數を召連、東の假門に罷在、帶刀敵間爲見分に、算用場之丸迄乘出候處、大野修理亮之方より乘立參り、敵競來り候由を申、帶刀も左樣に見及申義、轡を合、一先請取所東之假門へ罷歸、御門を堅め罷在候へば、無程加州肥前殿之御先手人數大勢堀際へ着來候、此處之塀は、前方堀を埋め、俄に懸置申候假塀に候へば、殊外手薄にて、敵容易に乘入可申樣に相見申候故、味方敗北仕、僅十二三人計り殘り候處、櫻之御門之方より敵亂入、味方之後へ廻り申候に付、右十二三人計りと見え申味方、猶又散失、踏留り居申者は六人、吉松次兵衛・横井作右衛門・勝間半大夫・祖父帶刀・弟忠右衛門・父太郎助にて御座候。然る處、敵大勢押寄候故、右六人にて、迚も此所を持堅る事難成見及申、帶刀致手段、鐵炮

附箋墨書、この五枚は、元和元五月十五日堀內の處へ。

打申候へば、ほうぼう火矢を放候様に罷成、敵大分打散、手負も餘多有之候に付、寄手敗走仕候。然共其内に敵四人塀際に居殘り相働候故、半に塀を筒鑓にて迫合申候折節、敵方より突出申鑓を太郎助塀越に押引取可申と仕候へ共、敵も鑓を放不申半に引合候處に、横井作右衛門走り參り、此鑓の柄を切折申候、此鑓主は加州肥前守御内黑坂吉左衛門と申者にて御座候。扱兎角仕內、鑓合延申候故、祖父帶刀・父太郎助親子鐵炮を打申候へば、右四人之內森權大夫・佐藤帶刀と申者二人に手負せ申候に付、殘る兩人之者も、早々引取申候。就夫勝間半大夫申候は、中々此處を引取申筈には不存候、所詮此處にて討死仕ると申候へば、殘者共も、何も尤、左様と覺悟有之と申、居敷罷在候へ共、其場へ敵一人も不寄來候、其內に早御本丸に火懸り、落城仕候故、無是非立退申候。帶刀妻は則太郎助母花房志摩守不遁者に御座候に付、落城仕、早々帶刀志摩守方之小屋へ引取申候。其節三宿道悅後家をも召連候而、志摩守小屋へ引越申候。大坂落城以後、帶刀・忠右衛門・太郎助、此三人在所原田へ引籠り、忍にて罷在候處、五月中旬、板倉伊守殿より原田邊之庄屋共方へ、帶刀親子義は、兩將軍様より御赦被成候間、在所へ參り候はゞ罷出候様に可申旨、被仰渡候に付、則原田之庄屋を召連、上京仕、板倉伊賀守殿へ御禮に罷越候へば、伊賀守殿御逢被成、御直に被仰聞候は、其方父子之義は、兩將軍様へ天樹院様より再三御侘言被仰上候故、御赦免被成、其上御譜代御同事に被思召候間、難有奉存、還御被遊候迄、在京仕候へとも被仰付、則伊賀守殿より近藤源左衛門と申者御使にて、御幸町四條下八町彫物屋茂右衛門と申者方に旅宿被仰付被下候。其後伊賀守殿へ帶刀より奉窺候は、天樹院様へ此度之御禮申上度奉存候由、申上候處、御聞届にて將軍様へ御同意御窺被成候へば、勝手次第に參上仕、御禮申上候。其後伊賀守殿へ御斷申、在所攝州原田へ罷歸申候。花房志摩守方より在所へ帶刀妻を送歸候。此節も三宿道悅亦後家召連候而、在所へ罷歸候。其後道悅後家は阿州に不遁者有之候故參度由申候に付、阿州へ送遣候。天樹院様有馬へ御入湯被成候刻、在所へ被仰下候は、此度御入湯被遊候間、有馬へ致參上、御待請可奉旨御意被成下候に付、帶刀親子任御意、妻子召連候而有馬へ罷越、御湯治之間相詰罷在、御湯より御揚り被遊、御發駕之時、御時服・金子等拜領仕、路次迄御輿之御供仕候へば、於路次御暇被下罷歸候。其後帶刀は在所原田にて病死。帶刀之妻は尼に成、榮心と申候。帶刀義、黑田右衛門佐殿へ様子御座候に付、帶刀相果候段、右衛門佐殿へ御聞被成、世悴太郎助浪人に罷在、老母榮心迷惑仕候間、榮心は筑前へ參り候様に御迎被下候に付、榮心は筑前へ罷越候へば、居所被仰付、御扶持被下、折々御呼出御對面被成候由。大坂陣已後、御靜謐之時於加州西尾準人・大橋市右衛門と申者兩人に被仰

付、大坂御陣之刻、東之假門に踏留り働有之者共之穿鑿御座候處、森權大夫・佐藤帶刀・黒坂吉左衞門・大原文內、此四人假門に居殘り働仕由、紛無御座候、其後横井作右衞門方より森權大夫方へ自分之働之樣子尋に遣時刻、父太郎助働にての義をも荒增書付にて尋に遣、申候處に無相違由、權大夫返狀指越申候。吉松治兵衞・帶刀・弟忠右衞門、此三人は病死仕。扨、横井作右衞門義は、大坂にて働有之由、酒井讃岐守殿被聞召、加州へも樣子尋に被遣、相違無御座候に付、讃岐守殿へ被召出、唯今作右衞門世悴酒井遠江守樣に罷在候。父太郎助義之樣子、織田上野介殿御內三谷數馬と申者方より、加州黒坂吉左衞門所へ尋遣候へば無相違由、其上最寄森權大夫方より横井作右衞門所へ返事候處を書寫、此度之返狀に指添、黒坂吉左衞門より三谷數馬へ兩通指込申候、則其節之兩通、只今は私手前に所持仕候。

父太郎助浪人にて罷在候故、其比は致法體、甫庵と申。明曆二年、甫庵御當家へ被召出、御合力米五十人扶持被下、新組共人御預被成、利左衞門儀も御知行三百石被下、西村孫之進並に可仰付由、御內意之趣、甫庵方へ西村源五郎方より申込候。其時分甫庵義、江戶へ罷越、佐久間半左衞門と申人方へ宿仕罷在候而、此段承り、雖有仕合、殊以乍恐少將樣・侍從樣御儀は、天樹院樣御一所に御座候へば、御厚恩之御家筋に御座候上は、何分身上毛頭望可申儀にては無御座候得共、西村孫之進並に御奉公難仕奉存候、孫之進義は、木村長門家來にて、少々心馳有之迄にて、父子共被召出候、甫庵義は、秀賴公に御直に御奉公仕、其上帶刀人數をも預り、父子ともに采牌をも御免被成、二千計りの人數引廻罷在候へば、唯今御斷割申上候義、天樹院樣御厚恩を忘申候樣に可被思召候へ共、孫之進並に被召出候儀は、御赦免被成被下樣に、源五郎迄御斷申上候。私義は備後福山水野美作守殿御家來に親類御座候に付、備後へ罷越居申候處に、甫庵右之趣御斷申上、御奉公に罷出不申候間、江戶へ迎に參候樣に私方へ源五郎處より申越候故、十二月初、俄に備後を罷出、江戶へ罷越、甫庵樣へ申聞被同道仕候而、翌年正月初、江戶罷立、御國に召連罷越候處に、江戶大火事出來候に付、此節浪人被召抱之事、子細御座候て御目見之義相延。

私義は其年明曆三年六月十五日に御目見被仰付、御合力米本俵二十五俵四人扶持被仰付候。私二十八歲之時にて御座候。同四年より邑久郡御代官被仰付、寛文元年迄、四年相勤申候。

父甫庵義私手前に罷在候處、寛文元年、尾州に成瀨準人方より赤尾忠左衞門と申す者を在所攝州原田へ差越候て、其方大坂之働、尾州被聞召、可被召出候由に候、父子共早々此忠左衞門同道仕罷越候樣にとの義に御座候へば、御國・罷在候故、忠左

衞門は原田に罷在、於備前甫庵方へ右之委細申含め、飛脚差越、則返事を相待逼留仕候由、申越之通り西村源五郎承合、御家老中にて御用意申上候へば、八月十一日、甫庵義被召出、五十扶持被下、幸御家に類名も無之候間、名を替り父之名帶刀に被成候樣にと被仰付、甫庵を帶刀と被成申候。其時六十五歳にて候。

私義同日に三百石被下、湯淺民部組被仰付候。祖父帶刀妻則甫庵が老母榮心、備前へ參り度由、左衞門佐殿へ申上候へば、則御返らせ被下、手前に罷在、一兩年過病死仕候。帶刀事、寛文八年、七十二歳にて病死。五十人扶持被取上候。

一〇四、原田理左衞門。山脇傳内組、三百石、五十六歳。

明暦三年六月十五日、被召出候。寛文四年、江戸御留守御番に罷越、御式台に相詰罷在候處、少將樣湯淺民部へ御意被成候は、理左衞門は樣子有之者に候間、大御所樣御廣敷迄御機嫌窺に罷出候事不苦、其段理左衞門に可申聞旨御意之趣、民部申渡、難有奉存候。其後御廣敷迄御機嫌窺に罷出申候。何方にぞ御出被遊候節は、每度御供に罷出候。大御所樣より横井彌兵衞妻に原田理左衞門御見知可被成と思召候間、紋所を書寫、指上候樣にと被仰付、私肩衣指上申候。私御用相勤候事、邑久郡御代官四年。江戸御留守御番二度。學校肝煎御用三年。大坂御米拂一年。御毛見に九度。御檢地一度。邑久郡福里村水貫御普請に出申候。

一〇五、葉山治兵衞。

慶長六年十一月三日、於姫路輝政樣へ被召出、百二十石被下候。大坂兩陣武藏守樣御供仕候。寛永十八年十月六日七十九歳にて病死。

一〇六、葉山太郎左衞門。

跡目無相違被仰付、同年十一月十五日、御禮申上候。寛文六年八月十五日、瀧川縫殿組之御鐵炮引廻被仰付。延寶七年六月二十五日、中村主馬組に被仰付。天和二年正月四日、八十五歳病死。

一〇七、葉山孫右衞門。中村主馬組、百二十石、五十四歳。

跡目無相違百二十石被下、二月二十八日、御禮申上候。

一〇八、手二平。　天和三年閏五月二十七日、御目見仕候。

一〇九、葉山傳介。　中村主馬組、四十七俵四人扶持、四十八歳。葉山太郎左衛門二男にて御座候。

寛文六年、侍従様御中小姓に被召出、正月十五日、御禮申上候。四十七俵四人扶持被下候。天和元年十一月二日、中村主馬組被仰付候。

一一〇、橋本甚六。

幼少より輝政様被召出候由、慶長六年十一月三日、百八十石被下、同十二年八月二日、武蔵守様より二百五十石に被成被下候。同正月十五日、五十石御加増被下。大坂両陣御供仕候。寛文三年十二月六日、八十六歳病死。

一一一、養子橋本甚六。　初、疋田右馬助。稲葉刑部弟にて御座候。

寛永六年、十六歳之時少将様へ御兒小姓に被召出、五十俵十人扶持被下候。同十八年、中小姓被仰付、慶安元年、於江戸橋本甚六方へ養子被仰付、同年、甚六隠居家督無相違二百石被下、大小姓被仰付、橋本甚六に成申候。　同二年、大小姓御赦免被成、丹羽藏人組に被仰付、寛文二年十二月三日、四十八歳病死。實父之事は、稲葉次郎右衛門に委し、こゝには略す。

一一二、橋本半右衛門。　上坂外記組、百石、二十七歳。

寛文三年正月十五日、跡目三百石之内、二百石私兒甚六被仰付、百石私へ被下候。同月二十九日、伊木頼母組に被仰付。同七年二月朔日、七歳にて御目見仕候而、御禮申上候。

一一三、梶浦太郎兵衛。　勝入様犬山御在城已前より御奉公仕候由。

一一四、梶浦忠兵衛。　太郎兵衛末子にて御座候。　輝政様へ御奉公仕、其後御暇申上。森美作守殿に罷在候。

一一五、林小左衛門。　梶浦忠兵衛子にて御座候。幼少より高庵殿御母儀へ養子に罷越候由。

其後少将様へ被召出、寛永十二年正月朔日、新知二百石被下候。承應三年、赤坂郡之内御代官被仰付。寛文二年迄、九ヶ年相勤、同三年之春、御免被成、同年九月二十二日、病死。

一一六、林安兵衛。　岸藤右衛門組、二百石、三十九歲。
同年十一月十三日、跡目二百石無相違被仰付、芳賀内藏允組に被仰付。延寶五年閏極月二十八日、岸藤右衛門組に被仰付。

一一七、佐野彥四郎。　關白秀次公にて千石被下候。於城州伏見打死仕候由。

一一八、馬場久兵衛。
馬場土佐と申者之方へ養子に參り、馬場を名乘申候。土佐も秀次公にて五百石被下、御使番勤申候、少く樣子御座候而浪人仕其後病死。久兵衛も土佐一所に浪人仕、其後備前中納言殿にて三百石被下候。中納言樣卒去に付、又浪人仕、其後尾州薩摩守樣へ三百石に罷出候處、頼み親小笠原監物浪人仕候に付、久兵衛も一所に立退、其後病死。

一一九、松村宇右衛門。
尾州大納言樣之御前樣より建部内匠殿之御母儀慶正院殿を以て、福照院樣御賴被成候に付、福照院樣御影にて少將樣御耳に入、寬永四年、被召出、御切米御扶持被下候由。同十四年四月、於江戶新知二百石被下。松村宇右衛門御斷申上、馬場五右衛門と名替り申候。寬文四年七月二十七日、五十八歲病死。

一二〇、馬場半七。　水野三郎兵衛組、二百石、二十八歲。　萬治三年、十三歲御目見仕、寬文四年十月十三日、跡目無相違被仰付。

一二一、子八助。　延寶八年九月朔日、十三歲御目見仕。

一二二、長谷川八藏。　於播州武藏守樣へ被召出、御切米御扶持被下、備前へ御供仕、三十三歲病死。

一二三、長谷川又兵衛。
元和六年九月、少將樣へ被召出。其年より正保三年迄二十七年之内、江戶御供十一度相勤申候。三年詰も仕候。御加增兩度被下候由。承應三年八月八日、五十五歲病死。

一二四、長谷川彌平次。若原監物組、百五十石、四十八歳。

父又兵衛病氣に付、私被召出、父御切米六十俵に四人扶持被下候。其後明暦元三年、御中小姓に被仰付、萬治元年十一月十四日、御馬廻り被仰付、池田八之丞様御組へ御入被成、寛文三年一月二十五日、御知行百五十石被下、同十二年十一月二十八日、池田美作組に被仰付候。延寶二年二月中旬、小堀彦左衛門組に被仰付。同年十一月八日、上坂外記組に被仰付。同六年十一月二日、池田藤左衛門組に被仰付。天和元年十一月朔日、若原監物組へ被仰付。

一二五、予亦八。延寶二年二月朔日、十一歳、侍從様へ御目見仕。

一二六、伴兵右衛門。

久々病氣故、私に家督相渡、養生仕、病氣少輕罷成候に付、西之御丸御長屋へ被爲置、御留守相勤罷在候。寛文六年正月二十日、御扶持五人被下、御對面所御長屋へ罷越相勤申候。延寶五年七月十九日、病死。

一二七、養子伴安右衛門。若原監物組、四十俵四人扶持、五十五歳。若年にて五左衛門離、不遁者之養育にて成長仕候。

當地へ參、御家望罷在候處、川瀬源兵肝煎、伴兵右衛門養子に願上候へば、則被仰付候。寛文二年三月十七日、兵右衛門名代に、三人扶持に十石被下、私御奉公に罷出候。貞享二年二月二十八日、御中小姓被仰付、扶持一人・御切米九俵御加增被下候。

••••••實祖父多田與兵衛。松平右京様播州赤穂に被成御座候節、二百石被下、郡代役被仰付、相勤、其後病死。

•••••實父多田五左衛門　從右京様與兵衛跡知無相違二百石被下候。赤穂落去申後、石見守様本知にて被召出、御奉公仕居申候處、宍粟落去に付、浪人仕、備中松山へ罷越候。備中松山池田出雲守様御遠去に付、御城へ爲御在番能勢四郎右衛門殿御越被成、兼而御懇意に付、被召寄、御在番中御屋敷に罷在候。御在番御仕廻被成候節、被仰付候は、五左衛門は年寄候間、子供之内一人御有付可被下候由にて、私兄五郎兵衛と申候を被召連、江戸居申候内、松平右京大夫様讃州高松へ御入部被成候に付、私兄五郎兵衛を四郎右衛門殿之肝煎にて、新知四百石・鐵炮二十人御預、御済可被下候處、急病にて一所務も不仕、相果申候。五左衛門儀は、二十四歳にて病死。

一二八、守田將監。

伊賀國服部黨にて、代々伊賀國西村に小城を構へ、近邊致領知居申候。戰國之時分、國中之士、互に致加勢、他國に不從罷在候

一二九、守田三之丞。

將監家相續仕、右之城に居申候。十八歳之時、伊賀之士之内に、信長公に致内通候者有之、國中に辱信長公御働西村城破、彼國中處々敗軍之士五十騎計り、近邊平野と申所の城へ楯籠り、一日一夜持堅、信長公之御人數留打取申候由。三之丞等頭分にて殊之外馳廻り候由。信長公大軍にて、就放火平野城も落去仕候。夫より三之丞方々渡り奉公仕候。筒井順慶・石田治部少輔に〻居申候由。治部少輔關ケ原敗軍後、浪〻仕居申候。

輝政樣へ伊賀忍之者被召出、百石被下候。武藏守樣大坂兩陣御供仕候。夏御陣之時分、天滿川瀨踏可仕旨、中間今谷太郎左衛門と三之丞兩人に被仰付、夜中瀨踏仕、則川向に印仕り、其外於敵地御用之儀被仰付候。少將樣因州へ御國替之節、御供仕、翌年御暇申上候。慶安三年十二月十七日、病死。

三之丞弟守田彌吉と申候。明智逆心之節、權現樣伊賀路御通被成候時分御奉公仕候儀有之、其刻御腰物拜領仕候由申傳候。私兄與五郎所持仕候。

一三〇、守田源右衛門。

三之丞子にて御座候。彌吉方へ養子に仕候へ共、彌吉早病死仕候に付、三之丞手前に置申候。若手之頃、久貝因幡守殿筋目御座候に付、御呼出、十石三人扶持被下、因幡守殿死去之後、今も松平豐前守殿伯父松平若狹守殿へ被呼出、當方三十人扶持賜り、少之間罷在暇申請候。

少將樣へ承應元年四月、於江戶被召出、同十八日、御目見仕候。小姓組に被仰付、小堀彥左衛門組御附被成候。同二年正月二日、二百石御折紙被下候。伊庭半藏弓組に被仰付候。寬文九年、弓組御免被成、正木主水組に被仰付候。天和三年五月十二日、年罷寄御奉公難仕候に付、御知行指上、隱居仕度段、兼而奉願候處、願之通被仰付、同年七月二十五日、病死。

一三一、服部源右衛門。

二百石、四十一歲、源左衛門次男にて御座候。

天和二年五月二日、於江戸被召出、二百石被下。大小姓被仰付、澤權大夫組に被仰付候。

一三二、春木九郎右衛門。森右近大夫殿に奉公仕候由。

一三三、養子春木惣左衛門。

實父之氏したう申候由。九郎右衛門方へ養子に參家相續仕、其後浪人仕、於備前承應元年七月十四日、七十歳病死

一三四、春木又五郎。五十俵四人扶持。

萬治三年正月十五日、侍從樣御歩行被召出、三十俵三人扶持被下候、寛文二年春、御台所横目被仰付、同六年正月、御台所横目役御免被成、大杉平之丞組之肝煎、並御手廻之引廻役被仰付、御加扶持被下候。同七年十一月、御横目役被仰付、七俵御加增被下候。延寶元年十一月、七俵御加增被下、天和三年八月二十一日、御小姓組被仰付、御加增被下、澤權大夫組に御入、御郡方吟味役被仰付、御役料米四十俵、並人二人被下候。

一三五、長谷川新九郎。

於播州左衛門督樣へ御奉公仕罷在候。弟新之丞を養子に仕、新九郎病死仕、跡目新之丞に被仰付。左衛門督樣備前へ御入國之御供仕り罷越候。左衛門督樣御卒去之後、宮内少輔樣へ御奉公仕、相模守樣備前より因幡へ御國替之節、御供仕罷越、於鳥取病死仕候。跡目世悴米村多左衛門に被仰付、今御奉公仕居申候。

一三六、長谷川彌五兵衛。新九郎實子にて御座候。新九郎死去仕候年、出生仕候。

寛永十三年、少將樣へ被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。石火矢被仰付、二百目之御筒鑄立、則御預け被成候、大筒役被仰付、組付にも不被仰付、諸役御赦免にて罷在候。寛文四年七月十八日、於萬成丘町大筒御覽可被成旨被仰出、玉三ツ打申内、二番之玉幕入、三番星入、首尾好仕廻申候。同五年、安藤杢組に被仰付候。同八年四月九日、六十三歳病死。

彌五兵衛相果申之日前に、私に申聞には、其方儀御横目役被仰付、氣遣に存候處、此度我等相果、跡目被仰付候はゞ、役義御免可被成と大慶に存候へ共、大勢役介八引請難義可仕候、弟彥七義、近年御用所に召連、御用相勤候段、何も御存之義に候間、彥

七に跡目被仰付被下樣、奉願候ては如何可有之と申候に付、左樣願度儀に候へ共、子細無御座、弟跡目被仰付候事、難成可有御座哉と申候得者、其儀も尤に候、又禪多義と申、不奉願候。死後安藤杢參候に付、右之趣物語仕無處に、御耳に相達候哉、跡目不被仰出候に付、七月初彥七立退申候節、隱者之樣に罷成候覺悟にて立退申候、兄弟一門中へ不足無斷無之由書置、則森千右衞門へ出し候へば、少將樣御披見被成、理窟がましき事も不申、何之あたりも無之身を申と御感被成候由、其後日置猪右衞門宅へ私呼寄られ、彥七義手遠に置申候者にて無之候間、御國端之在鄕に置申か、無左候はゞ金川へ遣し置可申候、此段伊木賴母を以可申渡候得共、御內證之義に候故、直に申渡候旨、申候に付呼寄、八木山村に置申處、寬文九年三月、江戶御參勤三日前、彥七御步行者に召出候故、俄之儀に御座候へ共、江戶へ被召連候はゞ、御供仕らせ度と、山下又左衞門迄御賴申候處、御耳に達し、可被召連之旨被仰出、御供仕江戶相勤、翌年罷歸候節、五月二十三日、大坂御藏屋敷にて亂氣仕、自害仕果申候。（退）

一三七、長谷川五兵衞。四十七俵四人扶持、五十六歲。
父存命之內、承應二年二月十一日に少將樣御步行者に被召出、本俵二十俵三人扶持被下候。寬文五年春、十五俵一人扶持御加增被下、都合四十五俵四人扶持拜領仕、御橫目役被仰付。同八年七月二十三日、父跡目御切米御扶持は私に被下置候と同前御座候故、御小姓格分に被仰付、伊木賴母組へ御入被成候て、私に被下置候御切米御扶持を其儘拜領仕候。同九年、御船營御用被仰付、延寶二年迄七年相勤申候。延寶四年、御船營御用御赦免被成候。御作事御用方へ相勤申、天和元年十月十七日、札方御用被仰付、同二年、大筒御覽可被成旨被仰出、三月十一日、三野村五町場小屋之內へ澤權大夫被召連御入被成、仕懸御覽被遊、御尋被成候義申上候。玉五ッ打申候內、二ッ幕入、二ッ星入仕候へば、今一ッ打申樣にと被仰出、是も幕入仕候。御歸之節、小屋之外へ罷出御目見仕候へば、御直に難有蒙御意候。

一三七、子彌三郞。延寶七年、十一歲にて御目見仕候。

早川小助先祖書

一三八、曾祖父野中吉右衞門。祖父野中市左衞門。

一三九、早川平兵衞。野中市左衞門病死。跡目市左衞門九歲之時被仰付候。平兵衞弟にて御座候。平兵衞、早川風庵後家之養子と被成申候處、土井大炊頭殿御內早川彌五左衞門、平兵衞從弟にて御座候。

彌五左衛門日置豐前を以奉願、寛永十二年、少將樣へ被召出、本俵二十俵拜領仕候。其後四人扶持被下、數年御郡御普請相勤、慶安三年六月二十六日、四十六歲病死。

一四〇、早川小助。四十五俵四人扶持、三十一歲。

兄早川平兵衛六歲之時、父平兵衛病死仕、跡目無相違被下、湯淺民部組に被仰付候。寛文六年十月末より病氣に成、御奉公難成御座候に付、御暇申上、浪人仕候。

私、寛文八年八月二十三日、被召出、今俵四十四代四人扶持被下、其儘民部組に被仰付候。同十一月より安藤杢組に被仰付候。同十二年九月十五日、小堀主殿小姓頭に被仰付候刻、組附申候、延寳七年六月二十二日、澤權大夫組に付申候。天和元年十月十四日より御船作事御用被仰付、相勤申候。

馬場先祖

陸奧國住人安倍貞任末孫。中古より馬場と名乘申、子細事長略仕候、備前邑久郡御內裏領之時、郡之內豐原庄、昔檢地四千五百石之處、馬場豐後守橘綱重拜領仕、豐原庄內北地村に在宅仕、爾今屋敷御座候。豐後守嫡男馬場伊賀守綱職に家督讓り、豐後守は在京仕候。伊賀守死後、惣領鍋法師豐原庄拜領仕、罷在候處、若年にて死去、惣領或退轉仕候、伊賀守次男新左衛門迄は禁裡御番を三年宛仕候由。書置申候。

一四一、馬場岩法師。

十三歲にて宇喜多大和守所に奉公仕候。其節大和守居城邑久郡戶石にて御座候。岩法師は新左衛門嫡男にて御座候。宇喜多三郎右衛門邑久郡乙子之城に被居候而、大和守と日々合戰有之、直家之家來生田太郎三郎と、北地村荷薺畠之間にて鑓を合候得共、互に勝負不付、相引仕候由、此節岩法師十四歲、誠に類なき義にて、則二郎四郎と名を給候。戰働之次第、事長略仕候。赤坂郡鳥取庄之內高月城に大和守取掛候時も、無比類鑓仕、則大和守二男片岡越助鑓をさせ候時、二郎四郎勝は皿を取射披手負申次第、事長略仕候。此時二郎四郎十七歲。戶石城直家に攻候。夫より上道郡沼に居住之時、二郎四郎十八歲にて直家に隨ひ奉公仕候へば、則知行三百石・與力六十人預申由。美作國三星城は浦上宗景家老に守らせられ候、然るに安藝毛利家より

（朱書）
此一段難解

向城を付、成和家近と申侍を被置、切々合戰有之旨、直家より三星之城へ加番として侍ども被入置候、二郎四郎加番として相出候節、五月二十四日之合戰にも無比類働仕、則宗景より感狀給り、爾今所持仕候。此合戰働之次第事長略仕候。邑久郡邑久鄉に宇喜多五郎左衛門、後筑前守と名を改申候、筑前守より直家へ逆心仕候へとの狀を給、其狀に言候は、豐原庄は馬場之本領なれば子細不可有、尾張村•兼松村相添可遣との趣に御座候。二郎四郎則此狀を直家に見せ申、返狀案紙を給、數通之來狀•返狀取かはし申候間、筑前守備中へ被罷成、拜を被願、既に出陣に究にて、沼之向八塚に陣可有之時、直家を可攻不被成ば、矢倉に火をかけよ、それが難成ば、自分之家を可放火、左樣之儀も相成ば、只筑前守へ可馳加、約束之通可取計との狀給、則直家に見せ申候處、披見有之、大に驚、其時逆心不成との返事を被遣候由。

直家より二郎四郎名を重介に被改、家之字を給、家職と申候。其節迄に武家に入、折介書く事不成候へ共、重介之介に入、折介直家より免にて書申候。則蠻目感狀に入折介を書候。更に重介に持鑓朱柄、さや迄朱。昔は一日に七度之鑓を不衛しては持せず、是又被免持申候。爾今感狀朱柄之鑓所持仕候。和氣郡片上葛坂にて戶田松之城より人數出し合戰之時も、相應之働仕候由子細長略仕候。

金川松田城を直家切取、在城有之、其節は、岡山之城は金光與次と申侍持たるを、武略を以て切腹爲致被取候。然ども、いまだ近邊敵多く、先爲城番戶田平右衛門を被申付候處、平右衛門與力六十人之者共、先手へ參間敷と申候間、平右衛門難儀仕候、重介同心にて可參旨、直家へ申、則同心仕、重介與力六十人一人も不退、剩へ平右衛門與力も、重介同心あらば可參とて、三十餘人參、三年城を持堅、後直家在城。其頃年號元龜之時分、後十年計有之、直家死去、子息八郎其時九歲、上道郡妙善寺之城籠置候人數を、安藝毛利家より引取ために人數來時、山下にて敵は鑓、重介刀にて勝負仕、首取申候。同郡土田合戰之刻も、すそたにて梶井と申侍と太刀打仕、首取申候由。子細事長く略仕候。土田之上蠻目之合戰、敵五人鑓にて懸るを、重介下より弓にて攻登、敵間近來時、一人射伏、可首取とすらむ時、敵大勢にて切懸り候。然共味方不續、剩へ後勢逃去、力に不及引退處に、山の腰を退、味方手負に打を見て、重介取て返し一戰仕り、手負を打せず退申由。此時之感狀所持仕候。攝津國大坂に一向宗籠候刻、藝州毛利家より兵粮を被入時、直家も加勢被致、大坂川口信長公番船を心置警固之早船四十艘にて押廻し、兵粮船を入候處に、藝州•備前相催にて敵四十艘之早船を住吉濱に進上、大船を攻取時、重介船を一番に押寄、敵船へ切乘、首取候由書置

申候。兒島八濱合戰直家死去之後、宇喜多七郎兵衞忠家子息與太郎大將として戸川市右衞門・岡平七・重介も同罷立候。此戰事長く略仕候。與太郎討死、中村惣介・同子二人共討死仕候由、書置申候。宇喜多中納言いまだ宰相之時、大坂より岡山へ歸城之刻、雨降徒然慰に中老之侍宇喜多修理・同姓太郎左衞門・花房又七三人を呼、直家一代國郡を取られ候、合戰之樣子被聞度由にて、右之者ども一々申を被聞中、又家來之內鑓仕者、誰々ぞと被尋候時、鑓は幸和織部・寺尾孫四郎・馬場重介、是三人と申。尤左樣には聞候得共、中にも重介鑓は、眞實骨を折たる鑓と被申時、御意之通、重介鑓は申も愚に御座候と返事仕ば、重介は如何樣にて居ぞと被尋、直家御代より在職に宛じ、在鄉仕居申由申候へば、左樣ならば加增可遣と、三度迄被申候へ共、（次子）□なく故、取成申者無御座候。然共三百石加增折紙、戸川肥後迄中川次郎兵衞持參仕候へ共、重介方へ前持來、此事後被承由、書置申候。

一四二、馬場重介。

いまだ與次兵衞と申時、宇喜多中納言殿に奉公仕、知行百二十石、父家職知行之外に被與候。大垣出陣之年は加增給はり候得共、終に所務不仕候故、書付不仕候。後之高麗陣は、丁酉之年與平次罷在候。長門國下之關にて軍船皆々かへり、順風なくして船不出時、與平次船組之者同道仕、見物に上候處に、中納言殿台所船二艘と延原內藏助船之者と、上碇下碇之口論仕出し、喧嘩に及候時、台所奉行森喜左衞門親類たるにより、不慮に喧嘩之相手に罷成候へ共、首尾好六十人計り傳八と申者と二人にて、一町計押散候由。此等事長略仕候。傳八名字本書に無御座候。於高麗漢南之兵加勢に南厚城を持申候。此城八月十日諸將御取卷、互に鐵炮矢軍有之事、十日之晚より十五日迄、南原は平城、大廻から堀、亂杭を打、其內に塀をかけ、其內相廻五間計置、四方に石垣を仕り、塀を懸申候。八月十五日之夜、城を被乘取候塀之手一番乘與平次仕候由。城中にて鎧武者切事四人、戸川肥後守弟手負候を迎返候趣、二之丸に働之次第事長略仕候。大垣之城落去之節、傍輩ども三十人計にて與平次後殿にて退候處、敵に間を被取切に付、南宮山之衆一戰可有歟と麓に相待候、然共何之品もなく候故、南之山へ登を多賀之畠を心掛、佐和山へ可參と仕候處、佐和山天主之燒を見て、最早不叶と存、近鄕地へ引退申候、村々・里々にて百姓とせり合迄申候由。

重介宇喜多中納言殿流罪已後、致浪人、邑久郡北地村に引込、手作仕罷在候處、寬永十一年、少將樣へ番大膳・芳賀內藏允申上、被召出候節、持來田畠之高を可被下由、御意之處、其時分本高三十六石持居申候故、此分拜領仕候。正

保二年六月、病死。

一四三、馬場十三郎。

重介嫡子跡目無相違被仰付候。正保三年より御普請御用被仰付、（磐梨郡承應十年迄八年、邑久郡に同三年より延寶四年迄二十年、）兩郡に三十年在宅に年罷在、相勤申候。延寶四年四月、風相煩、行歩不叶、御斷申上候へば、隱居被仰付。貞享元年六月、病死。

一四四、馬場十郎右衛門。（高三十六石、三十九歳。）

寛文八年八月、少將樣へ御目見仕、同九年二月朔日、少將樣牛田山麓御狩之時、安藤杢引廻りにて罷出、鹿射留、則股一ツ拜領仕候。同年九月、侍從樣へ御目見仕、同十一年、侍從樣牟佐山鹿御狩之時、伊木頼母引廻にて罷出、兎一ツ射留、則拜領仕候。延寶四年、跡目無相違被仰付。同五年正月十六日、邑久郡御普請御用被仰付、（天和三年迄六年之間、）在宅年罷在相勤申候。天和三年十月十五日、御普請御用御赦免被成、御役料四十俵拜領仕候。御城御番相勤候。貞享元年邑久郡御普請御用被仰付、二月十二日罷出、十一月二十八日仕廻、同二年二月四日罷出、同十一月晦日迄相勤申候。

一四五、八田八郎兵衛。　久々御歩行横目役相勤居申候。寛文六年七月十一日、病死。

一四六、八田久右衛門。（六十俵七人扶持、三十一歳。）

實父は高木治右衛門と申候。私儀寛文六年秋、十一歳にて八田八郎兵衛へ養子に參申候。同年八郎兵衛跡目之内十五俵三人扶持被下候。同十二年九月十五日、少將樣御歩行に被召出、御加増十五俵被下候。延寶八年七月十七日岩千代樣御懷守役被仰付、十俵一人扶持御加増、近習歩行並に被仰付候。天和三年二月二十一日、岩千代樣江戸へ御下被成候に付御供仕參、在江戸被仰付、六俵一人扶持御加増被下候。貞享二年二月朔日、御加増十四俵二人扶持被下被仰付。

一四七、原掃部。（宇喜多直家に罷在、兒嶋郡福田村に居住仕候。）

一四八、原次郎九郎。

直家に罷在、三千石被下候。侍も預り、御野郡平瀬村に罷在候。元龜二年九月四日、備中佐井田表合戰之時、十七歳にて數陣切崩、直家より感狀被下、爾今所持仕候。此外作州境取合之時、福田内膳と申候者之首打取、感狀、並芦毛馬一疋被下候由。感狀・知行折紙、父與三大夫代燒失仕候。其後秀家供仕於高麗陣討死仕候。

一四九、小堀與三大夫。　幼少にて他家へ養子に參申候。

於因州少將樣へ御歩行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、茨木猯一右衛門組に被仰付候。天草陣之時、御歩行横目被仰付、御使に參申候。

一五〇、原彦八郎。　五十俵四人扶持、四十五歳、父病死之時、私未だ出生不仕、翌年二月五日、出生仕候。依之跡目不被下候。

寛文六年正月二十日、侍從樣へ御歩行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下、大杉平之丞組被仰付候。寛文十年、御弓組に被仰付、正木權七組に御附被成。延寶二年十二月二十六日、熊谷淸八組に被仰付。同七年極月八日、御近習歩行被仰付、九俵一人扶持御加增被下候。天和二年正月六日、熊谷淸八組中之肝煎役被仰付。同三年七月十五日、御弓組中小姓被仰付、十俵御加增被下。丹羽左衛門組に御附被成候。

服部先祖

一五一、服部和泉守。　子服部山城守保久。　服部山城守保次。

有三代□□（欠字）郡にて一萬七千石餘知行、東湯船と申處に住居仕、依之湯船山城と申候由。曾祖父にて御座候。信長公御下知に不隨、伊賀之者共一揆有之由。其後秀吉公伊賀之者共御糺可仕由被仰候處、御下知に不隨、剩伊賀之國天乞城に河井太彌・荒井平四郎・柘植福次、湯船山城、右四人爲大將楯籠候處、秀吉公御馬被向由。天正十三年九月十八日、落城仕候由。柘植荒木討死。太彌山城は落行申候。山城守保次は、近江國勢多に山岡美作と申候一類有之、其處にて病死。

一五二、服部甚兵衛。　天乞落城之時、七歳にて罷通、其後成人仕、越前一伯殿被召出候。後、浪人仕、病死。

一五三、服部竹右衛門。　水谷伊勢守殿に奉公仕、小姓頭被申付、五百石給候。左京亮殿代に暇申、御當地へ參、十六年住宅仕候。

一五四、服部安之丞。（祐筆、四十五俵四人扶持、二十二歳。）
延寶八年二月十五日、被召出、四人扶持被下候。同年閏八月十四日、爲墨筆代銀十枚被下候。天和二年三月十五日、御切米四十五俵被下候。

一五五、林彦兵衛。（猪尾隱岐守にも、早川主馬にも、奉公仕候由。其後姫路へ參候。）
慶長十九年、武藏守樣へ被召出、以後右近樣へ御附被成赤穗にて病死。

一五六、林加右衛門。（役小姓勘定、河村平左兵衛引廻、三十九俵五人扶持、五十六歳。）
萬治二年三月十五日、少將樣御勘定御用に被召出、本俵十六俵二人扶持被下候。同四月朔日、本俵四俵一人扶持御加增被下候。寛文五年二月十日、一人扶持御加增被下、延寶五年七月二十四日、中間頭役中小姓被御付、八俵一人扶持拜領仕候。

一五七、子藤三郎。　同八年九月二十六日、御勘定方御用に被召出、三十俵三人扶持被下候。

吉備温故秘錄卷之八十（干城九）終

吉備温故秘錄卷之八十一（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城 一〇（原本干城一五）目錄

吉備温故秘錄卷之八十一（干城一〇）目錄終

吉備溫故秘錄 卷之八十一（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城 一〇（原本干城一五）

一、神屋兵三郎。生國、尾張。

幼少にて參州吉田へ罷越し、武藏守樣へ被召出、其後備前にて知行二百石拜領仕候。因幡にて寛永三年寅四月四日、病死仕候。跡目無相違、神屋久次郎父兵三郎に被下候。

二、土方源內左衛門。

十一歳之時、少將樣御七夜之朝被召出、御宮參之時、御脇指持御供仕候。十三歳にて江戸御供に被召連、御在江戸中相勤申候。於因州元和四年十一月二十六日、御知行三百石拜領仕候。寛永五年御歩行衆二十八人御預被成候。於備前寛永十年正月朔日、二百石御加增、幷御持筒十挺被仰付候。拜領物數々御座候得共、每度之義にて、品々書附置不申候。寛永十九年七月十九日御加增百石拜領仕、都合六百石被仰付候。同年霜月十六日、御鷹匠衆御預被成候、慶安二年六月二十日、病死仕候。

三、土方瀨兵衛。宮城大藏組、鐵炮引廻、六百石 六十二歳。生國、因幡。

寛永十二年正月十六日、十二歳にて被召出、其年江戸御供、翌年七月二十三日、罷歸、十四歳之時、四十俵五人扶持拜領仕候。同十六年三月五日、江戸御供に參り、翌年六月五日、江戸御立、御供仕罷歸候。同十七年五月十九日、侍從樣初而御目見被成候に付、御城へ御供に被召連、從公方樣御料理於御廣間頂戴仕候。從國盛院樣爲御祝儀銀拜領仕候。同二十年未六月、朝鮮人來朝に付、於牛窓御馳走被成候御用被仰付、三使之御通、並御鷹之鳥、諸手へ相渡申、御用被仰付候。歸帆之節も同事之御用に罷出候。正保三年戌霜月十五日、御知行二百石拜領仕候。度々拜領物御座候得共、品々覺不申。慶安二年丑八月四日、父源內左衛門跡知無相違被仰付、源內左衛門拜領銀二十貫四百目餘、御捨被下、宮城大藏組被仰付候。

萬治三年子三月四日、江戸御留守番に參道中、侍從樣御供被召連、直に御留守御番相勤、江戸にて御留守之御奏者役人奉行相勤、翌年四月朔日、江戸罷立、同十四日、罷歸候。寛文十年霜月三日、學校御用被仰付、相勤、翌年極月十七日、御台所にて侍從樣御料理被下、御前にて御小袖拜領仕、學校御用御免被成候。同十二年子二月二十二日、江戸御留守御番に罷越候。少將樣御隱居被成候に付、御留守御番に罷越候者共數多被登せ被成候內、私儀者御供之內に御殘、翌年三月三日、御國への御暇被下候而、御先へ御登せ被成候、御馬廻り中引廻し可罷歸之由、御意に付、同道仕候而、三月十七日、江戸罷立、四月朔日、罷歸候。延寶三年四月十七日、權現樣御祭禮、稻葉四郎右衛門組に加り供奉仕候。同六年午十一月二十八日、宮城大藏組鐵炮引廻被仰付候。同年極月十日、於江戸少將樣御鷹之鶴御拜領、御當地へ十六日に參候に付、御禮之御使者被仰付、翌十七日、罷立、江戸へ參候。右之御口上被仰付候。則於御前御直に御意にて鷹拜領仕候。江戸仕廻、翌年正月四日、罷立、同十六日、罷歸候。天和二年江戸御供に被召連候、中務太輔樣播州姫路御拜領之御悅之御使者被仰付候。二月二十五日、罷立、江戸へ三月十一日、參着、相勤中候、於江戸御奏者役人奉行被仰付候　翌年三月迄相勤、御先へ御暇被下、三月二十三日、江戸罷立、道中中小姓業數多引廻同道仕、四月七日、罷歸候。世悴長左衛門、寛文七年未二月十五日五歲にて少將樣へ御目見仕候。侍從樣へも同年御目見仕候。月日失念仕候。

四、平井。先祖代々、江州佐々木之家に罷在候よし承傳候。

五、平井源四郎。生國、近江國。

加茂觀音寺佐々木承禎に罷在候。其節知行高不存候。其後益田右衛門尉方にて知行五百石給り、組足輕預居申候。其時分右衛門尉出陣之爲留守預居申候節、堀中騷動之儀に付、右衛門尉より褒美給候。何之陣並騷動之樣子首尾、且承傳不申候、右之狀私所持仕候。

六、平井彌四郎。

於播州慶長六年播州宰相樣へ被召出、御知行三百石拜領仕候。武藏守樣備前へ御入國之節被召連、慶長九年御加增六十石被下、都合三百六十石被下候。同十二年、備前にて彌四郎病死仕候。

七、平井少三郎。

跡目三百六十石無相違被仰付候。少三郎義大坂冬御陣之節、御供に罷越し、神崎川越之節、兄弟共に相果申候。右之年月不存候。

八、平井安兵衛。生國、山城栗田。

慶長十九年寅、大坂天滿御陣所にて被召出、兄少三郎跡知三百六十石無相違被仰付候。上道郡御代官所寛永二十年未より正保四年亥迄相勤申候。其後も御代官所大坂御普請之節も罷登相勤申候由。江戸へも罷下申候由、承傳申候得共、年月日不存候。慶安二年丑、一條政所樣御祝言に付、在京被仰付、罷上相勤申候。在京之內、江戸並御當地へ御使者御用にて度々罷越申候よし。拜領物も度々御座候由。延寶四年辰九月二十四日、安兵衛隱居被仰付、御知行無相違三百六十石私に被下候。政所樣御意に付、其儘京都に相詰、名を隨元と改申候。延寶八年十二月二十二日、於京都八十四歲にて病仕候。

九、養子平井佐右衛門。生國、因幡。實は堀內六郎兵衛悴平井安兵衛養子に仕候。

少將樣へ初而御目見仕候。年月日不存候。慶安二年、政所樣御祝言に付、安兵衛一所に罷上、御用相勤申候。其節百俵十人扶持拜領仕候。同年萬治三年迄之內、十六度御使者に罷下り申候。內一度は日光へ罷越申候。年月日承傳不申候。侍從樣初而御入國之節、從政所樣御時服度々拜領仕候。品並年月日不存候。政所樣より御使者に參り候時之儀と承申候。寬文七年正月十六日、五十歲にて於京都病死仕候。實方之事は、堀內之書上にあり、爰に略す。

一〇、平井六郎右衛門。池田七郎兵衛組、三百六十石三十三歲、生國、山城國京都。

寬文七年、於京都少將樣へ御目見申上候、同年五月二十九日、依御意、御當地へ罷下申候。同年二月二十九日、五十俵五人扶持拜領仕候。侍從樣へ初而御目見申上候。年號月日覺不申候。同年御小姓組に被仰付候。月日覺不申候。延寶五年迄八九年相勤、同年、御簡略に付、御小姓組大勢御赦免被成候に付、私儀正木主計組に被仰付候。延寶三年四月六日、禁裡御普請に付罷上り、御奉行衆御通之御用被仰付、相勤申候。同年十一月十二日より當御殿掃除方御用相勤申候。其後政所樣御用に付、直に京都に逗留仕、延寶四年六月七日罷歸候。同四年辰九月二十四日、祖父安兵衛隱居被仰

付、御知行三百六十石無相違被仰付、私へ被下置候五十俵五人扶持安兵衛に被下候。同年十月朔日、京都一條樣御祝言に付御道之御用被仰付罷上り、十一月二十八日、罷歸申候。其節一條樣より銀子二枚拜領仕候。同六年午五月六日、醍醐樣新家に被相成候御祝儀之御使者被仰付、罷越申候。其節爲御祝儀醍醐樣より御上下二具拜領仕候。御使者相勤申候。已後政所樣御用に付逗留仕、御用相勤申候而、同年秋罷歸申候。同八年申七月七日、政所樣御用に付、京都へ被仰付候。水野彌兵衛江戶へ御使者に罷越候に付、其內相勤候得と被仰付候。罷歸候節、政所樣より銀子二枚拜領仕候。罷歸候月日失念仕候。天和元年、一條關白樣江戶御下向に付、御留守御番相勤候樣被仰付候に付、二月八日、罷越、四月、罷歸候。其節關白樣より銀三枚・綸二卷・六歌仙拜領仕候。同二年三月十八日、政所樣御位階之御祝儀之御使者被仰付罷上、同月二十六日、罷歸候。其節政所樣より銀二枚拜領仕候。同三年三月朔日、御留守御番に罷下相勤。貞享元年四月三日、罷歸候。江戶にて火消道具御用相勤申候。

一一、子小太郎。　貞享二年十一月十五日、八歲、侍從樣へ御目見申上候。

一二、平野所左衛門。　生國、播州。

少將樣へ御奉公申上、御知行二百石被下候。備後守樣宍粟御拜領之節、備後守樣へ被爲遣、宍粟にて御奉公仕候。其後足輕頭被仰付候。備後守樣にて先年指上申候先祖書、御奉公相勤申候樣子、私火事に逢申候節燒申候。寬文十年所左衛門病死仕候。

一三、平野五兵衛。　丹羽平太先組、十五人扶持三十歲、生國、播磨。

父所左衛門跡知二百石之內百五十石、備後守樣被下置候。備後守樣・豐前守樣・數馬樣へ御在所・江戶共相勤申候。數馬樣御卒去被遊候後、岡山へ被召返候。十五人扶持被下候而、日置猪右衛門於宍粟被申渡候。其節御勘定間被仰付候而、相勤居申、被召歸候。傍輩共より連々仕廻、延寶七年七月二十一日、岡山へ參候。同年十月、侍從樣へ御目見申上、岡山にて御奉公不申上、折々御祠堂御祭之御用相勤申候。天和元年十月二十七日、來春江戶御供被仰付候。江戶にて本多中務太輔樣姬路御拜領之御祝儀御使者、同二月二十五日、岡山罷立、江戶へ三月十一日、參着仕、同十二日中務太輔樣へ伺公仕、御書・御口上差上、同日水戶樣御父子・松平刑部太輔樣・同播磨守樣へ御祝儀御使者仕、同十四日中務樣にて御料理被下。則御返書・御口上御直に被仰聞、御口上書・御書瀧波與兵衛に渡申候。同十八日之

便に右之御書・御口上書池田左兵衛方中田御使者仕廻、後淺草御屋敷御長屋小役守田與五郎替、御留守御番相勤申候。信濃守様御屋敷御類火に付、同十一月晦日、淺草御屋敷へ急に御越被遊、御長屋等迄信濃守様御家來丹羽清大夫に引渡申候。私儀御上屋敷へ引越、御番御使者相勤可申旨、日置左門被申渡候よし、池田七郎兵衛申渡し候。同極月二十六日、御上屋敷へ出申候。同二十八日大火事出來神田橋御堅に御出馬御供に罷出候。丹波守様御屋敷建被爲遊候に付、御普請奉行へ仰付候而、左門被申渡、同二月三日、土器坂御屋敷小屋へ引越、同五日、御柱立、同十日、地祭相濟、其後大工使申候。丹波守様同五月二十九日、御屋敷御移、從同晦日、從丹波守様御普請出來之御祝之御料理被下、後刻以御使者白銀拜領仕候。丹波守様御前へ被召出、永く骨折申と御意にて、御紋付之御帷子拜領仕候。同十月二日、御普請不殘出來、御祝儀之御料理被下、後刻金子拜領仕候。同十一月六日・七日・八日御普請御勘定不殘相濟申候。同十三日御上屋敷へ歸、御番御使者相勤申候。同二十二日、於御國丹羽平大夫方迄、來春迄江戸に殘り御奉公申上度旨奉願、侍從様・信濃守様來春御參勤之伺御使者に、吉崎甚兵衛同道にて御老中様へ罷出、同十二月二十三日、右御奉公戸田山城守殿より受取、吉崎甚兵衛に相渡、同月二十五日、御國丹羽平大夫方より、私義來年も共儘江戸に相詰、願之通り御奉公可申上旨被仰出候由、申越候。天和三年十月十一日、河田吉兵衛殿御預け被成候節、請取に參、其後右吉兵衛殿御番相勤申候。同月來年も江戸に相詰、當分岩千代様へ御奉公可申上旨、池田大學被申渡候。貞享二年正月十四日より、岩千代様へ御番相勤申候。同正月二十八日より、御式台へ出、御番相勤申候。同五月十四日、岩千代様御目見被遊候、御城へ御供仕候。同二十三日御取次加り相勤可申旨、近藤覺兵衛申渡。同七月十三日、從御國共儘御取次可仕由申來候間、相勤可申由、又覺兵衛申渡候。爾今相勤申候。

一四、飯野助兵衛。 生國、上野。長屋左衛門佐殿に罷在候。左衛門佐殿被身上果候故浪人仕、上州之内横出と申所にて病死仕候。

一五、飯野甚左衛門。 生國、上州。井井左兵部殿少知被下罷在候得共、兵部殿手前浪人仕、上州之内生原と申所にて引込、病死仕候。

一六、平方又左衛門。 生國、上州。幼少之時分より病身故、上州之内小野小と申所之平方源左衛門と申者方へ養子に參候に付、他名を名乘申候。二十五年以前、病死仕候。

一七、平方又左衞門。　生國、□□。

京極丹波守樣へ十四ヶ年罷在、御身代果候而、浪人仕、荒木十右衞門殿御肝煎にて寛文七年二月三日、江戸にて侍從樣へ被召出、九十四俵六人扶持拜領仕、同五月十四日御歸國之御供被仰付、同七年十月二十六日、御參勤之御供被仰付、同八年、御在江戸、同五年八月十九日、御歸國御供仕罷歸候。同十年三月十一日、御參勤之御供被仰付、同十一年五月二十二日、御歸國之御供仕罷歸候。同十二年三月十五日、御參勤之御供被仰付。延寶元年五月八日、御歸國之御供仕罷歸候。同二年四月六日、御參勤之御供被仰付、於江戸麻布御屋敷御留守御番被仰付、同五月朔日、麻布へ引越申候處、少將樣同十一月、御參勤被遊候に付、御上屋敷へ罷歸、翌年三月十八日、江戸罷立罷歸候。同五年九月二十一日、數馬樣御供被仰付、宍粟へ罷越、同十月四日、罷歸候。同六年江戸御留守御番被仰付、三月二日、岡山罷立、翌年三月十八日、江戸罷立罷歸候、病氣に罷成申候に付、御小姓役御斷度と申上、天和元年十一月十九日、御赦免被成、草賀宇右衞門組被仰付候。病氣終本復不仕、同三年四月二十三日、五十六歲にて病死仕候。

一八、平方善八郎。　草賀宇右衞門組、四十五俵四人扶持、六歲。

天和三年閏五月二十四日、父又右衞門跡目九十四俵六人扶持之內、四十五俵代四人扶持被仰付候。幼少に御座候故、未御見不申上候。

一九、平方勘介。　八十俵五人扶持、四十六歲。平方又左衞門子又右衞門弟にて御座候。生國、上野。

水野豐物に九年奉公仕暇申、七年之內被構、日光御門跡樣へ御歎申上候得者、數度御使僧被遣、右衞門大夫殿之代に首尾能赦免被致候。

延寶八年十一月十三日、侍從樣へ被召出、八十俵五人扶持被下候、同十五日、御目見仕候。天和元年、御歸國之御供仕候。六月朔日、江戸罷立、同二十日、御當地へ歸着仕候。道中にて御馬煩治兼之由申上候得共、御意に付、見付之御宿に御馬被下候。右兩年之馬三十疋致療治、何も治申候、療治能御座候。天和二年御參勤之御供被仰付、三月二十九日、罷立、四月十四日、江戸へ參着仕候。道中にて御馬二疋、御家中通し馬共煩、馬四疋御座候處、何も治申候。同三年御歸國之御供被仰付、五月三日、罷立、同十八日、御當地へ歸着仕候。右兩年之病馬六十五疋療治仕候內、二疋他藥にて治、三疋落申候、療治能

御座候。貞享元年御参勤之御供被仰付、三月二十九日、罷立、四月十四日、江戸へ参着。道中にて御馬一疋、通馬一疋煩申候處、何も治申候。同二年御帰国之御供仕、五月六日、罷立、同二十三日御當地へ歸着仕候。道中にて御馬二疋、通馬二疋煩、二疋は治、二疋は長病之由申上候得共、御意にて松枝之衛に被下候。右両年之病馬三十八疋療治仕候内、一疋は不治、二疋は落申候。療治能御座候。

二〇、平野勘解由　生国、三河国。三河国之内横上ヶ城持居申候處不存候。

信長公時代浪人仕、御當地へ罷越し、古士倉四郎兵衛所持にて浪人分にて武蔵守様へ被召出、其節は平野太郎左衛門と申、番大膳組に被仰付、御合力米被下居申由　太郎左衛門病死仕候刻、世悴共数多御座候へ共、其方々他所へ参り、知に有付居申故、跡目持り申候由、委細之儀は不存候。世悴之内一人は別知二百石少将様より被下、平野所左衛門と申候。備後守様へ御附被成、御奉公仕居申處、病死仕。世悴平野五兵衛に跡目百五十石被下居申候得共、對馬様御死去に付、御當地へ罷歸、十五人扶持拝領仕居申候。

二一、平野左衛門二郎。生国、三河国。

祖父太郎左衛門と不和に付、播州立退、蜂須賀阿波守殿へ三百石にて被召出、已後病死仕候。左衛門二郎跡、私に被下候得共約少故本知相立不申候に付、立退致申候。

二二、平野與兵衛。稲葉四郎右衛門組、九十四俵四人扶持　六十一歳。生国、阿波。

萬治元年十一月三日、山田道悦取持にて侍従様御中小姓に被召出、元俵三十俵四人扶持被下。寛文十二年迄御小姓役相勤申候に、御褒美三度拝領仕候。少将様へ初而御目見仕候。年月日覚不申候。備後守様へ年頭之御使者宍粟へ被遣御時、服一ツ拝領仕候。年月日覚不申候。右御小姓役之内、御武具方相勤、其後御薬込之御用相勤申候。年月日覚不申候。右御用承候内、江戸御留守御番相勤居申刻、公方様御機嫌窺に御国使者分に被仰付、牧野彌次右衛門同道にて御城へ罷登り候。年月日覚不申候。侍従様御婚礼之節、御銀。呉服拝領仕候。年月日覚不申候。御小姓役之内、寛文六年十俵、同六年二十俵、兩度拝領、都合三十四俵に四人扶持拝領仕候。寛文八年屋敷為引領御銀二十枚拝領仕候。同十二年病気故、御小姓役御断申上、御馬廻り眞田將監組に被仰付候。年月日覚不申候。眞田將監在宅に付、延寶七年八月二十二日、稲葉四郎右衛門組に被仰付候。同年、江戸御

留守御番に罷越し、於江戸土器町御屋敷御番相勤申候刻、公方様御機嫌窺に御國より被仰付、瀧川與兵衛同道にて御城へ罷登り候。月日覺不申候。同八年、土器町火事出來之刻、御長屋に火移り申候を打消申候に付、從侍從様御褒美之御意之趣被仰聞、御意之趣奉承候。先年下屋御屋敷にて兩年御燒物之御用相勤申候。天和二年七月、朝鮮人來朝之刻、稻葉四郎右衛門牛窓御馳走被仰付候に付、私も七月十五日牛窓へ罷越相勤、同月二十四日、罷歸候。

二三、子源大夫。　天和元年三月十五日、侍從様へ初而御目見申上候。

二四、日原喜兵衛。　日原治部左衛門子也。下に記す。

少將様へ御鷹師に被召出、本俵二十五代五人扶持被下相勤申候。御役義御免被成、正保三年江戸御留守御番に參り、同年三月迄、相勤申候。慶安元年備後守様へ御雇被成候に付、江戸へ參、同四年迄、相勤申候。備後守様より久々勤申由にて御暇被下、御時服一・銀二十枚拜領仕候。備前へ罷歸、少將様へ御奉公申上候。備後守様宍粟御拜領被成候に付、又御雇被成、宍粟へ罷越候處、承應元年正月元日、少將様へ被仰上、御貰被成候に付、御意にて御知行百三十石拜領仕候。已後大坂御藏御用被仰付、兩年相勤申候。明暦元年御郡奉行御代官役被仰付。四五年相勤申候。中風煩、御役義御斷申上候得者、早速御赦免被成候。寛文五年隱居之義願上申候處、同十二月十七日、隱居被仰付、御知行百三十石之内三十石隱居料に被下、名を喜入と相改申候。延寶三年二月十八日、病死仕候。

二五、日原喜兵衛。　生國、備前。

寛文五年十二月十七日、祖父喜兵衛家督百三十石之内百石被仰付候。同七年、江戸御供被仰付、同八年、御供仕罷歸候。同十二年、從豐前守様江戸へ御呼下被成、相勤申候處、同年十一月二十六日、福照院様御卒去に付、御棺之御供に被仰付、和意谷へ參り、直に宍粟へ罷歸申候。延寶二年十月、亂氣に罷成、宍粟立退申候。

二六、日原喜太郎。　山崎大膳組、五人扶持二十歳。生國、播州。

延寶四年五月十四日、爲喜入跡目七人扶持被下候。豐前守様へ御禮申上候。輝馬様御卒去に付、延寶七年五月十四日、備前へ被召寄、五人扶持拜領仕、同年十月朔日、侍從様へ御禮申上候。山崎大膳組に被仰付候。同年十月十一

日、侍從樣へ御禮申上候。

二七、日原兵部。生國、尾張。

日原と申在所にて少みがき上げ城を持候て、其近邊二三里之間領知候由。其近郷に吉村何某・條々又八郎と申習御座候。か樣之者共と切に取合仕候由。其後信長公とも敵對仕り、日原之一類大形討死仕候由。

二八、日原喜兵衛。生國、右之日原之由。

御家へ罷出候事、天正末に美濃岐阜にて森寺政右衛門肝煎を以て播磨宰相樣へ被召出候由。御あてがい之程不存候。其後三河御國替御供仕候。關ケ原御陣之時、美濃岐阜城七曲口にて少々働も仕候由。御家へ不出先に、織田三七樣へ居申時、喧嘩仕候。其時も樣子振能御座候由承申候。右之御陣已後、三河より播磨へ御國替御供仕候。慶長八年十月六日、御知行百石被下。其後備前御拜領被遊、播磨宰相樣・武藏守樣御入國被成候時、喜兵衛御供仕、岡山御城にて御人別被成、播磨宰相樣御供仕、播磨へ罷越候。播磨宰相樣御卒去之後、武藏守樣播磨へ御入國被成、御奉公仕候。慶長十八年十一月七日御加增三十石拜領仕候。其已後喜兵衛御知行も治部左衛門へ被下置候と御振替被下候樣にと、池田加賀を以て奉願候得者、無相違被仰付候由。其後於因州若櫻喜兵衛病死仕候。

二九、日原治部左衛門。生國、美濃たけがはなと申所之由。

於三州吉田十四歳之時、慶長三年、武藏守樣へ御支配にて被召出候由。備前へ御入國之節御供仕、御人分之時、治部左衛門義は播磨宰相樣御供仕、播州へ罷越御奉公仕候。播磨宰相樣御卒去之後、武藏守樣へ播州にて御奉公仕候。其後大坂御陣御供仕、池田加賀組に付相勤申候。少將樣因幡へ御國替に付御供仕、又備前へ御國替に付罷越、御奉公申上候。明暦元年二月十六日、病死。

三〇、養子日原五郎大夫。實祖父梶田喜左衛門と申候。生國、尾張。三河吉田にて播磨宰相樣へ御知行にて被召出、播磨へ御國替に付御供仕、御奉公申上、慶長之末に播磨にて病死仕候由。喜左衛門悴清右衛門に跡目無相違御知行被仰付候。因幡へ御國替之節御供仕り、又備前へ御國替にて罷越、寛永十四年三月十二日病死仕候。五郎大夫は清右衛門二男にて御座候。五郎大夫生國、伯耆河村郡片柴と申處之由。

正保三年、少將樣へ中小姓に被召出、本俵四十俵五人扶持拜領仕候。同四年之春兒島郡御普請奉行被仰付候。四年相勤

申候慶安三年左郎大夫義日原治部左衛門養子に仕度由申上、願之通被仰付、同九月九日、御禮申上候。治部左衛門實子喜兵衛義は、備後守樣宍粟御拝領被遊候節、少將樣へ備後守樣御望被成、宍粟にて御奉公申上候にて、治部左衛門願上、五郎大夫養子に仕候由。慶安四年、備中在之御普請奉行被仰付、同年相勤明暦申候。元年三月、治部左衛門跡目無相違百三十五石御知行被仰付候。同年四月大坂御藏破損御作事奉行被仰付、同六年、仕廻、罷歸申候、同年十月、大坂御米拂被仰付、翌年九月、罷歸候。同三年三月、御小作事奉行被仰付、同年六月迄相勤、煩申候故、御斷申上、御赦免被成候。萬治元年八月、御廟堂御作事奉行被仰付、翌年四月仕廻申候。其節時服拜領仕候。同三年三月、江戸御留守御番被仰付、御小作事御用少之内相勤、病死（歟カ）故御赦免被成。其後相煩、同年七月、御暇被下罷歸候。延寶三年禁裡御造營に付罷上り、内侍所・小御所、切組・建前御用被仰付、同年十一月仕廻、罷歸候。同六年五月二十二日、病死仕候。

三一、日原五郎右衛門。

若原監物組、百三十五石二十八歳。生國、備前。

寛文五年正月十五日、少將樣へ初而御目見申上候。侍從樣へ初に御目見仕候。月日覺不申候。延寶六年八月三日、父五郎大夫跡目無相違被仰付、翌年五月二十二日、續目之御禮申上候。同八年九月二十二日より御武具藏御用被仰付、相勤申候。

三二、廣澤紀伊守元康。

將軍家義晴公之管領細川右京大夫晴元庶弟兼助家來中野と申者に被賴至、六歳より晴元侍匠仕、及十六歳於嵯峨野村領知被下に付、廣澤紀伊守元康と申候。晴元息六郎信良矢取職方々取合に致供、走廻之心樣仕候由。慶長元年冬六郎信良於河州勝瑞死去之節迄附隨、奉公致し候由。六郎死後持明院中納言基隆卿は、右管領所縁御座候故、是にたより京都に入籠り、喜之介相康と致變名、元和元年致病死候由。

三三、廣澤米左衛門元豊。

生國、（三字欠字）

六郎信良息細川讃岐守賴範儀、秀賴公に被召出候得共、少身にて扶持仕候事難成、幼少より故管領婿秋田城介實季召出し、成長之後、息河内守俊學へ被附屬候。然ハ處城介。河内守父子確執出來、公儀爲御裁許、城介致浪人之刻、元豊も河内守手前暇乞

立退申候。子細は不存候。河内守深構被下候故、致流浪、老後又京都に引籠、致病死候。

三四、廣澤喜之介。七十八俵十人扶持、四十七歳。生國、山城。

寛文六年冬、蕃山了介以執持、御切米二十五石十人扶持、母に五人扶持被下候。於江戸中小姓に被召出、同極月十三日、御禮申上候。翌年正月、中奥に被仰付候。延寶五年極月母病死仕候刻、五人扶持差上申候。寛文七年五月十四日、御歸國御供、同年十月二十六日、御參府御供、翌八年江戸詰仕、同九年八月十九日、御歸國御供仕候。同十年三月十一日、御參府御供、但學校御用被仰付、御跡より九月中旬に江戸へ下着仕候。翌年五月二十二日、御歸國之御供仕候。同十二年三月十一日、御出船御供、延寶元年夏御歸國御供仕候。延寶二年四月六日、御出船御供、但京都に御用被仰付、殘罷在、同十月二十四日、御歸國御供、京都より罷下候。同三年正月十二日、禁裡御木造初御上京御供、同十一月五日御上棟に御上洛御供仕候。同九年十一月十一日、御出船御供、翌年夏御歸國御供仕候。同六年五月二十六日、御下向御供、翌年五月二日、御歸城御供、片上より和意谷御參詣御供仕候、同八年十月三日御參府御供、翌年天和元年夏、御歸國御供仕候。天和二年三月二十九日、御出船御供、翌年五月三日御歸國御供仕候。貞享元年三月二十九日、御參勤御供、翌年夏御歸國御供仕、同二年正月十八日、於江戸岩千代様へ初而御目見仕候。右江戸・京都御供之外、御郡廻り・和意谷杯、毎度御供仕候。常々御供定御番於御國御免被成、毎日相勤候様にと被仰付候。年月覺不申候。

三五、東原助右衛門。生國不存候。備前邑久郡牛窓村年寄仕候。

三六、東原彌右衛門。生國、備前邑久郡牛窓村。

代々年寄仕候。文祿四年、秀吉公牛窓村へ御着船被成候時、御目見に被召出、樽・肴差出申候。同年備前中納言殿朝鮮國へ御出陣之時、御召船に乘、御供仕參申候。慶長二年、有馬玄蕃殿少知被下、御抱可被成由に付、牛窓村之代官・郡奉行御斷申候得者、他國へは御奉公には不被遣由にて、參不申候。

三七、東原米左衛門。生國、備前邑久郡牛窓村。

寛永九年八月十三日、少將様御國替、初て御入國之時分、御雇被遊、白鷗丸にて大坂迄御迎に參り申候。同年十月

朔日、御出船に被召出、御切米十八石三人扶持被下候。同年上使小林重郎左衛門殿御下之時、御船被遣候に付、大坂より小倉迄送り參申候。同十年三月四日、備前より伯耆へ御種米積に陸路を參戻申候節、御種米船之上乘仕、同年八月八日、備前へ罷戻り申候前、御褒美銀一枚被下候。同十一年戊御上洛之時、少將様御上京之御供仕、播磨・攝津國あふぎ林にて細引御用被仰付、五十日計晝夜繼飛脚を以て京都へ御肴上げ申候。同十二年江戸梶橋之石垣、小石川之見付御普請、少將様御受取被成候に付、伊豆之岩村より石積申奉行被仰付、同三月十六日、彼地へ參り相勤、其後備前様御屋形小作事奉行被仰付、御用仕廻。又御同人様之御船小早御作事奉行被仰付。已上三年相勤、十四年五月、初罷戻申候。少將様より右爲御褒美銀三枚、備前守様より御羽織被下候。寛永十四年十一月、上使板倉内膳様九州へ御下之時、御船被遣候に付、同月初より大坂へ參り、御船入用之御買物・御武具・道具共、諸事肝煎、又は公儀御船御用之度々、雇加子仕、嶋原陣中於大坂一人にて相勤。翌年四月五日、備前へ罷戻り申候。同十五年、九州より御上使御上り被成候節、少將様牛窓村迄御出、孔雀丸にて御供に參申候 四月十七日より同十九日迄相勤申し、同十二月五日、九州へ上使齋藤左源太殿御下りに付、御船被遣喜德丸にて小倉迄送屆、同十六年正月二日、罷戻申候。同十六年八月、太田備中殿長崎より御上之節、中村主馬牛窓村迄罷出候に付參り、同二十一日より同二十五日迄に仕廻申候。同九月十八日、江戸へ大廻に石被遣候時、犬島へ參り浦船に石積せ、同二十日に仕廻罷歸候。同十七年二月二十八日、備後守様江戸へ被成御座候に付、白鷗丸にて御供に參り、三月十日に仕廻罷戻申候。五月二十二日、少將様御歸國被成候に付、八幡丸にて大坂迄參り、六月二日に仕廻申候、六月、加賀爪民部殿・野々山軒兵衛殿御上り、御船喜德丸にて小倉迄御迎に參り、大坂迄參り、同二十七日より七月七日迄に仕廻申し、同十七年八月宍粟へ上使蒔時數馬殿御下に付、大坂迄喜德丸にて、同十四日、御迎に參り、同十八日、仕廻申候。十一月十三日、井上筑後守殿長崎より御上に付、少將様御出被成、伊勢にて御供に參り、同十六日、仕廻申候。十一月二十七日、上使小濱久兵衛殿・間宮虎之助殿浦邊御廻りに付、御案内船に參り、同十二月三日、仕廻申候。同十八年正月十二日に少將様川口迄御鷹野に御出被成に付、大川御座にて御供仕候。同十九年四月二十八日、浦廻り上使使向井右

衛門殿・小笠原安藝守殿御下り被成候に付、御馳走之漕船御用八鐘丸にて牛窓より備後鞆迄送參り、同五月二日、仕廻申候。十二月十三日、少將樣御參勤小鷲丸にて大坂まで御供に參り、二十日に仕廻申候。同二十年正月十九日、江戸より御横目竹尾四郎兵衛殿因州へ御下被成に付、大坂迄萬里丸にて御迎に參、同二十六日、仕廻申候。三月十三日、朝鮮人獻上之釣鐘通り申に付、下津井より室迄城矢丸にて送、同二十三日、仕廻申候 五月十六日、朝鮮人來朝に付、下津井より室迄漕船八鐘丸にて參り、六月二日、仕廻申候。正保元年三月十一日、長崎より上使馬場三郎左衛門殿御下に付、喜德丸にて大坂迄御迎に參り、小倉迄送參申筈に御座候處、牛窓村より黑田右衛門佐殿御船御乘替被成候に付、牛窓にり四月五日、罷戻申候。五月二十四日、大坂へ御米荷船十艘にて積上り申御用に參り、同六月十一日、仕廻申候。同月、少將樣御歸國に付、大坂迄大鷲丸にて御迎に參申候。七月二十八日、犬島へ石積せ申御用に段平にて參り、八月十一日、仕廻申候。十一月二十五日、金岡御藏へ大坂へ御用上米浦船に積せ、荷足見分に參り、二十七日、仕廻申候。同二年正月二十日、權現樣御迎に參り、熊野丸にて大坂へ參り、二月八日、仕廻申候。二月二十七日、常正院被戻候に付、喜德丸にて大坂へ參り、三月七日、仕廻申候。四月朔日、右近樣御迎觀音丸にて參り、同十三日に仕廻申候。七月十八日、浦邊之繪圖仕御用に蟹江權右衛門。橋本藤左衛門・石川善右衛門・本須勘右衛門被參、同二十四日仕廻申候。五月朔日、備後之鞆・播州室津へ幾里支丹共州御番所にて改之樣子聞合被仰付參り、同六日仕廻申候。十月十九日、御米荷船第一丸へ積大坂へ參り、同二十九日、仕廻申候。同三年五月二日、少將樣御歸國被成候に付、留船之御用に大坂へ參り、同十四日、仕廻申候。八月九日、上使井上筑後守殿長崎へ御下に付、大坂より小倉迄萬里丸にて送參り、九月九日、仕廻申候。十月九日、少將樣鹿喰鳴御狩被成候節、白鷗丸にて御供に參り、同十四日、仕廻申候。四年正月十四日、京都へ御銀參申候に付、倉橋丸にて積上、二十八日、仕廻申候。三月十二日、少將樣御參勤被成に付、八幡丸にて大坂迄御供に參り、十七日仕廻申候。五月六日、御米大坂迄御手船に積參り、十一日、仕廻申候。七月二日、上使井上筑後守殿長崎へ御下りに付、萬里丸にて大坂より小倉迄參り、八月二日、仕廻申候。九月二十日、井上筑後守殿長崎より御上に付、御馳走御用に下津井に相詰、

二十三日、仕廻申候。慶安元年二月二十日、上使井上筑後守殿長崎へ御下に付、大坂より小倉迄送り参り、三月十一日、仕廻申候。同六月二日、少將様御歸國、伊勢丸にて大坂迄御迎に参り、同十日罷戻り申候。七月十日、石見へ上使村越七郎左衛門殿御下りに付、大坂迄御迎に参り、清風丸にて安藝國草津迄送り、同二十七日、仕廻申候。十月七日、井上筑後守殿御通りに付、牛窓村迄少將様御出御供に参り、十四日、仕廻申候。慶安二年正月十一日、大坂にて御船御買見分に参り、二月六日仕廻申候。二月二十九日、長崎米屋孫左衛門と申者、堺皿鼓屋彦左衛門と申者之船に乘り上り申候間、右船留申様にと馬場三郎左衛門殿より申來り、下津井へ右之船留申御用に参り、三月、仕廻申候。三月十四日、少將様御參勤八幡丸にて御供に参り、八月十三日、仕廻申候。九月十四日、唐津より江戸へ御銀登申候に付、下津井より室迄送參り、十九日、仕廻申候。慶安三年七月二十六日、少將様御歸國、八幡丸にて大坂へ御迎に参り、八月十三日、仕廻申候。閏十月九日、江戸へ御銀二百貫目日吉丸に積大坂迄參り、二十六日に仕廻申候。同四年三月五日、少將様八幡丸にて大坂迄御供、十一日、仕廻申候。九月十三日、酒井河内守様京都へ御越、大坂へも御寄可被成との儀に付、川御座揚に伏見へ相詰居申候得共、大坂へは御寄不被成候。二十四日、仕廻申候。承應元年五月二日、少將様御歸國、伊勢丸にて大坂迄御迎に参り、二十四日、仕廻申候。九月晦日、長崎御荷物通申に付、下津井より室迄送り、十月八日、仕廻申候。十二月十九日、京都へ參り申候、御銀五百七十貫目觀音丸にて大坂迄參り、才料田中先右衛門・小森平右衛門・寺崎茂左衛門と參り、五月朔日、仕廻申候。同二年三月六日、少將様御參勤、大坂迄御供に参り、十二日仕廻申候。同三年八月十三日、七十七歳にて病死仕候。

三八、東原杢左衛門。

大船頭水野三郎兵衛引廻、五十六俵三人扶持、五十八歳。生國、備前。

父米左衛門跡目無相違十一月十五日被仰付候。

明暦元年卯月十二日、少將様御參勤、大阪迄清風丸にて御供仕、十七日、仕廻申候。四月十九日、公儀御銀五千五百貫目長崎へ下申に付、牛窓村より備後鞆迄漕船御用に横川丸にて參り、二十二日、仕廻申候。明暦元年七月五日、朝鮮人來朝、下津井より室迄漕船之御用に淡路丸にて參り、八月二十六日、仕廻申候。十一月二十八日、朝鮮人歸帆、牛窓にて備後鞆より漕船之御用

に浪市丸にて參り、十二月二十五日、仕廻申候。同二年正月十一日、備前國中浦邊船役御用に參り、十九日、仕廻申候。二月朔日より網濱村・濱野村兩御船入御船頭屋・御船藏御番人之家御作事奉行被仰付、十二月十日に相勤申候。五月十一日、少將樣御歸國に付、大阪迄御迎に淡路丸にて參り、二十五日、仕廻申候。十二月十二日、京より御銀百五十貫目下り申候に付、高木左近右衛門と大阪迄參り、二十七日、仕舞申候。三年、江戸へ御材木被遣候に付、御長屋切組諸事御普請道具浦船百四十艘餘に積せ申候。九月八日、少將樣御參勤、御召替之御船にて大阪迄御供に參り、十五日に仕廻申候。十月十五日、侍從樣御入國に付、大阪迄御迎へ福島丸にて參り、二十六日に仕廻申候。萬治元年二月二日に江戸大廻りに矢間石。溝石・瓦被遣候浦船十五艘に積込せ、六月四日、仕廻申候。九月十二日、少將樣御歸國に付、大阪迄高嶋丸にて參り、十九日に仕廻申候。九月二十二日、御鷹野御用水之手御船に相勤、閏十二月二十八日、仕廻申候。同二年三月十日、少將樣御參勤に付、大坂迄高嶋丸にて御供に參り、十六日仕廻申候。五月十五日、侍從樣御歸國に付、御迎に福島丸にて參り、二十七日、仕廻申候。同二十九日、水之手御鷹野船御用に相勤、翌年三月迄相勤申候。同三年五月八日、侍從樣御參勤に付、大阪迄福島丸にて御供に參り、十五日仕廻申候。同年二月七日、江戸へ瓦三十五萬枚被遣候に付、浦船に積廻し、八月十三日、仕廻申候。寛文元年四月十日、長崎より幾里志丹上り申候に付、下津井より室迄送り參り、十九日も仕廻申候。八月晦日、肥後より公儀囚人通申候に付、下津井より室迄倉橋丸にて送り參り、閏八月十日仕廻申候。二年正月十九月より備前國中浦邊船改之御用に參り、二十八日、仕廻申候。三月二十二日、長崎より御荷物通申候に付、下津井より室迄送り參り、二十六日、仕廻申候。六月九日、少將樣御歸國、主稅樣御供被成候に付、喜德丸にて大阪迄御迎に參り、七月十八日、仕廻申候。同三年二月初、細濱村・濱野村兩御船入、並川口御番所御作事奉行被仰付、十二月迄相勤申候。三月十一日、少將樣御參勤に付、大阪迄御供に參り、十五日に仕廻申候。同四月五月十三日、少將樣御歸國、主稅樣御供被成候に付、清風丸にて大阪迄御迎に參り、五月十日、仕廻申候。八月二日、天草より公儀御銀上り申候に付、下津井より室迄萬里丸にて送參り、十七日仕廻申候。五年正月十六日、備前國中浦邊船改御用に參り、二十九日に仕廻申候。六年四月二十二日、豐後苻内より公儀御銀上り申に付、下津井より室迄倉橋丸にて送參り、二十四日、仕廻申候。同二十八日、少將樣御歸國に付、川御座揖に大阪へ參り、御供仕、漕船日吉丸にて五月十五日、仕廻申候。五月十五日、水之手御鷹船に相勤申候。九月八日、侍從樣御參勤

中島丸にて大阪迄御供、十八日、仕廻申候。七年三月十六日、少將樣御參勤に付、大阪迄大鵬丸にて御供に參り、二十三日仕廻申候。同二十七日、備前國浦々繪圖調に繪書一人召連參り、四月十三日仕廻申候。中村主馬方にて御本積五月六日迄に[illegible]仕候。五月十日、侍從樣御歸國に付、御納戸御荷物迎に大阪迄參り、二十六日、仕廻申候。七月二十三日、御國廻御巡見高橋文兵衞殿・向井八郎兵衞殿御通りに付、西國御馳走之樣子見分仕、委細度々御注進申上候樣にと、中村主馬申渡、御船小串小早にて安藝國廣島城本迄參り、御馳走之樣子船奉行植木權大夫方にて日々承り、繼飛脚[illegible]船にて御注進度々申上候、御巡見安藝國宮嶋へ御着之樣子見屆、其儘下津井へ罷戻申候。下津井へ御巡見衆御着被成其日、備前海上案内仕、御國境赤穗取上嶋迄送り參り、九月五日、仕廻申候。八年二月初より網濱村・濱野村兩御船入御船頭居・御道具藏御番人之家、並に川口御番所御作事被仰付、十二月を相納申候。九年正月十日京都より御銀三百貫目參候に付、受取りに參り、二十四日、仕廻申候。八月十五日、侍從樣御歸國に付、川御座搭に大坂へ參り、九月五日仕廻申候。十月十八日、浦邊船改之御用に參り、晦日仕廻申候。十年正月十八日、大阪へ御銀百貫目上申候に付、小浪小星に積參り、二十七日仕廻申候。三月十一日、侍從樣御參勤に付、御召替之船にて御供に參り、十六日仕廻申候。十月四日長崎より御荷物上申候付、下津井より室迄送參り、六日に仕廻申候。十二月三月八日少將樣御參勤に付、御納戸御荷物積に御先へ參り、十八日仕廻申候。四月十一日、京都へ御銀三百貫目上り申候に付、大天狗丸に積參り申候。五月十八日、侍從樣御歸國に付、御召替之御船にて大阪迄御迎に參り、六月七日に仕廻申候。十二年五月二日毛利甲斐守樣御入國之御祝儀之御使者に上坂外記被遣候に付、長府迄參り、二月三日、仕廻申候。六月六日、信濃守樣御參勤に付、大鵬丸にて御供仕り、十二日仕廻申候。十一月十一日、少將樣御歸國に付、大阪迄御迎に參り、二十四日、仕廻申候。延寶元年三月二十七日、江戸御普請御材木浦船に積廻し、四月四日、仕廻申候。四月十三日、大阪より御銀百四十貫目下り申に付、小浪小星にて積に參り申候。九月二十八日、長崎より御荷物上り申候に付、下津井より室迄送參り、十月六日、仕廻申候。十一月五日、松平右衞門佐殿御召替船下津井にて破損仕候に付、其荷物へ共御船天狗丸にて、大阪迄送り申樣にと被仰付、參候得共、類船跡より上申、類船に積上り候故、天狗丸は入不申候、下津井より二十二日、罷戻申候。十二月十四日、江戸へ金子六千兩被遣候に付、大阪迄御船に積上り、二十六日仕廻申候。二年正月二十六日信濃守樣兒島へ御鷹野に御渡被成候に付、御供に參り、晦日に仕廻申候。二月初より御船宮奉行・御横目之家・同手代家・　加子長屋共繕作事奉行被仰付、十二月十五

日、仕廻申候。同年四月六日、侍從様御參勤御召之御船にて御供に參り、天氣惡敷、兵庫より御揚被成、十三日、仕廻申候。十月十五日、侍從様京都御普請御用にて御歸國、大阪迄御召替之御船にて御迎に參り、二十四日、仕廻申候。十一月十一日、少將様御參府白鴎丸にて大阪迄御供に參り、兵庫より陸路御越被成候に付、十五日仕廻申候。正保四年より延寶二年迄、川口御番所備前浦邊にて他國船破損仕候節、改御用に毎年度々參候得共、中小姓に被仰付、已後は右之御用に參不申候、右月日失念仕候。延寶二年十二月二十八日、中小姓に被仰付候。翌三年正月三日、御禮申上候。三年正月十二日、侍從様御上京被成候に付、大阪迄御召替船にて御供に參り、十一日、仕廻申候。三月晦日、備前中浦邊船改之御用に參り、四月十一日、仕廻申候。九月二十八日、長崎より御荷物上申に付、下津井より室迄大仙丸にて送參り、十月四日、仕廻申候。十一月十五日、侍從様御上乘御召替之御船にて大阪迄御供に參り、十二日仕廻申候。四年十一月御船宮。御藏奉行・御横目之家・惣御梶取。御加子長屋繕御作事被仰付、六月二日迄相勤申候。九月十五日、のれんのさし物被仰付候。十一月十日、侍從様御參勤、八幡丸にて御供に參り、兵庫より陸路御越し被成候故、十九日仕廻申候。同年御召船改之役被仰付候。五年十一月三日、八幡宮御神體御迎に日光丸にて京へ參り、十二月九日、仕廻申候。七年二月八日、少將様御參勤之節、鹿喰嶋御狩被遊候に付、塞河村より横渡し御用に高嶋小早にて參り、十一日仕廻申候。五月八日、侍從様御歸國、八幡丸にて大阪迄御迎に參り、十九日、仕廻申候。八年二月二十七日、少將様・侍從様・信濃守様御同道被成、鹿喰嶋御狩被遊候に付、塞河村より横渡之御用に小蝶小早にて參り、二月晦日、仕廻申候。十月三日、侍從様御參勤、八幡丸にて大阪迄御供に參り、十九日仕廻申候。天和元年三月二十九日、備前國中浦邊船御運上御赦免被成候に付、浦々へ申渡に參り、四月十日、仕廻申候。五月十二日、丹波守様御參府被成候に付、大阪迄清風丸にて御供に參り、十八日仕廻申候。六月八日、侍從様御歸國被成候に付、八幡丸にて大阪迄御迎に參り、十六日仕廻申候。九月八日、御巡見高木忠右衞門殿御國廻り被成候節、日比村より直嶋・牛窓村迄御渡海、八幡丸にて御迎に參り、十四日仕廻申候。二年三月二十九日、侍從様御參勤、八幡丸にて大阪まで御供に參り、四月六日、仕廻申候。七月六日、朝鮮人下津井より室迄住吉丸にて參り、二十四日、仕廻申候。十月三日、朝鮮人歸帆、牛窓より備後鞆迄漕船日吉丸にて參り、十日、仕廻申候。三年五月八日、侍從様御歸國、八幡丸にて大阪迄御迎に參り、十八日、仕廻申候。十二月三日、三諸丸にて御召初、金一両被下候。三諸丸と八幡丸との行足見分仕候様にと被仰付、牛窓迄參り、五日に仕廻申候。貞享元年三月二十九日、侍從様御參勤、三諸丸にて大阪

迄御供に參り、四月五日、仕廻申候。八月陸路之御供仕候時、栖雲御船にて參候時は、黒羽織後々淺黄打貫一ツ付可申旨被仰付候。二年正月二十三日、御檢使小宮山傳三郎殿岡山より御戻り、大阪迄吉風丸にて送り、二十九日、仕廻申候。三月十七日、丹波守樣御參府被成候に付、大阪迄御船熊野丸にて御供に參り、二十九日、仕廻申し候。五月十日、侍從樣御歸國被成候に付、八幡丸にて御迎に參り、同二十三日、仕廻申候。

三九、藤岡六左衛門。

生國、近江甲賀にて御座候。先祖之儀承傳不申候。

慶長十四年、播磨宰相樣へ姫路にて被召出、御知行二百五十石拜領仕候。播磨宰相樣被爲思召付、小谷甚左衛門。小谷助左衛門兩人之者、種ケ嶋へ渡り、得傳授抱三十目玉之鐵炮張立參候得と被仰付候由、兩人之者小筒張申候趣にて、先此方にて張立見可申歟と申上候得共、其通被仰付、筒出來仕候由。六左衛門曰此小筒好にて執行仕候に付、右御筒に藥十匁込にて、何卒抱搏見御得と被仰付、六左衛門數日搏申候得共、得抱留不申、就夫、鐵炮戻之勢考爲可申、木に結付申候得者、苧繩切れ、鐵炮飛申候に付、木之枝に鐵炮跡先を釣さげ搏申候得者、留申候。此釣合にて工夫仕搏覺申候由。播磨宰相樣御機嫌にて於御前御覽被成、播磨宰相樣にて被遊、則右之御筒被拜領仕候由。其時分は三十匁玉之抱筒、何方にも無御座候。播磨宰相樣御意にて搏始申候由申傳候。播磨宰相樣御卒去之後、御人分にて左衛門督樣へ御奉公申上候。

慶長十九年大阪夏陣左衛門督樣御供仕、相勤申候。大阪表於新池少々心馳も御座候由。又木津川を小濱民部殿御船にて御下りを城中より見及、鐵炮調度搏懸候故、民部殿御下之事難成候に付、御先備より三町程、張立拜領仕候三十匁玉之筒にて城兵を搏すくめ候故、民部殿御通り被成候、間隔にて民部殿より何れの衆にて候哉と頂御使候、松平左衛門督手にて候と申遣候、重ねて之御使者にて、假名御尋被成候に付、藤岡六左衛門と申達候。六左衛門存命之內物語仕承候。松平相模守樣之家老荒尾但馬、右之段具に存居申候。只今之但馬祖父にて御座候。大阪御陣中にて御前に被召出、今度之勤御機嫌に思召候、御手廻り御歩行十人御預被成候。御歸陣被成候はゞ、御取立可被成之旨、難有御意にて御盃頂戴仕候、其上御召之御羽織拜領仕候。

左衛門督樣御船中より御煩被成、御歸陣無程御卒去被成候。宮內少輔樣淡路より備前へ御入國被遊、元和元年御

加増百石被下、都合三百五十石拜領仕候。寛永六年御持筒者十人御預被成候。○宮内少輔様より無銘一尺三寸五分之御脇指拜領仕候。寛永十年四月朔日、於因州鳥取、不慮之仕合にて五十五歳にて相果申候。

四〇、藤岡内介。 鐵炮頭、三百石、六十五歳。生國、備前岡山。

浪人にて罷在候處、御家之子之儀に候間、外へ被遣間敷候由、少將様御意之由、池田加賀申渡、慶安三年十月十八日被召出、十二月朔日、御目見申上、熊澤助右衛門組に被仰付候。當年暮、御知行二百石拜領仕候。明暦元年、備中窪屋郡都宇郡飢人改被仰付、正月八日より同三月二十七日迄罷出相勤申候。同三月二十八日、上道郡之内御代官被仰付、萬治元年三月六日迄相勤申候。同二年八月二日、池田丹波守様 八之丞様と申候時、 御組に被仰付候。十月二十七日、侍從様御入國被遊、十一月朔日、初而御目見被仰付候。三年三月七日、御野郡御郡奉行役被仰付候。寛文五年四月十九日迄相勤申候。寛文三年正月十八日、少將様へ 勘右衛門十一歳にて初而御目見被仰付候。同五年正月二十三日、難有御意にて御普請奉行役被仰付、御足輕十五人御預、御加増百石被下、都合三百石拜領仕候。御郡奉行役武田左吉被仰付、左吉江戸罷在候に付、罷歸候迄、兩役共相勤、御郡方御用四月十九日迄左吉に相勤申候。御普請奉行役同六年十二月十二日迄相勤申候。同年十二月朔日、侍從様へ世悴甚右衛門十三歳にて初而御目見被仰付候。同六年十二月十三日、御町奉行役被仰付、町同心之者五人御預け、町方御用當分と被仰付候に付、御足輕も其儘被仰付、七年十二月朔日迄相勤申候。同七年、江戸御堀御普請之義被爲仰出候に付、同年十二月二日、江戸へ被下、同八年二月、江戸大火事に付、御普請相延、三月七日罷歸候。同八年三月八日より御町奉行役相勤申候。十月十五日、御町奉行役御捨免被成、本之通り御普請奉行役被仰付候。延寶元年、少將様江戸へ御供被仰付、二月十四日、被下候土器町御屋敷御用被仰付候處、同年五月、御國洪水に付、御國御用指支可申候間、罷歸候得と被仰付、六月十五日、罷歸候。同十一月十九日、御足輕五人御増都合二十人被仰付候。同二年、禁裡御普請奉行役二月二十二日より被仰付、同年十一月二十二日、上京仕候様にと被仰付、二十一日、於御城御料理被下、鷹拜領仕候。同日出船仕、同月二十六日、京着仕候。同四年二月十日、罷歸候。同三年十二月十一日御公方様御小袖三ッ御銀三十枚、京都永井伊賀守殿御屋敷拜領仕候。同四年、禁裡御普請御用相勤申候に付、二月二十二日、於御城御料理被下、御召之御小袖拜

領仕候。同七年、池田伊賀相煩、爲養生上方へ罷登候に付、從少將御附可被遣候由被仰付、正月十九日、罷登、三月十一日、罷歸候。天和二年、朝鮮人歸帆之節、牛窓へ御用被仰付、九月四日、罷越、十月六日迄相勤申候。貞享元年十月九日、御普請奉行役御免被成候、御足輕二十人共儘被仰付候。同二年八月九日、江戸御留守御番被仰付、同十六日、罷立、九月四日、下着相勤申候。

四一、予藤岡勘右衛門。六十俵五人扶持、三十二歳。生國、備前岡山。

寛文三年正月十五日、十一歳にて少將様へ初而御目見被仰付候。禁裡御作事に付内介御用被仰付、上京仕候。私儀京都御小屋へ御呼寄置申度旨奉願候に付、延寶三年二月六日、願之通被仰付候。三月五日、罷立、同九日、上着仕候。同十七日、御足輕・御長柄御小人、並御抱被成候爲著入日雇役割御用被仰付候。十二月二十四日迄相勤申候。同二十五日、京都罷立、同二十九日、罷歸申候。延寶六年十二月二日、少將様へ被召出、御藥込役被仰付、御陣御幕御預被成候。同月五日、六十俵五人扶持拜領仕候。同七年江戸御供被仰付、二月十日、御供仕、同二十八日、江戸へ下着仕候。掃除見廻り役被仰付候、相勤申候。同三月六日、池田伊賀死去に付、池田大學へ御悔御使者被仰付、同十六日、江戸罷立、同二十六日、御國へ到着仕候。同二十八日、御國罷立、四月十日、江戸へ下着仕候。同年十月朔日、御供仕、同十九日、罷歸候。同八年、江戸御供被仰付、十二月四日、御供仕、同二十二日、下着仕候。掃除見廻り役、並人奉行被仰付、相勤申候。天和元年二月十二日より十六日迄御代替之御祝儀御能御座候節、御上屋敷被爲召、御書院御刀奉行被仰付、相勤、十八日、御銀二枚被下候。同年九月十六日、江戸より御供仕、十月五日、罷歸候。同二年五月二十二日より天和三年五月二十三日迄西之御丸御番相勤申候。同二年、少將様御卒去之後、八月十五日、黄金一兩拜領仕候。同三年五月二十八日、池田左兵衛組に被仰付、同年閏五月十四日、澤權大夫組に被仰付候。同年六年十九日、中奥に被仰付候。同七月十五日、御持弓・御持筒之役被仰付、九月中旬に改申候内助延寶四年差上申候一百目玉之御筒、私へ爲稽古御預被成候旨、同七月十七日、被仰付候。貞享元年江戸御供被仰付、三月二十五日、罷立、四月十二日、下着仕候。翌年五月六日、江戸罷立、大津より御供仕、同二十三日、罷歸候。同年十一月二十日、屋敷奉行被仰

付候。

四二、藤岡六左衛門。藤岡内蔵助所に有之。

四三、藤岡久六。高三百五十石、八十歳。實父は津田彌次右衛門にて御座候。私生國、播磨姫路。慶長十九年六左衛門方へ養子に參候。六左衛門果候時、浪人仕候。

寛永十一年閏七月十六日、少將樣へ被召出、御切米二百俵被下、生駒左近組に被仰付候。寛永十四年三月五日、難有御意にて御知行三百五十石拜領仕候。慶安四年三月より新組鐵炮稽古之刻、指南可仕旨被仰付、罷出相勤申候。共後御步行御鷹匠稽古之刻にも、度々罷出相勤申候。承應二年九月六日松平相模守樣御在國之刻、重陽之御祝儀御使者被仰付、因州鳥取へ參申候。時服二ツ被下候。荒尾但馬へも御意之趣御座候に付、伯州米子にも參、同十六日、罷歸申候。明暦元年、朝鮮人八月二十五日、來朝。十二月二十七日、歸帆、往來共に通詞之御馳走被仰付、牛窓へ罷出相勤申候。同三年十月二十七日、侍從樣御入國被遊、十一月朔日、初而御目見仕候。萬治二年冬、榊原采女樣播州姫路に被成御座候節、御緣組相調候御悅御使者被仰付、相勤申候。同三年三月より於私宅四季共に鐵炮御免被成、稽古仕者に指南仕候。寛文六年、一條樣江戶へ御下向に付、御留守御番被仰付、二月十四日、京へ罷上、相勤申候。一條樣より銀五枚拜領仕候。同年五月四日、罷歸候。同十年一條光綻樣御髮刷御祝儀之御使者被仰付、六月十日、罷上、相勤、時服二拜領。同月末に罷歸申候。延寶八年冬、御家中七十歲已上之士中、從少將樣罷被下候節、拜領仕候。

四四、子藤岡傳左衛門。浮組、六十二俵五人扶持。五十八歲。私生國、備前岡山。

寛永十三年、少將樣へ九歲にて御目見仕候。承應元年八月十九日、御意之旨日置猪右衛門被申渡候は、假儀と被申鐵炮精を出、達者に打申、依之被召出、中小姓に被仰付、本俵四十俵五人扶持被下、御式台へ相勤申候。明暦元年、江戶御供に罷越、於江戶侍從樣へ相詰、初而御目見仕候。翌年、少將樣御供仕、罷歸候。同二年四月十七日、權現樣御祭禮流鏑馬被仰付、相勤申候。翌日、於御城御料理被下、御小袖一拜領仕候。萬治二年江戶御供仕、翌年、罷歸候、道中上下、毎日御供步行にて相勤申候段、御機嫌に被思召、大津にて御前へ被召出、御給一拜領仕候。寛文二年、少將樣江戶より御歸城に付、御城掃除之役被仰付、六月三日より七月二十一日迄相勤申候。同年秋、於御城石摸被仰付、三寸角八十一中

り中に付而、御褒美御召料之御小袖一御直に頂戴仕候、同年九月十七日、御祭禮流鏑馬被仰付相勤。翌朝於御城御料理被下候。同年、數年馬所持仕候を奇特に被思召、馬扶持被下候由、被仰渡候。同四年、江戸御供、四月八日、京一條姫君様より之御使者被仰付、日光へ罷歸候。以後江戸御城へ被召上、阿部豐後守様御當番にて被召出、御袷二拜領仕候。同年六月、於京都田靏姫様御逝去に付、御使者被仰付、六月十七日、江戸より京へ罷越、江戸へ罷歸り、翌年御供仕、御國へ罷歸候。同年冬、於江戸御城普請被仰付候に付、御橋六膳出來、並御堀堤之芝附奉行被仰付候處、八年二月二日、御普請小屋近所燒失仕候節、火消裁判宜仕候由、御機嫌に被召候由にて、御前へ被召出、御小袖一拜領仕候。同九年九月、一條大納言様御視言に付京都にて御饗應御用役義被仰付、御上下一具被下、京都御用仕廻候以後、一條様より銀二枚拜領仕候。寛文五年十一月、少將様御鷹野之節、御供に罷出、持參仕候三匁五分之筒御前へ被召上、鶴つなぎに三羽御打被爲成候處、一羽は其儘留り、今二羽手負たち參り居申を見付、其段御窺申候得者、追懸參打留申様にとの御意に付、罷越申候得者、中り處足にて御座候故、留矢を打不申、追倒し置候間、二十町も御座候處を見付、其段御機嫌に被思召、御入國以後慥成つなぎ其節迄不被遊候處、私見付取參候段御機嫌に被思候由にて、於御前御羽織頂戴仕候。今一羽之鶴も翌日拾ひ參り、御城に上り申候。同十一年江戸御供仕、翌年、罷歸候。同年、備後守様御煩に付、御病中被爲付置候由、御直に御意、於御前御袷一拜領仕候。九月朔日、江戸罷立、同五日、宍粟へ罷越し、又江戸へ罷歸、翌年、御供仕罷歸申候。延寶元年中奥へ被仰付、御到來奉行被仰付候。同年二月、新御船入御普請奉行被仰付候。同五月、洪水之節、伊木勘解由中屋敷川端破損仕候に付、御船入御用半に候得共、五月十九日より取懸り居申內、又六月二十六日、口津高郡齋村はさみ土手急に出來申候に付、彼村へ罷越しはさみ土手出來、又川向會所之前道破損繕仕出來、右之勘解由中屋敷引端破損仕候處へ取懸り、七月十三日仕廻、又御船入御普請場へ罷越候。延寶二年暮迄相勤申候。御普請出來候以後、御羽織拜領仕候。同三年、禁裡御普請に付、正月十二日、侍從様御上京被遊御供仕、同月二十五日、御供仕罷歸候。同三月、京都御普請場御用之御使者被仰付、罷上り、二十日迄逗留仕、罷歸候。同年極月、惣御馬廻馬扶持被召上候に付、私に被爲下置候馬扶持之義、右御馬扶持被下候節、御加增被下候と存居申に付、其段願書を以て申上候處、翌年正月六日、馬扶持之儀、少將

様被下置候間、其儘被仰付候由御意之旨、日置猪右衛門申渡、難有奉存候。延寳四年十月、江戸御供仕、翌年罷歸候。同五年御前へ被召出、二匁五分之御持筒拜領仕候。同六年簡略之義奉願候處、五月朔日、御免被成、十七日、神圖書組に被仰付候。

四五、倅傳之丞。延寳四年七月十五日、九歳にて侍從様へ御目見仕候。

四六、淵本彌兵衛。生國、美濃。

勝入様へ永祿十年卯十六歳之時、腰に鎌を□、御馬之草苅に被召出被下候様にと、野間にて申上、被召出、代々御奉公仕候。後に福照院様へ御奉公仕候。剃髪仕り道悟と申候。御知行二百五十石被下候。何時被下候や不存候。尤御折紙も無御座、道悟相果候而、五十石御加増被下、都合三百石に被成内百石末子彌三郎へ被下、残り二百石惣領久右衛門に被下、自分知行三百石と、都合五百石に可被成候旨被仰出候處、久右衛門願にて、弟六郎左衛門・六兵衛兩人に百石宛被爲下候様と、久右衛門申上候得者、願之通被仰付候。六郎左衛門本知二百石、右之御知行相添、都合三百石に被成、六兵衛儀は備後守様に御奉公仕、無足にて罷在候處、右之通百石被仰付候。

四七、淵本久右衛門。生國、攝津。

武藏守様御代より少將様御代迄、御奉公仕、寛永五年七月十日、於江戸四十七歳にて病死仕候。御知行三百石武藏守様より被下候。跡目惣領甚五左衛門に無相違被仰付候。甚五左衛門跡目孫三郎に無相違被下□。孫三郎義天和二年八月十一日十八歳にて病死仕候。〃倅無御座御知行上り申候。孫三郎母分之者病氣に成、姉私養申候。

四八、淵木久五左衛門。組外、高百五十石。六十六歳。生國、因幡。

十歳より因州にて御奉公仕り、本俵三十俵四人扶持被下候。元服仕候而、中奥中小姓相詰申候。正保二年二月二十日、江戸御供仕、同三年四月二十八日、御供仕、江戸罷立、五月十四日、罷歸候。正保二年、江戸に罷在候内、侍從様へ御目見仕候。慶安二年江戸御供仕、江戸にて呉服奉行被仰付、相勤申候。同三年、御供にて罷歸候。同四年三月五日、江戸御供仕、翌年五月八日、御供罷立、二十四日、罷歸候。承應二年御膳奉行被仰付、御加増本俵二十俵被下候。

同年三月、江戸御供仕、翌年八月六日、罷歸候。明暦元年四月十二日、江戸御供仕、同二年五月八日、御供罷立、二十五日、岡山へ罷歸候。萬治二年三月十一日、江戸御供仕、翌年五月二十一日、御供罷立、六月六日罷歸候。寛文三年三月十一日、江戸御供仕翌年御供仕罷歸候。同七年正月二十二日、新知百五十石御役料四十俵拜領仕候。江戸御供仕、江戸より伊東へ御湯治之御供仕、翌年御供仕罷歸候。同十一年、江戸御供仕、翌年十月迄罷在候。久敷相勤申候に付、銀五枚被下候。延寶三年三月十一日、江戸御供、翌年罷歸候。同五年三月十一日、江戸御供、翌年罷歸候。同八年六月十五日、御足輕十人御預、御役料二十俵、御增都合六十俵被下候。少將様御召之御小袖、其外御時服、度々拜領仕候、覺不申候。少將様御國廻り下津井・牛窓、其外御泊り御鷹野御出府之御供、一度も外し不申參候。江戸にて御祝儀之御使に被遣候時分、先様より時服度々拜領仕候、年覺不申候。侍從様江戸にて御具足御召初、向御屋敷へ御移徙、御名乘之御祝、午三度御小袖拜領仕候。年月日覺不申候。一位様へ紀州様之御姫様御祝言之節、侍從様より御用被仰付、京へ參候。御姫様より銀子拜領仕候。年月覺不申候。備後守様・豐前へ御越被成候節、御馳走度々被仰付、會所へ罷出相勤申候。御兩所様より御時服眞綿拜領仕候。御腰物役小塚茂兵衛・私兩人へ被仰付、無相違相勤申候。年月日覺不申候。御到來奉行被仰付相勤申候。屋敷奉行被仰付相勤申候。御留守奉行被仰付、相勤申候。何も年月日覺不申候。御備略に付馬扶持上り申候節、私には馬扶持被下候。少將様より忝御意、池田大學承り候而申渡、馬持申候。天和二年、侍從様より鷹拜領仕候。同二月二十五日、關白様へ御祝儀之御使者に被遣、御小袖三拜領仕候。政所様より縮綿三巻拜領仕候。三月四日、京罷立、七日に歸着仕候。少將様へ五十四歳御奉公仕候、御卒去以後、寄合組に被仰付候處、組外に御入被下候様にと奉願候得者、願之通り組外に被仰付候。少將様御卒去以後、御小袖・金子十五兩拜領仕候。御吉様御銀御借に付、御用青木善大夫・私兩人被仰付、相勤申候。善大夫相果候以後、福島善兵衛相役にて相勤申候。延寶八年より少將様御卒去迄相勤申候。

四九、矛甚左衛門。

寛文十年十月五日、十歳にて少將様へ初而御目見仕候。同十一年七月五日、十一歳にて侍從様へ初而御目見仕候。

五〇、淵本彌兵衛。上に委敷記す、爰に略す。道晳元和元年十一月五日、江戸於御中屋敷七十二歳にて病死仕候。

五一、淵本六兵衛。生國、播磨。

元和年ヽヽ松平備後守様へ十六歳之時、御兒小姓に被召出、十石三人扶持被下候。寛永二年道悟知行之内、五十餘り御座候由、御加増百石に被成、六兵衛に被下候内、御折紙は無御座候。右之通り委細申傳候。同十六年西大寺へ御供仕、翌年罷歸候。正保三年十月二十日、百石御加増被下、自是御折紙御座候。同四年十二月十四日、六十石御加増被下、慶安二年正月二十日、四十石御加増被下候。承應元年正月閏日、百石御加増被下、同二年七月十八日、二百石御加増。寛文元年十二月十日、四百石御加増被下、前祿合千石に被仰付候。同五年病氣に罷成候に付、御役義御断申上候得者、同年十二月十六日、御免被成、千石を指上、御備之二三年被仰付候節、施被下置候。此節屋敷共差上申候得者、伜彌兵衛へ被下四百石・屋敷入替に被仰付候。同十一年病氣彌々重御座候に付、四百石之御知行家屋敷差上、伜彌兵衛宅へ引越申度旨奉願候得者、六月二十一日、願之通り被仰付、五十人扶持被下剃髪仕、名を道安と改申候。幼少之時江戸にて御兒小姓、其後御供使・取次役・惣勘定聞・裡判役・旗奉行・鐵炮頭・伊賀之者五人之組預り、宍粟御仕置被仰付、右之年月日覺不申候。右御役儀相勤候內、御直書之詩歌・法眼永眞繪三幅對・片附御茶入被下候。只々御家中他所、酒用申儀御留被成候得共、道安一人には剃髪仕候節御免被成候。

於宍粟私宅御膳上之節、六兵衛に御時服、妻に御綿、彌兵衛に御時服被下候。六兵衛も無銘之小脇指差上申候。宍粟へ被成御座候節は、御膳・御茶、私宅にて上候。江戸に被成御座候節、江戸へ御茶・御肴上候。千石を上四百石に被仰付候時、宅にて御膳上候時は、御時服六兵衛に、綿六兵衛母に被下候。六兵衛も志津之小脇差を上候。常に御前に罷出候節は、御相伴、其外故有時は、猶以て御相伴被仰付候。備後守様有馬御入湯之節、六兵衛義病氣に候間、御供仕候得と御意にて被召連、二廻り罷在候。常々氣色之様子御尋被成、湯治仕可然時は、湯治仕候得と被仰付、入湯仕候得者、御見廻飛脚・御書・御肴・御樽等度々被下候。寛文十年七月二十九日、備後守様御氣色少し能御座候に付、御門外に御出、夫より道安煩臥居申候處へ被爲入候。道安正氣無御座候。脉を御取被成、最早難叶と御意にて御歸被成候。同夜道安七十歳にて病死仕候。

五二、淵本彌兵衛。寄合組、五十人扶持。五十七歳。生國、武藏。

寛永二十年七月二十八日、備後守様へ十五歳にて御兒小姓に被召出、正保元年、十石に三人扶持被下候。同四年、

五石に一人扶持被下候。慶安二年、宍粟御拜領御入部御供仕候。同三年江戸御供仕候。閏十月八日、新知百石被下候。同四年八月朔日、御家中諸士へ地方にて知行被下候間、宍粟三萬石之御領知、致見分割府仕候樣にと被仰付、割府仕候。同年秋、横目付被仰付、歩行之者御預け被成候。十二月六日御知行百石被下候。承應二年六月、横目役御免、歩行之者上げ裏判役被仰付、十匁種ケ島十挺・足輕十人、御預け被成候。明暦元年九月二十五日、御加增二百石被下候。同年十一月十五日、初而備後守樣私宅にて御膳・御茶上候時、御時服被下候。妻に綿被下候。私も無銘之刀上候。萬治元年十一月、岡山へ御使者に參候。是お六樣御婚禮相濟候從備後守樣御祝儀之御樽・御肴被遣候御使者に參候。於御城御料理之御盃被下候。從少將樣御時服拜領仕候。お六樣より白銀被下候。同二年暮、江戸御城御手傳、備後守樣へ被仰付、正月宍粟御立御供仕候。御玄關・遠士天井之御用、蘇鐵之間・御坊主部屋・蓮池二重之御櫓・御番所仕構、御手傳被成候。此時中老之役人被仰付候。九月於御城御時服三ツ・御羽織一ツ・白銀二十枚拜領仕候。備後守樣よりも御時服被下候。少將樣より御普請出來に付、爲御祝儀御時服拜領仕候。寬文元年正月十五日、侍從樣御長女板倉伯耆守樣へ御婚禮御濟申候に付、御供御貝桶之役被仰付候。伯耆樣へ太刀を以て御禮申上候。御料理・御盃被下候上にて、黃金一枚被下候。每度江戸御供仕、又宍粟に御座候時は、御膳差上申候。同五年春、竹内御門主日光へ御登山、御馳走、備後守樣へ被仰付、日光へ御越之御供仕候。御門主江戸へ御歸、眞福寺へ御泊り、備後守樣直に御附被成候て、相詰申候。角田川へ御門主御越被成、此地にても御馳走被遊候に付、伺公仕候。同年八月十日、備後守樣御直筆、一部之物所持仕間敷之旨にて、三十六番之詩歌被下候。其後少將樣御筆跡卷物被下候。十二月十六日より裏判役御免、奉行役被仰付、種ケ島組差上、伊賀者五人御預け、御加增六百石被下、前祿合千石被仰付、父六兵衞屋敷被下、入替り、六兵衞差上申候軍旗に熨斗を御添被下候。同六年正月十一日、御備之二之手被仰付候。十八日、備後守樣於私宅御膳、御茶上候、御時服被下、妻に綿被下候　道永之小脇差上げ申候。同七年六月二十六日、御備之一之手被仰付、七月二十五日自分一箇之旗制候樣にと被仰付候。同十一月十日、備後守樣於私宅御膳御茶上申候。白牡丹之御掛物被下候。同八年二月三日、銀一貫目、每年江戸御供仕候に付被下候。御上屋敷火災に付、三月二十六日、御上屋敷御普請[illegible]奉行被仰付、江戸へ參り、十一月二十七日、御移徙、御時服被下候。同十年六月二十六日、父六兵衞願之通、私宅へ參り申候。七月十八日有賀村農民

二郎作斬罪に可及候、其節備前守様御婚禮も定候、此御慶賀に其死を御免被成候様にと申上候得者、私に下人に被下候。八月朔日、御香奠銀五枚道安死去仕候に付被下候。道安遺物も、備後守様へ包清之小脇指差上申候。おしげ様へ繻子一巻差上申候。豊前守様へ無銘小脇差・光廣・澤庵兩筆之懸物、江戸へ以飛脚差上申候。福照院様・お久様、お絵様へ硯箱一ツ宛指上申候。同十一年亥九月四日、備後守様御遠去、晩七ツ時半、此時まで御側相詰申候。同十月四日、備前國和意谷へ御葬、十一月二十一日岡山へ御使者に参候。侍従様へ御太刀・金馬代・時服五・兩樽兩種、豊前守様より御慶賀、備後守様御遺物中御脇差上申候。侍従様より御時服拜領仕候。同十二年十一月十一日、侍従様依御意、能勢少右衛門同道にて酒井雅楽頭様へ伺公仕、豊前守様御事諸事御差引被成、忝奉存候旨、自分之御禮、鬮友之助迄申達候。同十二日、鹿毛六歳之御馬を豊前守様より被下候。同十六日、豊前守様江戸御立、宍粟へ初而十二月朔日御入部、御供仕候。延寶元年正月十五日、倅彌太之丞十歳之時、豊前守様へ太刀を以て、初而御目見申上候。同十九日、初而豊前守様へ於私宅御膳・御茶上候。私に御時服・妻に御綿・彌太之丞に御時服被下候。宇津之中脇差指上申候。同二月七日、松平土佐守様より御使者・御祝儀物参り、私にも御時服被下候。同二年六月二十三日、板倉市正殿御息女豊前守様へ御婚禮相濟申候に付、御貝桶受取申候。御息女より金五百疋被下候。市正様より時服被下候。侍従様より御時服被下候。同二十八日、板倉市正殿へ豊前守様御出御、供仕候。太刀を以て市正殿へ御禮申上候。御料理・御盃被下候上にて宇津御刀被下候。十月三日、豊前守様より絹地當信繪三幅對被下候。十一月十九日、豊前守様於私長屋、御膳・御茶上候時、御時服被下候。私より唐物卓庇金獅子食籠上候。同三年二月二日、豊前守様御奥方へ初而御目見申上候。同十六日、豊前守様私御長屋に酒饌調被爲入、唐金之花入被下候。四月十九日、お久様へ初而御目見仕候。十月十六日、豊前守様岡山へ御越し、和意谷へ御参詣御供仕候。岡山へ御着、侍従様より御時服拜領仕候。於御城御料理被下候。同二十一日、宍粟へ御歸御供仕候。延寶三年正月八日朝六ツ半、豊前守様御遠去。十一日、備前和意谷御出棺、此日迄相詰申候。二十九日、御葬、同三月二十一日、於殿中御跡目次郎様へ無相違被仰付候旨、池田信濃守様へ被仰渡候。同晦日、次郎様御名數馬様と御改被成候。同四月二十三日、公方様へ御跡目之御禮に御袷六・黄金十枚、池田信濃守様御名代にて御差上、同日、備中直次之御刀上候。私御名代にて蘇鐵之御間迄持参仕候。少將様・大御前様・侍従様・御前様へ御祝儀物、御名代にて持参仕候。同二十五日、松平土佐守様より御時服被下候。同二十七日、少將様より御袷、御前様よ

り白銀、侍從樣より御袷、御前樣より御袷拜領仕候。同晦日、少將樣・侍從樣へ豐前守樣御遺物持參仕候。九月十二日、侍從樣より御料理御相伴、御盃頂戴仕候。御膳過候而、宍粟への御用被仰付、御墨・御意、球目院息災之樣子抔、御尋被成、御召之縞入・御紋附御羽織拜領仕候。同日、侍從樣御意として、數馬樣御道具之内、片附御茶入・畫下筆富士之御懸物被下候。十六日、江戸罷立、宍粟へ罷歸、御下中之者共へ御意之趣申渡候。八月二十三日、岡山へ參り、同二十四日朝、登城仕候樣に被仰付、諸御用共被爲聞、二十五日之朝、御料理可爲下候而、御直に御意、數馬樣へ伺公仕、御目見仕候。御熨斗被下候。二十五日、登城、侍從樣被召病氣之由被爲聞、其上備後守樣・豐前守樣兩御代御奉公能勤候、緩々養生可仕候、只今迄之役儀御免、家老役被仰付候。數馬樣御爲宜可仕候。御意難有御請申上、御禮申上候。即刻御膳出御相伴被仰付、御盃頂戴仕候。同日、數馬樣へ太刀を以て御禮申上候。同二十六日、岡山罷立、宍粟へ罷歸候。九月二十九日、數馬樣岡山御立、十月朔日、宍粟へ御入、太刀を以て御禮申上候。伜彌太之丞も太刀を以て御目見仕候。同二日、數馬樣宍粟御立、江戸へ御越被成候。同六年十一月七日、御しげ樣宍井六右衛門を御使者に被成、來る十五日吉日之間おしげ樣御歯黑召初之御筆、私妻に指上候得と被仰付、十五日之御祝之御道具・御樽肴私より指上、私も御肴指上申候、朝御祝之御料理被下、殊におしげ樣御使者を以て、金五百疋・御肴被下、私妻へも御樽兩種・御綿被下候。同二十七日、おしげ樣私宅へ被爲入、御膳差上申候。鷹・小杉原被下候。私妻に鹽魚被下候。私も中院通茂之筆詠歌大概一册指上申候。七年正月六日、江戸より村瀬段右衛門御使者にて、侍從樣御意には、數馬樣御風氣、其後御疱瘡、十二月二十七日、御遠去被成候間、家中町・在共に騷動不仕候樣にと被仰付候。同七日、少將樣より村井彌七被下、日置猪右衛門參候。二月二十七日、數馬樣御召料之御小袖・御羽織裏付・御上下被下候。四月朔日、御老中御一座にて大井新左衛門殿へ被仰渡候由、數馬樣御跡御潰被成候由、屋敷之義は家中銘々へ被下候間、當六月中に相渡し候樣にと、被仰渡候に付、大井新左衛門殿より被仰付候。同月十二日日置猪右衛門參、江戸より牧野彌次右衛門參、侍從樣御意に、數馬樣御跡御法に候得者、御潰被成候。何も不便に思召候。然る上者、備前・備中御城下之内にても、勝手次第に居申候何も神妙に仕候得と之趣、彌次右衛門申渡候。私義引渡し迄相詰候樣にと被仰渡候。同月十二日、五十人之扶持方被下候間、岡山へ參候得と、日置猪右衛門申渡、難有奉存候旨、御請申候はゞ、屋宅之義は牧野又兵衛下屋敷御借被成候由、被仰付候。九月二十七日、御代官服部六左衛門殿宍粟御請取、十月二十三日、

上使宍粟へ御着、二十三日、上使御引渡相濟、御立に付、私も宍粟罷立、二十五日、岡山へ參り、二十八日、侍從樣へ御目見申上候。十一月朔日、御扶持被下候御禮、太刀を以て申上候。寄合組へ御入被成候。同二日、少將樣へ御目見申上候。延寶八年正月二十九日日置左門より明朝より備後守樣御祠堂御名代・朔望之御拜、相勤候樣にと被仰付、相勤申候。（四季之御祭御名代相勤候節は、御城西之御丸にて、度々御膳・御酒頂戴、御料理被下候。御前へ被召出、御酒・御肴頂戴仕候。）播州之宍粟・備中之庭瀬御代官服部六左衞門殿、庭瀬へ御通に付、片上に御一宿被成候、侍從樣御居間へ私を被爲召、御直に御使者被仰付、御樽之御肴被爲進候。明日定所へ御立寄、御料理參候樣との義、片上へ參り申達候。翌日御立寄、御料理出、家來衆にも御振舞被成候。天和三年亥三月十一日、おしげ樣江戸へ御立、和意谷へ御參詣御供仕候。翌十二日、和意谷より罷歸候。侍從樣より御殺生之鷹、度々拜領仕候。（備後守樣・豐前守樣江戸に被成御座候年は、御茶・御肴江戸へ指上候。常々御前へ罷出候節は、御相伴に被仰付候故、有時は猶以て御相伴被仰付候。）

五三、子彌太之丞。　延寶七年朔日、侍從樣へ十六歲にて御目見申上候。

五四、古田甚內。（生國、美濃。）

九條心馳も度々有之由、勝入樣被聞召、天正十一年未、被召出、御知行百貫被下候由。天正十二年中、勝入樣長久手御陣御供仕候。九月九日、討死仕候由。

甚內義御陣御供罷出候刻、申置候は、今度御陣御供仕罷出候、致討死候はゞ、四歲に成る倅藤兵衞、成人も仕候はゞ、池田之御家へ御奉公申上候樣仕度と申置候由。其後藤兵衞母播磨宰相樣へ御奉公に罷出、武藏守樣へ御附御局被仰付、相勤申上、當時御祈禱所殺弟子致亂氣、御城內へ參、武藏守樣（御幼君之時分）抱被申候を、藤兵衞母才覺を以て奉奪取候由。武藏守樣其段度々被仰出、分而御念比被仰付候。古備前にても御城內に御置被遊候由。武藏守樣御卒去以後落髮仕、名をゑひしゆと申候。少將樣にも前々之如く御念比に被遊、因州鳥取へ御城內に御置被成候。寬永六年ゑひしゆ病死仕候。

五五、古田藤兵衞。（生國、甚內同所。）

播磨宰相樣右甚內　之由被聞召、慶長六年に被召出、新知二百石被下候。同九年、武藏守樣より御加增百五十石被仰付候。同十三年、御加增五十石被仰付候。其後大坂兩御陣御供、御歸陣已後、替り剩物被仰付、（名を齊と改可申旨被仰付、）御加

增二百石被下候。都合六百石拜領仕候。寛永三年寅、御城落之節、從因州少將樣御上京御供仕候。同十一年、江戸御留守御番被仰付、相勤候處、大切に煩、御暇被下罷歸候。同十三年四月二十九日、五十歲病死仕候。

五六、吉田齊。　寄合組、六百石、七十歲。生國、播州姫路。

寛永五年、十三歲にて被召出、五十俵被下候。同十一年戌、御上洛之節、少將樣御上京御供仕候。同十二年、江戸御台所に供仕候。翌十三年父大切に煩申段、福照院樣被聞召、少將樣へ御暇之儀被仰候に付、被聞召屆、福照院樣御台所にて御暇之儀、被仰出。其刻福照院樣より忝御意にて、御小袖一拜領仕候。同十二月、父齊跡目無相違六百石被仰付候。同十九年八月朔日、御兒小姓頭被仰付候。私緣者藤田左馬之助立退申候に付、御暇被下候。備中守樣に住居仕候。一兩年過候而、木下淡路守殿御斷被仰候而、淡路守殿御仰にて是守に住居仕候處、於御江戸福照院樣御詫言被仰候に付、御赦免被成、正保四年五月二十五日、歸參仕候樣被仰付、直に江戸へ罷越し、元之役義被仰付、御兒小姓頭相勤罷在候。明曆元年未より寛文二年寅迄、逼塞仕候故、御兒小姓頭御免被成、御國にて御近習之御奉公被仰付、相務申候。逼塞之內、江戸兩御屋敷類火にて福照院樣・大御前樣へ御見舞之御使者被仰付、二月四日、罷立、十三日、參着仕候。十二月二日、罷歸候。萬治三年十月十八日、御近習御弓組頭被仰付、御弓組十一人御預被成候。少將樣江戸御供十三度罷越候、內一度日光へも御供仕候、年月日失念仕候。寛文十二年、御弓頭御免被成、九月八日、於江戸侍從樣より御鐵炮二十御預被成候。延寶二年、松平土佐守樣へ御家督御祝禮、御使者被仰付、十月七日、罷立、十四日に土佐守樣御前へ罷出、御進物御小袖十・御樽・肴二荷二種、差上御口上申上候。其節於御城御料理被下、土佐守樣御前へ被召出金二枚・札附之御腰物被下候。二十九日、罷歸候。同三年、江戸御留守御番被仰付、二月二十四日、岡山罷立、三月十二日、江戸へ參着、相勤候內、丹波守樣被仰付、淺府御屋敷之御留守御番相勤申候。然る處、侍從樣より仙臺へ御使者被仰付、十月朔日、江戸罷立、九日、參着、旅宿仕居申候處に、陸奧守樣より御使者被下、御樽・肴拜領仕候。翌十日之晩、陸奧守樣御前に罷出、御書並御進物差上候。其節も於御城御料理被下、其後金二枚・札之有御腰物拜領仕候。御暇被下、旅宿へ罷歸候處、御使者被下、御小袖二・御羽織一、拜領仕候。江戸へ十九日、罷歸候。同五年十月二十五日、在宅仕候處、其節御斷申上、御使炮差上申候。在宅當年迄八ヶ年罷在、京銀當暮迄、皆濟仕候得共、他借殘り申故、三年之願申上候處、來春迄三年御免被成、在宅仕居申候。

五七、子甚兵衞。　承應元年、少將樣へ御目見仕候。明曆三年、侍從樣御入國之節、惣並に初而御目見申上候。

五八、古田重兵衛。

寄合組、三百石、六十二歳。古田藤兵衛子にて御座候。生國、因州鳥取。

寛永十三年十三歳にて少將樣へ被召出、本俵五十俵被下、御兒小姓並に相勤申候。正保元年、於江戸松平對馬守樣御息女御逝去に付、御弔使者被仰付、仙岳寺へ御香典白銀十枚被遣持參仕候。對馬守樣より御小袖二被下候。罷歸候而御扶持四人被下候。慶安二年、少將樣江戸御借罷出、翌年御供にて罷歸候。同年於御國少將樣被仰付候は、御家中無足之者共、御陣之御供米分替に可被召連旨、御新法被仰出候刻、一森彥三郎・寺内喜左衛門・私兩三人は、御陣之節、每度御供に可被召連旨、三代已前之小堀彥左衛門を以て被仰付候、其節私儀は無役之者に候得共、每度可被召連旨彥左衛門申渡候。

同四年卯、少將樣江戸御供被仰付、罷越候刻、道中沼津御一宿之節、大猷院樣御不例之旨、江戸より御飛脚到來、翌日小田原御一宿之筈に御座候得共、小田原に御泊り不被遊、少之内御立寄、御膳被召上、其儘直に江戸へ御越被遊候樣被仰付候。私儀は御供之御書附には無御座候得共、小田原より江戸へ夜通に御越被成候間、夜中御乘物に御供可仕旨御意、御直に被仰付候、江戸迄之道之程、達者仕候義、難計候に付、乍恐御斷申上候得者、何分にも御供に可被召連候間、左樣に心得候得と、重而御意被遊候刻、奉畏候御請仕、御供相勤申候。

承應元年於江戸三月十一日、御切米五十俵四人扶持御加增被仰付、都合百俵に八人扶持拜領仕候。侍從樣へ御奉公可申上旨被仰付、御殘置、江戸に七年相詰申候。同二年七月八日、日光山御參詣御供仕御歸之刻、天樹院樣御不例之旨申來り、七月十一日申刻、日光道中佐野より御使者被仰付、夜通に罷歸翌日十一日卯之刻江戸へ着仕候。明曆三年七月十七日、初而御入國之御供仕罷歸候。萬治二年於御國新知二百石被下、御取次役被仰付寬文五年十二月朔日、御加增被仰付、池田伊賀・日置猪右衛門を以て、御念比之御意にて、爲御褒美御鐵炮十挺御預被成候。同六年、天樹院樣御不例に付、御國より江戸へ御使者被仰付、相勤申候。同七年、於日光山大猷院樣十七年忌御法事に付、江戸より日光へ御使者被仰付、相勤申候。同九年、一條關白樣御祝儀之節、御使者於御國被仰付、御祝言前より京都へ參り、相勤申候。一條院樣御祝言相調候御祝儀之御使者に、京都より直に紀伊宰相樣へ可被參旨、追而御國より被仰付、京都より紀州へ罷越、相勤申候。御箱肴一種を被進持參仕候。一條樣より御小袖代銀三枚、御台樣より小袖一、政所樣より銀二枚、紀伊宰相樣より御小袖三ツ、拜領仕候。同十一年於江戸御留守之御用水野茂左衛門申談相勤、並假御横目相勤候樣被仰付、

御道置、相勤申候。近藤覺兵衛、同年極月中頃に罷歸、同十六日、私儀江戸罷立翌年正月三日、罷歸候。同年、於御國養子ヶ願申上候處、願之通り被仰付、同姓重三郎養養子仕候。同年二月十五日、初而御目見申上候。同年、於御國、私儀御物埋並に相勤候樣にと池田大學申渡、相勤申候。延寶元年十二月九日、侍從樣御前に被召出、御直に已前之御近習に可被召仕由、難有御意之上にて、御鷹方奉行被仰付、小塚段兵衛預り候御扶持被放、新規に御鷹方御足輕十人召抱、裁判被仰付候に付、御鐵炮は二十挺預り申候。同二年十一月、御加増五十石被下候。丹羽若狭守樣より御小袖三・御毛織之羽織一、並御鐵炮之鴈、拜領仕候。年月日失念仕候。簡略之儀御斷申上候處、延寶六年願之通被仰付、十月朔日、在宅仕申候。

五九、養子　吉田重三郎。六十俵四人扶持、二十八歲。生國、豫州今治。寛文十二年、於御國同姓十兵衛養子に罷成候。

同二月十五日、初而御目見被仰付候。延寶二年正月十二日、御兒小姓に被召出、六十俵四人扶持被仰付候。同年四月六日、御供にて江戸へ罷越申候。同年六月二十七日、於江戸御膳番役被仰付、同年十月二十五日、御供にて罷歸申候。同三年正月二十一日、御供にて京都へ參り、同月二十五日、御供にて罷歸候。同年十一月五日、御供にて京都へ參り、同年十二月十六日、御供にて罷歸申候。同四年十一月十日、御供にて江戸へ參り、翌年七月九日、御供にて罷歸申候。同六年、江戸御供被仰付置候得共、病氣に付養生仕候樣にと被仰、御供御免被成候。同七年、家上屋被下拜領仕候。同八年十月三日、御供にて江戸へ參り候。同月二十二日、於江戸口次御用被仰付候。翌年六月十六日、御供にて罷歸申候。天和二年三月二十九日、御供にて江戸へ參り、翌年五月十八日、御供にて罷歸申候。於御國同年閏五月三日に日次御用被仰付候。貞享元年三月二十九日、御供にて江戸へ參り、同年、於江戸日次御用御免被成候。翌年五月二十三日、御供にて罷歸申。同十二月二十三日、此節御人少にて相勤骨折申旨御意にて御鷹之鴨一羽拜領仕候。

實曾祖父市川山城守。若州野登野と申所之城主之由。信長公御爲に落城仕候而、其後織田城之介信忠公へ被召出候。信忠公御逝去已後、浪人仕罷在、古山内對馬守殿江州長濱に御座候砌、被召出候、其剗名を不見と改、土佐國にて相果申候。

實祖父市川織部。石見嫡子にて御座候。古對馬守殿・古土佐守御家に、二代奉公仕居申候。其後浪人仕、淺野彈正殿へ罷出、二

千石給候。其節武州岩付之城攻に心懸も御座候由。已後土佐守殿へ本知二千石にて歸參仕候。土佐國にて相果申候、嫡子供は土佐之御家中に罷在候。

市川平之丞。右織部之倅にて御座候。平之丞義古松平美作殿へ被召出、知行二百石給り、鐵炮頭仕罷在候。天和三年、豫州今治にて果申候。右平之丞義、私實父にて御座候。

六〇、古田源助。 草賀宇右衛門組、五十俵五人扶持、五十九歳。生國、因州鳥取。古田齊三男にて御座候。

慶安三年十一月十一日、被召出、霜月朔日、五十俵五人扶持被下、御馬拜領仕、馬扶持十五俵被下、熊澤治郎八組に被仰付、其後丹波守樣御組に被仰付候。承應四年、備中淺口郡飢人改正月二十一日、罷出、三月十一日、仕廻申候。明暦三年、侍從樣御入國被遊候節、惣並御目見申上候。萬治元年、江戸御留守御番被仰付、侍從樣御道中御供仕、於江戸御番・御使等相勤申候。翌年五月二十七日、御供仕罷歸申候。寛文三年、備中伯樂市村へ御毛見九月十三日、罷出、二十五日仕廻申候。同十二年三月五日、江戸御留守御番に罷越、馬留守中も所持仕度、馬扶持之義拜領仕度由奉願候處、願之通り被仰付候。放馬は同名之者に留守中預置申候。 同年七月、於江戸丹波守樣御雇被成、極月迄相詰、翌年二月晦日、罷歸候。同年、草賀宇右衛門組に於江戸被仰付候。延寶二年、學校へ罷出申候。同三年之暮迄、爲御役料二十俵宛、兩年被下候。其後御備略に付、役料・馬扶持共被召上、無人罷歸候故、學校相詰候事難成御座候由、泉八右衛門迄申上候處、御聞に相達、其日無役に被仰付、跡四年分之御役米御返し被下、並馬扶持も初之通り拜領仕候。

嶋田直次郎寫

加藤熊吉校 ㊞

吉備温故秘錄卷之八十一（干城一〇）終

吉備溫故秘錄卷之八十二（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城一一（原本干城一六）目錄

六九、堀　彌次兵衞。　七〇、堀　彌次兵衞。　七一、養子 堀　甚兵衞。　七二、堀口源右衞門。
七三、堀江助左衞門。　七四、堀江助左衞門。

吉備温故秘錄卷之八十二(干城一二)目錄終

吉備溫故秘錄　卷之八十二（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　一一（原本干城一六）

一、福島與次郎。生國、攝津。古主荒木攝津守殿に罷在、少知も取申候由。其後織田七兵衛殿へ罷出、無程七兵衛殿御果被成、其後播磨宰相樣へ天正十年攝津にて御奉公に出申候由。

武藏守樣御代、備前にて慶長九年御知行百五十石拜領仕候。同十九年、江戸御普請に罷越、江戸にて病死仕候。跡目無相違、祖父善兵衛に被仰付る。

二、福島善兵衛。生三河吉田。申上候程之義にては無御座候得共、元和元年五月七日、大坂落城之時、淺黃者首取申候由。

三、養子福島善兵衛。養子にて御座候。片山彌平次と申他所者、生國、阿波。

彌平次實父片山次左衛門加藤左馬助殿にて知行二百石被下罷在候。奧州會津へ國替供仕、其後式部少輔殿御代まで相勤、會津にて病死仕、跡目無相違彌平次に被仰付候。然る處式部少輔殿御身代滅、家中一同に浪人仕、彌平次義御當地に居申候一類共便り引越罷仕候處、養祖父善兵衛倅無御座、片山彌平次を娘と一所に仕度奉願、正保三年七月に願之通被仰付、御禮申上候同年八月、祖父善兵衛四十九歲にて病死仕候。片山彌平次跡目無相違被仰付、福島善兵衛と名を替り繼目之御禮申上候。承應元年、江戸御留守御番相勤申候。

四、養子福島善兵衛。組外、百五十石、五十六歲。下濃將監孫、同彌五左衛門子にて御座候。生國、因幡。

慶安三年十月十二日、少將樣へ十一歲にて被召出、御切米本俵四十俵に五人扶持被下候。同四年三月、江戸御供被召連、翌年、御供仕罷歸候。承應三年二月、中橋・小橋御作事之節、右材木請申候御用被仰付、四十餘日相勤申候。同八月、當分之御普請奉行被仰付、御料理之間に相談申候。明曆元年四月、江戸御參勤之節、御先へ被遣候。翌年、御歸國之御供仕罷歸候。政所樣御平產之御悅御使者江戸にて被仰付、京へ上り、政所樣より白銀二枚、關白樣より眞綿拜領仕候。二月五日、江

戸へ罷歸、御返書指上申候へば、骨折申と御意にて、於御前御召之御小袖拜領仕候。大御前樣よりも白銀二枚拜領仕候。萬治二年三月、江戸御供被召連、翌年、御供罷歸候。同三年十一月、御鐵砲御薬込被仰付、相勤申候。寛文元年正月、養父福島善兵衛相果、伜無之候段、少將樣御耳に達、老母幷妻子不便に被思召、下濃孫九郎（私幼名。）跡目可被仰付候被思召候。（年去名字替り申義、如何と可存哉と、父彌五左衛門呼寄内證御申聞、其上にて孫九郎可被仰付との義也。）彌五左衛門を御城へ被召上、御意之趣日置猪右衛門被申渡候、彌五左衛門伜數多持候へば、一人名字替り候義、不苦樣に被思召候趣、猪右衛門被申聞、父も恭奉存、御意之趣、父私に申渡、恭奉存御請申上、跡目無相違百五十石拜領仕、（養父之名字に成、）四月十二日、於御居間、御禮申上候。寛文二年正月、左馬頭樣・松平伯耆守樣御官位被進候に付、御祝御使者に侍從樣より被仰付、正月十六日、江戸へ參着仕候。（左馬頭樣より御時服拜領仕候。松平相模守樣・同御奥樣・伯耆樣より時服拜領仕候。）二月六日、罷歸、御返書指上候へば、骨折申と御意にて、御羽折拜領仕候。同三年四月、江戸御供被召連、同年六月、日光御參詣被遊候御供仕、翌年、御供仕罷歸仕候。寛文四年九月、御納戸奉行被仰付、（十八年相勤申候。）御納戸奉行相勤申候內、御召下之御小袖、其外品々拜領仕候。（年月は覺へ不申候。）同五年、江戸御供、翌年、御供仕罷歸候。同九年四月五日、江戸御供、翌年、御供仕罷歸。同十二年、江戸御逗留被遊に付、替り御番に江戸へ罷下り、福照院樣御卒去に付、少將樣同年十一月、御立被遊、御供仕罷歸申候。延寶元年丑二月二十八日、江戸御供被召連、同年九月、御納戸御荷物に付御先へ罷歸候。同二年十一月十一日、江戸御供に被召連、翌年十月四日、御供仕罷歸候。同七年二月十日、江戸御供に被召連、同年□（ママ）十九日、御供仕罷歸候。天和元年十一月、御納戸奉行御赦免被遊、御鐵炮十人御預被成、西の御丸御內證御用被仰付、相勤申候。少將樣被仰置候金子、幷御道服、御卒去以後拜領仕候。

五、子與治助。　天和三年八月十五日、侍從樣へ八歲にて御目見申上候。

六、舟橋又右衛門。（生國、尾張三淵。）

信長公御內、岡甚五兵衛と申仁に奉公仕居申候。信長公小牧山御取立被成候時、御普請場にて甚五兵衛喧嘩仕、相手を斬殺申候處、相手之家來大勢切懸、甚五兵衛既に危きを、又右衛門切拂、甚五兵衛をかこひ退申候由。又右衛門は薄手を負ひ申、勝入

様尾張犬山に御在城之時、走込申候處、御かこひ被成助り申候。
其節より勝入様へ御奉公申上、御合力米拜領仕罷在候由。攝津にて播磨宰相様へ御附被成、御知行五十貫拜領仕候て、慶長十八年九月九日、於姫路八十五歳病死。

七、船橋七郎右衛門。 生國、三河。

慶長五年、關ヶ原御陣之節十六歳、吉田にて武藏守様へ被召出候由。同十八年十一月七日、御知行高百五十石、於播磨武藏守様より被下候。同十九年・元和元年大坂兩陣に芳賀內藏允組にて罷越申候。

大坂城內より鐵炮烈しく打申候處、此方足輕之者、鐵炮計にては仕寄も被附不申由にて、士五六人に鐵炮被仰付候、父七郎右衛門其內にて罷出、鐵炮打申候處、剌物に玉中り申候由、則其剌物今に所持仕候。落城之節、落人參候を、相組中追懸申候處に一間計の溝御座候處、何もは其溝を廻り申候處に、七郎右衛門は馬に靡懸、其溝を飛せ、先へ馳拔打取申候刻、大小も印に取置、首帳に附申候由。

元和元年十二月四日、祖父又右衛門知行と、父七郎右衛門知行と、一所に被成候由にて、都合二百二十石也、御折帋於播磨武藏守様より頂戴仕候。同四年十一月二十六日、於因幡二百二十石、少將様より御折帋頂戴仕候。右之御折紙は二百二十一石と御座候。因幡にて御折紙は二百二十石と御座候。此一石之へり何義、如何様之義も不存候。寛永九年、御郡奉行・御代官少將様より被仰付、銀三枚拜領仕候。同二十年三月二十日、江戶御留守御番罷越、翌五月二十五日、罷歸候。此外御代官・御毛見、品々相勤候得共、具に覺へ不申候。明曆二年五月朔日、父七郎右衛門隱居被仰付候。萬治二年極月十日、父七郎右衛門於備前七十三歳にて病死仕候。

八、船橋七郎右衛門。 若原監物組、鐵炮引廻、二百二十石、六十九歳。

寛永九年極月、十六歳、於備前少將様へ初て御目見仕候。明曆二年五月朔日、父七郎右衛門家督無相違被仰付候。同三年、於備前侍從様へ御目見仕候。寛文三年三月五日、江戶御留守番に參、於江戶御土藏預り、翌年五月十一日、罷歸候。同七年四月十七日、池田數馬組にて、權現様御祭禮甲冑にて供奉仕。同八年五月二十二日、學校之肝煎被

仰付候。同十年七月七日迄相勤、御赦免被成、銀五枚拝領仕候。延寶元年三月三日、江戸御留守御番に罷越、於江戸御勘定上開相勤、翌年四月二十日、罷歸候。同三年二月七日、京都禁裡御普請方、品々相勤、極月八日、罷歸候。同五年十月十八日、御城代池田藤右衛門組に被仰付、武具藏見廻、四年相勤申候。同八年壬八月十八日、池田藤右衛門組にて御鐵炮引廻被仰付、御鐵炮藏見廻相勤申候。天和元年十一月朔日、御城代若原監物組に被仰付、御鐵炮引廻し、御鐵炮藏見廻、只今迄八年相勤申候。御地詰・衛毛見、年々十五度罷出候。内二年之内は親懸相勤申候。年月日覺へ不申候。

九、子吉兵衛。同名小左衛門養子に被仰付、延寶七年六月十九日九歳にて於備前侍従樣へ初て御目見申上候。

世悴宇左衛門病死仕候に付、吉兵衛を私方へ戻し申度由、小左衛門奉願候へば、願之通戻し候樣被仰付。貞享二年六月十八日、吉兵衛御禮申上候。

一〇、船橋小左衛門。丹羽平大夫組、四十七俵四人扶持、五十歳。船橋七郎右衛門次男にて御座候。生國、備前。

明暦二年三月十八日、小従人に被召出候。同三月末、江戸へ罷下り、於江戸御目見申上候。本俵二十五俵四人扶持被下、明暦二年、下谷御拝領之御屋敷御普請に付、地形之御用被仰付、相勤罷在候内に、御入國被遊候に付、少將樣之御用人に相渡、御供被仰付、罷歸候。萬治元年江戸へ御供仕、翌年、御供仕罷歸候。同三年春、御中小姓に被仰付候。寛文元年春、江戸御留守番被仰付、相勤、翌年、罷歸候。同三年、御加增、本俵五代（マヽ、朱書）拝領仕候。同七年、江戸御留守御番被仰付、罷越候。御前樣へ相詰申候、御時服拝領仕候。同八年春、金杉御堀普請に付、正月より少將樣へ御雇被成、御普請場へ被遣居申候處、火事に付御堀御普請無御座候故、御國へ罷歸候。十一年淺府御屋敷御留守御番被仰付、相勤。其年は御前樣より方々へ御使者・御用相勤申候。翌年、罷歸之節、金子拝領仕候。延寶三年、病氣に付、御斷申上、御小姓役御赦免、池田左兵衛組に被仰付候。貞享二年春、江戸御留守御番被仰付、罷越、唯今江戸に相詰居申候。

同姓七郎右衛門倅無御座候に付、南部次郎右衛門倅宇左衛門を七郎右衛門養子に奉願候處、被仰付、以後實子出生仕候。私倅無御座候付、七郎右衛門實子吉兵衛を養子に奉願候處、願之通被仰付。延寶七年六月十九日、御目見申上候。然る處、七郎右衛門養子宇左衛門病死仕候、七郎右衛門も舟橋の惣領筋にて御座候得ども、右之仕合に御座候へば、右私方へ養子に差越申候

吉兵衛、七郎右衛門方へ戻申度旨、私願上申候處、被聞召分、願之通被仰付候。貞享二年六月十八日、御老中梶田清右衛門迄被申渡之由、右之段江戸へ丹羽平大夫迄申來、平大夫申渡候。

一一、松原伊賀守。（生國、濃州三ケ之島。其先祖は小松内府重盛公之次男資盛卿伊勢國へ左遷、其子美濃國三ケ之島に移住し、代々松原と名乘申候由、承傳候。）

一二、船戸帶刀。

法名道閑。生國、伊勢〔賀〕守同所。右伊勢守次男にて御座候故、舟戸を名乘申候。永祿年中、信長公に奉公を望み、御放鷹之刻、十六歳にて直參仕候。信長公族姓を御聞被成、則金森法印に御預け被成、姉川合戰之刻、十八歳に罷成申候、切に心馳仕候。法印前之戰場にて、究竟之敵を致組打候、其時法印より知行百石に申付候。法印越前へ切入被申時、國境油峠と申所之取出を、一揆共抱居申候所へ、道閑を士共四人之頭にして被指遣候時、其取出を切崩、首數多打取、本陣へ注進申付、法印越前國大野郡へ入、則其郡を拜領被仕候時、百石之加增被申付を不足に存、金森處を立退申候由。其後瀧川左近將監殿へ罷出候。先年物見之衆七人之内に罷成、切に場數有之由、瀧川家身體果候て、浪人仕候。

美濃國岐阜にて勝入樣へ被召出、御禮申上候刻、野方と申所之明知百二十石御座候を被下候。

追付尾張國犬山を勝入樣•紀伊守樣御父子として御取被成候時、道閑•須賀左京一番乘仕、城代中川勘右衛門と申者を道閑打取申候首を、御本陣へ持參仕候由。其引續に同國羽黑合戰之時、道閑•左京二人物見に被遣候時、敵陣を見濟し、羽黑之町中にて首打捕歸り申を、敵方之物見武者二騎五六町追懸申候、其内一人は後御家へ參候竹内次郎兵衛にて御座候、其場之事次郎兵衛常々語出し申候。其刻より道閑は紀州樣へ被召仕候。美濃國竹ケ鼻之搔上を岐阜より勝入樣御取可被成と紀州樣と御内證御座候時、紀州樣道閑と青山又右衛門とを御前に被爲召、兩人は竹ケ鼻の案内者にて候間、勝入樣より先に紀州樣御手に入候樣才覺仕候へと御意に付、兩人罷越、竹ケ鼻之城代を追退、紀州樣之御人數御旗を城内へ引入、扨岐阜へ御注進被成候へば、勝入樣御滿足と、此時紀州樣道閑に御腰物被下候。年月日不存候。

播磨宰相樣東三河へ御替り被成候時、御知行二百石被下候。（其時紀州樣へ被召仕候士は、先出羽に御附被成候處、道閑は播磨宰相樣へ被召仕候。）其後、切に道閑御暇申上候得共、無御免に付、御領内に浪人仕居申候處、石川備前守犬山之城代に置被申候稻川長左衛門と申者

相果、其跡に居可申と契約仕候處、播磨宰相樣道閑類家に御懸り被成、御引返し被成候。次之年長樣之近所橫山村高六十石之所、御加增被下候。

關ケ原御陣之時、岐阜表新加納川越手を砕首打取申候。翌日落城之時も、首打取申候。同黑野加藤左衞門尉が播上へ御使仕候御手に入申候。其後山城之追分まで被爲押候時、權現樣上意江州水口之城、播磨宰相樣へ被仰付候、御披之義を道閑に被仰付候、尤大事之御使にて御座候處、武略を以首尾能相調、則城を明け渡候。此時城主長束大藏大輔より給候脇指を、播磨宰相樣へ差上候得ば、今度は御感狀と御意被成、則道閑に被下候。其節權現樣へ御目見申上候由。右之脇指は道閑死後、少將樣へ指上申候。

慶長五年播磨へ被爲入候時、御知行千石被下候由、御直に御意御座候得共、樣子御座候て、五百石の御折紙頂戴仕候。同八年、武藏守樣備前へ被爲入候時、百石御加增。同九年十一月十一日之日附にて六百石之御折帋頂戴仕候。同十二年、能奉公仕候間、人を召使候へと御意被成、番大膳御使にて五千石宛御藏米にて二十六ケ年之間拜領仕候。同十八年、武藏守樣播磨へ被爲入、翌十九年冬役大坂御出陣之節、道閑・須賀左京兩人を御前へ被爲召、今度之武者奉行仕候得と、御羽織團被仰付候。

播州中島にて上使城和泉守殿中津之河越を被押候處、御下知を破り、御人數を越せ申段、權現樣被聞召、首尾能御歸陣被成候武藏守樣御意被成候、今度陸にて道閑、船手にて岸越中、專一之御奉公仕候間、兩人へ一倍之御加增被仰付候旨、番大膳御使にて申聞、御禮申上候。樣子御座候て、從江戶御書付可被下との御意にて、御參勤被成候得ども無御歸國、御卒去被成候。此節より祖父義剃髮仕道閑と申候。右之羽織團、今に所持仕候。

元和三年、少將樣因幡へ被爲入、同四年十一月二十六日之日附にて六百石御折帋御座候。道閑義、寬永九年於備前隱居被仰付候。倅帶刀に被下候百五十石則隱居料に被下候。同十五年九月二十四日、八十歲にて病死仕候。

一三、船戶帶刀。生國、美濃。持は、江州甲賀之鷲尾と申勇士之娘。

慶長六年之春、播磨宰相樣道閑に御意被成候は、其方子に鷲尾が孫一人有之候由、兩度御尋、御前へ出し候へと御

意被成候に付、御目見申上候。同年八月より一（マヽ）西郡に御檢地に被遣候。則其年之暮より八人之御扶持方、御藏米百俵づゝ拜領仕候。慶長八年、武藏守樣備前へ被爲入候時、兒嶋へ御檢地に被遣候。翌年、御知行割之時、右播磨宰相樣とり被下候御扶持切米を高に直し百五十石之御折帋、十一月十一日之日附にて頂戴仕候。金川之城御取立之時御奉行仕候。下津井城御取立候時も、御奉行仕候。同十八年、武藏守樣播磨へ被爲入、翌十九年正月より江戸御普請に參、十月初に罷歸候。姫路に一日逗留用意にて大坂御陣之御供仕候。

梶浦大隅組にて四十挺之御鐵炮を、青山又左衞門と帶刀兩人引廻し、何時も先を仕候得ども、大隅申候に付、又左衞門・帶刀兩人一所に神崎川を先へ越し申候。其外に川越申たる士數多御座候得共、帶刀馬にて乘渡し申故、中の渡迄一人參着仕、天滿表之敵相を川隔見及、後に御本陣に成申候三屋村へ罷歸り、相組中に逢申候。同中の渡り御人數被爲越候時も、帶刀・又左衞門兩人先を仕、天滿之柵際迄一番に押詰申候、月日不及（覺カ）候。元和元年夏、大坂落城之時も、野里中ノ渡りを越し、天滿川乘渡し難波橋一町計上候て、士一人打取申候。今橋の邊にて馬武者一騎、高麗橋之邊迄追詰、是は手硏相戰、打取申。右二ツ之甲首、御本陣に指上、則御帳に付申候。其場へは垣見半左衞門・市原加右衞門・佐藤仁右衞門・帶刀共に四人之外、天滿川を越申たる次第、其場之御吟味被仰付、組々より書付指上申候。

同三年、少將樣播磨より因幡へ被爲入候。翌四年、上美・芳美兩郡御檢地被仰付候。其後九年之間、出入有之郡々へ被仰付、御檢地仕候。寛永九年、因州より備前へ被爲入、御知行割之時、道閑隱居仕候付、家督六百石・御鐵炮二十挺、無相違被仰付候。同十二年、江戸小石川見付御普請に付罷越申候。同十五年、嶋原陣に付、春中下津井に罷在、御用相勤申候。同二十年、朝鮮人來朝に付、六月、牛窓へ罷越、御用相勤申候。正保元年、江戸御留守に罷越、翌年五月、罷歸候。同三年七月七日少將樣之御機嫌を損し、御知行所へ蟄居被仰付、御鐵炮被召上候。同四年三月十五日、御赦被成、瀧川出雲組に被仰付候。明暦二年七月二十六日、七十四歳にて病死仕候。

一四、養子**船戸助九郎**。土肥飛彈組、三十人扶持、四十六歳。生國、備前岡山、渡邊久左衞門三男にて御座候。正保元年、五歳にて、母方之祖父舟戸帶刀養子に被仰付候。

慶安元年、少將樣へ初て御目見申上候。明暦二年、養父帶刀跡目無相違六百石被仰付候。同三年十月、侍從樣御入

部之節、一等に御目見申上候。萬治二年四月十七日、權現樣御祭禮流鏑馬相勤申候。翌十八日、於御城御料理被下、時服拜領仕候。寛文二年三月、岡山罷立、江戸御留守御番御式臺相勤、翌三年五月、罷歸候。同七年四月十七日、權現樣御祭禮甲冑にて供奉、瀧川縫殿一列に出申候。同八年五月、學校御用被仰付、同十年七月迄相勤、御赦免之刻、銀子五枚拜領仕候。延寶元年九月九日、岡山罷立、江戸御留守番に參、御取次役相勤、同二年五月七日、罷歸候。同三年九月、權現樣御祭禮供奉、稻葉四郎右衞門組中に加り罷出候。同六年四月、蒙御勘氣、御知行被召上、三十人御扶持被下、兒島郡日比村にて蟄居仕候。天和三年五月、少將樣御神主御遷廟に付、同二十三日、御城下御赦免被成、岡山へ罷出、借宅仕居申候。貞享二年六月、岩千代樣御目見之御祝儀に付、同十四日、御勘氣御赦免被成、同十五日、侍從樣へ御目見被仰付候。

一五、子辰　右衞門。

寛文十年十一月朔日、少將樣へ十一歳にて御目見被仰付候。同十一年、侍從樣へ御目見被仰付候。月日失念仕候。

實祖父渡邊甚助。生國、江州淺井郡速水之庄、其先祖は攝津國渡邊之由。然るに佐々木家攝州を官領之比より京極之被官被成、江州へ移り、右之速水之庄を代々致領知候由。京極家二十八人之士大將之内にて御座候。漸京極家衰へ、傍輩之淺井大身に罷成に付、自然淺井旗本に罷成、天文之比は、主從之禮に成候由。淺井沒落之以後は、在所速水に罷在、天正年中相果申候。

祖父渡邊新右衞門。生國、江州淺井郡速水之庄。右之甚助嫡子にて御座候。姉川合戰之刻、十九歳にて父甚助と淺井備前守旗本に罷在、鑓下之首取申候。其以後切々にて心馳御座候由。不分明候除き申候。淺井父子滅亡後は浪人にて、在所に罷在候。天正之比、同姓渡邊勘兵衞一所に中村式部少輔殿居申候。同十八年、秀吉公小田原御進發之刻、箱根山中之城攻に、同名勘兵衞と同一番乘仕、城中にて數度力戰仕、鐵炮手負ながら、勘兵衞に不劣本丸迄働き申候。勘兵衞義、新右衞門從弟にて御座候。關ヶ原一亂之時は、勘兵衞も新右衞門も浪人にて、在所に罷在候。新右衞門義は、增田右衞門尉と所緣御座候付、則勘兵衞を相伴、右衞門尉方に罷出申候。其比、右衞門尉依病氣、出陣成不申候に付、自分之人數を新右衞門に被預候。則秀賴公御判、井五奉行連判にて、新右衞門に三萬石、勘兵衞に二萬石之御折紙被下。勘兵衞は右衞門尉居城江州膳所之城を預り申候。新右衞

門は右衛門尉忠人數を率ひ關ヶ原へ出陣仕候。西方敗北之時にも、新右衛門義は、內々島津殿御存之者にて御座候に付、則彼手へ申合、島津殿人數之殿仕、無事故人數を引入申候。新右衛門義は、山城追分より江州之在所へ罷歸、隱れ居申候。慶長年中勘兵衛・新右衛門、伊木豐後取持にて於伏見播磨宰相樣へ初て御目見申上候。其後播磨宰相樣御意之由にて御家へ參候へと、切に在所へ豐後方より書狀越申候に付、新右衛門義姬路へ罷越、播磨宰相樣へ御禮申上候。則御扶持方被下罷在候。其後關ヶ原諸浪人御公儀御赦免之刻、新右衛門に御知行七百石・御鐵砲二十挺被仰付候。右より之御懇難有由、御請申上候。大坂兩度之御陣御供相勤申候。元和五年九月二十日、於因幡新右衛門相果申候。

父渡邊久左衛門。生國、播州姬路。元和五年、九歲にて父跡目無相違七百石被仰付候。御鐵砲は被召上候。土肥左吉組に被仰付候。寛永十一年、御上洛之節、御供仕候。同十七年十月五日、二十九歲にて病死仕候。同年、久左衛門跡知四百石は嫡子新八に、三百石は次男金左衛門に被下候。

一六、船戸新五左衛門。生國、參河。舟戸道閑三男にて御座候。

十五歲之時、少將樣御誕生被成、御七夜より御近習之御奉公相勤申候。元和三年、少將樣因幡へ初て御入國、同四年、御知行三百石拜領仕、十一月二十六日之日付にて御折帋頂戴仕候。寛永九年、備前へ御國替、同十年、二百石御加增被下、御持筒、并御鷹方被成候。同年正月元日之日付にて五百石之折帋頂戴仕候。同十九年、御馬廻り被仰付候。寛文四年六月二十二日、隱居被仰付、同六年四月十四日、七十二歲にて病死仕候。

一七、船戸七大夫。水野三郎兵衛組、五百石、四十歲。生國、備前岡山。

萬治元年、十三歲にて少將樣へ御目見仕候。同二年、侍從樣へ御目見仕候。寛文四年六月二十二日、父新五左衛門隱居被仰付、家督無相違五百石私に被仰付、七月朔日、御禮申上候。寛文三年九月十七日、權現樣御祭禮流鏑馬相勤申候。同五年三月二日、江戸へ少將樣御供仕、翌年四月二十日、罷歸候。同九年九月十七日、權現樣御供甲冑にて相勤申候。同十二年三月二日、學校御用被仰付相勤、同十三年七月十二日、御赦免被成、御銀三枚拜領仕候。延寶三年七月二十四日、江戸へ御留守御番に參り、翌年四月二十七日、罷歸候。天和元年、俄に江戸被仰付、五月二十三日

罷立、七月十四日、罷歸候。右者小栗大六御預け被成御人御用に付參候。於江戸御取次役相勤候。同二年、朝鮮人來朝に付、火之番被仰付、七月二日、牛窓へ參、同十四日、罷歸候。歸帆之節は、十月朔日參、十日に罷歸候。

一八、子權三郎。　十二歳にて延寶八年九月朔日侍從樣へ初て御目見仕候。 生國、美濃。八郎左衞門子古田加介幼少之時病死仕候故、委義不申傳候。

一九、古田八郎左衞門。

二〇、古田加介。 生國、八郎左衞門同前。

若年之頃、竹中半兵衞方に罷在候。其後致浪人、木下半助に所緣御座候て、兄古田八左衞門所に罷越居申候。年月・身體存不申候。天正十一年正月、秀吉公柴田御追付被成候刻、兄八左衞門・弟加介兩人共戰場相勤申候。柴田藤円・毛受少助兩人、於柳瀨勝家馬印金之五幣を乞請て勝家を落し殘留候處、八左衞門弟加介・伊法善助・稻葉加兵衞四人罷越候て、毛受少助を吉田加介鑓付候處、兄八左衞門鑓下をくゞり少助と組打仕候、少助首を揚申候處、小川と申士多勢にて襲來候、少助首を奪ひ申候由。其後加介は丹波少將秀勝へ被召置候。筑紫陣之供仕候由、承傳候。丹波少將殿を浪人仕、加須屋内膳殿に罷在候。其時吉田加兵衞と變名仕候。知行二百石給候。高麗より歸朝以後、度々紛骨感じ申由にて百石加增たまわり候て、其後内膳殿手前致浪人慶長四年、石川備前守殿へ知行七百石にて罷出、尾州犬山に被指置候。

同五年、犬山和談之後、關ケ原にて播磨宰相樣へ加兵衞被召出、播州御代官被仰付候。其後武藏守樣へ被爲附、御知行三百石被下。備前へ罷越之時分より八郎左衞門と變名仕候。　同十九年、母衣被仰付、御加增百石拜領仕候。同年冬、大坂御陣御供仕、翌年夏、同前。因州にても御代官被仰付候。元和四年、隱居被仰付候。同九年、六十九歳にて病死仕候。

二一、古田番右衞門。 生國、美濃。

若年之の時加須屋内膳所に罷在、知行百石被申付候。慶長五年、關ケ原にて播磨宰相樣へ八郎左衞門と同時に被召出候。御切米・御扶持方拜領仕候。員數不存候。

元和四年、八郎左衞門隱居被仰付、番右衞門に家督四百石無相違被仰付、御折帋頂戴仕候。寬永元年、大坂御普請に罷在り相勤申候。月日失念仕候。　同七年、江戸御作事御用に罷下り、相勤申候。月日失念仕候。　同十年御野郡・兒島郡、御郡奉行

被御付、相勤申候。上使毎度下津井御上下之節、爲御馳走、彼地へ切々罷出、相勤申候。同十八年、御郡御川御免被成候。承應二年正月十一日、隱居被仰付、道善と改名仕候。寛文三年十一月二十四日、八十二歲にて病死仕候。

二二、養子 古田番右衞門。生國、山城。

幼少之時、左源太と申候。古田道善方へ養子に參りし年月不存候。左源太實父は、京都西門跡家老之伜にて御座候由、承り及申候。實父之名・名氏・先祖之義、不存候。

寛永二年十一月二十日、左源太十五歲にて御兒小姓被召出候。同七年、四十俵五人扶持被下候。江戶御供度々相勤候由、同十八年、御中小姓被仰付候。善五左衞門と變名仕候。正保二年、腹病相煩候に付、御中小姓役御斷申上、御免被成、土肥飛彈組に被仰付候。承應二年正月十三日、番右衞門隱居被仰付、家督四百石無相違被仰付。則、番右衞門と變名仕候。同三年二月岡山罷立、江戶御留守御番に罷下、翌年四月、罷歸候。明曆二年二月朔日、御折帋、於御前頂戴仕候。寛文六年九月十七日、權現樣御祭禮鎧にて土肥佐吉一所に供奉仕候。同八年二月、岡山罷立、江戶御留守御番參、九年五月、罷歸候。延寶七年三月朔日、岡山罷立、江戶御留守番罷下り、十八日、江戶へ參着、御留守中御取次役被仰付、翌年三月二十七日、罷歸候。天和元年九月十七日、權現樣御祭禮供奉、番右衞門病氣に付、伜源兵衞名代に土肥飛彈一所に罷出候。同三年、以之外相煩候へ共、前之養子源兵衞出奔仕候に付、養子奉願義奉憚罷在之處、同三月朔日、土肥飛彈奉願候て、御懇切難有御內意にて、追て養子之義可被仰付旨、被仰出候。同三日、七十三歲病死仕候。

二三、養子 古田番右衞門。土肥飛彈組、三百石、十三歲。奧山市兵衞三男にて御座候。

天和三年六月二十七日、養父古田番右衞門死後之養子に被仰付、跡目三百石拜領仕候。同七月朔日、織日之御禮申上候。則、養父番右衞門通り土肥飛彈組に被仰付候。貞享元年三月二十七日、御知行之折帋、於御前頂戴仕候。

二四、片岡次郎左衞門。生國、尾州。　勝入樣へ被召出候由。

二五、片岡又兵衞。同前。

勝入様へ御奉公仕候由。慶長三年十一月十五日、從播磨宰相様御知行二百石拜領仕候、其後名・名字替り、福岡德右衛門と申候。

二六、福岡杢左衛門。 生國、參河。

實は岡本定右衛門と申者之弟にて御座候。定右衛門義御知行百五十石被下候て、御家に罷在候。寛永十九年六月病死仕候。定右衛門伜無御座、跡絶申候。私幼少に御座候故、定右衛門實父先祖之義存不申候。德右衛門奉願、右杢左衛門を養子甥に仕候。杢左衛門義寛永元年正月十一日、大坂御普請に參申候。杢左衛門病死仕候に付、德右衛門奉願、寛永十二年、私を養子に仕候。德右衛門義寛永十六年三月二十六日、七十八歳にて病死仕候。

二七、福岡德右衛門。 土肥飛彈組、二百石、五十三歳。生國、備前岡山。

同年十一月朔日、祖父德右衛門跡目無相違二百石被仰付、御折帋頂戴仕候。承應三年四月八日、岡山罷立、江戸御留守御普請に罷下り、侍從様へ五月朔日、御目見仕、翌明曆元年四月六日、罷歸候。同年七月十九日、洪水に付、竹木・銀拜領仕候。同二年十二月十一日、一ッ成之御足し米、京銀無之者に被下候に付、私義も御米二十石拜領仕候。寛永六年九月十七日、權現様御祭禮鎧にて土肥左吉一所に供奉仕候。同十年四月罷立、江戸御留守御番に罷下、大御前様御式臺に詰申候。罷歸候節、大御前様より金一兩拜領仕候。十一年四月十一日罷歸候。天和元年九月十二日罷立、江戸新御屋敷御留守御番相勤、同二年十一月十五日罷歸候。

二八、子德右衛門。 延寶七年十一月十五日、八歳にて侍從様御目見被仰付候。

二九、藤田一郎右衛門。 生國、因幡。

於因州少將様へ御歩行に被召出、本俵三十五俵四人扶持拜領仕候。寛永十四年御加增、本俵二十五代て、四人扶持被下、都合本俵五十俵八人扶持被下、福照院様へ御附被遊、江戸へ引越申候。慶安三年、松平式部様播州へ御入部之節、福照院様御使者被仰付、參候。承應二年にも御使者に同所へ參候。明曆二年、中小姓被仰付候。萬治元年六月九日、於江戸病死仕候。

三〇、藤田一郎右衛門。 土肥飛彈組、七十八俵八人扶持、四十八歳 生國、備前岡山。

承應三年正月朔日、少將樣・侍從樣へ始て御目見仕候。明暦二年より父一郎右衛門に相添、御奉公勤申候。萬治元年七月十一日、父跡目無相違米俵七十八代八人扶持被仰付、翌十二日、少將樣・侍從樣へ跡目之御禮申上候。寛文七年十月朔日、御房樣爲御迎、藤澤迄參、同三日罷歸候。同十二年十月二十八日、福照院樣御遺骸御供仕、和意谷へ參、極月朔日、御供之女中同道仕、江戸へ罷歸候。福照院樣御遺物として金二十兩拜領仕候。翌年二月、御當地へ引越申候。在江戸中御奉公無恙相勤申候爲御褒美、從侍從樣銀子十枚拜領仕候。延寶三年二月、樋方御用被仰付、同年六月二日迄相勤申候。同年六月二日、禁裡御普請御用被仰付、同八日出船、於京都壁方御用相勤め、極月朔日罷歸候。同五年八月二日、御中小姓御免、土肥飛彈組へ御入被成候。同七年十一月十六日、上道郡澤田村へ在宅仕罷在候。

三一、深谷助左衛門。

生國、尾州木田にて御座候。荒尾作州樣御先祖に代々御奉公仕候、知行名田十二貫被下候由、承及申候。

三二、深谷助左衛門。

生國、尾州木田。

在所に引籠罷在候を慶長十一年播磨宰相樣被召出、御知行六百石・御鐵砲二十挺被仰付候。

大坂冬陣には武藏守樣より船手被仰付、尼ケ崎に罷在、大坂てんま口に張番仕、慶長十九年十一月十七日夜半時分にしんけいと申處へ忍入、家々に火を懸候得ば、大坂衆野田・福島へ懸落申候間、しんけいは取定申候。此樣子を見及、九鬼長門守殿船に乘り來りしんけいに上り可申と被仰候處、押へ上げ不申に付、色々理り被申候に付、母衣之者計上げ申候。右之節、安宅次郎左衛門、又菅久右衛門・菅平内と申者參候由、明る十八日野田・福島之堤にて鐵砲打相申候。左衛門督樣衆藤岡六左衛門・水野伊織・野間一學・宮脇四郎大夫・八木平十郎など參候て、自身鐵砲打候由。又森孫左衛門參り候得共、手負頓て歸り申候。下々も手負少々果申候由。日出より晝下り迄打相引取申候。水野伊織能覺可申由承る。又明る十九日に山脇主馬・小川主水加勢に被下候。其以後も折々鐵砲打相申候得共、氣遣成る事無御座由。同月二十五日、諸手共押懸、野田・福島を燒申故、大坂衆引取申候由。武藏守樣中島に被成御座、助左衛門被召出、忝御意、御盃被下、播州へ御歸陣被成、米百俵拜領仕候。右之樣子、承り候通り取集書上申候間、定て相違可仕候。寛永十四年十二月十日、祖父助左衛門備前にて病死仕候。

三三、深谷甚右衛門。

生國、尾州荒尾。

寛永十五年三月九日、助左衛門跡知無相違六百石・御鐵砲二十挺被仰付候。寛永十二年十月十三日、江戸御普請に付罷越、翌年三月二十七日江戸罷立、歸り申候。同十九年十一月三日、江戸御普請に罷越、翌年五月十九日、江戸罷立歸り、承應三年、江戸御留守御番被仰付、四月八日罷越、翌年三月二十三日江戸罷立歸候。寛文四年、江戸御留守御番、三月十五日罷越、翌年三月二十八日、江戸罷立歸申候。同八年正月四日、江戸御普請に罷越、同年二月十一日江戸罷立歸申候。延寶四年秋、御臺樣就御法事、江戸へ御使者に參候。御當地罷立、罷歸候月日失念仕候。同六年、波多野甚左衛門世悴養子に奉願候處、願之通被仰付候。同七年六月朔日、初て侍從樣へ御目見仕候。同年、數馬樣御卒去以後、播州宍粟へ罷越候得と被仰付、六月三日罷立、同九日罷歸候。同九年五月十七日、甚右衛門病死仕候。

三四、養子深谷甚右衛門。池田七郎兵衛組、六百石、十五歲。

延寶八年壬八月朔日、養父甚右衛門隱居被仰付、家督無相違六百石被仰付、池田左兵衛組に被仰付。翌二日、御禮申上候。同三日、少將樣へ御禮申上候。

三五、藤井喜右衛門。生國、參河。參河より御奉公申上候。本俵十五俵二人扶持被下、馬醫之役義相勤申候。寛永十八年、備前病死仕候。

三六、藤井與次兵衛。稻葉四郎右衛門組、四十七俵四人扶持、六十八歲。生國、備前。

寛永十八年、父喜左衛門跡目無相違被仰付、御歩行組に被成候。當年迄四十五年御奉公申上候。同十九年、御歩行並之御切米被仰付本俵五俵一人扶持御加增被下、同二十年、權現樣御勸請之節、江戸へ御迎に參、御供仕候。伏見迄罷歸、伏見に少々逗留仕、比叡山より利光院下り申節、同道之出家十人、上下二十人、船中賄仕候て、伏見より岡山迄相勤申候。正保元年、江戸へ御供仕、御屋敷御番御使相勤申候。同二年八月より御當地濱野御船入作事御用相勤申候。同三年、竹木・古鐵・道具共奉行相勤申候。同四年六月より小作事方御用相勤申候。慶安元年、江戸御供仕、御番御使相勤申候同三年江戸御供仕、小作事御用相勤申候。同四年六月より石山之御藏御作事御用相勤申候。承應元年、江戸へ御供に參候節、伏見にて通し馬借之御用相勤、江戸にて小作事御用相勤申候。同三年、江戸御供仕、小作事御用相勤申

候。明暦二年、御當地御藏奉行被仰付、萬治三年迄五年相勤申候。寛永元年、江戸両御屋敷燒失之節、奥様方御作事御用相勤申候。同二年江戸御留守御用に參、御藏奉行相勤申候。同三年、天瀬御藏御作事御用相勤申候。同四年、樋方御作事、同六年迄相勤申候。同六年八月二日、御横目役被仰付、御加增本俵十俵一人扶持被下、都合今俵四十七俵四人扶持被下、同年、古學校御作事見屆に出申候。御奉行は奥村傳左衛門・尾關利左衛門相勤申候。同七年、大坂御藏横目參候節、御房様江戸へ御下向被遊、御供申、通し馬借に伏見へ參申候。御奉行は桑山又市・淸水善次郎勤申候。同九年、新學校御作事見廻り相勤申候。同十年、江戸御留守御用に參、御横目役相勤申候。同十一年、菅彌平預りし御馬屋御作事、又、彌平居申候處御作事見屆仕候。同十二年より延寶元年暮迄御藏見廻り相勤申候。延寶二年六月二十八日、京都へ罷登り、禁裡御作事に付、侍從樣御座被成候御小屋地請取、并御小屋作事・諸事見屆相勤申候。同三年暮、御普請仕廻迄相勤申候。同六年十二月十四日、御中小姓に被仰付、此節少將樣へ初て御目見仕候。同月十六日より西の御丸御内所へ六年御番相勤申候。 同七年六月朔日、侍從樣へ改初て御目見仕候。天和二年八月十五日、少將樣御遺金一枚拜領仕候。翌年四月二十二日、御帷子・御上下拜領仕候。同三年三月七日、銀札方御用被仰付、貞享二年暮迄相勤申候。 於江戸御用相勤申候節、御帷子・裏附御上下・御銀、度々拜領仕候。

三七、子與五郎。 天和二年三月十五日、少將樣へ御目見仕、同三年壬五月十二日、侍從樣へ御目見仕候。

三八、古澤源兵衛。 生國、丹波。

幼少にて父に離、方々仕罷在候所、於參河播磨守相樣へ山脇源大夫申上、被召出、御知行百三十石拜領仕候由。

山脇源大夫攝津之伊丹より打出働申時、一度も外れ不申、助太刀打、又自分働とも仕候由、承り傳申候。大坂冬・夏御陣御供仕、落城之時淺黄者にて御座候得共、打取申候由。

三九、古澤源之丞。 生國、參河。三大夫と申。

祖父源兵衛に懸り罷在候處、播州から賀之山伏、御藏番を指殺し、又は辨才天之月之玉金子之由にてくりぬき取、其品々顯申に付、播州を走り、但馬之國に居申由知れ申、武藏守樣被仰付、彼地へ參、生捕に仕、播州へ召連罷歸申候、依之爲御褒美、御羽織番大膳取次にて拜領仕候。大坂御陣之節も淺黄者打取申由。松平石見守樣へ御奉公に被召出候品、存不申候。御納戸役勤申

候由、右見守樣にては古澤杢之丞と申候由。祖父源兵衛年罷寄、其上一子之倅御斷申上候得ば、首尾能御暇被下、源兵衛手前へ參候。

源兵衛年罷寄、於因州隱居之願申上候處、隱居被仰付、家督無相違父源之丞に被仰付候。月日不存候。因州より御國替之初年より、度々御毛見に罷出候。與上道郡小津村へ幾里支丹改に罷出候。寛永十九年、江戸平川口御出御普請に參、翌年罷歸候。其刻、少將樣より御時服拜領仕候。正保二年、右近樣福岡村實教寺へ御越被成候砌、御番相勤申候。慶安元年四月三日、源之丞病死仕候。

四〇、古澤源之丞。若原監物組、百三十石、五十三歲。生國、備前。

寛永十九年、少將樣へ御目見仕候。慶安元年父跡目無相違被仰付、六月十五日、御禮申上候。同三年九月、少將樣より御馬拜領、扶持共被下候。承應三年四月八日、江戸御留守御番に參、翌年四月六日罷歸候。同三年四月二十八日、於江戸侍從樣初て御目見仕候。同年七月、洪水に付、長屋潰申に付、竹木、幷造作料銀六十目被下候。寛文八年二月八日、江戸御留守御番に參、翌年四月晦日罷歸候。延寶二年九月十四日、上道郡之內御毛見に出、十月十七日、仕廻申候。同三年正月十二日、禁裡御普請に付、同二十四日出船、二月朔日京都參着、小買物方御用相勤、同年十月二十九日御暇被下、十一月五日罷歸。同四年御城代組に被仰付、御武具藏御用相勤申候。同六年、御斷申上、在宅仕候。天和元年、赤坂郡之內御毛見、九月十二日より十一月十一日に仕廻申候。同二年十月六日、兒島郡之內御毛見、森三大夫相司にて罷出、同二十六日、仕廻申候。

四一、福尾九左衛門。

播磨宰相樣へ於參州被召出、其以後右見守樣へ御附被成、播州姫路にて六十九歲にて病死仕候。

四二、福尾才兵衛。

播磨宰相樣へ少之內御奉公申上、其より武藏守樣・少將樣迄、御奉公申上候。其內大坂冬夏御陣には武藏守樣御供仕候。又江戸にて御供使に參、其外京都・大坂之御普請、大津・若狹之小濱・越前之靍賀に御米拂に因州より切々參

候。右之外、他國への御使も度々仕候由。才兵衛存命之内語申を承り申候。因幡・備前にては、久敷御代官被仰付、又少宛之御作事方在鄕御普請、御毛見抔にも罷出候。其後口上道郡・奥上道郡・邑久郡、以上三郡之御郡奉行四五年被仰付、其より牛窓へ在宅被仰付、御公儀役、又は所々御代官仕候。右品々年月委細存し不申候。承應三年二月、病死仕候。

四三、福尾忠兵衛。若原監物組、四十七俵四人扶持、七十八歲。生國、播州。

寛永十年五月、御步行に被召出、本俵二十五俵四人扶持拜領仕候。同年、御上洛之時、少將樣御供仕候。同年、蒲生中務殿御死去以後、伊豫國松山に山崎甲斐守殿・加藤出羽守殿・川勝丹波守殿・曾根源左衛門殿、又は中務殿御家來蒲生忠右衛門父子へも御使に參候。同十一年春、江戶御供被召連、小石川目付(見)・鍛治橋惣石垣御普請之諸道具請拂仕間、岩島に居申、同十二年、仕廻申候。同十三年春、備後守樣御屋形・淺草御屋敷立申時、御作事御用相勤、同十四年春仕廻、備前へ罷歸候。御國廻り上使備中成羽邊へ御廻り被成候時、御使に被遣候。御國にて御城廻り之破損御作事、又は在鄕御普請、其外少宛之御用相勤申候。江戶御供に度々參候。御留守御番も三度參候。年月覺不申候。江戶より大坂御藏屋敷迄御銀請取に罷登、其儘江戶立歸仕候。年月失念仕候。福照院樣御臺所・大御所樣御臺所御橫目兩年相勤申候。年月失念寛永十九年、江戶御供に罷越、平川口御普請、同二十年、御普請中相勤申候。正保二年、右近樣御亂氣被成、備前に御越被成候時、江戶より御供、福岡御茶屋迄參候。同年、求馬樣御屋形岡山水之手に立申時、作事御用相勤申候。目安、御門前之橋・伊木掛辨由前之橋。材木大坂へ調に參候。年月失念。慶安元年、少將樣御供仕江戶へ參候。同三年、御橫目役被仰付、御加增本俵五俵被下、江戶御供に被召連候。同年、奥州にて御馬數多御買被成候時、寒川源左衛門被遣候時、見屆に參、三月江戶罷立、七月中旬罷歸候。承應二年、父才兵衛跡目私同前之御扶持切米にて御座候に付、才兵衛御扶持切米被召上、父格御中小姓に被仰付、其儘御城代加藤九左衛門組にて才兵仕來之役義被仰付。牛窓在宅にて諸事御用相勤申候。御代官之義は兩年仕候。同年三月、牛窓御用被仰付、三十一年相勤申候。天和三年八月御免被成、岡山へ參候。少將樣御召下之御小袖・御袷・御道服・御單物・御上下、度々拜領仕候。松平求馬樣より御帷子一拜領仕

候。中川山城守樣江戸へ御參勤之節、紗綾之御單物一・御帷子一、又翌年御登被成候時、御羽織一拜領仕候。年月失念。松平丹後守樣御歸國之節、牛窓より御揚被成、人馬肝煎申に付、御袷羽織一、又御參勤之時、御先へ御使被下紗綾二卷拜領仕候。年月失念

中川山城守樣初て御通り被成候節、御小袖一拜領仕候。毛利甲斐守樣初て御通り被成候節、唐木綿二卷拜領仕候。

四四、子數之助。

寛文十年二月朔日十三歲、少將樣へ御目見仕候。延寶元年七月七日十六歲、侍從樣へ御目見仕候。

四五、古田新八郎。紀伊國小松原之城主湯川と申者に相從籠城之時、秀吉公之命を以、淺野但馬守殿御攻落、湯川も新八郎も戰死仕候由、申傳候。

四六、古田新兵衞義。新八郎戰死之時九歲にて御座候を、家來ども助候て山中に隱罷在候。其後播磨へ參、又出雲へ參、浪人之內病死仕候。

四七、古田善太輔。生國、出雲松江。堀尾山城守殿に知行二百石給罷在候。其後浪人仕、伯耆國倉吉に居申、其後三代以前之荒尾志摩所に浪人分にて罷在、延寶八年正月九日病死。

四八、古田新兵衞。五十俵七人扶持、三十八歲。生國、因幡鳥取。

寛文十二年三月五日、岡山へ罷越候。延寶八年、御參勤前、他所身上才覺仕間敷旨御內意之由、池田大學方より池田左兵衞申渡候。

天和元年八月十二日、初て御目見被仰付候。同十八日御簡略中、七人扶持被下、九月朔日御禮申上候。同年九月十五日、御扈從組に被仰付、澤權大夫組に御附被成、十月二日、初て御番相勤申候。同年十二月二十六日、御切米五十俵被下候。同二年三月七日、私自分に拵置申候玉目六貫目之棒火矢三本・同玉目之炮碌火矢五、少將樣・侍從樣、御見物にて打申候。少將樣小屋へ御入被遊候節、右火業五町付申段、名譽に被思召候旨、池田左兵衞迄御意被成、則、町付共に書上可申旨被仰付、改書付指上申候。翌朝、於御城御禮申上候處、侍從樣御直に、昨日之兩品とも無殘所一如之首尾之旨御意被成候。同年、江戸御供被仰付、三月二十三日、御先へ罷立、道中御茶壺裁判仕、十一日江戸へ參着仕候。同三年五月朔日、御先へ罷立、道中御書物裁判仕、同月十六日罷歸候。貞享二年九月二十五日、五百目御筒鑄申義相願候處、願之通被仰付候。

四九、別所治左衞門。 生國、伊勢。古主織田上野所に居申。

慶長十四年八月九日、武藏守樣へ被召出候。同十七年、磐梨郡へ御檢地被仰付、河田吉兵衞相司に罷出候。同年十一月二十一日、備前にて三百石之御折紙頂戴仕候。同十八年、播磨へ御國替に付、御先へ三氣郡・加東郡へ小物成改被仰付、中西又右衞門と相司にて罷越勤申候。同年、加東郡へ御毛見被仰付、野坂八郎右衞門と相司にて罷出勤申候。同十九年、加東郡へ御檢見被仰付、齋藤仁左衞門と罷出候處、大坂冬御陣に付、尼ヶ崎へ加勢被仰付、罷越候元和元年四月六日、福照院樣・備後守樣江戶へ御下り被成候に付、御供仕、其儘江戶にて兩御屋敷御作事御用被仰付相勤、翌年、播磨へ罷歸候。同四年、法美郡・八東郡、御郡奉行並に上り知代官被仰付、岩田庄兵衞と相司にて寬永九年御國替迄十五年之間相勤申候。同年十月、邑久郡免割に被仰付、熊谷十左衞門と相司にて罷出候。同十年正月元日、津高郡備中御郡奉行被仰付、野坂八郎右衞門と相役にて寬永十九年迄十年之間相勤申候。同二十年津高郡御替被成、兒島郡・備中石川善右衞門と相役にて同年十二月二十日迄相勤申候。同年十二月二十一日、御町奉行被仰付、正保三年八月晦日迄四年之間薄田惣右衞門と相役にて勤申候。年寄候故、御斷申上候處、御赦免被成、隱居被仰付、隱居之內爲御心得、上道郡之內高五千石餘代官被仰付、相勤申候。御家へ被召出候て新座にて三年御用不被仰付、四年目より三十五年之間、御用被仰付相勤申候。其內に久々御用無恙相勤候爲御褒美、次男草安被召出、御知行二百石被下候。

五〇、別所治左衞門。

正保三年九月朔日、祖父治左衞門隱居仕、中眼に罷成、家督無相違三百石被仰付、番大膳組に被仰付。慶安二年三月邑久郡大野道尤・同主馬改に、八木捌兵衞・村田彌兵衞・治左衞門三人に被仰付、相改申候。同年九月十九日、御姬君樣一條樣へ御祝言に付、京都へ御供被仰付、江戶罷越、御供仕相勤、十二月二十九日罷歸申候。承應元年、上道郡御毛見被仰付、上嶋九郎兵衞相司にて罷出候。同二年、邑久郡御毛見被仰付、川口多左衞門相司にて罷出候。同三年七月より十一月迄之內、上道郡御郡奉行被仰付、相勤申候。同四年春より御借米奉行被仰付、寬文八年十月十五日迄四年之間相勤申候處、筋氣相煩候に付、御斷申上候得ば、則、御赦し被成、岩城大藏組に被仰付候。同十二年

十月二十二日、父治左衛門病死仕候。

五一、別所忠兵衛。岩城大藏組、三百石、五十歳。生國、備前岡山。

慶安三年十月、少將樣へ御兒小姓に被召出、三十俵四人扶持被下候。承應二年二月二十五日、江戸御供に參、六月より煩、七月御暇被下、罷歸候。明暦元年九月二日、江戸御供相勤、翌年五月罷歸候。同三年十月十八日、病氣に付、請御奉公御斷申上候處、御赦免被成、岩城大藏組に被仰付候。御兒小姓役十一年相勤申候。延寶元年六月二十五日、父治左衛門家督無相違三百石被仰付候。同二年、江戸御供被仰付、翌年三月二十八日罷歸候。元和三年、江戸御留守御番に參、翌年四月二日罷歸候。

五二、子重右衛門。貞享元年二月朔日、初て御目見申上候。

五三、堀清左衛門。生國、尾州犬山。

勝入樣へ被召出、以後播磨宰相樣へ御附被成、播州へ御入國以後、御知行百五十石被下候。夏麥二十俵、冬米二十俵、御帷子・御小袖、年々拜領仕、無役にて罷在候。於因州九十餘歳にて病死仕候。

五四、堀九左衛門。生國、尾州犬山。

勝九郎樣御兒小姓に被召出、以後御知行三百石被下、御奉公仕、後先池田出羽に御附被成、播州にて果申候。亂氣仕候故、亂氣申候由承候。倅二人扶持御座候。嫡彌太之進、次男吉大夫と申候。

五五、堀彌太之進。

高祖父清左衛門家督百五十石被仰付候。武藏守樣大坂兩御陣御供仕候由。其外大坂御普請、江戸御留守御番、御代官、御普請方、御毛見相勤申候由。年月不存候。寛文元年、祖父彌太之進隱居被仰付、家督養父清左衛門に被仰付候。

五六、堀清左衛門。

親懸りにて罷在候內、權現樣御祭禮流鏑馬兩度相勤、御小袖拜領仕候由。寛文二年、江戸御留守御番に參、翌年、罷

歸候。同九年十月、淺口郡御毛見被仰付、相勤申候。同十年、眞田將監組御鐵砲引廻被仰付候。同十一年、權現樣御祭禮鎧にて供奉仕候。延寶六年五月二日、淸左衞門病死仕候。

五七、養子 堀彌次郎。 池田七郎兵衞組、百五十石、二十歲。

養父淸左衞門實子無御座候故、堀玄甫次男私養子に奉願、六歲之時より淸左衞門養育仕候。生國、備前岡山。

侍從樣へ始て御目見仕候年月、幼少にて覺へ不申候。延寶六年三月、淸左衞門跡目無相違百五十石被仰付。同年六月、十二歲にて侍從樣へ繼目之御禮申上候。

五八、池田藏人。 生國、攝津國池田勝正處に家老役仕居申候由。

五九、池田右近。 生國、攝津國。右藏人伜にて御座候。三好修理大夫へ奉公仕、六條合戰之時打死仕候由。

六〇、堀內六郎兵衞。 生國、攝津國。

右之右近伜にて御座候。四歲之時右近打死仕候。六郎兵衞母方之祖父は野間右兵衞と申、攝津國越水之城に居申候。右兵衞伜野間左吉は、信長公より河內國若江之城御預け在城仕候。六郎兵衞爲に、左吉は母方之祖父にて御座候に付、六郎兵衞伜之時分より左吉にて養育仕置申候。

天正五年、美濃國岐阜にて播磨宰相樣へ被召出、其節名氏を堀內に仕候。播磨宰相樣奥州御陣御供仕、御歸陣新知二百石被下候。其後播磨へ御入國之節、御加增百石被仰付、福照院樣從備前江戶へ御越被成候節、御供被仰付、因州へ御入國以後、伯耆國御郡奉行被仰付、御國替之時分迄勤申候。備前へ御入國之時分、御町奉行被仰付、十二ケ年相勤申候。正保元年七月十五日隱居被仰付、法體迄御赦免被成、久閑と申候。承應三年七月朔日、九十歲にて病死仕候。

六一、堀內六郎兵衞。 生國、三河長澤。

六郎兵衞家督無相違三百石正保元年七月十五日被仰付、同月二十一日、繼目之御禮申上候。慶安元年、江戶御留守御番被仰付罷下、翌年四月、御國へ罷歸候。承應三年・同四年、上道郡御毛見被仰付、相勤申候。寬文六年、江戶御留

守御番被仰付、罷下り、翌年四月、罷歸候。同十年九月二十四日、七十二歳にて病死仕候。

六二、堀内半平。 浮組、三百石。生國、備前岡山。

寛文三年七月七日、少將樣へ初て御目見仕候。侍從樣へ初て御目見仕候。年號月日失念仕候。 寛文十年十月二十六日、父六郎兵衞跡知無相違御知行三百石被仰付、同月二十八日、織日之御禮申上候、延寶元年、江戸御留守御番被仰付、九月六日罷立、翌年四月二十八日罷歸候。天和三年、江戸御留守御番被仰付、三月朔日罷立、翌貞享元年四月二日、罷歸候。

六三、堀内源五兵衞。 生國、播磨。堀内六郎兵衞久閑二男にて御座候。

於因州鳥取、元和八年二月五日、少將樣へ被召出候。寛永六年、御切米拜領仕候。同十二年正月、江戸御供仕候。同二十年十二月十五日、侍從樣へ御附被成、六十二俵四人扶持御加增拜領仕、在江戸御奉公相勤申候。慶安元年、日光御參詣御供仕候。同三年二月十一日、新知二百石拜領仕候。同四年八月、熱海御湯治御供に參候。承應元年二月十六日、初て御具足被爲召候刻、御馬印持申役被仰付、於御前相勤申候。同二年五月二十五日、御中屋敷御移徙之刻、御奏者役相勤申候。同年七月、日光へ御參詣之御供に參候。同三年三月晦日、御近習役被仰付候。同三年四月七日、江戸罷立、御國へ參候刻、從大御前樣銀二枚被下、侍從樣より金子三十切拜領仕候。同三年十一月朔日、御鐵砲之者十人御預け被成候。寛文元年正月十日、病死仕候。

六四、堀内源三郎。 宮城大藏組、百石、二十六歳。生國、備前。

父源五兵衞跡目同年三月十五日御知行百石被仰付候。寛文八年九月、侍從樣へ御兒小姓役に被召出、十月、於御前御裏付上下拜領仕候。同九年三月、江戸御供に參、翌年御供仕罷歸申候。同十一年三月、江戸御供に參、翌年、御供仕罷歸申候。度々御自筆之御色紙・短册・御小袖・御上下拜領仕候。 延寶八年八月九日、御兒小姓役御免被成、芳賀內藏允組に被仰付候。同年十月十二日、八幡宮にて奉射的被仰付候刻、鬮替之役相勤、御小袖拜領仕候。天和二年、朝鮮人歸帆之節、牛窓へ火消番被仰付參候。貞享元年二月四日、宮城大藏組に當分御入被成候旨、被仰付候。同年十月、於江戸御預り人御座候

に付罷下り、十二月二日罷歸申候。

六五、堀權之丞。 生國、備前岡山。

寛永五年十一月十五日、伊庭關左衞門肝煎にて、少將樣へ御歩行之者被召出、本俵二十五俵四人扶持拜領仕候。慶安四年十月十四日、一條政所樣京都へ御祝言之節、御附被成、御加增十五俵二人扶持拜領仕、中小姓被仰付。上京仕御奉公相勤申候。明曆三年三月十八日、於京都病死仕候。

六六、堀六之丞。 生國、備前。

明曆三年五月九日、權之丞跡目無相違被仰付、一條政所樣へ御奉公相勤申候處に、寛文元年十月朔日、於京都病死仕候。

六七、堀安之丞。 上坂外記組、三十九俵四人扶持、二十八歲。生國、山城。

京都より御當地へ四歲にて罷歸、寛文二年三月五日、父六之丞跡目四十俵六人扶持之內、本俵二十五俵四人扶持被仰付候。寛文三年三月三日、七歲にて少將樣へ初て御目見仕候。同十年正月十六日、少將樣へ十四歲にて御兒小姓に被仰付候。同十一年九月十日、江戶御供に罷越、翌十二年、於江戶侍從樣へ右之役義相勤申候。同年六月、御供仕罷歸候。同十月五日、中小姓に被仰付候。延寶八年九月三日、御馬廻りに被仰付候。

六八、堀甚兵衞。 生國、尾州犬山。

古主犬山之城主と承傳申候。名は不存候。勝入樣へ御奉公に出申義、犬山に被成御座候之時分と承り申候。心馳も御座樣に承り候得共、委細不存候。

勝入樣より御知行二百石被下、步行御弓十人御預け被成候由。長久手御陣以後指上申候樣承候。其後參河にて御加增百石拜領仕、都合三百石被下候由。播州にて隱居被仰付、三百石は祖父彌次兵衞に被下、外に百五十石甚兵衞に被下候由。慶長十四年、甚兵衞病死仕候。

六九、堀彌次兵衞。 生國、尾州犬山。

三河より播磨宰相様へ御奉公に出申候。播州にて御知行百五十石被下候。四百五十石拜領仕候。甚兵衛果申刻、百五十石之内五十石彌次兵衛へ被下、都合五百石に被成下候。殘百石は彌次兵衛弟太郎兵衛に被下候 此者大坂にて打死仕候由。慶長五年、景勝御陣に播磨宰相様御供仕、關ヶ原御陣へも御供仕候 三州吉田より伏見御普請にも參候由。三州より播磨へ御國替以後、御檢地に出申候、又は毛見にも兩度出申候。大坂兩陣武藏守様御供仕候。因州より備前へ御國替以後、江戸御留守御番被仰付、寛永十一年二月二十一日、岡山罷立、同十二年二月二十一日江戸より罷歸、同年六月二十八日、病死仕候。

七〇、堀彌次兵衛。生國、三河吉田。

寛永十年極月、少將様へ被召出、五十俵五人扶持被下候。同十一年、切支丹改に備中へ參候由。同十二年九月、祖父彌次兵衛跡知五百石無相違、後之彌次兵衛へ被仰付候。同十七年、幾里支丹改に備中へ參候由。同二十年、切支丹改に備中へ參候由。江戸御普請に付、寛永二十年十一月、江戸へ參、正保元年四月罷歸候。正保二年四月十五日、右近様福岡へ被成御座候節、御番被仰付參候、同二十一日罷歸候。承應三年十月六日、伊庭主膳與頭被仰付候。明暦三年極月五日、侍從様へ年頭へ御使者に江戸へ參、翌年正月二十五日罷歸候由。寛文十二年七月、彌次兵衛病死仕候。同年九月跡目五百石無相違孫傳助に被仰付候。幼少に付御目之御禮不申上候處、延寶元年九月、傳助病死仕候。

七一、養子堀甚兵衛。湯淺半右衛門組、三百石、三十二歳。生國、備前。田中與兵衛伜にて御座候。

寛文四年、十一歳にて少將様へ初て御目見仕候。延寶元年十一月十七日に堀之名跡忝御意にて、私に被仰付、御知行三百石被下候。同二十一日、織目之御禮申上候。同十三年、禁裏御普請に付、新院様御門之御番被仰付、四月十日京都へ罷越、同年十二月九日罷歸候。同五年、江戸御留守御番被仰付、二月二十四日罷立、同六年三月二十七日、罷歸候。

七二、堀江源右衛門。生國、甲斐國。備前中納言殿へ奉公仕居申候。其後浪人仕、備中取越村に罷在病死仕候。

七三、堀口助左衛門。（生國、備前岡山。）

武藏守樣播磨より備前へ御國替被遊候年、御料理役に被召出、御奉公仕候。其後播磨宰相樣御卒去之後、播磨へ御入國被成、其後因幡へ御國替、又備前へ御國替、御奉公仕候。正保元年六月十七日、病死仕候。

七四、堀江助左衛門。（料理人、六十俵四人扶持、六十四歲。生國、因幡。）

同年八月朔日、父助左衛門跡目無相違被仰付候。同十二月、本俵二俵御加增拜領仕候。（當年迄四十二年に相成申候。）其內、少將樣へ江戸御供十九度參候。少將樣御卒去之後、侍從樣へ相勤申候。貞享元年、江戸御供被仰付、一度御供仕候。萬治元年霜月二十五日、御加增本俵十俵一人扶持拜領仕候。同三年十一月十三日、少將樣御自筆にて御書付被成、右之趣日置猪右衛門へ御直被仰渡、難有御意之通被申渡、本俵五俵御加增拜領仕候。寬文十一年二月朔日、御小姓に被仰付候。延寶八年六月十六日、池田大學被申渡、難有御意にて五俵之御加增被下、以上只今六十俵四人扶持被下候。香庵樣御鷹野へ御同道被成、御辨當御花畠にて被召上候に付、御鷹之鳫御前にて御料理被仰付、御料理出來申候に付、丹羽藏人に被仰付、難有御意にて御小袖拜領仕候。（年月失念仕候。）御城にて人參汁仕候得ば、殊の外御意に入申候に付、人參汁續三日御意にて被仰付仕候。三日共に御意に入、難有御意にて小堀彥左衛門・大口茂大夫被仰付、御羽織拜領仕候。其後も御料理御意に入、御直に難有御意にて、御帷子御裏付御袴拜領仕候。（年月失念仕候。）寬文二年二月中旬、池田大學・日置猪右衛門・淵本久五右衛門・大口市右衛門兩（四カ）人へ私御奉公し仕樣、少將樣に被仰上、難有御意にて、爲御褒美銀子二枚拜領仕候。同年十二月初、福照院樣へ御膳廻り御上被成候に付、則御料理福照院樣も御上被成候。（御料理は干菜之汁・酒漬鱈之御汁を仕候。其外御料理不殘福照院樣・少將樣御意に入、）福照院樣私名御尋被成候に付、少將樣御機嫌能、則丹波守樣御時分御膳奉行大口市右衛門へ被仰渡、爲御褒美銀一枚難有御意にて拜領仕候。寬文六年七月五日より每日詰仕候樣にと日置猪右衛門直に被申度、相勤申候。夫故寬文八年十一月、爲御褒美十俵拜領仕候。大學・山內權左衛門被申渡候、少將樣日光へ御社參之時分、仲間御殘被成候得ども、私義は三度御供に被仰付、伊東へ御湯治被成候時分、

山内殘申候得共、俄に御意之由にて御供被仰付候。慶安四年八月、侍從樣熱海へ御湯治被成候に付、私御供被仰付參候。

三級寫字生　三栗中實　寫
一級同　小野權之丞　校㊞

吉備溫故秘錄卷之八十二（干城一一）終

吉備温故秘録巻之八十三（原本無巻数）

大澤惟貞輯録

干城一二（原本干城一七）目録

六九、松井加賀。
七〇、松井右近。
七一、松井内藏之助。
七二、松井善兵衛。
七三、松井平四郎。
七四、松村傳兵衛。
七五、松村兵左衛門。
七六、松村傳三郎。
七七、子 虎之助。
七八、松村八右衛門。
七九、松村八郎左衛門。
八〇、松井九郎兵衛。
八一、松井九郎兵衛。
八二、松井加七。
八三、子 三七。
八四、丸毛帶刀。
八五、丸毛藤左衛門。
八六、丸毛七兵衛。
八七、丸毛本右衛門。
八八、子 平六。
八九、淺井小六。
九〇、淺井勝左衛門。
九一、正木傳右衛門。
九二、嫡子 甚右衛門。
九三、正木清兵衛。
九四、正木文助。
九五、牧野傳藏。
九六、牧野宇右衛門。
九七、牧野又兵衛。
九八、牧野與十郎。
九九、岩井九郎右衛門。
一〇〇、松田七兵衛。
一〇一、松田七兵衛。
一〇二、子 長之介。
一〇三、川村藤兵衛。
一〇四、川村傳左衛門。
一〇五、松島兵大夫。
一〇六、子 孫八。
一〇七、松宮作太郎。
一〇八、松宮庄兵衛。
一〇九、松宮藤左衛門。
一一〇、子 松宮喜兵衛。
一一一、伊澤新左衛門。
一一二、嫡子 藤左衛門。
一一三、松井金十郎。
一一四、松井利右衛門。
一一五、松井勘八郎。
一一六、宮城對馬。
一一七、養子 宮城筑後。
一一八、宮城大藏。
一一九、子 六之助。
一二〇、水野次郎左衛衛。
一二一、水野數馬。
一二二、水野助之進。
一二三、養子 水野三郎兵衛。
一二四、嫡子 水野助三郎。
一二五、水野三郎助。
一二六、水野善左衛門。
一二七、水野治大夫。
一二八、水野佐右衛門。
一二九、子 萬之助。
一三〇、梶川市郎兵衛。
一三一、梶川小熊。
一三二、宮野平之丞。
一三三、宮野龜之助。
一三四、宮野覺左衛門。
一三五、宮部肥前。
一三六、養子 宮部九左衛門。
一三七、養子 宮部源大夫。
一三八、宮部清四郎。
一三九、水野五郎左衛門。
一四〇、水野六郎左衛門。
一四一、水野德兵衛。
一四二、宮部夫兵衛。
一四三、水野小右衛門。
一四四、水野左門。
一四五、水野甚五兵衛。
一四六、嫡子 甚大夫。
一四七、光技勘右衛門。
一四八、光技勘右衛門。
一四九、光技勘右衛門。
一五〇、養子 忠八郎。
一五一、三好又太郎。
一五二、三好久五郎。

吉備溫故秘錄卷之八十三(干城一二)目錄終

吉備温故秘録　巻之八十三（原本無巻数）

大澤惟貞輯録

干城　一二（原本干城一七）

祖父若原勘解由。若原監物處に委し、爰に記さず。

一、養子若原監物。実父は、中島越後にて御座候。一歳にて勘解由養子に参候。

勘解由母は、輝政様之間にて御座候故、幼少より大形は御城に罷在、無早晩武蔵守様へ御奉公申上候由。慶長五年一乱之刻十五歳にて御供仕、濃州岐阜へ御向被成候刻、川を越手に逢申候由。其身物毎卑下仕候故、委細之義、語不申候に付、首尾共に承知不仕候。播州へ御入国被遊候て五百石被下候。其後武蔵守様備前へ御移被成候間、御加増千石被下、侍組足軽被仰付候。備前より播州へ御入国被遊候刻、一倍之御加増被下、都合三千石拝領仕候。其節侍組足軽御増被仰付候。大坂両陣之御供仕候。江戸・大坂・尾張・名護屋・丹波笹山之御普請に罷越候。

実父中島越後。佐々陸奥守殿に奉公仕候。慶長五年一乱之節、信濃守殿御供仕、新加納川越之節、澤四郎左衛門・堤五郎兵衛越後共に二騎先陣仕、川之渡り上にて鑓を合せ、四郎左衛門・五郎兵衛両人は其場にて討死、越後は敵二人と迫合、敵にも手を負せ候得共、突伏られ、危所同勢川を越、敵二人堤へ乗上申に付、敵敗北いたし、助り申由に御座候。知行は度々加増取千七百石被下、士組預り居申、雲州にて病死。

二、丸毛左近右衛門。鉄砲頭、四百石、六十九歳。若原監物三男にて御座候。

少将様、父監物宅へ被為成候節、私五歳之時初て御目見仕候。寛永十二年春、少将様へ被召出候。同十九年、江戸平川口御普請、少将様へ被仰付候節、私も罷下申度旨願之通被仰付候処、加州より丸毛道和養子に仕度旨申越候へ共、被召出候て何之御奉公も不仕、他所へ罷越候義、非本意候間、参間敷と申、同心不仕候。然処、池田佐渡・池田出羽へ右之通物語仕候へば、少将様へ内々にて出羽御耳に達候所、加州へ参候へば、身上宜敷候間、罷越候へと御懇

之御意にて御暇被下、彼地へ罷越申候。

丸毛先祖書に、小笠原信濃守長清之玄孫小笠原彦次郎長氏之嫡子丸毛六郎兼頼より道和まで十一代にて御座候。則代々系圖所持仕候。道和、假名、兵部少輔政長と申候。

三、道和。

祖父丸毛兵庫助長住、嫡子三郎兵衛長隆。美濃國多藝郡木塚に居城仕、齋藤治部大輔龍興へ隨身仕罷在候。龍興家老安藤伊賀・氏家常陸逆心に付、龍興岐阜之城より鵜飼山へ取退被居候刻、氏家常陸大軍にて大垣より大塚へ取懸申候、兵庫三郎兵衛父子三百計之人數にて大塚より二十四五町被出、大塚之城廻には、近邊之地下人老若女童まで集、手々に鑓又は竹竿抔を持せ、鑓之様に見せ、城廻をくろめさせもろ原河原にて及一戰候處に、氏家丸毛無勢を知、平押に懸り、丸毛先手を追立候へども、二の手にて切崩、桑原仁介・小谷貝塚・稲葉右近抔、先を懸け、向敵を打取、悉追散得勝利申候。其後龍興、安藤氏家和談仕、岐阜へ歸城致され候。龍興より丸山父子ともに感狀、并爲加增知行所櫻井村・うわかた村・柏尾村・せいし村・高畠村・五日市場村・島田之郷・立歸村、都合八ケ村給り候由に御座候。龍興濃州沒落以後、信長公へ丸毛父子御奉公仕候。兩人共に度々武功御座候由。天長十年五月、權現様穴山梅雪御同道にて御上洛被遊候節、美濃路御通被成候。依て祖父三郎兵衛在所にて御馳走可仕旨、信長公より被仰付候、折節三郎兵衛義は瀧川左近殿爲見廻、關東へ罷越候に付、世倅兵部少輔、其節は甚七郎と申、八歳被成候を家來之者共召連罷出、御馳走申上候。權現様へ御目見仕候處、御腰物拜領仕候。穴山殿より長刀給由。

秀吉御代に三郎兵衛義所替被仰付、同國之内福塚と申所にて知行七千石之御朱印被下、在城仕候。大塚にては數代取來之所にて御座候故、知行高知不申候。三郎兵衛代に成、七千石之普代役勤申候に付、所替にて右之高被下候。收納は大に不足仕候由。慶長五年一亂之刻、三郎兵衛・兵部父子ともに石田治部少輔味方仕、居城を自燒いたし、大垣之城へつぼみ申候節、先祖代々將軍家より被下候御感狀、并家之重物、家來之者に持せ罷出候處、其者行方不知罷成、右之品失申候。關ケ原一戰之前、宇喜多中納言殿・毛利宰相殿勢州津之城へ被向候を、關ケ原表へ引入申度よし治部少輔被申候へ共、加々津・こま野の間、東國衆より被切、通路留り申に付、其段難成候處、三郎兵衛・兵部兩人國之案内存候間、隨分引入可申と申候。治部少輔被申候は、左候はゞ、頼可申は、敵相支於難義は、押て罷越之義は無用に候。則自分足輕大將熊谷勘解由、并に宇喜多中納言殿之家來宇喜

多土佐、是に居申候間、相添可申由被申候、島津兵庫頭どのも野郎どもへ可申付候間、先押立罷越候へと被申候。三郎兵衞申候は、忍罷通義に候間、手勢計にて可參と申候へども、兩人衆是非と被申候故、何れも召連、夜に入忍罷越、所々にて敵支申候へ共、打破罷通、兩大將衆關ヶ原表へ引込申候よしに御座候。合戰破候以後、三郎兵衞父子共、權現樣御憎之强御座候に付、影を隱し居申候。

其節御當家に居申若原勘解由義は、三郎兵衞聟にて御座候に付、父子共に勘解由を便り、播州に參、輝政樣御威光を以て、深く忍罷在候。大坂御陣以後、板倉伊賀守殿御執成を以、世間廣御赦免被成候。右の品々道和申聞承候。三郎兵衞義は、追付病死仕候。

兵部義は、法體仕、名を改道和申候 松平肥前守殿浪人分にて被召出候處、知行二千石の所付可給由、內證有之候へば、道和義は、浪人分に被召出候間、所付は拜領仕間敷由斷申、蔵夫家老横山山城達て異見仕、知行被申付候、而も浪人分にて候間、折紙頂戴仕候へと申に付、其通に仕候。右之仕合故、一代法體にて居申候。道和病死以後、私に跡目千石被申付候。過分に減、外聞如何と存候へども、加賀之家中養子の跡目多分減申候、其砌は養子跡目少も立不申者も二三人御座候に付、其分に仕罷在候。承應三年、不慮之仕合にて、浪人仕、備前に罷越候。私義御普代筋之者にて御座候故、他家をかせぎ申覺悟にて無御座候に付、少將樣へ歸參之御訴訟申上度奉存候へども、御國洪水之砌にて、時節惡敷扣居申內、日置猪右衞門江戶へ御供罷越、在府之內小堀祖父彥左衞門方へ、私義加州へ歸參之願可仕と存候はゞ、丹羽平右衞門どのへ賴可然候、平右衞門殿への傳無之候て、自分可致才覺由申來候、如何可仕哉と、彥左衞門申聞候、私義加州之家中新參者にて候へば、家を慕歸參を願申義、同心に無御座候間、右之才覺は仕間敷候、時節を見合、御家へ被召出被下候樣に申上度念願御座候由申候。

其後萬治二年、少將樣へ被召出、二月十五日、御禮申上候。御藏米三百代被下候。寬文二年十月十五日、四百石拜領仕候。若原監物組之組頭被仰付候。延寶元年九月二十一日、足輕二十人御預被成候旨、御直に被仰付、其上を悴才之助被召出候旨、以池田大學被仰渡候。

四、子儀兵衞。 寬文元年三月三日、十四歲にて御目見仕候。同年、侍從樣にも御目見仕候。

五、正木大膳亮時堯。 安房國里見安房守義賴次男にて御座候、

附箋
○下略、元和八年六月十九日、忠義卒去の後、嗣堯因幡鳥取に移ることに係る。

里見家以前房州一國之領主にて御座候へ共、次第に隣國切取、義賴代には上總一國・下總半國押領仕候よし。其刻里見一家之正木大膳遺跡斷絶仕候に付、義賴二男時堯を以て正木之名跡を續、於上總國五萬石致知行、同國小田喜に居城之由、義賴嫡男里見安房守義康代に、秀吉公より關東御征伐之節、銘々本領計領知仕、切取被申抽領之地は、一等に被召上候に付、義康も上總・下總差上、安房一國領知仕候由に候。其後關ケ原陣之前に權現樣へ義康御忠節之義申上候に付、條々之御懇意にて常陸國於鹿島郡三萬石御加增被下、都合知高十四五萬石拜領仕候由承及申候。其時分大膳亮に義康領知十分一分知仕致知行、江戶・駿府へも致參勤候よし。義康病死、子息里見安房守忠義家督無相違相續仕候處、慶長十九年九月九日、お江戶上使を以被仰渡候は、常陸之內行方郡へ所替被仰付候由、忠義は江戶に罷在候へば、妻子家來之者共、房州より行方郡へ罷越申覺悟にて、鹿島郡にて罷出候へば、行方郡にては無之、伯耆國へ被遣候よし、上使を以被仰渡、忠義、幷妻子共に伯州倉吉へ罷越、於彼地三萬石被下、伯州に蟄居仕候。其際大膳亮者駿府參勤仕罷在候へば、是又忠義一所に伯州へ被遣候趣、上使を以被仰渡候、妻子共に伯州倉吉に罷越申候。大坂御陣落居已後、大膳亮は妻子共に駿府へ御召返、權現樣御他界以後、元和三年、江戶に被召寄、櫻田に大膳亮屋敷有之候。[附箋]有之屋敷に六ケ年罷在、元和八年六月十九日、於伯州忠義病死之後、大膳亮殿中へ被召出、少將樣へ御預け被成候間、因幡國へ可參候由、御老中被仰渡、元和八年十一月二十六日妻子共、因州鳥取へ參着仕候。前後之委敷義は不存候。其刻、少將樣御若年に被成御座候に付、日置豐前於江戶御城へ被爲召、酒井雅樂頭樣・土井大炊頭殿被仰渡候は、大膳亮義、御預け被成候間、迷惑不仕候樣に、後々に仕置可申之趣、被仰聞候由、於因州少將樣より御合力米每年本俵二十俵づゝ被下、御懇意に被遊候よし。寬永七年六月二十日、病死。

六、正木甚十郎。　寬永七年九月、繼目之御禮申上候。每年爲御合力米本俵八百五俵づゝ被下候。正保元年三月二十日、於備前病死。

七、正木主計。　正保元年八月十八日、繼目之御禮申上候。甚十郎に被下候御合力米本俵八百五俵無相違、年々拜領仕候。

寬文二年九月十五日、於御城被仰渡候は、翌朝に致登城、御目見仕、御鷹野之御供相勤可被申由、被仰渡て、同年十月十五日、新地千五百石被下、寄合組に被仰付候。同九年三月二十二日、御番頭役被仰付、延寶五年七月十五日、御足輕二十人被仰付候。主計義實子無御座に付、宮城大藏末子私を養子に仕度由奉願候處、延寶六年五月二十日、願

之通被仰付候。主計養、延寶六年六月三日、於岡山病死。御法之通御組足輕差上申候。

八、養子正木源太兵衞。寄合組、千石、二十七歲。

延寶六年五月二十一日、侍從樣へ初て御目見仕候。同年八月三日、跡目千五百石之內千石被下、寄合組に被仰付候

九、正木權七。正木甚十郞三男にて御座候。

承應三年九月五日、侍從樣へ權七御兒小姓に十六歲之時被召出、本俵五十俵五人扶持被下候。寬文七年九月二十五日、新知百五十石被下候。同十年、五十石御加增被下、御步行頭に被仰付候。延寶二年十一月十五日、御加增五十石被下、同五年八月二日、御簡略に付、御城法御赦免、御步行頭役御免、組外に被仰付候。貞享元年十二月八日、與ゝ風亂氣之躰に見へ申候に付、御知行被召上。

一〇、正木淸吉。宮城大藏組、百俵五人扶持、七歲。

貞享二年十二月十三日被召出、百俵五人扶持被下候て、宮城大藏組へ被仰付候。

一一、水野彌右衞門。

信長公之御時、坂井越中守處に罷在、度々心馳仕候由。知行二百貫給候。信長公御傷害之時、越中守於京都討死仕候に付、其後松浦讃岐守殿に浪人分にて罷在候。

讃岐守殿死去之後、又浪人仕、大坂に罷在候處、慶長十年輝政樣へ被召出、六十俵五人扶持被下、明石之御城に被爲置候。同十七年、病死仕候。

一二、松浦七郞兵衞。松浦伊豫守殿に三百石給り、其節は三右衞門と申候。

關ケ原御陣之時分、大津之城を伊豫守殿攻被申時、慶長五年九月十三日之未明に、諸手一番に堀をこし、旗三本堀へ付け、松浦伊豫守內松浦三右衞門と名乘、日の出迄堀越に戰申候、矢狹間より鑓を突申候、城中よりも鑓を突出し申候、鑓鋒四尺程を三右衞門引折申候、諸手堀を越候へば、敵本丸へ引取申候。如斯戰申內、伊豫守殿鐵砲に中り討死被遊由。

同六年、輝政樣へ被召出、三百石被下候。其後御加增被下、都合六百石被下候。武藏守樣慶長十八年十一月七日、六

百石之折紙被下候。寛永十九年、隱居被仰付、隱居料十人扶持被下、道入と名替申候。正保二年十月十一日、七十四歳於備前病死仕候。

一三、松浦七郎兵衛。

少將樣へ寛永九年被召出、同十一年、四十俵五人扶持被下候。同十九年、家督無相違六百石被仰付候。御奏者役、并母衣被仰付、御城詰仕候。年月不存候。其後病氣に罷成、御願申上御斷免被成、池田藤右衛門組頭役被仰付候。寛文六年十一月四日、五十歳病死。

一四、養子松浦次郎八。土肥飛彈組頭、四百石、四十三歳。土肥左吉次男にて御座候。

十五歳明暦三年冬、侍從樣へ御兒小姓に被召出、五十俵五人扶持被下候。寛文三年、松浦七郎兵衛方に養子に被仰付候。同六年、御兒小姓御免被成、奥中小姓に被仰付候。同十一月四日、養父七郎兵衛病死。同七年二月五日、跡知四百石被仰付、池田藤右衛門組に御入被成候。同十一年十二月十七日、學校御用被仰付、延寶元年十一月二十三日御免被成、延寶六年十一月十三日、於江戸御直に土肥飛彈組頭被仰付。天和元年十二月四日、代所より之御使者肝煎可仕旨被仰付候。

一五、江良三大夫。佐々陸奥守殿に罷在、六百石被下候。其後浪人仕、病死。

一六、松尾治部左衛門。松平讃岐守殿に罷在、三百五十石被下候。其後浪人仕、於備前病死。江良之氏、松尾に成申義、不存候。

一七、松尾助八郎。小姓組頭、三百石、六十一歳。

承應三年二月被召出、三月朔日、御禮申上候。二百石被下候。萬治元年十二月二十八日、大小姓に被仰付、役知百石被下候。寛文十二年九月二十七日、大小姓組被仰付。

一八、子右衛門八。延寶二年二月朔日、御目見仕候。

一九、松尾助九郎。宮城大藏組、四十五俵五人扶持、十六歳。

天和三年十月二十三日、侍從樣へ御兒小姓に被召出、四十五俵五人扶持被下、蕃山右七郎組へ被仰付。貞享二年八月四日、御兒小姓役御免被成、宮城大藏組に被仰付候。

二〇、薄田淸右衛門。（織田有樂殿にて百五十石被下候。）

二一、薄田三郎左衛門。（織田左衛門佐殿にて三百石被下、浪人仕。）

其後備後守樣宍粟御拜領之節、於江戶浪人分にて被召出、百五十石被下、初て御在府之砌、御先へ罷登、御町奉行被仰付候。寛文六年六月十八日、病死。

二二、薄田平七郎。（組外、二百石、五十二歲。）

寛永二十年十歲之時、於江戶侍從樣へ御六歲之時、備後守樣之肝煎にて被召出、十五俵五人扶持、御仕着にて御奉公申上候。其後十五俵御加增被下候。承應三年暮、十代御加增被下、御納戶被仰付、萬治二年、二十俵御加增被下候同年十二月十六日、新知百五十石被下候。同三年、御納戶御赦免被成、御數寄道具、幷御召具足御預け被成候。寛文二年九月八日、五十石御加增被下候。同五年十二月二十八日、御步行十人御預被成候。同十一年十二月二十八日、簡略奉願候處、御念比之御意にて、御納戶御銀二十貫目拜借被仰付、組外に被仰付候。

二三、子平四郎。

延寶四年三月二日、侍從樣へ御目見仕候。天和三年十月十五日、御雇御兒小姓被仰付、（名を平三郎と御替被成候。）貞享二年八月四日、御兒小姓御免被成候。

二四、俣野帶刀。　俣野新助。（宇喜多中納言殿に少知にて罷在候由。新助相果候時、市左衛門幼少故、委義不存候。）

二五、俣野市左衛門。

慶長十一年、備前にて武藏守樣へ御扶持切米にて被召出、御勘定御用被仰付候由。其以後本俵七十代五人扶持被下候。元和元年、大坂御陣之時、御米登り申に付、右之御用被仰付、大坂へ登り申候。寛永九年極月、新知二百石被

下候。翌十年正月朔日、御折紙被下候。同十八年八月朔日、四十九歲病死。

二六、俣野善內。組外、二百石、五十九歲。

寬永十四年二月朔日、於備前十一歲之時、御目見仕候。同十九年正月二十三日、跡目無相違被仰付候。明曆元年二月九日、赤坂郡奉行御直に被仰付、寬文五年迄十一年相勤申候。病氣に付御斷申上、同年七月十五日、御赦免被成候。寬文七年正月二十三日、赤坂郡御郡奉行被仰付、同十年八月二十七日迄相勤申候。同年八月二十七日、御勘定奉行御直に被仰付、御勘定御用相勤申に付、人使入申通被聞召上、延寶二年二月二十二日より忝御意にて、人遣代御米六十七代御扶持方五人半、每年被下、御簡略に付、同六年より四十四代二斗御扶持方三人六歩。天和二年正月二十一日まで、每年被下候。延寶五年七月十五日、段々忝御意にて借銀十貫四百六十目餘拜借仕候。同六年、侍從樣江戶に被成御座候節、少將樣爲御意閏十二月二十八日、御勘定御用相勤申內、銀札作廻上奉行被仰付、相勤申候。右之爲骨折切米六十俵づゝ、天和二年正月二十一日、每年拜領仕候。天和二年正月二十一日、御勘定御用銀札奉行御免被成、組外に被仰付候。

二七、子文七。萬治三年八月朔日、十一歲御目見仕候。寬文元年十二月朔日、侍從樣へ御目見仕候。

二八、俣野助一。岸藤右衞門組、二百石、五十四歲。俣野市左衞門次男にて御座候。

弓稽古仕候に付、慶安三年十月十四日、本俵二十俵兩年拜領仕候。同月十五日、少將樣へ御目見仕候 承應元年十月二日、中小姓に被召出、本俵四十俵四人扶持被下候。寬文十年八月二十七日、赤坂郡御奉行被仰付、同十二年十二月二十日、邑久郡へ御郡替り申候樣にと侍從樣被仰付候。延寶八年七月二十一日、御郡奉行御赦免被成、新知二百石被下、大坂御藏屋敷御留守居被仰付候。病氣に付大坂御用御赦免奉願候處、貞享二年十一月朔日御免被成、十二月二十五日、岸藤右衞門組に被仰付候。

二九、子善八。延寶八年閏八月朔日、十七歲にて初て侍從樣へ御目見仕候。

三〇、廣瀨十右衞門。方々渡り奉公仕候由。

其後武藏守樣へも御奉公申上候由。武藏守樣御卒去被成候節、新參井にて御暇被遣。後蜂須賀阿波守殿へ有付申候。名は處々にて替り申候よし。私若年之時、父果申候故、委細之義不存候。

三一、松井喜兵衞。

喜兵衞當歲之時分、母右十右衞門致離別、喜兵衞は母方へ引取候て退申候。母手前にて致成長候故、母方之氏松井に成申候。母事武藏守樣御代、御家へ御奉公罷出、備後守樣へ御乳を上申候。備後守樣御部屋住之時、喜兵衞義兒小姓に被召遣候。喜兵衞二十二三之時分、少心得違之義御座候て立退、京都へ參居申候。明曆三年六月二十日、於京都病死。

三二、松井七右衞門。 組外、十三人扶持、四十二歲。

父喜兵衞相果候後、長光院御詞を被添候て、寛文四年三月、備後守樣へ歸參被仰付、三十俵四人扶持被下、中小姓に被召仕候。寛文七年三月、江戶御留守番に參、江戶詰之內、御判紙奉行被仰付、且又豐前守樣御讀書之御指南被仰付候。同九年、新知百石被下、其年勘定聞被仰付。同年冬、新身之御脇指拜領仕候。同十年三月二十日、假橫目被仰付候。同十一年九月四日、備後守樣御遠去、同十月四日、和意谷へ御葬。延寶三年十一月六日、豐前守樣より五十石御加增被下、本橫目步行頭被仰付。宍粟落去之節まで相勤申候。同五年正月八日、豐前守樣御遠去被成、同六年極月二十七日、數馬樣御遠去被成、同七年六月、宍粟引取浪人仕候。同九年九月、於江戶少將樣へ被召出候間、備前へ參候へと池田左兵衞より佐々宇衞門と申者方まで被申渡候。宇衞門其節左兵衞迄申には、七右衞門義、隨分難有可奉存候、乍然七兵衞所存益原承置申候、御憐愍一偏にて御扶持被下候義は、不快奉存候、何分にも被召仕被下候はゞ、猶以難有御請可申上候。少將樣へ被召使候由、左兵衞被申渡候旨、宇右衞門私へ申聞候に付、難有奉存候旨、御請申上、同十月、御當地へ伺公仕候處、十三人扶持被仰付候。其節江戶にて之趣、左兵衞迄御斷上候へば、以來少將樣へ可被召仕候、先其分にて罷在候樣にと池田大學被仰渡候由、左兵衞より被申渡候に付、難有奉存候、御請申上、同月二十八日、侍從樣へ御目見仕候。

三三、松田與右衞門。 五歲にて父に離、流浪仕、織田常眞殿內丹羽勘介處に罷在、其後浪人仕。

參河へ參、八田彌三右衞門賴、慶長十年、於備前武藏守樣へ被召出、二百石被下、大坂兩陣御供仕候。

三三、養子松田與三右衞門。

大阪籠城之時、四五歳計にて、乳持に被連退申候を、石黒久兵衞取者に仕、播州へ參申候處、芳賀民部貰養育仕、其後與右衞門養子に成申候、右之仕合故、其方不存候。

寛永十年二月二十一日、與右衞門於備前跡目無相違被下候。正保三年十月十九日、病死

三四、松田三右衞門。上阪外記組、鐵炮引廻し、二百石、五十一歳。

同十一月二十九日、跡目無相違被下候。延寶六年十一月、丹羽平大夫組之御鐵砲引廻被仰付候。

三五、子夫助。　延寶二年三月十五日、九歳にて侍從樣へ御目見仕候。

三六、松原平右衞門。

幼少より勝入樣へ被召出候。花熊御陣之刻、一番乘仕、手も負申由。御知行六十石被下、其後御加增被下、二百石に五人扶持被下候。

三七、松原彌平次。

輝政樣に被召出、十八歳にて關ケ原御供仕、御川越之刻、振を御覽被成、忝御意共御座候て、其後御新知百五十石被下候。

三八、松原助左衞門。

三歳之時、彌平次相果、御知行被召上候。其後曾祖父平右衞門病死、此跡目六十五石助左衞門十歳計之時被仰付、其後鈴木登之助方へ養子聟に被仰付候。世悴二人出生仕候故、御斷申上、孫一人登之助方へ遣し、別家に罷成、御奉公申上。實父跡目に奉願候由、寛永十四年、百石被下、都合百六十石被仰付候。小身にて人馬所持仕候。爲御褒美御銀兩度拜領仕候。御小姓組にて江戸御供に度々參候。御鐵砲御藥込役被仰付候。大筒御用に被仰付候。以後病氣に付、御斷申上、御赦免被成池田藤右衞門組に被仰付候。主稅樣御組御鐵砲引廻し役被仰付候、其後稻葉四郎右衞門組にて右之役被仰付、相勤申内、學校御横目役に被仰付候。延寶二年二月五日、病死。

三九、松原初六。（マヽ） 水野三郎兵衛組、鐵炮引廻、百六十五石、五十歳。

慶安元年、少將樣へ御目見仕、同二年二月二日、御兒小姓に被召出、十五石に四人扶持被下候。萬治元年、中小姓に被仰付候。延寶元年十一月、御小姓役御免、稻葉四郎左衛門組に被仰付候。延寶二年三月二十八日、跡知百六十五石無相違被仰付候。同四年、御備略之節、人馬所持仕に付、十一月八日、難有御意にて高扶持被下候。同五年十二月二十八日、水野三郎兵衛組に被仰付候。

四〇、松本庄左衛門。

於姫路輝政樣へ被召出、三百石被下候。御折紙は慶長十八年十月六日被下候。大坂冬陣之節、池田越前組にて、攝州尼崎城に越前一所に罷在候。夏陣之節は、武藏守樣御供仕候。元和四年十月二十一日、病死。

四一、松本金右衛門。 元和五年正月元日、跡目無相違三百石被下候。延寶六年五月二十六日、病死。

四二、松本庄大夫。 山崎大膳組、鐵炮引廻、三百石、三十六歳。

同八月三日、跡目無相違三百石被下、御折紙は七年六月十五日被下候。 同七月二十九日、御小姓役被仰付候。同十一月十八日、願之通御小姓役御免被成候。天和元年十一月十一日、山崎大膳組に鐵炮引廻被仰付候。

四三、丸山河內。 播州赤坂殿之家從にて、同國青山を居城に仕居申候由。秀吉公播州へ御入被成候刻、滅亡仕候由。

四四、丸山九右衛門。 後、太郎大夫と改申候。

若狹少將殿に罷在、町奉行役仕、其後仕置を被申付候由。慶長二年三月十六日、士四人上方へ立退申候を、同十八日、九右衛門追手に被申付、即時に罷出、三日夜より歩にて山づたひに追かけ、其日鞍馬の天瀨と申處にて追討、右之四人後道具抔（マヽ）退候を九右衛門鑓にて四人共に打取罷歸候、其節加增給候由。其後三好又左衛門と申强力之者不屆之儀有之候に付、仕手に被申付、是も打留申候、其節も加增給候由。關ケ原陣以後、若狹少將殿身上つぶれ申候に付、浪人仕、金吾中納言殿にて五百石・歩行者百人預り、大横目役仕、中納言死去之後、浪人仕候。

慶長八年九月、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。同十九年・元和元年大坂陣之御供仕候。慶長三年十一月、御鑓奉行被仰付、此節太郎大夫と名替り申候。明暦二年九月、隱居被仰付、五人扶持被下候。寛文五年九月三日、九十三歲病死。

四五、丸山平右衞門。後九右衞門と改申候。

明暦二年九月九日、家督無相違二百石被仰付。此節九右衞門に成申候。延寶二年十一月十二日、土肥飛彈組御鐵砲引廻被仰付同六年在鄉候、簡略奉願、引廻役指上申候。同七年十二月二十七日、六十八歲病死。

四六、丸山又左衞門。土肥飛彈組、二百石、三十一歲。

寛文元年三月三日、少將樣へ七歲にて御目見申上候。延寶八年二月二十八日、跡目無相違二百石被下候。

曾祖父。名覺不申候。勝入樣へ御奉公仕、百五十石被下候由。

四七、前田安大夫。

參河より播州へ御國替之時、百石御加增被下、都合二百五十石拜領仕候。關ヶ原陣之時十四歲にて世悴不被召連、御跡より罷在申候處、□（マヽ）や御陣屋にて路次にて御目見仕候由。大坂御陣には瀧川出雲組にて罷越候由。

四八、前田段右衞門。

跡目無相違被仰付候。承應三年、邑久郡御代官被仰付、寛文三年正月まで相勤候。同年正月より邑久郡郡奉行被仰付、同六年、病氣に付、御斷申上、十二月御免被成候。同二十日、病中亂心仕候。三十三歲にて果申候。

四九、前田安大夫。丹波守樣附、百五十石。

寛文七年二月被召出、百五十石被仰付候。同十二年九月十七日、丹波守樣へ御附被成候。

五〇、前田平六。池田左兵衞組、四十七俵、四人扶持、三十四歲。

寛文六年、十五歲にて少將樣へ御兒小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。天和三年閏五月十四日、池田左兵衞組に被仰付候。

五一、三吉出羽。　三好出羽。根木落去之時、討死仕候由、

五二、松田角右衛門。　青木右衛門佐殿に二百石給居申候。其後羽柴中納言殿へ慶長三年罷出、三百石被下候由。

慶長八年武藏守樣へ被召出、二百五十石被下候。大坂兩陣御供仕候。承應元年八月七日、病死。

五三、松田又之丞。　池田七兵衛組、二百五十石、五十八歲。

寬永三年、十六歲にて御目見仕、承應元年七月、中小姓に被召出、同年、跡目無相違二百五十石被下、伊庭主膳組に被仰付。

五四、子彌市郎。　寬文七年十一月十五日、十二歲にて御目見仕、同八年五月十五日、侍從樣へ御目見仕候。

五五、馬淵四郎右衛門。

宍戸備前殿に少知給居申候。高麗陣にも兩度參、心馳も仕候由。依て感狀爾今御座候。其後池田美作方に浪人分にて居申、寬永十九年閏九月二十五日、病死。

五六、馬淵作野右衛門。　內藤甚之丞殿に百石給居申候。其後池田美作方に少知取居申。延寶六年十月二十九日、病死。

五七、馬淵十左衛門。

明曆二年九月十三日、侍從樣へ御步行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下候。萬治三年正月、十人組に被仰付、本俵五俵一人御加扶持被下。延寶元年十月、中小姓に被仰付、十一俵御加增被下、都合今俵五十俵四人扶持被仰付、澤權大夫組に被仰付。天和元年十二月十一日、病死。

五八、馬淵十左衛門。　池田七郎兵衛組、四十五俵四人扶持、十四歲。

延寶八年二月十五日御目見仕、天和二年二月二十三日、跡目四十五俵四人扶持被下、池田七郎兵衛組へ被仰付。

五九、眞野喜兵衛。　武藏守樣備前御入國之年被召出、二百石被下候。寬永十一年八月十一日病死。

六〇、眞野喜兵衛。

跡知無相違二百石被下候。延寳元年九月、江戸御留守御番に參候處、江戸にて煩申候に付、御國に歸養生仕候へと被仰付、罷歸候。道中鳴海にて十月二十三日、病死仕候。

六一、眞野權八郎。宮城大藏組、二百石、二十五歲。跡知二百石無相違被下候。宮城大藏組に被仰付。

六二、平井加賀・平井備中。父子ともに江州佐々木家に奉公仕候由、於同所病死。

六三、玉川伊豫。

佐々木滅亡之後、京都に罷在、其後信州川中嶋へ參、眞田伊豆守殿に浪人分にて罷在候。伊豆守殿留守之時分は、松城之城を預り罷在候由。於同所病死。

六四、嫡子玉川織部。

家老役被申付、千石被下候。古伊豆守殿死去以後浪人仕候。世伜玉川猪右衛門と申、紀伊中納言様に居申候に付、今程は和歌山へ罷越居申候。

六五、牧野彌次右衛門。玉川伊織末子にて御座候。幼少より織田上野助殿御内小幡次郎左衛門と申者之養子に成申候。

其後同盛院様に被召仕候女房霜義、彌次右衛門伯母にて候故、寛永十年、少將様へ被召出候。其節大坂久貝因幡守殿組之與力牧野平左衛門と申者、御存知之者にて、彌次右衛門不通者に付、平左衛門子分に仕出し候へと被仰付、平左衛門養子に成候て、牧野平四郎と申候。五十俵五人扶持被下、御兒小姓に被召出候。寛永十九年、侍從様へ御附被成、前髪を取、五十俵五人扶持御加增被下、都合百俵十人扶持に被仰付、御納戸奉行、其後御取次役相勤、十六年、定江戸御奉公仕候よし。慶安三年二月十一日、新知二百石被下、明暦三年十月、侍從様初て御入國之御供仕、備前へ罷越候。翌年、江戸へ御供仕、江戸聞番役被仰付、二百石御加增被下、其後足輕十人御預け被成候。外に裁判組之足輕十人御預被成。延寳二年二月、江戸聞番役御免被成、裁判組御足輕十人を本組に被成、以上二十人御鐵炮頭被仰付、同十一月十一日、五十石御加增被下候。天和二年七月晦日、病死。

六六、牧野龜之丞。伊木頼母組、三百石、十六歲。

延寶六年正月五日、侍從樣へ御目見仕、天和三年九月二十七日、跡目三百石被下、伊木賴母組に被仰付。

六七、丸山次郎大夫。丸山九右衞門子にて御座候。

寬永二十年被召出、本俵三十俵三人扶持被下。萬治元年、十五代一人扶持御加增被下、都合六十二代四人扶持被下

寬文九年九月二十八日、四十九歲病死。

六八、丸山彌一郎。伊木賴母組、六十二俵四人扶持、三十四歲。

同九年、跡目無相違被仰付候。御小姓組にて勤申候。延寶五年八月九日、伊木賴母組に被仰付候。

六九、松井加賀。松平周防守殿曾祖父松平金四郎弟にて御座候。

七〇、松井右近。

七一、松井內藏之助。周防守殿家老職仕、知行千石給候て病死。

七二、松井善兵衞。

先祖より之通、家老職仕、知行千石給罷在候處、加役御座候て延寶八年浪人仕、安藤丹波守殿知行所上州高砂惣社村に罷在候

七三、松井平四郎。伊木賴母組、六十俵四人扶持、二十歲。

安藤九郎左衞門殿被申上、於江戶信濃守樣へ延寶九年二月二十八日被召出、信濃守樣御言葉を被添、於備前天和二年二月九日、侍從樣へ被召出、同十一日御目見仕、伊木賴母組に被仰付、六十俵に四人扶持被下候。

七四、松村傳兵衞。

於參州輝政樣へ被召出、五十俵五人扶持被下。慶長八年、武藏守樣備前御入國之御供仕、於備前御長柄五十人御預け被成。大坂兩陣御長柄之者召連御供仕候。寬永五年正月二十六日、大御所樣御產所御賄方被仰付、五十代五人扶持御加增被下、都合百俵十人扶持被下候。在江戶十三年相勤。寬永十七年、於江戶相煩、備前へ罷歸、同年九月四日、病死。

七五、松村兵左衞門。

傳兵衛跡目無相違被仰付、寛永十八年、傳兵衛相勤申候御賄方之御用其儘被仰付、（在江戸十六年相勤。）明暦二年、御用御免被成、備前へ罷歸、在江戸御赦免に付、御加增之切米扶持差上申候へば、明暦二年九月九日、新知百石被下候、勝手不如意に付、在宅奉願、私代まで爾今在宅仕、御城御番は在所より勤申候。寛文七年二月十八日、六十三歳病死。

七六、松村傳三郎。（浮組、百石、四十三歳。）　跡目無相違百石被下、寛文十年三月朔日、御禮申上候。

七七、子虎之助。　天和元年十月二十八日、八歳にて御目見仕候。

七八、松村八右衛門。（松村傳兵衛二男にて御座候。）

寛永六年、於因州御歩行に被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、同八年、御手廻歩行に被仰付、本俵五代御加增被下。同十年、御歩行横目被仰付。萬治元年、中川佐渡守樣御奥樣へ御附被成、中小姓に被仰付、本俵三十俵三人扶持御加增被下、都合今俵九十俵七人扶持被下候。寛文九年十月二十六日、五十七歳病死。

七九、松村八郎左衛門。（山脇傳内組、四十代四人扶持、三十五歳。）

跡目之内四十代四人扶持被仰付、中小姓被仰付、弟松村甚助に三十俵三人扶持被下、御歩行に被召出、殘り二十俵被召上候。延寶五年八月九日、御小姓御免被成、山脇傳内組に被仰付候。（甚助義、伯父六左衛門次男にて御座候。私弟分に八右衛門養置申候。）

八〇、松井九郎兵衛。（宇喜多中納言殿に少知被下居申候。）

八一、松井九郎兵衛。（宇喜多中納言殿に少知被下居申候。其後戸川肥後守殿にて少知被下居申候得共暇申、浪ノ仕、當國福山村へ引込、病死。）

八二、松井加七。（浮組、四十七俵四人扶持、六十七歳。）

前廉伊庭左京所に罷在候、暇申請候。

萬治元年二月八日、侍從樣へ被召出、本俵二十五俵四人扶持被下、小十人に被仰付候。同三年、御小姓組に被仰付、寛文二年、本俵五代御加增被下、今俵四十七代に四人扶持被下候。同四年、御願申上、御小姓組御免被成、御圖書組に被仰付候。（私儀被召出候より當年まで二十八年御奉公申上候、病氣に罷成、諸事失念仕候、存出之分、書上申候。）

八三、子三七。　天和元年十月二十八日、十一歳にて御目見仕。

八四、丸毛帶刀。　吉見正頼府に罷在、知行二百貫取申候由。

八五、丸毛藤左衛門。

家督無相違被申付。慶長五年、關ケ原陣に討死仕候。數々心馳も御座候由に候へ共、七兵衛幼少之時、藤左衛門に離申候故、委細不存候。

八六、丸毛七兵衛。　幼少より酒井出羽守殿に奉公仕、四百石給、兒小姓役勤申候。大坂陣之節、甲付之高名仕候由。

元和九年七月、駒井右京殿御肝煎にて御當家へ被召出、則先知之通四百石被下候。明暦四年六月二十九日、病死。

八七、丸毛本右衛門。　上坂外記組、四百石、四十一歳。

十四歳之時跡目被仰付、無相違四百石被下、十月朔日、御禮申上候。寛文十年十二月朔日、學校御用被仰付、十三年七月十六日、御免被成、少將様より白銀五枚被下候。

八八、子平六。　寛文十一年正月十五日、十歳にて少將様へ御目見、翌年、侍從様へ御目見仕候。

八九、淺井小六。　淺井信濃守と從弟にて御座候。花市場と申所にて知行二百貫取申候由、心馳も御座候由に候へども、確と不存候。

九〇、淺井勝左衛門。　後、正木甚左衛門と改。

淺井信濃守に兒小姓居申候。伯父淺井五郎三郎と申者之跡三百貫と、さき村と申候にて取居申候。其時淺井今平と申候。其後正木甚左衛門と申候。信濃守所に居申候時、伊賀陣にて先手へ夜番に士二人出候處、折節敵方より夜打出申時、一人は番所を捨退申候、甚左衛門一人殘り、橋之上にて鑓合申候、夫より敵引取申候由。其時甚左衛門右之指を三つ鐵炮にて打きられ申候二十歳計之時、みよし小田原陣之時も、手に逢申候由。其外心馳數度有之由に候得共、確と不存候。淺井信濃守病死之時、遺言にて子息田宮丸に甚左衛門を附申候。其時御本城より田宮に切腹被仰付候に付、浪人仕、織田常眞公へ被召出候へども、無據立退、會津蒲生飛彈守殿へ蒲生源左衛門・同忠右衛門肝煎にて被召出、知行四百石被下候。奥州之内めうの城攻之時、忠右衛門一所に罷越、甚左衛門早く城へ乘、高名二度仕候由。其時忠右衛門弟谷崎彌八郎と申者と甚左衛門とに鐵炮二十五人宛被

申付、奥州鹽の松と申城、忠右衛門と一所に罷在候。同國あなたいと申城攻之時、一番乘仕、城之内にて高名仕候を、蒲生忠右衛門も高みに居申候て見申、其時甚左衛門馬を乘殺候を、忠右衛門是をも見申候故、乘替之馬をひかせ越、急此馬にて氏郷之御前へ參候へと申由。此時も手負申由。同國くのへい城攻之時も早々乘、高名二度仕、二度目組打仕候處、渡り八右衛門と申者に首を奪はれ候。其首渡り八右衛門氏郷之前へ持候て罷出候を、甚左衛門も一所に罷出、斷申候へば、氏郷被仰候は、甚左衛門申上候迄も無之、氏郷直々組打之樣子御覽被成候とて、其首を甚左衛門に被仰付候よし。此時も手負申候。其外仕候者抔被申付、首尾能事も御座候由。蒲生飛彈守遠行之後、越後へ參、堀左衛門督殿へ罷出、知行四百石、母衣被申付候。其後三度に三百石加増、都合七百石取申候。

九一、正木傳右衛門。

十三歳にて堀左衛門督殿御息越後守殿側に被召仕候。百俵十人扶持給申候。

越後守殿身上果候て、御籠中江戸へ御越之時、士十一人供仕罷越候。甚左衛門其内にて參候。右十一人は、上總守樣へ可被成候、權現樣御意之由、堀丹後守殿有之者へ被申渡候處、甚左衛門は丹波守殿に斷申、浪人仕候。其後丹後守殿、藤堂和泉守殿へ知行千五百石・鐵炮二十挺之御約束にて相濟候間罷越候へと、丹後守殿被申渡候處、甚兵衛門同心不仕候。内々蒲生源左衛門申候は、輝政樣へ數年御約束申義も有之候間、左樣心得候へと申聞候時、蒲生源左衛門に甚右衛門申には、我等身上何程にて可被召置候哉と尋候へば、先年福多左衛門大夫殿へ御約束遣候佃又右衛門其方如右には七百石取申候を、右衛門一人殿には二千石鐵炮三十挺被仰付候。其並に存候へと申候に付、望之家に候へば、和泉守殿之方、丹波守殿へ斷申候。

輝政樣名護屋御普請に被成御座候時、蒲生源左衛門方より若原右京所迄、飛札にて申候處に、輝政樣へ右京申上候へば、下方角兵衛と縁類之義有、よし、左候はゞ備前へ直に罷越候へと、御意之由、右京より源左衛門方へ返事仕候に付、慶長十四年備前へ罷越、同十六年春、播州へ被召寄、正木勝左衛門被召御目見仕候。同十七年、七百石御折紙被下候處、則御折紙若原右京へ預け置、御斷申上候へば、輝政樣御意只今御心付被成候へ共、新參之士多被罷置候、余人之申分にも可成候間、今一兩年堪忍仕候へ、殘々は御加増可被成と、右京に被仰付候由、御意之由右京申聞候故、其分に仕居申候。輝政樣御卒去被成後、左衛門督樣備前へ可被召運よう安養寺佐渡承候て被仰渡候處、其後武藏樣より荒尾但馬承候て下方覺兵衛・中村喜内も御家中に罷在候間、勝左衛門にも播州へ罷在候樣にと、御意之通但馬申聞候に付、尤義と御請申上、播州に罷在候刻、慶長十八年、七百石御

折紙被下候。同十九年、江戸御普請に參、其暮、大坂御出陣被成候に付、江戸より罷上、西之宮にて御目見仕候へば、香西縫殿助・番大膳御使にて、御旗被仰付、夫より直に御供仕、大坂へ參候。元和三年、因幡へ御國替之御供、同四年、少將樣より七百石御折紙被下候。

元和四年暮、傳右衛門に百俵に十人扶持被下候。其後勝左衛門御暇申上候處、日置豐前・土肥飛彈・丹羽山城・土倉市正申候者、御加增可被遣候へども、余人之引付とも成候間、此度之御加增を思召、世倅傳右衛門に知行可被下と、御意之由にて御留被成候。同六年、二百石御折紙傳右衛門頂戴仕候。曾祖父勝左衛門寛永九年五月於因幡七十三歲病死。御國替に付、御當地にて跡知被仰付、同十年、七百石御折紙傳右衛門頂戴仕候。御旗、并白分之二百石差上申候。

九二、嫡子甚右衛門。十二歲五百石、二男清兵衛二百石、被仰付候。其後甚右衛門十四歲慶安元年病死。跡絶申候。

九三、正木清兵衛。

寛文八年十一月晦日、學校御用被仰付、翌九年秋まで相勤、病氣に付御斷申上、御赦免被成候。同十年十一月十五日、二十八歲病死。

九四、正木文助。岸藤右衛門組、二百石、十八歲。

寛文十一年正月十三日四歲之時、二百石無相違被下候。貞享元年二月四日、岸藤右衛門組に御入被成候。

九五、牧野傳藏。

父之讎御座候て方々ねらい、十六歲にて父之讎石川隼人佐と申者を打取、伊勢之長島に引込罷在候。其以後瀧川左近將監一益殿に被召出、近習に被召使。其節朝倉義京と福山出張之刻、一益殿是と合戰之時、傳藏義京と鎗を合申よし。又一益殿勢州片岡之城を被攻候節、城中より人數罷出戰候處、傳藏鎗にて高名仕候由。此外勢州淺香之城・同大河内之城・三河長篠、其外越前勢と取合之節、又大坂勢天王寺之取出を攻候節、每度高名御座候よし。其後信長公坂口を御覽之時分、十河因幡守泉州堺に出張之時、傳藏懸向打取、其首信長公へ差出候由。播州神吉城にて一番に鎗合、又攝州有岡之城を攻候節、鵯塚取出にて鎗を合申候由。一益殿勢州長島之城一揆を被攻候節、香取大島度々懸合、一揆之首數多打取申候よし。天正十年春、一益殿於武藏野北條氏政と合戰之節、傳藏鎗を合、敵を突崩、一益殿勝利御座候由。歸陣以後織田信雄公に被召出、長久手合戰之時(高名)仕候由。

又蒲生氏鄕奥州妙城を被攻候節、傳藏信雄公より爲使者、先手に加り、高名仕、氏鄕大に感悅之由。元祿元年、信雄公之御姓韓長谷川藤五郎と申人と同心仕、朝鮮へ罷越、軍功御座候由。右藤五郎病死仕、歸朝之後、關ヶ原御陣之節、家來十人倫召連、藏中を切拔、輝政樣へ罷出申候。輝政樣、權現樣へ右之段被仰上、被加御不便、剃髮仕播州に罷在候由。慶長八年、權現樣爲上意、台德院樣へ於江戸御目見仕刻、還俗仕、本名傳藏に成申候。御上袴を被下、御知行三千石被下候。上意之上にて世倅を傳藏に被成、其身を牧野伊豫守に被成候。同十一年、御鐵炮同心五十人御預け、同十九年、五十九歳病死仕候。

九六、牧野守右衞門。（牧野伊豫守二男にて御座候。）

慶長五年、輝政樣へ被召出、御合力米被下候。慶長六年十一月三日、御知行五百石被下候。武藏守樣へ御附被成、備前御入國御供仕候。同九年十一月、百石御加增被下候。大坂兩陣御供仕候。寛永十年、少將樣御使番被仰付、同十八年、母衣被仰付候。萬治二年七月二十七日、願之通隱居被仰付、又兵衞に被下候五十俵十人扶持隱居料に被下候。寛文元年七月四日、七十六歳病死。

九七、牧野又兵衞。

寛永九年春、於因州少將樣へ御小姓に被召出、同十年正月より十人扶持被下候。同十二年霜月二十九日、御切米五十俵被仰付、承應三年十月、眞田將監組に被仰付。萬治二年七月二十七日、家督無相違六百石被仰付候。寛文十年八月二十八日、土肥飛彈組頭役被仰付、延寶四年卯月二十八日、御旗奉行、御直に被仰付。不行步に成、御斷申上候處、天和三年閏五月二十四日、願之通御免被成、寄合組に御入被成候。貞享二年極月六日、願之通隱居被仰付候。

九八、牧野與十郎。（水野三郎兵衞組、六百石、四十六歳。）

承應三年霜月十五日、十七歳御目見仕、貞享二年極月六日、家督無相違六百石被下、同極月二十六日、水野三郎兵衞組被仰付候。

九九、岩井九郎右衞門。（參州より備前へ參、芳賀内藏允方に居申候。慶長十八年病死。）

一〇〇、松田七兵衛。幼少より內藏允方に居申候、其時分松田に成申候。

寛永十一年六月、少將樣へ被召出、同十九年、三百石被下候。芳賀內藏允預り御鐵炮引廻被仰付、年月日失念仕候。萬治元年十月二十六日、病死。

一〇一、松田七兵衛。湯淺半右衛門組、三百石、四十四歲。

慶安元年、七歲にて御目見仕、萬治元年十二月二十八日、跡目無相違被下候。

一〇二、子長之介。　天和三年、八歲にて八月朔日御目見仕。

一〇三、川村藤兵衛。宇喜多安心に少知給居申候、家中不殘浪人仕候時、浪人仕、備前にて病死。

一〇四、川村傳左衛門。藤兵衛一所に浪人仕候。

少將樣因幡に被成御座、天久院樣も因幡に御座候。天久院樣御自分之御知行作廻方に被召出、寛永元年春、因幡へ引越申候。同九年、備前御國替御供仕、同十三年十二月二十七日、天久院樣御死去被成候。傳左衛門無別條、直々少將樣へ被召出、御步行組に御入被成候。翌年、川口福島村に新御藏出來、御藏奉行被仰付、引越居申候。其後岡山惣御藏奉行ども不屆之義御座候に付、御成敗、或者御役替被成、就ては傳左衛門御藏も加藤九左衛門・生駒八左衛門兩人不意に穿鑿被遂候處、毛頭子細無之候に付、御加增米七代被下、岡山御藏原六右衛門跡を被仰付、岡山へ引越申候。十一年御藏奉行仕、御赦免被成、御小人奉行被仰付、卯之年まで相勤、卯の十二月病死。男子二人御座候。惣領傳兵衛義は天久院樣御存命之內に、御意にてめうたつ養子に被仰付候。弘義は、前より被召出、御切米傳左衛門に被下候同事に御座候故、跡目上り申候。

一〇五、松島兵大夫。若原監物組、六十俵四人扶持、五十六歲。

慶安二年正月五日、二十歲にて御步行に被召出、同三年、御藏奉行被仰付、明曆三年、江戶御供に參、翌年罷歸、御加增八俵被下、御近習步行に被成。又御藏奉行に被成。辰の年迄十年相勤申候。　寛文四年御加增七俵被下、御横目役被仰付、同八年十一月二十七日、御小姓に被仰付、延寶八年六月十六日、御加增二十俵被下、

一〇六、養子 子孫八。水野安兵衛弟にて御座候。 天和三年極月二十九日、養子に被仰付、同晦日、御禮申上候。

一〇七、松宮作太郎。 亀井武藏守殿二百五十石被下、城をも預り申候由。病死仕候以後、子供知行分り（不）申候。

一〇八、松宮庄兵衛。 暇貰、久々浪人仕罷在候。

播州より御國替之節、横井養先申上候て少將樣へ被召出、御勘定場所御用相勤、本俵二十五俵三人扶持被下候、年罷寄候て片上御藏奉行被仰付、五俵差上相勤申候。明暦元年七月二十三日、七十二歳病死。

一〇九、松宮藤左衛門。 若原監物組、三十一俵三人扶持、六十二歳。

父跡目三十俵三人扶持被下候。御房樣御祝言之節、御加增四十俵三人扶持被下、都合七十俵六人扶持被下、中小姓に被仰付、在江戸相勤申候。私義江戸御赦免被成、御當地御簡略に付、御切米七十代六人扶持之内四十俵三人扶持被召上、只今三十俵三人扶持被下候。

一一〇、子松宮喜兵衛。 寛文八年霜月朔日、甲斐守樣へ被召出、三十俵三人扶持被下候。

一一一、伊澤新左衛門。

越前柴田沒落之後相果申候由、子兩人、氏を松井に替り、松井藤兵衛・同半十郎と申候。京都に罷在候。藤兵衛義、射手ゆへ大嶋治右衛門殿御怨にて備に付、伏見城攻之節、首一つ打取、其上城中より夜半過時分、寄手の勢見申とて、さげ明松指出申候を、寄手之内より大嶋治右衛門殿射落被申候樣子に御座候處、松井藤兵衛出候へと有之時、一往辭退仕候得共、達て被申候に付、大嶋殿にて明松振挙共に射落申候由。則治右衛門殿御見屆、從公儀銀子被下、大嶋殿狀も末孫取持仕候。其後金吾中納言殿へ被召出候、中納言殿御死去以後、池田備中守樣へ被召出、三百石弓之者御預被成候。其節藤左衛門と名替り申候。大坂御陣之時、備中守樣へ御打取被成候首御差上被成候御使者に被仰付、土井大炊殿迄御書、并首持參仕候。池田出雲守樣に罷在、病死。

一一二、嫡子藤左衛門と申候。跡目、并預り之者迄、無相違被仰付、出雲樣御死去被成、松山退散後、宍粟備後守

様へも被召出、二百石被下、御弓之者預り、宍粟にて病死。

一一三、松井金十郎。

兄藤左衛門にかゝり居申候處、浪人分にて十五人扶持被下候。出雲守様無御歸陣、御死去被成、松山退散、浪人仕、利右衛門にかゝり病死仕候。

一一四、松井利右衛門。 役小姓勘定、川村平太兵衛引廻七十八俵六人扶持、七十四歳。

寛永十五年四月二十四日、芳賀内藏允御仕置之時、片山孫兵衛組御勘定所へ被召出、十六俵三人扶持被下候。同十八年十一月、御加増二代被下候。正保三年八月、井上筑後守殿より備前一國・備中一國大繪圖上候御帳、郡地高一村宛村下に日損・水損松林・芝山朱にて假名を付候樣にと有之、大□(欠字)大□(欠字)村名難字に候、備前一國御帳三冊、備中同二冊上り御帳、公方様へ二冊、御老中様へ二冊、御扣帳共に六冊、其時之御祐筆野間平六郎・伊藤五郎左衛門罷出候へども、斷に付、伊木長門・池田伊賀より私に書候へと被申、御帳六冊書申。依之慶安元年暮、御加増七俵被下、同四月、松平對馬守様より土佐一國之内往還道筋、山道横道、灘道、山坂川深さ淺さ、小石道、砂道、海へ中船道之左へ(マヽ)、滿鹽・干鹽に何程かとの御帳、公方様へ御上げ被成候に付、備前・備中兩國御帳、土佐之國之通に調上候樣にと井上筑後守殿より申來由此御帳も書調申候。明暦元年二月二十五日、御家中人馬帳被仰付、書調申候。御加増三代被下。萬治二年十二月十六日、侍從様へ御附被成、御加増二十俵三人扶持被下、都合五十俵六人扶持に被仰付。

一一五、子松井勘八郎。 五十俵四人扶持、三十七歳。

寛文六年、父利左衛門在江戸にて罷在候時、浪人にて居申、其時分吉田久馬助殿弟子に成、弓稽古仕處、侍從様被聞召、的御覽可被遊由被仰付、於御前御的に三度罷出候。其節御的矢一手拜領仕候。

同七年二月朔日被召出、二十俵三人扶持被下、延寳元年、熊谷清八組御徒弓組被仰付、同七年十二月八日、御近習從に被仰付、九俵一人扶持御加増被下候。天和三年七月十五日、御弓組小姓に被仰付、御加増十代被下。

一一六、宮城對島。

近江佐々木家之幕下に屬し罷在候由、佐々木・淺井國爭之刻、度々軍功有之、八日崩之節も、能働御座候由。佐々木家近江淺落之刻、對馬江州立退、浪人仕候處、丹羽五郎左衛門殿へ御肝煎にて信長公へ罷出候由、ありふに城攻之刻、加勢に被遣候處、早く城中へ乘込、首打取申よし、其後秀吉公へ被召出、御知行一萬石、鐵砲三十挺、與力五人被仰付、御旗本に致勤仕候由。關ケ原之刻は、秀頼公より伊賀國上野之城に新府邊衛を被差置候へども、越前若狹に付、對馬を加勢に被遣候、籠城仕候處、從權現様御上使柳生又右衛門どの・多羅尾久八殿御越被仰渡候は、關ケ原御一戰、東國之御勝利、大坂も御和睦之上は、上野之城も明渡可申由、上意に御座候へ共、對馬申上候は、越前若狹に付、私罷在候義に御座候へば、大坂へ一往御斷不申内は、明渡申間敷と申請、大坂へ御届申、秀頼公任御下知、城明渡浪人仕、輝政様播州へ御入國被成候て、對馬播州へ罷越、鋳出津にて御屋敷被下、居住仕候。鋳萬津に居申内、伊木清兵衛を以、先知・組・御鐵砲を可被仰付候旨、御意に御座候へ共、色々御斷申上候處、武藏守様御入國被遊、對馬弟宮城兵衛御供仕罷越候に付、兵衛屋敷明して在之候間、姫路へ罷出、兵衛屋敷に居申、御噂等可申上之由御意に付、罷出候へば、則兵衛に被下候御知行二千百石を、扶持方に納候様にと被仰付、無役拜領仕候。其節對馬久眞召使候家來宮城五郎右衛門・同左兵衛・同清左衛門三人之者、輝政様へ御目見仕候由。慶長十六年二月二十七日、於播州病死。宮城氏・系圖、先年宮城主膳方より公方様へ差上申由にて寫差越し所持仕候へ共、永く御座候へば書上不申候。

一一七、養子宮城筑後。

慶長九年、輝政様御意を以右之對馬養子に被仰付、則聟に仕候故、對馬義、私爲に實は扶持方之祖父にて御座候。跡目無相違二千石被仰付。

・・・、筑後實父は、下間按察使法眼と申、本願寺門跡之家老にて御座候。門跡大坂籠城之刻、按察使法眼武功相增承及候通書上申候。天正四年四月十四日、大坂表へ信長公御人數を被寄候に付、門跡より福島之城に差置候下間侍從・同民部兩人籠城難成と申、城を明け大坂へ退來申に付、按察使に福島へ罷越籠城仕候へと門跡被申付候、故早々御請申、用意仕候、内々其夜亥の刻、福島近所海老江・野田を放燒申に付、按察使早速騎馬五騎にて福島之城へ懸入、堅固に持堅申候。其刻門跡より末若輩に候處今度福島持堅候段、無比類仕合と褒美に仕一之家老に被申付候。同年五月三日、荒木攝津守人數一萬餘にて、川を北より博勞之口へ越可申と仕候處、按察使福島より纔に手勢千計にて、忍にて川向へ罷出、荒木を川よりこさせ不申候。其刻原田備中守

附箋（朱書）宮城筑後（元和元四月へとる。

を打取申候、此時長雨降續、山崎より下は一面の川に成申に付、敵方之付城安田之城邊洪水候間、後詰来間敷と門跡被察、攻取申候刻、按察使福島之城より罷出、一番に城中へ乘込申に付、落城仕候よし。其外數度之軍功御座候由承候へ共、委義不奉存候。右之段池田内藏助物語にて承知仕候。下間氏系圖、先年内藏助より公方樣へ差上申由にて、寫差越所持仕候へ共、事永故書上不申候。

慶長十九年、大坂冬陣之刻、武藏守樣より番大膳御使にて攝津國尼崎へ加勢に可參之由被仰渡、筑後則御船にて參四十日計罷在、武藏守樣御出勢之刻、直に大坂御先手へ罷越、日置豐前一所之備に罷在候由。

翌年、大坂御扱破申に付、池田越前尼崎に籠城仕候。大坂より取懸可申模樣に御座候に付、筑後加勢參度と申上候へば、四五日相待候へと被仰出候へども、早々罷越度由願申候へば、兵庫一同に一揆起り、尼崎へ之通路難成旨注進有之候間、御鐵炮二三百挺可被仰付候間、五日相待、召連參候へと、丹羽山城を以て度々御意御座候へども、一揆起り申義承候ては、尚以延引難成と、達て御斷申上、四月八日罷出、翌九日に尼崎へ參着仕候。池田越前組之内石田鵜右衛門・同與左衛門・服部清右衛門三人之者共聞付、是非同道可仕由にて、筑後と一所に罷越候。其段武藏守樣被聞召屆、右三人之者共奇特に取合參候由、殊外御感、御褒美も可被遣樣も御内意之處、北瀬市庵申聞候處、無程御卒去に付、其義無御座候。同五月七日之御合戰に筑後御先手之内へ加り相働、自身取候首二ッ、召使之者共取申首數共に、合十三差上申由。

池田越前尼崎依勤功、大坂落城以後、達上聞、公方樣へ被召出候刻、筑後義も達上聞候はゞ可被召出模樣に御座候へ共、筑後存候は、門跡立退、輝政樣御願にて右之仕合に罷成候へば、兄弟之内一人は御家へ御奉公不申上候ては不叶義と奉存、筑後は不申上候。則越前組筑後に被仰付候由。元和八年六月十九日、於因州病死。

一一八、宮城大藏。番頭、二千五百石、六十八歲。

元和八年九月五歲之時、跡目無相違二千五百石、幷組共被仰付候。寛永十九年、御暇被遣、御歸國被成候爲御禮御使者被仰付、江戸相勤申候。其節於江戸宮城越前物語仕候は、權現樣伏見に被成御座候刻、良正院樣爲御對面播州より上り御越被成候節、宮城對馬御供被仰付罷登候處、對馬義右より御存之者に候間、世倅有之候はゞ可被召出

と上意御座候へども、世倅無御座候故、對馬甥宮城越前を被召出被下候様に申上候へば、則被召出候。右之仕合に御座候へば、越前養御家より罷出候者に御座候間、少將様御登城之刻、御用等も御座候はゞ承度之旨、山内主水・私兩人一座にて申聞候。右之段申上候へば、越前御横目にて御座候。明暦三年正月三日、御足輕二十人被仰付候。寛文十二年、士鐵炮私組に被仰付候へ共、翌年差上申度段、御斷申上候へば、願之通被召上候。延寶六年五月十八日、私末子源太兵衛、正木主計養子に被仰付候。同年九月八日、御小仕置役被仰付候。同七年六月十八日、士鐵炮私組に被仰付候。少將様於岡山兩度私宅へ被爲成候。

一一九、子六之助。　寛文五年、十一歳にて御目見仕、同年十一月、侍從様へ御目見仕候。

一二〇、水野次郎左衛門。　勝入様へ被召出候由。

一二一、水野數馬。

天正十一年、輝政様へ伊木豐後を頼、於濃州大垣御奉公に罷出申候。小田原陣之年、武藏守様御守被仰付、其後於吉田少知被下候由。關ヶ原陣之時、御供仕、徒虜者首一つ取申候由。數馬義御拘守仕候。以後御城代役、并高一萬石御代官被仰付。右兩用相勤申候由。慶長九年十一月十一日、高三百石に被仰付候。同十年三月十三日、於備前百石御加増被下。大坂陣之節、士組被仰付候。同年、大坂冬陣之時、東之御丸御留守相守候へと被仰付、妻子共に引越罷在候。此節も御代官役相務申候。元和元年、大坂御陣之刻、數馬義御側に可被召連旨御意にて、從武藏守様御召之御具足・羽織（黑アルカ）仕候。數馬預御鐵炮之者二十人共に助之進に召連參候へと被仰付、助之進召連御供仕候。數馬義於因州物成四つ五歩に被仰付被下候。備前へ御國替之節、三つ八歩被仰付、餘り七歩之分三十五石御扶持方に被下候旨、日置豐前申渡候。度々御懇之御意、御長刀・十文字御鑓・祖母懷之御茶入拜領仕、于今所持仕候。寛永十年正月十七日、六十五歳病死。

一二二、水野助之進。

慶長十一年、十一歲にて武藏守樣へ御兒小姓に被召出、十石三人扶持被下候。同十七年、播州へ御國替之節、五石二人扶持御加增被下、中小姓に被仰付候。同十九年十月十日、新知二百石被下、御近習に請候へと被仰付候。大坂冬陣御供仕、大坂夏陣には數馬預り鐵炮二十人召連御供仕候。寛永九年、數馬病氣に付、隱居被仰付、翌十年正月朔日、家督無相違五百石御鐵炮二十共に被仰付。別知二百石弟伊勢左衛門へ被下候。伊勢左衛門に被下候御切米扶持、三男定六に被下候。寛文五年病氣に付、御斷申上、御足輕差上、組外に被仰付、勝手難續御座候に付、御知行五百石差上げ、御銀拜借仕度旨奉願候處、願之通被仰付、御銀五十八貫目拜借仕候。助之進は、私に加り居申候。延寶五年三月十二日、八十三歲病死。

一二三、養子 水野三郎兵衛。番頭、千五百石、六十二歲。七歲之時養父助之進方へ罷越候。

明曆二年十二月二十日、少將樣へ御中小姓に被召出、木俵五十俵五人扶持被下候。萬治元年十一月十一日、新知三百石被下、御横目役被仰付。寛文元年十二月十八日、侍從樣へ御奉公に上候樣にと被仰付、御加增百石被下、都合四百石、御持筒十挺御預被成、判形役被仰付候。同三年六月、右御預之外、御足輕十人裁判に仕候樣に被仰付、同四年辰閏五月二十四日松姬樣御誕生、御名私に奉附候樣にと、種々難有御意にて被仰付、則以書付相窺、御松樣と被爲附候。淺草鳥越明神へ御社參被成候節、御供仕、同日御歸被成候節、私居申候御長屋へ直々被爲入、爲御祝義從上々樣品々拜領仕候。同九年七月二十一日、御振姬樣(ママ)御誕生、御蟇目之御用安井助五郎・私に被仰付、相勤申候。麻布氷川明神へ御社參御供仕候。同十二年九月九日、右之裁判之御足輕、直に御預被成候。延寶元年二月八日、土器町御屋敷受取申候。同日芝乘行寺屋敷、先方へ相渡申御用、瀧波文兵衛・私兩人被仰付候旨、池田大學・日置猪右衛門より申渡候。同二年、禁裏御造營御手傳方御受取被成候に付、元〆御用相勤可申由、於江戸被仰付候。同年、養父助之進隱居被仰付、助之進差上申御知行五百石、直に御加增として被下、都合千石に被仰付候。助之進拜借五十貫目餘之御銀、御捨被下之旨、於江戸御直に被仰付。同三年十二月十一日、御所司代永井伊賀守殿へ被爲召、此度御普請相調候爲御褒美、從公方樣御小袖五つ・白銀五十枚づゝ被下候。同四年十月二十三日、於御國岸藤右衛門・水野作右衛門・私御小仕置役被仰付、御預け來之御持筒二十挺種ケ島に被成足輕肩之上役御免、拔人にては被召仕間敷旨御意にて被仰付、御役料二百俵宛被下候旨、池田大學・日置猪右衛門

方より申趣、奉承知候。同五年十二月十二日、吉備一の宮へ上道郡八幡より、御兩社御遷宮に付、供奉被仰付、相勤申候。同閏十二月二十八日、岸藤右衛門・私御前へ被召出、御番頭被仰付、則相組人數御自筆之御書付、御直に被下、拜領仕候。同六年九月九日、士鐵炮組宮城大藏・岸藤右門門・私三人に被仰付候。同八年十二月、私不勝手に付、御銀五十六貫目拜借被仰付候。天和三年十一月十五日、御加増五百石被下候。

實父本宮又五郎。御家に罷在候へ共、浪人仕申候由。私幼少にて何事も不承傳候。

一二四、嫡子 水野助三郎。 大目付、三百石、三十七歳。

延寶元年九月九日、於御城難有御意にて、御前番御小姓に被召出候旨、日置猪右衛門被申渡候。七十俵四人扶持被下旨、澤讃大夫申渡候。延寶六年五月十六日、安藤清九郎・私兩人御前へ被召出、御歩行十人宛御預け被成候よし、御直に被仰付候。其上只今迄は御徒頭に被仰付候へば、外様に相詰候へ共、清九郎・私義は、只今迄之通勤候樣にと難有御意にて、於御居間御禮申上候。天和三年、新知三百石被下候。貞享元年三月二十一日、於御前猩々緋御役羽織頂戴仕候。

一二五、水野三郎助。 六十二俵四人扶持、三十六歳。水野三郎兵衛二男にて御座候。

寛文三年極月二十七日、御兒小姓に被召出之旨、從江戸被仰下、翌年五月、稻川藤八・近見權内。岩井惣十郎・私四人江戸へ罷下、侍從樣へ初て御目見仕候。本俵四十俵四人扶持被下候。延寶元年十月二十七日、水野安兵衛・中明又八・山本庄兵衛・私四人、少將樣へ相詰候樣被仰付。同五年暮、御鐵炮御藥込役被仰付候。天和三年六月十五日、御小姓組へ相詰候樣被仰付、御式台相勤申候。同月晦日、中奥に被仰付候。同七月十五日、侍從樣御藥込役被仰付候。貞享元年、江戸御參府被遊、追付御強弩仕候樣にと被仰付、御好之通出來差上申候。

一二六、水野善右衛門。

丹羽五郎左衛門殿に罷在、後浪人仕、上田主水と同國、其上由緒御座候故、主水と小田原陣に罷越、山中城にて鑓を合、其身も手負申候、其外心馳御座候由。其後淺野紀伊守殿へ主水品能申談候處、池田備中殿かね〴〵御存故、御呼に付罷出候へば、三百石、鐵炮十挺被仰付、世倅治大夫若輩に御座候へ共、百五十石被下候。二代目備中守殿大坂冬陣御立之刻、善衛門義は爲御

一、萬之助後作右衛門。
二、瀧川久三郎
三、小島次郎兵衛小名三五郎
四、安藤四郎左衛門小名助四郎。

留守居鳥取へ御残置、治大夫若輩に御座候へども、善右衛門預り之者召連可參由に付、召連參候由。夏陣にも御供仕、手筈とも相申候よし。

一二七、水野治大夫。

島原一揆之節、松原伊豆守殿・戸田左門殿御越之刻、出雲守殿爲使治大夫罷越候。右御兩殿寅の正月四日、有馬表へ御着被成候、治大夫義は次五日參着仕、則伊豆守殿・左門殿其外上使之御衆へも書狀共差上、何も御歸り迄相詰居申。嶋原にて手筈に逢申候由、罷歸候後、出雲守殿より本知一倍加增三百石、都合六百石被下候。

正保元年、治大夫御家へ被召出、於江戸三月御禮申上候。其節私も御目見仕候。同二年春千石、足輕二十人被仰付候。承應二年七月、御船奉行被仰付、御船頭・御加子御預け、名を大藏に成申候。明暦元年七月、病死。

一二八、水野佐右衛門。 江戸留守居、番頭格組足輕、千石、六十二歲。

同十月跡目六百石被下、山脇修理組に被仰付候。同三年正月小堀彥左衛門組頭被仰付、替刺物被仰付候。同三年十月御奏者役、并母衣被仰付、絹拜領仕候。寛文七年正月御横目役、并御羽織役被仰付、羽織地頂戴仕候。延寶四年十月御小仕置役被仰付、御足輕二十人御預け、御近習組に被仰出、十匁之種ケ島組被仰付候。同五年十月在江戸被仰付、御番頭格に被成、御加增四百石被下候。預之者鐵炮能打候よしにて、十人は鐵炮組にて可差置旨被仰付、外御足輕五人御扶持切米にて被下、并二十人之御足輕七歩役御定、爲人遣三人づゝ可召仕由、御年寄衆被申渡候。御簡略に付、五人之被下人、御國御小仕置一等に二人差上由申上候へ共、江戸は格別に候間、其儘被下候由、御年寄衆被申渡候。在江戸以來、御役料被召上、御法之通年々御足米被下、二十八人之御扶持、并馬一疋之飼料被下候。貞享二年二月、在江戸御用掛り中小姓・御徒以下迄、以御書付、於御前支配組に被仰付候。

一二九、子万之助。 延寶九年三月、初て御目見仕。二男久三郎。貞享二年、瀧川仁右衛門願之通養子被仰付候。

一三〇、梶川市郎兵衛。 長谷川藤五郎殿にて八百石被下候。

一三一、梶川小熊。

後、宮野龜之助と申候。藤五郎殿へ兒小姓に被召仕候。藤五郎殿老後宮野新助と申、知行三千石被遣候。隱居仕、家督嫡子宮好忠助に無相違被仰付候。忠助事泉州千石堀にて討死仕、世倅無之に付、藤五郎殿新助宅へ小熊を被召連、忠助養子聟に被仰付候。依之宮野龜之助と名乘申候。藤五郎殿御供仕、市郎兵衛・龜之助高麗陣に罷越候。市郎兵衛城下堀裏へ付、手負申候由。藤五郎殿御卒去以後、市郎兵衛・龜之助浪人仕候。市郎兵衛は於京都病死。龜之助は堀左衛門督殿七百石被下候。慶長五年八月朔日、折紙被下候。其後浪人仕候。

御當家へ池田河内取次にて被召出、四百石被下候。慶長十七年閏十月八日、從輝直様御折紙頂戴仕候。大坂御陣に御使番役被仰付、御歸陣之後、御加増被下候由。大坂御城御普請之節、御普請場惣御横目被仰付候。備後守様御四歳之時、御守役被仰付、御加増被下、都合七百石に被仰付候。正保三年八月二十日、病死。

一三二、宮野平之丞。

少將様へ御兒小姓に被召仕候。福照院様御意にて、備後守様へ被召仕、二百石被下候。正保三年九月六日、跡知無相違七百石被下候。平之丞へ被下来候二百石は、平之丞弟角左衛門に新知被下候。備後守殿備中はたにて御知行割平し被仰付候。其節御知行千二百石に被仰付候。其刻少將様御意にて宮野頼母と名を改申様に被仰付候。備後守様播州宍粟郡三萬石御拜領被成、頼母に御加増八百石、都合二千石に被仰付候處、達て御斷申上、拜領不仕候。其後宍粟郡御拜領之御祝義に三百石被下候旨被仰付、都合千五百石拜領仕候。承應元年正月元日、御折紙被下候。寛文六年四月二日、於宍粟病死。

一三三、宮野龜之助。寄合組、五十人扶持、四十歳。

頼母跡知備後守様より同年五月十七日御書付を以、從江戸被仰出候は、御法之通御加増三百石被召上。私若輩者之義に候へば龜之助・頼母二代御奉公申上候跡に候間、千石被仰付、頼母弟宮野猪之助に百石、私弟宮野平之丞に百石被下候由、被仰付候。寛文七年六月二日、三人ともに御折紙被下候。豐前守様御代、延寶元年三月朔日、御書替之御折紙被下候。數馬様延寶五年九月二十八日、岡山御發駕被成、宍粟十月朔日被爲入、月（マヽ）二日宍粟御立、御供仕、江戸へ同年十月二十七日御着被遊候。私義立歸と被仰付候へども、其儘相勤候様にと侍從様御意にて、翌年も相

詰罷在候處、數馬樣延寶六年十二月二十七日御卒去被成候。於江戸淺草御屋敷にて延寶七年四月四日池田隼人被申渡候は、前々之筋目有之に付、五十人扶持被下、備前へ妻子引越可申旨被仰付、四月十日江戸罷立、同二十四日、宍粟へ歸着仕候。尤宍粟へ御代官御越候迄罷在、引渡候へと被仰付候。御代官六月御越之筈延引、九月末に服部六左衛門殿御越引渡、同年十月十八日、備前へ引越申、同二十八日、御目見仕候。宍粟者一同に延寶七年十二月朔日、御禮申上候。私義太刀にて御禮申上候。寄合組に被仰付候。

一三四、宮野覺左衛門。組外十五人扶持、四十三歲。宮野小熊・龜之介子にて御座候。

龜之助相果候以後、備後守樣新知二百石被仰付。正保三年九月六日、御折紙被下候。はた御知行割之砌、六十石御加增被下候。宍粟御拜領御入部被成、五十石御加增被下候。明暦元年極月十五日、兒小姓役被仰付候。此後御取次役も相勤申候。寛文九年六月十二日、備後守樣御直に足輕十人御預け被成候。延寶七年、宍粟退散、私義十五人扶持被下候旨日置猪右衛門被申渡候。極月朔日、御目見申上、組外に被仰付候。

一三五、宮部肥前。秀吉公へ被召出、關白殿に被附、又秀吉公へ罷歸、於大坂壯年にて病死。

一三六、養子宮部九左衛門。三位法印に罷在、其後因幡鳥取へ參、宮部善祥坊に居申候。

慶長七年、輝政樣へ被召出、三百石被下、大小姓被仰付、同十八年四月十五日、病死。

秀吉公御時代、因幡鳥取城主宮部善祥坊妹を土肥刑部少輔に嫁し、男子二人、其外は女子にて御座候。嫡子は藤左衛門(後、父の名に替、刑部少輔に成申候)秀吉公に御奉公仕候。江州醒井も領分にて御座候由。藤左衛門之時分、秀吉公より七百石之御折紙被下候。醒井に只今御宿仕候松井新介方に右之御折紙御座候て、私に渡し、手前に所持仕候。二男は宮部肥前にて御座候母方之氏を名乘申候。九左衛門義は、肥前の爲に甥にて御座候へば、子分に仕申候。

一三七、養子宮部源大夫。村上權右衛門子にて御座候。

九左衛門跡目、武藏守樣御代無相違三百石被下候。源大夫七歲之時にて御座候。慶長十八年十一月七日、御折紙被下候。慶長十九

年•元和元年大坂陣之時は、九歳故、御赦免被成候へども、實父村上權右衛門差圖仕、名代を立、瀧川出雲組にて兩陣勤させ申候。寛永元年、於因州大小姓に被仰付候。慶安二年正月、母衣被仰付候。寛文四年、小堀彥左衛門組の組頭役被仰付候。同八年十月二日、御鑓奉行被仰付候。同九年、勝手不如意に付、御斷申上、御鑓奉行御免、在鄕被仰付、組外被仰付候。天和元年九月五日、七十六歳病死。

實祖父常陸之助。明智日向守に奉公仕、五百石、鐵炮三十挺預り申候。其後御次樣へ罷出、知行•預り同前。其後金吾中納言殿へ罷出、知行預り右同斷。筑前之供仕、又備前へ罷越候。備前にては千七百石、鐵炮三十挺、組五十騎預り申候。中納言殿御果候後、丹波へ引込申候。七十六歳病死。心馳も御座候。書付之寫御座候故、書加申候。

覺

一、安見右近城に松永彈正付城仕候を、信長公御取卷之時、松井佐渡守陣取見廻に罷越候、折節近藤隼人と申者手負、堀に居申を松井佐渡•我等堀へ飛込、召連被參候。

一、丹波國多喜郡波多野右衛門大夫居城、明智取卷打果申候時、首取申候。同國河鹿郡高津之城大槻大學居城、乘崩候時、大槻菜と申者之首取申候。是は大學同前之謀叛人と申にて、明智二度實檢仕候。

一、丹後國岸山之城主打果申候時、我等鐵炮之下知能候由、明智被申、爲褒美小袖給候。

一、江州志津ヶ嶽合戰之時、我等手前之義、本田因幡守御存知之刻、合戰場にて首取申者不破市左衛門見申、于今不始義と詞を懸取申候間、慥に可被存候、此仁藤堂和泉守殿に取居申候、可有御尋候、猶以藤懸美作守能御存知候。已上。

八月二十六日

村上忠兵衛　判

南部越後守殿

常陸之助、初名忠兵衛と申候。南部越後は、輝政樣に居申由常陸之助心馳之義御尋被遊右之書付仕候樣子に被存候。

實父村上權右衛門。金吾中納言殿に罷出二百石被下候。伏見•關ヶ原陣御供仕、中納言殿　果候以後、御家に罷越、輝政樣へ慶長十一年三百五十石にて被召出、御弓之衆之内に罷在候。其後左衛門督樣へ被爲附、備前へ罷越居申候。大坂冬之御陣御供仕候。左衛門督樣御卒去之後、右近大夫樣へ被爲附、播州佐用郡に居申候。右近一人樣にて御加增被下、三百五十石、鐵炮十

挺御預、御家老職被仰付候。右近一人樣御當家へ御預り被遊候後、權右衛門義は其儘御家に居申、御子息樣方守立申樣にと、少將樣御意被遊、御合力米、并屋敷下候由。實母は土肥刑部少輔娘にて御座候。此筋目にて源大夫を九左衛門養子に仕候。

一三八、宮部清四郎。組外、三百石、三十歲。丹羽藏人末子にて御座候。明曆三年四月十九日、九歲にて源大夫養子に被仰付候。

寛文四年八月二十二日、十六歲にて少將樣へ御兒小姓に被召出、三十俵四人扶持被下候。同五年九月二十六日、御側小姓に被仰付候。同十二年九月二十一日、於江戶山中權十郎・今田茂大夫・庄野長左衛門・私四人に、常々御奉公無懈怠相勤申候、此度御知行をも可被仰付と被思召候へ共、御簡略之節故、御切米御加增被下、八十俵づゝ被仰付候旨、忝御意之趣、猪右衛門被申渡候。天和元年、養父跡目本知三百石被下、其儘少將樣へ可被召仕旨御意にて、御步行頭役又は御奏者役之手傳相勤可申候、御側へも前々之通罷出、御用承可申由、被仰付候。同三年五月二十八日御役義御赦免、組外に被仰付候。

一三九、水野五郎左衛門。

勝入樣岐阜にて御步行に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。輝政樣・武藏守樣・少將樣へ御奉公申上、寛永二十年正月十四日、病死。

一四〇、水野六郎左衛門。

六郎左衛門義、伯父中野久六方へ養子仕參候に付、六郎左衛門倅私三歲にて祖父五郎左衛門跡目本俵十俵に二人扶持、寛永二十年三月十五日、被仰付候。

中野久六義、吉田にて輝政樣へ被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。於因州病死。跡目本俵二十俵に四人扶持、六郎左衛門に被下候。被召出候節は、伯父中野久六氏を名乘候へ共、御斷申上、實父五郎左衛門氏に返り申候。六郎左衛門義、寛文九年九月十五日、中小姓に被仰付候。延寶二年二月四日、六十九歲病死。

一四一、水野德兵衛。池田七郎兵衛組、四十俵四人扶持、四十七歲。

六郎左衛門跡目無相違、中小姓被仰付、本俵二十代四人扶持被下候。私義、祖父五郎左衛門跡目相續仕候へ共、右之通六郎左衛門跡目被仰付候故、私弟水野彥四郎事、侍從

様へ御歩行に被召出候て、祖父五郎左衛門跡目被仰付候。私義承應三年十五歳にて御次之通御奉公被仰付候。寛文四年十二月二十一日、御歩行被仰付、本俵十俵一人扶持、御加増被下候。延寶四年十月三日、九代御加増被下候。同六年、御馬廻りに被仰付、四月二十日、池田七郎兵衛組へ御入被成候。

一四二、宮城夫兵衛。　宮城大藏組、百二十八代五人扶持、[illegible]十歳。

高祖父下方左近・曾祖父下方九郎左衛門・祖父下方登兵衛・父下方主税。私義當歳之時、母方之祖父宮城大藏母手前へ養ひ、子分に仕、氏を宮城と改申候。

萬治二年十二月、十四歳之時、侍従様へ御兒小姓に被召出、本俵四十俵五人扶持被下候。寛文七年より本俵を小俵に直し、七十八俵づゝ被下候。寛文十年八月二十日、今俵五十俵御加増被下候。延寶四年、病氣故、御城詰之義御斷申上候、十一月七日御免被成、宮城大藏組に被仰付候。

一四三、水野小右衛門。　信雄公にて一萬石被下、岩倉之御城預り罷在候よし。其後於作州病死。

一四四、水野左門。

金吾中納言殿にて千石給候。其後石田治部少輔に罷在候、知行高不存候。其後加藤左馬殿にて八百石被下候。其後紀伊大納言様五百石被下候。其後浪人仕、淺野釆女殿に浪人分にて罷在、其節は水野四郎右衛門と申候。其後赤穗にて寛文十三年正月四日、病死。

一四五、水野甚五兵衛。　伊木頼母組、二百石、六十[illegible]歳。

寛永十三年、於備前少將様へ被召出、十人扶持被下候。同十五年極月十五日、二百石被下候。

一四六、嫡子甚大夫。

私病氣に付、天和三年江戸御留守御番名代に、甚(大夫)一人參勤申候。次男小左衛門。貞享二年三月十五日、甚大夫病死仕候に付、二男小左衛門御目見奉願候處、同年六月十五日、十九歳御目見仕。

一四七、光枝勘右衛門。

於備前武藏守様へ被召出、三百石被下候。大坂兩陣御供仕候。慶安三年六月十八日、病死。

一四八、光枝勘右衛門。 跡目無相違三百石被下、寛文元年六月二十五日、病死。

一四九、光枝勘右衛門。 伊木頼母組、二百石、三十一歳。 七歳之時跡目二百石被下候。

一五〇、養子忠八郎。

延寶七年七月十四日、五藤八兵衛二男忠八郎願之通養子に被仰付、同十五日、九歳侍從様へ御目見仕。

一五一、三好又太郎。 勝入様へ被召出、御知行六十石被下候。輝政様於吉田御加增百石被下候。於吉田病死。

一五二、三好久五郎。 跡知無相違百六十石被仰付、慶長十六年（十ノ字省可然カ）十一月三日、御禮申上候。於因幡病死。

一五三、三好久左衛門。

跡知無相違百六十石被下、元和四年十一月二十六日、御禮申上候。江戸御留守御番に三度參候。在方御用・檢地・御毛見・御代官等相勤申候。延寶七年二月四日、七十二歳にて病死。

一五四、養子三好夫兵衛。 山脇傳内組、百六十石、四十一歳。久左衛門甥にて御座候。

幼少より養置、養子に奉願候處、被仰付、萬治二年二月十五日、十三歳にて少將様へ御目見仕候。寛文六年十一月朔日、侍從様へ御目見仕候。延寶三年、禁裏御造營之節、父名代に御奉公相勤候。同七年四月六日、跡目無相違百六十石被下候。實父は仙石忠左衛門にて御座候。

一五五、水主兵庫。 光源院殿御代御奉公仕候。此時御めし被下候幕紋竹之丸之内もつから。此分承傳候。

一五六、水主久左衛門。 片桐市正に罷在、三百石、足輕十人預り居申候。後に山城國水主村に引込、病死仕候。

一五七、槇島彌左衛門。 片桐勝七にて百五十石給居申候。正保二年浪人仕候。其節勝七幼少に御座候に付、片桐石見守より搆有之候。

彌左衛門義、大樹院様御存之筋目御座候に付、少將様へ御賴被成、承應元年六月、御國へ罷越、十人扶持被下候。同

年冬、御合力米百俵づゝ被下、十人扶持は差上申、組外に被仰付候。津高郡野々口村へ御入置罷在候。構御座候に付水主をかへ横島に成、御國へ參申候。寛文六年十二月二十二日、病死。

一五八、水主加兵衛。岸藤右衛門組、百石、四十五歲。

寛文四年八月爲父名代、少將様へ被召出、安藤杢組へ御入被成、御番・御供等相勤申候。同七年二月十五日、新知百石被下、纔日之御禮申上候。同十年七月四日、學校御横目役被仰付、十二年霜月四日御免、銀五枚被下候。同十二年信濃守様へ御附被成、御加増二十石被下候。延寶三年十月病氣に付、信濃守様より御返し被成、右御加増被召上候宮城大藏組に被仰付候。此節奉願水主と被成申候。同五年閏十二月二十九日、岸藤右衛門組に被仰付。

一五九、河合惣兵衛。

從先祖近江國にて少之所を致領知、戰功も御座候由承傳候。池田備中様へ被召出、二百石被下、町奉行・城廻・代官勤申、致病死候。跡目無相違嫡子加右衛門に被下候。其後五十石御加増被下、御横目役勤居申候。出雲守様御死去以後、奥様へ御付置、於江戸病死。

一六〇、水野治兵衛。加右衛門弟にて御座候。

幼少之時惣兵衛致病死候、治兵衛母は水野善右衛門娘に付、母一所に善右衛門方に引取置申候。其節より水野に氏を替申候。

其後織田出雲殿へ奉公仕罷在候、伯父水野治大夫差圖にて暇を乞せ、治大夫方へ呼被置申候。

承應元年、少將様へ被召出、三百石被下、芳賀內藏允組に被仰付候。同三年、大小姓役被仰付、萬治二年七月十二日御横目役被仰付、寛文元年十二月十八日百石御加増被下、御持筒御足輕十人被仰付候。同二年十一月二十三日、御横目役御免、浮組之内御足輕十人當分裁判被仰付候。延寶元年七月十二日、裁判之御足輕共に御鐵炮二十御騎（預カ）、判形役可仕旨、御直に被仰付。同十二月二十七日、百石御加増被下、都合五百石被下候。同四年、病氣に付御斷申上候處、三月四日、判形御免、御鐵炮頭被仰付候て、後に養生可仕旨被仰付。天和三年五月六日、病死。

一六一、水野治兵衛。水野三郎兵衛組、三百石、二十二歳。

寛文十年三月七日、七歳にて侍從様へ御目見仕候。天和三年六月朔日、跡知三百石被仰付、水野三郎兵衛組被仰付

一六二、水野權七。七十俵五人扶持、二十歳。治兵衛二男にて御座候。

父病死、跡目兄治兵衛に被仰付候節、天和三年六月朔日被召出、七十俵五人扶持被下候。同三日御目見仕、澤權大夫組に被仰付候。貞享元年十月二十日、來年江戸御留守中岩千代様御番被仰付候旨、日置猪右衛門申渡候。同二年二月二十五日岡山罷立、三月十二日江戸へ參着、同十四日、岩千代様御近習に相詰候へと、池田大學申渡、同日、岩千代様へ御目見仕、御側に相詰申候。

一六三、水野又右衛門。水野惣兵衛殿に三百石にて三州苅屋に罷在候。

一六四、水野久大夫。

松平左衛門督様に被召出、二百五十石被下候。大坂冬陣御供仕候。左衛門督様御卒去之後、直に宰相様へ御奉公仕爾今私從弟水野久大夫松平伯耆守様に罷在候。

一六五、水野茂右衛門。

寛永七年冬、因幡鳥取にて少將様へ被召出、御兒小姓に被仰付、五十代七人扶持被下候。同十三年秋、中小姓に被仰付候。正保三年冬、新知百五十石被下候。承應三年、御加増五十石被下、御歩行頭被仰付候。明暦元年、百石御加增被下候。萬治四年、御鐵炮十人御預、判形役被仰付候。延寶二年冬、御旗奉行被仰付。貞享元年九月二十六日、七十歳病死。

一六六、水野清次郎。山崎大膳組、三百石、二十八歳。

寛文九年十月、御兒小姓に被召出、六十俵四人扶持被下。延寶三年、中小姓被仰付。貞享元年十一月二十五日、跡目三百石無相違被仰付、山崎大膳組に被仰付候。

一六七、水野孫四郎。五十俵四人扶持、二十三歳。水野茂左衛門二男にて御座候。

天和二年六月朔日被召出候。六十俵四人扶持被下候。御小姓組に被仰付、澤權大夫組に被爲附候。

一六八、宮脇賴母。

攝津國伊丹にて勝入様へ被召出、五百石被下候。於播州輝政様御加增五百石被下、御鐵炮二十御預け、後に又十挺以上三十挺被仰付。左衛門督様御守に被仰付候。其後備前病死。

一六九、宮脇夫左衛門。於備前武藏守様へ被召出、二百石被下候。慶長元年九月十四日、病死。

一七〇、宮脇門兵衛門。湯淺半右衛門組、二百石、四十七歳。跡知無相違被仰付候。

一七一、子門三郎。延寶八年九月十五日、八歳にて侍從様へ御目見仕候。

一七二、水野助大夫。播州において武藏守様へ被召出、百五十石被下候。寛永十八年十一月九日、病死。

一七三、水野助大夫。

同十九年閏正月、跡目無相違被仰付候。初は七郎左衛門と申候、此時助大夫に成申候。正保四年に信濃守様御預り御鐵炮引廻被仰付候。明暦二年、小堀彦左衛門組鐵炮引廻被仰付。延寶五年霜月十六日、七十三歳病死。

一七四、水野安兵衛。百五十石、四十三歳。

正保四年、五歳にて御目見仕候。此時傳三郎と申候。寛文八年十月六日、御小姓に被召出、六十俵四人扶持被下、安藤杢組に被仰付。同十二年十月、岸織部組に被仰付。延寶元年十一月二十七日、少將様へ被召仕候由被仰付、同四年二月十六日、中奥に可相詰之旨被仰付、同五年極月十八日、跡目無相違百五十石被下、少將様へ被召出、御役料四十代高扶持十石被下。天和三年十月十五日、大小姓役被仰付、御役料八十俵、人不足代六十代被下候。

宮本先祖。伊勢國中川原申所に小城持居申由。

●●●●●●●祖父中川志摩之助。世倅之時浪々仕、仙石權兵衛殿讃州に御座候節、御奉公に罷出、武邊之走廻り數度御座候て、鐵砲頭に成

知行千石餘被下候。或時手柄仕、爲褒美權兵衞御紋永樂之上字を被下、永の字を紋に付來申候。其節水野日向守殿、其比六左衞門殿申、御父和泉守殿不和に付、權兵衞どのに御座候、其時分より御心易、別て入魂仕、其馴により、其後日向守殿被仰付候は、彼方・此方と可申よりは、心安此方可參候、武者奉行御賴被成度、御呼被成、鼻紙と被仰六百石被下候。其前上杉景勝會津に御座候時分、其比は赤堀源太と申、三千石取罷在、度々走廻仕、源太が鑓にて跪て合名と申ならし候旨承傳候。然處に御家老直江山城と申分出來、立退申候。景勝御惡み强、世間狹罷成候故、右日向守殿へ何之構なく罷在、日向守殿御家にて病死。大坂御陣之節も、日向守殿御手にて鑓を仕候。惣て志摩之助武功之義、只今も水野美作守殿御家來古き者は、傳承之者可有之候。

嫡子中川刑部左衞門、若き時分より日向守殿士御成敗之刻、仕手被仰付、數度仕手仕候。大坂御陣之時分、五月六日、於道明寺口傍猳河村新八と申者、薄田隼人と出合、隼人大の男、黑具足にて一文字に斬懸り、新八も如形之者に御座候へ共、嚴く被切立、跡退仕、既危見へ申候處、刑部左衞門走參、新八助るぞと詞を懸、隼人に截懸り、首を打落し申所、新八甥寺島助九郎跡より懸着、隼人頭を盜取、其場を立去申候。但此首尾今一說御座候、刑部左衞門腹立仕、堪忍仕間敷由申候へば、日向守殿へ御附被成候、御檢使御證被成、新八鑓、刑部左衞門組打、助九郎高名、か樣に上段に仕候へば、日向守殿御家に能士三人御持之間、堪忍致候へと被仰候に付、心外に被存、其通に仕候由傳承候。刑部左衞門病死之時分、日向守殿・美作守殿、刑部左衞門宅へ御見廻被成候由。

二男中川主馬、志摩之助跡無相違被下、鐵炮頭仕、日向守殿に居申、島原一揆之刻、日向守殿御備のへの門の一番乘仕候。此時討死仕候と、外より見へしに付、日向守殿御惜被成、父志摩之助方へ御悔御使被下候後、討死不仕由相聞候、御兩殿御滿足被成、重て志摩之助方へ御悅之御使被下候。主馬後に志摩之助と改申候。美作守殿御代、子細御座候て浪人仕候。

一七五、宮本三木之助。　中川志摩之助三男にて、私ため實は伯父にて御座候。

宮本武藏と申者養子に仕、兒小姓之時分、本多中務樣へ罷出、七百石被下、御近習に被召出候。九曜巴紋被付候へと御意にて、付來候、御替御紋と承候。圓泰院樣寛永三年五月七日御卒去之刻、同十三日、二十三歲にて御供仕候。

一七六、宮本九郎大夫。　三木之助弟にて御座候。

是も圓泰院樣兒小姓に被召仕候。兄三木之助殉死仕、實子無御座候に付、九郎大夫に跡式無相違、美作守樣被仰付、名も三木

之助に罷成候。天樹院様播州より江戸へ御下向被成候刻、美濃守様御供被成候時、三木之助も美濃守御供仕候。天樹院様美濃守様へ御意にて、道中御旅館にて御目見被仰付候。甲斐守様御代、番頭に被仰付候。内記様御代、寛永十九年九月病死。私兄宮本辨之助と申、跡式被下、内記様に罷在候へ共、若き時病死仕候。

一七七、宮本小兵衛。御膳奉行、六十二俵五人扶持、四十四歳。十五歳之時兄辨之助果申候。其節より南部に罷在候。

寛文二年十月十二日二十一歳之時、於江戸侍從様へ被召出、同十一月十日御禮申上、今俵六十二俵五人扶持被下候。天和三年、御膳奉行被仰付候。

一七八、三神平左衛門。中村一學殿に少知にて居申候。一學殿身上果にて浪人仕、京にて病死。

一七九、三神平左衛門。浪人にて私手前に罷在、二十三年以前病死。

一八〇、三神三大夫。四十五俵四人扶持、五十二歳。

萬治三年正月九日、侍從様へ御步行者に被召出、三十一俵三人扶持被下、正月十一日、御目見被仰付候。天和元年七月九日、御小姓組に被仰付、十四代一人扶持被下候。

一八一、宮井隼人。紀伊大納言殿五百石被下候。其後浪人仕、烏井小路可庵と名●名氏共に改、京都青蓮院殿屋敷に罷在、慶長十七年八月十三日、病死。

一八二、宮井宗巴。浪人にて京都に罷在、寛文八年六月十九日、病死。

一八三、宮井九左衛門。六十俵四人扶持、四十八歳。

寛文七年十二月、於江戸中小姓に被召出、六十俵四人扶持被下候。同十二年九月十五日、小堀主殿組に被仰付、延寶七年、澤權大夫組に成申候。

一八四、石井彦左衛門。

備中松山城主三村修理進元親に奉公仕、同國上房郡竹之庄賓納村之内にて知行高三百石被下罷在、天正元年、傍報田中四郎兵衛と申者、備前加茂小倉之城主伊賀久隆と打果候節、能働御座候爲加增、則田中四郎兵衛跡式右竹之庄肥田村之内にて高

二百石、同村久留見田と申所之家屋敷共に給候と承傳申候よし。爾今私從弟石井淸左衞門と申者、右肥田村之名田に百姓仕罷在申候。天正二年、元親と毛利輝元公と對陣にて、小早川隆景松山之城へ發向之節、一番に鑓を合、宗徒之敵打伏、其身も鑓疵負候、無双之忠節之由。就夫爲加增、有漢田田跡式遣候と、天正三年正月六日之感狀、爾今御座候。右感狀之加增に取申候鄕田田跡式は、備中上房郡有漢之内金倉村にて高三百石、都合八百石にて、右竹之庄之内德元と申所に、少々かき上仕罷在候由爾今所之者德元之城は石井が城と申傳候。其後元親一家之内、幷元親之家老三村孫兵衞と申者裏ぎり、松山及落城、元親切腹家來分散仕候。其後竹之庄在所へ引込罷在候處、毛利輝元公之家老小早川隆景・丹羽下野守通朗・福原出羽守貞俊連判にて世帶等幷於身上之儀は、聊不可有別儀旨、神文之奥書にて天正三年亥五月二日之書狀、爾今御座候。

一八五、石井總市郎。

天正年中、松山之城主天野五郎左衞門元信より、幼少に候へども合力米を取罷在候。名乘字給候。天正十九年三月十二日、元信判形之書付、爾今御座候。病氣に付高麗陣・關ヶ原之御供にも參不申故に暇申請、竹之庄在所之名田へ引込罷在候。池田備中守樣元和三年備中松山へ御所替被成候節は、石井次郎兵衞と申候。御領内に百姓仕罷在候へ共、筋目有之由御耳に達、御心付として米年々拜領仕候。何事に御座候節は、人馬も持罷在候間、御供可仕之旨にて御目見も仕候由。寛文二年三月二日、病死。

一八六、吉川瀨兵衞。

寛永十九年、石州濱田にて古田兵部殿にて知行百石、仲間扶持方十人、馬飼料・薪木等迄被申付、罷在候。何事も御座候時、又は長崎へ唐船參、加勢之時は、鐵炮十五人用銀共可被申付筈に御座候に付、三浦瀨兵衞と申候。正保四年、古田兵部殿御遠行、跡目無御座絕申候に付、浪人仕候。濱田之城相渡し申役人に殘り、引渡申候以後、備中吉川村にて寛文五年十一月十二日、病死。瀨兵衞義御當地にては、日置猪右衞門内坂口忠兵衞、古傍輩故存候。

一八七、三村十助。

役小姓勘定川村平太兵衞引廻、三十九代五人扶持、四十六歲。

寛文元年、御旗本石川藏人殿へ浪人分にて罷出、身上之義も賴み罷在候處に、父病氣見屆申度存、行申、同四年備中へ歸り申候。

同五年二月十五日、少將樣へ御勘定方に被召出、本俵二十俵に三人扶持被下候。同十年三月十六日、御加增一人扶持被下候。天和三年正月二十三日、中間之頭役中小姓に被仰付、八俵一人扶持御加增被下候。

吉備溫故秘錄卷之八十三（干城一二）終

田野解介寫
加藤熊吉校

吉備温故秘録卷之八十四（原本無卷數）

大澤惟貞輯録

干城 一三（原本干城一八）目録

六八、村田長右衛門。
六九、田中但馬。
七〇、田中長左衛門。
七一、田中平八。
七二、村川喜兵衛。
七三、森本又兵衛。
七四、森本與三兵衛。
七五、森本與兵衛。
七六、養子子　森本與左衛門。
七七、森川大隅。
七八、田中多左衛門。
七九、森川九郎左衛門。
八〇、養子　森川助左衛門。
八一、森川九兵衛。
八二、森與三右衛門。
八三、森四郎兵衛。
八四、森半右衛門。
八五、森半左衛門。
八六、守田將監・守田三之丞・守田源左衛門。
八七、守田與五郎。
八八、中村孫右衛門。
八九、森島八藏。
九〇、森島久右衛門。
九一、森島甚兵衛。
九二、森島甚左衛門。
九三、森島文之丞。
九四、師岡彌二郎。
九五、師岡小右衛門。
九六、師岡三右衛門。
九七、子　幾之助。
九八、森源右衛門・森掃部・森九兵衛。
九九、森三大夫。
一〇〇、子藤八郎。
一〇一、大森勘助。
一〇二、森少右衛門。
一〇三、持田善兵衛。
一〇四、養子　持田治大夫。
一〇五、祖父　守田孫右衛門。
一〇六、守田熊藏。
一〇七、守田清左衛門。
一〇八、守田孫六。
一〇九、藤井助兵衛。
一一〇、森屋孫兵衛。
一一一、守屋七郎兵衛。
一一二、養子　森屋七郎兵衛。

吉備温故秘錄卷之八十四（干城一三）目錄終

吉備溫故秘錄　卷之八十四（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　一三（原本干城一八）

一、池田淸助。生國、攝津。松平阿波守殿にて二百二十石被下、罷在、其後浪人、病死。

二、村田小右衞門。池田にて御座候得共、御當家へ被召出候に付、村田と申候。

寛永九年、御目見仕、伯州に罷在、當御國へ罷越、同十四年、二百五十石被下、同十九年、二十九歳病死。私伯父にて御座候。

三、養子村田小右衞門。近習町奉行、三百五十石五十四歳。

寛永十九年、小右衞門方へ養子に被仰付、十月十九日、九歳にて御目見仕候。同二十年春、跡目百五十石被仰付候。寛文七年正月二十三日、兒嶋郡御郡奉行被仰付候。同十二年十月、侍從樣より備中之御郡奉行被仰付候。延寶五年、磐梨郡御郡替被仰付候。同八年、邑久郡へ御郡替被仰付候。所々新田仕候に付、以來三十石宛被下候。天和二年正月二十二日、一同に役義御免被成候。同二十二日、又御郡役被仰付、邑久郡・和氣郡・磐梨郡裁判仕候。同二月朔日、右被下米を御加增、百石被仰付候。同三年亥、磐梨郡裁判御免被成候。貞享二年十月、御郡役御免被成、百石御加增被下、都合三百五十石拜領仕、御町奉行被仰付候。

曾父池田次郎左衞門。生國、攝津。伏見に浪人にて罷在候。嶋原陣に有馬玄蕃殿御陣所をかり罷越候。諸浪人大勢玄蕃殿御手下に罷在、落城以後御陣所に罷在、働能勝（マヽ）は浪人三十六人御撰、御歸陣之後、於御城御振舞被下候、座敷之次第、此度の働宜敷模樣に應じ可被召出と、先達て御內意にて、何も登城致候節、書付を以御呼出し被成、先年御家に罷在候生駒半右衞門・池田次郎左衞門、此兩人左右の上座被仰付候。二三迄御呼出、それより追々罷通候由。右之働之樣子、於江戸松平安藝守殿へ有馬玄蕃殿御咄被成、依之御召出被成候處、淺野因幡守殿御貰知行二百石被下、江戸留守居役仕、其後病死。

四、子傳之丞。　天和元年二月十五日、侍從樣御目見仕候。

五、藏知久大夫。　瀧川左近殿に罷在。

其後勝入樣に被召出、岩崎御陣之節は、大垣御城御番に罷在候由。天正十二年九月二十二日、岐阜にて輝政樣より百貫御折紙被下、于今所持仕候。岐阜にて正月二十二日病死仕候。年號は不存候。

六、村瀨八左衞門。

輝政樣へ於岐阜被召出候。跡知被仰付候。氏替り之樣は不存候、天正十七年十一月二十日、御知行百五十石被下候。同十八年、於參州三百石成被下候。慶長六年十一月三日、於播州四百五十石被成下、大小姓頭被仰付、小田原・奧州・關ケ原陣御供仕、新加納にて心馳御座候由。

七、村瀨平右衞門。

慶長十二年、跡目無相違四百五十石輝政樣被仰付候。同十九年、大坂陣武藏守樣御供仕、翌年四月二十五日、姫路へ罷歸候。元和元年攝州尼ケ崎御加勢被遣候に付、組頭大村伊織一所に二月五日、罷立參、三月二日、姫路歸申候。同年四月大坂陣御供仕候。寬永十一年八月二十三日、大小姓役被仰付、十一年相勤、正保元年十月、大小姓役御免被成、池田數馬樣に被仰付候。寬文三年伊木賴母御組頭被仰付、同四年八月二十一日、尾關兵庫組頭被仰付、同九年三月二十二日、池田三郎左衞門組頭被仰付候。

八、村瀨團右衞門。　伊木賴母組頭、四百五十石　五十二歲。

寬永二十年十歲にて御目見仕、寬文十三年三月二十一日、父平右衞門病氣に付、願之通隱居被仰付、家督無相違四百五十石被下候、同年九月二十三日、伊木賴母組被仰付候、延寶六年正月二十七日、父平右衞門八十一歲病死。

九、子甚之介。　延寶二年正月十五日、十四歲御目見仕候。

一〇、村瀨藤十郎。　藏知久大夫二男にて御座候。

武藏守樣御部屋住之時より御小姓に被召出候。御切米、又は名字書り申候樣子不存候。關ヶ原御供仕、於播州慶長六年十一月三日、百五十石被下候。同十年八月二日、五十石御加增被下候。

一一、村瀬金右衛門。岸藤右衛門、二百石、六十歲。金右衛門方へ養子に參候年月失念仕候。

承應三年、中小姓に被召出、本俵八十俵四人扶持被下候。明曆二年八月二十二日、養父金右衛門隱居被仰付、五人扶持被下、家督無相違二百石私に被仰付。金右衛門萬治三年十二月二十二日、病死。延寶二年土肥飛彈組御鐵砲引廻し被仰付候。同六年十一月岸藤右門組士鐵砲引廻し、御直被仰付候。貞享二年、御斷申上候、役義御免被成候。

一二、子久大夫。天和元年九月十五日、十三歲にて侍從樣御目見仕候。

金右衛門實祖父谷崎彌八郎、蒲鄕氏鄕にて千七百石給候。於會津病死。

實父谷崎彥左衛門、蒲生中將殿にて千石給候。下野守殿遠行被致、六十萬石之內二十四萬石蒲生中將殿に被下、伊豫之松山へ御越に付、被召仕候者、知行半分にて奉公可仕由に付、五百石にて奉公仕候。其後鐵砲二十人御預ヶ被成候。於松山寬永十二年三月十四日病死。

一三、村瀬平六。御膳奉行、四十七俵四人扶持、四十四歲。村瀬平右衛門子圖右衛門弟にて御座候。

寬文二年九月、於江戶侍從樣へ中小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。延寶元年七月二日、御膳奉行被仰付候。

一四、村田六左衛門。宇治井所に居申、知行伊勢之內大部田村にて取申候由。

一五、村田七右衛門。是も宇治井所に居申、其後織田上野守殿にて三百五十石取申候由。

一六、村山又左衛門。栗野杢殿にて二百石被下候由。其後名嶋中納言殿にて四百石被下候由。

其後慶長九年、武藏守樣被召出、三百石被下候。大坂御供仕候。於因州御郡奉行七八年相勤申、寬永十九年より御代官被仰付、七年相勤 慶安元年二月十四日、於備前病死。

一七、村山又左衛門。　稲葉四郎右衛門組頭 三百石、七十歳。
慶安元年五月、跡目無相違被仰付。承應三年十月六日、御小姓役被仰付、寛文十一年湯淺民部組御鐵砲引廻し被仰付。其後池田三郎左衛門組に被仰付、七年極月芦賀宇右衛門組御鐵砲引廻し被仰付候。延寶元年七月十二日、御前へ被召出、御直に稲葉四郎右衛門組頭役被仰付。

一八、子瀬兵衛。　寛文十一年二月十一日九歳にて御目見仕候。

一九、武藤掃部。　尾州勝幡在城仕候由。信長公濃州岐阜御攻被成候時、討死仕候由。

二〇、武藤猪右衛門。　川尻與兵衛殿へ於東美濃岩村被召出、三百石被下候。其後猪右衛門幼少に付、父相果申候に付、委細不存候。

二一、武藤猪右衛門。
細川越中守殿之兒小姓に罷出、二百石被下候。其後溝口伯耆守殿へも、先前にて罷出之由。其後備前中納言秀詮卿へ四百石之約束にて罷出候由。中納言殿死去之後、浪人仕候。
慶長九年、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。度々御檢地・御毛見・御代官・御郡奉行と被仰付候由。年罷寄御斷申上候。正保三年極月二十日、願之通隱居被仰付、法體仕、意庵申。慶安五年五月十八日、八十一歳病死。

二二、武藤佐右衛門。　中村主馬組鐵砲引廻 二百石、七十歳。
正保三年極月二十日、家督無相違二百石被仰付。御毛見・御檢地・御代官相勤、其外大坂御米拂に參候。寛文六年十月七日、神圖書組に被仰付、同九年二月朔日、御勘定上聞御用被仰付、相勤候處、病氣に罷成、御斷申上候得ば、翌年二月、御赦免被成候。延寶元年七月十二日、神圖書組之御鐵砲引廻し役被仰付候。貞享二年極月二十七日、中村主馬組御鐵砲引廻し被仰付候。

二三、子平吉。　初て御目見仕候年月失念仕候。

二四、武藤勘右衛門。　後之猪右衛門末子にて御座候。

寛永十年、於岡山九歳にて少將樣へ御兒小姓に被召出候。同十五年四十俵五人扶持被下候。正保元年暮三十俵御加增被下候。同三年十一月、新知二百石被下候。御兒小姓役十七ヶ年相勤申候。病氣に付御斷申上候へば、慶安御赦免被成、土倉隼人組に被仰付候。延寶五年十月二日、五十四歲病死。

二五、武藤文內。浮組、二百石 三十三歲。

寛文二年、少將樣へ初て御目見仕候。延寶五年十二月十一日、跡知無相違二百石被下候。

村上氏は、信濃國更科村上義淸より傳申候。義淸越後へ參候てより越後村上と申。何れの時代は不存、兄弟三人西國へ參り、野嶋・來嶋・大嶋三ヶ所に居申候由。來嶋は豫州之內、野嶋・大嶋は周防之內にて御座候。其比近國にては、三村上と申、三村上之內來嶋は惣領にては御座候。元祖は事久敷義に御座候へば、名を存不申、又如何樣に致し居申も不存候。二三代以來を書上申候。

村上出雲守通康、此子來嶋出雲守、此子右衞門市、此子丹波守、此子只今之久留島信濃守にて御座候。右二代目出雲守より久留嶋と申は、秀吉公來嶋と計御意被成候故、村上を改、來嶋に成也。

二六、村上筑前守。通康弟にて御座候。　村上內藏大輔。筑前守嫡子。

二七、村上九左衞門。內藏大輔嫡子。

通康居城は、豫州野間郡之內來嶋と申所にて御座候。筑前守居城は、同國和氣郡之內堀江と申所に、つゞら葛と申山を城に仕罷在候 筑前守・內藏大輔も病死仕候に付、九左衞門六歲迄は彼城に居申、信長公京都へ被爲入候時分、西國亂國に及申に付、播州へ秀吉公御仕置被成御座、其刻通康後家家老一兩人召れ播州へ參り、秀吉公へ御目見仕、私世倅二三人御座候、本知・本城被下候はゞ御味方に參上可仕と申上に付、無相違被下、二代目之出雲守來嶋に居申。其節九左衞門は幼少に御座候へば、左樣之義も不申上、つゞら葛を下城仕、來嶋へ參居申處、秀吉公御代に成申、高麗へ御人數御渡被成に付、出雲守も參候間、九左衞門も參り候へと申に付、士十八預り參申候。南門と申城にかくなと取籠居申に付、諸大名衆御開被成、御城を御攻被成候に付、かくなと門を開、六七騎罷出候。九左衞門懸付、其內一人組伏、首を捕申所、追付落城之體に見へ申候間、首を中間に持せ、門の內へはいり申所に、又かくなみに三人罷出候を、一人打取申、其後出雲守參、右之樣子申候へば、殊之外感申候。此時九左

衛門十七歳。二代目之出雲守、朝鮮之內すいゑいと申所に番船居申候を乘取可申と押寄申所に、矢に中り打死仕候。出雲守小身に御座候故、九左衛門に百五十石給知申付候由。右衛門市代に所替被仰付、豐後へ參申刻、士共大勢暇申候に付、何れも並に九左衛門も暇申、福嶋左衛門大夫殿へ通康末子村上彥右衛門と申者居申候間、福嶋殿を眾廣嶋へ參、彥右衛門に懸り居申所に、加藤左馬助殿出雲守と別て心安く被致候に付、九左衛門義を二神隨庵と申者に尋被申に付、隨庵より廣嶋へ書狀越、急此方へ參り候へと多分身上相濟可申と申越候間、彥右衛門手前を引取、豫州へ參候へば、左馬助殿二百石被下、大小姓役相勤申候。百石加增にて船奉行に申付、三津と申所へ參、其後二百石加增被下、五百石被成下、大坂冬陣之節は式部少輔殿供仕、船手之役に罷立申。寬永三年寅左馬之助殿會津へ處替にて引越申、九左衛門義は用事被申付、翌年二月跡より罷越、同五年十月十八日於、會津七百五十一石被申付。折紙于今所持仕候。（惣方へは四割加增にて御座候へ共、九左衛門へは五割加增被申付）

式部少輔殿代に鐵砲二十挺預ヶ被申、式部少輔殿身上果、浪人仕候。

正保四年二月十二日、少將様へ被召出、五百石鐵砲二十挺被仰付候。慶安五年十一月四日、於江戶病死。系圖など御座候處、九左衛門浪人之內、火事に燒失仕候。

二八、村上喜兵衛。

加藤式部少輔殿に罷在候。寬永十二年十一月十九日より被召出、別知百五十石被下候。惣方へは藏米にて給候へ共、喜兵衛には所付給知仕候。父一同に浪人仕候。

正保四年三月十五日少將様へ御目見仕候。承應元年十二月二十二日、跡目無相違被下候刻、九左衛門に名をかへ申候。同三年十月四日、山脇修理組頭被仰付候。寬文二年山脇傳內組頭に被仰付候。同四年名を喜兵衛に被成申。同十年五月二十七日、病死。

二九、村上金助。 土肥飛彈組、四百石四十五歳。

承應二年二月十五日、御目見仕候。寬文十年八月朔日、跡目四百石被下候。延寶四年五月朔日、山脇傳內組頭に被仰付候。同年八月二十二日、土肥飛彈組頭に被仰付候。同七年十月より簡略仕候に付、組頭役御免被成候。

三〇、村上市右衛門。 村上九左衛門末子にて御座候。

承應二年、少將樣へ於江戸御中小姓に被召出、四十俵五人扶持被下候。少將樣より侍從樣へ御附被成、御切米御扶持御加增被下。年月失念仕候。萬治元年於江戸新知三百石被下、御鐵砲七人御預け被成、裏判役にて在江戸被仰付候。寛文八年三月十九日、五十二歲にて病死。

三一、村上喜三郎。 山脇傳内組、二百石 二十五歲。

跡式之内二百石、八歲の時被仰付候。其後山脇傳内組に御入被成候。延寶三年二月二十一日、御兒小姓に被召出、貞享二年八月四日、御兒小姓役御免被成候。山脇傳内組に被仰付候。

三二、村井傳右衞門。

長谷川藤五郎殿に罷在候。其後喧嘩仕、人をあやまり立退て原隱岐守殿に罷在、小田原陣之節、首尾能御座候由。關ケ原陣の節、薩摩守殿、陸奧守殿へ崩口之砌、使に參、首尾能御座候由。

慶長七年、武藏守樣被召出、二百石被下、大坂兩陣相勤申候。寛永二年、病死。

三三、養子村井義大夫。 世伜之時分、細川越中守殿罷在候傳右衞門所へ養子に參候。

傳右衞門跡目無相違二百石被下候。後に傳右衞門と名を替申候。 明曆二年、眞田將監組の御鐵砲引廻被仰付候。寛文五年三月二十三日、病死。

三四、村井與右衞門。

寛永十八年二月十五日、被召出、三十俵四人扶持被下候。明曆二年十一月二十二日、二十代御加增被下候。寛文五年四月十七日、跡知二百石無相違被下候。延寶元年、眞田將監組に被仰付候。同三年六月六日五十八歲、病死。

三五、村井六右衞門。 丹羽平大夫組、二百石 三十八歲。

寛文二年、十四歲御目見仕、同三年八月十九日跡知二百石無相違被仰付候。丹波平大夫組に被仰付候。

三六、村井彌七郎。 村井儀大夫伜にて御座候。

正保二年九月二十一日、少將様へ御兒小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。慶安元年、御前番被仰付候。同三年、二十代御加増被下候。承應元年八月十五日、小堀彦左衛門組御小姓被仰付候。明曆二年、安藤本組に被仰付候。萬治三年十月十九日、又御前御小姓被仰付候。寛文四年十月二十五日、新知二百石被下、御步行頭被仰付候。延寳二年二月二十七日、五十石御加增被下、御横目役被仰付候。同八年閏八月九日、病死。

三七、村井七之助。　池田左兵衛組、二百石十九歳。

延寳八年二月十四日、少將様御兒小姓に被召出、六十俵四人扶持被下候。同八年十月二日、跡目二百石被下、其儘御兒小姓に被召仕候。天和元年、御前番被仰付候。同三年壬五月十四日、御馬廻被仰付、池田左兵衛組に御入被成候。

三八、武藤源右衛門。

勝入様へ被召出。其後輝政様三河より關ケ原へ御陣立之時分、御意にて貝野福右衛門と改、百石被下候。

三九、貝野源十郎。　後に福右衛門被成申

大坂御陣に少し之心馳御座候に付、於因州御知行五十石御加增被下候。寛永十六年九月末に病死。

四〇、武藤伊勢右衛門。

寛永十七年、跡知無相違百五十石被下候。萬治元年十二月朔日、大小姓役被仰付候。役知百五十石被下候。延寳五年八月三日、大小姓御免被成候、丹羽平大夫組に被仰付候。同十二月二十八日、岸藤右衛門組の御鐵砲引廻し被仰付候。同六年二月二十四日、五十六歳病死。

四一、武藤彌五兵衛。　岸藤右衛門組、百五十石二十五歳。

延寳三年正月十五日、侍從様へ御目見仕候。同六年四月二十二日、跡知無相違百五十石被仰付候。

四二、木全源左衛門。

勝入様御代御奉公可仕候由。慶長九年十一月十一日、武藏守様高六十石之御折紙被下候。同十九年八月五日、病死。

四三、村田彌兵衞。（世倅之時分、福嶋掃部殿に小知にて居申候由。）

其後慶長七年、武藏守様に被召出候由。同十八年十一月七日、百五十石の折紙被下候。元和元年十二月四日、従武藏守様、高祖父彌左衞門拝領知六十石、曾祖父彌兵衞へ被下、都合二百五十石の御折紙被下候。寛永十六年九月十九日、病死。

四四、村田彌兵衞。

親懸りにて大坂御陣へ罷立候。其後御切米にて被召出候。寛永十六年跡知無相違二百石被下候。慶安四年、御銀奉行被仰付候。寛文四年正月十一日、御免被成候。同年二月朔日、信濃守様御組御鐵砲引廻し被仰付候。同八年十月十九日、七十二歳病死。

四五、村田源左衞門。

寛文八年十二月朔日、跡知無相違二百石被仰付候。同九年閏十月十二日、四十六歳にて病死。

四六、村田彌兵衞。（水野三郎兵衞組、二百十石二十一歳。）

寛文九年十二月四日、跡知無相違五歳之時被仰付候。元和三年閏五月十四日、水野三郎兵衞組に被仰付候。

四七、村上常陸。（名嶋中納言殿にて八百石被下、與力五十人人預り申候よし。）

四八、村上助左衞門。（生國、丹波保津村之者。同所へ引込罷在候。病死。）

四九、村上權右衞門。

慶長八年、輝政様へ被召出、左衞門督様へ御附被成候。其後右近様へ御附被成、御知行三百五十石被下。右近様備前へ御越被成候時、被召寄、御合力米被下候。（權左衞門義、私ため伯父にて御座候。私を養子に仕、丹羽在所之名田をくれ候て、丹波に居申、權左衞門病死之後、奉公仕申候。）

五〇、村上藤左衛門。　水野三郎兵衛組、二百石 五十八歳。

京極丹波守様へ無足にて罷出、二三年奉公仕、江戸御供にて罷下之内、丹後守様御隠居被成候安智様御供仕、丹後へ歸り暇申請候。

萬治二年十一月三日、侍從様に被召出、本俵四十代四人扶持被下候。寛文元年九月六日、於江戸新知百五十石被下候。同年霜月、於御國大小姓役、半月刺物被仰付候。延寶元年極月二十七日、五十石御加增被下候。天和三年、水野三郎兵衛組被仰付候。

五一、子藤助。　天和元年八月十二日、侍從様へ御目見仕候。

五二、村田宗知。

五三、村田宗加。

勝入様御代に御奉公に罷出候由承及候。寛永十八年十月二十一日、八十六歳病死。

宗加義年罷寄申に付、子作右衛門孫新五左衛門御用相勤申内、石見守様御身上潰申候刻、浪人仕候。新五左衛門、山崎甲斐守殿へ本知にて罷出申候所、甲斐守殿御親子御身上潰候に付、浪人にて天和二年正月十三日私手前にて病死仕候。

五四、村田作右衛門。

寛永五年、十三歳にて少將様へ被召出候。同六年、五十代七人扶持被下候。同十年五十俵御加增被下候。同十四年、閏三月五日、二百石被下候。寛永二十年の比、御小姓役御免被成、御馬廻に被成、伊庭半藏組に被仰付候、承應元年百石御加增被下候。大小姓役被仰付、同二年、江戸へ罷下候。於江戸侍從様へ御奉公相勤候へと被仰付、同三年、大小姓役御免被成、伊庭半藏組に御入被成、右之御弓組御馬廻りにて相勤申候。寛文七年、御弓役御免被成、同八年十月十五日、伊庭半藏組御鐵砲引廻被仰付候。同九年三月二十二日、引廻し役御免被成、正木市正組に被仰付候。

延寶元年十二月二十九日、五十八歳病死。

五五、村田平六。　湯淺半右衛門、二百石 二十二歳。

延寶元年、跡知二百石十歳之時被仰付候。同八年正月十三日より十七歳にて初て御城御番相勤申候。

五六、向井十藏。

私幼少之時病死仕候故、委敷義不存候。先祖之義、猶以不存候。父於播州輝政様へ被召出、本俵四十代四人扶持被下候由。大坂一亂之時は、御長柄之者引廻し被仰付候。御供仕候由。因州へ少將様御國替被成、伯州日野郡之内御代官被仰付候内、備前へ御國替被成、上道郡之内御代官被仰付候。年罷寄御斷申上候へば、寛永十九年、御免被成、牛窓町裁判被仰付、(兩年相勤申)、老衰仕御斷申上候へば、御免被成、正保元年霜月建部御番所に役義被仰付、彼地引越申候處、同月十七日、病死仕候。

五七、向井十藏。 湯淺半兵衛組、七十八代五人扶持、五十七歳。

十六歳之時跡目本俵二十五代四人扶持被下候。御番所勤申候。其後御城下へ罷出、御奉公申上度と年來御訴訟申上候得ども、承應三年、御番所御免、九月朔日、御城下へ引越申候。御歩行被仰付、岡田喜左衛門組に被仰付候。萬治元年十二月、御近習歩行被仰付候。寛文四年十月末、本多下野守様之奥様へ御附被成、本俵二十五代三人扶持御加増被下、本俵五十代七人扶持被下。則御中小姓に被仰付、年來相勤申候處、病氣に成、御斷申上候處、延寶元年四月二十一日、在江戸御免被成、御國元へ参候て、緩々養生可仕旨、御意にて小判七兩被下、御當地へ罷歸候。岸織部組被仰付候。同四年六月二十五日、御勘定所寄方之奉行被仰付候。今年迄十ケ年相勤申候。同八月九日御馬廻伊木頼母組被仰付候。天和三年六月二十九日、湯淺半右衛門組被仰付候。

五八、虫明市內。

浦上遠江守宗景に罷在、其節備前津高郡辛川之城預り、知行七百貫領知仕候。其後宇喜多直家に相隨、右之通領知仕候。安藝毛利殿と兒嶋八濱にて宇喜多直家養子宇喜多與太郎元家と一所に、市內並世倅近內父子共打死仕候。則辛川村に葬、二人之墓有之、依之其所を市正山と申候由。

五九、虫明九平次。

父市內家を繼申筈に候得共、其節幼稚にて、辛川之城は毛利殿と堺目之城故、九平次は市內船屋敷津高郡中村へ引退罷在候。

宇喜多直家惣領八郎誕生に付、七夜之祝より戸川縫殿之助、九平次を呼出兒小姓仕罷在候。秀吉公備中高松御陣之刻、宇喜多人數は不殘御先手仕候。此節秀家八歳に罷成候に付、戸川縫殿之助・虫明九平次側を不離罷在、大形毎日高松御陣所へ秀吉公御機嫌伺に縫殿之助・九平次替々參申、音物萬事家老岡豐前指圖にて御座候、其日御返事被下候事無之、翌日必被下罷歸候。其後秀家より新知三百石給、小姓頭被申付候。秀家より九平次方へ自筆之狀ども、私方に數通御座候。關ケ原陣之刻、宇喜多秀家より九平次に加增被申付、都合七百石、近習鐵砲三十人預り供仕罷越、秀家落人に罷成、薩摩へ罷下、嶋津義久可賴と、豐後國佐賀關迄上下三人にて罷下、牧藤内と祖父九平次と供仕候へ共、人多にては難成候間、關を仕り、殘り候へと秀家被申付候。九平次殘り關を仕取申に付、色々之義申立候得共、中納言殿被申候は、我姉幷に甥宇喜多内記親子之者、作州笹吹に罷在候、是を京都へ連行、上京に置給候へば、我供仕候より、生々世々之奉公と被申候に付、上之關を渡り陸地へ上り、備前へ罷着、指圖之通笹吹に罷越、兩人を京都へ送屆申。内記後には江原十兵衛と申、九平次は奥村五郎兵衛と名を替申、三年之後惣て謀叛人の家來共、御赦免之御觸御座候に付、身上の義承立申。

翌年、花房助兵衛殿肝煎にて武藏守樣へ被召出、二百石被下候。武藏守樣御卒去之後、新參士六十人程御暇被遣候節、浪人仕、作州に罷在候。五郎兵衛世倅奥村五郎左衛門因州にて少將樣へ被召出、御國替にて備前へ參居申に付五郎兵衛義、右之子細申上候得ば、被召出候。年罷寄隱居被仰付、家督婿養子奥村金左衛門に被下候。其後五郎兵衛八十六歳にて病死。金左衛門後に名を替五郎兵衛に成申、後五郎兵衛病死仕候跡目、世倅奥村傳左衛門に被下候。虫明五郎左衛門始より別に御奉公申罷在候に付、右之通被仰付候。

六〇、虫明五郎左衛門。

天和五年六月十三日、御步行に被召出候。九月四日より御手鷹居、御城に相詰申、江戸御供に參候時は、御鷹匠に御鷹渡し、御國に被成御座候ては、前之通御鷹居、以上九年相勤申候。江戸へ二十度罷下候。兩度御使、兩度同御用、十六度は御供、此内一度三年詰仕候。御小人奉行九年相勤申候。御横目役相勤申候。御船手御用被仰付候節、御小姓組に被仰付、小堀一學組に御入被成、右之御用十六年相勤申候。承應三年極月二十二日、御船手御用之内、御加增本俵十俵被下、其節棒火箭打申も被聞召、御懇之御意にて百目御鐵砲御預被成候。度々於御前打申候。在之御普請奉行寬文五年より同十二年霜月二十九日迄、八年

相勤申候。同十二月十一日、七十四歳病死。

六一、虫明又八。　六十二俵四人扶持 四十三歳。

萬治元年、十三歳にて少將様へ御目見仕、明暦三年、侍從様へ御目見仕候。延寶元年二月朔日、跡目無相違六十二俵四人扶持被下、百目御鐵砲二挺共其儘御預被成、岸織部組に御入被成候旨、於西御丸大學申渡候。同十一月二十五日、少將様に御附人に被仰付候。同四年二月五日、西の御丸中奥に相詰可申旨、山田權左衛門申渡候。同二月十一日、御鐵砲御藥込被仰付旨、山田權左衛門申渡候。同七月十一日、御野村にて棒火箭御覽可被成旨被仰付、五町お打申候。天和三年閏五月十四日、澤權大夫組に被仰付、御式臺相詰申候。同六月十九日、中奥相詰可申旨被仰付、貞享元年二月五日、樋方上奉行被仰付候。御鐵砲之者一人・人足一人被下候。

六二、村上庄左衛門。　榊原香庵様へ幼少之時より御奉公申上候處、御浪人被成候に付 福照院様へ御預被成、本俵五十代十人扶持被下候。

然る處に寛永十二年、少將様へ被召出候。延寶三年正月二十八日、病死。御切米御扶持共被召上候。

六三、養子村上孫八。　七十八代十人扶持、三十九歳。 承應三年三月、村上庄左衛門養子に被仰付候。

同月十五日御目見仕候。寛文二年亥、香庵様・八之助様、後竿佐、岡山へ御出被成候に付、諸事御勝手方肝煎申上候様にと、庄左衛門被仰付候。其節私義御兒小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。同霜月三日、御禮申上候。然る處に、其節庄左衛門に被下候御切米本俵五十代十人扶持を、私に被下候御切米御扶持と御振替に被成候様にと奉願候に付、其通に被仰付候。寛文十年、御小姓組に被仰付候。伊木頼母組に被仰付、其後岸藤右衛門組、其後小堀主殿組、其後澤權大夫組に被仰付候。

六四、子助五郎。　貞享元年二月十五日、九歳にて御目見仕候。

孫八曾祖父森源右衛門、濃州大垣之城主氏家卜全處に罷在、戰場之心馳を數度御座候由。卜全不遁者に御座候ゆへ、家老同前に奉公仕候由。卜全病死後、源右衛門立退剃髪仕、宗知と申候。堀左衛門督殿御呼被成、越後へ參、浪人分にて罷在候。其後暇申請、濃州へ參候處、神部平助取持にて、輝政様へ被召出候。

實祖父森掃部、源右衛門一所に氏家卜全に罷在、十六歳之時美濃府（マ）と申所より大垣へ敵來候處、掃部馬上にて鑓を合、則組打甲付の首を取、卜全へ見せ申候處、則感狀給之由。其後尾州の人數、岐阜へ入働之節、十八歳之時、敵の物見成候を、掃部脇道より進出、鑓合一番首を取、卜全感狀給之由。此外少し宛の心馳數度仕候由承傳候。卜全死後、源右衛門同前に立退申候。堀左衛門督殿源右衛門同事に御呼出、知行千石給申候よし。左衛門督殿死後、秀次公へ被召出、秀次公御果候後、石田治部少輔にて八千石給候由。其後土肥飛彈取持にて輝政樣へ被召出、治部少輔士共之事は大御所樣御構被成候に付、播州之内三木之おこ谷と申候にお隱し置被成、元來三百九十石餘被下候由。御黑印森三大夫于今所持仕候。大御所樣御惡之強く御座候由、輝政樣被聞召、大坂天滿町屋（敷）御買せ、大坂にて三年御隱し置被成、其後播州村田と申所に御置被成候由。大坂御陣之時、武藏守樣より掃部義本多上野殿御斷被仰候得ば、大御所樣御前相濟申候由。本多上野殿より委細縫殿助被仰越、其節慶長十九年十月、從武藏守樣千五百石被下、御陣之御供仕候。須賀左京・掃部、軍配團御許被成、兩人御人數引廻し被仰付、兩陣共相勤申候。於因州元和八年十月十日、六十七歳にて病死。千五百石の内、嫡子森十左衛門千石、次男森九兵衛に三百石、甥小島彌次兵衛に二百石被下候。

實父森九兵衛、萬治三年三月二日、江戸御供被仰付、御先へ罷越、於江戸相願、六月二十四日、御暇被下候。同日江戸罷立、七月十七日、御國之內高嶋前にて四十八歳病死。

六五、虫明傳六。　虫明九平次二男にて御座候。

寛永二年二月、侍從樣へ十人組に被召出、三十九俵四人扶持被下、馬醫役被仰付、奥山市兵衛組に被仰付 延寶四年八月二日、御小姓組に被仰付、澤權大夫組に被仰付候。同八年九月二日、七代御加增被下候。同十一月八日、六十五歳病死仕候。

六六、虫明傳之丞。　四十六俵四人扶持 三十四歳。

寛文十二年二月十四日、御歩行被召出、三十代三人扶持被下、山田彌太郎組に被仰付、延寶八年十一月八日、父傳六病死。天和元年正月十四日跡目、無相違四十六俵、四人扶持被仰付、御小姓組に被仰付、澤權大夫組に御入被成候。在方御普請奉行、方々相勤申候。

祖父矢谷伯耆。
父矢谷又四郎。因幡にて病死。私幼少故、不存候。
伯父村瀨右京。生國、信州川中嶋。森中務殿にて七百石被下、母衣被仰付。其後仙石兵部少輔殿八百石にて被召出、大坂陣の刻、御旗奉行被申付、旗の手廻り能候に付、歸陣の後手に合申者共御呼出、御盃被下候節、一番に御呼出、殊に氏を被許候て、彼家に居申内は、仙石右京と申候。其後浪人仕、於加賀病死仕候。

六七、村瀨勘左衛門。 六十代七人扶持 三十三歲。

幼少之時分より相模守様御家來武宮加兵衛と申者之弟子に罷成、石火矢稽古仕、筒張義藥調合等不殘相極、浪人之內は、因幡に罷在、其後御當地へ參候。

寛文七年二月二十六日に少將様へ被召出、三十九代四人扶持被下、邑久郡之內土師村に在宅仕、高八十石之餘の御代官被仰付。延寶三年迄九年相勤申候。寛文七年六月四日、侍從様へ御目見仕候。延寶四年三月六日奥津高郡江與味村へ罷越、高九千石餘の御代官御用、天和二年迄七年相勤申候。天和元年極月二十六日、御代官役御免被成、御小姓組に被仰付、御加增二十一俵三人扶持被下、澤權大夫組に被仰付候。

父又四郎義私二歲之時病死仕候故、私義村瀨之家にて成長仕候故、伯父右京氏をもらひ村瀨を名乘申候に付、右京義と書上申候。

六八、村田長右衛門。 十人扶持、六十三歲。

寛永十六年備後守殿へ被召出、金一枚に二人扶持被下候。慶安三年御近習に被仰付、御加增被下、三十代四人扶持拜領仕候。明暦元年御納戸役被仰付候。寛文四年三月十五日、新知百石被下候。數馬様御卒去以後、日置猪右衛門迄各別之義を奉願候處、被聞召屆被召出候間、御番様へ御奉公可申上旨被仰渡、御切米十五石に五人扶持被下候。貞享元年病氣に付御斷申上候へば、十人扶持被下、備前へ罷越候へと被仰付候。

六九、田中但馬。 備前金川之城主松田將監殿に罷在候、病死。跡目無相違世倅長左衛門に被下候。

七〇、田中長左衛門。

金川落城之後、直家より追々御手入有之、被召出、高知にて罷在候得共、存念の子細も有之處に、金川籠城の時之武功、秀吉公被聞召及、可被召出候間、暇申請、參候樣にと、石子孫兵衛を以、被仰下候に付、中納言殿手前暇申請、播州赤穂に不逞者蜂兵庫方迄罷越候處、右之趣中納言殿御聞及、長左衛門義、秀吉公へ參候はゞ、御家來に罷在候一類共迷惑に可申付と被仰出候に付、此者共追懸參、指留候に付、長左衛門同心仕、其庫にて法體仕、其後病死仕候。

七一、田中平八。　生駒壹岐守殿にて二百石被下罷在、其後浪人仕り、病死。

七二、村川喜兵衛。　役小姓勘定河村平太兵衛引廻し四十五代五人扶持、六十二歳。

正保四年二月御勘定場被召出、本俵二十代三人扶持被下候、慶安二年三月頃、算用役にて少將樣御供仕、江戸へ參申候。明暦二年十二月頃役へ（ママ）被仰付、本俵五代御加增被下候。萬治元年、中小姓に被仰付、寛文三年、御加扶持二人被下候。延寶元年、侍從樣御加增被下、都合今俵四十五代五人扶持被下候。

七三、森本又兵衛。

越前木村常陸守にて二百石給罷在、高麗陣に心馳を仕、二三ヶ所手負申由。歸陣仕、不足成義有之、立退、丹波國前田主膳方に浪人分にて罷在、主膳身上果以後、備前へ罷越、武藏守樣へ浪人分にて被召出、御合力米六十代七人扶持被下候。寛永二年九月九日、病死。

七四、森本與三兵衛。

慶長十五年、十五歳にて武藏守樣へ兒小姓被召出、十五代七人扶持被下候。其後中小姓にて大坂兩陣御供仕候 寛永三年又兵衛に被下候。御扶持切米御加被成、九十五代十二人扶持被下候。同十一年御知行二百石被下候、承應三年二月三日、病死。

七五、森本與兵衛。　近習江戸聞番御足輕頭五百石、五十五歳。

承應三年三月二十四日、跡目無相違被仰付、熊澤助右衛門組に被仰付候。萬治元年十二月二十五日、大小姓役被仰付、役知百石、御足米三十石被下候。延寶元年四月十三日、御小姓組頭被仰付。同二年正月二十三日、數年勝手不罷成、京銀幷に他借共、借銀四十貫目餘御座候て、御奉公難勤候に付、御役義御赦免被下、拜借之義奉願之處、二十七貫目拜借被仰付、知行・役知共三百石の內、百七十石京銀に振向、二十三年に皆濟仕、殘高百三十石、幷人置領六十代。馬扶持七石被下、此分にて組其儘相勤可申旨被仰付。同四年十二月五日、瀧七左衛門跡役被仰付、四百石被下、御著之格可仕旨被仰付。同五年五月十五日、百石御加增被下、拜借銀御捨被下、御加增役知五百石、足輕四人御借し、京銀二十七貫目御捨被下、新京銀十三貫目御借し被成候。同七年二月十二日、供使之爲に、弓足輕二十人被仰付候。同八年十二月五日、事多人手差支之由被聞召、自分預り十六人の內、四人被下、殘者共假御番所罷在候とも、其方入用次第指遣仕可申候よし、以大學被仰渡候。勝手のため拜借銀買懸り、御城銀に御振替被成被遣候。無利元にて幾年被成は勝手次第になしくづし可仕旨被仰渡、都合二十五貫二百目御出し被成候。貞享二年二月朔日、勤料銀三貫目宛每年被下候旨、被仰渡候。只今私に被下候御知行二百石、役知二百石、御足米五十石、御足輕四人分御扶持給、勤料銀三貫目、右之外御足輕四人は人にて被下候。

七六、養子 森本與左衛門。

岩千々樣附、金二十兩に小人一人、三十一歲。與三兵衛男子多候へ共、不仕合にて病死仕候に付、延寶四年十一月朔日、緣類荒尾內藏助二男養子に奉願候へば、被仰付、同月三日、與左衛門御目見被仰付候。

貞享二年二月朔日、岩千代樣へ瀧波與兵衛世倅彌八郎、與左衛門御雇分に被召出、可相詰旨被仰付、金子八十匁、每歲人足一人づゝ被下候旨、被仰渡候。

七七、森川大隅。

筒井順慶所に罷在候。大隅兄森川彌市郎順慶守り分にて熟々被召仕候由。松永彈正と取合數年の內、度々用に立、於多門表打死仕候。其跡へ大隅被呼出、傍不放被召仕、雜賀陣にて取出之失念燒取能働仕樣に承知候。順慶病死之後跡。伊賀守代々伊賀小國へ所替被仰付候、家中士大分扶持を離又は知行小身に配分被仕候、大隅義は家を取立、萬事仕置等賴被申、在々身上の

義、曾て御構不被成候樣にと斷申請候得共、無役知行三百石、幷に現米を以八百石宛行之由、伊賀守家立退、浪人仕、於備前寛永十七年三月二十三日、九十有餘にて病死。

七八、田中多左衛門。

慶長六年、備前中納言秀詮卿へ被召出、三百五十石被下候。折紙有之候。弟清右衛門にも五百石被下候。翌年、秀詮卿御死去に付、浪人仕候。

武藏守樣備前へ御入國被成、慶長八年被召出、三月二十四日、御禮申上候。同十一月十一日、二百石御折紙被下候。同十三年十一月十五日、五十石御加增被下候。同十七年、麥六十代拜領仕候。同年閏十月八日、五十石御加增被下候。大坂兩陣御供仕候。元和元年十月十七日、百二十三石八斗三升御加增被下候。寛永十年正月元日、百七十六石一斗七升御加增被下候。都合高六百石被下候。武藏守樣御代より少將樣御代迄、御近習に相詰、御祐筆役相勤、以後裏判役に被仰付候。武藏守樣御代、江戶へ御供四度、京へ御供兩度仕候。少將樣御代、江戶へ御供十一度、（内兩度は三年詰仕候。日光へ御供兩度京へ御供兩度仕候。）寛永十九年七月二十六日、裏判役御免被成、同八月十二日、隱居被仰付候。（右喜入と改、）爲隱居料御藏米百俵づゝ被下候旨、十一月十四日、被仰渡候。承應元年（月欠）二十五日、七十七歳病死仕候。

七九、森川九郎左衛門。（初は田中多左衛門と申。）

寛永九年八月三日、家督無相違六百石被下、宮城筑後組に被仰付候。寛文二年十二月十三日、宮城大藏組御鐵砲引廻被仰付候。同四年、實子無御座に付、喜多嶋忠右衛門次男を養子に奉願候處、十二月九日、願之通被仰付候。先祖の氏、森川と改申度奉願候處、寛文七年二月十九日、願之通被仰付候。同十二年八月十一日、六十四歳病死。

八〇、養子森川助左衛門。（平組之頭、四百石三十三歳。）

寛文四年十二月十五日、少將樣へ御目見仕候。同九年十一月十一日、侍從樣へ御目見仕候。同十年、養父九郎左衛門江戶御留守御番、病氣にて難勤御座候に付、私名代に奉願相勤申候。同十二年十月朔日、跡目六百石之内、四百石被仰付候。天和元年四月二十六日、宮城大藏組御鐵砲引廻し被仰付候。同二年八月三日、神圖書組頭やく被仰

付候。

八一、森川九兵衛。鐵砲頭、五百石七十歳。田中多左衛門次男にて御座候。

寛永七年五月二十二日、於因州鳥取御兒小姓に十五歳にて被召出、四十代五人扶持被下。同十八年十二月二十三日、新知二百石被下候。正保四年春御米三十代拜領仕候。慶安元年十一月十五日、百石御加增被下候。明曆三年正月二十二日、裏判役被仰付候、二百石御加增、御指筒二十人御願被成候。寬文七年二月八日、忍の者五人御願被成候。同年二月十五日、兄九郎左衛門田中氏を改願之通森川に被仰付候。私も森川に成申。同十二年十月二十七日、裏判役御免、御鐵砲二十人御預け被成候。延寶二年禁裡御造營御普請奉行被仰付候。成就仕候後、十二月十一日、永井伊賀守殿宅へ被召出、銀三十枚、吳服三頂戴仕候。同三年二月二十二日、朝於御城、御料理被下、時服拜領仕候。

子龜之丞。

寬文三年二月三日、十一歳にて御目見仕候。同五年十一月十二日、侍從樣へ御目見仕候。

八二、森與三右衛門。若き時柴田修理亮勝家に罷在、百五十石給候。

其後勝入樣へ被召出候、三百石被下候。於吉田輝政樣二百石御加增被下候。母衣被仰付候。關ヶ原御陣之時、於新加納首二つ取申出。播磨御拜領の節、母衣は與三右衛門弟森彥左衛門に讓候得共、被仰付、與三右衛門義も御知行千石被下、羽織之衆十人御座候。九人には羽織新猩々緋に被仰付被遣候。與三右衛門には輝政樣御召下の猩々緋御羽織被下候。其後鐵砲二十挺御預け、寄合組之頭被仰付候。年罷寄病氣に罷成、御奉行難勤、其上嫡子は不行步、次男は幼少に御座候に付、組鐵砲并に御知行千石の內六百石指上、無役四百石被仰付被下候樣にと奉願候。いかるかと申處へ引込罷在、無程病死仕候。

八三、森四郎兵衛。跡目無相違四百石五六歳の時被下候。寬永十六年七月九日、病死。

八四、森半右衛門。

四郎兵衛跡知四百石の內、嫡子段之丞に三百石、半右衛門に百石分知被仰付候。其節池田伊賀を以、御訴訟申上候へば、祖父與左衛門は父四郎兵衛より高知被下候、只今跡目分被仰付候へば、次第に小身に罷成候。兄段之丞に一

所に被仰付被下候様にと御數申上候、此義兎角被仰出も無之に付、伊賀迄度々申候へ共、御機嫌を以て可申上由にて、延引之由。正保元年六月十九日兄段之丞病死仕候。同月末に伊賀まで申候へば、樣々御詮議埒明不申内、兄病死仕候上は、無詮義に罷成候、此上は半右衛門に分被下候御知行の分指上候へば、存念少しは通し申様に御座候間、御暇被下候様にと申上候へば、小姓に可被召仕候間、御城へ可相詰由、同年九月十五日、被仰付候。難有仕合に奉存候。自分の望は無御座候、父跡目兄に不殘被仰付被下候様にと御歎申上候處、私御城詰之御奉公仕候ては、右申懸の趣意相違に罷成候と存、其夜御國立退申候。慶長二年、無足にて歸參被仰付候。正月三日、御禮申上候、五十代五人扶持被下候、御城詰仕候。承應二年正月三日、御知行二百石被下、御歩行頭被仰付、御料理間相詰可申由被仰付。明暦二年七月八日、自今以後、御宮・御佛參御供肩衣着し可罷出候、御鷹野にて御腰物持可申由被仰付候。同三年、江戸御城へ肩衣着し御供可仕旨被仰付。寛文四年五月二十五日、百石御加増被下、御横目役被仰付候。同六年十一月十八日、御羽織に被仰付、御鐵砲五人被下候。同十一年極月十四日、病死。

八五、森半左衛門。（土肥飛彈組、三百石　十六歳。）

寛文十二年二月、三歳にて跡目無相違三百石被下、土肥飛彈組に御入被成候。延寶三年三月三日、六歳にして侍從様へ御目見仕候。

八六、守田將監。守田三之丞。守田源左衛門。（三人共、服部源右衛門書上に同じ故、爰に略す。）

八七、守田與五郎。（池田七兵衛組、百五十石　二十八歳。）

承應二年二月朔日、少將様へ御目見仕候。萬治元年四月十七日、權現様御祭禮の節、流鏑馬被仰付奉勤、翌日西之御丸におゐて御料理被下、御時服拜領仕候。寛文三年三月、父家業難相勤候に付、御暇申上、他所へ浪人仕候。同六年十一月歸參被仰付、十二月十二日、御目見仕候。延寶元年極月十五日、學校御横目被仰付、四年正月十四日、御免被成。相勤之内毎年御米二十代づゝ被下候。天和三年六月十二日、御知行百五十石拜領仕、池田七兵衛組被仰付候、

八八、中村孫右衛門。

荒尾美作守殿にて八十貫被下罷在候由。三方ヶ原御陣の時、年罷寄候故、惣領惣十郎三方ヶ原へ小太郎殿御供仕罷立、則打死仕候由。孫右衛門は、其後勝入様へ被召出、於三河病死。

八九、森島八藏。孫右衛門次男にて勝入様へ被召出。

御近習被召出、其後攝州伊丹にて御知行百石被下候。天正十二年四月九日、勝入様御父子御打死之刻、八藏二十七歳にて御供仕、致打死候。

九〇、森島久右衛門。八藏打死仕候刻、母懐胎にて未出生不仕に付、跡目不被仰付候。

天正十八年於參州吉田輝政様被召出、則武藏守様へ御附被成候由。慶長五年景勝陣・關ヶ原陣御供仕候。同六年播州へ御入國被成、輝政様より二百石被下候。同九年、武藏守様備前へ御入國被成、百石御加增被下候。大坂兩陣御供仕候。武藏守様播州御入國以後、御臺所賄奉行被仰付候。元和九年御斷申上、右御用御免被成、齋藤織部組に被仰付候。正保三年、隱居之願申上、九月朔日、願之通被仰付、承應元年六月二十八日、七十一歳。

九一、森島甚兵衛。家督無相違三百石被下、延寶二年八月十七日、病死仕候。

跡目無相違私兄森嶋兵助に被下候。兵助義同三年八月六日、亂氣仕候に付、御知行被召上候。

九二、森島甚左衛門。浮組、百石三十六歳。

延寶二年九月十二日、被召出、百石被下候。兵助義御家久敷者之筋目に付、御意にて同姓文之丞・私兩人に、百石宛被下候。

九三、森島文之丞。浮組、百石二十四歳。上に委しく記す故、爰に記さず、諸事同斷。

九四、師岡彌二郎。松平筑後守殿御肝煎にて越後少將様へ浪人分にて被召出、御扶持被下候由。

九五、師岡小右衛門。

父同時に越後少將様被召出、千五百石被下候。大坂の夏陣に權現様へ御使に罷越、先にて能働仕候に付、御褒美御知行御加增被下候由承及候。證文共手前に所持仕候處、先年下屋敷火事の節、燒失仕候。

九六、師岡三右衛門。　浮組、九十四代八人扶持　六十三歳。

寛永五年侍從様へ被召出、三十五石五人扶持被下候。其後九石に三人扶持御加增被下候。延寶五年八月、御小姓組御免、御國書組に被仰付候。

九七、子幾之助。　延寶七年十二月朔日、十六歳御目見仕候。

九八、森源左衛門。　森掃部。　森九兵衛。　右三人之事、村上權八書上にあり。

九九、森三大夫。　山脇大膳組、三百石　四十九歳。

幼少之時御目見仕候。明暦二年四月十七日、權現様御祭禮流鏑馬相勤申候。萬治二年八月九兵衛跡目無相違三百石被仰付候。寛文四年九月十七日、權現様御祭禮競馬相勤申候。同七年九月十七日鎧にて權現様奉供仕候。延寶七年六月二十三日、山崎大膳組に被仰付、天和元年七月十八日、材木屋喜兵衛義に付、江戸へ被遣候、御評定場へ三度罷出、無別條一義相濟、同年十月五日、江戸罷立、同二十日、御國へ歸着。同二十二日、登城仕、喜兵衛落着申上、十一月八日、於御城御料理被下、白銀十枚拜領仕候。

一〇〇、子藤八郎。　延寶二年二月八日、七歳にて御目見仕候。

一〇一、大森勘助。

蒲生下野守普代の者にて知行百五十石給、罷在候。下野守弟中務太輔死去以後、浪人仕、加藤左馬助殿へ先知にて罷出、於會津郡奉行仕候。式部少輔代に領知被召上候節、浪人仕、於會津病死仕候。

一〇二、森少右衛門。　勘助手前に罷在　於會津病死。

一〇三、持田善兵衛。　岡部丹羽守殿に浪人分にて罷在候。寛文十一年、大坂在番仕、於御城內病死仕候。

一〇四、養子持田治大夫。 祐筆、五十俵四人扶持 四十三歲。

善兵衛養子に成申、養父善兵衛死後、岡野内藏允所に浪人分にて罷在候。善兵衛妻は、福照院様に被召仕候さんと申候女にて御座候、善兵衛所に參候處、善兵衛病死仕に付、福照院様へ歸參被仰付候。福照院様御卒去之節、御棺御供仕、岡山へ罷越申、さん事便り無之者之由御聞召上、御扶持方四人被下候。

さん依奉願、爲御憐愍私義延寶元年十月二十六日、被召出、養母さんに被下候四人扶持、私に被下、御切米四十俵被下候。御祐筆部屋へ相詰、見習可申旨被仰付候。天和三年四月九日、十俵御加增被下候。

一〇五、祖父守田彌右衛門。 武藏守様へ於備前御料理人に被召出候。於備前病死。

一〇六、守田熊藏。

孫右衛門跡目二十五代三人扶持被下候。御次之通仕、其後御料理人に被仰付候。 則名も孫右衛門に成申候。 姫君様都へ被成御座候御供仕參、十五俵二人扶持御加增被下候。右之役延寶七年迄相勤、病死仕候。

孫右衛門忰守田小次郎へ跡目無相違四十代五人扶持被下候。叔父孫右衛門役相勤、名も孫右衛門と申候。天和元年三月十七日、亂氣仕、備前へ罷歸、孫右衛門四人扶持被下候。母共に私預り居申候。

一〇七、守田清左衛門。 熊藏兄にて御座候。浪人にて江戸に居申候。

寛永五年、於江戸御料理人に被召出、三十俵三人扶持被下候。其後二十俵御加增被下候。其後十俵御加候下增被。

都合七十八俵被下候。慶安二年正月朔日、御中小姓被仰付候。明曆三年隱居被仰付候。

一〇八、守田孫六。 料理人、七十八代三人扶持 四十九歲。

清左衛門跡目無相違被仰付候少將様へ御奉公十七年、江戸へ八度參候。 侍從様へ十四年、江戸へ六度參仕候。

一〇九、藤井助兵衛。

生國、明石にて御座候。早船三十艘計所持仕、播州明石瀨戸にて往來の船へ海賊仕候由、其後阿波國三好修理太輔殿へ被召出五百石被下候。其後喧嘩仕、相手仕留立退、播州藤井と申候に氏を森屋とかへ、しのび罷在候内、病死。

一一〇、森屋孫兵衞。孫兵衞嫡子森屋六左衞門、二男森屋七郎兵衞、三男森屋四郎兵衞と申。

孫兵衞・六左衞門・七郎兵衞三人之者、輝政樣へ御船頭被召出、二十石三人扶持づゝ被下候。御卒去之後、御人分之節、何れも一同に一割減被仰付、十八石に三人扶持づゝにて御奉公申上候。左衞門督樣へ御附被成、備前へ御供仕候。左衞門督樣御卒去之後、宰相樣へ御奉公相勤罷在候。左衞門督樣御卒去之後、相模守樣因幡へ御國替之時、御船奉行相對にて備前に其儘罷在、少將樣御入國より右之御切米にて三人ともに御奉公仕候。

一一一、守屋七郎兵衞。

實子無之に付、私を養子仕候。寛永二十年三月十五日、伊豫國今治より罷越候。七郎兵衞同年九月八日、病死仕候。

一一二、養子森屋七郎兵衞。役小姓、大船頭水野三郎兵衞引廻　五十五代三人扶持、六十一歳。

寛永二十年十一月八日、養父七郎兵衞跡目無相違十八石に三人扶持無(マヽ)相違被仰付、名も七郎兵衞に成申候。延寶二年十二月二十九日中小姓格被仰付候。

實曾祖父近藤帶刀。伊豫國桑村郡河内城に居申由承及候。

實祖父近藤々郎左衞門。久留嶋右衞門佐殿物頭仕罷在候よし。父幼少之時病死。

實父近藤清太郎。十四歳にて高麗陣之時福嶋左衞門大夫殿伊豫國之府に御座候時、被呼出、高麗に供仕、十七歳にて罷歸、十七石給候由、其後關ヶ原陣二十二歳にて罷立、心馳仕之由。右之切米十七石に二百石之御加増被下候。十七石に二百石之加増給候段、働大分たる故の由、折紙に載給之由。其後安藝へ供仕罷越候。國廻りの節、備後東條にて喧嘩仕、相手仕留立退申由。それより越前へ參、一伯樣へ本知にて罷在居申候内、又喧嘩仕、相手仕留立退、右兩人之敵多御座候故、大坂へ忍て罷在候。其後伊豫國今治に藤堂宮内太輔殿御座候節、浪人彼地に參居申、其時分加藤左馬助殿御家中に太刀の師を仕浪人御座候、彼者不汪義仕、今治へ退參候。よつて左馬助殿宮内太輔殿有之樣子申來、召捕候樣にとの義候へ共、(マヽ)達て仕折節、其邊に居合乘入、首尾能召捕候て左馬助殿衆へ相渡申由。其後大坂陣之節、右之趣意故歟、弓之達者故歟、宮内少輔殿より弓之者二十人づゝ深田又兵衞と申者と兩人に被預、藤堂和泉殿の手に加り、御陣相對、歸陣以後、本知に可被召出と御座候へ共、年罷寄、兎角身を

靜仕能在度よし斷申、今治に住居仕候。開地一町餘り永代作り取に可仕との折紙給、其上一萬石代官心付被申付候。七十七歲にて病死。

松平次郎寫

守永宗模校㊞

吉備溫故秘錄卷之八十四（干城一三）終

吉備溫故秘錄卷之八十五（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城一四（原本干城一九）目錄

一、山脇源大夫。	二、山脇虎之助。	三、山脇九之丞。	四、山脇修理。
五、山脇傳內。	六、山脇源大夫。	七、山脇源太郎。	八、山脇九之丞。
九、山崎源太左衛門。	一〇、山崎與一。	一一、山崎左近。	一二、山崎左近。
一三、山崎虎之助。	一四、山崎釆女。	一五、山崎大膳。	一六、子 三郎右衛門。
一七、山田小右衛門。	一八、山田五郎左衛門。	一九、養子 山田市郎左衛門。	二〇、子 市重郎。
二一、池田市助。	二二、山田市右衛門。	二三、山田市右衛門。	二四、山田彌太郎。
二五、子 千之助。	二六、山內與兵衛。	二七、山內主水。	二八、山內椎左衛門。
二九、子 山內與八郎。	三〇、{山內與一兵衛。 山內主水。}	三一、山內八兵衛。	三二、山內甚四郎。
三三、山內彌次兵衛。	三四、春木善右衛門。	三五、山田覺左衛門。	三六、山田角左衛門。
三七、矢部越後。	三八、矢部善兵衛。	三九、養子 矢部源右衛門。	四〇、矢部半兵衛。
四一、山川宗右衛門。	四二、山川善兵衛。	四三、山川十郎左衛門。	四四、山川市內。
四五、山川金左衛門。	四六、藪井八右衛門。	四七、藪井八右衛門。	四八、藪井次右衛門。
四九、藪井仁左衛門。	五〇、千賀滿左衛門。	五一、千賀滿左衛門。	五二、山下文左衛門。
五三、山下淸左衛門。	五四、山中市左衛門。	五五、山中權十郎。	五六、子 又市。
五七、安田孫右衛門。	五八、安田七大夫。	五九、安田市左衛門。	六〇、安田市左衛門。
六一、安田平右衛門。	六二、安田孫七郎。	六三、芥川五郎。	六四、芥川源六。
六五、山脇又右衛門。	六六、山脇茂兵衛。	六七、子 久之丞。	六八、山脇市大夫。

六九、山脇九郎右衛門。
七〇、嫡子 山脇平兵衛。
七一、山脇加左衛門。
七二、嫡子 山脇市大夫。
七三、山脇孫助。
七四、山中勘兵衛。
七五、山中勘兵衛。
七六、安井新左衛門。
七七、嫡子 小仁王。
七八、二男 惣助。
七九、孫養子 安井平藏。
八〇、養子 安井彌三兵衛。
八一、一男 彌三兵衛。
八二、二男 小塚段兵衛。
八三、安井助左衛門。
八四、養子 安井長吉。
八五、安井藤助。
八六、安井六郎左衛門。
八七、安井八左衛門。
八八、子 猪之介。
八九、安井七郎左衛門。
九〇、安井五右衛門。
九一、子 勘右衛門。
九二、鳥飼權右衛門。
九三、才崎三大夫。
九四、才崎獨支。
九五、山瀬平次郎。
九六、八木德左衛門。
九七、八木平兵衛。
九八、八木勘兵衛。
九九、養子 八木惣兵衛。
一〇〇、山内孫之丞。
一〇一、養子 山内甚六。
一〇二、平松三郎兵衛。
一〇三、平松三郎左衛門。
一〇四、山本庄兵衛。
一〇五、子 儀兵衛。
一〇六、杉 善右衛門。
一〇七、山口右衛門九郎。
一〇八、山口六右衛門。
一〇九、山口文七。
一一〇、大饗長左衛門。
一一一、椅村監物。
一一二、椅村伊左衛門。
一一三、養子 山口長左衛門。
一一四、安田茂兵衛。
一一五、安田三郎兵衛。
一一六、安田茂兵衛。
一一七、佐渡世倅 湯淺七郎兵衛。
一一八、湯淺半右衛門。
一一九、湯淺右馬允。
一二〇、湯淺半二郎。
一二一、養子 湯淺半右衛門。
一二二、湯淺又右衛門。
一二三、湯淺六右衛門。
一二四、湯淺藤左衛門。
一二五、湯淺半助。
一二六、結城滲守。
一二七、結城新之丞。
一二八、子 與右衛門。
一二九、鹿子木武藏。
一三〇、鹿子木武左衛門。
一三一、吉崎勘兵衛。
一三二、吉崎甚兵衛。
一三三、子 鹿之介。
一三四、葛卷筑後。
一三五、吉田源八郎。
一三六、吉田五兵衛。
一三七、吉田彡兵衛。
一三八、吉田定右衛門。
一三九、吉田源之丞。
一四〇、横井爲三。
一四一、横井九兵衛。
一四二、横井次郎左衛門。
一四三、横井治部左衛門。
一四四、横井又次郎。
一四五、片峯美作。
一四六、岸峯藤右衛門。
一四七、吉井一閑。
一四八、吉井藤內。
一四九、子 左平次。
一五〇、吉田新左衛門。
一五一、吉田新左衛門。

吉備溫故秘錄卷之八十五（干城一四）目錄終

吉備溫故秘錄　卷之八十五（原本無卷數）

大澤惟貞輯錄

干城　一四（原本干城一九）

一、山脇源大夫。

荒木攝津守方に罷在、軍功場數も有之由、委細者不存候。和田と合戰之時、和田軍奉行郡兵大夫と申者討取候由。攝津國伊丹籠城之時も打出、數度働申候由。

攝津守身體沒落以後、勝入樣攝津伊丹御城主に被爲成候節、伊木豐後を以て源大夫御呼返被召出、知行三百石餘被下、外に與力組十人、並鐵炮足輕二十人召連罷出、御目見仕、御禮申上候。其後源大夫義、輝政樣御貰被成候而、御附被成候由。參州吉田へ御入部之節、御知行千石、外に與力組二十人、御鐵炮足輕四十人被仰付。天正十八年、御禮申上候。世倅平大夫二百石被下候。追付病死仕候に付、其儘源大夫に被下、都合千三百石に被仰付候。播州へ御入國御加增千三百石被下、都合二千五百石、外に寄子組百人、右外之與力組二十人、御鐵炮足輕十人御增、以上五十人被仰付。慶長六年十一月三日、御禮申上候。右五十人之御鐵炮足輕之內、十人山脇市大夫、十人山脇三郎兵衞、十人山脇藤右衞門、源大夫下にて預け置、殘候二十人手前に置申候。　於姫路相煩候處、上方へ罷越養生可仕旨、輝政樣御意にて上京仕罷在候內、爲御見廻、御意山脇市大夫御使者に被下、御自筆之御書頂戴仕申候。不計御見廻に御越可被遊旨、御書に被仰下候。其御直書今に所持仕候。其後源大夫京旅宿へ御見舞被成、難有御意之由。源大夫無本復、慶長八年八月十九日、於京都五十四歲にて病死仕候。

源大夫御奉公、委細は不存候。

一、御家へ罷出、攝津國山崎合戰之節、明智內松田太郎右衞門と申士大將寶寺に陣取居申候處、谷より忍にて峯に登り、追崩候由。

一、同所小丸山に源大夫陣取罷在候得者、今半月之印にて軍之下知仕候者に、源大夫懸合、平に名乘候へば、丹波國しろ山之

城預り申す村上源之丞と名乘、馬乘鎗にて迫合、源之丞馬之額源大夫突候得者、馬けし飛申候、源之丞馬より下り立申し、源大夫家來引岡申候處を、源大夫言葉を懸候得ば、引返し組打に仕候、其時上嶋市左衛門助太刀仕、源大夫・源之丞を打取申候由。

一、濃州岐阜にて秀吉公と織田三七殿と御取合之節、輝政様は赤坂に御陣取被成、源大夫物見に被遣候得共、江渡堤にて三七殿之物見に出合、打取申候。

一、岐阜落城之時、敵打取申候由。

一、權現様小牧之御城より御打出被成、御合戰之節、井伊萬千代殿御先手と出合、打取申首を勝入様・紀伊守様御討死被成候に付、首捨申候由。輝政様手御負被成候に付、樂田迄御供仕候得者、御感之御意御座候由。

一、伊豆國山中合戰之節、輝政様・堀久太郎殿・長谷川藤九郎殿御三人、小田原之押に被成御座、林山に御陣取被成候故、旗敵方へ見へ兼候得者、輝政様御意被成候得者、源大夫折懸け旗能見へ候様、先へ出張、簱立候様にと被仰付、折懸け旗三本丸山之高所に立置候而、源大夫は山つたひに山中城大手口迄見參候得者、城之内鐵炮之薬に火付候而、敵味方騒申候、其時源大夫塀際へ着候得者、敵打出之懸合打立申候由、則秀吉公へ右之首指上候得者、名を名乘り候へとの御意に付、池田三左衛門内山脇源大夫と申上候へば、當座之御褒美として銀錢拜領仕候由。

一、濃州府加納合戰之節、敵打取申候由、並同所敵味方之間に藪有之、此影口へ敵折々集申に付、處不明に思召候間、梶浦大隅・源大夫兩人罷越、藪を取らせ申様にと、輝政様御意被成、右之藪不殘苅取らせ候。然る處に敵方より猩々皮（緋カ）之羽織着仕人數、數多引連致下知打出申に付、右兩人之者共申合せ、備を立打組共居數、待請居申候處、敵方共趣を見及引退申候。其段見屆御本陣へ引取申候得者御褒美之御意之由。右猩々緋之羽織着仕候者は石田治部少輔家老嶋左近と申者に可有之候由。

源大夫三十三之首供養も仕候由承及候得共、何國にて仕候哉、不存候。其外軍功傳承候義共御座候得共、不分明義は書立不申、右之品々は、古澤源兵衛口上を以て、父修理事上申候由。源兵衛義、前廉は源大夫家來にて罷在候得共、源大夫に忠義之者故、輝政様へ申上被召出候。修理先年事上之時分迄源兵衛存命にて罷在候由。

源大夫男子無御座、娘兩人有之、其子供養置申候。惣領娘之子虎之助と申、次之娘之子五郎八と申し、二人共於吉田輝政様

へ御目見仕候。

二、山脇虎之助。（後、改主馬。實父は、石田忠兵衛、後、改山脇修理。）

輝政様御小姓立之者、六百石被下、御弓組足輕二十人預り、母衣も被仰付候。忠兵衛義源大夫物領聟にて御座候。源大夫病死仕候刻、虎之助幼少に候得者、成人仕迄は忠兵衛に名代可仕之旨御意にて、源大夫跡目二千五百石之内、二千石、與力組二十人、御足輕五十人忠兵衛へ被仰付、（山脇主馬と名を御替被成。）慶長八年十月十五日御禮申上候。忠兵衛に前に被下候六百石、御弓足輕、又は源大夫寄子組百人は被召上候。（源大夫知高之内、殘る五百石は五郎八に被仰付、被召出候。五郎八義は、私父にて御座候。）主馬義慶長十五年、名護屋御普請へ參り相煩、四十七歳病死。同年、主馬跡目無相違二千石、與力組二十人、御足輕五十人虎之助へ被仰付、父之名主馬に被成候。後主馬大坂御陣兩度共御供仕候。因幡へ御國替にて罷越、其年二十六歳にて病死仕、妻子無御座候。

三、山脇九之丞。（父源太郎義、源大夫妻之子にて御座候。源大夫病死之年、出生仕候。源太郎に三百石被下、被召出候。）

四、山脇修理。（初、五郎八と言。）

後之主馬跡知之義、源大夫舊功之者之由御意被成、源大夫跡目に被仰出、五郎八に千石、組・御鐵炮・足輕御預り、（山脇修理と名を御替被成、）元和四年十一月二十六日御禮申上候。修理義、大坂兩陣主馬一所に御供仕候由。右之御足輕五十人は前々之通り市大夫・三郎兵衛・藤右衛門、此三人へ源大夫下にて預け候分御殘被成、殘る二十人は被召上候、寛文元年八月二十二日、六十九歳にて病死、御鐵炮指上申候。

●●●●●

實父尾林長吉、と申候。長吉父は、尾林越後と申候。越後、生國は攝津國池田にて御座候。荒木攝津守家老職にて罷在候。攝津守滅亡之後、勝入様伊丹御在城之時、浪人分にて被召出候。輝政様御代、聚樂御普請之時分、秀吉公御改被遊、越後切腹被仰付候。切腹之子細事長書上不申候。越後跡無相違長吉へ被仰付候。越後と源大夫は、右より筋目有之候故、越後切腹之砌、長吉義を賴置申候に付、源大夫聟に仕候。修理爲には、源大夫は母方之祖父にて御座候。修理幼少之時分、虎之助弟分に養置申候。

五、山脇傳內。 番頭、千石、四十六歲。

慶安三年十二月二十七日、十一歲にて御目見仕、寛文元年十月二十七日、跡目千石無相違被仰付、寄合組に被仰付同三年正月二十九日、御番頭被仰付候。延寶元年七月十五日、御前へ被召出、御鐵炮御足輕二十人被仰付候。

六、山脇源大夫。 養子虎之助。後に主馬と申候。 養子五郎八。後に修理と申候。

山脇傳內書上にくわし。

七、山脇源太郎。 源大夫妻之子にて源大夫死後出生仕候。

主馬病死之後、元和四年十一月二十六日、於因州鳥取少將樣へ被召出、三百石被下候。其後名を替り九之丞と申候。寛永十七年十一月三日、三十八歲病死。

八、山脇九之丞。 山脇傳內組、御鐵炮引廻、三百石、五十九歲。

寛永十七年十一月、跡目無相違三百石被下候。延寶五年八月朔日、山脇傳內組御鐵炮引廻被仰付。

九、山崎源太左衛門。 後、志摩と申候。

江州犬上郡山崎之城に罷在、二萬三千石領知仕、佐々木左衛門佐義弼之旗下に罷在候。元龜元年六月二十八日、江州姉川合戰之節、義弼之旗下淺野丹波守・高宮三河守・赤田信濃守・大連寺・山崎源太左衛門等信長之先手と相戰、坂井右近子坂井大藏を源太左衛門手に打取申候。義弼之家老後藤但馬も源太左衛門親類にて入魂仕候處に、義弼無故儀に但馬を取殺候に付、源太左衛門居城へ引籠申候。其外旗下之銘々居城へ引取申候。信長公江州へ御發向之節、同國愛知川にて信長公へ御目見仕候由。天正三年八月十四日、越前へ信長公御働之節、先手は木ノ目峠にて取合有之砌、從信長公秀吉公へ中入被仰付、明智日向守・池田伊豫守・山崎源太左衛門相隨・鶴賀より船に乘り、甲ノ浦へ上り、龍門寺之城三宅權之丞楯籠候處、即時に乘取。其節源太左衛門手へも首數五十計り打取申候由。依之木ノ目峠所之敵、府中を指而退申候處、加賀・越前勢を所々にて打取申候由。其節秀吉公并三人從信長公御道具被下候由。荒木攝津守逆心之節、信長公伊丹表へ御人數を取出候に付、蜂屋兵庫殿・山崎源太左衛門合宿仕、攝州表日働塚と申處に陣取罷在候所、敵方にて夜討仕、其節持口を少も不立退敵二十計り打取、源太左衛門も

自身働仕、淺手負申候由、爲御褒美御馬・白銀被下候由、播州神喜城に毛利右馬頭殿幕下神喜民部・同藤大夫楯籠申節、源太左衛門も攻口を受取、惣懸り之節、乘込候得共、城中堅固にして惣手共に乘取不申候、其後源太左衛門家老谷田藤左衛門と申者其外家中士十騎計り討死仕候由。

大坂城一向宗楯籠候節、天王寺之附城へ大坂より急ぎ攻懸り候砌、信長公後詰被成候節、源太左衛門御供仕、首數六十計打取申候由、天正九年、伊賀國一揆御退治として信長公御人數被遣候刻、厚地萬五郎・山崎源太左衛門兩人永田之城を攻合可申手合にて打上候處、敵野間へ出、一戰有之候、源太左衛門手へも首數七十計取り、其手之大將分も打取申候由。同十年六月二日、信長公御他界、同年之秋、秀吉公へ被召出、御旗下組に被仰付候。馬廻故十五騎、與力被仰付。其年之冬、攝州三田へ本知二萬三千石にて取替被仰付、三田城へ罷越候。其節叙爵被仰付、志摩守と申候。天正十八年、關東岩附北條安房守持之城攻之節、秀次公先頭、並木村隼人殿・山崎志摩守兩人攻口を受取、惣構へ乘込、山崎家來共高名仕候處、扱被成引取申候由。同年、武州八王寺之城に北條陸奥守殿家來横地某・中山勘解由・狩野一庵大將分之由にて罷在候處、加賀中納言殿爲大將、木村隼人・山崎志摩守兩人御旗下より被指加、一戰之時、山崎家來も首數多打取申候由。同十九年二月二十八日、志摩守四十五歲にて於伏見病死。

一〇、山崎與一。（後、左馬允と改。）

從秀吉公父跡目二百三十石（二萬三千石カ）無相違被仰付、攝州三田之城に罷在、叙爵被仰付。高麗御陣之節、秀吉公御供仕、肥前國名護屋へ罷越候。從彼地對州へ番出仕罷越、三年相勤、秀吉公從名護屋御登被成候節、御供仕罷登候由。慶長五年、東西兵亂之節、左馬允大坂に罷在、其砌り良正院樣左馬允內室天德院樣之御方へ御入被成候。輝政樣御屋敷へ御歸被成候節は、左馬允家來谷田甚太郎と申者御供仕候、左馬允儀丹後田邊之城へ寄手に被仰付、田邊へ罷越候へ共、扱に成申に付大坂へ飛歸り、關東へ御越被成候衆、御留守之御屋敷方へ人質御上げ候樣との義參候に付、輝政樣御人質之義、長束大藏へ申延意候處、其後は人質之沙汰も無之由。良正院樣左馬允屋敷へ被爲入候御樣子、先年御尋被成候由、日置猪右衛門申聞候に付、其節谷田甚太郎自筆之書付差上申上候。關ケ原御勝利之後、從權現樣同年冬取替被仰付、因州若櫻之城へ罷越候。領知高延候而三萬五千石被仰付候。左馬允身上無別義被仰付候段、良正院樣御蔭にて可有御座と申候。慶長十九年十月八日、四十八歲にて於京都病死。

一一、山崎左近。後、甲斐守と改。

從台徳院樣、父跡目無相違三萬五千石被仰付、若櫻へ罷在、慶長十七年七月叙爵被仰付候。大坂兩度之御陣御供仕、武藏守樣御旗下に罷在相勤申候。元和三年七月取替被仰付、備中成羽にて三萬五千石被下候。寛永十五年四月、大猷院樣御加增にて四萬石被仰付、肥後之內天草富岡之城へ取替被仰付候。同十八年、一萬石御加增被仰付、都合五萬石にて讚州丸龜へ所替被仰付上意にて新城取立罷在候。慶安元年三月十七日、五十五歳於江戸病死。

一二、山崎左近。後、志摩守と申。

從大猷院樣、跡目無相違五萬石被下、叙爵被仰付、丸龜に罷在候。慶安四年十月二十六日、三十五歳於讚州丸龜城病死。

一三、山崎虎之助。

三歳にて跡目從嚴有院樣被仰付、其儘丸龜城へ被仰付、志摩守弟山崎勘解由爲後見。其節被召出、五萬石之內五千石勘解由に被仰付、明暦三年三月六日、虎之助八歳にて於江戸病死。家斷絶仕候。

一四、山崎釆女。左馬允四男、甲斐守爲には弟にて御座候。

知行千石、侍組、並足輕申附、甲斐守家中に罷在候。寛永十一年七月十五日、二十七歳於備中成羽病死。

一五、山崎大膳。番頭、千二百石、五十六歳。

父釆女跡目千石無相違、但足輕共從甲斐守申付候。志摩守代に圓龜にて加增二百石申(被)付候。虎之助死後迄圓龜に罷在候。明暦三年虎之助病死、家斷絶仕候砌は、從堀田上野介殿本知千二百石に可被召抱旨、牧野織部殿より被仰聞候得共、少將樣・相模守樣御兩家之內へ罷出度存候間、上野介殿へ御斷被仰下候樣にと織部殿へ申而、浪人にて罷在候。萬治元年、於江戸少將樣へ牧野織部殿を以て山崎勘解由申上候は、只今松平伯耆守樣へ罷在候山崎平次右衞門・私兩人儀、少將樣・相模守樣へ一人宛被召出被下候樣にと申上候處、少將樣へ私被召出、同年十一月十五日、御禮申上候。

同十二月十二日、本俵三百俵被下、同月十五日、寄合組被仰付候。同二年六月朔日、侍從樣へ御禮申上候。同十二年六月十五日、御知行千二百石被仰付、帶刀を改大膳と被仰付候。寛文十年八月二十七日、西御丸にて少將樣御前へ被召出、御鐵

炮頭被仰付、御足輕二十人被仰付候。延寶元年、長崎へ名けれす舟入津仕候に付、御使番之内御使者被仰遣候得共今一左右之樣子次第に急に、私義可被遣候間、預り御鐵炮二十人召連可罷越旨、六月六日被仰付、御鐵炮諸道具用意仕候。其節世倅三郎左衛門彼地へ罷越度旨、池田大學迄願、父子人馬用意仕罷在候へども、無別義舟之由申來候に付、不被遣候。延寶七年六月二十三日、御前へ被召出、御番頭被仰付、相組二十人、御自筆之御書附頂戴仕候。先祖山崎之系圖所持仕候。

一六、子三郎右衛門。

寛文十一年三月朔日、十四歲にて少將樣へ御目見仕、同年六月十四日、侍從樣へ御目見仕候。

一七、山田小右衛門。 福嶋左衛門大夫殿にて千石餘、足輕二十人預り申候、高麗陣供仕、能程之働も仕候由。

一八、山田五郎左衛門。 私母方之伯父にて御座候。

水野日向守殿に浪人分にて罷在候得共、御斷申立退、大坂籠城之時分籠り、塙團右衛門組に罷在候。大坂落、其後本多美濃守殿へ被召出、少之內罷在暇申候。浪人にて罷在候處、少將樣御在江戶之時分被聞召由にて、丹羽藏人より五郎左衛門大坂にて働之書付にて指立申由、廣內五郎兵衛方へ申越、五郎左衛門其節他國に罷在候處、申遣書附取寄差上げ申候。

一、塙團右衛門蜂須賀阿波守殿へ夜打仕候も罷出、隨分かせぎ申候得共、爲差手に逢小人數城中へ取込申刻は、隨分跡より引取申候。

一、團右衛門かしのいにて働申節、相組之內五郎左衛門共に三人、遂に先懸仕候處、五郎左衛門手前に鎗鑓と寸鑓•十文字三人出向、曾迫合之處、五郎左衛門腹とかいな二ケ所手を負倒申候を、敵方より二人罷出、甲と具足之上二三ケ所太刀打に仕少之內息絕申候所、味方次第にかさみ申に付、敵方控申、味方彌々詰寄申候故、味方一所に加り、次第に敵もかさみ、二三度之迫合御座候而、團右衛門討死仕候に付、味方崩申候。五郎左衛門深手負申候に付、相組之內田屋馬之助と申者、若黨を相添引取申候。後日大野主馬之處にてかし山之働ども詮議仕候、五郎左衛門義右之通に相究、御宿越前藤井一二齋、此二人を以て大野主馬申聞候は、秀賴公御感狀可被下之由申渡候。然共かしの山の働、卯月二十九日にて御座候、五月七日落城仕候

に付、感狀は取不申候。右之趣大坂者は何も存可申、存命之者方々に餘多御座候。

寛永五年之比、少將樣御在江戸之刻、五郎左衛門儀被召出候間、他國かせぎ不申、御國へ呼寄置可申樣にと丹羽藏人承候而、廣岡五郎兵衛方へ申越、其刻他國に罷在候を因州へ呼寄置申、翌年御歸國被遊被召出、御知行五百石被下候。寛永十二年、病死。

一九、養子山田市郎左衛門。旗奉行、三百石、七十五歳。

養父五郎左衛門跡知二百五十石被仰付、瀧川出雲組に御入被成候。慶安三年閏十月、五十石御加增被下候。承應元年御横目役被仰付候。寛文四年九月、御横目役御免被成候。同五年より同八月迄、芳賀内藏允組に被仰付候。同九年、草賀宇右衛門組頭被仰付。延寶元年、他國よりの御使者取次被仰付、同三年迄相勤申候。　同六年、寺社奉行被仰付候。天和三年迄相勤申候。天和二年、御籏本奉行被仰付候。

實曾祖父安藤出雲義、美濃國揖斐と申所に小城所持仕罷在候處、信長公御代に身上破滅仕、子供流浪仕、先祖之書附無御座候。祖父安藤監物義、金吾中納言殿にて千石餘被下、番頭被仰付、中納言殿御果にて浪人仕候。

監物倅安藤儀左衛門と、申候、（五郎兵衛之父に候）。他家へ養子に參候。儀左衛門義氏家左京殿・前田肥前守殿・增田右衛門尉殿等に奉公仕候。右之内越中國すへもり籠城之節、首尾好働候。右衛門尉殿に罷在候内高麗陣にも罷越、首取申候。其刻馬を乘捨申候處、右衛門尉殿御感にて馬調可申由にて、馬代給候由。大和郡山にて右衛門尉殿籠城被仕候儀に御座候處、右衛門尉殿家來、儀左衛門共に二十人に及、妻子を城内に籠申に付、右衛門尉殿大に忠功之由感被申候墨付をも給候由承及候。其後金吾中納言殿へ被召出、四百石被下候。中納言殿御果之後、池田備中守樣へ御呼被成、御籏奉行被仰付。出雲守樣御代備中松山にて病死仕候。五郎兵衛若輩より實父手前に居不申、方々仕候處、先祖之義、並出馳之委細は、不存候。

父廣内五郎兵衛義、幼少に付祖父監物養子に成申候。慶長九年、武藏守樣へ被召出、大坂兩陣相勤申候。御城御番年々無懈怠、度々御用相勤申候に付、御米三十俵被下候。明暦四年五月晦日、七十九歳病死。跡目權右衛門に被仰付候。

二〇、子市重郎。　寛文八年二月十五日、九歳にて少將樣て初而御目見仕、同九年、侍從樣へ御目見仕候。

二一、池田市助。　尼子義久々奉公仕、其後山中鹿之助不通に付一所に罷在候處、度々心馳も御座候由。

二二、山田市右衛門。
幼少より鹿之助所に罷在、度々心馳之墨付御座候。秀吉公御墨付二之內、一ッ有、鹿之助墨付八ッ之內、四ッ、市右衛門出陣仕候節、妹に預置候得者、妹聟津田重右衛門と申者討死仕候に付、妹流浪仕候內、失申候由、殘る五ッ爾今御座候。本知不存候。加增之知高兩度に千石餘、右之墨付御座候。其後戶川肥後殿に浪人分にて罷在、六百石之御擬作之由、肥後殿にて仕者、數度仕候內、作州にての仕者相手大勢有之候を仕留申候由。

二三、山田市右衛門。　跡目五百石之內三百石被仰付候。萬治二年六月十日、病死。
肥後立退、播州にて輝政樣へ被召出候間、御禮申上候樣にと被仰出候所、御卒去被成候に付、武藏守樣へ慶長十九年被召出、五百石被下候。刺物御免被成候。寬永八年六月二十五日、病死。

二四、山田彌太郞。　鐵炮頭、三百五十石、五十四歲。
正保二年、少將樣に御目見仕、慶安三年十月、弓稽古仕候得と被仰渡、御米二十俵拜領仕候。承應元年十月、中小姓少將樣へ被召出、六十俵四人扶持被下候。明曆三年、於江戶御藥込御用被仰付候。萬治二年八月朔日、跡知三百石無相違被仰付候。寬文元年、御藥込御免、御步行頭被仰付、同二年、御步行頭御免、御橫目役被仰付候。延寶二年十一月十三日、御加增五十石被下候。天保三年閏五月十四日、御橫目役御免、御足輕二十人被仰付。

二五、子千之助。　天和元年、八歲にて御目見、貞享二年十一月二十四日、病死。

二六、山內與兵衛。　明智日向守殿にて六百石給候。訴訟事に付立退、浪人にて京都に罷在、一亂已前に病死。

二七、山內主水。　佐竹殿にて千石被下、其後細川三(齋カ)齋にて千石被下候。
大坂冬陣之砌、武藏守樣に被召出、四百石被下候。寬永十七年、三百石御加增被下、同十九年、百石御加增被下、都合八百石被下候。同二十年八月二十一日、病死。

二八、山內權左衛門。寄合組、七百石、五十九歲。

寛永十五年、侍從樣御誕生以後二月三日十一歲にて被召出、御宮參之節、御脇指を持御供仕候。同十九年、少將樣へ主水御訴訟申上、御知行御分被成、主人に五百石、私に三百石被仰付。慶安元年、御小姓役被仰付候。明暦二年六月二十八日、御横目役被仰付候。萬治元年十一月十四日、裏判御用被仰付候。二百石御加增、足輕二十人御預被成候。寛文七年二月八日、小物見之者御預け被成候。山田道悅取立可相渡由御座候得共、其內に道悅病死仕候に付、人數は難記御座候。延寳八年六月十五日、御加增二百石被下候。天和三年閏五月二十八日、於御本丸寄合組に被仰付候。同六月二十八日、御船奉行被仰付候由、御直に被仰渡候。貞享二年四月、病氣以之外指起、無性之儀に罷成、倅與八郎同役中迄右之趣申上候處、被聞召候由、五月四日、御船手御用御免被成候。病氣聢とも無之に付、御預けの御足輕御斷申上候得者、六月二十七日御免被成、寄合組に被仰付候。

二九、子山內與八郎。宮城大藏組、八十俵四人扶持、四十歲。

明暦三年正月十五日、御目見仕候。同年十一月朔日、侍從樣へ御目見仕候。寛文七年正月二十七日、少將樣へ被召出、六十俵四人扶持被下候。同二年二月五日、御兒小姓被仰付候。同十二年八月十五日、御近習御兒小姓被仰付候。延寳八年六月十五日御加增被下、都合八十俵拜領仕候。天和三年五月二十八日、當分池田左兵衛組被仰付、同閏五月十四日、宮城大藏組に被仰付候。

三〇、山內與一兵衛。　山內主水。

三一、內山八兵衛。

一歲之時山內主水所へ養申處、七歲にて台德院樣へ被召出、四百俵拜領仕候。十四歲にて駿河大納言樣へ被爲附、六百俵拜領仕候。二十歲之時甲斐國にて御暇被下、大納言樣御逝去前に主水手前へ歸申候。

寛永二十年十一月、主水跡目五百石被下、若原監物組に被仰付候。明暦二年正月三日、大倉隼人組御鐵炮引廻被仰付、其後中圖書組之引廻役被仰付候。寛文十年三月七日、病死。

三二、山内甚四郎。 水野三郎兵衛組、五百石、三十歳。

寛文十年五月十二日、跡目無相違被仰付、六月朔日、繼目之御禮申上候。其儘御圖書組に被仰付候。延寶五年閏二月二十八日、水野三郎兵衛組に被仰付候。

三三、山内彌次兵衛。 宮城大藏組、六十俵四人扶持。山内權左衛門二男にて御座候。

延寶元年十月十八日、少將樣御小姓に被召出、六十代四人扶持被下候。天和三年閏五月十四日、宮城大藏組に被仰付候。

三四、春木善右衛門。

中村式部少輔殿に罷在候。天正七年十月二十一日、紀州後のさいか陣之節、千石堀にて討死仕候。其節父覺左衛門二歳にて御座候處、委細不存候。

三五、山田覺左衛門。

幼少より吉田宗賀處に浪人分にて弓稽古仕罷在候内、關ケ原宗賀一所に罷立同退候之砌、宗賀鎗を合申刻、覺左衛門も敵と打合、三ケ所手負申節、其儘敵味方大勢入亂候に付、宗賀一所に退申候。此時覺左衛門十七歳之由。

其後田宮對馬守申上候而、武藏守樣へ慶長十四年本俵二十五俵四人扶持にて御歩行に被召出候。追而御知行も可被下由に御座候。正保四年、中小姓に被仰付、草賀宇右衛門組に罷在候。慶安三年、隱居被仰付七十二歳病死。

三六、山田角左衛門。 伊木兵庫組、三十九俵四人扶持、六十二歳。

慶安三年、跡目無相違本俵二十五俵四人扶持被下候。右之通中小姓格に被召仕候。延寶四年、芳賀内藏允組に被仰付候。貞享元年二月四日、當分伊木兵庫組被仰付候。

子甚六。 延寶元年二月朔日御目見仕、天和二年二月二十五日、立退申候。

三七、矢部越後。 高力左近殿に罷在候。

三八、矢部善兵衛。

武州忍之城主成田下總殿に、善兵衛母方之祖父門井隱岐と申者居申に付、忍一亂之時、一處に籠城仕り、城中より五人大手門外へ進出鎗合申、敵に鑓付申候處、敵之内より鑓にて善兵衛肩口より脊へ突通し暫有之内、城内より門を開き吐と出申候に付、敵退、善兵衛を突申候者も跡へ引き、鑓もぬけ申候由。殘る四人之者も手痛働き、二人は討死仕候由。其後丹波笹山城之松平周防守殿に罷在候。

其後慶長八年、御旗本大塚平右衛門殿被仰付、武藏守樣へ被召出、二百石被下候。大坂御陣兩度共御供仕候。御代官御用等勤申候。寛永十六年五月十七日、六十九歲にて病死。

三九、養子矢部源右衛門。善兵衛宅に養子に參候。

寛永九年比より名代勤申候。寛永十六年跡目無相違二百石被下候。慶安二年二月十五日、土肥左吉預り御鐵炮引廻被仰付候。寛永十年八月二十六日隱居被仰付、同十一年九月十六日、六十七歲にて病死。

實父丹羽善右衛門。雲州堀尾帶刀殿に罷在、三百石被下候。山城殿代暇申請、追付煩出、於雲州病死仕候。源右衛門幼少之時故先祖之義不存候。

四〇、矢部半兵衛。土肥飛彈組、二百石、三十九歲。

寛文五年九月十七日、權現樣御祭禮競馬相勤申候。同六年九月十七日、權現樣御祭禮鎧之供奉、父名代に勤申候。

同十年、家督無相違二百石被下候。御毛見にも罷出候。禁裡御普請にも參候。

四一、山川宗右衛門。勝入樣へ御奉公申上候。

四二、山川善兵衛。

輝政樣・武藏守樣へ御奉公仕候。大坂落城之年、病死仕候。跡目十郎左衛門兄善之丞六十俵七人扶持無相違被仰付候。其後因州百五十石被下候。御膳奉行相勤候處、病死仕、世倅無御座、跡絶申候。

四三、山川十郎左衛門。

元和元年十一月、於江戸六歳之時、少将様へ被召出、十五俵二人御扶持被下候。同八年十一月、於因州十五俵御加増被下候。寛永九年十一月十五日、於備前二十俵二人扶持御加増被下候。慶安三年八月晦日、御知行百五十石被下候。寛文六年十二月五日隠居被仰付、為隠居料六十俵四人扶持被下候。同七年、御城代假助番相勤申候。同九年、御城代被仰付、御役料六十俵被下、御鐵炮十挺御預け被成候。延寶八年に役義御免被成、次男金左衛門被召出、十郎左衛門には為茶領二十俵被下候。十郎左衛門七十一歳まで御奉公相勤申候。

四四、山川市内。池田左兵衛組、百五十石、四十歳。

少将様へ慶安三年五月五日御目見仕、侍従様へ明暦三年十一月十五日御目見仕。萬治二年十月十九日、少将様へ御弓組に被召出、六十俵四人扶持被下候。寛文六年十一月五日、家督無相違百五十石被下候。天和三年閏五月十四日、池田左兵衛組被仰付候。

四五、山川金左衛門。六十俵四人扶持、三十六歳。

寛文八年七月二十三日、少将様へ御目見、同九年九月朔日、侍従様へ御目見。延寶八年六月十五日、少将様へ御中小姓に被召出、六十俵四人扶持被下候。天和三年五月二十八日、侍従様御弓組に被仰付候。

四六、藪井八右衛門。黒川伯耆守殿に罷在候。

四七、藪井八右衛門。同所に罷在候。伯耆守殿御息女様池田藤九郎様御縁邊之時、御供仕、則勝九郎様へ御奉公仕候。其後御暇申請候而、大和大納言殿にて三百石被下候。其後立退、岐阜宰相殿にて三百石被下候。宰相殿に四五年居申、又立退、木下右衛門殿にて三百石、鐵炮三十挺預り申候。尤地にて御座候由。寛永九年十二月晦日、病死。

四八、藪井次右衛門。八右衛門一所に右衛門大輔殿に奉公仕候。祖父暇申に付、一所に寛永元年罷退申候。

同九年十二月、少将様へ被召出、同十五年二月、百五十石被下候。延寶四年十二月十七日、七十八歳病死。

四九、藪井仁左衛門。池田七郎兵衛組、百五十石、四十八歳。

延寶五年四月二日、跡知百五十石被下候。

五〇、千賀清左衛門。佐治左馬允・同息八郎と二代奉公仕候。知行三百七十石給候。勢州かうと陣にて心馳も御座候由。

五一、千賀清左衛門。織田有樂に奉公仕、三百石被下候。其後正保三年七月二十九日、於備前病死。

五二、山下文左衛門。幼少之時松原伯耆守殿に罷在候、其後京極若狭守殿に罷在、其後京極丹羽守殿へ被召出、百五十石被下候。

丹波守殿御言葉被相添、少將樣へ寛永四年三月朔日被召出、三百俵被下、十六人扶持被下候。寛永七年十月十九日三百石之御折紙被下候。明暦二年正月三日、宮城大藏組之御鐵炮引廻被仰付、寛文二年迄相勤申候。寛文二年九月十五日、御小姓組之組頭被仰付。延寳六年六月二十九日、御代官頭被仰付、御加增百石被下。宮城大藏組に被仰付、同年十一月十九日、御代官頭御免、寺社奉行被仰付、御近習に可相詰旨被仰付候。同六年三月十二日、病死。

五三、山下清左衛門。宮城大藏組、三百五十石、二十六歳。

（文）寛七年閏二月二十二日、八歳にて少將樣へ御目見仕候。同年六月四日、侍從樣へ御目見仕候。延寳八年五月十五日跡目三百石被仰付候。

五四、山中市左衛門。

元和六年、少將樣へ中小姓に被召出、三十俵四人扶持被下、刀番仕候。其後御前へ被召出、御直に御免被成、御鐵炮御藥込被仰付、三年相勤。呉服奉行兩年相勤申候。御月額六年勤申候。其後二十俵御加增被下候。又其後三十俵御加增被下候。寛永十年正月朔日、新知百五十石被下候。同十九年、御膳奉行被仰付候。慶安三年閏十月十八日、五十石御加增被下候。御膳奉行二十八年相勤申候。寛文十年七月二十七日、御手廻之御鍮奉行被仰付、八年相勤。延寳四年、相煩、御役儀被成御免、組外に被仰付。天和元年九月、病死。

五五、山中權十郎。宮城大藏組、百五十石、四十二歳。

寛文元年正月十五日、少將樣へ兒小姓に被召出、三十俵四人扶持被下。私太田權兵衛次男にて御座候處、同二年極月二十四日、市左衛門養子に被仰付候。同四年九月二十五日、御前香御小姓被仰付候。同七年正月二十三日、本俵十俵御加增被下候。寛文十二年九月二十二日

御加増、今俵十八俵被下、都合八十俵に被成候。延寶七年、在宅願之通り被仰付、宮城大藏組に被仰付候。天和元年十一月十八日、養父跡目二百石之内、百五十石被下候。

五六、子又市。　天和三年七月朔日、九歳にて御目見仕候。權十郎。

實祖父太田善右衛門。慶長五年、武藏守樣に被召出、御知行四百石被下候。同七年、御小姓役義被仰付候。大阪御陣之刻、御使番、剌物半月被仰付、病死迄其通相勤申候。

實父太田權兵衛。寛永十年、跡目四百石之内三百石被下、百石は權兵衛弟助三郎に被下候。（太田權兵衛事、上に同じ、右に略す）。

五七、安田孫右衛門。　信長公へ被召出、尾州淸州之内淺野と申所不殘被下候由。

五八、安田七大夫。

若年之時分、信長公御旗本生駒市左衛門召連、江州小谷合戰相勤、二百石給候。其後暇申、佐々陸奥守殿にて二百石、二十人扶持給、朝倉合戰に心馳仕、百石加增給候由。其後暇申、小西攝津守にて三百石給、高麗陣相勤働、褒美に馬給候。其後加藤肥後守殿にて三百石給、其後浪人仕。

慶長九年、武藏守樣に被召出、二百石被下候。寛永十四年三月二十六日、七十七歳病死。

五九、安田市左衛門。　七大夫次男にて御座候。

兄平右衛門御家浪人仕以後、少將樣へ御目見被仰付、七大夫領知無相違二百石被下候。承應三年十月、上道郡之内御代官被仰付、九年相勤申候。其後御搗定上聞御用、五年相勤申候。其後御銀奉行、十七年相勤申候。天和三年二月四日、七十三歳病死。

嫡子定之丞。

寛文元年十一月五日十六歳にて侍從樣へ御兒小姓に被召出、同十年迄相勤、同年三月二十一日二十五歳にて病死

二男孫七郎。寛文四年、同名平右衛門養子に被仰付候。

六〇、安田市左衛門。草賀宇右衛門組、二百石、二十三歳、三男にて御座候。

見定之丞病死以後、寛文十一年正月十五日、八歳にて少將樣へ御目見仕、同年六月十五日、侍從樣へ御目見仕候。天和三年四月十八日、市左衛門跡目二百石無相違被下候。

六一、安田平右衛門。安田七大夫嫡子にて御座候。

少將樣へ御兒小姓に被召出候。如何樣之品にて御座候哉、御暇申上浪人仕、其後生駒壹岐守殿ニ百石可被下由にて、當分合力米二百俵給り、大小姓役相勤罷在候所、家中出入大勢立退申候節、一同に浪人仕候。明暦三年九月二日、少將樣歸參被仰付、本俵五十俵五人扶持被下、御小姓組被仰付候。寛文三年二月二十五日、二百石御折紙被下候由。信濃守樣同組に被仰付候。同七年正月十六日、六十二歳病死。

六二、安田孫七郎。中村主馬組、二百石、三十六歳。安田市左衛門二男にて御座候。

寛文四年、伯父平右衛門養子被仰付、七月朔日、少將樣に御目見仕候。同五年、侍從樣へ御目見仕候。同七年閏二月九日、平右衛門跡知無相違二百石被下、中村主馬組被仰付、御毛見數度罷出候。大坂御米拂にも參勤申候。天和三年閏五月九日、御郡奉行被仰付、津高郡奧・口相勤申候。貞享二年二月十五日、御郡替被仰付、上道郡奧・口御用相勤申候。

六三、芥川五郎。荒木攝津守殿に罷在、數度場數有之由に候得共、慥に不承傳候。

六四、芥川源六。後、山脇三郎兵衛。中川瀬兵衛樣へ兒小姓に被召出候。御暇申給。

山脇源大夫爲に甥にて御座候に付、濃州池尻へ罷越、源大夫を以て輝政樣へ御奉公に罷出、其砌山脇三郎兵衛に成申候。慶長六年十一月三日、於爐踏三百五十石被下候。山脇源大夫に被仰付候御鐵炮五十挺之內、源大夫下にて三郎兵衛に預け置申候。岐阜川越之節、三郎兵衛手答申候由。五月七日、大坂落城之節、淺黃者打取申候由。元和九年、隱居被仰付。寛永十一年三月十三日、於備前病死。

六五、山脇又右衛門。

於姫路輝政様へ御中小姓に被召出、四十俵五人扶持被下候。大坂陣七七日落城之節、浅黄者打取申候。元和九年、於因州家督三百五十石、御鐵炮共無相違被仰付、又右衛門に被下置候御切米扶持共三郎兵衛隠居料に被下候。寛永十二年正月十日、病死。

六六、山脇茂兵衛。 山脇傳内組、三百五十石、六十歳。

又右衛門跡知無相違被仰付候。幼少故御鐵炮被召上候。慶安二年二月、山脇修理預り鐵炮引廻被仰付候。寛文十年八月二十七日、山脇傳内組頭役被仰付候。同十一年、地逼塞奉願被仰付、御法之通り役儀指上候。延寶二年十一月十九日、御勘定上聞役被仰付、貞享二年御斷申上、三月十五日、御免被成候。

六七、子久之丞。 延寶四年二月十五日、侍從様へ十四歳にて御目見仕候。

六八、山脇市大夫。 荒木攝津守殿に罷在候。攝津國伊丹落城之時、行田伊賀と申者城より出勤申時、市大夫も相添切々かせ義手に逢申候由、具成義不存候。

勝入様攝津國伊丹御城主被爲成候節、山脇源大太被召出候刻、市大夫義與力組一所に罷出候。於姫路輝政様より四百石合戦之時、源大夫と一所に高名仕候由。因幡へ岐阜川越之時、敵打取申候由。大坂落城之節、浅黄者打取申候由。御國替之後隠居奉願候處、家督九郎右衛門に無相違被仰付候。九郎右衛門被下置候御切米五十俵五人扶持、隠居料に被下候。

六九、山脇九郎右衛門。

被召出、御切米本俵五十俵五人扶持被下候。大坂陣山脇主馬組に罷在、浅黄者打取申候。於因州家督無相違被仰付候。其後病死。

七〇、嫡子山脇平兵衛。 跡目無相違四百石被下候。於備前病死。知行被召上候。

七一、山脇加左衛門。 九郎左衛門二男にて御座候。

祖父市大夫存命之内、手前に養置、隠居料を被下候様奉願出候に付、市大夫相果候節被召出、五十俵五人扶持無相

遂被下候。寛永十九年八月三日、中小姓に被仰付、正保二年十一月、中小姓御免、山脇修理組へ御入被成候。加左衛門名を孫助と替り申候。延寶八年二月二十日、五十五歳病死。

七二、嫡子山脇市大夫。　同年五月朔日、跡目無相違被仰付候。其後不計亂心仕候。

七三、山脇孫助。山脇傳内組、五十俵五人扶持、十七歳。加左衛門二男にて御座候。

兄市大夫亂氣仕候段、山脇傳内申上候處、御家久敷御奉公申筋上目との御意にて、私被召出、五十俵五人扶持被下天和二年三月二十七日、御目見被仰付。

七四、山中勘兵衛。

寛永十一年六月十五日、少將様へ被召出、本俵二十五俵四人扶持被下候。鈴木登之助手前大筒之手傳役被仰付候。正保元年九月十五日、登之助病死仕候に付、預り申大筒、並鐵炮之諸道具、十月二十四日、御城へ上げ、内藤四右衛門と兩人預り、夫より土方源内指圖を受申候由。同四年七月、登之助より上り申大筒、悉く仕込を極に申旨被仰付東之山にて大筒仕込、其後十町・十五町打申、八月晦日仕廻申、爲褒美小筒拜領仕候。慶安三年三月五日右之大筒、堤八兵衛・松原助左衛門へ御預け被成候に付、相役兩人へ渡し可申旨被仰付候。承應元年、本俵十俵御加增被下、岡田喜左衛門組に被仰付候。明暦二年、本俵五俵御加增被下、御切米四十俵被下、御小姓組に被仰付。天和元年十一月三日、六十八歳病死。

七五、養子山中勘兵衛。山脇傳内組、五十俵四人扶持、十八歳。

延寶五年正月十五日、九歳にて侍從様へ御目見仕候。其節長大夫と申候。　天和二年正月十七日、養父勘兵衛跡目本俵四十俵四人扶持之内、今俵五十俵に四人扶持被下候。山脇傳内組に被仰付候。名も勘兵衛に成申候。

實父、幼少之時相果申候故、委細之義不存候。

七六、安井新左衛門。

織田信長公に罷在候時、寺西十藏と申者と喧嘩仕、打候故、蒙御勘當、浪人仕候處、織田勘十郎殿へ被召出、尾州守山陣之節、心馳御座候而、知行三十五貫給り候由。

其後勝入様へ被召出、知行右之通被下候。度々心馳御座候由。輝政様知行五百十石被下候由。慶長十五年、於播州病死。

七七、嫡子小仁王。　輝政様へ被召出、御奉行仕、何れの陣にてか十八歳にて討死仕候由。

七八、二男惣助。　紀伊守様に御附被成、二百五十石被下、御奉行仕候由。惣助に子供數多有之、左之如し。

一男角左衞門。惣助跡目相續仕候。角左衞門子安井市郎左衞門・孫安井佐右衞門と申、池田主水家來にて御座候。

二男平藏。新左衞門分知遣、跡二百六十石。

三男藤助。新左衞門分知百三十石被下候。子六郎左衞門・孫安井八左衞門にて御座候。

四男商島七郎右衞門、と申、他家へ奉公仕申、七郎右衞門子安井五右衞門にて御座候。

新左衞門甥安井甚九郎、と申者に知行之内百二十石致分知、右甚九郎子三郎右衞門・孫彌惣にて御座候。彌惣相果子なく跡絶申候。

七九、孫養子安井平藏。　祖父新左衞門跡目二百六十石被仰付、少將様御代迄、御奉行申上、於因州病死。

八〇、養子安井彌三兵衞。　平藏實子無御座候に付、彌三兵衞を養子被仰付候。

平藏跡知二百六十石無相違被仰付候。承應二年、本多下野守様之奥様に御附被成、此時四十石御加增被下、都合三百石に被仰付候。同三年三月、妻子引越江戸へ參候。寛文十二年五月十七日、於江戸病死。

實曾祖父小塚與六郎。瀧川左近將監殿に罷在、度々心馳仕候由、其後伊勢之内おかわちに討死仕候由。

實祖父小塚兵助。瀧川左近殿に罷在、度々心馳仕候由。伊勢長嶋陣之時、尾張界早尾と申へ罷出働申候時、組打に首取候得ども、深手にて相果申候由。

實父安井猪右衛門。兵助討死仕候時一歳にて御座候故、兵助弟之小塚七兵衛呼出、十五歳に成申候迄後見仕候樣に被申付由に候も、武藏之陣にて天正十年六月十九日、討死仕候。左近殿身體潰れ、猪右衛門幼少にて浪人仕候に付、伯父安井新右衛門養子に仕置申候由。猪右衛門事於參州吉田輝政樣へ無足にて被召出、關ケ原御陣御供仕、其後播州御入國被成、新知百五十石被下候。少將樣迄御奉公仕候。明暦二年五月五日、於備前病死。

八一、一男彌三兵衛。平藏跡目相續。

八二、二男小塚段兵衛。

少將樣へ寛文十四年二月二十七日、中小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。其後兩度御加増二十俵被下、正保元年十月十七日、新知百五十石被仰付。明暦二年極月朔日、五十石御加増被下、延寶五年七月十二日、病死跡目無相違、世倅源藏に被仰付。延寶四年十一月十三日、病死。世倅彌三右衛門に跡目無相違被仰付候。貞享元年七月五日、病死、世倅無御座候。

八三、安井助左衛門。

慶安二年二月、少將樣於御花畑弓御覽被成候節罷出、相勤申候。同三年、爲御弓料御米二十俵被下候由。承應元年、御中小姓に被召出、六十俵四人扶持被下、草賀兵部組に被仰付。其後御弓組に被仰付、吉田齊組にて相勤申候。萬治元年、侍從樣へ御附被成候。同二年極月十八日、侍從樣新知百五十石被下、大小姓被仰付。寛文十年、下野樣奧樣御用彌三兵衛に相加り勤候得と被仰付、同年九月二十四日、妻子引越江戸へ參申候。同十二年、彌三兵衛跡目無相違被仰付候時、下野守樣奧樣へ御附被成、彌三兵衛跡役相勤申候。前より拜領仕候百五十石は被召上候由。天和三年九月十八日、於江戸病死。

八四、養子安井長吉。稻葉四郎右衛門組、三百石、十七歳。

延寶元年五月、於江戸助左衛門養子奉願候處、願之通被仰付候。同八年十二月二十二日、於江戸十二歳之時御屆之

御兒小姓に被仰付、其内於江戸衣裝銀二貫七人扶持被下、於御國金十二兩四人扶持被下候。天和三年九月十八日、助左衛門病死仕候處、母召連十一月二十日、御國に罷歸候。同年十一月二十五日、助左衛門跡目無相違三百石被仰付候。貞享二年八月四日、御兒小姓役御免被成、御馬廻に被仰付、稲葉四郎右衛門組に御入被成候。

實曾祖父玉野治大夫。　祖父玉野夫兵衛。　實父玉野彦六（後、夫兵衛と成申候）。

八五、安井藤助。

安井新左衛門五百十石之内、藤助に百三十石分知仕、輝政様へ慶長六年御奉公に出申候。同九年、從武藏守様四十石御加増被下、御小姓役相勤申候。其後御小姓役御免被成、梶浦大隅組に被仰付、大坂兩陣相勤、少將様因州へ御國替被成候刻、於因州藤助名を權右衛門に替り申候。元和六年七月二十三日、病死。

八六、安井六郎左衛門。

跡目無相違被仰付、寛永十九年より同二十年迄奥上道郡之内御代官被仰付候。其後打續き御目見に六ヶ年罷出申候。慶安元年、御留守番に參候。承應二年二月二十二日、樋方御用被仰付、二十五年相勤申候。　延寶四年二月八日、樋方御用御免被成候。同年四月八日、御供米奉行被仰付候。同五年二月十五日、病死。

八七、安井八左衛門。　稲葉四郎右衛門組、百七十石、四十一歳。

同年六月十四日、跡目無相違被仰付、稲葉四郎右衛門組に被仰付候。

八八、子猪之介。

實子無御座候に付、安井左右衛門次男猪之介養子奉願候處、願之通被仰付。天和三年十二月二十三日、十三歳侍從様へ御目見仕候。

八九、安井七郎左衛門。　後、森太郎兵衛。又、前島七郎右衛門。安井惣助四男にて御座候。

池田備中守様御家老森兵庫知行千五百石被下候。親類にて御座候處、七郎左衛門養子に罷成候、別知百五十石被下、森太郎兵衛に名を替、御小姓に被召仕候。大坂御陣御供仕少ふく能御座候處、御歸陣之後、何之品も無御座候に付立退、藤堂大學殿御

内酒井甚佐・下名長左衛門と申者大坂にて働之證據入被成申候間、丹羽五郎左衛門様へ被下候□五百石、足輕御預け、前嶋七郎右衛門と名を替り、二三年御奉公仕、御暇申請、稲葉美濃守殿へ七百石、足輕預り相濟申候御禮申上候時分、俄に煩出し御目見も不仕、病死仕候。

九〇、安井五右衛門。

稲葉四郎右衛門組、八十俵四人扶持、五十五歳。

幼少にて父七郎左衛門にはなれ、池田出羽家來安井角左衛門は私伯父にて御座候故、角左衛門方へ參り、三四年も居申。十五歳正保二年同名六郎左衛門養子に被仰付。

少將様へ被召出、其年二月二日御目見仕、同八日、御兒小姓に被仰付、四十七俵四人扶持被下候。同三年春、江戸御供仕候時、同四年、於御國本六郎左衛門實子出生、（只今の八左衛門にて御座候。）此段承候故、尾關源次郎を以て於江戸池田出羽迄申上候は、實子出生仕候、成人仕候はゞ跡式此實子に被仰付被下候様に、御内意奉願候處、則達御耳、尤と御意之由、承應三年、八左衛門八歳に罷成候に付、御目見奉願、又其後も奉願候得共、御意無御座、其後八左衛門二十一歳に罷成候節、寛文七年に奉願候得ば、御目見被仰付候。慶安元年私御加増十五俵被下候。萬治二年、御兒小姓役御免被成、御中小姓に被仰付。

寛文三年比と覺申、御軍用御役之節、被仰渡候は、御出陣之時、御馬之廻り歩立之士御用に候間、中小姓之分は不殘歩立にて御供可仕候、御小荷駄千疋充可被下候由、御家中一等へ御定御座候。就夫老人・病人不達者にて歩立難成者之分は、馬は自分に才覺可仕候間、騎馬御免被成様にと奉願候、私義も不達者に御座候故、騎馬奉願、大野十兵衛・永田三郎左衛門を以て申上候得者、御意被成候は、騎馬願申者多候得共、何も御免不被成候、私義は日比武具・馬具等心懸所持仕候由、奇特に思召候、出願之通、騎馬御免被成候。然る上は、御小荷駄は被下間敷候、人數懸並は被下二人、自分は二人、以上四人召連申、御定に候得ども、私義は被下一人御増三人可被下候。此外自分者は存寄書上候へと雖有御意之趣、日置猪右衛門申渡、則自分者三人、以上六人召連可罷出と之旨、書上候得者、其通に被仰付。則御小姓頭之御軍帳にも書加り申候。

寛文六年霜月十七日、御料理之間へ相詰可申旨、御直に被仰付、同八年、久々御膳奉行被仰付、延寶三年四月、十八

依御加増被下、同四年冬、逼塞奉願願之通被仰付、稻葉四郎右衛門組に被仰付、岡山に六年迄罷在、同七年正月二十七日、片上へ在宅仕候。

九一、子勘右衛門。　延寶五年八月朔日、十一歳御目見仕候。

九二、鳥飼權右衛門。

若名、金五郎と申し、加藤虎之介殿に罷在候。肥後御拜領之刻、暇申、高山右近殿へ出申し、其後浪人仕、筑前中納言秀秋殿へ罷出、四百石被下候。所付之目錄所持仕候。其後於備前加増三百石被下、都合七百石、所付失却仕候。然る所平岡石見立退申に付、樞機之者不殘立退候申候間、權右衛門も立退、長岡越中守殿へ七百石にて目見之刻、同格之者八百石にて相濟申候由承り斷不申立退、中川修理殿へ參り、右之仕合申上、此上は知行之多少に拘り不申、何方へも御狀拜領仕度奉存候由、願申上候處、則備前へ參候得と被仰、則武藏守樣へ差上候處、早速被召出、三百石被下候。御所付之目錄失却仕候。其後浪人仕、大坂陣之刻に、細川與五郎殿に罷出、物頭役被仰付、鳥飼掃部と申、御陣中相勤、落城已後、終に浪人にて病死仕候。

九三、才崎三大夫。祖父權右衛門御家浪人仕候節、幼少にて御座候。

少將樣因州へ被成御座候刻、松平陸奥守樣•御前樣御肝煎にて、寛文七年被召出、二十五石五人扶持被下、御小姓にて御奉公仕候。同十四年閏三月五日、新知二百石被下、其儘御小姓役相勤申候。同二十年より家門之義に付、籠舍被仰付候。天和三年十月十六日、七十六歳にて籠死仕候。

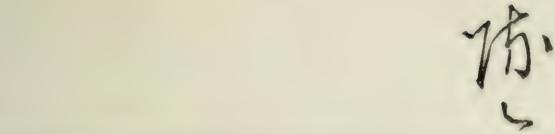
九四、才崎獨友。

三大夫籠舍之刻より三十人扶持被下候處、慶安二年正月二十九日、妹六歳にて病死仕候に付、十人扶持被召上、二十人扶持被下候。延寶三年六月四日、三十六歳病死。

九五、山瀨平次郎。岸藤右衛門組、二十人扶持、十五歳。

天和三年閏五月十五日、御目見仕候。岸藤右衛門組に被仰付。名氏替り山瀨に改申候。

九六、八木德左衛門。



稻葉伊豫守殿に久敷罷在、伊豫守殿死之以後、浪人仕、原隱岐守殿に少之内、同心二十人兩所にて預り申候由、隱岐守殿を罷出候處、甲斐國に靑木新兵衞と申者、德左衞門樣子爲存者に御座候間、兩度飛脚差遣申に付、罷越申候節、田宮對馬、其比輝政樣に罷在、右よう存候故、慶長四年、參河へ立寄申候處、德左衞門儀輝政樣被聞召上、立寄申候翌日被召出、御禮申上候、四百石被下候由、關ヶ原御陣之節より武藏守樣へ御附、備前へ御入國之時分より母衣被仰付候由。

江州登郡淺井に御取詰被成候時、手に逢申候。但宅より山東之善田表にて之儀御座候。北伊勢長嶋御取掛之時、松木之渡無一手に逢申候。信玄(勝頼なるべし)と長篠合戰之時、手に逢申候。

東美濃岩村山を甲斐國より□□を攻申時、二ツ手に逢申候。

加賀國一揆起し候て御陣之時は、笹谷にて手に逢申候。

紀州さいか表御陣之時、孫市城より南に川はた田中之城に御座候。其より稻葉所へ取懸候て、先手は迫合申内に、戶寄理右衞門手を負申候、味方あら〱に引取申候に付、捨下之時、德左衞門返して戶寄をかこい退申候。箕浦次郎懸合、最早成間敷と申候へ共、かこひ退申候。此樣子具に存たる者、國枝賴母・靑木新兵衞、此兩人越前に居申候。攝州有岡表三年之在陣之時、稻葉伊豫守はと禰山に陣取、其内に有岡より敵打出、瀨川之町を燒引取申處、此方よりつき申通合御座候處、敵方押返しつき申、其時德左衞門傍輩繩野長五郎手負申を、皆々捨退之所、石丸新内と申合、又返して長五郎を連退申時、敵方三人德左衞門に向申候を、又返し候て敵の鑓を切折、追立退申候。

攝津國有岡御攻之時、殿町へ攻入、二ツ手に逢申、内一ツは東方源左衞門もらい申候て遣申候。

尾張小牧山の向岩崎稻葉伊豫守を小牧山之おさへに御置申入被成候、其後敗軍被成候處、小牧山より伊豫所へ御取置、其時伊豫より鐵炮之者百人罷添、先手被申付候。退時に二手を此方へ取申候。其後敵より土手の内へ乘入申候を、德左衞門又追返し、其時德左衞門刺物白黑段々之四半指申候。

尾張陣之時、下奈良に對手之刻も、手に逢申候。同普請半、あか見之古城へ敵取懸候を追拂候時、手に逢申候。其後下奈良之御普請濟、おくちの城へ打入申時、小牧山表へ打廻候處、小牧より敵出候而、靑塚迄つき申、其時稻葉淸兵衞白母衣に黑白段々之四半指申候。其時兩人跡を仕退申候。其刻敵方にも靑塚口へつき被申方可被存候。御家にては輝政樣岐阜川御越之

時、手に逢申候。元和四年六月德左衞門於因州病死仕候。

九七、八木平兵衞。

元和四年、跡目無相違四百石被仰付候。大坂冬陣之節、最初に從姬路尼崎へ張番に田宮對馬被仰付、俄に罷越に、其節平兵衞田宮組にても無御座候へ共、親懸りにて罷在候故、自分心得に、對馬に附いて一等に尼崎へ罷越之番相勤候。此段武藏守樣被聞召、則御扶持方御陣中被下、直に大坂へ御供仕候。夏陣にも一等に御供仕候。承應三年十月、番大膳組之御鐵炮引廻被仰付候。明曆二年、御槍奉行被仰付候。寛文八年八月七日、病死。

九八、八木勘兵衞。

寛文八年九月十一日、跡目無相違四百石被仰付候。同十五日、御禮申上候。延寶二年十一月十三日、若原監物組之御鐵炮引廻被仰付候。同五年七月二十一日、病死。

九九、養子八木惣兵衞。 四百石、二十八歲。三浦十右衞門二男にて御座候處、八木勘兵衞養子に奉願候。

延寶四年四月二十二日、願之通り被仰付、五月朔日、御目見仕候。同五年九月三日、跡目無相違四百石被仰付、若原監物組に被仰付、同二十二日、繼目之御禮申上候。天和三年十月十五日、大小姓役被仰付候。

一〇〇、山內孫之丞。 本俵二十五俵四人扶持。

一〇一、養子山內甚六。 江戶大崎屋敷預り、百五十石、五十二歲。

明曆三年二月十一日、御步行に被召出、二十俵三人扶持被下候。寛文元年十月、御藏奉行被仰付、同四年迄相務申候。一年に今俵二十俵宛役料被下候。御藏相務居申內、養父果申に付、養父に被下候二十五俵四人扶持御ふり替被下候。同四年十二月、御步行橫目被仰付、五俵御加增被下候。同十一年五月、御小姓に被仰付、大崎御屋敷御留守居に被仰付。延寶三年、今俵七十俵六人扶持被下候。天和二年九月、私に馬十一年所持仕候段、被聞召上、難有御意之上、馬扶持十五石宛被下候。貞享二年三月、新知百五十石被下候。大崎へ引越、今年まで十五年相務申候。

實祖父先山武右衞門。實父鈴木仁左衞門。仁左衞門義、土倉四郎兵衞處に少知申付、鐵炮頭申付罷在候。

一〇二、平松三郎兵衞。 三河寶飯庄大木村在侍にて罷在、同國野田城にて討死仕候由。

一〇三、平松三郎左衞門。 三郎兵衞在宅跡に罷在候。

一〇四、山本庄兵衞。 七十俵五人扶持、五十八歲。

幼少之時分江戸へ罷下り、日高時孝と申浪人に懸居申、其節様子御座候て、本氏を替山本に成申、其後御旗本衆石川八郎左衞門殿に奉公仕、寛文九年暇申請。

同十四年、四月松平長三郎殿・淺尾長澤御取持にて於江戸被召出、四月二十二日、少將様へ御目見仕則伊木頼母組に被仰付、同五月、侍從様へ於淺府御目見仕候。同月二十二日江戸罷立、六月十一日御當地へ參候。同十五日、七十俵九人扶持被下候。延寶五年正月、岸織部組に被仰付候。同年正月十六日より郡方御普請御用を毎年相勤申候。

一〇五、子儀兵衞。 延寶元年八月十五日、侍從様へ御目見仕候。同二年正月十二日、少將様へ御目見仕候。

一〇六、杉善右衞門。 秀吉公に少知被下御奉公仕、七年組之御役被仰付罷在、五月七日大坂落城之節、於玉造口討死仕候由。

一〇七、山口右衞門九郎。

七十年以前、武藏守様へ被召出、御小姓組被仰付、本俵五十俵七人扶持被下候。正保元年正月二十日、病死。

一〇八、山口六右衞門。 右衞門九郎弟にて御座候。兼右衞門討死、其後幼少にて母召連上方へ參居申。

右衞門九郎病死以後、少將様へ被召出、右衞門九郎跡目四十七俵四人扶持被下、御小姓組に被仰付。福照院様御賄方御用被仰付、三十年相勤申候。寛文十二年十月二十六日、福照院様御卒去被成候に付、御賄方御勘定仕廻次第、御國へ妻子引越可申由被仰付、延寶元年正月二十三日江戸罷立、二月十二日御國へ參着仕、小堀一學組に被仰付候。同年御馬廻に被仰付、中村主馬組に成申候。天和元年五月二十日、六十九歲病死。

一〇九、山口文七。 四十七俵四人扶持、三十八歲。

延寶二年三月二十五日、侍從樣へ御步行に被召出、二十六日、御目見仕候。同九年七月二十四日、跡目無相違四十七俵四人扶持被下、御小姓組に被仰付、澤權大夫組に附申候。

一一〇、大饗長左衞門。　生國、和州。

楠村信長公に仕罷在候由。元祖は帝南朝御領覆以後數代本氏を罷在候趣、信長公領御取持、萬里小路大納言殿御執奏にて正親町院御宇、蒙勅許從四位上河內守に被任候而、本氏楠を名乘、後剃髮仕、民部卿楠長庵と申候由。俵祿之分量、死去之時代、分明に無御座候。

一一一、楢村監物。

後陽成院之御宇、被叙從五位下、楠監物と申候。其節先祖親模之御製•宸筆之御色紙頂戴仕候由承傳申。後、備前へ罷下、氏を楢村と更へ、浮田家へ罷在候處、浮田秀家卿石田治部少輔と一味に付、監物一族之者共、縄渴へ引退罷在、濃州關ケ原御陣以後、監物義從權現樣御尋にて、慶長七年被召出、於備中御知行二千石、同十六年七月十六日、監物病死仕、世倅楢村孫兵衞遺跡無相違被下、大和•河內兩國之內、御代官被仰付。大猷院樣御代迄相勤申候。

一一二、楢村伊左衞門。　監物次男にて御座候。寬永十年、信州小室城主松平因幡守三百石給、同十二年奉公仕候。

一一三、養子山口長左衞門。　合力米八十五俵、五十七歲。

中村與五右衞門世悴にて御座候。幼少之時楢村伊左衞門一族故、養子に罷成申候。寬永十七年より於因幡守近習小生奉公仕候處、養父伊左衞門病氣に罷成候處、暇之義申候へば、致隱居養生可仕候由にて、同二十年末より家督無相違私に申付候。正保四年、因幡守死去、子息無御座、跡目減申候故、父子共浪人仕、慶安元年七月二十日、伊左衞門病死仕候。私氏替申義は、楢村孫兵衞世倅楢村孫七郎•同孫九郎兩人共に、大猷院樣御代迄、永井信濃守殿御組に付、御書院番相勤罷在候處に、孫九郎於江戶西丸喧嘩仕、相手三人致殺害候故、其身切腹、兄孫七郎御改易被仰付候。孫兵衞は閉門之中病死仕、遺跡絕申候。右之趣故主因幡守被聞及、楢村遠慮可然由に付、山口と替申候。延寶元年、御家達望備前へ罷越候。則御簡略可被御付哉と御沙汰之故、日置猪右衞門內坂口八郎右衞門申合、同三年、口津高郡河內村之內左遠藤引込罷在候。田地被下置候而、被差置、御簡略明候

て、何分にも被召出被爲下候樣に仕度旨、西村源五郎・澤權大夫申合、以御內證奉願旨、御內意之由にて、同四年、左達藤之田地五十石之處、蒙御赦免申候。此所御給知に付、右之地高之物成米二十六石九斗六升三合、每年拜領仕候。同五年、上道郡八幡村八幡宮御勸請之御用、左衞門申渡、相勤申候。同年九月二十一日於御對面所、侍從樣へ初而御目見仕候。同晦日、於八幡村御前へ被召出、八幡御用方に骨折申旨御意にて、其後金子十兩拜領仕候。同七年より天和三年迄右之地高之物成、年寄中差紙にて拜領仕候。

貞享元年二月十六日、於御城當年御簡略明候へば、從在鄉可被召出之所候、左樣に被成かたき御勢有申候に付、先其儘御指置被成候、乍去唯今迄御奉公不被仰付候故、今度澤權大夫組之御中小姓に被爲入置候。在鄉より相勤候事、年寄候へば御用捨被遊候。幸相應之世倅有之由被聞召上候、此者爲名代指出し、似合之御供使相勤させ候樣に今迄之通之作德米、已後被召上、御藏米にて右之米高程爲御合力米被下置候旨、御意之由、左衞門申渡、同月十八日、世倅市大夫二十八歲にて御目見被仰付、同二十三日より名代之御番御供相勉申候。貞享元年三月十五日、右御合力米八十五俵之御墨印、於勘定場頂戴仕候。

實曾祖父大饗彌四右衞門。生國、大和楢村。初は尾州織田彈正忠殿に罷在、彈正忠殿卒去以後、甲州武田信玄・勝賴兩代に仕候二百貫給候由。天正三年五月二十一日、於參州長篠戰死仕候。

實祖父大饗折兵衞　彌四右衞門遺跡相續仕、土屋惣藏組に罷在、天正八年十月十九日、勝賴上州善之城攻之刻、十七歲にて初陣仕、似合之働有之、爲褒美從勝賴刀一腰給候由。甲州役落以後、信州佐久郡志賀村に引込罷在候。文祿三年、同國小諸城主仙石越前守殿にて五百石給、郡代役、足輕二十人預り相勤候處、其比越前守殿子息兵部少輔御事、秀吉公之御小生被相勤候に付分知之外用銀越前守殿に被申入、就夫殊之外不興之上、此義折兵衞取持申候、越前守殿氣に背候故、慶長二年、彼家立退咎不大形候、依之吉田安房殿於武田宗好（マヽ）に御座候故、御引請、同年、信州三田へ罷越、子息伊豆守殿代迄合力米五百俵、同扶助罷在候。仙石兵部少輔殿代に成候而、歸參之內意度々被相通候處、對兩家義理難默止、兩家共斷申、連々元和七年眞田家をも重申候由。其後松平越後守殿へ可被召出由之處、其身に辭退仕、次男大饗太左衞門を指出す。新兵衞義は信州小諸郡長笹に引込罷在、寬永八年三月二十八日、病死仕候。太左衞門義於越後守殿三百石被下、信州坂本邊之越後領郡代職足輕二十人預り相勤、

寛永十五年、於坂本病死仕候。

實父中村與五右衛門。大饗新兵衛嫡子にて御座候。病氣故、始終奉公之望不仕、寛文十一年七月七日、信州長窪にて病死仕候。

慶長五年、輝政樣參州より播磨へ御國替之砌、十九歳にて御船頭に被召出、御切米被下候由。寛永十四年正月九日五十六歳病死。

一一四、安田茂兵衛。（安田何某と申者之養子に仕。）

實祖父並父。生國、播州。代々柏村源大夫と申農人にて御座候。播州之古風、大夫と名を付申者、百姓之產頭仕候由。

一一五、安田三郎兵衛。

寛文九年、十九歳にて御船頭に被召出、十八石三人扶持被下候。同十四年二月、跡目無相違二十石四人扶持被下候三郎兵衛に被下候御切米十八石三人扶持、私七歳にて拜領仕候。

一一六、安田茂兵衛。（役小姓大船頭、水野三郎兵衛引廻、七十八俵四人扶持、五十八歳。）

十七歳にて正保四年より寛文二年迄十六年御船上下、川口御番、其外御舟手御作事御用等相勤申候。寛文二年十月六日、兄三郎兵衛病氣に付、腹之養生仕候へと御老中被申付候由、中村主馬・神圖書申渡、三郎兵衛勤にも、御船入御用、私に被仰付、下代一人並米七俵宛被下、當年まで二十四年相勤申候。延寶元年三月二十九日、兄三郎兵衛五十九歳病死、實子無御座、跡目不被仰付候得共、茂兵衛御家久敷者之儀にも候故、私以御扶持・切米・家屋共に被召上、三郎兵衛に被下候御加增共に七十(マヽ)御切米八十俵四人扶持、家屋共に私に被下候。（則名も父名茂兵衛と替申樣に、丹羽次郎右衛門申渡候。）同三年正月三日、御中小生被仰付候。同四年九月十五日、御船奉行一人は陸之御陣に可被召連候に付、私共に馬一疋中間鑓持以下に人四人（内一人有人。）可被下候由、刺物一布半之のれんに銘々之紋付可申付由、丹羽次郎右衛門申渡候。天和元年前より已下來之米七俵被召上、平加子一人宛之扶持・切米共に御米にて可被下候旨被仰渡、爾今被下候。御船入御用に相兼仕候樣被仰付候。

湯淺先祖。代々播州赤松殿家來にて、家老職相勤候と承及候。私七代已前、湯淺大和と申由、其世倅湯淺佐渡と申由、赤松家來にて播州之内四日市を在所に祿候とは承候得共、知行高、並委細之義不奉存候。

一一七、佐渡世倅湯淺七郎兵衛。

赤松下野守政家之家來にて度々武勇之奉公も仕内、播州佐用りかんの城山下にて喜多野京永と申無隠武士と組打仕、京永を打取申に付、下野守殿より感狀、並に褒美の加増知も給候由。其後同國青山合戰之時三十三歳にて打死仕候。右之感狀下野守子息之代に、河原信濃と申侍逆心仕、山下を致放火候刻、燒失仕候由。

一一八、湯淺半右衛門。

生國、播州立野にて御座候。下野守殿子息彌三郎殿、後名・名氏共に御替齋村左兵衛殿と申候由。左兵衛殿内にて半右衛門如先祖家老職萬事用等被申付候由。宇喜多直家卿と齋村左兵衛殿取合之時、赤穂郡むれ表にて能高名仕候由。明智逆心之剋、於山崎左兵衛殿手にて早高名仕候由。柴田殿御陣之時、柳ケ瀨にて高名。尾州長久手御陣之時、堀尾帶刀殿左兵衛殿一手に有合被申、退口之時、跡に殘り候を、帶刀殿御覽被成、後迄も御懇を承傳候。又朝鮮陣之時たいかうと申すたいの城左兵衛殿被居、六月六日、左兵衛殿下々小屋具を伐に參候を朝鮮人千四五百罷出打殺山取仕候處、半右衛門預り之鐵炮召連懸向、半右衛門傍輩之侍井筒龜右衛門・福岡藤三郎、其外侍五六人も懸合、無人にて朝鮮人罷在山下へ差迫合申内、左兵衛殿跡より追詰追崩被申候由。其時半右衛門・龜右衛門手負申候由。井筒龜右衛門・福岡藤三郎は細川殿被召出候由。其後又朝鮮人出候處に、半右衛門馬を入候得ば、敵半弓にて馬を射殺し申に付、左兵衛殿より馬を給候由。其後多分に加増をも被申付、半右衛門祖父之名に改、佐渡に被仕候由。四十一歳にて慶長三年但馬國竹田にて病死仕候。赤松家衰小身に被成、播州より但馬竹田にて取替之由。其節半右衛門知行四百五十石、鐵炮二十五挺預り、外に惣領湯淺右馬允に知行百石給候由。

一一九、湯淺右馬允。

若輩之時より齋村左兵衛殿に奉公仕、二十歳之時父果、知行・鐵炮無相違、如父之用等も被申付候由。慶長五年子、石田治部少輔一亂之時、丹後國田邊城細川幽齋は籠城之刻、丹後・但馬・豐後衆、左兵衛殿抔も、攻手に御越仕寄まで押寄候得ども哉に成**何れの手前も働無御座候由。其後龜井武藏守殿東より御登被爲、但馬衆一等に左兵衛殿も因幡國へ御寄せの由。慶長五年十**

月二日、因州若櫻之城を請取、同四日に鳥取へ御押寄候由。宮部兵部少輔殿者ども山下堅固に持、鐵炮を出申由。同五日之朝、栗谷口へ御詰候由。左兵衛殿家來、湯淺右馬允・安積七郎兵衛・江藤作大夫・椅村助大夫・武藤彦兵衛・小林喜左衛門・岡原八郎右衛門・西田左吉、歩行者に三村二郎作茶屋町迄詰申、城内より出張候得共、又引取、宮ノ下木戸口こたへ申を、矢山半大夫・右馬允兩人山手より鐵炮を打せ罷在、しばらく迫合、手負死人も御座候由。追込内之丸へ取付申間にて、右馬允・樫村助大夫・岡原八郎右衛門・武藤彦兵衛・平井與助・福原孫四郎高名仕由。西南之門口へ迫合、富田孫助・右馬允兩人西之門へ附候所にて孫助は門之外堀端にて打死仕候。右馬允は門之くゞりにて深手負申候由。其後押込放火、翌六日、鳥取城渡申候由。右馬允義、同月十日、手負申者共一等に、左兵衛殿より先へ御戻し、在所へ罷歸候由。左兵衛殿は同月二十八日、因州にて切腹被成候に付、右馬允義浪人仕、先祖之在所に付播州へ罷越居申候由。其年、黑田肥前守殿より齋村殿家來共可被召抱由にて、過半筑前へ罷越候由。右馬允義も、父より御存知被成候者、今度因州にて之樣子も被聞召候由、御心を御附、早々可被召抱旨筑前守殿御内明石與太郎方より申來候に付、いまだ手を痛候得ども、大坂迄罷登候處、山崎左馬允殿右之趣御聞被成候而、播州輝政樣へ御言葉可被附添と被仰候に付、明石與太郎方へ斷申、播州へ罷歸候由。山崎殿荒尾但馬に右馬允父之樣子御物語被成候由、但馬に聞、則輝政樣に被成御聞。

慶長六年春、右馬允二十二歳被召出候。御知行之切符も不申罷出候へば、其暮に四百石之御折帋被下、爾今所持仕候。荒尾但馬組に被仰付候。武藏守樣備前へ御入國被成、荒尾但馬は被召連、同組之士共不殘御供仕候。其時右馬允も惣並之二割御加增八十石被下候。武藏守樣より四百八十石之御折帋被下、爾今所持仕候。慶長十八年、武藏守樣播州へ御國替之節、荒尾但馬居城に備前に殘り、左衛門督樣へ御奉公仕候に付、但馬之士共但馬同然に備前に罷在候。然處森寺彌右衛門・江藤作大夫・右馬允は武藏守播州へ可被召連由、被仰聞候得ども、但馬御斷申上、一先備前に相殘候へ共、重而播州より右三人之者共差越候へと御意に付、左衛門督樣へ但馬申上候は、去年十月末に三人共姫路へ罷越候由。大坂兩度之御陣相勤申候。冬陣之時より御馬廻りにて上方備、後寄合組に罷在、御出馬先達而備、後寄合組之者共尼崎へ被遣罷越候由。其後陣中にて芳賀祖父内藏允奉公、小姓役被召仕旨被仰出由。福島左衛門大夫殿身體果申節、備前宰相樣廣島へ御出馬に付、從少將樣爲御使御附置被成、廣島へ御供仕候由。寛永六

年、於因州御鐵炮二十挺被仰付候。同十三年十一月、江戸小石川御普請之時、御普請奉行役にも罷下相勤、翌年、罷歸候。同十四年三月五日、御加増百石被下。同十九年七月晦日、有馬允隱居被仰付、倅半右衛門に被下置候御知行三百石を隱居料に被下、御預來之鐵炮、其儘被仰付候。正保元年九月朔日、御城代被仰付、寺社奉行も相兼相勤候由。同三年極月八日、六十八歲病死。久々御奉公相勤候者之儀、御不便に被思召候由にて、從少將樣御使者荻原又六を寺へ被下候。

一二〇、湯淺半二郎。（後、半右衛門と改む。又、右馬允と改む。又民部と改む。）

慶長十六年、十三歲にて武藏守樣御兒小姓に被召出、三十俵三人扶持被下、其後御加増にて四十俵十人扶持拜領仕候由。大坂兩陣兒小姓にて御供仕候由。元和元年卯、十七歲武藏守樣御近習被召仕、御病中御逝去迄、御藥煎役被仰付、其上御自筆御用之御箱二つ御座候を御預け、御前にて明立仕、御逝去迄相勤申候。元和三年巳春、江戸へ罷下、少將樣へ御奉公申上候樣にと御年寄中被申渡罷越、直に江戸詰、翌年午、因州へ初而御入國御供仕候。同四年十一月二十六日、新知二百石被下、御折帋爾今所持仕候。寛永三年寅御上洛行幸之年御供仕罷歸、御兒小姓役御免被成、（名も半右衛門に成申候。）同十二年、江戸御供罷下、小石川御普請之刻、御横目役被仰付候。十二年・十三年兩年、御米七十俵宛被下候由。（品は不奉存候。）新錢被仰付、錢鑄之儀に付板倉周防守殿へ御使者被仰付、京都之錢鑄、田舍へ御下不被成候に付、其御斷申、周防守殿御直に御尋被成、洛中之者にて無御座、段申上埒明、備へ錢鑄御下し被成候。十四年三月五日、百石御加増被下候。十九年七月晦日、有馬允隱居被仰付、御知行御振替被成、五百八十石半右衛門に被下、御持筒十挺御預、裏判役被仰付。正保二年正月二十日、御持筒十挺御加増被下、都合二十人被仰付、（同四年春、半右衛門儀、父之名右馬允に被仰付候。）承應二年三月五日、江戸御供罷越し、有馬允と申名差合申に付、於江戸民部に被仰付、同三年十月六日、裏判役御免被成、御家中半物成切手出し申樣にと被仰付、（寛文二年迄相勤申候。）同年、御家中祝言道具之書上、御前へ披露仕義被仰付、同四年、士中簡略人改奉行被仰付。萬治元年十一月十四日、忝御意にて御番頭被仰付、御加増四百二十石被下、御折帋爾今所持仕候。寛文七年九月十八日、御房樣江戸御下向御供被仰付、同十月十二日、御出船之御

供仕罷登、同十一年正月二十六日、七十三歳病死。

一二一、養子湯淺半右衛門。番頭、千石、五十一歳。湯淺民部甥にて御座候。十一歳之時民部養子に仕、岡山へ參候。

少將樣正保四年三月十日十二歳之時於御小書院御目見仕候。侍從樣へ明暦三年十月初而御入國、御家中一等に御禮之刻初而御目見仕候。寛文十一年七月四日、學校御用被仰付、學校へ相詰申候。同十一年正月二十六日、父民部病死仕、三月十一日被仰出候は、民部六十年に及、御側近被召仕候得ども、終に御心を背不申候、御不便に被思召候、跡目御知行無相違、私に被爲下旨、被仰渡候。同十二年十二月二十八日、學校御用御赦免、白銀五枚被下候。延寶元年八月二十五日、從侍從樣毛利甲斐守樣へ御使者被仰付、名も半右衛門に御替被成候。同年九月二十三日於御居間、御直に御意、田中惣兵衛・丸毛左近右衛門・私三人御鐵炮二十挺宛被仰付候。同年十一月十九日、御直之御意、池田七郎兵衛・池田吉左衛門・私に士鐵炮三つに御分、御預、御近習に可被召仕旨被仰付、爲組頭私へ波多野武左衛門御附被成候、依之最前御預被遊候足輕は、私共節若輩者、人馬多預り申段憚奉存、御年寄中迄御斷申指上申候。延寶六年九月九日、御近習御赦免、御船奉行被仰付、御船頭水主、並足輕二十二人御預被成候由、江戸より被仰付候旨、老中被申渡。同八年七月、丹羽次郎右衛門御舟手御赦免被成、私一人に被仰付候。天和三年六月二十九日、御直に忝き御意にて、御船手御赦免、御番頭被仰付候。貞享年次脱。正月十八日、於江戸岩千代樣へ初而御目見仕候。

實父は民部弟深田七郎兵衛、と申者、松平相模守樣に罷在候。七郎兵衛は湯淺右馬允二男にて御座候を、元和五年、七郎兵衛十七歳之時深田六郎右衛門養子に仕候。六郎右衛門父は、關淡路と申し、生國伊勢之者と承申候。關安藝守殿家來にて居申候由。六郎右衛門生國伊勢と承傳候。幼少より關長門守殿に奉公仕、其節は穗積喜太郎と申由、如何樣之義にて名氏替り申とも不存候。十六歳初陣にあさぎ者之首取、十八歳之時甲を着候首取申候由。關長門守殿伊勢之龜山に被居候時、俄に敵取掛大手之門は打申候得ども、くゞり打候事不罷成、内外迫合在申、山下之侍共大方致逐電、籠城之侍二十人計居申候、敵之名は不承傳候、六郎右衛門は其節城より一里程有之在鄉に居合、龜山之城鐵炮之音を承、卽刻馬にて懸付候得者、道にて男女落人多引逢申候、然共落城を見屆不申候而者、難落行、半途迄參り城を見候得者、旗等堅固に見へ申候故、馬を乘放、一人山路へ懸り、

かげ道を參り、城へ入不申、下人共は皆々逃去申候由。長門殿大悦之餘り、瓦のわれに水を入、自身持出、此水を呑、息を繼、大手へ參り敵を追掛候へと御申被付、則大手へ參候得者、侍十二三人居申、敵追崩くどりを立申候由、城中の打申鐵炮に十、敵一人死候由、圖書兵衞右之首を取申由、外に敵味方共にうたれ者は無之由。長門殿より加增五百石六右衞門に給候由承之候。本知共に都合如何程取申候哉不存候。長門殿は蒲生飛彈守從弟ながら、妹聟にて御座候由。飛彈守殿義下に從秀吉公被仰付、後奧州田川へ所替被仕候由。於奧州岡本下總殿家來、同人之侍長門守殿領分へ所籠申を、六郎右衞門打取之由。小田原陣城中より蒲生飛彈守殿手へ夜討仕、蒲生忠右衞門を初、先手被打立、城中勢追まくり飛彈陣屋へ押懸申時、同長門殿家來圖主馬・圖十兵衞・佐野勝九郎・穗積喜太郎、深田六郎右衞門事、並圖十兵衞家來佃久右衞門、早く懸出、大成溝を隔、迫合申內に、飛彈殿人數大勢出張候に付、敵城中に引取申候由。長門殿家中公事出來、侍ども大勢立退申節、圖主馬・圖十兵衞・穗積喜太郎も立退申候。喜太郎義瀧川左近殿に少之內居申候由。其後主馬・十兵衞・喜太郎ともに富田信濃守殿へ罷出、喜太郎知行七百石母衣御申付候由。其後樣子有之、主馬・十兵衞・喜太郎ともに立退申由。

信濃守殿御構御座候に付、浪人にて伏見に罷在候之處、輝政樣可被召出候旨に御座候へ共、富田殿構御座候に付、御斷申上候へば、名氏を替り罷出候はゞ不苦と御意之由、石丸雲鐵方より內意申越候に付、深田六郎右衞門に罷成、慶長十七年極月二十五日、播州姬路にて輝政樣へ御禮申上候。明ろ正月二十五日、輝政樣御逝去被成、御知行切符も無御座候に付、浪人分に被召出、其上播州備前分り申節、大小身共新雇者は御暇被遣候に付、六郎右衞門御暇可被下と奉存候處、左衞門督樣備前へ被召連、本知七百石被下、母衣被仰付候。其後宰相樣へ御奉公申上、羽織被仰付、品々御懸にて御鐵炮、又は御旗抔御預可被成旨、和田飛彈を以て御內意被仰聞由に御座候へ共、年老弱之者に御座候得者、足輕御旗抔之義、不行步にて御用難達と御請不仕由、依之於因州侍組御預、番頭に被仰付。寬永十七年九月、八十歲にて病死仕候。跡目知行無相違、養子七郎兵衞へ被下、羽織被仰付、七郎兵衞儀も天和二年二月、病死。世倅惣左衞門に跡目無相違被下、足輕御預け、爾今相模守樣に罷在候。

一二三、湯淺又右衞門。 有馬允作にて御座候。

寛永六年、十三歳にて少將樣へ御目見仕、同十二年正月十六日、御奉公に被召出、御番第相勤申候。同十六年十二月二日、本俵三十俵被下、同十九年八月朔日、奥中小姓に被仰付候。父存生之内、十年間中小姓にて御奉公仕候。正保四年正月二十六日、右馬允隱居料に被下候御知行三百石、無相違又右衞門に被下候。御鐵炮二十人は御法之通り指上申候。池田美作組に被仰付候。慶安元年十一月十一日、大小姓に被仰付、明暦四年十一月十五日、湯淺民部組頭に被仰付候。寛文十年八月二十六日、京都一條姬君樣へ御附被成候、上京可仕旨御直に被仰付、同年十一月二日岡山罷立、六日上着仕候。延寶四年正月九日、去年よりの病氣之段被聞召屆候而、京都御役義御赦免被成候。然共遣之者被仰付、上京仕候迄は相勤候へとの御意にて二月十一日迄相勤候へ共、病氣彌〻差重り申に付、姬君樣より被下養生仕候得と仰に付、同十二日京都罷立、同十七日岡山へ罷下、同二十八日、六十歲にて病死仕候。

一二三、湯淺六右衞門。岸藤右衞門組鐵炮引廻、三百石、三十一歲。

寛文二年九月朔日、八歲にて少將樣へ御目見仕、同六年正月二日、侍從樣へ御目見仕、同十年八月二十六日、父又右衞門京都姬君樣へ御附被成候砌、御兒小姓被仰付、六十俵五人扶持被下、御奉公被召出候。延寶二年十月四日、少將樣御膳番御近習に可被召仕旨被仰付候。同四年四月二十八日、父跡目三百石無相違被仰付、伊木頼母組に御附被成候。同五年閏十二月二十八日、岸藤右衞門組に御附被成、貞享二年十二月二十七日、岸藤右衞門預御鐵炮引廻役被仰付候。

一二四、湯淺藤左衞門。

湯淺右馬允弟にて、代々先祖播州赤松殿家來之由、藤左衞門浪人にて備前岡山に罷在候內、輝政樣御代姬路へ岡山より渡瀨夫兵衞・同平右衞門と同船にて罷越とて、室之津に舟掛り仕候處、渡瀨傳兵衞と申者久敷召仕候若黨室に居申候を、傳兵衞と不逢に付、夫兵衞・平右衞門見付、何用に是に居申哉と尋申候へ者、申分不埒成體と存候故、先船に乘候得と申聞、乘せ置候處夜中に自用を叶候由僞、陸へ上り見へ不申故、偖は走者と存、室町中穿鑿仕候。藤左衞門義あぼし口へ追懸參申候、夫兵衞・平右衞門何も町に居可申と存、下人迄も町屋をさがしに懸候故、あぼし口へは藤左衞門一人參申候處、科人參候、夜中之義に御

座候故、何者ぞとゝがめ申候へ共、逃申故、追掛申候へば、立歸ざまに大脇指を拔切申候へ共、愈々走り懸り申故、鋸木當り、共時組合申候科人は、拔放たる事に候故、藤左衛門數ヶ所手負候へ共、終組伏申所へ、藤左衛門草履取罷越候故、草履取に帶をとかせ、作之科人搦候而、請人に渡候得者、則姫路へ召連參候。

輝政樣被聞召、御意にて黑田覺正寺に療治被仰付、平癒仕候。其後武藏守樣爲御褒美五十俵拜領仕候。其後中小姓に被召出候由。大坂冬陣香西縫殿助組に藤左衛門罷在候。

神崎之西[illegible]井村に居申候。縫殿助組は日置豐前跡備にて御座候。俄に神崎川越候節、藤左衛門早々罷出、川を乘渡り向へ乘上申所、跡より岩越宗右衛門・明石源左衛門兩人追付申候。藤左衛門共に三人縫殿助組參旨豐前へ相斷申候。其後縫殿助旗五本餘候を豐前備之跡に立申候。又先へ出申候時も、三人肝煎申候。大坂夏陣には縫殿助御旗本に罷在候。組中共其通御座候。中嶋より大坂へ詰申時、せんばにて具足を着申者を打取申候、甲は着不申侍、家に籠り居申、何も戸口に詰申所、戸口を拂出申候を、藤左衛門打取申候。其時も藤左衛門手負申候。投首に小手を添、武藏守樣御所へ持上申候。

其後藤左衛門御家立退、蜂須賀蓬庵老へ二百五十石にて罷出、其後宍粟石見守樣へ三百石にて被召抱候。宍粟上り申節浪人仕、京極刑部殿へ三百石、足輕二十御預け、其後暇申候。右家老佐々九兵衛品々留申候得共、達而斷申、無別儀御暇被下候。同民部を便り御國へ和氣郡へ引込罷在候。

少將樣被聞召承應元年十二月朔日被召出、三百石被下、明暦二年二月十二日、六十九病死。湯淺源左衛門跡目之内二百石被仰付、明暦二年五月二十七日、繼目之御禮申上候。同四年十二月二十八日、大小姓役被仰付、御小姓頭百石拜領仕候。寛文七年八月二十二日、四十一歳病死。

一二五、湯淺半助。　岸藤右衛門組、百五十石、三十六歳。

湯淺又右衛門世倅にて御座候處、寛文七年十二月二日、源左衛門跡目御知行百五十石私へ被下、名跡相續申候樣に被仰渡、則湯淺民部組に御入被成候。其節民部義御房樣御供仕江戸へ參候、於江戸少將樣御直に民部へ被仰聞候は、源左衛門相果候由被聞召候、其方同名之者不便に可存候、子も無之と御聞被成候、依之湯淺又右衛門倅名氏

御纖せ可被成候と被仰出候。則其方組に入置申樣にと御意之由。翌年五月九日、織目之御禮申上候。延寶七年六月二十五日、岸藤右衛門組下御入被成候。天和元年九月二十九日、大坂へ御米拂御用に登り、翌十月十六日、罷歸候。同三年・貞享元年・同二年御毛見に出申候。

一二六、結城澄守。今川義元醫師にて奉公仕候。岡部與兵衛養子に參候に付、氏替申候。松平土佐守樣へ御奉公、三百石被下候。

一二七、結城新之丞。丹羽平大夫組、八十俵五人扶持、五十三歲。松平豐馬守樣に御奉公仕り、其後浪人仕候。

延寶二年二月七日被召出、其後閑谷學問所へ參居申候得と被仰付、參居申候。同三年正月五日、御中小姓に被仰付八十俵五人扶持被下候。貞享二年八月七日、丹羽平大夫組に被仰付候。

一二八、子與右衛門。延寶八年十二月十五日、御目見仕候。

一二九、鹿子木武藏。

肥後熊本加藤肥後守清正より前之城主鹿子木三河守入道舜心家來、卽舜心聟にて御座候。知行何程取申も不存候。右三河守領分は肥後國之內、飽田郡・詫ケ郡二郡領知仕由申傳候。

一三〇、鹿子木武左衛門。右三河守沒落以後、加藤肥後守家來下川又左衛門處に奉公仕、百三十石取申候。

一三一、吉崎勘兵衛。

細川越中守殿肥後へ御入國以後、祐筆に無足にて罷出、越中守殿御死去以後、病氣罷成、暇申給候。勘兵衛儀、吉崎を名乘申候は、鹿子木は人每聞馴不申、名氏にて應答六ツケ敷存候而、作り氏にて御座候。勘兵衛母は豐後大友家來小武雅樂娘にて御座候。

勘兵衛義慶安三年十月二十二日、少將樣へ被召出、五十俵五人扶持被下、御馬拜領仕、馬扶持十五石被下、熊澤勘右衛門組に被仰付候。其後御祐筆相勤、承應元年十二月十二日、磐梨郡御郡奉行被仰付、寛文六年迄十三年相勤申候。同年十二月十五日、少將樣御前へ被召出候而、數年郡御用無恙相勤申候旨、難有御意にて、新知二百石被下、京都姬君樣へ被爲附候。父御座有甚兵衛と申候へ共、此年從姬君樣勘兵衛と名を御替被成候。同七年二月二十七日岡山出船仕、三月五日京着仕候。同八年六月八日、

江戸御使者相勤罷歸、御役義之御訴訟申上候處、姫君様御機嫌不宜、御國へ被罷下候旨、被仰出候。七月四日、御國へ罷歸、於京都願上候品、御機嫌不宜様子共老中迄申上候、爲御意猪右衛門・大學申渡候は、今度罷下候事、定而存子細に可有之候得共、今程京都御事多內、我儘申段不屆に思召候間、備中御領分引籠居申様にと被仰渡、備中淺口郡東小坂へ罷越居申候。其內御扶持十五人扶持被下候。中年一年蟄居仕、其後被召出、御知行は被召上、本之御切米御扶持方被下候。同十二年十月、和氣郡御郡奉行被仰付候。其後和氣郡は山中にて年罷寄行歩難叶迷惑可仕旨、申。津高郡に延寶元年正月二十九日、御郡替被仰付候。同二年十二月十三日、御野郡へ御郡替被仰付、此時本知二百石被下候。同四年五月比より病氣に罷成、御用勤申なば、存儘に養生難仕思召候間、世倅甚兵衛當分御郡奉行被仰付、勘兵衛は心儘に養生可仕候旨被仰渡候。同五年七月比より病氣次第に重罷成申候に付、御役義御斷申上候。同八月十一日、御赦免被成候。同七年正月二日、六十八歳病死仕候。

一三二、吉崎甚兵衛。　近習江戸聞番役加、二百石、四十一歳。

寛文六年十一月十五日、父勘兵衛に新知被下、姫君様へ御附被成候時、私義は御中小姓に被召出、本俵三十俵四人扶持被下候。同七年八月十三日、津高・赤坂兩軍竹之奉行被仰付候。同十二年十二月二十八日、少將様御隱居、御人分之時、御奥中小姓被仰付、其儘少將様へ御奉公申上候。延寶四年、父勘兵衛病氣に罷成候に付、當分御野郡御郡奉行父名代被仰付候。此時從少將様、侍從様へ御返し被成候。勘兵衛病次第に重り、御用之義內談可仕様も無御座御郡方不案內に御座候に付、御斷申上、明る年八月二十日、御免被成、中奥に詰申候。同七年二月二十二日、跡目無相違被仰付、稻葉四郎右衛門組に被仰付候。同年七月二十八日、大小姓被仰付、澤權大夫組に被仰付。天和元年十月二十一日、御前へ加藤源七・私被召出、御公義御用被仰付候間、森本與三兵衛相加り、爲兩人二年代り江戸御用相勤可申、則私を先當年可被遣旨、御直に被仰付候。其後御近習列に被仰付候由、日置左門被申渡候。同三年、私不勝手之段被聞召、二貫目拜借被仰付、其後被下候。

一三三、寺能之介　天和元年十月二十八日、御目見仕候。

一三四、**葛卷筑後**。佐々木承禎に奉公仕候。賜江州葛卷一在所知行仕候由。

佐々木右衞門督殿に居申候。江州わか繩手合戰之時、武勇之働仕、佐々木殿より感狀被下候。其證文は吉田印西方に御座候。

一三五、**吉田源八郎**。

佐々木殿家老後藤と申者御成敗之時、仕手を吉田安藝に被仰付候。安藝は源八郎伯父にて御座候故、同道仕、江州觀音寺堀内にて後藤を安藝打留申候。後藤世倅之召連候家老溝渠と申者兩人共に、源八郎打留申候、爲御褒美御腰物被下候由。其後柴田伊賀守殿に奉公仕候由。

一三六、**吉田五兵衞**。

羽柴左衞門督殿に罷在、二百石被下候。其内に堀丹後殿被附候而、於越後知行三百石被下候。其後浪人仕、長束大藏殿へ罷出候。其節は吉田彥左衞門と申候。二百石被下、後又加增藏米にて百石被下、都合三百石、步行弓者十五人被預候由。慶長五年伊勢陣之刻、鐵炮之者十人相添被預、都合二十五人預り候由。同年、關ケ原合戰之時、大藏外兩宿由より敗軍、九月十六日之夜、伊勢・甲賀之境分申峠にて、大藏外諸勢を通可申爲に、鐵炮頭小田半左衞門・西部五左衞門兩人殘置被申候。諸勢大方通り、五兵衞も其處を四五町通過候跡にて、鐵炮之者嚴敷仕候に付、坪田半兵衞・奧村市藏・五兵衞共に三人引返し、一揆追拂引取申候。同十七日之朝、江州水口居城へ參、籠城可仕手配被仰付候。五兵衞預り申者御座候故、大手之門を被申付罷在候處、拔被成大藏外同國佐倉へ被立退候。供之者は十五人に極り申に付、殘る家來共散々に成申候。

慶長七年、五兵衞事輝政樣に被召出、二百石被下候。其後新藏樣へ御附被成、於備前惣並之御加增被下、二百四十石拜領仕候。少將樣弓之印の目錄、御自筆に被遊被下。寬永二年九月二日之日附にて、爾今所持仕候。於備前五兵衞隱居被仰付、五人扶持被下、名を淸元と改申、家督世倅源左衞門に無相違被下候 源左衞門義慶安三年十二月二十九日病死仕。御知行は淸元へ御戾被下候。承應二年正月十九日、淸元八十三歲病死仕候。淸元跡目無相違世倅千兵衞被仰付、則五兵衞に成申候。私爲に伯父にて御座候。萬治二年正月二十日、五兵衞病死。世倅無御座跡絶申候。

一三七、**吉田多兵衞**。

十五歳にて京都三十三間堂射通罷歸候節、於備前武藏守樣へ御目見被仰付、若輩之志奇特に被思召候由、御直に御意被成候由、播州へ御國替被成候時、大坂前陣騎馬にて可罷立候旨被仰付、御銀拜領仕、御供申上候、御歸陣被成、被召出、四人扶持被下候由。因州へ御國替被成候而、勝手不罷成候故、身上之義御斷申上候得者、御暇被下候。其後在中將殿へ罷出、二百石被下、後又五十石御加増被下、中將殿死去被成候而浪人仕る。承應元年、少將樣へ被召返、御知行三百五十石被下候。伊庭半藏組弓組、無役に被仰付候。寛文六年十月十日、七十歳病死。

一三八、吉田定右衛門。　稻葉四郎右衛門組鐵炮引廻、百五十石、五十五歳。

明暦三年、侍從樣へ御家中一統御目見仕候。寛文六年十二月十五日、跡目二百五十石私に被仰付、百石は同名源之丞に被仰付候。私義眼悪敷罷成申故、弓之儀御斷申上候得者、御免被成候。伊庭半藏組に被成、惣並之御存仕候。延寶五年八月朔日、正木主計組御鐵炮引廻に被仰付候。同六年七月二十日、稻葉四郎右衛門組に被仰付候。天和元年九月二十九日、大坂御米拂に參候。天和三年・貞享元年二年御毛見出申候。

一三九、吉田源之丞。　百五十石、三十六歳。

寛文六年極月十五日、多兵衛跡目二百五十石之内、百五十石兄定右衛門に被仰付、百石は私に被仰付、伊庭半兵衛組に被成候。同八年十月三日、御弓組杉山五左衛門組に被仰付候。延寶元年、於江戸梅花的被仰付、能く中り、奇特と御意にて御羽織被下候。其後御的矢拜領仕候。天和三年五月二十八日、丹羽七郎左衛門組に被仰付。同四年二月十六日、五十石御加増被下候。

一四〇、横井爲三。　代々備前松田家來にて御座候。松田身體沒落以後、法體仕、於當國寛永二年、八十五歳病死。

一四一、横井九兵衛。

父浪人以後、宇喜多中納言殿に奉公仕、小田原陣・高麗陣心懸仕候由。又關ケ原陣之節、於伏見城高名仕候由。鐵炮之者預り、其後與も預り申候由。宇喜多身體果、浪人仕、木下肥後守殿に奉公仕、肥後守殿被果、浪人仕、戸川肥後守殿に奉公仕、百五十石給、五年罷在、元和二年、五十一歳病死。

一四二、横井次郎左衛門。十三歳之時九兵衛病死、跡目無相違被申付、兒小姓にて罷在、其後肥後守殿惣領平助殿に被仰付、奉公仕候。平助殿逼塞、京都に被居候に付、浪人仕候、

寛永九年、伴大膳申上、御當家へ被召出、三百石被下候。慶安二年二月、御鐵炮引廻役義被仰付候。寛文五年五月二十七日、病死。

一四三、横井治郎左衛門。

寛文五年七月三日、跡目三百石之内、二百石被仰付候。同八年、江戸御留守番相勤、同十年、大坂へ御米拂に參相勤同十二年、御勘定上聞相勤。延寶元年春より御郡奉行被仰付、都合十三年相勤申候。貞享二年二月十六日、御斷申上、御役義御赦免、四月晦日、病死。

一四四、横井又次郎。伊木頼母組、五十俵四人扶持、八歳。

天和四年二月十五日、侍従様へ初而御目見、貞享二年七月二十五日、跡目五十俵四人扶持被仰付候。

一四五、片峯美作。

生國、肥前國唐津にて御座候。同國松浦郡之内、梶原村・半田村・柏崎村・原村四ヶ所にて五百七十町領知仕、一族之主にて罷在候。百十一歳にて於唐津病死仕候。

一四六、岸峯藤右衛門。

寺澤志摩守殿にて二百五十石給ひ、志摩守殿落去已後浪人仕。其後於唐津九十一歳寛文二年七月六日病死。子二人、惣領嘉之丞後に一閑と申。二男伊藤彌七衛と申候。大久保加賀守殿に罷在候。世倅名代に出し、彌七衛只今唐津に居申候。

一四七、吉井一閑。

二十六歳より肥前佐賀へ參り鍋嶋信濃守殿家來岡部宮内と申者に浪人分にて罷在候。其節筋目有之候に付、名氏替り吉井權之丞と申者二十九歳之時、嶋原陣岡部宮内鐵炮二十人、權之丞引廻、宮内同道仕、寛永十四年十月朔日罷立、明る十五年三月六日歸陣、同八日、佐賀へ罷歸候。正保四年、長崎へ黒船參候節、岡部宮内江戸へ罷越居申に付、宮内名代被申付、宮内相組中小姓二十五人、鐵炮二十人引廻、六月二日、長崎へ罷越、從御公儀長崎津口張切番被仰付、首尾能相勤申候黒船無別條、御赦免

七月七日、歸船仕候に付、同十四日、佐賀へ罷歸候。翌年、信濃守殿へ被呼出合力米十四石給り、中小姓にて名を替、其節は次郎左衛門と申、鍋嶋志摩組に被申付、數年罷在候。其後一閑隱居仕候に付、私に合力米給候。私則次郎右衛門に成申し、一閑義三十一年居申候得共、別條無御座候に付、暇を乞、父子共に浪人仕候　寛文九年九月十八日、一閑も私も一所に御當地へ參候。同年十一月朔日、少將樣へ父子共に被召出候。一閑に二十人扶持被下、私に新知二百石被下候。丹波守樣御組被仰付候。延寶八年二月二十二日七十四歳兒嶋郡宮ノ浦在宅にて病死。

一四八、吉井藤內。　稻葉四郎右衛門組、二百石、四十七歳。父一同に被召出候。

延寶元年、侍從樣へ御目見仕候。寛文十一年、少將樣江戶御供仕候。同十二年十一月二十七日、稻葉四郎右衛門組に被仰付候。延寶三年、京都御普請に參候。同五年、不勝手故、在宅仕候。

一四九、子左平次。　貞享二年十二月朔日、九歳にて侍從樣へ御目見仕候。

一五〇、吉田新左衛門。

勝入樣に御奉公仕、二百三十貫被下候由。輝政樣岐阜へ被成御座候時、二百八十石に被成下候、於參河五百六十石に被成下候。勝入樣　輝政樣方々御陣御供仕、御役に立申候義御座候由、承及候得共、委は不存候。輝政樣より池田出羽へ御附被成、播磨へ御國替の砌、出羽より千五百石給候。於播州病死。跡目世倅清右衛門に被申付候。清右衛門子無御座、出羽末子日向と申候を養子に仕申候處、清右衛門家督被召上、後日向立退申候。

一五一、吉田新左衛門。

於參州輝政樣へ被召出、御奉公仕、播州におゐて二百五十石被下、御持筒十挺御預け被成、其後百石御加增被下候武藏守樣播州へ御入國之刻、御鐵炮御斷申指上、御馬廻に成申候。寛永五年四月二十五日、病死。

一五二、吉田新左衛門。　祖父跡目無相違被仰付候　承應元年九月十二日、三十六歳病死。

一五三、吉田新左衛門。　水野三郎兵衛組、二百石、三十六歳。

同年十月末、二歳にて跡知三百五十石之内、二百石被仰付候。明暦三年正月、七歳にて初而御目見仕候。寛文八年、江戸御留守御番に參候。延寶三年、禁裡御普請に參候。其外御毛見にも罷出候。同五年十二月二十八日、水野三郎兵衛組に被仰付候。貞享元年、江戸御供に參候。

一五四、林新兵衛。 宇喜多中納言殿家來にて少知給り、津高郡野々口村に住居仕候由。

一五五、林次郎八。 存寄御座候而、名氏替吉田勝左衛門と申候。

慶長九年、輝政樣へ被召出、御鷹匠役相勤、本俵二十七俵三人扶持被下候。明暦元年十月三日、病死。

一五六、吉田彌五右衛門。

寛永十六年、勝左衛門家督無相違被仰付、御鷹匠相勤申候。慶安二年七月十六日、病死。

一五七、吉田五右衛門。 五十俵四人扶持、四十九歳。

慶安二年八月、彌五右衛門跡目無相違被仰付、御鷹御用相勤申候處、明暦三年三月八日、御徒に被仰付、青木善大夫組に被仰付候。方々御作事御用相勤申候。寛文五年二月、御側徒被仰付、一人扶持御加増被下、同六年三月、江戸にて御徒横目被仰付、本俵三俵御加増被下、森半右衛門組に被仰付、延寶四年五月十六日、小姓組に被仰付、岸藤右衛門組に入、新八樣御抱守被仰付候。同七年五月二十八日、澤權大夫組に被成、六月二十八日、中奥詰被仰付、三俵御加増被下。貞享二年三月十五日、津高郡御郡奉行被仰付。

一五八、子平助。 延寶六年五月朔日、十一歳にて御目見仕候。

一五九、吉田彌大夫。 吉田彌五右衛門弟にて御座候。

正保二年、御歩行に被召出、本俵二十俵三人扶持被下候。承應三年六月二十三日、病死。

一六〇、甥養子吉田又六郎。 四十俵四人扶持、四十一歳。吉田彌五右衛門子にて御座候。

承應三年八月、養父彌大夫跡目本俵十俵三人扶持被仰付、萬治三年七月朔日より御台所へ相詰申候。寛文三年二

月十七日、御歩行被仰付、本俵七俵御加増被下、森半右衛門組に被仰付。同年三月、江戸御供仕、御式台御帳付役被仰付。同五年、同前。同七年、御台所横目被仰付、同八年、同前。同九年、町買役被仰付候。同十年、銀奉行被仰付、同十一年、御藏奉行被仰付。御家督以後少将様へ御附人に被仰付、立野八郎兵衛組に被仰付、延寳四年十一月五日、御側歩行に被仰付、九俵一人扶持御加増被下。同六年十月四日、御小姓組に被仰付、御蔵筆役被仰付、中奥詰被仰付。同七年三月五日、侍従様御小姓組被仰付。天和三年閏五月十四日、澤権大夫組に被仰付、貞享元年正月三日、御郡普請奉行被仰付、同二年正月八日、御鐵炮役割被仰付。

一六一、子彌太六。　貞享二年十二月十五日、十二歳御目見仕候。

一六二、横山左近。　生國、相模。備後國神邊に少々構仕罷在候由。

一六三、横山右馬之助。　毛利輝元に奉公仕、四百石領知仕候。於伯州毛利伯耆守殿内膳丸之取合之節、敵方へ矢文を遣し候通に合鑓、則高名仕候由。

一六四、横山清左衛門。　後は、横山左馬之助と申。

毛利秀元に奉公仕、伊勢之津合戰之節、津之城一番乗仕、二ノ丸と町口之間、門口勢たまりにて被創候へ共、しほり戸を被破、高名仕候。其節之書據狀、今に所持仕候。

其後長岡三齋に奉公仕、其後暇申浪人之處、池田出羽下津井に居申節、呼出二百石給候。其後加増五十石、足輕十人申付候。大坂御陣に前出羽供仕、落城之節、首二つ打取申候。慶安三年、病死仕候。嫡子横山七左衛門に、知行・足輕共に無相違出羽申付候。寛文二年、病死。七左衛門嫡子彌惣弱年故、本知二百石給、加増・足輕は不申付候。

一六五、横山三郎大夫。　五十俵四人扶持、五十八歳。

寛文三年、少将様へ被召出、三十九俵四人扶持被下、兒島郡御代官相勤申。其後御代官御用無調法に御座候に付、御暇申上候處、被聞召屆、御代官御免被成候。同十一年十一月十五日、侍従様へ御小姓組に被召出、大筒搏申御役被仰付候。延寳元年十月九日、十一俵御加増被下候。在方御普請等相勤申候。

一六六、子兵四郎。　天和三年七月朔日、初而御目見仕候。

一六七、吉田源右衛門。　宇喜多中納言殿にて公仕候由。中納言殿身上果候時分浪人仕、於備前病死仕候。

一六八、吉田助左衛門。　浪人にて備前に罷在、私幼少之時分果申候。

一六九、吉田次郎左衛門。　料理人、四十七俵三十人扶持、六十七歳。

慶安元年子九月八日、少將樣へ御料理人に被召出、十石三人扶持被下候。辰之年、於江戸侍從樣へ御附被成、此時五俵御加增被下候。江戸四年詰仕候時、五俵御加增被下、都合四十七俵三人扶持拜領仕候。天和元年正月十六日、御小姓に被仰付候。

吉備溫故秘錄卷之八十五（干城一四）終

竹之内簡八郎　寫

山下新介　校㊞

吉備温故秘録巻之八十六(原本無巻数)

大澤惟貞輯録

干城 一五(原本干城二〇)目録

六九、鹽見孫左衛門。
七〇、鹽見壽庵。
七一、鹽見玄三。
七二、神谷猶左衛門。
七三、森 不干。
七四、森 不干。
七五、戸田一雲。
七六、田尻重右衛門。
七七、田尻與一兵衛。
七八、田尻道貞。
七九、子 道圓。
八〇、西尾是庵。
八一、西尾朔庵。
八二、田中猪右衛門。
八三、田中猪右衛門。
八四、田中意德。
八五、子 意心。
八六、小野田兵庫。
八七、澤 慶閑。
八八、富田大和。
八九、富田傳右衛門。
九〇、富田元眞。
九一、子 仁之丞。
九二、臼木左京。
九三、臼木美濃。
九四、臼木久左衛門。
九五、臼木玄良。
九六、臼木元良。
九七、岡田與一右衛門。
九八、岡田清庵。
九九、岡田玄慶。
一〇〇、岡田玄卜。
一〇一、宍甘與三左衛門。
一〇二、今多道祖壽。
一〇三、宍甘與三左衛門。
一〇四、宍甘治右衛門。
一〇五、宍甘古庵。
一〇六、宍甘宗仙。
一〇七、赤井三郎兵衛。
一〇八、赤井爲仙。
一〇九、赤井友仙。
一一〇、嶋川彌重郎。
一一一、嶋川道壽。
一一二、嶋川道節。
一一三、先祖 窪田道悦。
一一四、窪田權右衛門重信。
一一五、窪田道和。
一一六、山田太郎兵衛。
一一七、山田太郎左衛門。
一一八、山田恕閑。
一一九、子 玄仙。
一二〇、森谷教庵。
一二一、森谷教壽。
一二二、森谷專庵。
一二三、駒田延融。
一二四、駒田融達。
一二五、村上玄番。
一二六、村上次兵衛。
一二七、村上了村。
一二八、上月了慶。
一二九、蓑輪夫兵衛。
一三〇、蓑輪宗有。
一三一、蓑輪完閑。
一三二、養子子 蓑輪宗慶。
一三三、鎌田仁齋。
一三四、養子 鎌田了榮。
一三五、鎌田長榮。
一三六、横田喜左衛門。
一三七、横田與兵衛。
一三八、狩野友直。
一三九、滕原丈庵。
一四〇、福原筑後。
一四一、福原孫兵衛。
一四二、福原全庵。
一四三、富田外記。
一四四、富田宇庵。
一四五、養子 富田道徹。
一四六、岡島大左衛門。
一四七、岡島太郎兵衛。
一四八、富田養傳。
一四九、子 有元。
一五〇、笠原庄左衛門。
一五一、笠原庄兵衛。
一五二、笠原用伯。

吉備溫故秘錄卷之八十六（干城一五）目錄終

吉備溫故秘錄　巻之八十六（原本無巻數）

大澤惟貞輯錄

干城　一五（原本干城二〇）

若原勘解由。父監物養父にて御座候。於攝州輝政樣へ被召出。慶長五年一亂之刻、上方騷動に付、假に大坂御屋敷御留守居被仰付、參州吉田より與力之者共召連罷登申候。江州草津にて承候へば、勢田之橋詰に關を構、往還之者を改、東之御味方之通路を絶申候と申に付、勘解由召連候者共に申渡候は、關所にて何も口々に物申義無用に候、我等次第に仕置候得と申付、勢田にて眞先に乘、關戸口にて此を開候得と、高聲に申候得ば、櫓之上より、誰にて候哉、假名を可承と申候。其節若原勘解由にて候、早開候へと、少も無擬議申候に付、味方かと存候哉、關之戸を開申候、通り候時、番衆へ何も御苦勞と挨拶仕罷通候。又相坂にても關居り申候處、右同斷之首尾にて、是も無相違通り申候。扨大坂へ參着仕、御屋敷へ入申義、難成と承候に付、御留守居之者共へ、御門前へ乘懸可參候間、御長屋之窓より遠見仕居申、少も無遲滯御門開候樣にと書狀相調、步行者に爲持、右之狀石に付け、往來之者之樣に仕、御門前を通り、御屋敷へ抛込候へと申付、先達て遣し、追付跡より御門前へ乘還參候へば、相圖之如く御門開申に付、無別義御屋敷へ入、御門閉申由承傳候。軍忠之心馳も御座候者之樣に承申候。於播州御知行高二千石、與力二十二人、足輕三十人、被仰付候、慶長九年正月十四日、病死仕候。其節武藏守樣若原右京に御內意被仰聞候、監物は勘解由身燒程には可被仰付候、勘解由娘有之由、御聞に被成候、外に養子を申上、娘と一所に仕、家督繼せ候樣に奉願、可然との御意に付、右京輝政樣へ右之通申上、池田加賀を養子に被仰付候樣にと承申候。加賀其頃は若原內記と申候。

若原監物、一歲より勘解由養子に仕、輝政樣之局勘解由母にて御座候に付、幼少より大形御城に罷在、無早晚武藏守樣へ御奉公申上候。慶長五年一亂之刻、十五歲にて御供仕、心馳も仕候由。播磨に御入國被成候、節五百石被下候。武藏守樣備前へ被成御座候刻、千石御加增被下、侍組十六人、足輕二十人被仰付候。又播州へ御替り被成候節、一倍御加增被下、都合三千石被下、侍組五人、足輕十人、御增被仰付。大坂兩陣御供仕候。其刻新參候被召抱候侍八人、足輕十人、御增被成樣被仰付候、右新參之

侍共は、因州に御國替之刻、御暇被遣候。右之足輕四十人之内、十人は父監物下にて相組津田治右衞門と申者に預け申候由。武藏守樣御代丹波篠山御普請、尾張名護屋御普請、江戸御普請にも參候。少將樣御代元和六年、大坂御普請に參候。公方樣より拜領物有之由。寛永三年寅、大樹院樣播州より江戸へ御下向被成候に付、御道中御供仕候樣にと被仰付、十一月罷下、翌年十二月罷歸候。拜領物有之由。同五年、大坂御普請、正月罷越、九月罷歸候。公方樣より拜領物有之由。寛永十九年、江戸平川口御普請に十一月朔日罷下、翌年五月末罷歸り、大猷院樣より白銀五十枚、御時服拜領仕候。芳賀五郎右衞門・齋藤加右衞門、大坂にて働之義に付、正保元年霜月、五郎右衞門四五日、御預け被成候。同二年、右近樣御身體果申以後、御用被仰付、四月朔日、赤穗へ罷越、同二十日罷歸候從。武藏守樣頂戴仕候御脇指二腰、備今所持仕候。正保三年五月十七日、六十一歳病死。

中嶋越後。父監物實父にて御座候。佐々陸奥守殿に罷在候。其節久三郎と申候。數度武勇之働仕候由承申候。其後堀尾帶刀殿へ罷出、同信濃守殿・同山城守殿迄打續奉公仕候。慶長五年、一亂之刻、信濃守殿濃州新加納之川越之節、信濃守殿内にて澤四郎左衞門・堤五郎兵衞・中嶋越後三騎先登仕、川を越向之岸にて三人共に馬より下立、堤を打越、敵の備先へ懸り、鎗を合申候。四郎左衞門・五郎兵衞兩人は其場にて討死仕候。越後も敵二人と仕合、相手をも手を負せ候へども、終に敵に突伏られ候、其時敵の從者馳寄、首を揚可申と仕處、折節風吹、越後刺申幌絹頭に懸り候に付、絹越に甲の上を二三刀切り申候内、同勢川を越、堤を押上申を見候て、敵敗北仕候に付、越後助り申候。右四郎左衞門は足輕大將にて御座候、其以前は武田信玄に居申、堀無手右衞門と申者之由。五郎兵衞・越後は其節幌之者にて御座候由。越後知行本知四百石、其後段々加増にて千七百石被下士組預り罷在候。寛永五年霜月九日、於出雲病死。

一、若原監物。　城代中老、三千石　七十三歳。

七八歳之時、少將樣へ御目見仕候。父跡目無相違三千石、正保三年六月二十八日、被仰付、父組鐵炮早々指上候處、同年八月二十三日、組鐵炮被仰付候。慶長三年寅三月、丹羽守樣御領被成、私宅へ被爲入候節、爲御祝儀白銀十貫目・御樽肴拜領仕候。明曆元年未、丹波守樣七歳之御歳御登城、少將樣へ初て御目見被成候節、私も御前に被召出、御料理被下、御盃致頂戴、御脇差拜領仕候。同三年酉、熊澤助右衞門、丹波守樣を養子に奉願、助右衞門方に御越被成候。其後私宅に御入被成候刻、爲御祝儀白銀百枚拜領仕候。私女にも白銀十枚被下候。倅太郎七證人に指上候樣

にと被仰付候。寛文五年二月、江戸へ指下申候處、同年秋、證人共御免被成候に付、八月、罷歸候。同六年九月十七日、權現樣御祭禮供奉被仰付、相組並預り足輕ともに甲冑にて相勤申候。同七年、江戸へ御供參申候。明年、金杉御堀普請に付、私儀も相詰申候得と被仰付、正月末に御普請小屋迄罷越居申候處、二月朔日・同四日・六日大火事に付、御普請相延候故罷歸候。侍從樣御對面所に被成御座候内、池田藤右衛門・宮城大藏・神圖書・私一人宛相詰候へと寛文九年、被仰付、延寶元年迄相勤申候。延寶五年、御家中簡略奉行被仰付、京銀作廻仕候。天和元年霜月朔日、御城代被仰付、右簡略奉行神圖書被付候。同二年霜月、御松姫樣御婚禮相濟申候爲、御祝儀從御前樣金五百疋、從御姫樣白銀三枚拜領仕候。貞享元年七月、御富利姫樣御婚禮相濟申候爲、御祝儀從御前樣金子五百疋、從御姫樣白銀三枚拜領仕候。同二年五月、岩千代樣初て御目見被成候、爲御祝儀從御前樣金子五百疋拜領仕候。

二、子太郎七。　萬治三年霜月朔日、八歲にて御目見仕候。

三、渡部七郎左衛門。

少將樣へ被召出、四十俵五人扶持被下、御普請奉行相勤罷有候。正保三年六月二十八日、病死。

四、渡部友之助。　組外、二百石、五十五歲。
正保三年五月朔日、十六歲にて七郎右衛門養子に罷成候。

無程七郎右衛門相果、七郎右衛門跡目三十俵五人扶持被仰付、同年十一月十一日、御兒小姓可被召仕旨被仰出、同十五日より相詰申候。慶安元年十一月二十一日、御加增十俵被下候。明曆二年十一月二十九日、御加增二十俵被下候　御幕奉行、並御藥込役被仰付、中奧へ相詰申候。萬治三年十月九日、新知二百石被下、御步行頭被仰付、御近習に被仰付、寛文十一年、勝手逼塞、在宅奉願、當年迄十五年在宅仕候。

●●●●●●●●
實祖父宇佐美助之丞。織田城之助樣へ兒小姓に被仰付、其後金吾中納言へ被召出、六百石被下、宇佐美與左衛門と申候。關ケ原一亂之節、心馳御座候由、度々加增被下候、都合千六百石、足輕五十人預り、備前・美作兩國之仕置被仰付、相勤罷在候。其節家老平岡石見・與左衛門を被召出、被仰聞候は、石見名氏を與左衛門に遣し、自今以後兄弟に罷成候樣にと被仰付、與左衛門を平岡十右衛門と御替被成候由。平岡石見儀主從不和成、備前を立退候。其節十右衛門も兄弟分にて御座候故、一同立退申

候。其後十右衛門は歸參可仕旨被仰付候得ども、御斷申不罷歸候由。平岡十右衛門義浪人に罷成候處、輝政様へ於播州被召出、窮堪忍分御知行六百石被下、公儀使被仰付、在江戸相勤申候。輝政様より御書被成下候、御自筆于今私手前に御座候。

●●●●●●曾父平岡助之進。幼少より輝政様へ御兒小姓に被召出候。輝政様御卒去被成候以後、十右衛門・助之進父子共左衛門督様へ御奉公仕候、左衛門督様御卒去以後、宰相様へ御奉公可相勤候處、石見守様へ御守家老に被仰付、十右衛門・助之進共御奉公申上候得共、心底不應義御座候に付、御暇申上、浪人仕、十右衛門義は濃州加納へ引込、五十年以前病死仕候、父助之進義は、生駒壹岐守殿へ被召出、四百石被下、臼井八大夫と申、奉公仕候。讃州家中騷動之節立退、備前へ罷越、明暦三年八月二十一日、病死。

五、子與一兵衛。　天和元年九月二十三日、十六歳にて御目見仕候。

六、和田猪右衛門。

幼少より輝政様へ被召出、武藏守様へ御附被成候。萬治二年十一月、七十七歳病死。

七、和田平助。　丹羽平大夫組鐵炮引廻 三百石、四十九歳。

慶安元年九月十二日、御目見仕候。明暦二年四月十一日、猪右衛門隱居被仰付、家督無相違三百石被仰付、寛文元年四月十七日、權現様御祭競馬相勤、天和三年閏五月四日、御鐵炮引廻被仰付。

八、子半左衛門。　寛文八年、八歳にて御目見。

九、丹羽善右衛門。　雲州にて堀尾山城守殿に罷在、三百石被下候。山城守殿代に暇申、雲州にて病死仕候。

一〇、若林彌三兵衛。

寛永三年於因州少將様へ中小姓に被召出候。彌三兵衛母方祖父稻川主馬義、武藏守様へ慶長八年十一月於備前被召出、無役三百石被下、其後隱居被仰付、家督無相違世倅十郎右衛門に被仰付候、十郎右衛門義、武藏守様御中小姓に被召出、三十俵四人扶持被下候。主馬隱居之節、十郎右衛門に被下置候御切米主馬に被下、相果候已後主馬に被下候御切米御扶持彌三兵衛に被下、被召出候。彌三兵衛義在横目、又は在御普請奉行被仰付候。江戸御供三度參候。其後、寛永二十年、吳服奉行被仰付、正保二年、御藏奉行被仰付。同三年、御加增二十俵一人扶持被下、吳服方御用にて參候御用之儀有之、板倉周防守殿へ出入可仕旨被仰付、切々出入仕

候。延寶元年八月二十八日、新知百五十石被下候。同四年に吳服方御用に京に登り云、京にて右御用御免被成、京都御闕番役被仰付、京より罷歸、七月二十八日、御當地罷立、妻子引越京へ參候。御役義相勤候內、天和三年八月四日、七十五歲病死。

一一、若林彌三郎。 伊木兵庫組、六十俵五人扶持、十七歲。彌三兵衛二男にて御座候。

跡目之儀惣領彌市右衛門病氣に付、私を跡目に奉願候處、天和三年九月二十五日、六十俵五人扶持被下、伊木兵庫組に被仰付候。同暮地逼塞之願御免被成候。

一二、渡邊善人。 勝入樣へ御奉公申上候由。

一三、渡邊助左衛門。

輝政樣へ於播州被召出候。寛永十年百五十石被下候。同十二年助左衛門病死。

一四、渡邊助左衛門。

跡知無相違被仰付候。正保元年江戶御留守番に參候。正保三年・同四年・慶應元年・同二年・同三年御毛見出申候。同年十月十八日、御野郡御代官被仰付。明曆元年和氣郡へ御替被成、同三年五月迄相勤申候。明曆三年正月二十一日、和氣郡御郡奉行被仰付、寛文十一年迄十六年相勤申候。同十月、役義御免被成、邑久郡・和氣郡・磐梨郡御代官引廻被仰付、延寶元年六月二十四日、病死。

一五、渡邊龜之助。 宮城大藏組、百五十石十八歲。

延寶元年八月十三日跡知無相違百五十石被下、正月十一日、御雁兒小姓被仰付、江戶御供仕參。天和二年、江戶御供に參、貞享元年、江戶御供に參、同二年八月四日、御兒小姓役御免、宮城大藏組に被仰付。

一六、和田八郎。 輝政樣へ御奉公申上候由。

一七、和田新右衛門。 松平阿波守樣へ御奉公仕、三百石被下候由。

一八、和田權右衛門。 阿波守樣へ御奉公仕、二百石被下候。其後御暇申請候由。

一九、和田與右衛門。

松平相模守様へ被召出、御舎弟美濃守様へ御附被成候。美濃守様御病去以後、相模守様へ御暇申上、無相違御暇被下候由。承應三年四月八日、於江戸侍従様へ被召出、百俵七人扶持被下候。明暦二年三月小十人之組頭被仰付候。萬治元年三月十八日、新知二百石被下、御取次役被仰付、寛文八年八月朔日、御加増五十石被下、同十一年正月十一日、御母衣被仰付、於御前絹拝領仕候。延寶二年正月十五日、御加増五十石被下、同三年黒母衣被仰付、於御前絹拝領仕候。同四年行歩不自由に罷成、御断申上、御取次御免、組外に被仰付候。同八年八月十五日、御母衣御断申上指上候。天和三年九月十日、病死。

二〇、和田與右衛門。　丹羽平大夫組、二百石二十九歳。

寛文七年六月朔日、侍従様へ御目見仕、同年八月朔日、少將様へ御目見仕候。天和三年十一月十四日跡目二百石被下、丹羽平大夫組に被仰付候。

二一、渡部彦太郎。　武藏守様へ御奉公仕候由。

二二、渡部作左衛門。

武藏守様へ御奉公仕候。大坂御陣御供仕候由。少將様より元和二年、備後守様へ被遣候。正保二年十月二十五日、新知百石被下候。同四年十二月十四日、御加増三十石被下候。承應元年正月朔日、御加増五十石被下候。同二年七月十八日、御加増二十石被下、長物者十人御預被成候。寛文三年六月二十三日、病死。

二三、渡部傳兵衛。　丹羽平大夫組、十五人扶持五十七歳。

寛永十五年、備後守様へ御兒小姓に被召出、十石二人扶持被下候。正保四年、御加増五石二人扶持被下候。寛文四年三月十五日、新知百石被下、御馬廻りに被仰付、同七年六月二十七日、御加増五十石被下候。延寶七年四月十二日、御當家へ被召出、十五人扶持被下候。

曾祖父渡邊雅樂之助、並祖父源七郎。周防下津屋之城に罷在、只今之地高に十三萬石計領知仕候由承候。秀吉公西國御發向之

刻、御敵仕、一家を盡し致討死候由。

二四、岩根源左衛門。 右源七郎世倅にて御座候。母懐胎にて源七郎病死仕候に付、母方一類どもに養育仕、其後石河備前守ゆかり御座候に付養置、關ケ原陣・犬山籠城にも召連參申候。

其砌、輝政樣御聞召、雅樂之助父子御存被成候者之世倅不便に思召候間、其時之名渡部左彌壽丸と申候、十五歲に一被召出候由。渡部之名氏大坂御城へ如何敷被思召候間、名・氏名も替り可申旨御意被成候、思召寄之名字に候迚九郎次郎に罷成、武藏守樣へ御奉公可申上旨、輝政樣御意被成候。武藏守樣備前へ御入國被成、慶長九年十一月十一日、百五十石被下、同十七年十月、五十石御加增被下、御兒小姓頭被仰付。九郎次郎義岩根傳五郎養子に可被仰付旨、輝政樣御意被成、則傳五郎所へ武藏守樣被仰付被遣、岩根九郎次郎に成申候。大坂兩陣御供仕候。五月七日落城之刻、城下へ早く參、首一つ打取申候。御歸陣之後、御鞍置馬拜領仕候。山崎甲斐守殿播州へ御見廻に御越被成候刻、筋目御座候に付、九郎次郎宅に御宿仕候。武藏守樣被爲成、其節御小袖被下候。九郎次郎後に源左衛門と名替り申候。於因州養父岩根傳五郎病死、跡目無相違四百五十石被仰付、元和四年十一月二十六日、織目之御禮申上候。少將樣御祝言之刻、江戸へ罷下、御奏者役相勤、其刻從公方樣吳服二つ拜領。少將樣より御小袖三拜領仕候由。正保二年十一月九日、病死仕候。跡目無相違私兄岩根周右衛門に被仰付候。

二五、渡邊傳八郎。 浮組、百五十石五十八歲。右之岩根源左衛門三男にて御座候。

寛文元年八月朔日、少將樣へ被召出、本俵四十俵四人扶持被下、御祐筆役被仰付候。同七年八年と可考、九月、御納戸奉行被仰付、同年十一月朔日、百五十石被下。延寶二年二月、病氣に付、只今迄之御奉公難勤段、度々奉願、御赦免被成、瀧川縫殿組へ御入被成候。

二六、子千太郎。 貞享元年二月朔日、八歲御目見。

二七、渡部伊豫。 本國伊賀山田郡、則山田十二鄕之内領知仕罷在候由。其後亂國に罷成、伊豫在所にて相果申候由。

二八、渡部助兵衛。

若年より他國仕、於參河權現樣へ御奉公に罷出候由。其後長岡越中守殿へ罷出、二百石藏米にて被下候由。其後原隱岐守殿へ罷出、是又二百石被下候由。關ヶ原陣之時分迄隱岐守殿に居申候由。關ヶ原落去之砌、隱岐守殿落行被申候時、一揆共起り、諸勢離散仕候節、助兵衛鄉人共を追崩申候間、隱岐守殿落被申候由。其外所々一揆追拂、高野迄供仕候。其後隱岐守殿切腹迄見屆、遺物之物共、御妻子方へ送屆、夫より浪人仕候由。

慶長九年、武藏守樣へ被召出、二百五十石被下候由。播州へ御入國以後、科人二人丹波國へ逃籠居申候を、先池田出羽被申付、彼地へ參、二人共に搦籠歸候に付、科人之刀脇指被下候由。於御國寬永十四年、病死。

二九、渡部十郎左衛門。

助兵衛跡知無相違被仰付、繼目之御禮寬永十四年七月七日、申上候由。明曆三年八月六日、病死。

三〇、渡部十郎右衛門。（湯淺半右衛門組、二百五十石五十五歲）

正保元年少將樣へ十六歲にて御目見、明曆三年極月十四日、跡目無相違被仰付、萬治三年九月十七日、權現樣御祭流鏑　被仰付相勤申候。寬文二年、延寶元年、天和三年、江戶御留守居番に參候。

三一、子次郎兵衛。　延寶七年六月十五日、十二歲侍從樣へ御目見仕候。

三二、渡邊惣左衛門。

勝入樣へ於濃州被召出、其後輝政樣御部屋住之內、御附被成候由。勝入樣・輝政樣方之御陣御供仕候由。

慶長五年奧州御發向之節、輝政樣御供仕、下野國小山迄罷下候處、上方亂七月二十四日、小山へ申來候に付、大坂への御使者輝政樣奉始、御家老中入札を以、惣左衛門に被仰付候。達て御斷申上候得ば、御前へ被召出、此使大事に思召候故、入札にて其方之御極被成候、多分大坂へ參着之事成間敷と被思召候、於途中橫死仕候はゞ、於御眼前遂忠死候同事、若又仕濟候はゞ、此度之一番首を取候高名に等く可被思召候由、御直に御意被成候故、御請申上、相使之義惣左衛門奉願、野中市左衛門被仰付、御書二通御渡被成、內一通は、可及露顯に樣子に候はゞ前廉火事可仕候、一通は可成程可致持參候、若し敵の手に渡り候ても

不審由被仰付、委細之御口上承り、兩人小山より罷出、尾張迄何之無障參、勢州關所多く難罷通樣子故、刀脇差を兩人共に伊勢之御師上部大夫に預置、伊勢參の町人に成參候へ共、彌罷通事難成候故、一通之御書を破り泥中へ押込、一通は切破候て草之汁にて一二付仕、兩人笠之結に仕、伊賀越を大和路へ還り、方々關所種々謀言を申、無恙大坂へ參着仕、御座敷へは大根賣に成、案内を申、其後薪を荷候て、惣左衞門一人御屋敷へ參、御前樣へ御口上御簾越に御局迄申上、右之笠之結指上申候由。右御使之首尾微細書付御座候得共、事長候故略之候。

慶長六年十一月三日、於播州新知百七十石被下、其後御長柄之小人御預被成、五千石之御代官、被仰付候。同十年十一月五日、三十石御加增被下、都合二百石に被仰付、同十八年、輝政樣御卒去之後、左衞門督樣へ御附被成、御長柄頭前々之通隨被仰付候。御斷申上、武藏守樣へ御奉公仕度旨、願之通被仰付、御長柄指上、御奉公仕候。元和九年七月二十九日、於因州六十七歲病死。

三三、渡邊與二兵衞。（老後には淸兵衞と申候。惣左衞門二男にて御座候。）

惣左衞門存生之內、武藏守樣へ被召出、備前罷在候。（惣左衞門惣領之子九助早世仕候に付御斷申上、播州へ呼取置申候由。）輝政樣御卒去以後、左衞門督樣へ被召仕、又備前へ參候由。大坂御陣左衞門督樣御供仕候由。左衞門督樣御卒去之後、右近大夫樣へ被爲附、播州へ罷在候由。其後惣左衞門隱居奉願、家督無相違二百石與次兵衞に被下、池田加賀組に被仰付候。慶安元年閏正月二十六日、於備前六十七歲、病死仕候。

三四、渡邊與次兵衞。

慶安元年二月二十六日、淸兵衞跡知無相違二百石被仰付。萬治三年十一月十五日湯淺民部組御鐵炮引廻被仰付。寬文三年正月十三日、備中御郡奉行被仰付、同五年病氣に付、願之通正月十八日、御郡奉行御免被成候。同十一年二月正木市正組に被仰付、（湯淺民部果候故也。）同年十一月二十九日、池田藤右衞門組之御鐵炮引廻被仰付候。延寶四年十一月九日、御鐵炮藏奉行被仰付候。同五年、病氣に付奉願、八月朔日、御役義御免被成候。天和二年池田藤右衞門死後、若原監物組に被仰付、貞享二年九月朔日、七十五歲病死。

三五、養子渡邊助之丞。　二百石、二十七歳。鹿田藤兵衛末子にて御座候。

私四五歳之時より藤兵衛無性の中風久々煩、浪人仕、果申候。私兄兩人遠國へ罷越、先にて果申候故、傳來之書物も致紛失候由。且又私幼少之時分、宇都宮所替にて一類共不殘出羽國へ參候故、先祖之義曾て不存候。左之通も方々より承傳にて、慥成義に無御座候。依之時代年號不存候。

實曾祖父鹿田主膳。後、高橋左近と申候、上野國小幡之者、上總に致附屬罷在、少々軍功も有之由。上總沒落之後、浪人仕、於同國病死。

實祖父鹿田庄左衛門。奧平大膳允殿へ罷出、於野州宇都宮病死。庄左衛門存生之內、隱居仕、家督惣領高橋吉兵衛相續仕候由。

實父鹿田藤兵衛。庄左衛門末子隱居領を藤兵衛に給、美作守殿へ奉公仕候由、役義數多勤申候由。老後には百人組之長柄頭、且後城番役相勤候由。知行二十貫給候由。寛文六年之頃、浪人仕、同九年二月十二日、於宇都宮病死。

私寛文十年四月、侍從樣へ御部屋之內被召出、同六月二十六日、江戶へ參、同七月七日初て御目見仕、御兒小姓に被召仕、六十俵四人扶持被下候。延寶六年正月十九日、前髮取候得と被仰付、同二十六日、御意にて名を助之丞に改申候。同八年三月十二日より御留守之御納戶・御數寄道具・御腰物・御書物奉行被仰付候。同年十月十九日、江戶御着座御役御兒小姓相勤申候。天和元年正月十三日、御懇之御意にて、御側兒小姓に被仰付、同二年四月十五日、江戶日次記可申旨被仰付、同三年閏五月二日、自今以後、於御國も御側之義、日次記可申由被仰付。貞享元年二月十六日、渡邊與次兵衛養子に被仰付、同二年十月二十四日、跡目二百石無相違被仰付。

三六、渡邊金大夫。　藤堂和泉守殿にて二千石被下罷在高麗陣に討死仕候由。

三七、渡部武兵衛。

金大夫討死仕候節、三歳に成申に付、家督伯父渡部掃部後見仕候て、武兵衛十五歳に罷成候はゞ、相渡申樣にと被仰付候處、十八歳迄出儀無御座候に付、和泉守殿家老中迄斷申候得共、埒明不申に付、立退申候て、姬路へ罷越。

武藏守樣御步行榊與三右衛門不遁申に付賴、浪人にて罷在候處、日置豐前聞及被申候て、故有者に候間、輕義に罷

出候はゞ、武藏守樣へ可被召出旨、與二右衞門へ被申聞候へども、和泉守殿構御座候旨申上候得ば、輕事罷出候はゞ構之吟味も御座有間敷旨被申聞候故、與二右衞門御家に罷在、其上御聞及被成候旨、御懇意被仰候上は、如何樣に被召出候とも不苦候旨申上候得ば、四十俵四人扶持被下、御歩行に被召出、大坂御陣御供仕、相勤申候由。少將樣因州に被成御座候節、少存寄御座候て立退申候て、延部內匠殿被還、御目候に付、於江戸內匠殿御屋敷に浪人にて罷在候處、內匠殿豐前へ御咄被成候得ば、武兵衞義外へ遣す者に無御座候、以後は如何樣とも取立可申由にて、因州へ罷戾候樣に可被仰付旨、豐前被申候に付、內匠殿武兵衞に被仰聞、因州へ罷歸候得ば、右之通歸參被仰付候。其後長病にて於備前病死仕候。

三八、養子渡部多左衞門。 膳奉行、四十五俵四人扶持。六十二歲。

承應元年十二月、武兵衞方へ養子に罷越候處、武兵衞長病にて御奉公難成、御斷申上候得共、家督無相違被仰付、同年極月二十八日、少將樣へ御目見仕。明曆三年、少將樣御參府御供仕、道中富士川御步渡り被成候節、俄に水出御渡り瀨難知御座候處、私先立瀨踏仕候て、御渡被遊候。後川向に殘し置申候刀脇指取に罷戾候、其內御輿御居御待被遊、罷歸候節、御前へ被召出、難有御意にて、御直に御菓子被下候。同年十月、侍從樣初て御入國被成候節、御雇にて伏見迄御供被仰付候。於尾州宮御先越船夜に入申候て難成御座候に付、梶田淸右衞門・村上市右衞御番所へ罷越斷申候得共、江戸大火事以後、右夜船一艘も出し候義不成由申に付、今一應私に參、何卒斷申候へと、右兩人申付候故、御番所へ參、樣々斷申候へ共、難成御座候由申候故、再三斷申候へば、尾張樣御船奉行千賀志摩是に居申候間、逢候て段々斷申候得ば、承屆候由にて、船出し申候。右之旨伏見にて侍從樣御耳に達、爲御褒美御小袖一つ拜領仕候。右道中達者仕候に付、白銀一枚拜領仕、伏見より江戸へ罷歸候。同年十一月於江戸御近習步行被仰付候。寬文三年少將樣御參府御供仕、阿部川御越被成候節、少相煩申に付、御先へ參候處、川御越被成候時分、夜に入申に付、心得にて明松川越等拵置申候故、於府中御泊能心付申由御意にて、御羽織一つ拜領仕候。同七年十一月御橫目被仰付、御加增五俵拜領仕候。延寶元年六月、少將樣御附人被仰付候。同二年六月、中小姓に被仰付、お六樣へ相詰申候。同四年、小堀主殿組に被仰付候。同五年・六年・七年在方普請奉行相勤申候。同七年六月二十三日澤權

大夫小姓組へ御入被成候。同八年正月中奥に被仰付候。五月御賄御用被仰付候。貞享二年八月、御賄方御用御免被成、十一月二十三日、御膳奉行被仰付候。

曾祖父内藤五郎兵衛。大野修理亮に奉公仕、二百石給居申候、於大坂討死仕候。

曾父内藤多左衛門。大坂落城之砌、姫路へ罷越、其後因州鳥取へ参、少将様御國替之節、備前へ罷越、浪人にて病死仕候。

三九、水野彦右衛門。松平右京様に三百石被下御奉公仕、右京様御卒去被成候に付、浪人仕、播州之着志と申所にて病死。

四〇、水野兵左衛門。

祖父存生之内、右京様へ御小姓に被召出、御奉公申上、彦右衛門同時に浪人仕、御當地へ参、二十八・九年浪人にて罷在、病死仕候。

四一、渡部半七。六十俵七人扶持、四十七歳。長屋新左衛門父方之從弟にて御座候、新左衛門養役介仕。

寛文二年江戸御供に参候に付、私を召連参同三年、於江戸御歩行に被召出、三十一俵三人扶持被下候。江戸にて御銀奉行、又は町買、其後御産所横目仕候。延寶元年御泄藏御用、其後御藏奉行・御銀奉行相勤申候。同八年七月十七日、岩千代様御抱守被仰付、御近習歩行並に被成、九俵一人扶持御加増被下候。天和三年二月二十一日、岩千代様江戸へ御越被成候に付、御供仕罷下候。同年五月三日、六俵一人扶持御加増被下候。貞享二年二月朔日、御中小姓被仰付、十四俵二人扶持御加増被下、同年五月十四日、岩千代様初て御目見被成候節、御登城御供、肩衣着相勤申候、御目見相濟候、爲御祝義從侍從様銀子二枚拜領、從御前様金五百疋拜領仕候。

四二、布施萬齋。

先祖は布施左衛門佐と申候。足利義廉に奉公仕候。左衛門佐子無之故、義廉末子を養子に給候由。則布施又四郎と申候。文明三年、武衛滅亡之節、左衛門佐は討死仕候、又四郎は幼少にて浪人仕、尾州に罷在候由。曾祖父は又四郎三男にて御座候。其後京都に罷在、文祿元年四月八十餘にて病死。

四三、布施養琢。初は布施權八郎と申候て、織田信雄に奉公仕、兒小姓相勤申候。

天正十八年、信雄御浪人之節、京都へ入込、それより醫仕候て、於播州武藏守樣へ被召出、二百石被下候。其後少將樣於因州家中爲療治と被仰、御藏米にて高五十石拜領仕候由。大坂冬陣御供仕候、夏陣にも御供仕候由。於因州鳥取四十一歲にて病死。

四四、布施養琢。

七歲之時、寛永三年、跡目二百石被下、五十石は被召上候。同十九年十一月二十二日、御加增五十石被下候。承應二年九月十五日、四十歲病死。

四五、布施玄珀。醫師、二百五十石。四十一歲。

承應二年二月十五日、九歲にて御目見仕候。同年霜月朔日、跡目二百石被下、五十石は被召上候。貞享元年三月九日、御加增五十石被下候。同二年六月晦日、惣御醫師之指引仕候得と被仰付、同年八月二十日、每朝御前へ相詰候に付、御番御免被成候。

四六、子恕仙。延寶七年十月朔日、御目見仕候。

四七、高崎長庵。高麗陣に働申候由。播州野里へ取込者、首尾能仕留申候由。

輝政樣へ醫者に被召出、二百五十石被下候由。大坂陣に御供仕候由。承應元年九十九歲病死。

四八、高崎長庵。

正保四年二月、少將樣へ被召出、十人扶持被下候。其後祖父長庵隱居被仰付、道雲と名を改申候、御知行無相違父に被仰付候。延寶五年十月九日、病死。

四九、高崎長庵。二百五十石四十三歲。

寛文七年正月、少將樣へ被召出、本俵三十俵三人扶持被下候。延寶五年十二月、跡目無相違被仰付、名も長庵に成可申旨、御意之由、日置左門被申渡候。貞享二年六月二十九日、醫者中間諸事肝煎申樣にと被仰付、同年八月二十

日、毎朝登城仕候に付、御城御番御免。

父野崎多兵衞・兄野崎九郎右衞門。武藏守様へ御奉公仕、少將様御幼少之時分より御奉公仕、二十六年以前に病死仕候。世倅野崎九郎右衞門、爾今侍從様御歩行にて御奉公申上候。父多兵衞何方に奉公仕候も不存候。久く浪人、私に罷ﾘ居申、二十六年以前、於御當地病死。

五〇、野崎用節。百五石、五十九歳。

正保元年十二月五日、少將様へ被召出、七石に二人扶持被下、御掃除坊主にて御奉公申上候青木了有肝煎にて被召出候。同四年四月十八日、江戸にて侍從様御部屋御雇にて伺公仕候。翌年六月三日に御附被成在江戸被仰付、御加増五石に二人扶持被下候。承應元年二月上旬、侍從様御意にて足立用伯弟子に被仰付候。明暦三年五月二日、侍從様御意にて御茶道被仰付、御加増三石被下候。寛文七年十二月二日名を用節に替り申度奉願候へば、被仰付候。同八年十月朔日、御加増今俵二十俵被下、御醫者並に被仰付、水之手御長屋に居申候處、延寶元年九月五日、入江玄怨家屋敷被下候。家破損普請仕候段御聞被遊、爲御扶金三十兩被下候。延寶八年九月十二日、御加増三十三俵被下、都合百俵に四人扶持被下候。天和三年十二月十六日、新知百五十石被下候。

五一、養子野崎用仲。四十五俵四人扶持、四十三歳。

用節養子に奉願候得ば、被仰付候。實は用節弟にて御座候。寛文十二年三月朔日、御目見仕候。同十日、被召出、四十五俵四人扶持被下候。延寶五年九月、數馬様御供にて江戸へ參、十二月二十八日、御暇被下候節、從大御前様銀二枚、從御前様銀二枚、數馬様より御小袖二つ被下候。

五二、伊藤直衞門。有馬法印豐御内に跡目小知行被下候。其後、浪人病死。

五三、淡河奥澤。

織田上野殿へ幼少より罷在、小知行給申候。大坂陣之時分より浪人仕、京都へ引込、外科仕罷在候處、伊木長門守方へ寛永五年罷出、翌年伯州倉吉へ引越候て百五十石申付候。御當地にて寛永十八年に暇申、浪人仕候。

同十九年御家へ被召出、御切米四十俵被下候。正保元年十一月十五日、百五十石被下。承應元年三月二十九日、六十四歳卒、中風にて果申候。

五四、淡河友古。 二百五十石 五十三歳。

承應元年五月十五日、家督無相違被仰付候。寛文十一年三月十五日、少將様御出船、四月朔日、江府へ御參着、同月下旬より御煩被成、八月末に御快然(癒カ)被遊候。六月中旬より八月末迄御座所に晝夜相詰申候。同十二年春より御氣色重く、御腫氣、五月末に御腫氣被爲增、御大事に可被爲及之時、應侍從様之貴命、五月二十六日より健脾丸を奉進上、御小便日々御快通、追日御快復被爲成候。此年は二月中旬より初て六月下旬迄、百日餘り御產所に相詰、每夜寢番仕候。閏六月五日に御快全被遊候。爲御嘉儀侍從様美膳被下、白銀十枚頂戴仕候。同月十四日、福照院様御料理被下、白銀三枚被下候。同月十九日、御前様晒三疋被下候。信濃守様より白銀三枚被下候。丹波守様より金子五百疋被下候。九月二十一日、少將様より白銀三十枚頂戴仕候。十月二十六日、福照院様御卒去、御病中六十日餘晝夜相詰申候。延寶元年正月九日、於西丸難有御意にて百石御加增被下候。同八年八月五日、從侍從様御城へ被爲召、難有御意にて每年御米四十俵宛可被下旨被仰聞、拜領仕候。天和二年二月三日、侍從様より白銀五枚、少將様より三枚拜領仕候 同年四月朔日より少將様御煩被成、四月四日より五月二十一日、御卒去被成候迄、西之御丸に晝夜相詰申候。同年八月十五日、爲御遺言、金子十兩拜領仕候。同三年五月朔日、西御丸御納戸之呉服三頂戴仕候。

五五、木村三郎兵衛。 浦上遠江守宗景に仕居中、八木山之城に罷在候由承及候。家景沒落之後、和氣郡伊部村に浪人にて病死仕候。

五六、木村道意。 幼少之時父病死故、方々離散仕、京へ參、延壽院長朔法印門弟に成、醫者に成、於御國病死。

五七、木村玄石。

寛永十五年十月十五日、少將様へ被召出、二十俵被下候。正保四年十一月、五人扶持被下候。明曆三年冬、二十俵御加增被下候。寛文七年二月二十五日、新知百五十石被下候。延寶八年八月二十一日、當年より每年御米三十俵づゝ

被下候旨被仰渡。貞享二年四月、七十五歳病死。

五八、木村玄忠。　百五十石、四十一歳。

萬治二年三月朔日、少將樣へ御目見仕、同年七月七日、侍從樣へ御目見仕候。寛文七年未、多延壽院玄淵法印の門弟に成可申ためと、又進卓司流之外科稽古可仕ために、江戸へ罷越、同十一年戌春稽古相濟罷歸候節、爲御褒美少將樣より白銀十枚拜領仕候。道中御供置之御扶持方馬銀被下候。延寶元年丑七月五日、被召出、四十七俵三人扶持被下候。天和三年八月十日、御前へ被召出、當々療治精出し心掛申候由被爲聞召候間鶴田流小兒之療治御弟子に被仰付候由御意にて、御直筆之鶴田流御書物拜領仕候。貞享元年冬印牧玄順流之療治之法稽古可被仰付とて被爲召、十月二十七日、御國罷立、十一月十三日、江戸へ參着、同年中に稽古之義相濟候得共、翌年御歸國之御供可被召連由にて、同二年四月迄、相詰罷在候處、父玄石煩中に付、御暇被下、四月二十二日、罷歸候。六月十六日、父跡目無相違被仰付候。

五九、子玄達。　天和元年十月朔日、十歳にて御目見仕候。

六〇、横井本氏菅。土佐。　備前津高郡金川城主松田將監殿家臣にて千二百貫領知仕候由。

六一、横井藏人。　父一所に將監殿に奉公仕候。金川落城に付浪人仕、於當國病死。

六二、横井養元。

武藏守樣御代被召出、二百五十石被下候。大坂陣之御供仕候。少將樣御代郡御代官被仰付候由承及候。承應元年隱居被仰付、玄昌に被下置候十人扶持隱居料に被下候。寛文五年八十八歳に罷成候に付、御小袖拜領仕候。同七年正月病中從少將樣御使者被下、難有御意にて御小袖被下候。同十七日に九十歳にて病死。

六三、養子横井玄昌。　十四歳にて養元方へ養子に參申候。實父は、則養元兄横井宗兵衞と申、戶川肥後守殿に奉公仕居申候。其後暇申請、於備中病死。

玄昌寛永十年、被召出、十人扶持被下候。承應元年、養元隱居被仰付、無相違二百五十石被仰付候。寛文七年五月八日、六十歳病死。

六四、横井良傳。 二百五十石 四十七歳。

明暦三年十月二十六日、侍従様初て御入國、同十一月朔日、御目見仕候。同九月二十日、父跡目無相違被仰付、二十一日、於西之丸侍従様へ御禮申上候。少將様へは翌年十二月朔日、御禮申上候。寛文十一年六月八日、學校之勤番被仰付、延寶二年迄相勤申候。延寶四年五月、御城御番被仰付候。

六五、田中作右衛門。 田中直吉子、藏人弟にて御座候。

於播州慶長九年、直吉病死仕、隱居料二百五十石之内百五十石、武藏守様より作右衛門に被仰付候。大坂兩陣御供仕候。寛永十五年七月、病死。同十二月二十七日、跡目百五十石、玄順弟田中市郎兵衛に被仰付候。

六六、田中玄順。

寛永六年、於因州少將様へ被召出、二十石五人扶持被下候。其後於備前十五石御加増被下候。正保元年百五十石被仰付候。天和二年二月十二日、隱居之願申上候處、侍従様被仰付、五人扶持被下候。

六七、田中三甫。 百五十石、五十二歳。

正保二年十一歳にて十二月晦日、少將様へ御目見仕、慶安元年外祖母客人と申者、御城御奉公勤申者遺跡二十五石、十人扶持私に被仰付、十一月十五日御禮申上候。寛文二年四月不慮之義に付、御暇被下、浪人仕候處、同四年六月十一日、歸參被仰付、同十五日御目見仕、御切米御扶持如前々被下候。同十一年六月八日、學校御番被仰付、延寶四年正月、御免被成候。同年八月二十三日、榊原伊織様之御袋様香雲院様江戸へ御參向に付、御供可仕旨、侍従様被仰付、九月十五日、出船、十一月四日、罷歸候。延寶八年二月十二日、御蓊様江戸御下向道中御供被仰付、三月二日、御發駕御供仕、四月十七日、罷歸候。天和二年二月十五日、家督無相違百五十石被下候。

六八、子元折。 延寶三年十二月二十九日九歳にて御目見仕候。

六九、塩見孫左衛門。 浦上遠江守宗景に居申候、沒落以後、上道郡西隆寺村にて天正九年四月十一日、病死。

七〇、塩見壽庵。　備前にて醫者仕、始終浪人にて寛永十二年二月四日、於備前七十五歳病死。

七一、塩見玄三。　二百石、五十四歳。

寛文八年九月三日、俄に西之丸へ被爲召候由。

泉八右衛門方より申來罷上り候處、日置猪右衛門被申渡候趣、少將樣依御病氣、從江戸淺尾長澤被召上、被致滞留候處、子息煩に付急に下向被申候故、可然弟子有之候はゞ可被召出旨被仰付候得共、只今御用に立可申樣成弟子無御座候由、被申候に付、備前にても可然者之存寄有之候はゞ可被召出旨に付、長澤被申候は、備前へ參鹽見玄三と申者に時々立申候、此者被召出候はゞ、御用にも立可申候旨、被申候に付、御目見被仰付候間、左樣心得申候樣にと被申渡、即時に於西丸御目見被仰付、毎日相詰申候。

同八年九月二十七日、御扶持十人被下候旨、日置猪右衛門被申渡候。同九年正月十八日、猪右衛門被申渡候は、當年江戸御供之義勝手可爲不自由思召候に付、銀子二貫目被下候由、則拜領仕候。同年九月十六日、他に勝し病人多療治仕候由被聞召、爲御心付、銀一貫目拜領仕候。同十一年正月十八日、爲江戸用意被下候由、銀子三貫目拜領仕候。同年四月二十六日より少將樣御氣色重く、五月晦日より御藥被召上、六月朔日之夜御足之腫氣始て御覺被成、其節御小便快通、御氣色御快然之處、同十五日、惡寒發熱甚敷、夜中御汗十二度夥敷被遊、御草臥被成、御腫氣指返し、次第に增、二十七八日之頃は御大切にも可有御座歟と末々迄奉氣遣候處に、八月に至り御平復被成、六月十六日より八月末迄御産所に晝夜相詰申候。同十二年二月中旬、少將樣御氣色重く、御腫氣往來、御病氣次第に重く、五月下旬甚御大切に被爲成候處、侍從樣依御意淡河友古・私兩人存寄之御藥、五月二十六日より被召上、六月二十六日迄に御諸症御快然被成候。此年凡百日御産所へ詰、晝夜寢番仕候、同年閏六月五日、少將樣御病氣御快然之爲御嘉儀、侍從樣より御素麵被下、白銀十枚拜領仕候。同十四日、從福照院樣白銀三枚拜領、從大御前樣晒布三疋拜領仕候。九月二十一日、從少將樣御病中骨折申候と難有御意にて白銀三十枚拜領仕候。延寶元年正月十九日、新知二百石被下候。同八年八月五日、從侍從樣御米四十俵づゝ毎年被下候旨、池田大學被申渡候。申酉兩年拜領仕候。

天和二年二月三日、少將樣御小瘡御平癒被成候、爲御祝儀從少將樣白銀三枚、從侍從樣白銀五枚頂戴仕候。同年少將樣御病中、四月四日より五月二十二日迄西之丸に晝夜相詰申候。八月十五日、少將樣爲御遺言金子十五兩拜領仕候。同三年五月朔日、少將樣御納戶より御召小袖一つ、御羽織一つ拜領仕候。貞享二年八月二十日、御番被仰付、二十一日より御番相勤申候。

七二、神谷惣左衞門。 石田治部少輔に罷在、關ヶ原にて討死仕候由。

七三、森不干。

寬永二十一年四月二十九日、於江戶、少將樣へ被召出、同年御供仕罷登、四十七俵五人扶持被下候。正保三年にて御加增四十七俵五人扶持被下、都合九十四俵に十人扶持被下候。同四年、於江戶龜松樣就御逝例、七月二十二日、大猷院樣依御召登城仕、同二十六日迄相詰、同日退出、同月二十九日、又登城仕、八月三日迄相詰申候。依之少將樣より金十兩、御羽織一、御帷子三拜領仕候。慶安三年閏十月二十八日、新知百五十石被下候。寬永二十一年より寬文六年迄江戶へ十二度御供仕候。七十四歲病死。

七四、森不干。 百五十石、五十九歲。

慶安三年、少將樣へ御目見、明曆元年於江戶侍從樣へ御目見仕。萬治三年八月朔日より少將樣御針御用被仰付、每日御城へ相詰可申旨御意被成、御鷹野・御國廻り抔にも御供仕候。寬文三年、四十七俵に三人扶持被仰付候。同十二年、於江戶少將樣御煩御本復被遊候、爲御祝儀從侍從樣銀十枚拜領仕候。從福照院樣銀三枚、從大御前樣晒布三疋拜領仕候。同年、於江戶三十三俵御加增被下、同十三年正月九日、新知百五十石拜領仕候。延寶八九兩年從侍從樣御米二十俵宛拜領仕候。天和二年二月十二日、少將樣御小瘡御本復被遊、爲御祝儀銀子五枚、從侍從樣被下、從少將樣銀子三枚被下候。同年八月十日、少將樣爲御遺物金十五兩・御小袖一・御羽織一拜領仕候。

七五、斤田一雲。 五十俵五人扶持、五十二歲。

先祖之義、世倅之時父病死仕候に付、以前之義、承傳不申候。父一雲は、細川越中守殿にて二百石被下罷在候得共、暇申請、浪

人仕候由。

於因州少將樣へ本知百石にて被召出候。寬永二十年十月二十六日、病死仕候。私兄三得に跡目無相違被下候處、三得義承應三年八月十九日、病死、妻子無御座、御知行被召上候。私義承應三年十月十五日、被召出、五十俵五人扶持被下候。延寶八年十月三日、侍從樣江戶御參勤之御供被召連、同月二十一日、江戶へ御下着被遊候。其刻熊千代樣御瘡毒御發被成候に付、御藥指上げ申樣にと被仰付、同月二十四日之朝より御藥上げ申、御相應にて次第に御平癒被遊候處、勝千代樣御小瘡御發被成候間、御國へ罷歸、勝千代樣へ御藥上げ申樣にと被仰付、明る天和元年正月二十日、江戶罷立申候。其刻從侍從樣銀五枚拜領仕、從御前樣銀三枚、從熊千代樣御小袖一つ・御はま弓、世倅にとらせ候へと被仰、樣々拜領仕、難有御意にて御料理被下、罷立候。正月二十九日、御國へ罷歸、二月朔日之朝勝千代樣へ御目見仕候て、御樣體奉窺、二月三日之朝より御藥上げ候處、御小瘡次第に御快然、速に御平癒被成候。天和元年六月十六日、侍從樣御歸城被成、同十八日之朝御前被召出、勝千代樣御療治仕樣江戶にて御意被遊候通、踏込仕候段、御感被成候由御意にて、銀十枚被下候。其後御子樣方へ、何れも御藥上げ申候。

七六、田尻重右衞門。

花房志摩守殿に百五十石被下、家老役仕居申候。高麗陣にも志摩守殿供仕、於戰場生捕兩人召連罷歸候由。大坂陣志摩守殿供仕、心馳有之由。其後年罷寄、志摩守殿知行所備中横谷に罷在、七十六歲にて病死。

七七、田尻與一兵衞。

志摩守殿家老役相勤、百五十石被下候。大坂陣之節重右衞門召連罷立相勤、心馳も有之、志摩守殿より脇差一腰被下候由。嶋原陣に花房助之丞殿御意被成候時、與一兵衞を志摩守殿より御附被成候に付、備中横谷より下津井へ罷出供仕、陣中相勤申候。其後於横谷七十三歲病死。

七八、田尻道貞。　二百俵十人扶持　五十歲。

十三歲より御當地にて勤學仕、十七歲にて上方へ罷上り、二十六歲にて直瀨道三弟子に罷成、二十九歲迄京に罷在り、二十九

歳より御當地へ罷下り、當町に罷在候。

延寳八年正月十五日御目見被仰付候。同年二月朔日、被召出、十人扶持二百俵被下候。天和元年六月九日、家屋敷被下候。貞享二年八月二十日、御城御番被仰付候。

七九、子道圓。 天和元年九月十五日、御目見被仰付候。

八〇、西尾是庵。 池田備中守殿より同出雲守殿御代迄罷在、百五十石被下候。

手前不罷成候に付、暇申候得共、埒明不申候故、立退御當地へ正保三年八月朔日、被召出、翌年正月十五日、二百五十石被下候。追付より御城御番被仰付候。萬治三年七月晦日、病死。

八一、西尾朔庵。 百石、四十歳。

萬治三年霜月十二日、名跡百石被下候。寛文十一年六月八日、學校被仰付、延寳四年正月十五日、御免被成候。

八二、田中猪右衛門。

近江佐々木高嶋之末流にて御座候由。代々近江に居住仕候。其後信長公へ奉公仕、安土在郷方之御役被仰付候由。御他界以後山城國八幡田中と申所に罷在、剃髪仕、休味と申候。

八三、田中猪右衛門。

二十四歳之時京都へ罷出、浪人にて弓之稽古仕候内、南蠻よりいるまん渡り金瘡外科名譽之上手にて御座候故、懇望仕候處、切支丹之宗旨に罷成候はゞ教可申候、左無之候はゞ傳授成間敷由申候故、療治執心之儘、早速宗旨に罷成、外科金瘡之秘法不殘習申候。夫より剃髪仕、意徳と申候。南蠻流的傳之弟子は、意徳一人之外無御座候由承及申候。則南蠻より傳來之卷物、並外科金瘡之道具共不殘相渡し、爾今所持仕候。權現樣御代にきりし丹御穿鑿御座候時、御奉行所へ被召出候、素より宗旨信仰にて不及候故、早速ころび申候て、南蠻人より傳來之一卷並外科之道具共差上申候得ば、達上聞御赦免被成、然ば日本の重寶にて有之とて、右之一卷並外科之道具共、從公儀拜領仕、世間廣醫業相勤申候。權現樣御上洛之節、御指御痛被成、二條御城へ召被出、御藥差上申候。早々御平癒被成、南蠻流重寶之旨御褒美被成、江戸へ參候樣にと被仰候由。父申傳承は、右之年月日覺不申

候。其後禁裏御癒御療治被仰付、毎日參內仕候。爲御褒美被叙法橋、翌年宮樣方御療治被仰付、御本復已後、被叙法眼候。大猷院樣御代に、又切支丹御穿鑿御座候て、右にころび申者共不殘籠舍被仰付候。先年權現樣御赦免之趣申上候、其時も又御赦免被成候。其後萬治元年十一月二十九日、病死仕候。

八四、田中意德。 二百五十石 五十四歲。

前意德、弟之子、甥にて御座候を養子に仕候。意德果可申前年、南蠻一流金瘡外科之家を繼せ可申旨、京都御所司代牧野佐渡守殿へ申上候得ば、可然旨被仰候て、則佐渡守殿私を召連罷出、意德と申名を讓り、法眼は常安と改號仕候。

寛文六年八月二十二日、少將樣へ被召出、二百五十石被下候、同九月朔日、侍從樣へ御目見仕候。天和二年、少將樣御小瘡御療治被仰付、御本復之之御祝儀白銀二枚被下候。

八五、子意心。

寛文八年七月朔日、少將樣へ初て御目見仕候。同九年六月、侍從樣へ初て御目見仕候。

八六、小野田兵庫。 生國、美濃。後中納言□(佐カ)高千石、與力二十人預り申候。御死去已後、御國之内に其儘浪人にて、少し閑き仕罷在、病死。

父 氏名欠ぐ。祖父之跡に渡世仕、病死。

兵庫職場之働、留書・感狀等、同姓權大夫父澤權左衛門手前に御座候處、於因州火事に燒失仕候由。

八七、澤慶閑。 六十七俵四人扶持 六十四歲。

寛文六年八月下旬被召出、四十七俵四人扶持被下候。同七年十月江戶御堀普請に付御參勤御供に被召連候。同九年酉春、下谷火事、此時手前を指捨御屋敷へ罷出精出申段被聞召屆、藥道具燒失迷惑可仕由にて、金子十兩被下候。此度三年詰仕候。同年十月、御加增二十俵被下候。延寶二年霜月より學校へ相勤候樣にと被仰付、同四年春迄相勤、御赦免被成候。

八八、富田大和。 江州甲賀郡上野と申所累代所持仕候。秀吉公御時甲賀士有違令之事、悉所知被召放浪落仕候。

八九、富田傳右衛門。

幼少之時父大和病死仕、孤にして浪落仕候。成長仕候て中村式部少輔殿・子息一學殿二代に奉公仕、知行三百石給候由。一學殿死去無嗣て家絕申候。其後一生浪人にて年老、落髮仕玄勝と申、於因州鳥取病死仕候。

九〇、富田元眞。 三十石十人扶持 六十二歳。

寛文五年正月、少將様へ被召出、同月十七日、御目見仕、三十石十人扶持被下候。於御前侍講相勤申候。學校御興立被成候に付、學校並御家中學文會相勤申候。天和二年朝鮮人來朝之時、牛窓へ可罷出と被仰渡候。上々官表愼齋・學士成翠虛・判事安蒼浪等と筆談唱和仕候。歸帆之時又罷出候得共、直に過去候て不及再面候。

九一、子仁之丞。 延寶六年、九歳にて御目見仕候。

九二、臼木左京。

大友義統に仕へ家老職相勤、豐後國臼木郡に居住仕、近邊領知候由。朝鮮陣にも供仕、數度働も御座候に付、感狀も數通給候由。義統家不慮に滅亡仕、致浪人、仕官之望を止め、致遁世、於高野營一字罷在、終に其所にて致死去候由。爾今於高野山號最勝院と舊跡御座候。

九三、臼木美濃。 左京一所に朝鮮陣相勤、心馳之働も仕、感狀も給候由。左京浪人仕候節、老母を召連、備前へ罷越、常閑と致變名、於岡山病死。

九四、臼木久左衞門。

於播州姬路輝政様へ被召出候由。寛永十六年三月二十九日、五十八歳於岡山病死。

九五、臼木玄良。

啓迪院玄治法印門弟に成、醫術稽古仕罷在候處、從少將様(御)前被召出、 六十二俵二人扶持被下候。先祖の記錄、並右之感狀等も所持仕候處、慶安四年六月居宅近邊火事出來、類火に付燒失仕候。 寛文二年四月二十二日、五十三歳病死。

九六、臼木元良。 三十一俵三人扶持 三十二歳。

寛文二年、跡目三十一俵三人扶持被仰付候。同九月より御兒小姓並に相詰候様に被仰付、同十一年六月八日、學校

へ請可申旨被仰付、延寳四年迄六年相勤、正月十五日、御赦免被成候。

九七、岡田與一右衛門。生國、紀州。後播州へ罷越奉公仕候由。主人不存候。其後同國佐用郡に引籠、浪人にて病死仕候由。

九八、岡田清庵。玄治法印弟子にて醫業相勤申候。

寛永十五年、少將樣へ被召出、御合力米元俵四十俵被下候。同十九年十月二十四日、御知行百五十石被下候、寛文四年十二月七日、隱居奉願、願之通被仰付候。同年五月十八日、五十六歳病死。

九九、岡田玄慶。

承應二年七月親懸り之時、松平萬千代樣筑前へ御越被成候刻、御舩中御供可仕旨被仰付、同八月、罷歸候。寛文四年八月親懸り之內、松平五郎八樣江戸へ御下向之節、御供被仰付罷越、同十一月罷歸候、從五郎八樣金十兩被下候　同年清庵隱居被仰付、家督無相違、玄慶に被仰付、十二月九日、繼目之御禮申上候。同八年在鄕簡略奉願候處、願之通被仰付、備中眞壁村に罷在候。延寳元年九月十三日、五十二歳於眞壁村病死。

一〇〇、岡田玄卜。五十俵五人扶持十九歳。

延寳元年、七歳跡目五十俵五人扶持被下候。同十一月二十二日、侍從樣へ御目見仕候。

一〇一、宍甘與三左衛門。文明年中、備前之國主細川讃岐守政之に奉公仕、戰場之忠節感狀幷爲恩賞上道郡之內とりの尾領小津下村未數名領知仕候。

一〇二、今多道祖壽。與三左衛門世倅にて御座候。永正年中、備前城主浦上遠江守村宗に奉公仕、戰場之忠功賜感狀候。

一〇三、宍甘與三左衛門。永祿年中、備前城主浦上宗景に奉公仕、致戰場之忠節、堅固に守城之事兩度、於茲賜感狀事二通、右四通、爾今所持仕候。

一〇四、宍甘治右衛門。備前國主宇喜多直家幷子息中納言秀家二代に奉公仕、濃州關ヶ原一戰之後、宇喜多家滅亡に付、浪人仕、宍甘村に罷在候。

一〇五、宍甘古庵。浪人にて醫業仕、御城下に罷在候。

一〇六、宍甘宗仙。十人扶持五十歳。

延寶三年四月十五日、御扶持十人拜領仕候。同五年九月、數馬樣江戸へ御發駕被成候刻、銀子一貫目被下候。岩千代樣御誕生より御藥被召上、天和二年七月御煩被成、御快然被成候に付、銀子三枚被下候。天和三年二月二十一日岩千代樣江戸へ御發駕に付御供被仰付、江戸に一年相詰、翌年二月十八日、罷立申候。其節御前樣より白銀二枚被下、岩千代樣より呉服、並銀三枚被下候。

一〇七、赤井三郞兵衞。 先祖は、丹波國赤井惡右衞門末裔之由申傳候。三郞兵衞吉川家にて小知取申候由。關ヶ原一戰後浪人仕候。

一〇八、赤井爲仙。 三郞兵衞病死之時幼少にて後に醫者に成申候。

一〇九、赤井友仙。 十人扶持、五十六歲。生國、山城、幼少之時より岡山へ參候。

延寶四年七月二十九日、爲御意、新八郞樣御機嫌奉窺候樣にと、木村玄忠申渡、初て登城仕、新八郞樣御機嫌奉窺候樣にと青木善大夫申渡、奉窺候。同月八日御意にて御藥差上申候 同九月二十一日、侍從樣へ御目見仕候。同二十七日、數馬樣江戸へ御發駕、同晦日、宍粟一宿、十月朔日、宍粟御發駕、十月二十七日、江戸御着被成候。此節御供仕候。從數馬樣於淺草御屋敷•白銀十枚被下、同年十一月二十八日、於江戸從大御前樣御暇被下、極月朔日、罷立候樣にと御意にて、從大前前樣•數馬樣爲御祝儀銀二枚被下候。從御前樣•數馬樣爲御祝儀銀二枚被下候。極月朔日、罷立、同十八日、歸着仕候。延寶八年正月十五日、被召出、十人扶持被下候。

一一〇、嶋川彌重郞。 先藤堂和泉守殿に奉公仕代官役相勤候由。

一一一、嶋川道壽。

淺尾長澤申上候て寬文九年四月四日、被召出、今俵七十俵五人扶持被下候。延寶二年八月二十九日、六十歲病死。

一一二、嶋川道節。 四十俵四人扶持、三十六歲。同年十一月十日、跡目四十俵四人扶持被下候。

一一三、先祖窪田道悅。 紀州熊野之内に少々構仕、代々罷在。秀吉公御代沒落、其身討死其子孫同國在田郡之内に住居仕、于今窪田屋敷と申傳候。

一一四、窪田權右衞門重信。 紀伊大納言樣御入國之後被召出、元米九十石被下、其後浪人仕、數年他國に罷在、又在田郡へ引籠居申候内に、大納言樣•宰相樣重て御目見被仰付候、追て病死仕候。

一一五、窪田道和。七十八俵五人扶持、四十六歳。幼少より他國に罷在、寛文十二年春、御國學校へ罷越、三年學校相勤罷在候。
其節於學校上下御養、毎年銀十枚宛被下、其後延寶二年二月二十四日被召出、御目見被仰付、七十八俵五人扶持被下、學校御用相勤申候。

一一六、山田太郎兵衞。毛利元就に奉公仕候由。

一一七、山田太郎左衞門。浪人仕、出雲へ參居申候。相果候節私幼少にて先祖之義、樣子不存候。

一一八、山田恕閑。三十一俵三人扶持、七十七歳。生國、出雲にて御座候。因州へ罷越、入江元恕弟子に成申候。
寛文二年三月十六日、被召出、本俵二十俵二人扶持被下、御内所御用被仰付、相勤申候。延寶二年三月二十八日、御本丸御長屋に被召置候に付、毎年御切米之外御米十俵宛被下候。病氣に罷成、御斷申上、同六年八月、拜領仕候屋敷へ引越申候。

一一九、子玄仙。寛文九年三月十一日、御目見仕候。

一二〇、森谷敎庵。醫師にて御座候。備中水野美作守殿御領分之内平井村に罷在候。

一二一、森谷敎壽。醫師にて、右同所に罷在候。

一二二、森谷專庵。五十俵四人扶持　四十三歳。
寛文七年御當地へ參居申候處、延寶三年五月十九日、池田大學呼出し、大學父伊賀病氣に付、附置申候。十人扶持扶助仕候。伊賀病死已後斷申、浪人にて罷在。
同八年二月十二日、少將樣へ被召出、五十俵四人扶持被下候。同年二月十五日、侍從樣へ御目見仕候。

一二三、駒田延融。
寛文十三年四月十一日、按摩之御用、少將樣へ被召寄、從江戸御國へ罷越候。同年九月七日被召出、百俵二十人扶持被下候。延寶六年正月二日、病死。

一二四、駒田融達。五十俵五人扶持十七歳。

延寶六年二月二十二日、跡目五十俵五人扶持被下候。同七年三月朔日、少將樣へ御目見仕、同五日、侍從樣へ御目見仕候。

一二五、村上玄番。福嶋左衛門太輔殿にて千石被下、左衛門太輔殿身上潰申候以後、浪人仕、於大坂病死仕候。

一二六、村上次兵衛。

元和六年之頃、於因州少將樣へ被召出、本俵二十五俵四人扶持被下候。寛永十九年十一月十二日、病死。右跡目惣領之世倅に被仰付、村上次兵衛と申候。

一二七、村上了村。

寛永七年十月十五日、九歳にて少將樣へ被召出、御仕着せに二人扶持被下候。同九年八月十四日、本俵二十俵被下候。右二人扶持共に被下候。同十八年十二月朔日、御加增本俵十俵被下候。御茶湯方稽古仕、御用立候樣にと御意に付、青木了右に稽古仕候。承應元年十二月朔日、本俵十俵御加增被下候。萬治二年十一月十五日、本俵十俵二人扶持御加增被下、都合本俵五十俵四人扶持拜領仕候。寛文十一年四月二十日、御家立退居申候處、延寶元年八月二十五日、侍從樣御歸參被仰付、切米扶持共に無相違被下候。同九月に了村を了德に改可申旨被仰付候。同三年霜月四日、御用にて伊部へ罷越、同七日、於伊部五十四歳。脱字あるか。朱書

一二八、上月了慶。七十八俵四人扶持二十五歳。

延寶三年三月十八日、十五歳にて被召出、同四月銀十枚拜領仕候。同年十二月二十七日、了德跡目被仰付、同四年四月三日に父了德相勤申候通、坊主役致兼間敷と被思召候に付、被仰付候由、被仰渡候。同五年正月元日、於江戶本氏之旨申上候て、上月に改申候。江戶御供四度、宇治へ六度伊部へ度々相勤申候。

一二九、蓑輪夫兵衛。父宗有幼少之時、夫兵衛死去仕候故、具成義不存候。

一三〇、蓑輪宗有。於参河伊木清兵衛方に罷在、於播州暇貰。
於因州、少將様へ被召出、十二人扶持被下候。

一三一、蓑輪宗閲。三十九俵十二人扶持 五十四歳。
萬治二年二月六日、少將様へ被召出、同二十六日、御目見仕候。父宗有に被下候御扶持方之上に、元俵二十五俵御切米被下候。其年少將様江戸御參勤に付、三月六日、御先へ參申候。其より以來、貞享二年迄二十八年之内、寛文三年御供不仕候、其外は不殘江戸へ御供番相勤申候。宇治へも度々被遣、江戸へ罷越候年は、夏冬御兒小姓並に御小袖・帷子拜領仕候。千家丹切之余長と申御花入從少將様御直に被下候。年月失念仕候。從少將様御直に掛物に仕候得と可被遊（マヽ）正月二日に拜領仕候。年號失念仕候。天和二年夏、少將様被仰遣候由にて、金子一同に拜領仕、其後八丈嶋のすゝし御羽織地二重、御裏拜領仕候。貞享元年二月四日、新土燒丸壺御茶入從侍從様拜領仕候。同五月、瀬戸御茶入拜領仕候。同二年四月二十日、於江戸御小書院五郎左衛門作片糸目之御釜御直に拜領仕候。

一三二、養子 蓑輪宗慶。三十俵四人扶持、二十五歳。生國、武藏 塚本吉衛門二男にて御座候。
宗閲養子に奉願候處、延寶四年九月十日、願之通少將様被仰付、同十一日、御目見仕候。同十月五日、被召出、三十俵四人扶持被下、父召連罷出、諸事見習候様に被仰付、少將様より御召之羽二重袷御羽織、御兒小姓並に拜領仕候。天和二年八月十五日、少將様被仰遣候由にて、金子、其後御小袖、拜領仕候。
實曾祖父吉井源兵衛。生國、出羽由利郡にて、仁賀保兵庫方に罷在候。
實祖父吉井五左衛門。右同人方に罷在候。
實父塚本吉右衛門。幼少にて父に離申候故、先祖具成義存不申候。

一三三、鎌田仁齋。少將様へ御奉公仕候由。

一三四、養子 鎌田了榮。仁齋養子に參、跡目被仰付候、實父は祇薗惣内と申候。五十年以前病死仕候。
了榮儀從少將様侍從様へ幼少之時分御附被成、御奉公仕候由。御切米御扶持段々御取立被成、御茶道被仰付候由。

私幼少にて覺不申候。延寶元年十月二十三日、病死。

一三五、鎌田長榮。 四十七俵四人扶持 二十三歳。

九歳にて父跡目四十七俵四人扶持無相違被仰付候。貞享元年三月二十一日、江戸御供に罷下り候。十一月十一日來春御殘し被遊、當分岩千代樣へ相詰候樣にと、於江戸池田大學被申渡候。

一三六、横田喜左衞門。 堀山城守殿に罷在 於雲州病死。

一三七、横田與兵衞。 喜左衞門死後浪人仕、因州鳥取へ罷越、森四郎兵衞家來に成、備前へ參、正保二年八月十日、病死。

一三八、狩野友直。 五十俵四人扶持 五十六歳。

幼少より狩野傳兵衞弟子に成、繪執行仕候。傳兵衞病死以後、世倅左兵衞手前に罷在候。左兵衞病氣にて御用難勤、依之左兵衞養子に罷成、名代に御用相勤申候。

寛文五年少將樣へ被召出、三十一俵三人扶持被下候。二月十五日御目見仕候。同八年二月、於江戸少將樣御繪被仰付、御意に入候旨、於御前御召之御羽織拜領仕候。其後御召之御小袖拜領仕、并御目がね御直に拜領仕候。延寶元年霜月二十八日、少將樣より御加增九俵一人扶持被下候。同四年霜月十五日、從少將樣御加增十俵被下候。同七年侍從樣より酒井河內守樣之奧樣へ被進候御屛風之繪被仰付、御意に入候旨、於御前御召之御小袖拜領仕候。天和二年八月十六日、於西之御丸黃金一枚一同に拜領仕候。同三年四月二十二日、於西之御丸少將樣御召之御羽織拜領仕候。同六月侍從樣御自筆之御繪、并狩野探朴三幅對御直に被下拜領仕候。貞享元年於江戸御前にて唐墨拜領仕候。同年本多中務樣奧樣御婚禮之時、御屛風之繪被仰付、御意に入候旨、御前樣より金三歩拜領仕候。

一三九、勝原丈庵。 三百石、 五十一歳。

曾祖父・祖父・亡父義共、延寶四年九月之書上天和二年三月之書上に申上候通に御座候。

私儀寛文二年霜月二十七日被召出、二百石被下候。同四年霜月、左江戸被仰付、被召出候。翌年は御足米被下候處、

在江戸被仰付候以来は、御足米被召上、薬物并四人被下候。同十一年五月二十三日、備前へ御供仕候。於備前九月二十五日、大學・猪右衛門兩人御意之趣申渡候は、今度立歸之御供被仰付候得共、直御養生其方御藥被召上候得は直に致逗留、來春御參府被遊御供仕候得と御意之旨申渡候。則木野三郎兵衛・奥山市兵衛へ大學、猪右衛門申渡候は、丈庵義來年御參勤迄逗留仕候様にと被仰付候に付、勝手迷惑可仕候間、迷惑不仕様に致し遣申様にと御意之通、申渡候に付、其月より備前にても有人之御扶持米被下、且又御足米二十石被下候。此二品は御法外之被仰付之由に御座候得ば、別て難有奉存候延寶元年六月三日、備前へ御立之朝、御前へ被召出、御奉公無懈怠相勤、御機嫌に被思召候、御留守中猶無懈怠御奉公可申上候様にと、難有御意之上、御召之御小袖被下候。同八年八月始、御富利姫様痢病御煩被成、宗貞・宗其御藥被召上候得共、御相應不被遊候に付、御前様・信濃守様・丹波守様被仰付、同十二日より私御藥指上申候、早速御相應被遊、九月始迄に御本復被成候。九月節句に御富利姫様より御小袖被下、其節備前より岡藤兵衛御使者に罷下候。今度は別て大手柄仕候と甚御機嫌被思召候由之御意之由、藤兵衛申渡候。同極月十八日、御意之通大學申渡候は、御奉公之暇に其外之療治も爲可仕、町屋に罷在候得共、御用又は御一門様方之御用迄に不得隙候故、外之療治得不仕、當分勝手難義可仕と被思召候に付、御銀二十枚被下候旨申渡、拜領仕候。天和元年も右之わけ御意之旨、大學申渡、自今以後毎年銀三十枚宛被下、拜領仕候。貞享元年五月四日、難有御意之趣、大學申渡、御加増百石被下候。

一四〇、福原筑後。毛利長門守殿に五百石給申候。病死之時分願之通私父孫兵衛に三百石、叔父同姓九郎兵衛に二百石被申付。

一四一、福原孫兵衛。病死仕候て、私兄忠兵衛於于今毛利大膳大夫殿に奉公仕候。

一四二、福原全庵。貳百五十石、六十四歳。

孫兵衛二男にて御座候故、浪人にて江戸へ罷越、淺尾長澤弟子に成、醫道傳授仕、鍋島和泉守殿へ出入奉公仕、金三兩十人扶持給申、其後新知二百二十石被申付候。以後和泉守殿在所肥前加嶋へ引越可申旨被申候に付、斷申、浪人仕候。

寛文十二年三月二十七日、少將様へ被召出、本知二百五十石致拜領、在江戸被仰付候に付、御扶持方十二人半、藥

種銀十枚、乗物かき四人被下候。延寶七年二月十一日、御前へ相詰候樣にと爲御意、隼人被申渡 相詰申候。天和二年十二月二十八日、中間諸事取次役可仕旨、爲御意左門被申渡相勤申候。貞享二年二月十九日、膝之痛增申候に付御前樣へ伺公仕候義御赦免被成、御次に相詰申度由、書付にて丈庵水野作右衛門へ申入候處、兎角御斷之品無之ては被申上間敷とて、御機嫌之程難計奉存候得ども、江戸十二人半之御扶持方指上、御斷申上候處、三月十日書付之通御赦免被成候。

一四三、富田外記。秀次公へ御奉公仕候由。

一四四、富田宇庵。外科醫にて水谷伊勢守殿に二百石被下罷在候處、暇申浪人仕候。

寬永十九年、少將樣へ被召出、二百石被下、在江戸御奉公相勤申候。正保四年、乘物昇之御小人四人御借被下候。承應三年暮より藥種銀十枚被下候。

一、山内但馬守殿瘡毒にて九年御煩候處、療治仕、御本復被成、銀三十枚、時服、樽肴被下候。

一、朽木民部少輔殿酒皶鼻御煩、三年御出仕無之、療治仕、御本復被成、黃金二枚・御樽肴被下候。

一、有馬左衛門佐殿御母儀樣癰御煩被成、療治仕、御本復被成候て、銀二十枚・樽肴被下候。

一、池田越前守殿疔御煩被成、大切に御座候處、療治仕、御本復被成、銀五十枚・時服・樽肴被下候。

一、伊井兵部少輔殿風違腫御煩被成、療治仕、御本復被成、銀五十枚・樽肴被下候。

一、水戸樣癰御煩被成、侍從樣へ被仰遣候に付、御意にて水戸へ參療治被仰付、二十日餘逗留仕候、御腫物御大切に御座候に付、御斷申上、罷歸候節、銀五十枚被下候。

一、松平對馬守樣癰御煩被成、療治仕、御本復被成、銀百枚・樽肴被下候。

右は少將樣へ被仰進候て、參候も御座候、私方へ御賴被成候を申上候て、參候も御座候。此外方々療治仕候。

寬文六年正九月日、於江戸御長屋七十四歲病死。

一四五、養子富田道徹。百五十石、五十歲。

寛文五年秋、宇庵養子に被仰付、九月十一日、少將樣へ御目見仕候。同六年三月十五日、宇庵跡式百五十石被仰付、在江戸御奉公相勤申候。療治執行之ため町屋へ出居申度奉願候處、願之通被仰付、同九年霜月より町屋へ罷出申候。同十一年四月中旬、大須賀道雲江戸詰御免に付、私義御屋敷へ罷歸居可申と被仰付旨、池田大學申渡候。此節より藥種銀十枚宛被下、乘物舁御小人四人定夫被下候。藥種多使申候旨少將樣達御聞、銀一貫目被下、拜領仕候。延寶元年之秋、大御前樣へ御藥上げ申樣にと被仰付候。同年暮、藥種多使申段侍從樣達御聞、銀一貫目被下候 貞享二年正月元日、御側醫者並に相詰申樣にと被仰付。同年十二月二十五日、末々病用多相勤候段達御聞、銀二十枚宛毎年被下候旨、池池田大學被申渡候。

實父　先祖本國阿波、三好家に代々奉公仕候。

實祖父井上甚右衛門。三好家にて阿州内海府にて知行八百石取申候。三好家絶候て、浪人にて阿州に罷在、病死仕候。井上日有と申、醫業仕、土州高知に罷在候。土佐守樣・對馬守樣へ御目見仕、町醫者にて御座候。於土州病死仕候。

一四六、岡島太左衛門。　福島左衛門大夫殿にて三百石被下罷在候、年罷寄隱居仕候。

一四七、岡島太郎兵衛。　太左衛門家督無相違被申付罷在候處、大夫殿身上潰申候刻、浪人仕、於江戸病死。

一四八、富田養傅。　七十八俵十人扶持、五十七歳。六歳之時伯父富田宇庵方へ引取養育仕候故、富田を名乘申候。

侍從樣御幼少之時、私十四歳より十七歳迄之内被召出、御能・御拍子被遊候節、笛之役義相勤申候。其時分御仕着被下候。十七歳之暮落髮、宇庵に外科傳受仕候。寛文元年八月、於江戸被召出、本俵五十俵十人扶持、御小人一人被下候。同三年十二月より藥種銀十枚宛毎年被下候。同八年二月、在江戸可仕旨被仰付爲、在江戸並三人扶持に御小人被召上候。其節勝手別て迷惑仕候故、信濃守樣迄御斷申上候得ば、其段被仰上候由にて、同年十一月十一日より又右之通十人扶持に御小人一人被下候。天和二年七月、淺草御屋敷へ罷越候樣にと被仰付、定夫四人被下候。貞享元年六月より右之定夫四人米銀にて被下候。

一四九、子有元。　剃髮仕、延寶五年二月二十五日、御目見仕候。

一五〇、笠原庄左衛門。

庄左衛門兄奥州宮崎城主宮崎美濃一所に罷在候。伊達安房守秀眞と意趣御座候て、鉾楯に罷成、秀眞宮崎城へ押寄及合戰、終に美濃打負、城に火を懸、美濃も庄左衛門も一所に討死仕候。

一五一、笠原庄兵衛。　庄左衛門討死之節、七歲にて親類ども養育、其後江戸へ罷越、萬治三年三月十六日、五十三歲病死。

一五二、笠原用伯。　百五十石七人半扶持、五十二歲。十三歲之時足立用伯弟子に成、鍼傳受仕候。用伯實子無御座候に付、家業相續仕候。用伯義明暦元年十月病死仕候。

同年之暮、銀五枚拜領仕候。明暦元年十二月、侍從樣へ被召出、御出入之御奉公仕候。同二年暮、爲御合力米金二枚被下候。寛文元年閏八月二十日、御長屋へ引越可申旨被仰付、十人扶持被下候。同三年十二月八日、新知百五十石、定夫一人被下候。御扶持方は知行高に應じ七人五歩被仰付候。二人五歩と御合力金子二枚は指上申候。

一五三、子笠原用三。　四十五俵四人扶持、二十六歲。

寛文十二年四月、御目見被仰付候。翌年三月落髮仕、針相勤申候。延寶八年十一月、初て御針被仰付、度々御用相勤申候。天和元年正月、四十五俵四人扶持被下候。

一五四、進德右衛門。　生國、因州鹿野。龜井武藏守殿所にて二百石給り、城代役仕候。

一五五、進卓司。　生國、石州津和野。

寛文七年、少將樣へ被召出、五十人扶持被下、同十年、新知三百石十五人扶持、藥種銀十枚、乘物舁四人被下候。同十二年より侍從樣へ相詰申候。延寶四年四月、御國へ被爲召候。九月、江戸へ罷歸候節、少將樣より御小夜着一つ、金子十兩被下候。侍從樣より御召羽織被下、同七年、侍從樣より御召御紋御小袖一つ被下候。同年十月、於江戸病死。

一五六、進卓司。　二百石十人扶持、二十八歲。

寛文八年十月、侍従様へ御目見仕候。同十一年十月、少將様へ被召出、六十俵四人扶持被下、御兒小姓役勤申候。同十二年、侍従様へ相詰、御兒小姓役勤申候。天和元年酉十二月、跡知之內、二百石に十人扶持被下候。澤權大夫組に被仰付、御式台に詰申候。同二年冬、中小姓役御免、醫者役に被仰付、藥種代銀十枚被下候。其節奉願、束髮に罷成、實平を改父之名卓司に罷成、貞享二年春、乘物舁四人、出入に被下候。

一五七、松野平兵衞。駿河大納言様にて二百石被下候。

一五八、松野理右衞門。駿河大納言様にて跡目無相違二百石被下候。大納言様駿河御退被成候節、浪人仕、其後病死。

一五九、進元司。百石五人扶持、四十六歳。

母方伯父進卓司御家へ被召出罷在、延寶九年十月、病死仕候。私義十歳之時より卓司方に養に成外科仕習申候。依之名氏進に成申候。延寶五年二月、侍従様へ御目見仕候。同九年四月二日、藥種銀二十枚拜領仕候。是は、御家中療治仕候に付、爲御褒美被下候。天和二年十一月二十八日被召出、新知百石五人扶持被下、藥種代銀十枚被下候。同年十二月、乘物舁四人出入に被下候。

一六〇、松尾庄左衞門。德永左馬頭殿に罷在、二百五十石給候。左馬頭殿身上潰申候に付、浪人仕、病死。

一六一、柘植七大夫。松平美作守殿に罷在、中小姓役相勤、十五石五人扶持給候。三十年以前浪人仕、松尾藤兵衞に改申候。浪人にて病死。

一六二、松尾玄庵。四十俵五人扶持、四十二歳。

佐々益庵弟子に付、長光院様不便に被思召、猪右衞門迄申様に可仕候、其上は長光院様御言葉御添可被下之由御意に付、山內甚六迄、御鳥見岡田半左衞門願書申上候に付被召出、延寶元年六月六日、於淺府御屋敷御目見仕、五人扶持被下候。同年、淺府御屋敷御隱居様被成御座候御作事御座候、御作事之時、病人相勤申候に付、爲御褒美同二年五月十三日、金子五兩被下候。同四年五月、御家中病人相勤申候に付、御小人一人被下候。同五年正月、御家中病人精出し相勤申爲御褒美銀五枚被下候。御新屋敷御作事御座候に付、引越病人相勤申候。翌年、藥種代迄前にて

御拂被下候。同八年十一月、御家中病人精出し申候に付、御褒美に銀十枚被下候。天和元年四月、御家中病人精出し申候に付、御銀十枚宛、藥種代被下候由、大學申渡、拜領仕候。貞享元年八月九日、御家中病人精出し相勤申に付御切米四十俵被下由、大學申渡頂戴仕候。

池田篤次郎 寫

山下新介 校㊞

吉備温故秘錄卷之八十六（干城一五）終

昭和六年十二月三日印刷
昭和六年十二月五日發行

非賣品

吉備群書集成刊行會

編集兼發行者　森田敬太郎
東京府荏原郡目黑町上目黑三五〇番地

印刷者　鈴木清三
東京市神田區表猿樂町一番地

印刷所　昭文社
東京市麹町區三番町六八番地

發行所
東京府荏原郡目黑町上目黑三百五十番地
吉備群書集成刊行會
振替口座東京五五八二七

吉備群書集成刊行會

總裁　男爵　阪谷芳郎
會長　法學博士　平沼淑郎
會計監督　矢野恒太
同上　山成喬六
理事　森田敬太郎

編纂顧問　文學博士　沼田頼輔
同上　文學博士　齋藤清太郎